

Gaigo Will Shine Forever

大阪外国語大学グリークラブ

創部90周年記念誌

2018年9月

90周年記念誌発刊に際して

大阪外国語大学グリークラブの創部90周年を記念し、このたび本誌を刊行することができましたことは、まことに喜びにたえません。

大阪外大グリークラブは大正15年(1926)4月、和田誠三郎(昭和2F)等によって創設され、平成28年(2016)秋には、大阪、東京にて90周年記念演奏会を開催致しました。

グリークラブ創部当初から、民秋重太郎(昭和4IP)や清水脩(昭和7F)といった名指揮者を得て実力をつけ、各種コンクールで入賞し、外語独特の美しいハーモニーは専門家にも高く評価されました。時は移り、昭和12年(1937)から日中戦争が始まり、続く太平洋戦争の終結した昭和20年(1945)までの8年間は、多くのグリークラブにとっては暗黒の時代となりました。

戦後、昭和24年(1949)に母校の名称は大阪外事専門学校(戦時中大阪外国語学校から改称)から大阪外国語大学となり、そして昭和28年(1953)、岡部太郎(昭和30F)等が中心となり戦後グリークラブの活動が本格化しました。昭和32年(1957)7月6日には、念願の第1回定期演奏会が大阪ガスビルホールで開催されました。その後40年間の大阪外国語大学グリークラブの活躍は本誌記載の年表の通りであります。

20世紀末迄活躍を続けてきた外大グリークラブではありましたが、長年の恒常的な男子学生の減少により本クラブは廃部となりましたが、OB有志が大阪外国語大学グリークラブOB合唱団を結成し、東京(平成7年より)、大阪(平成13年より)を拠点にして演奏活動を続け現在に至っております。

このたび、我々は本クラブ90年の歴史における様々な記録、記憶が消失することを惜しみ、OB、OG、御遺族、関係者の方々にご寄稿をお願い申し上げました結果、多数の玉稿を賜り本誌が完成致しました。ご支援、ご協力を頂きました皆様方に厚く御礼申し上げます。尚、玉稿を頂戴しているにもかかわらず、本誌刊行を待たずして逝去されました数名のOBの方々には、ご生前、高覧に供することのできなかつたお詫びと哀悼の意を表しつつ、謹んでご霊前に本誌をお届けしたいと存じます。

昭和から平成の時代にかけて外大グリークラブの指導、育成にご尽力頂いた故長井斉先生、又、グリークラブOB合唱団がご指導を受けている林誠先生、小貫岩夫先生、坂井美樹先生に対しまして心から感謝と御礼を申し上げます。

外大グリークラブOB合唱団は、創立100周年を視野に入れつつ、まずは95周年記念演奏会に向けての準備を既に開始していると聞いております。歴史的使命を終えて表舞台から退いた母校、大阪外国語大学のフルネームを掲げて活動を続ける外大グリーが、一世紀の時空を超えて輝き続けることを切に祈る次第です。“外語ハーモニー”が巷に聞える限り、まさに Gaigo Will Shine Forever! です。

終わりに、1年半にわたって担当業務、編集作業に精励された委員各位の労を多とし、感謝の意を表したいと思っております。

大阪外国語大学グリークラブ創部90周年記念誌編集委員会
代表 南野 均

寄稿者リスト	1
団旗、校歌・学歌、クラブソング他	2
第1章 歴史	
創部から終戦まで	6
終戦から第1回定期演奏会まで	19
第2回定期演奏会から現役活動の終了まで	32
OB合唱団の時代	45
第2章 伝統のレパートリー	
外語グリーとピエロ	61
外語グリーと黒人霊歌	67
第3章 寄稿	
OBおよび団員からの寄稿① 昭和30年代卒	74
OBおよび団員からの寄稿② 昭和40年代卒	113
OBおよび団員からの寄稿③ 昭和50年～60年代卒	146
OBおよび団員からの寄稿④ 平成年代卒	161
外部の方々からの寄稿	173
第4章 偉大な先輩 清水脩	
略歴・メッセージ	178
寄稿	181
清水脩作品演奏記録	189
第5章 お世話になった方々	
長井齊先生	192
和田誠三郎先生	196
斉藤佐和先生	201
Austin Faricy先生	205
山口慶四郎先生	210
第6章 OB合唱団の指導者	
林誠先生	224
小貫岩夫先生	230
坂井美樹先生	237
創部100周年記念演奏会に向けて	243
年表	246
思い出のシーン	293
定期演奏会・OB合唱団演奏会プログラム表紙	305
編集後記	308
咲耶会からのご案内	309

本誌に寄稿いただいた方々、インタビューに応じていただいた方々、また演奏会のプログラムなどから
 転載させていただいた方々の氏名と記載ページを以下に記します。(敬称略、ABC順)

足立明洋	69,145	岸本保	147,234	大西昌三	94
赤木富美子	20	小早川義則	109	小貫岩夫	70,232
赤坂一郎	83	小林卓郎	219	大崎直忠	23,25,79,182
明場幹夫	136	近藤純雄	124	小谷松明弘	25,39
天野邦彦	208	栗生(勝本)昇	156	坂井美樹	238
穴山(旧姓堀)昂子	21	九谷龍正	99	榊原昭裕	167
伴治美	183	圓山望	184	坂水昶之	186
千布正人	81	増森邁	30,181	佐々木忠次郎	181
陳舜臣	12	松木正顕	88	佐藤英二	162
藤太	113	松村尚人	159,220,236,244	清水脩	35,61,180
藤井真澄	176	松尾充哲	86	清水眞一	185
藤井哲	157	松尾年展	37,170	下社学	168
藤原保彦	77	松岡一仁	139	新出武雄	100
福田洋之	169	三神徹	107,195	塩見憲一	131
福田忠紀	106	南雄次	140	昌子明夫	39
古川タク(筆郁)	111	南野均	89	少徳敬雄	174
浜崎慎吾	42,133	溝上富夫	213	藺口和夫	102
橋本勝	211	森滋	116,216	末次義	25
葉山英行	69	村川健一	69	菅原基晴	86
林治郎	78	村本佳恵子	41	杉本啓一郎	149
林誠	226	長井斉	33,193	村主寧民	101
東谷穎人	90	永瀬春男	199	鈴木惟司	127
日根野谷博	134	永田憲一	110	多田武彦	56
五十嵐強	146	永谷勉	152	竹中一良	104
稻積和典	164	中村啓佑	198	民秋重太郎	13
稲岡瑛一	78	中村邦雄	96	樽井一仁	34,46,182,217,227,233
井上泰子	214	直場徳宥	95	俵萌子	20
石田康雄	182	西田達雄	173	戸田貴之	165,245
石井幸子	20	西川暲治	25	鵜飼茂	137
磯崎豊一	25	西川哲朗	114,239	梅垣誠	154,218
板村哲也	43,128	西村信勝	126,240	宇留野隆	91
伊東昭廣	117	西山恭介	158	和田猛郎	197
庵原専三	175	西沢毅彦	105	若林允	68,81
紙谷(杉田)敬治	25,84,194	野田大祐	24,25	八木哲夫	142
金子康之	79	小竹正幸	138	山口慶四郎	51,67
片渕明広	150	小笠原肇	97	山口真砂	222
加藤直樹	30,141,187	大井耐三	130	山口伸	228
河原敬	45,153	岡部太郎	74	山野善生	108
河盛龍三	80	岡田吉治郎	47	保川一治	155
岸田勝昭	118	大倉明治	93,207	安良雄一	161,245

団旗



昭和30年代



昭和40年代以降



現在(OB合唱団作成)

校歌・学歌

1. 世界をこめし戦雲ようやく晴れて
東の空に暁(あけ)の明星ひとつ
これぞ大阪外国語学校

※ 建てよ建てよ、平和の旗、
叫べ叫べ、愛の言葉
輝やかせ、文化の光

2. 昨日は葦よし茂りし浪速津
今日はとどろくわが日本の心臓
そこにおどるはわが青春の血潮
〈※〉

3. 生駒の山の緑蔭(かげ)こまやかに
ちぬの海面(うなづら)波きよきあたり
こゝぞわれらが魂(たま)の故郷
〈※〉

4. 北シベリアの氷とざす野より
みなみ南洋の浪かすむ涯際(きはみ)
わが健児らの活動の天地
〈※〉

5. 政略の雲世界をつゝむとも
言はずや「光東より来る」と
偉(おほ)いなるかなわが外語の使命
〈※〉

大阪外国語学校校歌 堀水信成作曲 永井孝次作詞



作詞の松永信成氏はロシア語部の初代教授。作曲の永井幸次氏は大阪音楽学校（現大学）の創設者。大正11年（1922）11月11日の開校式では参列者に葉書大の楽譜（歌詞は1番と2番）が配られ全学生によって合唱されたとの記録がある。大正15年6月19日の第1回公開音楽会ではグリー部員の編曲によりマンドリンオーケストラの伴奏で歌われている。詳しい経緯は記録されていないが、戦後は2回ほど編曲が変わっている。歌詞の大阪外国語学校は学制改革に伴い大阪外国語大学に改められた。

クラブソング他

Gaigo Will Shine Tonight (今宵外語は輝く)

Gaigo will shine tonight, Gaigo will shine!
Gaigo will shine tonight, all down the line!
Gaigo will shine tonight, Don't they look fine?
When the sun goes down, and the moon comes up,
Gaigo will shine!

この曲の元歌は“Old Boys Will Shine”という19世紀のアメリカの歌で、立教大学の第2応援歌や天理高校の応援歌としても使われている。

この曲が外語にもたらされた経緯は定かではないが、外語校友会誌『咲耶』に書かれたグリー活動記録での初出は昭和4年6月で「今宵外語は輝かん……カレッジソング」となっている。大先輩清水脩も翌昭和5年の秋季開校記念合同音楽会でこの曲を指揮している。

以来90年間外語グリーメンはこの曲を歌い続けている。クラブソングとなっているが、他に歌っているのは混声合唱団TEMPESTだけのようだ。

Varsity

Varsity! Varsity! Osaka Gaikokugo Daigaku
Praise to thee, we sing!
Praise to thee, our Alma Mater.
U Rah Rah, Osaka Gaidai.

この曲の元歌はアメリカ合衆国The University of Wisconsin-MadisonのAlma Mater（校歌）である。

Varsity! Varsity! U-rah-rah! Wisconsin,
Praise to thee we sing!
Praise to thee, our Alma Mater,
U-rah-rah! Wisconsin!

外大英語学科講師であったAustin Faricy氏が外大に紹介したもので、U-rah-ra Wisconsin!をOsaka Gaikokugo DaigakuとU-rah-rah Osaka Gaidai!に変えてグリークラブのみならず女声コーラス部、混声合唱団TEMPESTによって歌われている。

Old Osaka, our Gaidai Dear

Old Osaka, our Gaidai dear,
thy sons will ne'er forget!
That golden haze of college days
Is round about us yet.
The days of yore will come no more,
but through our manly years,
the thought of you, so good so true,
will fill our eyes with tears;
the thought of you, so good so true,
will fill our eyes with tears.

この曲もA. Faricy氏の紹介による。別項のOB寄稿にもあるが英語学科の授業で毎回この歌を

唄っていた時期があったようだ。グリークラブでの演奏機会は多くないが昭和50年代の定演ではアンコール曲として連続して取り上げており、OB合唱団となった創部80周年記念演奏会でも歌った。

因みに外大女声コーラスのクラブソング“The Osaka Gaidai Girls’ Chorus Club Song”も A. Faricy 氏の作詞・作曲である。

その他

戦前の校友会誌『咲耶』には次の曲の記述があるが、残念ながら楽譜などの資料は残っていない。

校友会応援歌

ロシア語部二年 吉岡俊次作詞、
東京音楽学校助教授 橋本国彦作曲
(昭和12年9月)

最後に文化系、体育会系を問わず外語の男子学生によって最もよく歌われていた歌を記しておきたい。

キンキラ節

♪外語名物数々あれどあれど
ばいそらキンキラキン
ひとつキンキラ聞かせやしょう
それもそうかいな キンキラキン

♪外語良いとこ夕日を受けて受けて
ばいそらキンキラキン
魔風恋風そよそよと
それもそうかいな キンキラキン

♪生駒の山から外語を見れば見れば
ばいそらキンキラキン

左向け左 中には右向く馬鹿もいる
それもそうかいな キンキラキン

♪君は樟蔭、僕は外語外語
ばいそらキンキラキン
仲を取り持つ大軌線
それもそうかいな キンキラキン

♪娘やるなら 外語の生徒に生徒に
ばいそらキンキラキン
末は大使か総領事
それもそうかいな キンキラキン

♪アラビアよいとこ 一度はおじゃれおじゃれ
ばいそらキンキラキン
月の砂漠に虹が出る
それもそうかいな キンキラキン

昔の寮歌と言うかいわゆるヨッパライ・ソングで、歌詞は各語科、クラブでの替え歌を含めると無数にあって、中には公開をはばかられるような下品(?)なものもある。拓殖大学、東京外国語大学でも同じ(ほぼ同じ)メロディのキンキラ節が歌われていた。外語同窓会「咲耶会」の依頼で学歌、カレッジソングのCD作成にグリークラブが携わったが、この歌の録音はMIDI音源のみとなっている。そのCDのインナーノートには6ページにわたってこの曲の解説、一部の歌詞および楽譜が載っている。ご興味のある方は咲耶会事務局(大阪大学外国語学部内 箕面市)へご注文下さい。



第1章
歷史

創部から終戦まで

大阪外国語学校グリークラブは大正15年(1926)4月に誕生した。学校が大正11年(1922)11月11日大阪市東区(現天王寺区)上本町で開校した3年半後のことである。開校以来、グリークラブの創設を望む声は強く、大阪外国語学校校友会編『咲耶』第5号(昭和2年)には、以下のように、グリークラブ創設への熱い思いが綴られている(『咲耶』の関係記事の全文は別掲)。

合唱音楽を以て団体音楽の最も最もやり容い、又音楽として最も宗教的な荘厳と崇高とを与えるものだと思っている僕達に、未だグリークラブを組織する機会が与えられないのが残念でならなかった。外語創立以来既に五星霜、然るに我音楽部は僅かにハーモニカ以外にその存在を認められていないことが、音楽を愛する僕達には悲しいことだった。(中略)僕達のグリークラブ設立の希望は深められてきた。斯くして大正十五年四月大阪外語グリークラブはその誕生を見たのである。

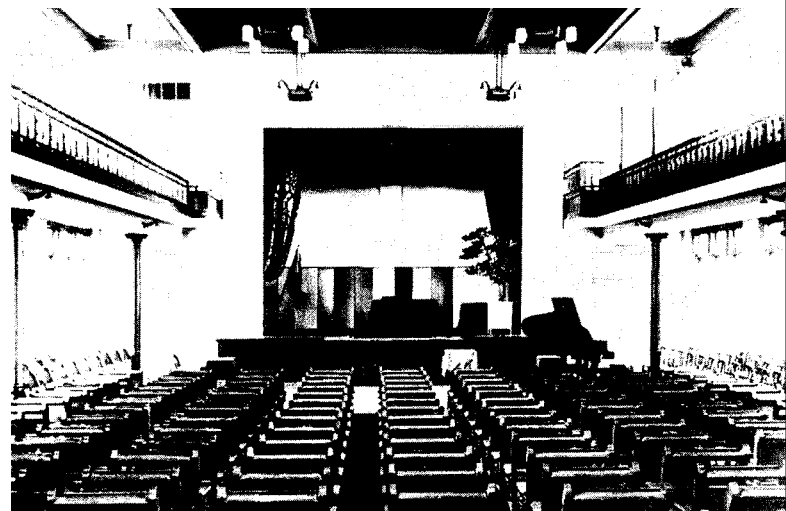
(『咲耶』第5号より転載)

創部メンバーは片山謙二(昭2F)、和田誠三郎(昭2F)、村瀬重孝(昭2D)、大谷(森田)誠(昭2IN)、民秋重太郎(昭4IP)他の諸氏であった。4月に部員を募集したところ、部員も20名集まり、片山謙二、民秋重太郎の指導のもと、簡単なハーモニーから始め、毎日1時間ほどの練習を続けた。そして、その年の6月19日にはマンドリン部、ヴァイオリン部と組んで

「第一回公開音楽會」を學内講堂で開いている。

この「第一回公開音楽會」では、片山謙二が指揮を執り、「グッドナイトレディズ」など9曲を演奏している。『咲耶』第5号によると、演奏中はステージだけに電灯とスタンドをつけ、他はすべて消すという演出もなされている。聴衆は1000人を超えるという盛況ぶりであった。

同年の2学期からは部員数も増加し、関西の合唱指揮の第一人者であった長井齊氏を指導者に迎える。『咲耶』第5号には、「長井氏の指導は実に素晴らしく合唱は目に見えて上達してきた」と長井齊氏の指揮・指導の効果が記述されている。



学内講堂(音楽会、講演会、合併授業や市民との交流にも使われた)

同年の11月12日には、「第二回公開音楽會」が開かれた。朝日新聞の大阪版が、「二つの音楽祭」との見出しで、東京音楽学校と大阪外語の音楽祭が相前後して開かれることを報じるほどの注目度であった。『咲耶』第5号の記述によると、「この日六時開會と言ふに五時頃から續々と來場し、一千枚のプログラムは瞬くうちに渡されて了ひ、定刻には文字通り立錫の餘地

もなかった」とあり、その盛況ぶりがよくわかる。聴衆は約1,500と「第一回公開音楽會」を大きく上回っている。「荒城の月」など6曲の合唱とモーツァルトとブラームスの「子守歌」2曲の4重唱が演奏されている。

また、同じ年の12月下旬には長井齊氏を指揮者として、100人を超える「大合唱公演會」が催され、外語グリーのほとんどの部員がこれに参加している。

このように、大阪外語グリーは創立初年度から華々しい活躍を見せている。

翌昭和2年(1927)11月26日には、宝塚大劇場で第1回合唱競演會「Music Olympic Game of Chorus」が開催された。同年11月28日には東京神宮外苑の日本青年館でも「合唱競演大音楽祭」が行われている。現在の合唱コンクールの走りのようなものである。この宝塚大劇場での合唱競演會で民秋重太郎率いる外語グリー25名はウィリアムスの「ラボード・ウォッチ」とドボルザークの交響曲第5番「新世界より」の中から「故郷へ “Going Home”」を歌い、総合3位に入選している。学生団体のなかでは1位であった。詳細は同窓会誌『咲耶』第7号(昭和3年)、宝塚歌劇団発行『歌劇』昭和3年1月号、『合唱の友』創刊号(昭和23年3月)に記述されている。翌昭和3年(1928)にも第2回および第3回合唱競演會が行われているが、外語グリーは入賞しておらず出場したかどうか定かではない。

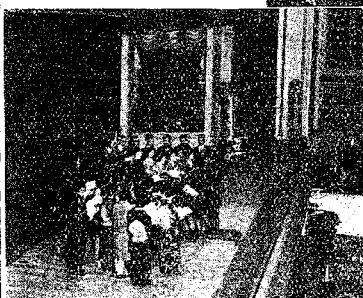
宝塚の合唱競演會に先立ち、昭和2年(1927)11月3日には「明治節制定記念關西専門學生音楽大會」に大阪外語音楽部代表として出演している。

昭和4年(1929)6月23日、本校講堂にてマ

記の會演競唱合回一第



團唱合會葉若戸神



々人の團唱合ナ一イテスレセ戸神

關西に一大センセーションを引起した、ミュージック・オリンピック・ゲームは、十一月二十六日(土)夜六時半から寶塚大劇場にて、盛大に行はれた、三階に至るまで満員の盛況審査員定刻に座席につくや、高木和夫氏指揮の下に寶塚交響樂協會員がワグナーのローエングリンを演奏、次に神戶若葉會混聲合唱團をはじめ關西の大コーラス團が一絲亂れぬチムウオークの下に日頃練習のコーラスを発表した、若葉會關西學院ゲ、ミシュテン・コール、ミヌール、神戸高商、セレスティナ、外國語學校、大阪高工の順で終る、次に寶塚音樂劇學校の女聲合唱があつて、再びカルメンの演奏があるかくてプログラムを終り、愈々審査發表がある、審査員席に審査員永井幸次氏、水野康孝氏、杉江秀氏、高木マサノ氏、竹濱貞次郎氏、幾尾純氏、吉田恒三氏、近藤義次氏、柳兼子氏、ルーチン氏及び高木和夫氏をはじめ寶塚音楽劇學校の教職員列席、吉岡重三郎氏より賞品授與がある、満場の喝采鳴りもやまず

第一等 神戸セレスティナ合唱團
 第二等 大阪ゲ、ミシュテン・コール
 第三等 大阪外國語學校グリークラブ

で、それぞれトロフィー及副賞を受ける、一等八十四點、三五、二等八十四點、その差僅に、〇三五である三等は八十一點五五である、解散後大廣間で、外國語學校の校歌を歌つて引上げて行くのを見る、誠に樂い一日、益々權威あるものとして發達して行くであらう。

『歌劇』昭和3年1月号 p.98

ンドリン部との合同演奏會が開催されている。その時、最初の曲目として「今宵外語は輝かん」がカレッチソングとして歌われたと記録されている。この曲「今宵外語は輝かん」(Gaigo Will Shine Tonight)は90年を経た現在(2018)でもクラブソングとして歌い継がれている。元歌はアメリカに古くからあったOld Boys Will Shine Tonightであることが知られているが、大阪外語にどのようにしてもたらされたかは判明していない。

昭和6年(1931)には清水脩(F8)が第5代指揮者に就任する。彼は學校に近い浄土真宗大谷派寺院「佛足寺」に生まれ、卒業後東京音楽

學校（現東京芸術大学）に進学し、後に「日本男声合唱の父」とも呼ばれる作曲家となり、全日本合唱連盟理事長も務めた。彼の作品である組曲「月光とピエロ」、組曲「山に祈る」、「最上川舟唄」などは今でもグリーOB合唱団を初め全国の男声合唱団で歌い継がれている。

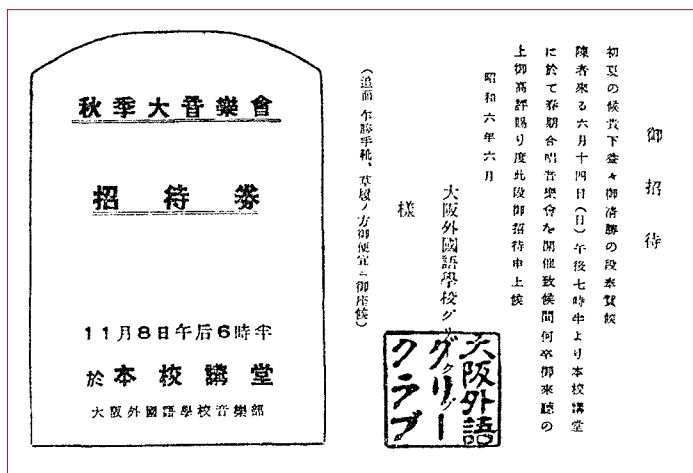
民秋重太郎、清水脩といった名指揮者を得て、外語グリーの評価はとみに高まったようである。昭和6年（1931）1月16日に開催された「第1回関西学生合唱連盟音楽大会」についての新聞記事では次のように講評されている。

9団体をABCの3クラスに分類したい。各方面から観察して比較的難がなく、かなり

美しくまとまっていたのをAクラスとすれば、これに属するものは関西学院、大阪外語、大阪医大、同志社グリークラブの4団体、… Aクラスに属せしめた4団体は、いずれも十分練習は出来ていたが、エクスペリションで傑出していたのは大阪医大で、一番美しいハーモニーを示したのは大阪外語であった…。

やがて他の音楽部との合同音楽会を開くことが恒例となり聴衆も増えてきたので、昭和9年（1934）秋からは会場を大阪ガスビルに移して開催するほど盛況を呈するに至った。

ハーモニーが安定して美しかったのは長井齊氏の指導の結果であり、外語グリーの伝統となった。長井齊氏主宰の混声合唱団「大阪コーラル



昭和6年春季合唱音楽會(グリー単独)と開校記念秋季大音楽會の招待券



昭和5年の集合写真



『大阪コーラルソサエティ70年史』より転載 前列中央が指導者の長井齊氏

ソサエティ」(2016年3月解散)には清水脩を初め戦前・戦後多くのグリーンメンが所属していた。

明治節奉祝音楽会(昭和3年(1928)～)や関西学生音楽連盟音楽会(昭和6年(1931)～)にも毎年出演した。また、JOBK(NHK大阪放送局)のラジオ放送「学生青年の音楽」にも出演、部員も最盛期には50名の多くを数えた。

残存する校友会誌『咲耶』(7号、9号～20号)によると各年度の部員数は下記の通り：

昭和4年 - 33名(T1=7, T2=9, B1=9, B2=8)

昭和5年 - 38名(T1=8, T2=11, B1=11, B2=8)

昭和6年 - 47名(T1=10, T2=15, B1=10, B2=12)

昭和7年 - 23名(T1=5, T2=6, B1=7, B2=5)

昭和8年 - 18名(T1=5, T2=5, B1=4, B2=4)

昭和9年 - 32名(T1=7, T2=9, B1=7, B2=7, 指=2)

昭和10年 - 24名(T1=6, T2=5, B1=5, B2=4, 卒=4)

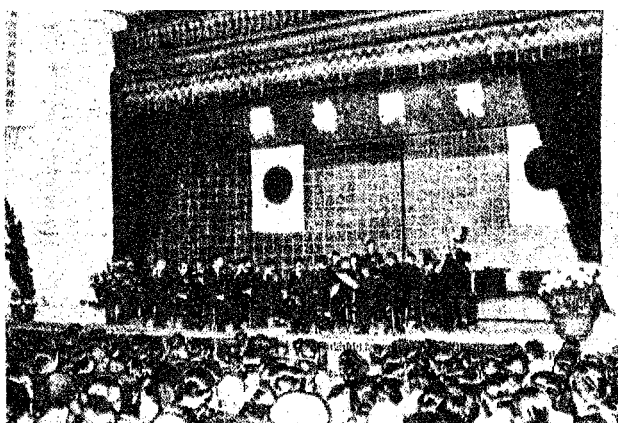
昭和11年 - 30名(T1=7, T2=8, B1=9, B2=5, 指=1)

昭和12年 - 29名(T1=7, T2=8, B1=8, B2=5, 指=1)

昭和13年 - 45名(T1=11, T2=9, B1=13, B2=11, 指=1)

昭和14年 - 44名(T1=9, T2=9, B1=11, B2=14, 指=1)

昭和15年 - 34名(T1=9, T2=9, B1=7, B2=9)



昭和5年明治節奉祝音楽会(大阪朝日新聞昭和5年11月4日)

同じく校友会誌『咲耶』に記載されている演奏曲目と回数をまとめてみた。

*咲耶8号(昭和3年度)は欠番

3回 ラーボードウオッチ (ウイリアムス)

4回 新世界より「故郷へ」(=「家路さして」)

(ドボルジャック)

13回 荒城の月

27回 今宵外語は輝かん

Gaigo Will Shine Tonight

1回 祖国への誓い(ドイツ民謡)

1回 鶯によせて(フィルシジエール)

2回 兵士のうた(マックグラナハム)

1回 美しの夜(エマーソン)

3回 我祖国を愛す(ノールウエー民謡)

1回 希望の島

1回 真心の涙(イマルク)

1回 主よ御もとに近かん

2回 子守唄(ブラームス)

4回 Massa's in the Cold, Cold Ground
(フオースター曲)

3回 Gaudeamus

1回 Memorial Hymn

2回 大塔の宮

3回 さらば故里

1回 Good Night, Ladies

1回 故郷を離るゝの歌

?回 Long May She live a Gaigo
(愛唱曲)

2回 森の教會

1回 The Dutch Company

1回 夏

7回 Make a joyful noise

4回 Zum Eingang (Aus der Deutsche Messe)

3回 Fraternity Hymn

4回 小夜曲

1回 グレゴリアンチアント

1回 僧侶の合唱

3回 ボオルガの舟歌

1回 聖なる主よ

(昭和6年 関西學生合唱連盟合同)

1回 Holy Art Thou

1回 ラ・マルセーユ

(昭和6年 阪大グリーと合同)

- 1回 おぼろ夜
- 1回 不実な男 (セルビア民謡 清水脩編曲)
- 4回 シーリエル・バーニヤ
(ロシア民謡 清水脩編曲)
- 1回 Slumber Dearest (エマーソン曲)
- 1回 Sweet Hour of Prayers
- 1回 ホーム・スウィート・ホーム
- 1回 オールド・ブラック・ジョウ
(フォースター曲)
- 1回 オールド・フォークス・アト・ホーム
(フォースター曲)
- 2回 静けき祈り
- 1回 最後の舞踏
- 1回 彼女の像 (シユーベルト曲)
- 1回 雁の叫 (ロシア民謡)
- 2回 フライエクンスト
(ドイツ民謡 ステュンツ曲)
- 2回 決死の勇士を送る歌 (シユルツ曲)
(昭和8年第2回関西合唱コンテスト課題曲)
- 1回 リツチエズオブグレイス
(ローレンツ曲)
- 1回 ナポリ牧歌調 (ガルドルデイ曲)
- 1回 さらばふるさと
- 1回 ブンデスリート
- 2回 吹く花うばら (メンデルスゾーン曲)
- 2回 ペアテイモルツイ (シユヘル曲)
- 2回 送別の歌 (四重唱)
- 1回 ブリュール・オブ・スコットランド
- 1回 マルシユインスフェルト
- 1回 オイスター
- 1回 スコットランドの釣鐘草 (四重唱)
- 1回 フローテイング・ミド・ザ・リライズ
(四重唱)
- 1回 我悲しみをもて野邊を去らん
- 2回 希望のさゝやき (細谷一郎編曲)
- 2回 あげよ歓喜の聲 (リユース曲)
- 2回 静かなるアフTONの流れ
(フロ・リンコー曲)
- 2回 左舷當直兵 (メシイ編曲)
- 1回 リンデンの樹陰 (卒業生四重唱)
- 2回 立てよもろびと (ストウンツ曲)
- 3回 アヴェ・マリア
(クレツツシユマール曲)
- 5回 春の小花 (ハットン曲)
- 4回 誠の愛、または眞實の愛 (ジルヘル曲)
- 1回 別離 (キルヘル曲)
- 2回 錨あげて
*本邦初演 (マツクファーレン曲)
- 1回 小さき歌 (キルヘル曲)
- 3回 親爺の庭で (フランス民謡)
(清水脩編曲)
- 1回 集ひの歌 (モツアルト曲)
- 1回 小さい歌 (レオプレツヒ曲)
- 1回 祖國讃歌 (メンデルスゾーン曲)
- 1回 舟乗の歌 (ワグナー曲)
- 1回 可愛いゝ頬 *本邦初演 (ハットン曲)
- 2回 行進 (ドイツ民謡) (レヴワルテン曲)
- 1回 春の歡喜 (十五世紀伊太利民謡)
(清水脩編曲)
- 5回 告別 *本邦初演
- 1回 男海ゆく (堀内敬三曲) (シユーマン曲)
- 2回 セレナーデ (オットー曲)
- 2回 羊飼いと乙女 (ハットン曲) (複四重唱)
- 1回 祝歌 (ワグナー曲) (昭和11年混聲大合唱)
- 2回 夜の唄 *本邦初演 (ネーゲリ曲)
- 4回 つはものの死 (ヴォルフラム曲)
- 2回 タベ (レデカール曲)
- 1回 歌劇「イルトラヴァトーレ」中の
ミゼレーレより
- 1回 音楽の女神を讃ふる歌
(昭和11年関西学生合唱連盟合同演奏)
- 1回 自由の誓ひ (メンデルスゾーン曲)
- 1回 祝歌 (BK文藝課編曲)
(昭和11年JOBK第1回合唱コンクール課題曲)
- 2回 誠の誓 (外語グリークラブ譯)
(エツゲルンシエイム曲)

- | | |
|--|--------------------------|
| 2回 野ばら (エイチ・ハットン曲) | 1回 Deutsche Messe |
| 2回 ラインの酒の唄 (ドイツ民謡) | 1回 Zum--gloria |
| 1回 燕の唄 (ウエルネル曲) | 1回 Trink-kannnon |
| 1回 菩提樹 (シューベルト曲) | 1回 あゝ我等祖国を愛す (ノールウエイ民謡) |
| 2回 聖なる哉 (「ドイツ彌散」より)
(シューベルト曲) | 1回 兵士の歌 |
| 1回 野ばら (ワルナー曲) | 2回 ハンストゲレーテ |
| 2回 剣を想ふ歌 (ウエーバー曲) (グリー譯詞) | 1回 国民進軍歌 |
| 1回 騎兵三歌 | 1回 興亜行進曲 |
| 1回 御稜威 (ベートーベン曲) | 1回 軍艦行進曲 |
| 2回 兵士の合唱 (グノー曲)
(昭和12年関西学生合唱連盟合同大合唱他) | 2回 くろがねの力 |
| 1回 南京に揚がる凱歌 (混聲合唱) (昭和12年) | 2回 愛国行進曲 |
| 1回 征けよますらを (大齋唱) (昭和12年) | 2回 ベニー (グノー曲) |
| 1回 皇軍大徳の歌 (昭和13年) | 1回 紀元二千六百年奉祝歌 |
| 1回 獵歌 (ロビンフッドより) (コーヴァン曲) | 1回 紀元二千六百年頌歌 |
| 1回 全関西合唱聯盟歌 (昭和13年) | 1回 全関西合唱聯盟歌 |
| 1回 出征兵士 (メンデルスゾーン曲) | 1回 聖靈 (グノー曲) |
| 1回 若人の歓び (シューベルト曲) | 1回 サンタマリア (グノー曲) |
| 1回 瑞穂の國 (ハイドン曲) | |
| 1回 日本青年の歌 (橋本國彦曲) | 以上初演奏の順に並べた。昭和12年(1937) |
| 2回 祖国の影 (ドイツ民謡) | の日中戦争開始以後は時勢を反映して戦時色の |
| 2回 故郷を離るゝ歌 (ドイツ民謡) | 強い曲が多く演奏されている。 |
| 2回 祖国讃歌 (ハイドン曲) | 昭和15年(1940)11月19日 関西学生合唱 |
| 1回 殉国の勇士を弔ふ歌
*大高醫との合同演奏 | 連盟主催「紀元二千六百年奉祝學生合唱大會」 |
| 2回 ペアティモルツイ (メンデルスゾーン曲) | に出演。 |
| 1回 美しき死 (メンデルスゾーン曲) | これが記録に残る戦前最後の演奏会であった。 |
| 1回 天を継ぐ者 (リンク曲) | 『咲耶』第20号によると同年の活動は11月 |
| 1回 ローマの戦歌
(歌劇「リエンチ」より) (ワグナー曲) | 21日の校内英語科辯論大会に賛助出演したこと |
| 3回 海ゆかば (萬葉集より) (信時潔曲) | で終わっている。 |
| 1回 戦時市民の歌 (大阪市選定) | その後学徒出陣するグリー部員と一緒に写った |
| 1回 太平洋行進 (海軍省選定) | 集合写真(次ページ)(昭和18年撮影)があるが、 |
| 2回 アーメン・フーガ
ベルリオーズ曲 歌劇ファウストの却罰より | 昭和16年(1941)から終戦までの活動 |
| 2回 勝ちませる君 (パレストリーナ曲) | の詳細は不明である。 |
| 1回 榮光 (グノー曲) | |



昭和19年(1944)4月 勅令により校名を大阪外事専門学校に改称、昭和20年(1945)3月大阪大空襲により書庫等を除き校舎の大部分を焼失した。

ここでグリーとは直接の関係は無いが同窓の作家陳舜臣氏が読売新聞に書いた戦争末期の外語についてのコラム「平和の旗待たず 散ったとも」を抜粋引用させていただいてこの編を締めくりたい。

マレー語(編集註:後のインドネシア語)のS君は海軍予備学生として卒業と同時に入営した。たいていの同窓とはそんな別れ方をしたが、S君とはもう一度会っている。昭和19年の秋だったか、私は卒業後助手として学校に残って、S君は海軍少尉の制服で母校を訪ねてきたのである。

「これから戦地に行く。別れにきた」と彼は言った。いよいよ戦場へ行くのかと私は思った。そして、とっさに、「旗はもうすぐ建つよ」と言うと、彼もすかさず「愛のことは頼むぞ」と笑った。

このころなにかの会で校歌をうたう必要があり、あわてて何度かその練習をした。大

阪外語は第一次世界大戦後の創立で、大正デモクラシーのなかで校歌も平和を謳歌した歌詞だった。各節のリフレインは、

建てよ 建てよ 平和の旗
叫べ 叫べ 愛のことは
輝かせ 文化の光

…であり、校歌指導はフランス語の和田誠三郎教授(編集註:前出のグリーの創設メンバー)で、音楽に造詣が深く、そしてたいそうやさしい先生であった。学生も甘えてヤジをとばしていた。

「平和の旗、建てるんやったらもっと早う建ててくれ!」

このヤジに笑い声がおこった。

私はふり返って、S君と目が合った。ヤジの主は彼だったのだ。彼にはヤジの才能があり、すぐ第二弾のヤジが飛んだ。「愛のことは、叫ぶもんやない。ささやくもんじゃ!」

まもなく彼は特攻機で、沖縄で散華したのである。空襲で校舎は灰になり、焼け残った図書館の書庫で、私はそのしらせをきいた。

(参考資料)

◎大阪外国語大学70年史編集委員会(編)

『大阪外国語大学70年史』

◎大阪外国語学校校友会編『咲耶』(昭和3年~昭和15年)

◎宝塚歌劇団『歌劇』昭和3年1月号

◎大阪コーラルソサイエティ

『大阪コーラルソサイエティ50年史』

◎大阪ガスビル食堂物語

(<http://www.osakagas.co.jp/gasbuil/leaflet/index.htm>)

◎清水脩データベース

(<http://coro-varon.mond.jp/shimizu.htm>)

◎朝日新聞 大正15年6月19日および大正16年11月4日

◎読売新聞 平成19年11月20日付

草創時代の状況がわかる資料として、『外語 GLEE CLUB 名簿』および『咲耶』第5号から2稿を以下に紹介したい。

草創時代の思いで

民秋重太郎(昭4 IP)

卒業が昭和4年(1929)というのだから、今年でもう45年も経ったことになる。それだけに学生時代の記憶も薄らいだし、学んだ語学もたいぶん忘れかけている。ところがグリークラブのことだけはハッキリ覚えているのだから、全くもって不思議でならない。やはり“音楽の魅力”というものであろうか。

乞われるまま、過去の追憶のあれこれを綴ってみよう。

1. 抵抗の克服

グリークラブの創設は大正十五年(昭和元年)5月である。先輩の片山謙二君、級友の工藤広忠君と相はからい、‘とにかく’男声合唱団を結成することになった。‘とにかく’といったのは、実は多くの抵抗があって、なかなかクラブの運営、維持は容易ではなかったからである。

当時の全校の学生数は僅か600。その中から、楽譜の読める者はおろか、単なる音楽愛好家を集めるだけでも、並大抵のことではない。「預言

者笛吹けども民踊らず」の嘆きを繰り返しつつも、ようやく20名ほどのメンバーで出発したわけである。

じつはグリークラブ創設当時には、すでに「声楽部」というのがあった。われわれも、‘一応’はそれに加入したのだが、その指導に当たっていたのが1年先輩のK君(M)であった。彼はなかなか奇抜な男で、発声法を生理的に図解説明した活版印刷のパンフレットを配布し、熱心に教えてくれた。しかしこの声楽部というのは、カルソー(当時有力なイタリアのテナー歌手)ばりの歌唱会で、サンタルチアやカロミオベンなどを斉唱で唱うグループなので、合唱の持つ知性の深さや、教養の高さを求めていたわれわれには承服しがたいものであった。意を決してこの声楽部とは訣別し、新たにグリークラブを結成することとなった。この声楽部も間もなく消滅したらしいので、今にして思えば、熱心に努力してくれたK君には、まことに相すまぬことをしたわけである。

第2の抵抗は配属将校のいやがらせである。なにぶんとも軍事教練の昌んなころなので、なおさら始末が悪かった。そのひとりK中尉が、

あるとき練習場に姿をあらわし、「音楽などは学校の空気が柔弱にみえるから中止せよ」と迫った。即座に私は反問した。「ドイツ語のボーネル先生は授業中にドイツリードを唱っているが、あれは柔弱でないのか?」。するとK中尉の返答がふるっている。「あれは授業だッ」と一喝を喰った。文化教養の欠けている軍人の論理などクソ喰らえとばかり、一同かえって自らを励ましあった次第であった。

その他、抵抗といえば、楽譜（男声合唱曲）入手の困難、学内運動部の妨害、社会の無理解、予算の不足など、数えあげると際限がないが、これらの制約がかえって激励となり、抵抗が発奮をうながす結果となって、ついにコンクールに優秀な成績をおさめるところまで進んでいった。

2. よき師、よき友

このような状況にあったとき、まことに恵まれたのは、よき指導者とよきメンバーであった。当時日本の、とくに関西の合唱界は、まだ黎明期であって、何よりも指導者をえることが困難であった。幸いにしてわれわれは長井斉氏の指導をうけることができ、私の在学中だけでも数回、あるいは十数回こんせつな指導をうけた。当時「外語グリー」の名声を天下にはせたのも、この長井先生の指導の賜物であった。にもかかわらず先生に一度も謝礼を差上げたことがなかった。却って逆に、おごってもらったくらいで限りない非礼を続けたわけである。今にして思えば、未熟な学生時代だったとはいえ、まことに内心じくじたるものがある。

つぎにまた、とき友をえたことも特筆せねばならぬ。印象にのこる人達をあげると、3年生には音楽感覚バツグンの片山君（F）、頭で音楽をこなす和田君（F）、愉快で洒脱な村瀬君（D）、2年生には名テナー仙石君（F）、温厚な小川君（R）、同級にはピアノのうまい工藤君

（M）、百キロの巨体から低音を響かせる小西君（E）、3年間一度も練習を欠席しなかった田中君（E）、下級には、えがたいバスの安養寺君（E）、乃木大将崇拜の溝口君（E）、バリトンパートを支えた日比野君（E）、数少ないテナーで重宝がられた田馬君（F）、珍しいネバリの声を持つ中沢君（M）らであった。（これらの諸君についてのエピソードは限りなくあるが、いまは割愛しておこう。）

ただ一言附加しておく、初代指揮者片山君は、3年生だったので、1か年で学窓を去り、そのあとは私が引き受け、指揮者・マネージャー・ライブラリアンなどほとんど独りでやってのけた。これには工藤君の絶大な協力のあったことも忘れてはならない。彼は一見温厚だが、なかなかネバリ強く容易に抵抗に屈しなかった。ガムシヤラな私と正反対の工藤君は、やはり草創期には不可欠の存在だったといいうる。

3. 猪突猛進

「とにかく積極的に」というモットーで、出来る限りの活動を続けたのが、わたしの在学中3年間のグリー生活であった。練習は毎日昼食後30分間。（放課後は集まりが悪いのと、週2回というより、毎日の方が短時間でも効果があった）。音楽会は初年度は秋の創立記念日に学内で開いたにとどまったが、2年目からは、春秋2回の音楽会と、対外的な合唱祭、連合学生音楽会、コンクールなどにも出場した。

忘れられぬのは、実業同志会（鐘紡の武藤社長の主宰した政党）の依頼で、その会歌を“レコード吹き込み”したことであった。授業をサボって、西宮にあるレコード会社（名前は忘れた）に出かけた。「軍艦マーチ」の曲に合わせて「立て立て青年団のため…」と歌った。この会歌は、またレコードは、その後どうなったか知る由もないが、実業同志会なるものは間もな

く解散しているところからみて、我々の吹き込みが、この政党の志気を鼓舞したところか、解散に追いこんだのかと思うと、チョッピリ責任(?)を感じないわけではない。それはとにかく、謝礼に金五十円也をもらった。1年間の部費が六十円であったから、まさに大金である。この五十円に激励(?)されて、いよいよその秋にはコンクールに挑むこととなった。

4. 感激のコンクール入賞

25人のメンバーながら昭和2年(1927)秋、宝塚交響楽団の合唱コンクールに出場した。これは、およそ関西におけるコンクールと名のつく最初のもので(全国的なものはまだなかった)、学生、一般、職場の区別なしに、また人数、声種、資格などの制限もなく行われたが、確か13、4団体が出場したと記憶している。外語グリークラブは、全体では3位であったが、学生としては1位の栄冠を獲得した。一同抱き合って歓

喜にひたったことはいまだに忘れえぬ感激である。その後、学生合唱界の王位を独占し続けている“関学グリー”にも、このときだけは、われわれの後塵を拝してもらったわけである。

このコンクール入賞について、ぜひこの機会に記しておきたいことは、当日の曲目「ラーボード・ウオッチ」と「ゴーイングホーム」のうち、後者は、今でこそ有名であるが、「ドボルザークの新世界のラルゴーを男声合唱に編曲して、ゴーイングホームの歌詞をつけた」もので、じつは外国からの直輸入で本邦初演である。こんなことが審査員の印象をよくしたのかも知れない。またある人はいった。あのセメント袋みたいな洋服(当時外語はシモフリの制服であった)がモノをいったのだと。

残念なことには、このときの賞状とカップとは、学校の応接室に保管してもらっていたが、戦災で焼失した。まことに淋しい限りである。

(昭49.5.10)

『外語GLEE CLUB名簿1974年5月』より転載)

第一回・第二回公開音楽会

合唱音楽を以て團體音楽の最も最もやり容い、又音楽として最も宗教的な莊嚴と崇高とを與へるものだと思つてゐる僕達に、未だグリークラブを組織する機會が與へられないのが残念でならなかつた。外語創立以來既に五星霜然るに我音楽部は僅かにハーモニカ以外に其の存在を認められないことが、音楽を愛する僕達には悲しいことだつた。いつだつたか朝日新聞は其の社説に、「音楽教育」と題してその必要を述べ、英國の或る學校の如きは全校生徒を以て合唱團を組織してゐると報じたことがあつた。

こんな事を耳にする毎に僕達のグリークラブ設立の希望は深められて來た。斯くして大正十五年四月大阪外語グリークラブは其の誕生を

見たのである。

四月になつて廣く部員を募集したところ幸に二十名の部員を得ることが出來た。始めての僕達にはどういふ風にやつて行つていゝかよは解らなかつたが、可成經驗のある片山民秋兩君が主として指導し、簡単なハーモニーのものから始め出した。仲仲上達しなかつたけれど、毎日一時間程の熱心な練習と部員各自の氣がよく一致してゐるので本當に愉快にやつて行くことが出來た。

第一回公開音楽会(六月十九日)

ちょうど同じ頃に創立されたマンドリンクラ

ブの人達との間に、外語音楽部発展と今迄の練習とを發表する目的で音樂會を開かうと言ふ話があった。幸ひヴァイオリンクラブの人達の贊助を得、其他多数の好樂家の諸兄の賛同があったので喜びと恐ろしさの間に猛練習を開始した。始ての音樂會なので様子が解らず準備に可成り心を疲らした。然し言ひ知れない嬉しさで常に愉快だった。

當日は朝から空模様があやしく随分心配したが夕方頃から美しく晴れ上り星さへ瞬き出し、本當に音樂會にふさはしい夜だった。大朝大毎がこの最初の音樂會のことを書いて呉れた爲かこの日は恐ろしい程の盛況だった。開會前一時間頃から續々と入り來り、定刻數十分前にはあの大講堂もぎっしり詰り後から來る人は皆横庭の芝生の上で聞いてゐる程だった。プログラムは、

第一部

- 一：校歌合唱（マンドリンオーケストラ伴奏）
- 二：合唱
イ：カレッチチヤ
ロ：ブルドッグ
- 三：マンドリンオーケストラ
イ：故郷を慕ひて
ロ：水郷の夜
- 四：ヴァイオリン（三重奏） 美しきオハイオ
- 五：合唱 ほとゝぎす（マツチギ作）
- 六：マンドリンオーケストラ
村の祭（ジュリアン作）
- 七：合唱
イ：春の歌（アプト作）
ロ：ヴェカントステア（ジョンズ作）

第二部

- 一：マンドリンオーケストラ
魅惑の小島（コック作）
- 二：合唱
イ：ラブスヒプノティズム（ダヴェンボート作）

- ロ：或る悲劇（アダムス作）
- 三：ヴァイオリン 三重奏
フライシュツツ（ウェーバー作）
- 四：マンドリンオーケストラ
イ：悲歌（ジャコバッチ作）
ロ：ローマの想出（フランチャ作）
- 五：バリトン獨唱
イ：南の風（草川信作）
ロ：若し私がレデイなら
- 六：マンドリンオーケストラ
牧場にて（ジュリアン作）
- 七：合唱
イ：オールドカレッチチヤム（アダムス作）
ロ：グッドナイトレデイズ

校歌は片山民秋兩君に四部合唱に編曲され岩井君がマンドリンオーケストラの伴奏を附し片山君の指揮で歌はれた。出演中はステージのみ電燈とスタンドをつけ、他は全部消したので非常に美しく、熱心な練習は、雅麗な装飾と相まって聴衆を心ゆくまで音樂の世界に導くことが出來た。

合唱は大して上出來だとは思へなかつた。然し曲が美しいのでよく聞へた。始めの「カレッチチヤ」「ブルドッグ」は一番よく練習したゞけに可成りよかつた。次の「ほとゝぎす」はソロのパートは全部民秋君が歌ひ、工藤君のピアノ伴奏で指揮者なしにやつたが、知られてゐる曲だけに受けもよかつた。三番目の「春の歌」「ヴェイカントステア」は得意なもの、よくハーモニーしてゐた。

第二部の「或る悲劇」は曲が全体漸次速く強くなって行き、終わりの方で鐵砲が発射する時に出来るだけの声で「バスト」と叫ぶのだが、お可笑しくて聴衆が皆笑ってしまったのでその次は聞えなかつた。然し之は大喝采だった。民秋君のバリトン獨唱「南の風」はよく知られてゐる童謠なので、お母さん達に連れられた小さい

人達に喜ばれた。「若し私がレディなら」は愉快な曲なので大喝采だった。最後の二曲はよく練習したのだがどうしたものか餘りよくなかった。

今日の會は實際に大成功だった。殊にマンダリンの出來が素晴らしかった。聴衆は約一千人餘。女の人達の多いのが目立っていた。(出演部員16名)

第二回公開音樂會 (十一月十二日)

二學期に入って新に部員を増加し、関西の合唱指揮の第一人者長井齊氏を指導者に迎へて練習を始めた。長井氏の指導は實にすばらしく合唱は目に見えて上達して來た。

この日は紀念祭の翌日だった。朝日新聞はその大阪版に「二つの音樂會」との見出しで、東京音樂學校の音樂會と大阪外語の音樂會が相前後して開かれることを報じた。日本東壇の最高權威と書かれたので流石に「顔まけ」せざるを得なかった。

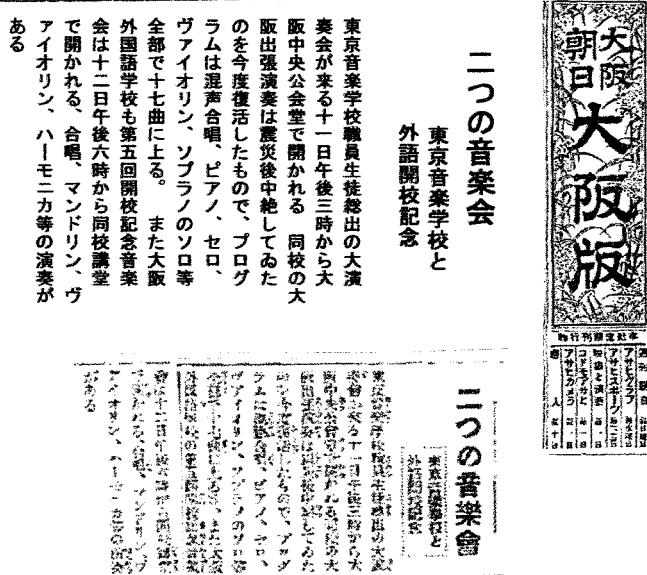
この日六時開會と言ふに五時頃から續々と來場し、一千枚のプログラムは瞬くうちに渡されて了ひ、定刻には文字通り立錫の餘地もなかった。講堂にこれ程多くの人が入ったのは恐らく今日始めてだらう。聴衆約千五百、大脇君の開會の辭にプログラムは進んだ。

第一部

- 一：ハーモニカ合奏
序曲「レイモンド」(トーマス 作)
- 二：合唱
イ：蠣(スコット 作)
ロ：ホアニタ(クラッツ 編)
- 三：マンドリン オーケストラ
序曲「アイデアルオーバーチュアー」(ダニエル 作)
- 四：ハーモニカ四重奏
イ：アンダンテ カンタビレ
(チャイコフスキー 作)
ロ：キスメット(マルキー 作)
- 五：合唱
イ：ラーボウド ウオッチ(マーシー 編)
ロ：彼女は美し(ジョンズ 作)
- 六：マンドリン オーケストラ
一抒情幻想的譚曲「地獄谷の夜」(ジュリアン 作)
- 七：ハーモニカ合奏
カルメン幻想曲(ビゼー 作)

第二部

- 一：マンドリン オーケストラ
歌劇「ボッカチオ」幻想曲(ビリー 編)
- 二：ハーモニカ合奏
イ：セレナードダムール(プロン 作)
ロ：セレナー(ドリゴ 作)
- 三：四重唱
イ：子守唄(モツアルト 作)
ロ：子守唄(ブラームス 作)
- 四：ヴァイオリン二重奏
トルコ行進曲(ベートーベン 作)
- 五：マンドリン四重奏
獨創的狂想曲「愛慕調」(プランツォリー 作)
- 六：ハーモニカ合奏 リゴレット幻想曲



(ヴェルディ 作)

七：合唱

イ：荒城の月 (田中銀之助 編)

ロ：ベネディクタス (ロンドン教會 編)

八：マンドリン オーケストラ

組曲「スペインの印象」(プーシュロン 作)

流石に長井氏の指導の下に練習しただけこの日の合奏は素敵だった。

最初の「蠣」「ホアニタ」は本當に立派な出来だった。歌い方、エキスペッション共に長井氏のタクトに一致し申し分なかった。唯「蠣」の終りのファストテナーが少し無理だったが。「ラーボウドウオッチ」は相當長いものだが素敵だった。殊にファストテナーのフォルセットなんかは實によかった。「彼女は美し」は練習してから間もなかったがよかった。第二部の四重唱は森田、和田、民秋、小西君達で子守唄二つを歌はれたが練習不足のためか聲量も合はないし二人程音程を狂はし、あまりよくなかった。次の「荒城の月」は實にすばらしかった。今日のうちで之が一番よかただらう。バスのメロディは素敵だった。エキスペッションは申し分なかった。殊にハーモニーがとても美しいので大喝采だった。最後の「ベネディクタス」は宗教的氣分の豊かな最も莊嚴なもの、そして一番自信のあるものだが聴衆の一部の人のため嚴肅な氣分を破壊され豫期してゐた効果をおさめ得なかったのは本當に残念だった。(出演部員二十一名)

今日の音樂會は實に盛だった。然し紀念祭氣分が残つてゐるためか騒々しかったこと、殊に

低級な彌次のあつたことは悲常に遺憾である。

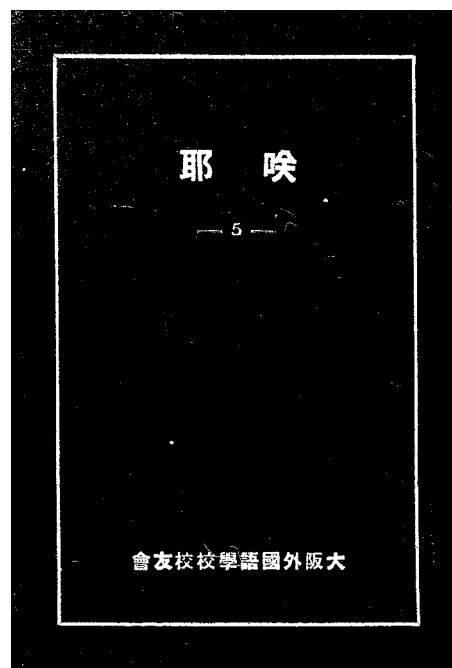
斯くして華やかな成功裡に土臺を築き上げ今尚長井氏指導の下に熱心に練習を續けてゐる。その内容は益々充實し世の好樂家にその活躍を期待せられてゐる。來たる十二月下旬、朝日會館に於て長井氏を指揮者とし、百人以上を以て組織せられる大合唱公演會が管絃樂伴奏で開かれる。我グリークラブは殆んど全部之に参加し益々其の眞價を發揮せんとしてゐる。猶來年一月、關西樂壇の覇者關西學院グリークラブと交驩合唱音樂會を開催すべく準備中である。

創立以來僅かに八ヶ月、既に斯かる名聲を保持することが出來た事を思ふと胸間自ら微笑を禁じ得ない。茲に我部の將來の活躍を心より期待する次第である。

(二〇・十一・一九二一・委員記)

(編集註：一九二一は一九二六の誤記と思われる)

『咲耶』第5号1927年より転載



『咲耶』第5号表紙 1927年

終戦から第1回定期演奏会まで



太平洋戦争も末期の昭和19年（1944）4月、母校は校名を創立以来の大阪外国語学校から大阪外事専門学校へと改めた（大阪外国語大学への移行は昭和24年（1949）5月）。翌昭和20年（1945）8月、戦争が終わるとともに戦後の混乱期が始まった。大阪外専は空襲で校舎のほとんどを焼失していたが、早くも9月、大阪高等学校と近くの五条小学校の教室を借りて授業を再開した。しかし翌年初め、昭和21年（1946）2月には高槻へ移転、以後昭和32年4月まで11年2か月の間、高槻と大阪（上八）での分散授業が行われることとなった（『大阪外大70年史』より要約）。

グリー再開

戦後グリーの最初の活動は、昭和22年（1947）11月12、13日の二日にわたって開かれた「大阪外語創立26周年記念文化祭」（於大手前の国民会館）におけるステージであった。これより以前、山本順造（昭23C）によれば、「戦後グリークラブの再建は昭和21年（1946）に増谷豊（昭22IN）らによって図られたが、演奏を公開できるまでには至らなかった」とある。

まず初日の11月12日、男声合唱として、和田誠三郎仏語部教授の指揮、ピアノ伴奏堀昂子（仏語部1年生）により、シューベルト「落葉」、グノー「サンタ・マリア」、ジョーンズ「希望の島」、マグラハム「兵士の歌」、メンデルスゾーン「葡萄収穫の唄」の計5曲を演奏している。この時の出演団員数は27名と記録されている。

続く13日のステージは、「是非とも混声合唱にしたい、女声部を何とかせい！」と和田先生の



第一日（昭和22年11月12日）のステージ

厳命があったとのことで、前記の山本たちが走り回って甲南高女専攻科の生徒や、聖苑会混声合唱団（「毎日コーラス」の前身）の女声部に参加を働きかけ、何とか俄か仕立ての混声合唱にこぎつけた。この時はグリーのステージではあるものの、プログラムには“大阪外語混声合唱団（臨時編成）”として紹介されている。指揮、ピアノ伴奏は前日と同じ顔ぶれで、曲目は、ヴィットリア「タントゥム・エルゴ」、バッハ「とこしへに生きる」コラール、チンガレリ「主よ、我らより遠ざかり給う勿れ」、ヘンデル「ハレルヤコーラス」（メシヤより）の4曲で、ステージ上には男声24名、女声28名、計52名が数えられる。半数以上を占める女声部はすべて借り物ながら堂々たる編成の混声コーラスであった。

混声グリー

戦後学制改革の結果、大阪外専では昭和21年（1946）より女子学生の受け入れが始まった。昭和23年には第三期生として8名が入学、このうちフランス語部の6名と、イスパニア語部の



第二日(昭和22年11月13日)のステージ

1名、計7名がグリーに入部した。フランス語部の女子学生は和田先生によって全員が“自動的に”グリーに入れられた。こうして「混声グリー」が誕生した。

混声グリーは和田先生の指導のもと宗教曲を中心に夏休みも含めて練習した。しかし、発表会にまでこぎつけたのは例年秋に国民会館で開かれていた文化祭(外語祭)への出演だけで(おそらく昭和23年、あるいは24年)、その他の活動は不明である。一部の記録(第一回定演プログラム)には、“混声合唱をもってコンクールに入賞した”とあるが、詳細はわからない。そして、和田先生の阪大への転出もあって、昭和25年(1950)頃に混声グリーは消滅した。

この頃の経緯について、石井幸子(昭26S)は以下のように述懐している。

終戦後の学制改革で大阪外事専門学校が女子学生の入学を認めるようになり、私たちはその第三期生として入学しました。フランス語部に入った女子学生が多く、フランス語部の和田誠三郎先生がこの人たちを“自動的に”グリーにお入れになりました。自分はスペイン語でしたが、そのうちの一人に誘われてグリーに入りました。合唱経験は全くありませんでした。当時のグリーに男性は大勢いらっしゃいましたが、女性で練習に常時出てくる人

は5人位でした。和田先生が指揮・指導をなさっていて、ほかに外部からの指導者はいなかったと思います。通常練習は昼休み、あるいは放課後で、夏休みに練習したこともありましたが。題名は忘れましたがKyrie eleisonを終始繰り返す曲を歌いました。ラテン語のミサ曲などの宗教曲が多く、あまり面白くありませんでした。演奏会は国民会館で一度演奏したのを覚えています。その演奏会を目標として練習しました。グリーの混声は自分たちのあとなくなりました。私たちがやっていた期間も長くはなかった。数か月だったかも知れません。グリーの主体はあくまで男性で、おもえば私たち女性部員は“お飾り”だったのかもしれない。

(平成28年(2016)10月12日に聴取)

同期であった俵萌子(昭28F、大学第一期生)はもっと手厳しい。

私たち男女共学の第一期生は女が少ないということで無理やりグリーに入れられました。仕方なく歌っていましたがコーラスは少しも好きではありませんでした。その頃女子学生は全学に7人ぐらいだったのです。

(第30回定期演奏会プログラムから転載)

石井、俵たちと同期の赤木富美子(後年、女声コーラス部の顧問を勤めた)は、当時のことについて以下のように記述している。

近年、グリークラブの動きが活発である。そしてクラブの皆さんから演奏会の切符をおすすめ頂いたり、思い出話などをきかれたり、要するに先輩として扱われる度に、私は何ともいえず嬉しいような、面映ゆい

ような心持になる。これからお話しすることは、その理由でもあり、また私の学生時代のクラブの思い出でもある。

さて、私が外大に入学を許された時、女性は全学でたった9人、そのうち7人までがフランス語科だった。そして何という偏見であろうか！フランス語科の教授でグリーの初代クラブ員でもあった和田先生は、女性というものは全部歌が上手なものであると思いついておられて、私たちは全員否応なくクラブに入れられてしまったのである。この偏見は、女性というものは、みんな家庭的で感情的で、学問研究のような論理的操作に向かないという同じ先生の御意見と共に、私の一生を大きく支配することになった。

私は歌は嫌いではない。でも正直に言うが、いくら努力してもドレミファの正確な音が出ないのである。それに同期の女子学生のうち、母君が音楽の先生だったF子と2、3人を除いては、おせじにも上手といえるものはいなかった。

それでも私たちは毎日毎日、陽光を一杯あびて、高槻校舎の雑草の中で練習を続けた。曲目は猛烈に難しいミサ曲ばかりで、キリエイソソなどとラテン語の歌詞であった。和田先生は指揮をとりながら、この歌声が完全に調和する時、神が見えるのだと熱意をこめて語られた。私たちが部員である限り、完全に調和する筈もなかったが、私たちは先生の熱意にほだされた形で誰も休まず声をはりあげた。

それでもとうとうコンクールに出て、毎日会館の舞台上上がったのだから、指揮者の一念というものは怖ろしいものである。舞台上で、教室ではどんな質問にもお顔色もかわらない和田先生の指揮棒がふるえているのを見て、私は初めて、音楽に対する先生の畏敬の念を知った。それ以後、私は

いつも音楽には敬意を表している。私とは無縁のものだけれど、でもこの世で一番美しいすばらしいものらしいと思って。だから私はクラブの名簿に名前が残っていることには申し訳ないとは思いつつながら、又、私の生涯から部員であった日々は消し去り難い気もするのである

(『外語グリー OB名簿1976年7月』より転載)

なお、昭和25年Fの穴山(旧姓堀)昂子は、編集委員宛の手紙で以下のように記している。

2017年3月23日

穴山昂子

お返事が遅くなりましてすみません。平松さん(編集註:石井幸子さん)のお名前なつかしいです。

このお手紙を四、五年前に頂いていましたら、私共が一年の時、中国語の三年でグリークラブの中心でいらした山本順造さん(編集註:昭和23C)がそれはきちんとした活動などをまとめていらしたのですが、一昨年亡くなられました。お嬢さんがいらっしゃるのですが福岡でしたかで、私は山本さんが亡くなられた事を電話でお知らせ頂きました。ですから御連絡先は知りません。私と同級の廣島敏史さんという方もいらっしゃって、やはり熱心なグリークラブのメンバーでしたが、もう大分前に亡くなられました。

私共女子学生は三人だけでしたので、混声合唱など出来ませんし、一、二回ピアノの伴奏をしましたが、何分高槻の兵舎の跡でピアノなどありません。いつもアカペラで男声合唱をしてらっしゃいました。部長は

フランス語の和田先生（三期生）で、学生のころから教会音楽のコーラスをしていらっしやいましたそうです。指導者は大阪音楽大学になりました、大阪音楽学校をはじめられた永井先生だと思いますが確かではありません。

とに角、私の知っていますグリークラブはカトリックの宗教音楽が主でした。たまに普通の歌をうたう時、和田先生は俗曲とおっしゃってました。私が入学しました時、山本さん達が混声合唱がしたいとおっしゃって、私の出身女学校の専攻科に残っていた同級生に出演をたのんだことがあります。

もう影も形もなくなっています朝日会館でのグリークラブ祭の様なものには出てらしたと思います。或る時、部員が五人程しかなくて、それでも舞台でうたってらした時、私は舞台の袖にいましたら、甲南高校（旧制）の学生が、私が外語学生とは知らないで、「アレ、何してるんです」と笑った事もありました。

かくのごとく、混声グリーは極めて短命に終わった。編成も男声がたぶん20人以上であったのに対して、女声はわずか7名で、しかも合唱経験の有無は問われなかったとあるから、混声合唱団としての実績はさほどあげられなかったと推測される。しかし、外語グリーの長い歴史の中にあって、わずかな期間でも混声の時代があったということは記憶されてしかるべきと考えられる。

三代目グリーの誕生

混声グリーが消滅の後、グリーの歴史に二度目のブランクが生じた。あらためてグリー再建の話が持ち上がったのは、およそ三年後の昭和28年（1953）4月のことである。岡部太郎（昭30

F）によると、岡部たちが三年生となり上八学舎に移ってすぐ、先輩からグリー再建の話が持ち出された。そこでまず、フランス語科の中で部員を募ったところ、30人のクラスメートから7人が参加するという。ついで他語科及び高槻の一、二年生を勧誘し、当初は10名に満たなかった部員も22、23人まで何とか増え、昭和28年（1953）夏ごろにはグリー再建に成功したのである。

三代目グリーの最初の指揮・指導者は再び和田誠三郎先生（当時は阪大仏文科教授）であった。部員はほとんどがコーラス初経験者で楽譜もロクに読めない者もいて、和田先生は大へんご苦勞をなさったようである。また、学舎が高槻と上八に分かれていて部員も両方に居るため、週一回の練習場は中間にあたる梅田の曾根崎小学校を、同窓生の伝手を頼って借用せねばならなかった。

三代目グリーの初期活動の中心は毎年秋に開かれた文化祭（外語祭）への出演であった。最初ドイツミサ曲を練習したが、曲が難しくてうまく行かず、とうとう和田先生は匙を投げてしまった。文化祭へは増森邁（昭31D）の指揮で出演したが出来は良くなかったらしく、その後はもっと易しい曲目、「希望の島」や黒人霊歌などに替わった。

他方、新日本放送（現在のMBS毎日放送）の番組である「歌うフランス語講座」に出演したり、ミナミの酒場「ミュンヘン」でアルバイトを兼ねてクリスマスソングを歌ったりで、グリー部員は青春を大いに謳歌した。関西合唱コンクールに戦後初めて出場したのは昭和31年（1956）10月。事前に合宿までやって備えたにもかかわらず、結果は先進他合唱団との格差に一同愕然とした模様であった。

第1回定期演奏会

グリーの歴史の中で初めて、昭和32年（1957）

7月単独の学外演奏会が開かれた。定期演奏会のスタートである。この時に主体となったのは、大崎直忠 (E)、岡田吉治郎 (E)、野田大祐 (C)らの昭和33年 (1958) 卒業組と、34年組の磯崎豊一 (E)、小谷松明弘 (E)らであった。まだ戦後の悪条件の残る中であって、彼らの意気込みと頑張りは並大抵のものではなかった。

その準備の意味もあり、3月に善通寺での合宿を経て高松への演奏旅行が行われたが、これもグリーの歴史上、はじめての地方公演であったと思われる。なお、昭和32年4月、高槻学会が廃止されて上八に統一されている。

第1回定期演奏会の出演部員は50名、指揮は前記の大崎直忠、会場は当時名ホールの誉れ高かった大阪ガスビルホールであった。待望の学外演奏会とあって部員一同大いにハッスルした結果1,000枚以上のチケットが売れた。しかしこれは売りすぎで、会場の定員数がいくらであったか詳らかでないが、当日は超満員となった。部長教授であった住田照夫教授 (中国語) は、「開演直前に会場へ駆け込んだがすでに入口まであふれるばかりで、ついに最後まで会場へは入れなかった」と回顧している (「第1回定期演奏会の思い出」部誌『GAIGO WILL

SHINE』創刊号、1967年8月)。

なお、第1回定期演奏会に至るまでの経緯について、指揮者の大崎は第20回定期演奏会 (1976年12月18日、創部50年記念) プログラムに以下のごとく寄稿している。

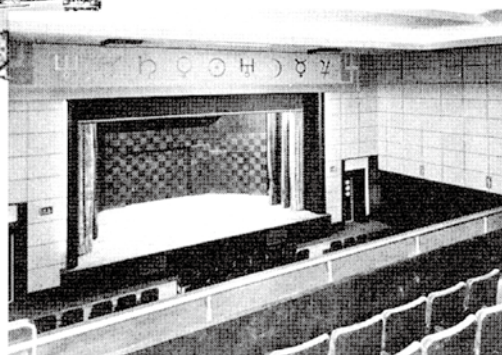
苦劳しました

大崎直忠 (昭33E)

外語に入った時、キャンパスは上八と高槻にわかれていた。グリーがある。練習は上八に来いと云う。行ってみると、6人ばかりしかいない。これが全部かという、そうだという。学生千人だから楽譜の読めるのは約1%として10人。無理もなかった。でも、それではコーラスにならない。2年になった時、つまり高槻では「最上級生」の時、新入生の経歴を調べて少しでも音に関係のありそうなものは全部グリーに入れた。それでも20人、3年になったら音譜の読めないものもどんどん入れて口うつしのように音を教えた。何とかハーモニーらしいものができたところで、観客が欲しくなり、コンクール出場を決め、同時に第1回演奏会を強行した。資金もないのでダンスパーティーをやって稼いだ。そして同級の大阪ガス重役の娘を口説いて、ガスビルを安く借り、切符を売りまくった。客寄せに5か国語で歌を歌った。そして当日、立席も一杯になるほど超満員で何とか面目を保ったが、後で考えれば冷や汗三斗。当時



会場の大阪ガスビルと講演会場
(大阪ガス提供)



の強引な指揮者をもりたててくれた諸君に
今も感謝している。20回萬歳。

かくしてグリー史上初めての単独学外演奏会
は、細部では取りこぼしもあったものの好評裡
に終わり、大成功を収めることが出来た。財政
的にも好成績で、剰余金でピアノを買って大学

に寄付した、との伝説が生まれるほどであった。

この結果、すでに学内で最大規模のクラブに成
長していたグリーの存在感が一層高まったが、最
大の収穫はグリー部員の自信につながったことと、
その後の歩むべき道筋、課題がはっきり浮かび上
がり、目標が明確になったことであった。

天国からのメール

第1回定期演奏会への道のり

野田大祐（昭33 C）



私が入学した昭和29年
(1954) はサンフランシス
コ平和条約調印に続く日
米安全保障条約改定に向
かう時代で、学生の中
では政治への関心が日毎
に高まっていました。その頃の学生は2本立て55
円の映画を見るのが楽しみで、又「ともしび」
等のホールで、「カチューシャ」や「赤いサラ
ファン」等を全員で歌っては、社会主義国の革
命遂行の実際などを、これまた一合55円のマス
酒をあおりながら徹宵議論したものでした。

そのうちに、もっとまともな合唱をやろうで
はないか、と集まったのが大崎直忠君、岡田
吉治郎君、吉岡幸三君、清水正雄君、末次義
君、それと私の6人でした。6人は高槻のおんぼ
ろ“兵舎”の2階で音叉1本を頼りに毎日毎日四
部合唱の練習をしました。その学生寮の一階に
は「すうろん」が1杯15円で食べられる生協が
あり、学生達が高槻学舎では唯一の食事場所に
来ると我々の歌声が聞こえてくる仕組みになっ
ていました。そのPRが功を奏したのか、翌年
新入生の中から若林、小林、河盛、荻野、磯崎、
小谷松、永井、中江、等14人が加わってくれ

ました。我々と併せて20人程になると4人で
歌っていた時には無かった“不思議な音のハー
モニー”の中に忘却できるのでした。

合宿活動も積極的にやりました。伊賀上野、
比叡山、蓼科まで遠出をしました。私が3年生
の夏休み、あちこちの教育委員会宛に葉書を出
して、我々の合宿と演奏会を受け入れてもらえ
ないか、と問合せたところ四国の宇和島と善通
寺から親切な返事が来ました。宇和島は遠くて
旅費がかさむので翌年3月の合宿は善通寺です
る事にしました。その帰途、高松で初めて有料
の演奏会をやって切符を売るのが大変苦勞をし
ました。それでもほんの少しお金が残ったので
学長にお会いして「ピアノを買う足しにして欲
しい」と言ったら「心配しなくてもきっと買い
ますから」と慰められました。

その年の7月、大阪ガスビルホールで大崎直
忠君の指揮、部員48人による念願の演奏会が
実現しました。「黒人霊歌」、「月光とピエロ」、
「ロシア民謡」の3ステージを我々が務め、大
先輩の岡本恵一さん（F30卒）に特別出演をし
ていただきました。この演奏会が翌年以降平成
10年（1998）の第41回まで続く「大阪外国語
大学グリークラブ定期演奏会」の記念すべき第
1回となりました。

（編集註：平成29年5月に逝去された野田大祐氏の
生前のメールを編集し作成）

タイムカプセル

昭和三十三年のグリー座談会*
「今までのグリーとこれからのグリー」

- ◎出席者（発言順）
- | | |
|------------------|--------------|
| 杉田敬治（昭35 IN） | |
| 西川暲治（司会）（昭34 IP） | 磯崎豊一（昭和34 E） |
| 大崎直忠（昭33 E） | 末次 義（昭33 F） |
| 小谷松明弘（昭34 E） | 野田大祐（昭33 C） |



*昭和33年(1958)3月8日(土)大阪市内今里ホテルにて

グリークラブの歴史

司会：お忙しいところをわざわざお集まり下さいまして有難うございます。今日は卒業される皆さんを囲んで「今までのグリーとこれからのグリー」というテーマで、まず最初に、私たちのグリークラブの歴史を簡単に話して頂き、それからいろいろ現在のグリーのことについて話し合ってくださいと思います。

大崎：現在のグリーは第三代目に当たるのですが、第一代目は外語創立当時のもので、当時学生であった和田先生（現阪大教授）民秋先生（現梅花女子短大大学長）清水脩先生（作曲家）等を中心とし、その頃草分け時代であった関西合唱界において高く評価されていたのです。ところが戦争の為に中断し、戦後再び和田先生を指揮者に迎えて再建し、暫く黄金時代を現出したんですが、それも解散になって、二十八年今のグリーが出発したようなわけです。僕たちが入った当時は増森さんが指揮してらっしゃって、部員はわずか数人にすぎなかったんですが、今と違って一人一人がソロの出来るような人ばかりでした。（全員咳払い）

司会：その頃というと学舎が上八と高槻に分かれていたと思いますが、練習はどんなだったんでしょうか。

大崎：僕たちが一年の時は年中上八へ行かされていたが、やはり能率が悪く、部員かく得の為に高槻で別に集まることを考えだしたんだね。（末次、野田氏を見る）それで二年になった時、ふみ切って高槻の方にも一つ作り、新入生、磯崎君たちをどっとう入れたわけです。

小谷松：そして今まで淋しかったグリーが急に賑やかになった。枯木も何とか…。（爆笑）

司会：その頃の行事としてどんなことがありましたか。

大崎：何といってもクラブ自体が現在のように大きくなかったし、組織もととのってなかったもので、文化祭が唯一の年中行事だった。臨時には文化会館で演げき部と合同で演奏会みたいなものを行ったこともあるが、僕たち二年の時、初めて学内音楽祭をやった。第一回にしては大成功で、各語部の、といっても数語部だったが、それぞれ自慢の歌をやったんです。

小谷松：大崎さんたちが上八へ行かれた後、僕が高槻の方を担当したのですが、その続きの第二回学内音楽祭は多分雨の為でしょうが、第一回にまして大成功でした。

杉田：野田さんの素晴らしいソロがとび出したり…。

コンクールに初出場

司会：そういうことがあって、一昨年でしたか、

初めてコンクールに参加したんですが、その時の思い出を。

大崎：僕が棒を振っていた時、初めてコンクールに参加したんだけど、その課題曲が例の「風」。その練習をまず、比叡山の合宿でするつもりだったところが、あの通り#や♭があちこちにあって手がつかず、易しい所だけやっていた。ところが九月に練習が始まってみると案外すらすら。これはいけると思ったね。

磯崎：あの時はセカンドとバリトンがよく怒られたね。

大崎：そして本番になってみると他の合唱団の解釈が、余りに違っていただけなのに驚いた。おまけに指揮の僕があがったりして申し訳なかった。(一同どういたしまして)

杉田：僕も初めてあがりました。あれだけあがったことは今までありません。気がついたら足が小刻みに動いていて、いくら止めようと思っても止まらないんです。(一同爆笑)

小谷松：あの日は朝から皆あがっていたなあ。セカンドは朝の練習でまだ音がとれない始末。ところが本番になってみると、不思議にすっとでた。あの時は自由曲よりも課題曲の方が出来が良かったようでしたね。

末次：そらそうや。自由曲のソロの若林がうちに現われず。僕が代役ソロをさせられた。ところが、初めてで何が何だか分らず、拍子を間違えた途端、大崎が上から情なさそうな顔で見下ろしとんね。(大崎氏苦笑)

大崎：とに角あの時は第一回目の出場だから、あれが精一杯だったね。

四国演奏会のこと

司会：コンクールがすんで、翌三月には善通寺で合宿、高松で演奏会をやったわけですが、あの時の苦心談を何かどうぞ。

小谷松：今日出席してはくれませんが、清水さ

んがその時のマネージャーで、初めから大へんな苦心をされたんです。一月の試験前でしたが、「とに角下検分」と清水さん。磯崎君、僕の三人が、四国へ渡り、徳島、善通寺、高松とまわってきて、大阪で委員会を何回も開いて決めました。

大崎：あの時はよく揉めたけど、時期尚早の慎重派と強硬派が対立したり、値段で揉めたり。

磯崎：とに角、金をとる演奏会なんて初めてだし、一体どれ位売れるかも分らなかったし、一体どういう風にやったら良いかも分らなかったんだから大変だったね。

小谷松：実はあの時の曲目を見て驚いたんですが、殆んど新曲ばかりだし、あのポピュラーの編曲が歌い難かったんでしょ。

大崎：そう、最初から無理は充分承知だったが、七月予定していた第一回大阪演奏会の試金石として、何とかやってみようと、持ち前の強引さで押し切ったんだ。

野田：それが又見事に成功したんだからね。

末次：でもあの時ほど条件の悪いステージはなかったね。半数は風邪でやられていたが、皆何とか無理をして。結局ステージに上ったのは二十八人やったと思うけど。

小谷松：それに善通寺の合宿は苦しかったが、一日七時間練習で、最後の夜なんか十一時頃までパート練習でしぼられたりして…。

野田：今のグリーにとって、あの演奏会は一つのポイントだったね。あれがなければガスピルの演奏会もなかっただろうし。(一同頷く)

大崎：そう、皆そうだと思うけど、あれで僕も七月の演奏会をやる自信もできたし、技術の上でも大変なプラスだったと思う。

第一回演奏会目指して

司会：そしていよいよ待望の学舎統合がなり、グリーもますます発展の途をたどるのですが、

そこの所を。

礒崎：高松の演奏会后、いろいろ今後について話し合ったんですが、やはりまず人数の確保が第一問題ということになって、四月に入って大々的に新入生を引っぱり込み、早速練習にかかったようなわけでした。

大崎：そして学校側に認められだしたのもこの頃じゃなかったかな。まず名実ともに大型化というところだろう。

小谷松：あの頃の練習も四国の時以上に激しいものでしたね。関西学生合唱祭の後、女学院の芝生で暗くなるまでパート練習をやらされたのを思い出す。

礒崎：あの時は最低で、一人ずつ口移しで覚えた。近頃なら易しいのは初見でいける。

杉田：あの頃は臨時記号があるとむつかしかったもん。バスはDoとSol以外が出てきたら難しいなあ。(爆笑)

大崎：演奏会までずっと長井先生にきて頂いたのは、確かにプラスだった。僕たちの気のつかぬ所まで直して頂けたし、特にアンサンブルの面なんか、余程よくなったと思う。

礒崎：同感。先生に来ていただいて何か自信のようなものが出来た。

野田：話は変わるけど、音痴コーラスとか何とかが以前幅をきかせていたのに、グリーがばりばりやり出すと自然に消えてしまったが、やはり自然の成行きかな。ただ大声を出して歌っているだけではつまらんしな。

第一回演奏会

司会：そこで正に記念すべき第一回演奏会になるのですが。

大崎：この時も又大揉めに揉めたんだ。第一、赤字の心配はあるし、資金はなし。(笑声)仕方がないからダンスパーティを開き、資金を稼いだが足らなかったので、学校で貸してもらった。練

習の方は前の時より時間があつたし、一応何とかなっていたので、当日は気が楽だった。

小谷松：でも上出来でしたね。ピエロなんかも評判も良かった様だし。

末次：気の毒なのはギルキー先生やった。(一同肯定)

小谷松：僕はあの時名誉ある楽譜めぐりだったんですが、先生は一生懸命に弾いていらっしやっただのに、コーラスの方はちょっともでてこない。歌いたくてムズムズしてきた。

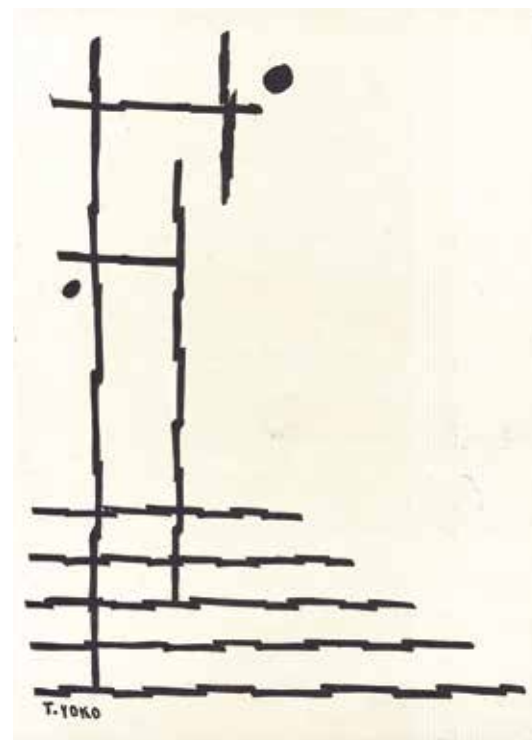
礒崎：はじめからアンダルシア組曲は自信が無かった。

末次：あの時の客はすごかったね。幕が開いてびっくりした。切符が千枚も売れると思うかいな。

野田：演奏会が成功したら、グリークラブを見くびっていた奴が見直したようだ。急にグリークラブとやかましい位になった。

礒崎：無事にすんだ時の気持は何とも云えなかった。一種の虚脱状態やった。一月位何も手につかなかった。

大崎：同感だな。僕なんか指揮者だったからかグッタリしてしまって、あと何もすることがなくなったみたいだった。



第1回定期演奏会プログラム

指揮者交代から今まで

司会：演奏会もすみ、ホッとした時に、大崎さんから現指揮者の小谷松さんにバトンが渡って現在まできているんですが。

小谷松：実は交代があれば早いとは思っていませんでした。だからあわてて急に新しい曲を選ぶやらコンクールの用意をするやら。それに勉強もしなくてはならないし、指揮法だとか、和声だとか、美学だとか。それにこの交代がスムーズに行っただけは演奏会のすぐ後の岡谷での合宿の為だったと思います。

磯崎：あそこは良かった。練習より遊びに行ったようなもんやった。

小谷松：それからコンクールになるんですが、去年は毛色が変わったものと、自由曲に宗教曲を選んだのです。あの時の演奏はうちとしては良いものだったと思いましたが、大崎さん、そうだったんでしょう。下で聞いていられて。

大崎：課題曲が良くなかった。曲自体易しそうで何でもないが、やってみると出来なかったんだな。もっと解釈はオーバーにしないと行かなかった。今のコンクールの状態を見たら、とに角オーバーめにする事だ。うちのは行き方としてサラッとしていたが、コンクールではボリュームは足らん。もっとフォルテがほしいところだった。

小谷松：ええ、僕もそれは意識したんです。特に自由曲はフォルテがなかったと思いましたが、コンクール、コンクールと、コンクールの為に曲を歪めたくなかった。一種のレジスタンスでしょうか。無理にあんなにやったわけです。

大崎：それも一理ある。しかしコンクールという限りある程度は仕方ないだろう。いくら宗教曲だと云っても聖堂でやる時みたいにやっただけで意味がないのと違うだろうか。それからコンクールの非芸術性だけど、メンバーがしっ

かりそういう気持ちをもっていたら、こだわらなくても良いと思う。参加するだけで充分なんだから。

野田：どんなに失敗してもいいから、もっと大胆にすることだ。

小谷松：自由曲の選曲はどうでした。はじめは演奏効果も考えましたが、今の段階では入賞等狙うより、みなさんの為になるものを選んで、宗教曲の中でもポリフォニーのものをとり上げたんですが。

大崎：宗教曲をするなら長井さんに相談したらよいと思う。とに角技術を発揮出来るものを選ぶことだ。メンバーの勉強のために。

杉田：宗教曲をやったら他の曲などスカミたい。

小谷松：宗教曲は良いがポリフォニーは失敗だったと思います。ただどのパートも練習になったことだけは大収かかったです。

末次：そうだ。その気持ちが大切なんや。

今後のグリー

司会：これで今までのグリーをふり返ってみたいんですが、これからのグリーについて話して頂きたいと思います。まず、いつも問題になる原語で歌うことはどうでしょう。

野田：僕は原則として原語で歌うことに賛成だけど、原語でやると時間をくうし、聴く人のためにも半分位は日本語でやったら良いと思う。

杉田：歌う方としては言葉がそう分らずとも気になりませんが、それに歌う方で中身をよく掴んでいたら、原語の方が雰囲気を出すためにかえって良いんじゃないでしょうか。

小谷松：それに外国の歌を日本語で歌うのは大へん難しいし、言葉のムードを生かせたら感じが伝わるのではないのでしょうか。

野田：でも練習時間の問題と歌詞の意味の二つの問題が解決しないことにはな。

司会：レパートリーはどうでしょうか。

野田：とに角、多くの曲に当たることだと思う。そしてその中からだんだんうちに適したものにシボってゆけばよい。

大崎：日本人の作品が、何といっても我々にもっとも近いんだから、新しい作品を意欲的にとり上げるべきだ。

末次：それに外国語大学お手のものの民謡をよい編曲で。

小谷松：今年の七月の演奏会の予定は、大体決めてるんですが、実力、人数等考え合わせ、出来るだけうちのグリーに無理のないものを選んだつもりです。

杉田：僕たち、先日四国の宇和島で合宿してきたのですが、合宿、演奏旅行についてどうでしょうか。

大崎：昨年は無理して高松で演奏会を開いた為、善通寺の合宿は相当な強行で、風邪ひきが続出したりして弱ったが、余り無理をしない方が良さだろう。

小谷松：昨年末の岡谷の合宿では、演奏会の直後であったためでもありましたが、大いにのんびりやり、かえって不平が出たりしましたが、行き方として、練習一本槍でやるか、それとも旅行気分で寛ぐかどっちがいいでしょうか。

末次：時期にもよりけり、その後ですぐステージがないときなんかのんびりとやったらいいんじゃないかな。練習する時はしっかりやらなければならないが。

磯崎：僕もそう思う。合宿のもう一つの意味はチームワーク、よく云うメンタルハーモニーを作ることなんだから、皆がお互いに知り合える機会を作ること大事だと思う。

杉田：合宿をやると、何時も気がつかない魅力が誰にもあることが分りますね。

ユイ言状? めいたもの

司会：では最後に卒業される皆さんにこれから

のグリーに望むことを一口づつお願いします。

大崎：我々のグリーも数年前にくらべれば、大きくなったことはたしかだが、やはり中心になるメンバーが四十人はいなくてはボリュームも出ないし、もの足りないから、せめて六十人位のグリーにしてもらいたい。

司会：四月には、新入生が入ってきますから大いに勧誘します。

野田：僕の云いたいのは、これからグリーも充実してゆくほど、ステージに立つ機会も多くなるだろうが、そういうものばかりでなく、病院の慰問のようなことをたびたびやった方がよいと思う。

司会：昨年演奏会の前にやったようなものですね。

末次：僕は練習にしてもステージにしても、何時も真面目であってほしい。もしステージをあまくみるようなことがあると、昨年の文化祭のようなことになる。

司会：本日は、卒業式を二日後に控えてお忙しい中を、私たちのために色々有意義なお話をして頂きまして大へん有難うございました。最後に、卒業される皆さんのご健康と、社会での御活躍をお祈りし、又今後共、私たちのグリークラブを愛情を持って見守って頂くことをお願いして、この座談会を終わらせて頂きます。(終)

◎おことわり

初めての座談会でいろいろ不備な点があり、又、編集の都合等のため、このようなものになりました。ここでお詫び、おことわりします。

(文責 西川)

(機関紙GLEE第2号 1958年4月より復元)

加藤直樹（昭48 S）

平成21年6月読売新聞大阪版夕刊に「猫爺のいた街」という追悼記事が5日間連続で掲載された。猫爺というのはクリークラブ中興の主要メンバーの一人であった増森邁（昭31D）のことである。筆者は増森先輩との接点は皆無と言ってよいが90年誌刊行に当たってその足跡を残しておきたいと思う。

増森（以下敬称略）は昭和8年（1933）満州に生まれた。ロシア人の多い町で音楽に接する機会が多かったようだ。戦後三重県に引揚げ伊賀上野高校で合唱を経験する。昭和26年（1951）大阪外国語大学ドイツ語科に入学する。

ドイツ語科を志望したのはドイツ歌曲をきちんとした発音で歌いたいという事だったらしい。入学当時、外大はまだキャンパスが下級生の高槻と上級生の上八に分かれていた。高槻、上八それぞれ何人かが集まってグリークラブを復活させる。当初は戦後直ぐから指導していたグリー先輩で外大フランス語科教授の和田誠三郎氏が指揮をしていたが、諸事情があり増森が指揮をするようになった。詳しい記録は残っていないが何回か外大祭（語劇祭）に出演したようだ。

増森が卒業した後でグリークラブの活動が本格化する。昭和31年（1956）には関西合唱コンクールに初出場する。翌32年（1957）は演奏旅行が始まり高松で演奏会を行い、同7月第1回演奏会を大阪ガスビルホールで開催するに至るのである。その第1回演奏会では増森は「コーロ・オルフェオ」というOBグループで出演している。その後何年間は現役の練習に顔を出して、ドイツ語の歌について指導した事もあったようだ。

次に記録が残っているのが昭和51年（1976）

のグリー第20回定演（創部50周年）のOB合同ステージで、清水脩先輩の指揮で組曲「月光とピエロ」、「最上川舟唄」、「大阪の子守唄」を歌った。

その後もグリー定演のプログラムに何回かメッセージを寄せている。最も印象に残る一つは第40回定演（創部70周年）へ次のメッセージである。

昭和28年（1953）初夏、あわや消滅寸前のグリークラブ再建を目指した部員は、上八・高槻両学舎あわせて10名ちょっと、クラブの大先輩、清水脩の前で歌っていた。曲は田舎高校の合唱部員であった私にとって憧れだった「月光とピエロ」ではなく…「希望の島」だった。先輩は苦笑まじりに、しかし私たちの羞恥と絶望感を癒すようにさり気なく手をくわえ、「どうです。少しは聞けるようになるでしょう？」と同席の平澤学長に笑いかけられた。

昭和51年（1976）、現役OB合同の「月光とピエロ」は清水脩を迎えた。第4曲冒頭の3小節目、「これは僕の曲だから、誰にも遠慮なく好きなだけ伸ばします。但し4分の3拍子はどこまでも4分の3、4分の5とも4分の7とも書き直す気はな—い。」先輩はニヤリと笑った。私の目の前には、戦災の跡まだ残る上八の板張りの会議室が蘇り、先輩の棒が霞んで見えなくなってしまった。「先生、先生と言うな。僕は君たちの先輩だ。先輩と呼べ、先輩と！」その夜の打ち上げの清水「先生」は学生そのままにはしゃいでいた。

その創部70周年記念演奏会では林誠氏が現

役OB合同の「月光とピエロ」を指揮した。
当夜増森は後輩に「林誠の合唱団を作りたいんだ」と言ったそうである。

平成10年（1998）の第41回定演を最後にグリーは閉鎖を余儀なくされ、平成19年（2007）には大学も阪大に吸収される。同年9月の「さようならわれらが大阪外国語大学」集会で増森は全員合唱の学歌の指揮をした。

増森は平成7年頃から大阪市淀川区十三地区に移り住み福祉関係の施設で仕事をしていたようだ。飲み仲間などを集めてアマチュアの「八十島混声合唱団」を組織して練習を続け、地域の教会でヨハン・シュトラウス「美しき青

きドナウ」に歌詞を付けた「淀川賛歌」を披露したり合唱祭などにも出演した。

グリーOB合唱団（大阪）ともコンタクトを続け練習場所を紹介したり、平成16年（2004）ほぼ同期の佐原真（昭32D）の追悼演奏会ではドイツ語の歌数曲を指揮した。

グリーOBが主催した平成18年（2006）創立80周年記念演奏会や平成20年（2008）11月兵庫芸術文化センターでの『『山に祈る』を唱う』演奏会にも出演したが、病を得て平成21年（2009）2月合唱を友とした75歳の生涯を閉じた。葬儀参列者はAve Verum Corpusを歌って送った。

第2回定期演奏会から現役活動の終了まで

グリー再建当初から活発な活動 (第2回～第9回定演)

昭和32年(1957)に催された第1回定期演奏会は大きな成功を収めたが、これは、関西合唱連盟理事長の長井齊先生が記述しているように、「創始以来多年、清水脩氏やその他の先輩たちによって築かれた伝統」があったからに他ならない(第2回定期演奏会のプログラムから引用)。この外語グリーの伝統と名声もあり、当時から様々なステージで活発に演奏活動をおこなっている。たとえば、NHK(昭和32年(1957)3月)、ラジオ南海(松山市)(昭和33年(1958)2月)、読売テレビ(昭和33年(1958)11月)など放送局での出演、また、大阪府立大学グリークラブ賛助出演、天理大学祭出演、神戸外大との交歓演奏会など他大学との交流と、昭和32年(1957)～34年(1959)のわずか2年間で14回の演奏活動をおこなっている。

また、関西合唱コンクールにも積極的に参加し、昭和34年(1959)の第14回関西合唱コンクールでは、大学の部で、関西学院グリークラブ、同志社グリークラブ、京都大学男声合唱団に次いで第4位に入賞している。

もうひとつ、初期の定期演奏会の特徴として、外大で教鞭をとっていた外国人の先生方の出演が挙げられる。

第1回(昭和32年(1957)7月)と第3回定期演奏会(昭和34年(1959)7月)に出演したのはウィリアム・E・ギルキー先生で、ジュリアード音楽院を修了したピアニストだった。神

戸のカナディアン・アカデミーでピアノを教えるかたわら外大でも客員教授として、兼修外国語英語(会話)などの教鞭をとり、「その美しい英語で学生に親しまれている」と紹介されている(第3回プログラムより)。第1回定期演奏会では、キューバの作曲家エルネスト・レクオーナ作曲による「アンダルシア組曲」から2曲の合唱のピアノ伴奏をしている。また、第3回定期演奏会では、外大英語学科4年生の志水英彦さんのバイオリン・ソロ(ベートーベン作曲ヴァイオリン・ソナタ 第5番へ長調 作品24《春》など)のピアノ伴奏者として出演している。

もう一人がオースチン・ファリシー先生で、第5回(昭和36年(1961)7月)と第6回の定期演奏会(昭和37年(1962)7月)に出演している。ファリシー先生は、昭和36年(1961)に大阪外大に赴任し、客員教授としてSemantics and Communicationなどを教えている。オックスフォード大学時代にハープシコードを本格的に学び、来日前は毎年米国でリサイタルを開催するほどの腕前だった。第5回定期演奏会のプログラムには、「ファリシー先生は、外大の近くにある官舎に一人で住んでおられたため、多くの学生が何かと訪れ(中略)先生は常に学生の中に舞い降りて来られ、学生と共に飲み、食べ、語り、そして笑う優しいアメリカ人なのである」と紹介されている。

ファリシー先生は、第5回定期演奏会でハープシコードの演奏(バッハなどクラシック曲)を、続く第6回定期演奏会ではギターの弾き語り(フォークソング)を披露している。

この時期、悲しい出来事が生じた。当時のグ

リークラブのメンバーであり、山岳部のメンバーでもあった村上泉（昭41F）が昭和39年（1964）春に山で遭難したのである。彼の突然の死を悼み、急遽、第8回定期演奏会（昭和39（1964）年12月）の最終ステージで清水脩作詞作曲の男声合唱組曲「山に祈る」を演奏することとなった。「山に祈る」は、山で遭難した若者の手記と、我が子をなくした母親の深い悲しみとを、合唱と朗読で演奏するものである。村上泉のお母様の前で、外語グリーのメンバーは「山に祈る」を、涙をこらえつつ懸命に演奏した。「村上君のお母さんの心境はもとより、私達部員一人ひとりの深い悲しみとは通じるものがあります。そういう意味で私達は、村上君の冥福を祈りつつ、心で歌っております」と、その時のプログラムに外語グリーのメンバーの気持ちが綴られている。

外語グリーは演奏会を重ねるにつれて成長していった。大正15年の外語グリー創部以来力強い支援者であった長井齊先生は、第9回定期演奏会のプログラムで以下のように、外語グリーの成長を記述している。

特に本年度の演奏には、種々の困難な曲折を経て、漸く本来の姿を見出したかのような落ち着いた音声が響き、大正末期、外語グリーとして発足以来永年にわたってその成長を見守ってきた筆者としての喜びは、ここまで努力を重ねた部員諸君のそれに劣るものではないことを申し述べたいのです。

第1回演奏会から活発におこなっていたのが、地方への演奏旅行である。昭和32年の高松から始まって、昭和44年の岐阜、一宮への演奏旅行までの13年間で、四国、中国、東海を中心に19都市で29回の演奏旅行をしている。とくに、四国の宇和島には昭和33年（1958）、34年（1959）、35年（1960）と3年間続けて訪問し、

宇和島合唱団と合同で演奏会を催すなど、宇和島合唱団の方々と親交を深めている。宇和島には、その4年後の昭和39年（1964）にも訪れているが、この時は大阪女子大学合唱団、宇和島合唱団とともにジョイントコンサートを実施している。大阪女子大学合唱団とは、その前年の昭和38年（1963）にも、名古屋、新宮、和歌山で小学校を中心に5回の演奏会をしている。

この時期の終盤を飾る一大イベントは、大先輩である清水脩氏の指揮のもとで、「月光とピエロ」を演奏したことであろう。昭和41年（1966）3月、東京文化会館小ホールにおける東京外国語大学グリークラブとの合同演奏であった。東京外大との合同演奏会はこれが第1回目であり、清水脩氏は、そのプログラムのなかで、「この度、東京外語大との初めてのジョイントコンサートで指揮することとなり、感無量である。今後毎年これを続けてほしいと願っている」と述べている。実際、東京外語大とのジョイントコンサートは、毎年とはいかなかったが、平成7年7月の第7回まで開催されることとなる。

黒人霊歌の時代 （第10回～第20回定演）

第1回から第9回定期演奏会まで必ず演奏されたのが黒人霊歌であった。外語グリーのメンバーにとって、大先輩である清水脩氏の作品と並んで、黒人霊歌は十八番の曲目であった。しかし、それまでの黒人霊歌のステージは第2あるいは第3ステージで5～6曲演奏されており、決して最終ステージの演目にはならなかった。

しかし、節目となる第10回定期演奏会（昭和41年（1966）12月）では、黒人霊歌が最終ステージの演目となり、しかも9曲演奏している。黒人霊歌が演奏会の主役となったのである。黒人霊歌はアカペラの曲が多く、従来は次の演奏の前に音叉あるいはピアノで音をとることが

一般的であった。しかし、このステージでは曲間に音叉などで音をとるのではなく、曲間にピアノで短い間奏曲を弾き、その最後の音から次の曲に入るといった形をとった。間奏曲の作曲とピアノ演奏はセカンドテナーの塩見憲一（昭44E）が担当した。そして、ピアノの間奏曲の時に、奴隷であった黒人たちの苦しみを表す詩を朗読したのである。

嗚呼、私は、この世に生まれてきたのは
奴隷の鎖を引きずらんがためか
神のつくりたもう恵みにもあえず
苦難苦役と苦痛の中を
戒めの年月は流れ
ただ自由の身にならんことを思い……
神よこの世に自由はないのか。

つまり、この最終ステージでは、まさに演劇やミュージカルのように最初から最後まで途切れることなく黒人霊歌が演奏され、英語で歌う黒人霊歌の魂を少しでも観客に伝えようとしたのである。

その後、第11回（7曲）、第12回（11曲）、第13回（8曲）、第14回（8曲）、第15回（13曲）、第16回（7曲）、第17回（8曲）と8年連

続で黒人霊歌を最終ステージで演奏ししている。第18回と第19回の定期演奏会では、黒人霊歌は第2、第3ステージで4～5曲の演奏となったが、第20回定期演奏会（昭和51（1976）年12月）では、再び8曲の黒人霊歌をナレーション付きで演奏している。

昭和48年（1973）夏に林誠先生に出会ったこともこの時期の特筆すべきことといえよう。この時の様子を樽井一仁（昭50年R）は以下のように述べている。

音大生をヴォイストレーナーとして採用したいので紹介してほしいとの依頼に対して、林先生を紹介して下さいました。上田氏（昭和51年ロシア語学科卒）が林先生に会って、学生を推薦してほしいとお願いしたところ、林先生は「私が引き受けましょう」と瓢箪から駒のような話になりました。昭和48年の夏休み後最初の練習から、林先生の指導が始まりました。高い音が出るというだけでテナーを歌っていた同級生が、その人の一番美しく歌える声域はベースという話で、ベースに転向したという逸話もありました。林先生の指導を受けてから外語グリーは大きく変貌していったと感じています。



創部50周年記念演奏会・第20回定期演奏会での合同演奏（指揮：清水脩）

この時期、もうひとつ特筆すべきことがある。創部50周年記念の第20回演奏会（昭和51年（1976）12月）で、清水脩氏の指揮のもと「月光とピエロ」を演奏したことである。しかも、OBとの合同演奏であり、総勢80名を超える大合唱となった。清水脩氏は、そのプログラムの中で、「今夜、外語グリーの歴史をつづる多くの人たちが一堂にあつまり、外語グリーを愛してくださるかたがたとともに、男声合唱を満喫することができる。その喜びは何物にもたえようがない」と述べている。

大阪外大の女声コーラス部が初めて学外で演奏会をおこなったのもこの時期であった。創設（昭和39年）4年目の昭和43年（1968）11月に大阪府立厚生会館で演奏会を開催することとなり、外語グリーはこの演奏会に賛助出演し、大中恩作曲男声合唱組曲「僕たちの挨拶」を演奏している。また、最終ステージでは、女声コーラス部との混声合唱で「荒城の月」や「この道」などの日本の歌を演奏している。

上本町から箕面キャンパスへ （第21回～第30回定演）

ヴォイストレーナーとして外語グリーを指導していた林誠先生は、昭和51年（1976）9月の神戸商科大学などとのジョイントコンサートにおける合同ステージ「オペラ合唱曲集」で初めて指揮をとったが、翌年の第21回定期演奏会（昭和52年（1977）12月）でも客演指揮者としてステージに登場することになる。清水脩作曲の「山に祈る」が定期演奏会における最初の指揮であった。インタビューでなかで、林誠先生は「山に祈る」を振るにあたって、「言葉では言いにくいのですが、ぼくのイメージが出せ

ればと思っています」と述べている（同定期演奏会プログラム）。

第23回定期演奏会（昭和54年（1979）12月）の年に大きな変化が起こる。長年住み慣れた外大の学舎が上本町八丁目から箕面に移転したのである。ある意味では、多くの学生にとって寂しさを感じる学舎の移転ではあったが、清水脩氏が、「新校舎に防音設備付きの練習場が出来たということ、何をおいてもまず、よかったなと思う」（第23回定演のプログラム）と寄稿しているように、グリーにとっては良い面もあった。

第26回定期演奏会（昭和57年（1982）12月）で、6年ぶりに現役・OB合同演奏が実現する。練習時間の少ないOBたちのためか、演奏曲目は、「U Boj」、「Didn't My Lord Deliver Daniel?」などの愛唱歌であった。また、第28回定期演奏会（昭和59年（1984）12月）でも、黒人霊歌8曲のうち、馴染みのある4曲（「Soon Ah Will Be Done」など）がOBとの合同演奏であった。

合同演奏が増えた背景に、部員数の減少がある。箕面キャンパスに移転して練習場の環境は好転したものの、部員数が減少傾向にあったのである。（下図）。



部員数の減少傾向にあっても、グリーは活発な活動を続ける。第21回定期演奏会（昭和52年（1977）12月）以降第29回定期演奏会（昭和60年（1985）12月）までの8年間に、「東西外国語大学Joint Concert」、「大阪四大学交歓演奏会」をはじめ、他大学とのジョイントコンサートを15回、大阪府合唱祭などイベントへ

の出演を5回おこなっている。8年間で29回のステージ、つまり毎年平均して3.6回のステージをこなしていたことになる。

この時期、再び悲しい出来事が起こってしまう。昭和53年（1978）1月にセカンドテナーのパートリーダーであった恒川正義（昭54C）が突然亡くなったのである。第22回定期演奏会（昭和53年（1978）12月）の部長であった岸本保（昭54C）はそのプログラムの冒頭で、「幾多の難事の中でも部員一同を悲嘆の淵に投げ込んだ」と深い悲しみを表している。

創部60周年記念の第30回定期演奏会（昭和61年（1986）12月）では、「月光とピエロ」をOBと合同で演奏している。創部50周年の第20回、55周年の第25回、そして60周年の第30回と大きな節目には「月光とピエロ」を演奏するという外語グリーの伝統が生まれたのであった。

部員のさらなる減少そして閉部へ （第31回～第41回定演）

第31回定期演奏会（昭和62年（1987）12月）の時の部員数は28名と、50～60名を誇っていた昭和40年代初頭までに比べると大きく減少していた。それでも、清水脩作曲「アイヌのウポポ」や信時潔作曲「沙羅」と意欲的なプログラムを組んでいる。その後、第32回、第33回、第34回定期演奏会でも、部員数は20名台で推移しているものの、多田武彦作曲「雪明かりの路」「緑深い故郷の村で」「雨」や新実徳英作曲「やさしい魚」など意欲的に取り組んでいる。

創部65周年にあたる第35回定期演奏会（平成4年（1992）1月）では、5年ぶりにOBとの合同演奏で林誠先生の指揮のもとで、「月光とピエロ」を歌っている。この時の部員数は若干増加して29名であった。しかし翌年の第36回定期演奏会（平成4年（1992）12月）では部員数は20名を切ってしまう、第37回定期演奏会

（平成5年（1993）12月）にはついに9名となってしまう。それでも、部員は懸命に定期演奏会に向け練習を重ね、ヴォイストレーナーの林先生も、「長年、多人数による男声合唱独特の響きに慣れ親しんでいた団員たちであるが、今年はいわば、ダブル・クォルテットで、より精緻な重唱の創造に挑んでいる」と応援の言葉を寄せてくださっている（同演奏会プログラム）。

第38回定期演奏会（平成6年（1994）12月）では、部員数はわずか5名とベース（2名）以外は1人のパートとなってしまう、1人でも欠けるとコーラスにならない状態に陥ってしまう。しかし、定期演奏会を何としてでも続けたいとの部員の思いは強く、この年は、大阪外国語大学のTEMPESTとのジョイントで演奏会をおこなっている。最終ステージの大中恩作曲「遙かのを」はTEMPESTとの混声合唱であったが、第2ステージでは黒人霊歌7曲を単独で演奏している。第39回定期演奏会（平成7年（1995）12月）の時には、部員数も7名と若干増加したこともあり、単独で演奏会を開き、最終ステージで8曲の黒人霊歌を演奏している。

ちなみに、TEMPESTは、平成7年（1995）時点で13回の定期演奏会を重ねてきた合唱団で、当時の部員数は13名であった。TEMPESTは大阪大学となった今日でも活動を続けており、平成30年（2018）1月には第36回定期演奏会を迎えている。

すでに述べたように、第10回定期演奏会（昭和41年（1966）12月）で初めて黒人霊歌が最終ステージで演奏されたが、それ以来、第40回定期演奏会（平成9年（1997）12月）までの31回の定期演奏会のうち、実に26回（31回のうちの83.9%）にわたって黒人霊歌を最終ステージの演目としているのである。特に、部員数の減少傾向が目立ってきた第30回定期演奏会以降は、TEMPESTとのジョイントコンサートを除いて毎回、黒人霊歌が最終ステージで歌われて

いる。

平成2年（1990）12月の第34回定期演奏会のプログラムに興味深いアンケート結果が掲載されている。「黒人霊歌を定演の4ステで演奏することについて」という問いに対する部員の反応である。「必ずしも4ステにこだわる必要はない」という意見もあるが、多くは黒人霊歌を最終ステージにもってくることに肯定的であることが窺える。

◎外語グリーの象徴である。誇りを持っている（3回生）

◎部員全体の中にNegroを一つの高い位置に考える空気があり、「他とは違う」という思いを持っているため、気合が入り自信をもって歌える（3回生）

◎ニグロはメッセージを伝える歌だと思いで聴衆に対し最も印象深くなくてはならない。普通は最後に聞いたものが一番印象に残るはずなので4ステにニグロを聴かせ、客が感動をかみしめながら、あるいはたった今聴いた曲について深く考えながら家路について欲しい。もっともたとえ1ステに持ってきてても最後まで印象に残るようなニグロを演奏すべき（2回生）

創部70周年にあたる第40回定期演奏会（平成9年（1997）1月）の時の部員数はわずか8名であった。しかし、彼らは70周年記念演奏会を必ず実行したいとの強い意欲をもって、精力的にOBにアプローチをおこない、最終的に80名を超える大合唱で林誠先生の指揮のもと「月光とピエロ」を演奏することができた。林誠先生や高田博行先生（当時のグリークラブ顧問）の強いサポートがなければ実現しえないことであった。当時のメンバーであった松尾年展（平12V）は、本誌への寄稿文で、以下のように記述している。

今だから正直に書くと、70周年定演でOB合同演奏された清水脩の「月光とピエロ」は、大阪音大で行われた前日リハーサルの音（林先生指導）が私が外語グリーにいて一番いい音だったと思うし、生涯、忘れることができない。私はあの日、遅れてくる先輩方を案内するために教室のドアを開けたままで、廊下でずっと立って待っていたのだった。1曲目「月夜」の出だしを聞いた瞬間にその音のすばらしさに涙が止まらなくなった。外語グリーにもし「外語サウンド」なるものがあるとすれば、私はあの時の音がその1つにあたると思う。

プログラム

第1ステージ	<ul style="list-style-type: none">* 全国高等学校音楽コンクール課題曲集より 「めばえ」 作詞 みずかみかづよ 作曲 木下秋子 「未来」 作詞 谷川俊太郎 作曲 高崎みどり* John Rutter作品集より For the beauty of the earth 作曲 John Rutter 編曲 松尾年展 The Lord bless you and keep you 作詞 P.S. Pierpoint 作曲 John Rutter 編曲 松尾年展* Negro Spirituals より Little David, Play on yo' Harp I Got Shoes The Battle of Jericho Little Innocent Lamb 編曲 M. Bartholomew (2カ)
第2ステージ	<p>OB合唱団 参上!! 〜グリークラブ発唱曲集〜 指揮：河原 敏</p> <ul style="list-style-type: none">「秋のピエロ」作詞 堀口大祐 作曲 清水 脩 (男声合唱組曲「月光とピエロ」より)「希望の島」 作曲 H.ジョーンズ「最上川舟唄」 山形県民謡 作曲 清水 脩Ride the Chariot (黒人霊歌より)
第3ステージ	<p>本演指揮：林 誠</p> <p>男声合唱組曲「海鳥の詩」 作詞 夏村 辰雄 作曲 広瀬 量平 オロロン島/エトピリカ/海鶴/北の海鳥</p> <p>本演ピアノ：中津 孝司</p>

グリーの部員数の大幅な減少は、外語に入学する女子学生の増加と関係がある。文部省学校基本調査によると、女性の大学進学率は昭和35年にはわずか2.5%にすぎなかったものが、平成に入って以降、15.2%（平成2年）、22.9%（平成

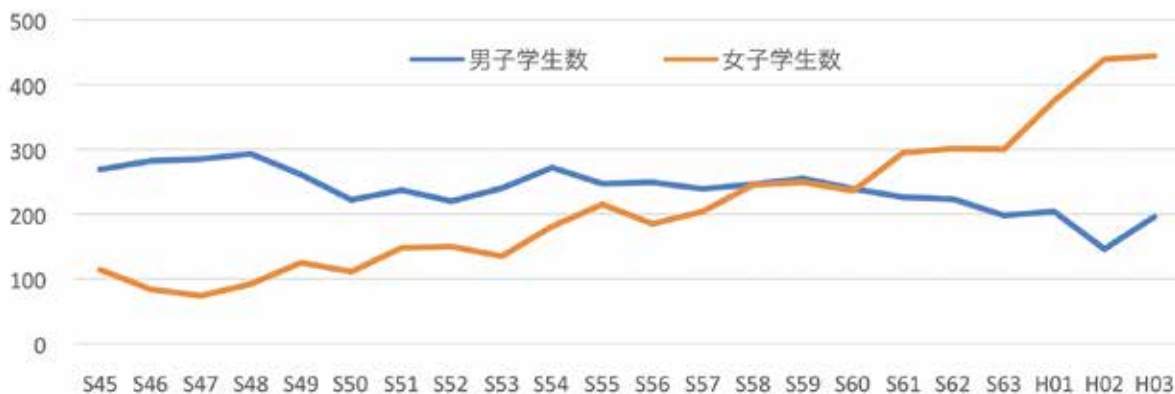
7年)、31.5% (平成12年) と急速に増加している。しかも、多くの女性が人文系の学部を選んでいる。大阪外国語大学もその例にもれず、女子学生数が大幅に増え、昭和60年には男女学生数がほぼ同数となり、翌年以降、女子学生数が男子学生数を上回っていく。(下図)

第41回定期演奏会 (平成10年 (1998) 1月) が現役最後の演奏会となった。現役メンバーはわずか2人。それでも彼らは定期演奏会を実行した。しかし、2人では合唱にならない。そこで、河原敬 (昭57E) など10数名のOBが駆け付け、すべてのステージをOBとの合同合唱という形で定期演奏会を無事終了したのである。しかし、この演奏会が現役最後の演奏会と

なってしまう。最後の定期演奏会の最終ステージは、林誠先生の指揮による広瀬量平作曲「海鳥の詩」であった。

林誠先生は、グリークラブが43名の部員を擁していた昭和48年頃にヴォイストレーナーとして指導を始め、以来、部員数わずか2名で閉部に至る平成10年1月までの24年間にわたり、グリークラブを指導したことになる。しかし、林誠先生との縁はこれで終わらない。前年の創部70周年記念演奏会における「月光とピエロ」の合同演奏が契機となり、OB合唱団が誕生し、引き続き、林誠先生にお世話いただいている。林誠先生との関係はますます発展していくのである。

大阪外大学生数推移



宇和島合唱団との絆

愛媛県の南部 (南予地方) に闘牛で有名な旧城下町がある。仙台藩伊達家の分家であった宇和島市である。大阪外語グリークラブは昭和33年 (1958) 2月27日この地で演奏会を行っている。当時のガリ版刷りプログラムが残っており会場は宇和島幼稚園 (城南中学校横) となっている。この時の主催および賛助出演が宇和島合唱団である。グリーは山田耕筰作品4曲、黒人霊歌4曲、組曲「月光とピエロ」全5曲を歌って

いる。宇和島合唱団の演奏曲は春の歌3曲 (「待春」, 「ガラスの蝶々」, 「祭と花と娘」), 「かやの実」, 「麦秋」, 「シャンソン讃歌」であった。合同演奏は「雪の降る街を」となっている。前年昭和32年 (1957) 春の演奏旅行は香川県の高松市で外大同窓会香川支部、四国新聞社、高松市教育委員会の後援により香川県公会堂で行われている。その流れで翌年は同じ四国の愛媛県宇和島市となったのかも知れない。この演奏会は

成功裡に終わりグリークラブは宇和島合唱団の歓待を受けた。指揮者小谷松明弘（昭34E）は雑誌『合唱界』で次のように述べている。

僕たちの合唱団は今春2月末、合宿のため、はるばる四国宇和島まで出かけ、当地の宇和島合唱団に大変お世話になり、楽しい数日間の合宿を終えてきました。練習の間には同合唱団とゲームに興じたり、隠し芸を披露したりして緊張した練習にも潤いができ今までにない愉快的合宿でした。初めに30人位の小さな合唱団を予想して行ったところが、40人近くのメンバーを持ち、十余年の歴史を誇る合唱団だと知った時の驚きは大変なものでした。

いつも関西の合唱界だけを見、地方の小都市にりっぱな組織をもち、着実な活動をしている合唱団があるなどと考えたこともなかったからでした。そして改めて全国に拡がった合唱に対する情熱がいかに根強いものか、認識したものでした。

最後の夜には、交歓演奏会を持ち、地元の熱心な合唱ファンの前で、合同演奏会をした時は、あの「雪の降る町を」の美しい音の動きの中に合唱で結ばれた友情のほのぼのとした温かさを心いっぱい感じました。有意義な合宿だったと思います。

とかく興行的に傾く学生合唱団の動きを見るにつけても、僕たちの今度経験した合宿旅行こそ、真に学生合唱団のあるべき道ではないかと、深く考えさせられました。

このような有意義で楽しい合宿と演奏会をしたグリーは翌昭和34年（1959）、翌々年昭和35年（1960）も宇和島を演奏旅行先に選び合同演奏会を行う。ジョイントの相手は勿論宇和島合唱団で、ちゃんと印刷されたプログラムがある。

宇和島合唱団の指揮者は松影通男、マネージャーが上月皎で、外語グリー指揮者は昌子明夫（昭35D）、部長が杉田敬治（昭35IN）、マネージャーが松尾充哲（昭36IN）であった。

演奏曲目は宇和島合唱団が組曲「月光とピエロ」（混声）、中田喜直童謡集（女声）、外語グリーが黒人霊歌4曲、組曲「枯れ木と太陽の歌」、組曲「毛銭の三つの詩」など盛り沢山で合同演奏は「ウィーンの森の物語」となっている。

この年昌子明夫と佐藤文隆（昭37S）は宇和島合唱団の演奏会に招待されている。少し長くなるが昌子の『こだま』1959年12月号への寄稿を転載する。

又さん

演奏会への御招待本当にありがとうございました。費用まで負担して頂き、まるで歌用族？みたいなものでしたね。実は、行く途中も台風の前触れがあり、演奏会も、僕たちの船も心配でしたね。でも当日の夕刻から雨が小降りになった時は、記紀の話のようでしたね。これも皆さんの徳の到る所でしよう。しかも、翌日のレクリエーションは、上天気になりますしね。楽しく過ごさせて頂き、感謝に堪えません。

演奏の批評は私如きものには出来ませんが、混声、男声、女声合唱にそれぞれの性格が出ていて、それが松影先生のタクトから溢れ出て非常に微笑ましく感じられた。たとえば叱られるかもしれませぬね。でも楽しい雰囲気でした。マナーが控えめで真面目なもの僕等には全く気に入ってしまいました。賛助出演と言うより、むしろ、合同演奏と言っても良い松山放唱も、発声等の基礎訓練の身についた立派なコーラスだったと思います。

ただ、聴衆としての僕を少し疲れさせたように思います。リサイタルと云えば、その

練習と事務だけで皆さん手一杯なのに、尚、その機会に西条合唱団と手を結ぼうとなされた計画は尊敬に値します。同行した佐藤君も今度の御招待で学んだ事を生かしてくれると思います。

松影先生の御指導と役員の方々の運営企画が、又さんの合唱団を成長発展へ方向付けするのを、一ファンとして信じ、又、そうある事を祈ります。

最後にもう一度御招待のお礼を述べさせて頂きます。有難うございました。

プログラムによると宇和島労音3月例会 大阪外国語大学グリークラブ演奏会となっている。この年宇和島合唱団は賛助出演で指揮者は前年と同じ松影通男、伴奏が宇都宮啓子、外語グリー指揮者は松木正顕（昭36S）、部長が南野均（昭36F）、マネージャーが佐藤文隆（昭37S）であった。

演奏曲目は外語グリーが組曲「柳河風俗詩」、ロシア民謡5曲、組曲「雪と花火」、宇和島合唱団は遥かなるサンタルチア、理想、バルカンの星の下にと中田喜直童謡集8曲。中田喜直童謡集はなぜか松木正顕が指揮をしている。

それから4年置いて1964年再度宇和島を訪れる。今度は大阪女子大学合唱団を加えた3団体のジョイントコンサートであった。外語グリーと大阪女子大学合唱団は春の演奏旅行を香川県善通寺小学校での演奏会でスタートし、他の香川県の2小学校（豊原、本島）でも演奏会を行った後、宇和島に入った。宿泊先は天理教団宿舎だった由。

外語グリーの指揮者は黒田健生（昭40F）、部長が藤太（昭40F）、マネージャーは西川哲朗（昭40IN）と山原豊（昭41S）、宇和島合唱団は指揮者が三谷和子に代わっている。

当時1回生であった岸田勝昭（昭42IN）はその時合同演奏した「アムール河の波」の歌詞（日本語）とメロディーを70数歳になった今でも鮮明に覚えていると言う。

この1964年合同演奏会で両団の公式な交流は途絶えた。その間1960年7月の外語グリー第4回定期演奏会（大阪市産経会館）には宇和島から2名の団員の方にご来場いただき打ち上げにも参加していただいている。また何年の事かは分からないが宇和島合唱団の方が来阪された時に当時の団員が市内を案内したという思い出が寄せられている。

それから50年ほどした2011年11月大阪外



1960年3月9日 宇和島労音例会 於宇和島公会堂 賛助出演の宇和島合唱団と記念撮影

国語大学グリークラブ創部85周年記念演奏会（神戸松方ホール）の受付を担当していた西尾武（昭35R）は神戸市在住の宇和島合唱団OGに声を掛けられた。お互いに細かい事についての記憶は無かったが当時の全体的な思い出は蘇ったと思う。

宇和島合唱団は現在も旺盛な活動を続けておられる。ホームページを見つけメールのやりと

りをして当時の合唱団と同じ団体であることが確認出来た。文中の『こだま』への寄稿は2018年1月に現団長の山崎貴史氏から提供を受けたものである。宇和島合唱団の今後益々のご活躍をお祈りする。

編集註：大阪女子大学（大阪府立）は2005年に大阪府立大学に統合された。

大阪外大女声コーラスの思い出

村本佳恵子（平3 IT）
アンサンブル葉音（大阪外大女声コーラス部OG）

創部90年おめでとうございます。前回の「ベージュ(米寿)色」コンサートは記憶に新しいですが、改めて90年という長い年数に感銘を受けています。

私達女声コーラス部は1976年（昭和51年）にクラブとして発足し、2006年（平成18年）に第28回定演を最後として休部状態となりました。グリークラブは私達より長い歴史を持ちさらに人数も多かったのですが、ほぼ同時期頃に休部となりました。しかしながら卒業生がOB合唱団を立ち上げて練習と演奏会を途切れさせることなく続け、数えて90年を迎えられました。現役生がいる時から長く指導してくださっている林先生はもとより、活動を始められた方、参加された方、それを見守ってこられた方、全ての関係のみなさまに頭が下がる思いです。

私自身も大学を卒業して30年近く経ち、学生生活は遠いものとなりました。それでもいまだにグリー、女コラとの出会いや活動で鮮明に記憶していることがあります。

グリークラブと女コラが合同で中庭で歌っていた新歓ミニコンサート。興味を引かれ入部の



きっかけとなりました。練習、合宿、演奏会、楽しいことだけではなくつらいこともありました。それでも歌うことが好きなメンバーでよく歌いよく話し、それぞれが各自の役目を果たし熱心に練習し、演奏会という形を作り上げていきました。普段は女性ばかり20人ほどの合唱団なので、年に何回かグリーと活動を共にして人数が増え低音が加わると全く違う合唱団で歌うようで楽しみでした。

私が入部した年は東京外大との合同演奏会があり、それに向けて7泊8日の合同合宿が行われました。東京と大阪の間で、ということでグリーと女コラ50人くらいでバスを貸し切って長野の天竜川近くで合宿をしました。行きは途

中下車して妻籠や馬籠観光をしたりしてまるで修学旅行のようでした。けれど宿に着くと一転、グリー、女コラそれぞれで連日の練習、途中からは東京外大が合流して一日中歌ってばかり。体調を崩して練習に参加できずに部屋で休んだりもしましたが、夜のレクレーションに参加するとやっぱり歌ってしまいます。歌三昧のトンでもない8日間でした。さすがに帰りのバスでは疲れ果ててぐったりで、まるで体育会系のクラブだと実感したのを覚えています。

普段は演奏会へのお手伝いとしてアナウンスをしたり、入り口でチケットをちぎったり、ステージマネージャーとして舞台袖で働いたりしました。コンサート終了後は打ち上げにも同席し、違う合唱団という感じではなく、身内感覚でした。ことあるごとに声をかけあい、協力して主にコンサート運営に取り組み、また語科に關係なく先輩後輩や仲間として大学生活を過ごしました。同じ語科ならなおさら、そうでなくても大学の教室にグリーや女コラのメンバーがいれば安心でき、テキストや授業ノート、テスト対策で頼りにしたり頼られたり。大学での思い出の多くがクラブ中心で、いまだに付き合いがあるのもクラブのメンバーです。

女コラは5年ごとに合同演奏会を開くたびOGも参加していましたが、大学卒業後も常に歌いたいと数人で合唱団を作りました。もう20年以上前のことです。少しずつでも歌い続けてきたことでグリーOBの方からお誘いを受けてコンサートに賛助出演させてもらったり、阪大との統合に伴う外大としての最後の演奏会にもお声をかけてもらったりしました。どちらのメンバーも大学在学年が違うため大学生活を一緒に過ごしたわけではありませんし年齢差もありますが、OB、OGとして共に歌うと現役の大学生に戻ったような気分になります。互いの持ち歌、得意な歌、何度も演奏会で聴いた曲、そして学歌とクラブソング、バーシティ。音楽はタイムマシンです。聴くとその時に戻ります。その時代その時代のメンバーが歌い継いでクラブとして年数を重ね、卒業生が今それをつないでいます。

さらに10年経つと100周年ですね。私達女コラもその先を見たいと思います。気分は常に大学生です。またあのときのようにお誘いいただき一緒に作り上げるお手伝いできればうれしいです。さらなる活躍、また発展するよう、お互い前へ進んでいきましょう。

大阪外大女声コーラス部に賛助出演

浜崎慎吾（昭44 R）

東京オリンピックの翌年1965年4月、外大に入学したのは420人（1部）。内訳は男290人、女130人で女子大生が急増する兆しが母校には表れ始めていた。彼らが4年生になった時に、発足して数年が経っていた女声コーラス部が学外での初めての演奏会を行った。場所は森之宮にあった府立厚生会館小ホール。女声コーラス

部18名のうち7名が指揮者の番野三枝子たち4年生で文字通り部を牽引していた。初めての学外演奏会を成功させるには、集客と混声合唱も考慮したのか、グリークラブの4年生に対して熱心な働きかけがあり、結果としてグリークラブのメンバー43人の内13人が賛助出演することになった。

グリーも内8人が4年生であり賛助出演の主体だった。その証拠が混声合唱6曲（日本の

歌)の3曲の編曲を指揮者安藤雅之がやり、勢いとまらず、ソロもやり、部長梶江靖史は最初で最後の指揮を引き受けるという力の入れようとなった。もちろん女声コーラス部自体が直前に泊まり込み合宿を行い演奏会当日に備えた。女声コーラス部、グリークラブそれぞれ単独ステージもありグリー単独ステージは43人のフルメンバーが出演した。演奏会進行の司会は、その後グリーの演奏会の朗読で活躍することになる当時2年生の板村(加藤)道子。

あれから50年経った現在、当時のこと、特に当日の演奏会の模様は実は誰ももうあまりよくは覚えていない。周辺記憶がかえって鮮明で、若干言及すると、グリーは、この演奏会の直

後、翌週の火曜日が第12回の定演だった。混声合唱のための練習は、だから一部のメンバーにとってはかなりの負担だった。でも文字化できる記憶は殆んど失せたのに、あのとき覚えた混声合唱の「荒城の月」のベースパートなどは、今でも歌えるから不思議である。演奏会の本番と練習で11月と12月のはじめが超多忙だった4年生は、実はもう一つ最後の難関が待ち構えていた。当時は成人の日の前日が卒業論文の締切日だったのだ。グリー定演の翌日12月4日から約一か月は、大学受験直前以上に必死で、正月三が日返上で卒業論文の執筆に追われたという本筋とは関係のない記憶が今でも悪夢を観るほどに残っている。



1968年11月28日の合同ステージ

グリー有志NHK教育テレビに声の出演

板村哲也(昭44S)

大学4年の時(1968年)グリーの有志(脚注)でNHK大阪放送局にスペイン語の歌を録音に行った。イスパニア語の山田善郎先生(後に大学第7代学長)がNHK教育テレビのスペイン語講座(火曜と木曜の午後06:00~午後06:30)をしておられた時のことである。

録音場所はコンサートグランドピアノが確か3台鎮座していた大きなスタジオで、初めて経験する放送用録音に少なからず緊張した。曲はCastilla地方の歌「LOS PASTORES」。リハースルは1、2回だったと記憶するが、リハースル中に指揮者(故安藤雅之氏(昭44E))が楽譜をめくるかすかな音がマイクに入り、録音担当者から演奏にストップがかかり、この雑音

を出さないようにと注意された。すごく敏感なマイクだなといたく感心したことを覚えている。その後すぐ本番で、思っていたよりあっけなく録音が終了。一人1,000円（税引き後900円）のギャラを頂いた。臨時収入として嬉しかったが、それよりも歌を歌ってお金をもらえたことが嬉しかった記憶がある。このお金を何に使ったのかは覚えていない。

曲は1968年5月14日（火）の番組「スペイン語講座『スペイン音楽』」で使用され、画面にテロップで「大阪外国語大学グリークラブ」の名前が出た（映像はなし）。これもまた嬉しかった。

後日スペイン語会話の授業に出た時、番組を見たホセ・ルイス・アルバレス先生から曲のテンポが遅すぎたとコメントがあった。そしてご自身が教室で1.5倍位のテンポで朗々と歌われた。我々はこの曲を録音前には聴いたことがなかったので、遅めのテンポになったと記憶するが、それはそれで味が有ったのか（勝手な解釈

だが）、アルバレス先生の批評は手厳しいものではなかった。因みにアルバレス先生は私よりもかなり先輩の方々にもこの歌を授業中に教えておられたとのこと。

このエピソードは編集委員の加藤氏が思い出させてくれたが、記憶が欠如していることもあり、心当たりのOBへメールで聞き込みを行い、頂いた情報も盛り込んでまとめた。また、聞き込み作業の過程で驚異的な発見があり、当時の楽譜を竹尾彰（昭47IN）が持っていたことがわかった。

ご協力頂きました皆様にこの場を借りて御礼を申し上げます。

注：有志メンバー（判明者のみ）

安藤雅之（昭44E）、塩見憲一（昭44E）、村上剛（昭44S）、大井耐三（昭44S）、家城義男（昭44IP）、板村哲也（昭44S）、天野邦彦（昭45E）、竹尾彰（昭47IN）、加藤直樹（昭48S）



OB合唱団（東京）の創設

大阪外国語大学グリークラブOB合唱団（東京）の創設は1995年3月に遡る。現役による最後の第41回定期演奏会（1998年1月）の3年ほど前ということになる。1995年2月6日に、樽井一仁（昭50R）が幹事となって関東在住の外語グリーOBの集まり（新年会）を実施したが、その際に、浅野征道、山本勝昭、近藤純雄、西村信勝（いずれも昭42S）の4名からOBによる合唱の依頼があった。浅野らは、同年5月に、50歳のクワルテット・コンサートを計画しており、そのコンサートでOB合唱団のステージをもってもらいたいとのことだった。

4名の依頼を受けて、さっそくOB合唱団としてのステージを持つべく、同年3月13日から練習を開始、初回の練習には16名が参加した。練習場所は野田大祐（昭33C）の事務所を借りた。その後、集中的に練習を重ね、5月13日の神奈川県民ホール（小ホール）での50歳のクワルテット・コンサートのステージに立ったのである。指揮は松尾航一（昭52D）で、「Gaigo Will Shine Tonight」から始まり、清水脩作曲組曲

「月光とピエロ」から「秋のピエロ」、多田武彦作曲組曲「柳河風俗詩」から「柳河」、黒人霊歌から「Ride the Chariot」、それに「U Boj」を総勢23名で演奏した。

その後、野田大祐の事務所、参加OBの自宅あるいはカラオケルームで練習を重ね、同年（1995年）11月に咲耶会東京支部総会で演奏をおこなった。その後も、時には大阪から林誠先生に来ていただいて、1997年1月に予定されていた創部70周年記念・第40回定期演奏会における現役・OB合同による「月光とピエロ」の練習に励んだ。

グリーOBたち（大阪）の現役合唱団への支援

70周年記念演奏会における現役・OB合同ステージの企画は、大阪でもOB合唱団設立の機運を盛り上げた。当時、大阪におけるOB合唱団の中心人物であった河原敬（昭57E）が、そのあたりの経緯を以下のように述べている。

1996年1月31日 突然現役部員から電話で日航ホテルに呼び出されました。1年後の1997年1月OB合同演奏会を企画したいと言うのです。現役（南野、松尾）からの相談を池田守氏と僕が受けました。そのときOB合唱団を立ち上げられないかと考えました。（中略）創部70周年（1997年1月）はOB合同「月光とピエロ」、71周年には「海鳥の詩」を呼びかけて林誠先生に振っていただきました。2回とも下振り



クワルテットコンサートでのOB演奏

をさせていただき全ての練習に出ました。
(平成15年(2003)1月「大阪外国語大学
グリークラブOB合唱団ミニコンサート」
のプログラムから転載)

しかし、この時点ではOB合唱団が創設されるには至らなかった。平成9年(1997)1月の第40回定期演奏会(創部70周年記念)における現役との合同演奏「月光とピエロ」は、グリーOB合唱団としてではなく個人の資格として参加したOBとの合同演奏となったのである。この「月光とピエロ」は、昭和49年(1973)秋から外語グリーのヴォイス・トレーナーをしていただいていた林誠先生に客員指揮者として指揮をしていただいている。この時期、現役のメンバーはわずか8名に過ぎなかったが、「Swing Low, Sweet Chariot」や「Ride the Chariot」など外語グリー十八番の黒人霊歌を7曲演奏している。

平成10年(1998)1月に開催された第41回定期演奏会は現役最後の演奏会であり、この時の現役部員数はさらに減少し、わずか2名となっていた。しかし、グリーOBたちの協力もあり、3つのステージをもった。第1、第2ステージでは、5曲の黒人霊歌(「The Battle of Jericho」、 「Ride the Chariot」など)や「秋のピエロ」「最上川舟歌」「希望の島」など外語グリーが長年歌い続けてきた曲を、また、最終のステージでは、林誠先生指揮で男声合唱組曲「海鳥の詩」を演奏している。まさに、現役とOBが一体となって大阪外国語大学グリークラブの幕を閉めたといえる。

OB合唱団(東京)の活動と 小貫岩夫先生の登場

一方、東京のOB合唱団は、その後も定期的に練習を重ね、ミニコンサート(平成11年(1999)5月)、咲耶会(平成12年(2000)およ

び平成13年(2001)7月)、東京男声合唱フェスティバル(平成13年(2001)10月)など演奏活動を続けた。そして、平成14年(2002)4月7日にカスケードホールで、東京外国語大学混声合唱団コール・ソレイユの賛助出演を得て演奏会を開催した。この演奏会では、林誠先生を客員指揮者として迎え、シューベルトの男声合唱曲(「Heilig」、「Wiegenlied」など)、「月光とピエロ」、そして愛唱歌(「Ständchen」、「Deep River」など)を14名のOBが演奏した。

平成14年(2002)4月の演奏会では林誠先生に客演指揮をお願いしたが、この演奏会の打ち上げパーティで林誠先生から現在の指揮者である小貫岩夫先生を紹介いただくことができた。先述の樽井一仁は以下のようにこの経緯を紹介している。

2002年4月7日に東京麹町のカスケードホールで、「大阪外国語大学グリーOB合唱団」(東京)の演奏会を初めて開きました。指揮者として大阪から林誠先生をお呼びしました。演奏会終了後の打ち上げパーティの席上で、野田大祐氏が林誠先生に「先生の教え子、東京におりまへんのか?」と尋ねたところ、「優秀な教え子がいますよ」との返事でした。

林誠先生の紹介で、小貫岩夫先生と初めて会ったのは、2002年7月2日でした。私の勤務先に近い青山一丁目のレストラン「青島」で食事をしながら、当方の条件(月2回の練習、練習日は小貫岩夫先生の空いている日、練習曲は清水脩先輩の曲と愛唱歌)を提示したところ快諾して頂きました。

新たに小貫岩夫先生を指揮者に迎え、平成14年(2002)の演奏会の後も、コール・ソレイユや男声合唱団ハートストリングスとのジョイントで、平成20年(2008)まで毎年演奏会を催

した。これらの演奏会では、「月光とピエロ」だけでなく、「アイヌのウポポ」、「3つの俗歌」などの清水脩作品や黒人霊歌を演奏している。そのほか、東京都合唱祭や男声合唱フェスティバルにも参加している。

OB合唱団（大阪）の創設

OB合唱団（大阪）の創設は平成13年（2001）5月20日に遡る。前述の河原敬の呼びかけと彼が主宰する混声合唱団メルヴェイユの協力を得て、OB11名でスタートしたのであった。練習場所は、天王寺学館の早原瑛学館長（昭30F）のご好意で天王寺予備校の音楽ホールをお借りすることができた。そして、活動開始1年半後の平成15年（2003）1月に大阪の上田学園ライラックホールで「大阪外国語大学グリークラブOB合唱団ミニコンサート」を催した。前述の混声合唱団メルヴェイユとのジョイントコンサートであった。このコンサートには、大阪だけでなく東京のOBたちも駆けつけ、総勢23名の合唱となった。演奏会では、河原敬の指揮のもとで、黒人霊歌から「Didn't My Lord Deliver Daniel?」など5曲と、多田武彦作曲の男声合唱組曲「雨」を演奏している。OB合唱団関西代表として岡田吉治郎（昭33E）は、第1回ミニコンサートのプログラムで以下のように述べている。

大阪外国語大学グリークラブは1957年に、戦後第1回の演奏会を開催し、1998年まで、演奏活動を続けてまいりました。現在は、残念ながら廃部の状態にありますが、その間には、毎年定期演奏会を開催し、外大の特色を生かした演奏を続けてまいりました。これも、1998年以降、途絶えてしまいました。そして、OBの集まりも、自然に途絶えてしまった状態になりました。この現状を打破すべく、関西在住のOBの有志

が集まり、練習を重ねてきましたが、今日はその成果を皆様にご披露させていただく事になりました。東京で練習を積んでいるOBの皆さんの応援を得て、今日この会を開けることになったことを喜んでいきます。

平成15年（2003）10月、OB合唱団（大阪）は、指導者として林誠先生（大阪音楽大学大学院教授）、また、名誉顧問として山口慶四郎先生（大阪外国語大学名誉教授）をお迎えすることとなった。

翌平成16年（2004）2月には、大阪外大女声コーラス部OG合唱団アンサンブル葉音の賛助出演を得て、第2回目のOB合唱団ミニコンサートがおこなわれている（会場は第1回ミニコンサートと同じ上田学園ライラックホール）。このミニコンサートでは、林誠先生の指揮で「月光とピエロ」を演奏したほか、団内指揮者榊原昭裕（平5K）による黒人霊歌（「Soon Ah Will Be Done」など5曲）を演奏している。第2回ミニコンサートにも東京OB合唱団有志が参

大阪外国語大学グリークラブOB合唱団
ミニコンサート

2003年1月26日（日）
上田女子服飾専門学校 本館6F ライラックホール
午後2時30分開場 午後3時開演

プログラム

Gaigo Will Shine Tonight / Varsity / 大阪外国語大学学歌

第1ステージ
黒人霊歌 (Negro Spirituals)
I Got Shoes / Let Us Break Bread Together
O My Golden Slippers / There is a Balm in Gilead
Didn't My Lord Deliver Daniel?
合唱：大阪外国語大学グリークラブOB合唱団

第2ステージ
無伴奏混声合唱組曲 「鵜川風俗詩」 北原白秋作詩 多田武彦作曲
I 鵜川 II 船屋のおろく III かきつばた IV 梅雨の晴れ間
合唱：混声合唱団メルヴェイユ

第3ステージ
無伴奏男声合唱組曲 「雨」 伊藤整ほか作詩 多田武彦作曲
I 雨の来る前 II 武蔵野の雨 III 雨の日の遊動門本
IV 十一月による雨 V 雨の日に見る VI 雨
合唱：大阪外国語大学グリークラブOB合唱団

第1回ミニコンサートプログラム

加し、総勢32名の合唱となった。

その後、OB合唱団（大阪）は、平成16年（2004）7月の「佐原真さん追悼演奏会」、平成17年（2005）3月の淡路島五色町における「菜の花コンサート」、平成18年（2006）4月の「姫路文学館演奏会」、平成20年（2008）11月の「『山に祈る』を唄う」など毎年さまざまなステージ活動を続けている。これらの演奏会は、OB合唱団名誉顧問の山口慶四郎先生の発案と斡旋によるところが大きかった。その意味で、山口慶四郎名誉顧問の存在は、OB合唱団（大阪）創設後の発展にとって極めて大きいものであった。

東西両OB合唱団による 合同演奏会の幕開け

大阪と東京のOB合唱団がそれぞれ活発に活動を続けていたこの時期の平成18年（2006）4月に注目すべき演奏会が開催された。創部80周年記念演奏会である。この演奏会は、OB合唱団（大阪）の指揮者である林誠先生だけでなく、OB合唱団（東京）の指揮者小貫岩夫先生のお二人がステージに立つという画期的なものであった。演奏曲目も、最終ステージに林誠先生の指揮で「月光とピエロ」、そして最初のステージに小貫岩夫先生の指揮で「五つの日本民謡」から4曲と清水脩の2作品を演奏するという記念演奏会らしい構成であった。また、外語

グリーの十八番である黒人霊歌も団内指揮者榊原昭裕の指揮で演奏した。さらに、このコンサートに出場したOB数は80周年記念演奏会にふさわしく82名にのぼった。

また、翌平成19年（2007）9月8日には、「さよならわれらが大阪外国語大学」のイベントに参加して、林誠先生の指揮のもと、総勢57名で「月光とピエロ」を演奏している。

平成22年（2010）4月には、大阪、東京地区のOB合唱団が初めて東京で一堂に会して、「東西合同演奏会 in Tokyo」が東京田町の建築会館で開催された。総勢42名が参集し、小貫岩夫先生の指揮で清水脩作曲「山に祈る」と多田武彦作曲「雨」を演奏した。「山に祈る」では、ロシア語学科卒の山之内重美さんにナレーションをお願いした。また団内指揮者北村照夫（昭57R）の指揮で黒人霊歌から「The Battle of Jericho」など5曲を演奏した。この演奏会には東京外国語大学混声合唱団コール・ソレイユが賛助出演をし、「うたをうたうとき」など5曲の愛唱歌を演奏した。

平成23年（2011）11月13日には、創部85周年・清水脩生誕100周年誠記念演奏会が神戸新聞松方ホールでおこなわれた。清水脩生誕100周年記念にふさわしく、林誠先生の指揮で清水脩の3作品（「月光とピエロ」「日本民謡集」「3つの俗歌」）を演奏した。また、団内指揮者池田守（昭54S）の指揮で、黒人霊歌



創部80周年記念演奏会

から、「Wade in de Water」や「Soon Ah Will Be Done」など6曲、そして外国語大学らしく、「Amazing Grace」や「El Condor Pasa」など世界の愛唱歌を5曲演奏している。

また、翌平成24年（2012）5月にも、東京銀座ヤマハホールで、清水脩生誕100周年記念演奏会を催し、小貫岩夫先生の指揮で清水脩作品「アイヌのウポポ」と「月光とピエロ」を演奏した。特に、最終ステージの「月光とピエロ」は、湘南男声合唱団、男声合唱団フロイデ、ハートストリングスの賛助を得て、100名を超えるピエロとなった。

名古屋地区OB合唱団の始動

平成24年（2012）9月には初めて名古屋で演奏会を催した。平成20年（2008）頃から、名古屋地区では伊東昭廣（昭42E）と安藤雅之（昭44E）がふたりだけの練習を始めたが、その後、佐藤文隆（昭37S）と小笠原肇（昭38S）、さらに佐藤謙司（昭45S）と小林卓郎（昭60R）が加わり、平成24年（2012）の名古屋演奏会の時期には6名のメンバーとなっていた。その名古屋地区OBメンバーと大阪のOB合唱団が中心となって名古屋演奏会が実現したのである。この演奏会には、名古屋のメンバー6名に加え、OB合唱団（大阪）所属のメンバー19名、OB合唱団（東京）所属のメンバー5名、そしてこの日の演奏会のために駆けつけてくれたOB8名の総勢38名の外語グリーOBが参加している。

初めての名古屋におけるOB合唱団の演奏会は、愛知教育大学男声合唱団OBで構成するやまなみグリークラブとのジョイントコンサートとして、名古屋市の中村文化小劇場で催された。外語グリーOB合唱団は単独で黒人霊歌2曲（「Steal Away」と「Set Down Servant」）と「学生王子」から3曲を演奏している。やまなみグリークラブとの合同合唱では、総勢54名とい



名古屋でのジョイントコンサート

う大人数で、「月光とピエロ」と「柳河風俗詩」の2つの男声合唱組曲をいずれも林誠先生の指揮で演奏した。

名古屋地区OB合唱団は、このジョイントコンサートのほか、咲耶会名古屋支部総会でも数曲を演奏している。

その後、2人のメンバーを病気で失ったが、2人のOBが新たに加わり、現在（平成30年（2018））も継続して活動をおこなっている。

大阪男声合唱団との交流

OB合唱団の新たな活動として特筆すべきは、大阪男声合唱団との交流である。大阪男声合唱団は大阪大学男声合唱団のOB合唱団で、昭和29年（1954）に発足した。同合唱団は昭和34年（1959）に活動を一旦休止したが、昭和55年（1980）から活動を再開、平成13年（2001）7月には、第1回大阪男声合唱団定期演奏会を大阪で開催している。定期演奏会はその後も継続して開催され、平成29年（2017）7月には第17回定期演奏会を東京の第一生命ホールで催している。平成18年（2006）には大阪男声合唱団東京支部が発足し、東西のOB合唱団による定期演奏会に加え、東京支部単独で東京男声合唱フェスティバルなどのステージにも立っている（以上は大阪男声合唱団のWebサイトから抜粋）。

外語のOB合唱団と大阪男声合唱団との交流は、平成19年（2007）10月に実現した大阪外国語大学と大阪大学の統合を契機に始まった。

大阪男声合唱団との交流は、まず大阪で始まった。平成24年（2012）7月の大阪男声合唱

団第12回定期演奏会に大阪外語グリークラブOB合唱団が賛助出演したのである。この演奏会では、林誠先生の指揮で「月光とピエロ」を大阪男声合唱団と合同で演奏している。その後、平成26年（2014）11月の「第37回おもしろ音楽博物館～林誠合唱の魅力～」では、林誠先生の指揮で大阪男声合唱団と合同で、組曲「月光とピエロ」「ムシデン」「最上川舟唄」などを演奏している。大阪男声合唱団との交流ではないが、2014年8月の大阪大学工業会第15回音楽会における歌劇「リゴレット」（演奏会形式）にOB合唱団（大阪）がコーラスとして参加している。

東京でも平成25年（2013）に交流が始まった。最初の交流は、平成25年（2013）11月の第13回東京男声合唱フェスティバルでの合同演奏であった。大阪男声合唱団の指揮者甲和伸樹氏の指揮で多田武彦作曲組曲「富士山」から「作品第肆」と「作品第弐拾壹」を演奏している。OB合唱団（東京）13名と大阪男声合唱団東京支部22名の総勢35名がステージに立った。

平成26年（2014）11月には、文京学院大学仁愛ホールにおいて、大阪男声合唱団、文京学院大学吹奏楽部とジョイントでコンサート「Autumn Joint Concert」を開催している。このジョイントコンサートでは、OB合唱団単独で、

「Deep River」、「Steal Away」など黒人霊歌5曲をOB合唱団（東京）で指導していただいている坂井美樹先生の指揮で演奏し、また大阪男声合唱団と合同で組曲「富士山」を大阪男声指揮者甲和伸樹氏の指揮で、そして最終ステージの組曲「月光とピエロ」を林誠先生の指揮で演奏している。

また、平成27年（2015）7月には大阪男声合唱団の第15回定期演奏会に賛助出演をし、「柳河風俗詩」を大阪男声合唱団と合同で演奏している。平成29年（2017）にも賛助出演をし、「Shenandoah」などSEA SHANTIESを4曲合同演奏している。

米寿、創部90周年記念演奏会、そして未来に

大阪、東京、名古屋地区のOB合唱団がそれぞれの活動を活発化しているなか、平成18年（2006）の「創部80周年記念演奏会」、平成22年（2010）の「東西合同演奏会 in Tokyo」、そして平成23年（2011）の「創部85周年記念演奏会」の成功を受けて、地区を超えた合同演奏会への機運も盛り上がってきた。その結果、90周年までの5年間を待つことなく、88歳（米寿）



大阪男声合唱団、文京学院大学吹奏楽部とのAutumn Joint Concert

を祝うという「ベージュ色のコンサート（創部88周年記念）」が開催されることとなった。会場は大阪のクレオ大阪中央で、56名のOBが全国各地また海外から参集した。この年、林誠先生は大阪音楽大学を退官され名誉教授とされたが、引き続きグリーOB合唱団（大阪）の指導を引き受けていただいた。その林誠先生の指揮で、清水脩作曲「アイヌのウポポ」と多田武彦作曲組曲「富士山」を演奏した。「富士山」には大阪男声合唱団が賛助出演した。そのほか、団内指揮者池田守指揮で黒人霊歌から6曲、「学生王子」から5曲を演奏した。米寿の演奏会ということから、当時OB合唱団の特別顧問であった山口慶四郎先生から次のような温かいコメントをいただいている。

大阪外語グリークラブOB合唱団は、白寿（創部99年）はおろか、茶寿（同108年）、皇寿（同111年）、さらには大還暦（同120年）を迎えての演奏会をも存続させるであろう。そうあることを祈る。自身の青春もグリークラブとともにあった。本日は深く席に腰を掛け、心ゆくまで諸君の美しいハーモニーに耳を傾けられることを至福とする。

そして、平成28年（2016）11月と12月には、初めて大阪と東京の両地で「創部90周年記念演奏会」が催されることとなった。大阪公演は、11月13日に大阪外国語大学上本町校舎

跡地の大阪国際交流センター大ホールで、また東京公演は、12月3日に葛飾区のかつしかシンフォニーヒルズ・モーツァルトホールで開催された。ふたつの演奏会ともほぼ満席になるほどの盛況であった。大阪公演では林誠先生の指揮のもと、また東京公演では小貫岩夫先生の指揮のもとで、「月光とピエロ」を高らかに歌い上げた。両公演とも全国各地だけでなく海外からも総勢70名にのぼるOBが参集した。もちろん、外語グリーの十八番の黒人霊歌も演奏した。大阪公演では団内指揮者の松岡一仁（昭46E）が、また東京公演では坂井美樹先生が黒人霊歌の指揮をした。もうひとつ、90周年記念演奏会らしいプログラムが企画された。世界の愛唱歌のステージである。このステージでは、大阪外大に相応しく、アメリカ、ロシア、イギリス、ドイツ、インドネシア、クロアチアなど世界の愛唱歌8曲を原語で歌い、歴代の団内指揮者8名が1曲ずつ指揮をした。

創部90周年記念演奏会は成功裏に幕を閉じたが、すでにOB合唱団は今後に向けて活動を開始している。平成31年（2019）には大阪で合同演奏会、平成32年（2020）には東京で合同演奏会、そして平成33年（2021）の創部95年目には大阪と東京で記念演奏会を開催する計画となっている。山口先生のコメントにあるように、大阪外国語大学グリークラブOB合唱団が大還暦までも続くことを祈って。Gaigo will shine forever!

創部90周年記念演奏会（大阪）

「大阪外国語大学グリークラブ創部90周年記念演奏会」は2016年11月13日に大阪公演を、続いて12月3日に東京公演を開催した。創部88周年記念「ベージュ色のコンサート」開催後2年かけて東西のOB合唱団が協力しあい、準備をすすめて実現させた。

11月13日（日）午後1時半から、大阪市天王寺区上本町8丁目の大阪国際交流センターで開いた「創部90周年記念演奏会」（大阪）は入場者827人と過去最高（OB合唱団結成以後）を記録し、演奏内容も高い評価を受けて大成功に終わった。

私たち（OB合唱団大阪）は大学があった本拠地（残念ながら阪大と統合してなくなっているが）で、創部90周年を祝い、その歴史と伝統の重みを少しでも後世に伝えられる演奏会にしたいと取り組んだ。

演奏曲目は日頃指導していただいている林誠先生の指揮で清水脩氏の最高傑作「月光とピエロ」と多田武彦氏の名曲「柳河風俗詩」を、そして十八番の「黒人霊歌」、今回の特別企画として林誠先生の提案を受け歴代指揮者メドレーによる「世界の愛唱歌」の4ステージ。全国各地から応援があり、計75人が出演した。

「世界の愛唱歌」は、「OB合唱団をぜひ指揮してみたい」という元指揮者に参加してもらい、バトンリレーで「愛唱歌」を歌い継ぐ企画で、2015年1月から元指揮者の28人に出演の意向を打診した。1年以上も先の演奏会で、仕

事を抱えた現役世代や海外勤務の方たちには悩む方もおられたが、昭和42年から平成年代までの8人が出演を承諾してくれ、ロシア、フィンランド、ドイツ、アメリカ、スコットランド、インドネシア、クロアチアの愛唱歌など8曲を選曲した。この企画にはOB団員の確保、団の若返りを期待した面もあり、その意味で若いメンバーを含めた8人の参加は大きな成果があったと受け止めている。

日頃、OB団員は大阪、東京、名古屋の3か所に分散して練習しており、十分な総合練習ができるのか心配だったが、6月中旬の2日間、大阪で特別合同合宿を開いた結果、特別参加者らを含めて全国から計51人の参加があり、グリーの力強い結束力を産むいい機会となった。それが本番の演奏にも表れたのだろう。観客からはお褒めの言葉をいっぱいいただいた。「それぞれ特徴のある指揮ぶりが楽しかった」「パフォーマンスが面白かった」「世界の言語で歌えるのは外大の素晴らしいところ」「フランス、スペインの歌が聴きたかった」などだ。

今回の演奏会の事前準備段階では難題がひとつあった。演奏会場の確保だ。

大阪外国語大学発祥の地であり、思い出深い上八キャンパス跡地に建つ大阪国際交流センター大ホール（1006席）は90周年記念演奏会にもっとも相応しい会場であったが、1年前の電話予約で抽選に当たるどうかかわらず、安全弁としての腹案も準備していた。

ところが、“奇跡”が起こった。

この背景には、40年間グリークラブ顧問、OB合唱団名誉顧問として私たちの活動を支え続けてきてくださった故山口慶四郎先生（大阪



大阪外国語大学発祥の地上八キャンパス跡地に建つ
大阪国際交流センター

外大名譽教授)のご尽力があった。演奏会のまだ1年半も前の2015年2月、私たち3役を連れて国際交流センターを訪れ、事務局に対し記念演奏会の計画とその重要性を説明してホール利用をお願いしてくださった。むろん、確約はとれなかったのだが、その年の11月の電話申し込みで抽選があたったのだ。しかも大学創立記念日に近い13日(日)を予約できたのだ。その山口先生は肝心の記念演奏会を迎えることなく2016年1月に他界された。痛恨の極みであったが、90周年記念演奏会が先生への追悼演奏会ともなり、ご冥福を祈りながら精一杯歌ったのはいうまでもない。

演奏会準備段階で、大変うれしく感動的な出来事がもうひとつあった。

ある合唱団のプログラムに、大学時代に「月光とピエロ」を歌い、その縁で清水脩先生の薫陶を受けて作曲したのが「柳河風俗詩」だとの、多田先生の文章を見つけた。今回の演奏会の曲目解説、エピソードにぴったりだと思い、再掲を先生に申し入れた。

突然の不躰な願いで、大きな期待はしていなかったが、9月のある日、先生から突然、電話がかかってきた。そして、「師と仰ぐ清水脩先生の『月光とピエロ』とともに、自作の『柳河風俗詩』を歌ってくださるのだ。(再掲ではなく)自ら原稿を書かせていただく」と承諾くださり、そのうえ「執筆料は要らない。品物(贈り物)も送ってくるな」と言われた。

5日後、原稿用紙3枚にエンピツで書かれた、直筆のサイン入りの「お祝いメッセージ」が届いた。清水脩氏との交流ぶりや名曲が生まれたいきさつ、合唱の心得など心温まる文章がびっしり書かれていた。多田先生からメッセージをいただいたのはおそらく初めてだろう。団員一同感動してその全文をプログラムに掲載した。

私たちはこの機会に、偉大な先輩・清水脩先

生が過去、私たちに寄せてくださったメッセージも掲載した。数多くの中から第1回定演、第20回定演、創部50周年記念など心に残る数編を抜粋して掲載した。また、40年前の創部50周年記念演奏会での舞台挨拶の録音を演奏会場で流した。

今回のプログラムにはいつもの演奏曲目、解説に加えて、「90年の歩み」を掲載した。創部から終戦までの活動ぶりや戦後から休部までの41回の定期演奏会、OB合唱団となって以後の演奏会活動ぶりを年表形式で紹介した。演奏会場のギャラリーには当日、90年アーカイブ写真も展示した。いずれも90周年の特別企画の一環であった。

「創部90周年記念演奏会」(大阪)は、827人の入場者があり、1006席と広い会場は当初の心配をよそにほぼ満員となった。思い出深い大学キャンパス跡地にあり、打ち上げも同窓会のように盛り上がったことを報告する。

最後に来場者のアンケート結果を簡単に紹介する。回答数は162人(約2割)とふだんより若干少な目だったが、どのステージもほとんどが5段階評価で5、4の高い評価をいただいた。

- ◎「若々しい声に感心した。声量の豊かさにびっくり」(75歳、女性)
- ◎「60年代、大学合唱団全盛の、あの心躍るサウンドの厚さを躍動に心を奪われました」(69歳、男性)
- ◎「合唱に対する情熱が伝わってきました。感動しました」(66歳、男性)
- ◎「重厚で哀愁のある歌声、ハーモニーと指揮、柳河の風景が思い出されました」(76歳、男性)
- ◎「迫力とリズムの切れに圧倒された。外大ワールドミュージック、参りました。感動の数時間、充実の1日に感謝」(67歳、男性) …などである。

創部90周年記念演奏会（東京）

2016年12月3日（土曜日）午後1時30分から「大阪外国語大学グリークラブ創部90周年記念演奏会」がOB合唱団の主催で開催された。場所は、東京都葛飾区のかつしかシンフォニーヒルズ・モーツァルトホール、座席数1,318席（1階770席、2階548席）の大ホールである。京成青砥駅から徒歩5分ほどの立地で、残響時間（満席/500Hz）1.8秒と音響効果も素晴らしいコンサートホールであるが、唯一の問題点はその座席数であった。本拠が大阪の大学OB合唱団の演奏会に果たして1,000名を超える観客が集まるのだろうか。実は、モーツァルトホールは本命の演奏会場ではなかった。同ホールは予約を1年半前から受け付けるが、1年3か月前にたまたま会場の空きがあり、最後の砦として予約をしたものであった。東京近辺のほとんどの音楽ホールの演奏会は、開催月の1年前に予約抽選を実施しているため、モーツァルトホールを予約した時点ではどの音楽ホールの予約もできていなかった。その後、多くの公共の音楽ホールの抽選に臨んだが、ことごとく落選し、最終的にモーツァルトホールに落ち着いた。最後の砦が効いたといえよう。

演奏曲目は大阪演奏会と同じく、「柳河風俗詩」「黒人霊歌」「世界の愛唱歌」と、清水脩作曲の「月光とピエロ」であるが、大阪演奏会との相違点が3点あった。

ひとつは、OB合唱団（東京）の指揮・指導をしていただいている小貫岩夫先生と坂井美樹先生の特別ステージ「オペレッタの散歩道」を設け、「君こそわが心のすべて」などオペレッタの Aria 4曲を歌唱していただいたことである。お二人の素晴らしい歌唱に拍手が鳴りやまなかったのが印象的であった。

2つめが、第1ステージの「柳河風俗詩」を



小貫岩夫先生と坂井美樹先生の特別ステージ「オペレッタの散歩道」

大阪男声合唱団（大阪大学男声合唱団OB会）東京支部の賛助出演を得て、総勢80名を超える大合唱となったことである。大阪男声合唱団東京支部とは、それぞれの演奏会で賛助出演をしよう間柄でもあり、今回の賛助出演も当然といった雰囲気を実現した。

そして、3つめが、最後のステージ「月光とピエロ」を、大阪男声合唱団に加え、外語グリーOB合唱団のメンバーが所属している他の合唱団から有志を募って、110名を超える大合唱としたことである。110名超による「月光とピエロ」は、2013年3月にいわき市で行った小林研一郎氏指揮による200人の「月光とピエロ」（ピエロINいわき）に次ぐ大合唱ではないだろうか。

創部90周年記念演奏会は、大阪公演と東京公演の2回の演奏会となったが、大阪公演が大阪外語グリーの90周年を祝う「純粋な意味での演奏会」であったのに対して、東京公演は90周年を祝う「お祭り」としての演奏会と位置付けることができよう。その意味で、それぞれが別の意味合いを持って90周年を祝ったことになる。

演奏曲目に加えて、特筆すべきことが2点ある。

ひとつは、大阪、名古屋、東京のメンバー約60名に加え、仕事の関係などから平生の練習に

来られない多くのOBが、日本各地だけでなく海外からも馳せ参じてくれたことである。平生のOB合唱団の練習に参加しているメンバーは60名ほどであるが、東京公演のステージには総勢81名（プログラムのメンバー表による）のOBが名を連ねている。平生の練習には参加できないが、在学時代必ず一度は歌ったことのある「月光とピエロ」だからこそ実現した合同演奏といえる。

もうひとつが、ステージには出られない多くのOBが寄付という形で応援をしてくれたことである。昭和34年卒の2名と35年卒4名を含む37名のOBから寄付をいただいた。400名にのぼる外語グリーOB名簿を頼りに、大阪と東京の幹事団がメールや郵送で丹念にコンタクトした結果であった。

心配していた観客数も1階客席がほぼ満席となり、気持ちの入る演奏をすることができた。OBだけでなく、賛助出演の他合唱団の方々からも一様に素晴らしいステージであったとのコメントをいただいた。



最後に、来場いただいた観客のアンケートを紹介したい。アンケートは5段階のリッカート尺度を使ったもので、117名の方々から提出があった。ステージごとの評価では、「月光とピエロ」が4,669と最高で、黒人霊歌も4,585の極めて高い評価であった。その他の2ステージも4.5前後の高い評価をいただいた。

自由記述でも多くのコメントをいただいた。いくつか紹介したい。

◎こんなに厚い男声合唱は始めて聴きました。声が揃っていて言葉がよく聴こえてきました。四声がばちっとハマったときの迫力、音の広がりによって圧倒されました。これだけの人数で刻むリズムを合わせるのはとても大変だったと思います。ご卒業されてからもこうして集まって舞台に立てることはとてもすてきですね。素晴らしいコンサートありがとうございました。（20歳代女性）

◎90年という歴史の重みと皆様の母校への愛情を感じる演奏会でした。特に黒人霊歌は長年歌い継がれていることで、風景が目に浮かぶ素晴らしい演奏でした。また次回の演奏会も楽しみにしています。（20歳代男性）

◎生まれて今まで一度も聴いたことがなかった素晴らしい歌声に感動いたしました。今日は勇気と希望をいただきました。本当にありがとうございました。（60歳代女性）

◎久々に男声コーラスを聴き、感動しました。主人も遙か昔に所属しておりましたので、開演早々感激に涙ぐんで見ておりました。所属年代別の指揮者メドレーは各自の特徴が出て、楽しませていただきました。また拝見できる機会があれば幸いです。（60歳代女性）

◎いたく感動しながら家路につきました。外大Glee Clubの歴史を感じつつ。ありがとう！（60歳代男性）

大阪、名古屋、東京のOBメンバーが一丸となって取り組んだ創部90周年記念演奏会は終了したが、これで終わりではなく、次の95周年、100周年につながる新しい始まりでもある。

多田武彦氏からのメッセージ

大阪外国語大学グリークラブの創部90周年、誠にお目出とうございます。

また、その栄ある記念演奏会に私の作品を取り上げて頂き、厚く御礼を申し上げます。

貴グリークラブご出身の大作曲家清水脩先生とは、私がまだ旧制京都大学の二回生の折、組曲「月光とピエロ」を歌わせて頂いたのを機に、先生からのご叱責ご薫陶を賜り、音楽の上のみならず、勤務先の仕事「専ら融資先の再建、とりわけ従業員やその家族を路頭に迷わせるような人員整理をしない」に傾注した際にも、秀い出た宗教家としての先生から頂いたご教導の数々や、寺社建築の奥義に関する多くのご研究成果を拝聴したことなど私の受けた恩義は実に深遠でありました。

折角の機会ですので、これらの事を、エピソード風に記述することを、お許し下さい。

「月光とピエロ」を歌って間もなく、先生から、「作曲の基礎を教えるため月一回来阪して数人の生徒に教えているが、君も来るか」と言って頂き、喜んで参加しました。私が最後の順番だった日、先生から夕食に誘われ、その店の個室で食事の後、急に先生の表情が厳しくなり、「学習時の心得」が伝えられました。

- ①褒め言葉には嘘が多い。褒められて喜んでいようでは、その瞬間に進歩は止まる。
- ②一方、君に対する非難・誹謗・罵詈雑言には真実の忠告があるから、これらを謙虚に受け止める。
- ③自作に惚れこんだり、自己宣伝をするな。良い作品を書けば、出版されていなくても、歌ってくれる人たちは、楽譜を探し、愛唱してくれる。
- ④所詮、君は、まだまだこの道での「ど素人」だ。

⑤当面は大正から昭和にかけて作られた日本近代抒情詩から「春夏秋冬・花鳥風月・喜怒哀楽・起承転結」が巧みに織り込まれている詩を選び、西洋音楽の作曲・指揮・演奏に必要な「構築性4項目（リズム・メロディー・ハーモニー・楽式論）」と「装飾性2項目（ディナミック・フレージング）」と「声区の移動」に考慮して詩を決める。

⑥これらについては、実践的教科書は無いので、例えば、カール・ベーム指揮、ウィーン交響楽団の名作・名演を最低百回聴け。スポーツと同様、50回目から、様々な事柄が判ってくる。

⑦今から一カ月の間に習作（エチュード）としてのア・カペラ男声合唱を書いて来い。

との指示がありました。

こうして出来上がったのが、組曲「柳河風俗詩」です。先生は、「作曲技術は未熟だが、小学一年の時から培った日本の多くの古典芸術による組曲の構成力は見事だ。しかし、しかし褒め言葉には嘘があるぞ」と初めて微笑ほほえまれました。

編集註：

多田武彦氏は平成29年12月12日、満87歳にて生涯を閉じられました。ご冥福をお祈り申し上げます。



創部90周年記念演奏会(大阪)



創部90周年記念演奏会(東京)



第2章

伝統のレパトリー

本章では、大阪外国語大学グリークラブの伝統のレパートリーともいえる清水脩作曲男声合唱組曲「月光とピエロ」と黒人霊歌をとりあげたい。

組曲「月光とピエロ」は、外語グリーの第5代団内指揮者でもある大先輩清水脩が作曲した世界初の「合唱」組曲で、大正18年（1919）に刊行された堀口大學の処女詩集「月光とピエロ」の6編のうち4編と、詩集『EX-VOTO（ささげ物）』の中の7編のうちの1編「ピエロの嘆き」から構成されている。合唱組曲「月光とピエロ」の初演は1949年で、清水脩自身の指揮のもと東京男声合唱団によって演奏されている。

以降、多くの男声合唱団が「月光とピエロ」を演奏し、おそらく男声合唱の経験のある人で「月光とピエロ」を歌ったことのない人はいないのではないかといえるほど、多くの合唱愛好者が愛し、歌い続けてきた名曲である。

大先輩が作曲した組曲でもある「月光とピエロ」は、無論、外語グリーにとっても大切なレパートリーであり、節目となる記念演奏会では必ず「月光とピエロ」を最終ステージで演奏している。

もうひとつ、外語グリーにとって大切なレパートリーが黒人霊歌である。外語グリー創部90周年記念演奏会（東京）では黒人霊歌を5曲演奏しているが、そのプログラムの中で、以下のように黒人霊歌について解説している。

「黒人霊歌、それは一言で言うならば、奴隷生活の苦しみと孤独の中で、キリスト教信仰に目覚めた彼ら（黒人たち）が、救済への願いを込めて歌った歌である」（小川洋司『深い河のかなたへー黒人霊歌とその背景一』）と記述されているように、黒人霊歌は、アフリカ各地から奴隷としてアメリカに強制的に移住させられた黒人たちの「心の叫び」ともいえる音楽です。

また、ウエルズ恵子はその著書『黒人霊歌

は生きている—歌詞で読むアメリカ』のなかで、「黒人霊歌の作者たちは、墓場以外に安心して眠る場所を持たず、月から血が流れるのを幻視する人々だった。文字は読めず、故郷もなく、説教者から聴く聖書の話をも神話のように言い伝え、歌い継いでいた。（中略）罪深いのでこのように苦しい人生を送らなければならないと、奴隷たちは教え込まれていた。罪をあがなって死ぬときが来れば、イエスが迎えに来てくれて天国へ行ける、やっと楽になるのだと、それだけを唯一の希望として生きていたようだ」と述べています。

したがって、黒人霊歌の歌詞は聖書を題材にしたものが多く、「安心できる家、孤独から免れる家、魂の家である天国、終わりのない休息がある家」をひたすら求めて「もう帰るよ」「もうじき帰れる」「きっと帰れる」と歌います。

黒人霊歌は代々口移しに伝えられたものなので楽譜もなく、もともとは極めて素朴な歌だったのですが、1871年に結成されたアフリカ系アメリカ人で構成されたアカペラ・グループのフィスク・ジュビリー・シンガーズ（Fisk Jubilee Singers）が黒人霊歌を歌って大変な評判となり、その後、米国の大学合唱団やロジェワグナー合唱団など多くの合唱団に歌われ、今日に至っています。

大阪外国語大学グリークラブは創設以来黒人霊歌を歌い続けてきており、大切なレパートリーのひとつとなっています。

外語グリーの90年を振り返るにあたり、外語グリーにとって伝統のレパートリーとなっている組曲「月光とピエロ」と黒人霊歌を採りあげるとも意義のあることといえよう。



平成28年(2016)12月3日(土)に開催された「大阪外国語大学グリークラブ創部90周年記念演奏会」の最終ステージでは、110名を超える大合唱で清水脩作曲男声合唱組曲「月光とピエロ」が演奏された。まさに、清水脩を大先輩にもつ大阪外国語大学グリークラブ創部90周年記念演奏会の有終の美を飾るに相応しいステージであった。

大阪外国語大学グリークラブ第5代指揮者であった清水脩は、卒業後、昭和12年(1937)に東京音楽学校専科に入学、昭和14年(1939)には同専科を修了するが、はやくも同年、第4回音楽コンクール作曲部門において、管弦楽「花に寄せたる舞踏組曲」が第1位入選を果たしている。昭和14年(1939)に音楽之友社に入社後も、東芝マツダ混声合唱団を指揮して全国職場コーラスコンクールで全国優勝をしたり、作曲家グループ「現代音楽」に参画したり、清水脩自身の作曲「蓮如」で、東響、東京放送合唱団、東京混声合唱団を指揮したり、と音楽活動を続けている。そして、昭和23年(1948)11月には「秋のピエロ」が第1回全日本合唱コンクール大会の課題曲として選ばれ、同じ年に東京男声合唱団(コール・ペリョーザから改名)の初代常任指揮者に就任する。そして、「秋のピエロ」に続き、「月夜」「ピエロ」「ピエロの嘆き」「月光とピエロとピエレットの唐草模様」を作曲、「秋のピエロ」を加えた5曲で、組曲「月光とピエロ」を完成する。「月光とピエロ」のように各曲の間で文学的・音楽的な、関連性をもつ「連作歌曲」の様式がとられたのは、世界で初めての試みであった。これ以降、多くの

合唱組曲が作曲されるようになる。

「月光とピエロ」が作曲された当時の様子について、東京男声合唱団の元常任指揮者坂水昶之氏は、コンクールの課題曲になった「秋のピエ

ロ」以外の曲は、1曲ずつ清水脩が指導をしていた東京男声合唱に持ち込み、「みんなでワイワイ歌いながら組曲」として完成したと、本誌への寄稿文(別掲)で記述しておられる。

清水脩自身も、日本コロニアの「月光とピエロ」全曲LP版のカバーで、坂水氏と同様のコメントをしている。



コンクール課題曲「秋のピエロ」の表紙

折りしも、合唱連盟の第3回コンクールで初めて課題曲の募集も行うことになった。

私は連盟の主筆でもあったが、それに応募し、当選したのが、この組曲の中の第2曲「秋のピエロ」であった。幸い、この曲は課題曲としては大変好評だった。その頃、私は東京男声合唱団というアマチュアの合唱団を指揮していた。そこで、堀口大学のピエロをうたった詩の中から、さらに四つを選び、次々と作曲した。それは昭和24年初頭以後の事である。曲が出来るとすぐにプリントにし、東京男声合唱団の練習日に持っていった。あとの4曲はこうして、ほぼ1ヶ月の間、つまり週1回の練習日に1曲ずつ持っていったと記憶している。

男声合唱組曲「月光とピエロ」は、大正8年(1919)に刊行された堀口大學の処女詩集「月光とピエロ」の6編のうち4編と、詩集『EX-VOTO (ささげ物)』の中の7編のうちの1編「ピエロの嘆き」から構成されている。



堀口大學

堀口大學は大正4年(1915)、23歳の時に、外交官であった父親とともにマドリッドに赴き、その際に、9歳上の女流画家で詩人でもあったマリー・ローランサンと出会い、交流を深めていく。そのことから、「月光とピエロ」にあるピエロは堀口大學自身であり、この詩集は堀口大學のマリー・ローランサンに対するかなわぬ恋を歌ったものとの解釈がなされることが多い。

しかし、熊本大学名誉教授入口紀男によると、この詩集は、シュルレアリスム(超現実主義)の先駆者として知られる詩人ギョーム・アポリネールと彼の許婚者マリー・ローランサンとの理不尽な破局と彼の死に接し、そこからインスピレーションを得て創作されたものであるとしている。入口名誉教授はその根拠について、以下のように記述している。

申し述べるまでもないが、「ピエロ」の五つの詩は、堀口大學のマリー・ローランサンに対するかなわぬ恋の歌などではない。「わがピエロ」であって、「われピエロ」ではない。堀口大學は「ててなしご」ではない。堀口大學の「ピエロ」の五つの詩は、

逝去したアポリネールに贈る、厳粛な「鎮魂の歌」である。

以下、入口紀男の「『モナリザ盗難事件』と世界最初の合唱組曲の成立」および三澤洋史の「『月光とピエロ』とアポリネールの恋」を基に、「月光とピエロ」の背景について簡単に述べていきたい。

ギョーム・アポリネールはポーランド貴族(母方)の出身で、19歳の時に、母親に連れられてローマからパリに来る。そしてマリー・ローランサンと激しい恋に堕ち、婚約をするまでになった。しかし、1911年8月22日に起こった「モナリザ」盗難事件で共犯との疑いをもたれ、1週間投獄されてしまう。のちに彼は事件とは無関係であることが判明するが、このことによって、マリー・ローランサンとの婚約は母親の強い反対にあって1912年に破局を迎えることになる。それだけではない。当時アポリネールはすでに詩人として名声を得ていたが、この事件によって、社会からも誹謗中傷されてしまう。1913年、アポリネールは、彼女に会うために毎日通ったミラボー橋を題材にして、マリー・ローランサンを思う気持ちを詩「ミラボー橋」に託している。

1915年、堀口大學はマドリッドでマリー・ローランサンと出会うが、彼女に紹介された詩人ギョーム・アポリネールの詩に熱中し、のちに彼の詩「ミラボー橋」を日本人として初めて翻訳するまでになる。

日が去り、月が行き
過ぎた時も
昔の恋もふたたびは帰らない
ミラボー橋の下をセーヌ河が流れる
日も暮れよ 鐘も鳴れ
月日は流れ わたしは残る
(堀口大學訳「ミラボー橋」から抜粋)

そして、アポリネールが亡くなった大正7年(1918)の翌年、大正8年(1919)に堀口大學は処女詩集となる「月光とピエロ」を発表する。これらのことから、入口紀男も三澤洋史も、「月光とピエロ」は堀口大學が尊敬する詩人アポリネールが終生マリー・ローランサンを思い続けながら世を去ったことに対する憐れみと惜別の歌ではないか、と結論付けている。つまり、ピエロはアポリネール、コロンビーナとピエレットはローランサンとなる。

入口紀男は、ピエロであるアポリネールについて、以下のように記述している。

詩集「月光とピエロ」の「身過ぎ世過ぎの泣き笑い」とは、官憲・一般大衆・メディアによって「ててなしご」として「差別」された現実に対して、「大いにそれを悦ぶかの」ようなアポリネールの悲しい「泣き笑い」であったと考えられる。アポリネールは、そのとき人生の「秋」をしみじみ感じた。

三澤洋史も、「月光とピエロとピエレットの唐草模様」の詩について、以下のように記述している。

月の光に照らされて
ピエロ、ピエロット
歌いけり、
ピエロ、ピエロット

これは、男女のピエロが楽しく踊っている情景ではなく、アポリネールとローランサンが運命の風に弄ばれている様を、円舞にたとえているのである。そこに月が光を投げかけていることによって、悲劇的な色を帯びているのである。では、清水脩が、なぜ、「月光とピエロ」に

惹きつけられ、合唱曲として作曲しようとしたのか。残念ながらそれを直接示す資料を見つけることはできなかった。しかし、ふたつのことから、清水脩と「月光とピエロ」の繋がりを窺い知ることができる。

ひとつは、清水脩が大阪外国語学校でフランス語を学んだことである。入口紀男は以下のように述べている。

清水脩が堀口大學の詩集「月光とピエロ」を最初にいつ手にしたかはわからない。「月光とピエロ」が刊行されたのは清水脩が8歳の時である。堀口大學はその後も数多くのフランス訳詩集などを刊行しており、とくに清水脩が15歳の時に刊行された堀口大學のフランス訳詩集『月下の一群』は日本の芸術感覚を一新するものとなった。清水脩は、遅くとも大阪外国語学校(現在の大阪大学外国語学部)フランス語科を卒業するころまでには「月光とピエロ」を手に入っていたに相違ない。

もうひとつは、清水脩自身が日本語による合唱曲を作りたいという強い気持ちを抱いていたことである。東芝EMIによる「現代合唱曲シリーズ 清水脩作品集『月光とピエロ』」のカバーの中で、清水脩は以下のように記述している。

中でも、戦後すぐのころ、東京男声合唱団というのを指揮したのは、私の音楽生活のなかで大きな意味を持っている。30名ばかりの団体であったが、メンバーの大半は、高校や大学で指揮者をつとめたり、パート・リーダーであったという連中で、根っからの歌ずきの集りであった。ロシア民謡の男声合唱を得意とし、大いに楽しみもし、あばれもしたが、私は外国の曲ばかりではあきたらず、合唱はことばがあるかぎり、

日本人には日本語のうたがなくてはならぬと、当時若手の作曲家たちに、男声合唱曲作曲の依頼をした。指揮をしていた4年ほどの間に、たしか十数曲のいわゆる《邦人合唱曲》を発表した。

いずれにせよ、世界初の男声合唱組曲「月光とピエロ」は完成し、昭和24年（1949）に清水脩の指揮のもと東京男声合唱団によって初演された。以来、「月光とピエロ」は「げっぴ」あるいは「ピエロ」の愛称で親しまれ、数多くの合唱団によって演奏され続けている。

横山琢哉は『日本の合唱史』のなかで、昭和38年（1963）10月号の『合唱祭』の記事「日本の合唱曲ベスト20順位」を紹介しているが、その記事によると、「月光とピエロ」は、第1位の「川」（橋本國彦）に次いで第2位に挙げられている。伊藤栄一、田中信昭、畑中良輔などそうそうたるプロの音楽家19人が選考委員として選定しているもので、横山琢哉も、「私たちに、これら歴史的名作を改めて見つめ直し、次の時代に歌い継いでいく必要がある」と述べている。

福永陽一郎も清水脩の作品に関して以下のコメントを残している。

男声合唱のスペシャリスト・多田武彦を除くと、清水脩ほど男声合唱のよい響きを自由に使いこなした作曲家は、日本ではほかにいない。清水脩の作品なしで、日本の男声合唱の世界を想定することは不可能であるといってよい。男声合唱の唱法のすべては彼の手の内におさまっており、それは必要に応じて実に適切に使用され、効力を発揮している。それは、比較的初期の作品である男声合唱組曲「月光とピエロ」のときから確立していた作曲家・清水脩の群を抜いた特性である。

清水脩自身も「月光とピエロ」について、以下のように記述している（日本コロムビアの「月光とピエロ」全曲LP版のカバーより抜粋）

深い悩み、遂げられぬ恋、そして耐えがたい絶望感。ピエロはそれでも、異様な衣装に身を包み、真白く顔をぬりつぶし、こっけいな身振りと笑顔をつくり、舞台に立たなければならない。ピエロならずとも、人間はいつの時代でもこのような悲しい一面を持っているのではなからうか。ことに、青年のある時代にはこのような絶望感におそわれないものはないのではなからうか。この男声合唱組曲が、発表時から今日に到るまで、高校合唱団や大学合唱団、あるいは若い男性のグループの間に、強い共感をもって迎えられ、歌われているのは、その故であろうと思っている。

大阪外国語大学グリークラブは、グリー第3世代が実施した第1回定期演奏会（昭和32年（1957）7月）で「月光とピエロ」を演奏している。そのプログラムの中で、「この美しい合唱曲は、現在、多くの合唱団によって演奏され、今や現代日本の男声合唱曲の代表的なものの一つであり、また、あらゆる男声合唱曲の重要なレパートリーとなっているものである」と解説しているように、初演（1949年）からわずか8年後には、多くの合唱団によって「月光とピエロ」が演奏されていたことがわかる。

大阪外国語大学グリークラブは第1回定期演奏会に続き、第5回、第9回、第20回、第25回、第30回、第35回、第40回と、41年間で8回の定期演奏会で「月光とピエロ」を演奏している。つまり、ほぼ5年に1回の割合で演奏していることになる。しかも、第9回、第20回、第30回、第35回、第40回と5回の定期演奏会では、現役とOBが合同で「月光とピエロ」を

演奏している。この事実からも、長年にわたって歌い続けられてきた「月光とピエロ」が、外語グリーのすべてのメンバーにとって、いかに大事な曲であるかがよくわかる。

幸いなことに、清水脩自身の指揮で、「月光とピエロ」を2度にわたって演奏している、最初は、昭和41年（1966）3月の「第1回交歓演奏会」（於東京文化会館小ホール）における東京外国語大学男声合唱団との合同演奏で、もうひとつは、昭和51年（1976）12月の創部50周年を祝う第20回定期演奏会（創部50周年記念）における現役・OBの合同演奏である。

大阪外国語大学グリークラブは、残念ながら、第41回定期演奏会をもって、その幕を閉じることとなったが、その後もOB合唱団によって、「月光とピエロ」は歌い続けられている。以下にあるように、平成14年（2002）から平成28年（2016）の15年間に「月光とピエロ」を15回も演奏している。創部記念演奏会だけでなく、林先生の退官記念演奏会、清水脩生誕100周年記念演奏会など、節目となる演奏会では必ずといっていほど、「月光とピエロ」を演奏している。平均すると、1年に1回の割合で「月光とピエロ」を歌っていることになる。ここにも、外語グリーと「月光とピエロ」の深い絆が如実に表れているといえよう。

- 2002年4月 ジョイントコンサート（東京）
- 2004年2月 ミニコンサート（大阪）
- 2005年3月 菜の花コンサート（淡路島）
- 2006年4月 創部80周年記念コンサート（大阪）
- 2006年4月 OB演奏会（東京）
- 2007年9月 さよならわれらが大阪外国語大学（大阪）
- 2008年4月 OB演奏会（東京）
- 2011年11月 創部85周年記念・清水脩生誕100周年（大阪）
- 2012年5月 清水脩生誕100周年（東京）

- 2012年7月 大阪男声合唱団定期演奏会に賛助出演（大阪）
- 2012年9月 男声合唱の響き名古屋演奏会（名古屋）
- 2014年5月 林先生退官記念「林誠祭り」（大阪）
- 2014年11月 Autumn Joint Concert（東京）
- 2016年11月 創部90周年記念演奏会（大阪）
- 2016年12月 創部90周年記念演奏会（東京）

私たちは、清水脩を大先輩にもったという僥倖を心にしっかりと保ち、これからも外語グリークラブOB合唱団が続く限り、「月光とピエロ」を歌い続けていくに違いない。

本稿を清水脩が創部50周年記念演奏会に寄せた以下の言葉で締めくくりたい。

心ゆくばかり歌い抜き、次の50年への歩みを踏み出し、百年へ向かって歌い続けようではないか。

参考文献・URL

- アポリネール（堀口大學訳）『アポリネール詩集』新潮文庫
- 入口紀男『「モナリザ盗難事件」と世界最初の合唱組曲の成立』
<http://www.geocities.jp/flowercities/pierrot/>
- 大阪外国語大学グリークラブ定期演奏会プログラム
- 清水脩「作曲者のことば」『現代日本の音楽11』日本コロムビア
- 清水脩「作曲者のことば」『現代合唱曲シリーズ 清水脩作品集「月光とピエロ」』東芝EMI
- 東京六甲男声合唱団「談話室2011」
<http://home.kobeu.com/tokyorokkodansei/danwashitsu/2011.html>
- 三澤洋史「「月光とピエロ」とアポリネールの恋」
<http://cafemdr.org/RunRun-Dairy/2016-3/MDR-Diary-20161017.html>
- 横山拓哉「現代の合唱」『日本の合唱史』青弓社

男声合唱組曲「月光とピエロ」
作詞：堀口大学 作曲：清水脩

I

月夜

月の光の照る辻に
ピエロさびしく立ちにけり。

ピエロの姿白ければ
月の光に濡れにけり。

あたりしみじみ見まわせど
コロンビイヌの影もなし。

あまりに事のかなしさに
ピエロは涙ながしけり。

II

秋のピエロ

泣き笑いしてわがピエロ
秋じゃ！秋じゃ！と歌うなり。
オー
○の形の口をして
秋じゃ！秋じゃ！と歌うなり。

月のようなる白粉の
顔が涙を流すなり。

身すぎ世すぎの是非もなく
おどけたれどもわがピエロ

秋はしみじみ身に滲みて
真実なみだを流すなり

III

ピエロ

ピエロの白さ！
身のつらさ！

ピエロの顔は
真白け！

白くあかるく
見ゆれども

ピエロの顔は
さびしかり！

ピエロは
月の光なり！

白くあかるく
見ゆれども

月の光は
さびしかり！

IV

ピエロの嘆き

かなしからずや身はピエロ、
月の孀やもめの父無見ててなしご！

月はみ空に身はここに
身すぎ世すぎの泣き笑い！

V

月光とピエロと
ピエロットの唐草模様

月の光に照らされ
ピエロ、ピエレット。

月の光に照らされて
ピエロ、ピエレット

歌いけり、
ピエロ、ピエレット。

踊りけり、
ピエロ、ピエレット。

歌いけり、
ピエロ、ピエレット。

踊りけり、歌いけり、
ピエロ、ピエレット。
ピエロ、ピエレット。

月の光に照らされて
ピエロ、ピエレット
ピエロ、ピエレット
月の光に照らされて

外語グリーと黒人霊歌



大阪外国語大学グリークラブにとって、我が大先輩である清水脩が作曲した「月光とピエロ」など清水脩作品と並んで、黒人霊歌は大切なレパートリーとなっている。たとえば、第14回定期演奏会（昭和45年）のプログラムでは、以下のように記述されている。

「黒人霊歌集」はクラブ設立以来40余年の長い月日、外大グリーに引き継がれているもので、部員の最も自信のあるものであり、伸々とした歌となって歌われるのです。

また、第29回定期演奏会（昭和60年）において、当時のクラブ顧問であった山口慶四郎先生は、外語グリーと黒人霊歌について以下のようにコメントしている。

諸君は、今宵も第4部の「黒人霊歌」に最大の努力を傾けることだろう。外語グリーが演奏する「黒人霊歌」には定評がある。この演奏には外語グリーの伝統の重みがある。

本稿では、なぜ黒人霊歌が我がグリークラブにとって大切なレパートリーとなったのか、考えていきたい。

まず、外語グリーはいつ頃から黒人霊歌を演奏し始めたのであろうか。外語グリーの定期演奏会のプログラムには、「創部以来黒人霊歌を歌ってきた」という記述もあり、かなり早い段階から黒人霊歌を歌ってきたとの印象を持つ。しかし、残念なことに、現存する資料（校友会

誌『咲耶』第7号、第9号～第20号）によると、外語グリー創部当時から少なくとも昭和15年までの演奏曲目の中に黒人霊歌を見つけることはできない。この期間、「荒城の月」などの日本の曲、「主よみもとに近づかん」などの讃美歌、シューベルトやブラームスなどのクラシック曲など、さまざまなジャンルの作品を150曲近く演奏しているが、黒人霊歌を見出すことはできなかった。また、戦後すぐの昭和22年の文化祭（和田誠三郎指揮）の男声合唱にも黒人霊歌は入っていない。ただ、岡部太郎（昭30F）の寄稿文には、昭和28年5月のグリーの再建当時に黒人霊歌を歌った旨の記述がある。その意味で、遅くとも昭和28年頃には、黒人霊歌が外語グリーで歌われていたということができる。その後、昭和31年の第11回関西合唱コンクールで、「Hard Trial」が演奏されているので、昭和28年の外語グリー再建後、黒人霊歌は外語グリーのレパートリーのひとつとなっていたと考えることができよう。

再建後、外語グリーは昭和32年7月に大阪のガスビルホールで第1回定期演奏会を開催することになるが、最初のステージで黒人霊歌を4曲演奏している。「Go Down, Moses」、「The Battle of Jericho」、「Swing Low, Sweet Chariot」、「Wade in de Water」とその後多くの外語グリーメンバーが口ずさむようになる黒人霊歌の名曲ばかりである。

第1回定期演奏会以降、外語グリーは第41回定期演奏会（平成10年1月）まですべての定期演奏会で黒人霊歌を歌っている。おそらく、すべての定期演奏会で黒人霊歌を演奏している

合唱団は外語グリー以外には存在しないのではないだろうか。

41回にわたる定期演奏会で外語グリーが演奏した黒人霊歌は66曲であるが、多くの曲を複数回にわたって演奏しているため、延べ演奏曲目数は281曲にのぼる。1回の定期演奏会で平均6.9曲の黒人霊歌を演奏していることになる。演奏回数が多い順に列挙すると以下の通り。

- 17回 「Soon Ah Will Be Done」
- 11回 「The Battle of Jericho」
- 11回 「Didn't My Lord Deliver Daniel?」
- 10回 「Wade in de Water」
- 9回 「Steal Away」
- 9回 「Deep River」
- 9回 「Little David, Play on ya Harp」
- 9回 「Swing Low, Sweet Chariot」
- 以上のほか、
- 8回 「Go Down, Moses」 など4曲
- 7回 「Sometimes I Feel Like a Motherless Child」 など3曲
- 6回 「Were You There?」 など7曲

と続く。多くの黒人霊歌が外語グリーの愛唱歌となっていたことがよくわかる。

もう一つ、外語グリーの特徴として挙げられるのがステージ構成である。一般的には、演奏会のメインとなる曲目を最終ステージに配置するが、外語グリーの場合には黒人霊歌を最終ステージで演奏している回数が多いのである。41回の定期演奏会のうち、実に26回(63.4%)にわたって、黒人霊歌を最終ステージで演奏している。外語グリーは、黒人霊歌をメインの曲目として捉えていたということができよう。

「なぜ黒人霊歌を最終ステージに乗せるのか」という質問に対する外語グリー部員の興味深いコメントがある。

ニグロはメッセージを伝える歌だと思いで聴衆に対し最も印象深くなくてはならない。普通は最後に聴いたものが一番印象に残るはずなので、4ステにニグロを聴かせ、客が感動をかみしめながら、あるいはたった今聴いた曲について深く考えながら家路について欲しい。もっともたとえ1ステに持ってきても最後まで印象に残るようなニグロを演奏すべき。(平成2年12月第34回定期演奏会プログラムから)

定期演奏会だけではない。外語グリーは、多くのステージで黒人霊歌を歌っている。たとえば、昭和37年(1962)から昭和60年(1985)まで19回おこなわれた大阪四大学交歓演奏会(大阪外国語大学グリークラブ、大阪大学男声合唱団、大阪府立大学グリークラブ、大阪市立大学グリークラブ)でも、外語グリーは17回も黒人霊歌を演奏している(別掲の大阪4大学交歓会の演奏曲目一覧をご参照)。また、昭和57年(1982)から平成7年(1995)にわたって、東京外国語大学と合同演奏会(東西外国語大学(合唱団)交歓演奏会)を7回実施しているが、第6回の清水脩作曲「日本民謡集」をのぞいて、残りの6回はすべて黒人霊歌を歌っている。

では、なぜ、このように黒人霊歌が外語グリーに愛され、歌われ続けてきたのであろうか。これには二つの点が考えられよう。ひとつは、若林允(昭34C)からのメールに答えがある。

ウィリアム E ギルキー先生はアメリカのジュリアード音楽院を卒業されたプロの音楽家でしたが、同時に外大の英語科で発音学を教えておられました。練習の合間に雑談をする機会があったのですが、黒人霊歌の英語は独特の南部の訛りが有って正統な英語と違うことがあると話されました。例えばtheはダと発音して決してザではないな

どです。そして私たちが予定していた演奏会での黒人霊歌についての発音を多少指導してくれました。当時関西の合唱界では関学、同志社が双璧で黒人霊歌も歌っていましたが、もちろん正統な英語でやっていました。それと比べて外大の黒人霊歌は黒人たちの訛りを入れた歌い方をしたので、他の合唱団とは違いが鮮明で、この一点で「どうだ!」と威張れることでした。「これは良いな」となって外大と黒人霊歌は切っても切れないものになったと思います。英語科だった大崎先輩も南部の黒人の発音を種々研究されたようです。さらに部室にはピアノも無い状況(グリーの部室だけでなく全大学の教室)であり、プロのピアノ伴奏者を雇うような財力も無かったので、アカペラを基本とする黒人霊歌が適していたことも事実です。次の年が第二回の定演でしたが、もちろん黒人霊歌は取り入れられました。

若林允のメールにあるように、外国語大学らしく発音に拘り、南部訛りのある黒人特有の英語の発音をしたことが他大学との差別化を生み、それが黒人霊歌に対する特別な思いに繋がったと考えられる。

もうひとつが、ただ単に黒人霊歌を歌い続けたのではなく、絶え間なく、黒人霊歌について考え、反省をすることで、聴衆に訴えかけるための努力を続けてきたことであろう。このことは、時々の指揮者や部長のコメントから窺い知ることができる。

確かに今までの演奏会における外大の黒人霊歌は一応の好評を博し、また部員も長き伝統を踏まえて、伸び伸びとそれを歌ってきたのである。だが、黒人霊歌を歌う際の感情移入のしやすさ故に、また歌い継がれた伝統故の取り組みやすさが故に、ともし

れば、曲に流され、霊歌特有のリズムにおぼれがちであったことは否めない。霊歌を外大流に歌いこなし所謂外大ニグロといわれる現在、伝統というものを改めて突き放して捉える必要があると思われる。そのような意味で今年は、あらゆる形式の霊歌を採り上げると同時に、霊歌を掘り下げることにより全力を傾倒してきたのである。(昭和46年 第15回定演指揮者葉山英行)

私達が「外大ニグロ」と耳にするたびに、自負心と同時にある種の羞恥心を感じざるを得ないのが正直なところだ。黒人霊歌にだけは自信があるという気持ちがここ数年クラブにしみつき、そのためニグロという枠にはまり込み、部員不足をかこちつつその中であぐらをかいている自らの姿を発見し狼狽します。私達にまず求められているのはこの枠を破っていくことではなからうかと思えます。(昭和48年 第17回定演部長足立明洋)

長年歌い継がれてきた黒人霊歌もOBの方から「きれいにはなったが迫力が落ちたのではないか」とお叱りを受けます。確かに黒人霊歌は、単に音楽的に美しい発声とかハーモニーだけで歌いこなせるものではなく、歌う者の魂を熱くし、聞く者の魂を荒々しく揺さぶる「何か」を失うことなく、さらに自分たちなりの個性を加えていくことができれば幸せです。(昭和55年 第24回定演部長村川健一)

私達がなぜ、今年の定期演奏会でも黒人霊歌を採り上げたのか。伝統だからというネガ

ティヴな考えではない。歌いたい曲が黒人霊歌だから、というのが結論であろう。おそらく長年にわたって、そうした黒人霊歌を歌いたい、という思いが一年一年積み重なった結果、それが「伝統」となったと考えてもいいのではないだろうか。先輩方ひとり一人の思いを胸に秘めながら、なおかつ、我々5人の思いのたけを自由にぶつけてみようと思う。(平成6年 第38回定演曲目解説)

大阪外国語大学グリークラブは、残念ながら平成10年1月の第41回定期演奏会を最後にその幕を閉じることになったが、グリークラブはグリーOB達によって引き継がれ、OB合唱団ミニコンサート(平成15年、16年)、創部80周年記念演奏会(平成18年)、OB会演奏会(平成18年、19年、20年)、東西合同演奏会in Tokyo(平成22年)、創部85周年・清水脩生誕100周年記念演奏会(平成23年)、ベージュ色のコンサート(平成26年)、創部90周年記念演奏会(平成28年)と黒人霊歌は今もなお歌い続けられている。

最後に、OB合唱団(東京)の指揮者である小貫岩夫先生のコメントを紹介して、この稿を締めくくりたい。

外語グリーと黒人霊歌の歴史を伺い大変驚きました。これほど黒人霊歌を愛し歌い続けた合唱団は他にないでしょう。執念と言っても良いほどまで歌い続けてきたのには様々な理由があることと思います。想像するに、「自国のものではない事柄を探求し、他所の人々の考え方や行動を知る」という、外国語大学のアイデンティティと、「他所から連れてこられ、その土地の言葉や信仰を苦しみながら受け入れ、それを自らの心の叫びにしていった」黒人たちの歌が、絶妙な魂の呼応を生み出したのではないかと。

さらに私が感じるのは、外語グリーの奔放とも言える大らかな発声(過去の現役の録音、現在のOBの演奏双方から感じるのだが…)が、黒人霊歌の表現に独特の雰囲気を与えるのでは…。外語グリーの全てのメンバーの心に、それぞれの思いとともに刻み込まれた黒人霊歌を、是非これからも歌い継いでいってください。

現役定期演奏会における黒人霊歌演奏回数

曲名	回数
Ain'-a That Good News	6
All My Trials	1
Bones Come A-Knittin'	2
Crucifixion	6
De Animals A-Comin'	2
Deep River	9
Dere's No Hidin' Place Down Dere	1
Didn't My Lord Deliver Daniel?	11
Dig My Grave	8
Do Don't Touch-a My Garment	3
Dry Bones	2
Ev'ry Time I Feel the Spirit	4
Ezekiel Saw de Wheel	1
Go Down, Moses	8
Go Tell It on the Mountain	1
Hail Mary!	2
Honor! Honor!	2
Humble	1
I Couldn't Hear Nobody Pray	3
I Got a Key	1
I Got Shoes	4
I Hear a Voice A-Prayin'	5
I Wan' to Be Ready	1
If I Got My Ticket, Can I Ride?	6
Jacob's Ladder	1

Jerusalem Morning	3
Keep in the Middle of the Road	7
Kum Ba Ya	3
Lord, I Cannot Stay Away	2
Let de Heb'n Light Shine on Me	1
Let Us Break Bread Together	8
Little Innocent Lamb	8
Mary Had a Baby	4
My Lord, What a Mornin'	2
My Soul's Been Anchored in de Lord	3
Nobody Knows de Trouble I See	6
O Lord Have Mercy on Me	2
O Mary, Don't You Weep	1
O My Golden Slippers	2
Oh, Lord, Ah Got Mo Trouble	3
Oh, Po' Little Jesus	4
Ole Ark's a Movering	4
Po' Mourner's Got a Home at Last	5
Ready When He Comes	2
Ride the Chariot	7
Rock a My Soul	2
Roll, Jordan, Roll !	1
Same Train	6
See Dat Babe in the Lowly Manger	3
Set Down Servant	3
Sister Mary Wore Three Lengths of Chain ...	2
Sometimes I Feel Like a Motherless Child ...	7
Soon Ah Will Be Done	17
Soon One Mawnin'	3
Standin' in de Need O'Prayer	3
Steal Away	9
Swing Low, Sweet Chariot	9
The Battle of Jericho	11
There Is a Balm in Gilead	3
This Ol' Hammer	6
Wade in de Water	10
Listen to the Lambs	3
Little David Play on Ya Harp	9

Were You There?	6
合計	281

大阪四大学合同演奏会の単独ステージでの
黒人霊歌演奏回数

曲名	回数
Ain'-a That Good News	4
Battle Hymn of Republic	1
Bones Come A-Knittin'	1
Crucifixion	4
De Animals A-Comin'	2
Deep River	6
Didn't My Lord Deliver Daniel?	6
Dig My Grave	1
Ev'ry Time I Feel the Spirit	1
Go Down Moses	3
I Got Shoes	3
I Hear a Voice A-Prayin'	2
Jacob's Ladder	1
Keep in the Middle of the Lord	3
Let Us Break Bread Together	2
Listen to the Lambs	1
Little Innocent Lamb	2
Little David Play on Yo'harp	2
Lord I Want to Be a Christian	1
Mary Had a Baby	1
My Soul's Been Anchored in de Lord	2
Nobody Knows de Trouble I See	3
O Lord Have Mercy on Me	1
O My Golden Slippers	1
O Po' Little Jesus	1
Oh, Lord, Ah Got No Trouble	1
Po' Morner's Got a Home at Last	1
Ride de Chariot	3
Rock a My Soul	2
Same Train	2

See Dat Babe in de Lowly Manger -----	2
Set Down Servant -----	2
Sister Mary Wore Three Length of Chain -	1
Sometimes I Feel Like a Motherless Child ---	3
Soon Ah Will Be Done -----	6
Standin' in de Need O' Prayer -----	1
Steal Away -----	4
Swing Low, Sweet Chariot -----	4
The Battle of Jericho -----	6
There Is a Balm in Gilead -----	3
This Ol' Hammer -----	2
Wade in de Water -----	5
Were You There? -----	4
When the Saints Go Marchin' in -----	4
合計 -----	108

Lord, I Cannot Stay Away -----	1
Mary Had a Baby -----	1
My Lord, What a Mornin' -----	1
Nobody Knows de Trouble I see -----	2
Same Train -----	1
Set Down Servant -----	1
Sometimes I Feel Like a Motherless Child ----	2
Soon Ah Will Be Done -----	5
Soon One Mawnin' -----	3
Steal Away -----	2
The Battle of Jericho -----	2
There Is a Balm in Gilead -----	1
Wade in de Water -----	4
Were You There? -----	1
合計 -----	55

東京外国語大学合同演奏会の単独ステージでの
黒人霊歌演奏回数

曲名	回数
Bones Come A-Knittin' -----	2
De Animals A-Comin' -----	1
Deep River -----	2
Dig My Grave -----	1
Go Down Moses -----	2
O Mary Don't You Weep -----	1
O My Golden Slippers -----	2
Oh, Po' Little Jesus -----	1
Po' Mourner's Got a Home at Last -----	2
Ready When He Comes -----	1
He Never Said a Mumblin' Word -----	1
I Hear a Voice A-Prayin' -----	1
Jerusalem Morning -----	2
Kum Ba Ya -----	2
Let Us Break Bread Together -----	1
Little David Play on Ya Harp -----	3
Little Innocent Lamb -----	3

編集註：

* 演奏会形式の演奏回数。合唱祭等は除く。

* 東京外国語大学との合同演奏は、東京外国語大学グ
リー時代と混声時代をふくむ。

第3章
寄稿



大阪外大グリークラブ再開のころ

岡部太郎（昭30 F）

私が大阪外国語大学に入学したのは昭和26年、まだ大阪の街も戦争の傷跡が色濃く残っているころだった。一、二年の前期は高槻学舎、三、四年後期は上八学舎と二つに分かれていて、高槻学舎は大学とは名ばかり、戦時中の陸軍の兵舎あとだった。教室の黒板の割れ目からは、朝日が差し込み、字が読めない。ただ運動場だけが、だだっ広かった。そんな場所だったから文化施設は何もなし、音楽的なものも何もなかった。

別棟の図書館には、当時まだ珍しかったLPレコードプレーヤーがあり、全く活躍していなかったもので、フランス語同クラスの早原瑛君（後に天王寺予備校校長、天王寺外国語学校長）と二人で、日米センターなどからLPレコードを借りて来て、毎月レコード・コンサートをやることになった。シューベルトの「冬の旅」やリムスキー・コルサコフの「シェヘラザード」など、二人で解説をしながら、二時間ぐらいの楽しみだった。当時はそんな機会もなかったもので、結構学生も集まった。

また当時、朝日新聞社と朝日会館が関西地区の全大学生のために、毎月一回、朝日会館学生音楽友の会（AGOT）を開き、ナマの音楽（クラシック）を安く提供していた。みなが音楽に飢えていたため、会員は八千人ぐらいおり、大学単位に幹事を置き、申し込みや切符の割り振

り（一公演一週間ぐらいあった）など、学生が中心に会の運営をしていたので、私も幹事に立候補し、大外大の会員をまとめることになった。そのころ、美術史の森暢先生が大学に講座を持たれ、毎月、奈良、京都の社寺の見学会をすることになったので、その方の幹事にもなった。とにかく文化に飢えていたのである。この美術同好会の方は、私たちが卒業した時に、OB会をつくり、「熟柿会」と名付けて、毎年、春秋二回、一泊で、全国の寺々を回り、中国や韓国にも遠征した。今年で六十二年になるが、まだ夫人や二世も含め、四十人ぐらいの会員のうち三十人程度が参加する。

AGOTの方は、二年の時に運営委員会に入り、会の企画や出演音楽家との折衝、解説パンフレットの作成なども経験、三年の時には、副委員長（委員長は阪大）を勤めた。中でも忘れられないのは、木下順二作、團伊玖磨作曲のオペラ「夕鶴」の日本初演。つうは大谷冴子、与ひょう・柴田睦だった。ゲルハルト・ヒッシュやヤッシャ・ハイフェッツのリサイタルもやった。

大学三年、後期の上八学舎に移って、すぐグリークラブ再建の話が出て来た。戦前、専門学校時代には男声コーラスがあり、戦後外事専門学校末期にも昭和24年、初めて女性が入学した時にも混声合唱団ができたが、私たちが入学した時にはすでに消滅していた。その混声もフランス語科が主流だったとかで、何となく二年先輩たちから、再建の話があったと思う。

そこでクラスで話したところ、三十人のうち七人が参加すると云う。他語部にもはかり、高槻の一、二年生にも勧誘に行った。指揮、指導は、昔、専門学校時代にもグリーの指揮をされていた、フランス語部教授の和田誠三郎先生が、当時は大阪大学の仏文教授だったので、お願いすることにした。

ところが困ったのが、上八にも高槻にもピアノが無かったこと。まさに「私はピアノがない」状況。最低、一週間一度の練習は必要で、しかも上八と高槻両方が集まりやすいところ、梅田ならいいだろうと、卒業生の伝手をたどって曾根崎小学校にお願いにいったら、運よくOKをいただいた。

メンバーは何とか二十二、三人は集まったが、ほとんどはコーラスが初めての素人。満身に楽譜を読めないものもいる。幸い、当時、朝日会館合唱団と云うセミプロがあり、同じクラスの藤原保彦君など、数人がそのメンバーであったため、各パートに一人は中心となる人を置くことができた。

こうして昭和28年の5月から、何とかグリークラブの再建が出来、曾根崎小学校で午後六時から週一回の練習が始まった。私は無難な第二テナーである。和田誠三郎先生の指揮で始めた最初の曲は「希望の島」だった。外国語大学の合唱団であるから、歌う曲は専門学校時代から中心だった黒人霊歌や各国の民謡を原語で、と何となく暗黙の了解があったが、何分にも寄せ集めで、すぐにうまくゆくはずもない。和田先生もさぞ苦勞されたと思う。それでも、何とか黒人霊歌の四、五曲、「ブンガワンソロ」などと進んでいった。

その頃の大阪外大の文化行事は、前期高槻は「外大オリンピック」。要するに運動会だが、各語部別対抗で、仮装行列が売り物だった。それぞれ行列に趣向を凝らし、語部、民族の特色が出るから派手で面白い。フランス語部は、われ

われ一年生が、「フランス映画史」として、それぞれの映画のタイトルの仮装で練り歩き好評だった。後期は三年生中心で「外語語劇祭」が秋の売り物だった。世界の名作、創作なんでもありで、ただ必ず各語部の原語で演じなければならない。当時は焼け残った上八学舎にも、満足な講堂はなく、大阪・大手前の国民會館が語劇祭の会場であった。当然ながら、われわれグリークラブのお披露目もその文化祭であった。何しろグリー再出発後、半年足らずでのデビューである。練習不足は免れず、公演一か月前には、京都・高雄の神護寺へ、全員一泊二日の合宿に行った。

神護寺は国宝の平重盛や源頼朝の肖像画が有名で、美術の森先生は毎年、国宝の虫干しの時に、寺で解説をされており、その縁で美術同好会のメンバーは、かわらけ投げの谷の上にある、独立した地藏院に何度か泊まったことがあって便利に使えた。そこで誰に気兼ねもなく、まる二日間、みっちり練習した。

その意気込みとは裏腹に、黒人霊歌を中心とした三十分足らずのグリーのデビューは、あっけないほどアツと云う間に終わってしまった。四年の卒業の際も語劇祭でのグリー公演で、世界民謡集を歌ったが、主力は三年生以下で、四年生は応援出演に回った。その時は、指揮者はドイツ語三年の増森邁（つとむ）君だったと思う。

一方、当時、大阪の新日本放送（後のMBS毎日放送）のラジオ放送で、京大の仏文教授の伊吹武彦先生が、毎週「歌うフランス語講座」という30分番組を担当しておられ、そこで歌曲やシャンソンを歌っていたのが、フランス語同級の岡本恵一君だった。岡本君は京都の鴨沂高校の出身で、すでにセミプロであり、私達より一ランク上の存在だった。そんなことから、私達に声がかかり、フランス語合唱曲や、バックコーラス、シャンソンなどを歌うことになった。グリーにフランス語が多いことが

役に立った。岡本君のソロのバックで、フランス国歌「ラ・マルセイエーズ」やジョージ・コスマの「枯葉」、「ラ・メール（海）」、「自由を我らに」の主題歌「自由万歳」など。特にクリスマス前にはアダム作曲の「ノエル」（クリスマス）。この曲はフランスでは生誕祭に必ず歌われる有名な曲だが、当時、日本には、未だ入って来ていなかった。今でこそ、どこでも聞かれる名曲だが、はからずも我々の歌ったのが、日本初演であった。

MBSラジオへの出演は、当然、なにがしかの出演料になった。それは皆のコンパの支払いに消えたが、それは何よりの楽しみであった。ラジオ出演のために、何かコーラスのネーミングをしようという話になった。フランスでは戦前から戦後に活躍しているコーラスのグループ、「コンパニオン・ド・ラ・シャンソン」（歌の仲間たち）というのがある。そこで伊吹先生が「コパン・ド・ラ・シャンソン」（コパンは仲間の俗語）はどうだと命名され、立派なグループ名もできた。

この成功で皆、大いに自信を持ち、今度は誰かが、ミナミのビヤホール「ミュンヘン」のクリスマス・キャロル出演の話を持ってきた。クリスマス・イブと当日だけではなく、その前何日かも、一日二回ぐらいホールで歌ってほしいという、願ったり、かなったりの話。出演料はもちろんのこと、終わったあとはビール飲み放題という夢のような話だった。当時はクリスマス全盛時代で、飲んだ帰りにはクリスマス・ケーキを持たせる風俗が当たり前。街には一か月前ぐらいからクリスマス・ソングがやかましく鳴っていた。それだけに英語でのクリスマス・キャロルは、みなお手のもの。短時間で

クリスマスの合唱の用意は整った。それぞれのステージの終わりには、アダムの「ノエル」を歌った。そして後の生ビールのうまかったこと。四年のときには北のビヤホールでも歌った。

戦後間もなくで食糧難。外食も食料切符がなければ食べられない貧しい時代だったが、そのころの大阪生活は心豊かな時代でもあった。

私たちの在学中にフランス語科卒業生で、すでに有名だったのは、作曲家の清水脩と美術評論家の植村鷹千代の両氏。清水氏の合唱曲「月光とピエロ」は既に名前が知られていたが、未だ我々には手が届かなかった。司馬遼太郎や陳舜臣はまだ文壇には登場していなかった。司馬遼太郎が「梟の城」で直木賞をとったのは、まだ数年先のことだった。その後の司馬遼の文壇での活躍は、皆の知っている通りで、大阪外語の卒業生と云えば、今は国民作家・司馬遼太郎ということになってしまった。

昭和30年卒業と同時に私はマスコミ志望通り、運よく名古屋の中日新聞社に入社できた。最初一年間は名古屋で基礎的な勉強、二年目から三年間は静岡支局、そのあとは東京支社政治部で、昭和38年、東京新聞を吸収合併したことにより、東京本社勤務になった。その間、昭和50年からパリ特派員も二年間経験した。ジルベール・ベコーやジュリエット・グレコ、イブ・モンタンやアダモ（ベコーの前座で歌っていた）などのシャンソンをボビノ座で聞いたほか、なんと「コンパニオン・ド・ラ・シャンソン」の引退りサイタルまで聞くことができた。

編集註

岡部太郎さんは、平成30年4月19日、満86歳にて生涯を閉じられました。ご冥福をお祈り申し上げます。

藤原保彦（昭30 F）

私の在学中、昭和二十年後半の外語グリーククラブでは、残念ながら誇るほどの華やかな活動の思いではありません。

そこで、当時外部のコーラスグループに所属し活動した、私のささやかな経験を述べ、当時の関西地区や海外のコーラス活動の思いで一端をご紹介しますかと存じます。

当時中之島に朝日新聞本社があり（現在も同じかな?）、隣接して朝日会館という、当時の関西地区では著名なイベントホールがあり、そこを拠点に「アサヒコーラス」というコーラスグループが活動しておりました。オーディションを受け入団、コーラス活動を始めました。

当時の関西交響楽団での「第九」や「メサイア」の演奏会では、朝比奈隆指揮によりコーラスで共演、また東京からの二期会オペラや関西オペラの公演では、コーラス部門を受け持ち、柴田睦陸・立川澄人らと共演した懐かしい思い出があります。宝塚大劇場で「コジファントウテ」に共演した記憶もあります。今顧みると、はなはだ未熟なものであったと、冷や汗ものがあります。

就職した後、コーラス活動も少し低調となりましたが、再燃するのはその約十年後の事です。

仕事の関係で英国・ロンドンに勤務した際、現地でロンドンフィルハーモニー交響楽団付属のコーラスで団員を募集し、オーディションに合格すれば団員になれることを知り、挑戦しました。何とか合格し、団員として活動することになりました。

仕事を終えて、夜間、週二回ロンドン塔ちかくの練習場で、ジョン・オールデイス（合唱指揮者として世界的に著名な人）の指導で練習することになりました。

ロンドンフィル専属のコーラスですから、ロンドンフィルの定期演奏会で、「第九」「メサイア」「バッハ・ロ短調ミサ」「マーラーの復活」等で共演したのを記憶しています。同僚の団員の中には、経験豊かな人も多く、フルトベンガーと共演の経験があるという、溜息の出るような猛者もいました。

当時の常任指揮者はダニエル・バレンボイム、レオナルド・ハイティンク、客演ではゲオルグ・ショルティ等々、世界的な指揮者のもとで、ロンドンの著名なコンサートホールであるフェスティバルホール、ロイヤルアルバートホールなど歴史的なホールでの演奏、夢のような経験でありました。

練習時の休憩時間には、世界的な指揮者も我々コーラスメンバーとも気軽に雑談を交わり、又ある時はバレンボイムがピアノ協奏曲の独奏者（ラドループであったと記憶します）とピアノを二人でイタズラ弾きをする等、日頃我々が見ることが出来ないような貴重な場面も目にしました。

ロンドンフィルのベートーベン交響曲・協奏曲シリーズのレコーディングにも参加、ピアノのA・ブレンデルと共演したことも、今や歴史的な思い出であります（後に、CD版で日本でも発売されました）。

世界的な音楽家とまじかに接し、共に歌うという、貴重な機会を得たことは、「コーラス」が取り持つ縁でありました。

グリー復活の思い出

稲岡瑛一（昭31 E）

自分の出身高校は加古川東で、加古川から2時間以上かけて外大に通学した。

グリー復活のきっかけは、朝日スモールコーラス（学生がメンバー）で一緒になった増森邁さん（昭31D 故人）と桧垣明さん（昭31E 故人）が意気投合して高槻学舎で練習を始め、自分もそれに合流した。増森さんは伊賀上野高校出身で高校時代から合唱の経験もあり、大阪音大卒の先生にも習っていた。

ほぼ同じ時期に上八学舎でも早原瑛さん（昭30F 故人）、岡部太郎さん（昭30F）、岡本恵一さん（昭30F 故人）達も活動をはじめた。高槻の1～2回生も合流して、上八での文化祭（外大祭）出演を目標にして練習を始めた。扇町の米軍施設、幼稚園などで練習したこともあった。

指導は阪大教員の外大グリー OB 和田誠三郎さん（昭2 F）でドイツミサ。しかし曲が難しくてうまく行かず、和田さんは匙を投げてしまった。結局文化祭には増森さんの指揮で出演しドイツミサを演奏したが出来は良くなかったと思う。その後卒業するまで毎年文化祭には出演したが、易しい曲に変えたと思う。指揮は増森さん、曲目は覚えていない。

「歌うフランス語講座」には何回か出演した。その時の中心であった岡本恵一さんはフランス語が堪能で、大南公司（ベトナム関係）から丸紅に移り、その後また別の商社に移ったと記憶している。

編集註：2017年4月14日、宝塚ワシントンホテルに於いて、ご本人よりお話を伺いました。

大阪外大グリークラブの思い出

林治郎（昭31 C）

小生が大阪外大に在学していたのは、1956年ごろだったろうか。滋賀県の近江八幡から、前半2年は、高槻の校舎、後半の2年は、上本町8丁目（上八）の校舎に通った。

遠方からの通学なので、余暇の活動に参加する時間はあまりなかったのだが、大学後半には、当時ゼミで一緒だったフランス語の辰巳君とグリークラブに顔を出した。特にフランス語は、我々より上の学年の、歌の上手な人が、毎日放送の、京大の伊吹武彦教授による「歌うフランス語講座」というプログラムに出演して、伊吹

先生が解説するフランス語のシャンソンを、その外大の先輩が歌っていた。

小生が4回生のクリスマスの季節に、伊吹先生は、フランスのクリスマスの歌、Noel d'Adam を取り上げられた。これを、その年のクリスマスの季節にフランス語で紹介しようと、外大のグリークラブに合唱の依頼があった。このおかげで、今もクリスマスの季節に商店街からこのメロディーが流れると、口づさむことができる。

グリークラブの合宿には、一度だけ、京都の西の郊外、神護寺での合宿に参加した。練習の時の指揮は、ドイツ語の同学年の増森君がやっていた。佐原さんという人もいたような気がする。

金子康之（昭32 E）

自分は幼時、父親が一寸した企業を経営していた関係で、応接広間でWestinghouseの電気蓄音機を使ってダンスパーティーが開かれ、当時の流行歌（歌謡曲）に親しんだ。中高は大阪明星学園で、蹴球、バレーボールのクラブに入り、音楽はAGOT（朝日学生音楽友の会）でクラシック音楽やオペラを楽しんだが、コーラスの経験はなかった。

外語入学以降はESSに入り、そこで知り合った大崎氏等の誘いでグリーの練習会場を覗いたところ、楽器なしで音叉で音を取ったりしていたが、人的交流に惚れ込んで入部した。

グリーでは部長を拝命することになったが、運動部の女性マネージャーのごとく、事務的なことをやっていて、音楽活動の中心は大崎、野田、岡田（いずれも昭33年）、桧垣、増森（いずれも昭31年）、岡本（昭30）、佐原（昭32年）などであった。

当時の部員は10数名、練習は上八学舎の汚い部室で音叉を頼りにやっていたが、大崎氏が音取り用の笛を買ってきて、のちに小さな鍵盤楽器を調達してきた。指揮者は大崎氏まで誰もいなくて、初めは桧垣氏、岡部氏らが中心になってパート練習ばかりやっていた。大崎氏は素晴らしい人格

者で有能な指揮者であった。音感があり音程にうるさかった。自分（バリトン）は声が大きかったのでたびたび抑えるように注意された。良くハモった時には、お尻をくすぐられるような快感を感じたものだ。ニグロの曲は大いに唄った。Gaigo will shineもオリジン不明のまま唄っていた。

ピアノとピアニストの調達が大問題で、ピアノがある会場探しに奔走した。演奏会に出た記憶はない。外語祭出演の記憶もない。一回だけ、大崎氏が持ち込んだ民放番組に出演、ノエルを歌ったが、歌うフランス語講座ではなかった。比叡山のお寺での合宿、四国での合宿などもやった。

（余談）

キャンパスではバンカラ風が目立った。学生運動が盛んな時代で、外大は左翼の巣の様相を呈していた。当時の平澤学長の御子息（平澤道夫氏 故人）が一年下にいたので、一緒に創志会なるグループを作って抵抗し、極左分子が学内施設を利用するのを阻止したりした。当時の学生課長も応援してくれた。

編集註：2017年5月17日、お茶の水のホテルに於いて、ご本人よりお話を伺いました。（12月4日付寄稿により補充）

外大グリーの思いで

大崎直忠（昭33 E）

私は京都府立鴨沂高校の出身で、混声合唱部に入っていました。特に熱心というわけでは

ありませんでした。

大阪外大入学と同時にグリークラブに入りました。当時のグリーは隆盛を極めていたわけではなく、人集めを大いにやりました。指揮者は

阪大から来ておられたと記憶しています。

私は小さい時からピアノをやっていたので、耳が良く音程にはうるさい方でした。長井先生が良くおっしゃった「外語ハーモニー」とは、音程を正確に歌った結果だと思えます。ニグロ・スピリチュアルは当時も盛んに歌いましたが、英語の発音は良くなかったです。

ガスビルホールで第1回演奏会を主催したのは、同級生に当時のガスビルホールの重役の娘（辰馬篤子さん）がいたからという、単純な理由からでした。

当時、風が吹けば飛びそうな弱小グリークラブで、関学や同志社のグリーには及ぶべくもなかったのですが、ガスビルホールという舞台に

立っただけで不思議なことに自信につながったような気がします。

「ピエロ」の演奏に先立ち、杉並の清水脩先生のお宅にお邪魔してご意見を伺おうとしましたが、作曲家は曲を作るだけ、曲を生かすも殺すも演奏家次第、と言われて妙に納得して帰ってきた思い出があります。しかし今考えても「ピエロ」は名曲でした。

大阪外大も今や阪大の一部となり果てましたが、昔の大阪外大の伝統が受け継がれて行くことを望むばかりです。

編集註：大崎直忠さんは平成30年5月23日、満84才にて生涯を閉じられました、ご冥福をお祈り申し上げます。

90周年誌によせて

河盛龍三（昭34 E）

私がグリークラブへ入部したのは昭和29年で、当時の校舎は高槻市にあり、旧陸軍の高射砲隊兵舎跡であった。

入学した当座はグリークラブの存在を知らず、同じクラスのクラブ員の熱心な勧誘のままに教室に集まって練習していた。バイトに忙しい部員を捕えて練習に参加してもらうのに校門で待つこともあった。校門といっても柱が2本立っているだけで、抜けて帰るのは容易であった。

校舎にはピアノがなかったので練習が大変であった。合宿練習は鞍馬山の中腹にあるお寺で、

風呂は五右衛門で食事はカレーライスであったが、付近に人の気配もなかったので声量には遠慮は要らなかった。

演奏旅行に伊賀上野の中学校の講堂へ行き、学生が大勢聴いて呉れたが、終了後女学生が2人サインを求めて来た。サインをしたのはこれが最初で最後であった。

毎日放送の唱うフランス語講座というラジオ番組があって、ラ・ノエルを歌った。ラジオもこれが最初で最後であった。

当時の同期生とは今でも家族同志で海外旅行をしたりして、生涯の友と考えている。

グリークラブの思い出

千布正人（昭34 F）

我々の在学時代は校舎が前半の二年間は高槻（教養課程、現在はこのような分け方があるかどうか知らないが）、後半二年間は上本町（専門課程）、と分かれていた。上八に統合されたのは昭和32年度からであった。

従ってグリーの練習も普段は双方に分かれて行い、文化祭の発表会とかコンクールの準備の場合は高槻から大阪に出掛けて全体練習を繰り返した。高槻在住のメンバーには部費から往復の交通費が支給され、高槻に下宿していた貧乏学生の私にはとても嬉しかった。

高槻は元兵舎の跡で空き部屋は沢山あって、そのうちの一つを部室に利用していた。初めは楽器ひとつなく音をとるのに音叉によるという極めてprimitiveな方法に頼っていた。そのうち、メンバーの藤野薫君（昭34F）からオルガンの提供があり一応合唱団としての体裁は整った。

当時学生の合唱団コンクールは毎年11月朝日会館（昔の朝日新聞社の西側の黒いビル・現在中之島フェスティバルタワーウエスタの西）で行われていた。これを目指して我が外語グリーも頑張って毎年チャレンジした。現在はどうか知らないが、我々の時代は関学や同志社

といったクリスチャン系の私大がひと際群を抜いており、口惜しい思いを重ねたのも今は懐かしい思い出である。

夏休みの合宿については他に譲るとして、春休みを利用しての演奏旅行についてひとつ。演奏旅行と言えばまるで一流の演奏家の様に聞こえるが、若者の銜いというか無知というか、我々は平気でこの言葉を使っていた。確か昭和32年の春であったと思うが、四国の善通寺（練習）と高松（発表会）でその演奏旅行を行ったのである。善通寺の立派な日本旅館に滞在し、練習は近くの小学校の講堂を借りてみっちり行ったうえ高松へのりこみ、高松市の公会堂で発表会を行った。当時香川県の知事か副知事が外語の先輩の方で、恐らくこの先輩と同窓会高松支部にいろいろ御世話になったことと思う。発表会後わざわざ高松の宿までお越し戴き、発表会の成功を祝って盃を挙げて下さったことにメンバー一同大いに感激したことであった。

以上思いつくままに書き連ねたが、最後にひとつグリークラブの雰囲気について。そこには体育会系的上下の関係は微塵もなく、メンバー各自の個性が尊重され夫々がのびのびと青春を謳歌できる場であり、心安らぐ時間と空間と仲間がいたということである。

外大グリークラブの思い出

若林允（昭34 C）

1955年3月の某日、紅顔の一青年が高槻にあった外大の校門をくぐった。この日に父兄とともに来校し、入学手続きをするようにとの通

知を学校から受けていたからである。中学生の時代から憧れていた中国語科に入学を許可されたので有頂天であった。真新しい角帽をかぶり、磨き上げた革靴を履いた青年は前途に大きな夢と希望を持って現れたのである。

ところが先ず驚いたのは校門に十数人の先輩たちがたむろしており、入学金と初年度の学費を支払うなと呼びかけていたことであった。入学金はたしか3万円だったと思うが、国立大学が入学金を徴収するのは間違っているというのが先輩たちの主張であった。大丈夫ですかと問うと「俺たちも払わなかったが、今でもちゃんと学籍がある」とのことで結局支払わずに入学手続きをすませることが出来た。卒業時の成績が良くなかったのはこの未払いと関係が有るのではないかと思うが、今では忘却の彼方である。

新入生のクラス分け（1クラス25人、2クラス）、学生同士相互の自己紹介、必須科目の説明、担当教授の挨拶、教養課程での授業の説明、一学年での単位取得の方法、などなど。一連の作業が終了し、ほぼ落ち着いた段階でクラブ活動に参加したいと考えた。高校時代に混声合唱をしていたので、合唱部に入ることは最初からの希望であった。しかし当時の外大には女子学生がとても少なく、中国語科では50人の新入生で女性は2人しかいなかった。この状況では混声合唱は望むべくもなく、男声のグリークラブしかなかった。

ある日部室を訪問すると大崎さん、岡田さん、清水さん、末次さん、野田さん、吉岡さんなど諸先輩が歓迎してくれた。常時練習に参加されていたのは4、5人だったと思う。私たち新入生は12、3人で14、5人が普段の活動に参加していた。当時キャンパスは高槻と上八に分かれており、1、2年生が高槻、3、4年生は上八であった。

この年に大崎さんが指揮者となられて外大グリーは中興の時期を迎えたのである。高槻のキャンパスは旧大阪第八連隊の兵舎が利用されていた。「またも負けたか八連隊」と揶揄されていた軍隊であったようだが、戦後すでに10年経っていたのに兵舎は残されていたようである。もちろんこの10年間は適当な補修はされていなかったであろうから、木造のボロボロの校舎で

あった。部室が提供されていたはずだが、冷暖房などは当然無かったので、あまり記憶にないが冬はどのように過ごしたのであろうか。部室には半分壊れたオルガンがあったが、とても弾ける状態ではなくて、部員たちは音叉一本を頼りにドレミで音取りをし、メロディーをつけていた。新入生たちは誰も初心者であり、それを指導される先輩たちは大変なことだったと思われる。

この年に比叡山で合宿をしたのは忘れがたい記憶である。比叡山の山頂にあるお寺で行ったのだが、全員に注意されたのはお米を一升持参するよにとのことであった。現在では考えられないことだが、当時は「米穀通帳」という制度が有り、お米は配給制度であり全国民が毎月入手出来るお米の割当量が決められており、いわゆる「闇米」の入手は簡単ではなかったのである。このため私たちを受け入れてくれたお寺からおかずはなんとかするが、お米は自分たちで工面するよにとのお達しが有ったのである。現在のOB名簿によると平成10年代の卒業生がおられるようだが、このような時代が有ったことは信じがたいことであろう。

この比叡山での合宿は翌年も行われたが、私の自慢は麓から約1.5時間の徒歩による山登りを2年連続で一着で登り切ったことである。今では駅の階段を上るのも青息吐息であり、全く夢のまた夢である。1956年グリーとしては初めて関西音楽コンクールに参加した。私は自由曲のソロをさせてもらえることになった。たしか「Sometimes I feel like a motherless child」だった。嬉しくてその前夜友人たちと深酒をし、翌日コンクールに遅刻してしまった。急遽末次先輩がやってくれたが、突然の指名で困惑されたことと思う。全く言い訳の出来ない失敗であったが、先輩たちは余り強く叱責することもなく許してくれた。本当に優しい人たちであった。翌年には四国で合宿、高松での演奏会と活動が活発となった。更に特筆すべきはガスビルホールでの

第一回定期演奏会である。そのプログラムなどは加藤君（昭48S）の労作アーカイブスに詳しい。ぜひご一読をお勧めしたい。1957年4年生となった私たちはT1の中で組を作ったと称し、PL（パートリーダー）だった小林君を親分、私

を兄貴と呼び交わしていた。後輩たちもその気になって、子分として丁寧に接してくれ、まことに楽しいクラブ活動を続けることが出来た。

充実した学生生活であった。ある octogenarian の回想である。

錦織りなすグリーン

赤坂一郎（昭35 C）

私の外大入学当時（昭和31年（1956））、本校はまだ大阪は上八でしたが、ジュニアコースは高槻の（戦時中は兵舎として使われてたとかの）おんぼろな木造の校舎でした。

それでも、何と云っても「貧乏人」の私にとっては、見事「国立大学」突破（当時の学費は、なんと年間で6千円、月割り5百円だから、育英奨学金でも月々3千円貰えたので大助かり）の喜びで一杯、さあこれからは学生生活を謳歌せん！とばかり遠路明石からの通学のスタートとなったのでした。

出掛けてみれば、おんぼろ校舎とは裏腹に、燦々と春めく校舎一杯に「新入生歓迎！」とばかり、各クラブのそうそうたる面々の、あの手この手の誘致合戦が展開されていて、私はつついグリーンクラブに「拉致」されてしまったのでした。

それまでの高校時代では、音楽部と云えば、みんなはピアノや楽器のある「ええとこの子だ！」と、貧乏人のひがみ、音楽とは距離を置いていた私でしたが、“グリーンクラブは無伴奏でからだは楽器だ！”との説明に、“からだは楽器なら一銭も要らんわ!!”なんて、そこはやはり貧乏人の浅はかさ、極めて単純に納得して飛びついたのでした。

私のグリーン初体験はこうして始まったのでし

たが、かと云って大学の四年間部活に何か画期的な貢献をしたか？と問われれば誇らしく語れるものは何もありません。放課後ともなればバイトに追われ遠路明石へと帰路についたのでした。

しかし今にして振り返って見れば、大学でのグリーン部活での体験は私にとっては、その後の凄まじい苦節の社会生活の中で大いに役立ったことでした。

かれこれ定年リタイアの頃、大阪では同期の紙谷さんが岡田先輩を担いで“OB会を立ち上げたい”とて、こんな私にも声をかけてくれたのでした。これは丁度現役のラストコンサートの時だったのです。親子ほど歳の違う現役部員の松尾君らとステージを共にしたのでした。なんでもその時に歌った「海鳥の詩」は同君の故郷への気持ちからのレパトリーとのことでした。

こうしたことがきっかけで、それからの大阪の再興への活動が始まったようです。ある先輩の関係する天王寺の予備校での練習をスタートとして、続いて後輩の上田君のご好意で、ご実家の経営する梅田の服飾学園を借りてのミニコンサートが立て続けに始まりました。同時にこの頃、上京のついでに中国語の先輩の野田さんを訪ねて見ると同氏の職場も、夕方からの東京OB会の練習場に提供しているとのお話しに、東京との一体感を覚えたものです。

「若い後輩」と云えば、この頃団内指揮を買って出てたのが河原君でした。彼の一家は上

げて音楽好きで奥さんはじめ娘さんもいろんなサークルで活動されてるようでした。

やおらするうちに大阪では林誠先生を正式に指導者・指揮者として迎え、時には豊中の音大本校も含めた練習が始まりました。同時に自称「怪物」たる山口慶四郎顧問先生の再出現と相まって演奏会企画実行面での凄まじい発展がもたらされました。

「佐原真さん追悼」を掲げ府立弥生文化博物館へ遠征したり、阪神大震災10周年を捉え花の3月には「菜の花コンサート」として淡路島へ飛んだり、「司馬遼太郎と大阪外国語大学」の意義を語るべく姫路文学館へと飛ぶなど、山

口先生の講演つきコンサートとしても大きく発展したのでした。

こうして振り返って見ると、現役の大学での活動は（とりわけ私などサボりにとっては）4年間というごくごく限られた範囲の活動でしたがOB会が復活継続しているお陰で大先輩から若き後輩まで長い長いタテ糸とヨコ糸が様々な繋がりを産み出し見事な「にしき織り」なるものと思います。

そうした意味でますますの継続と、その時々々に携わってくださる役員の方々、当面目下では「創立90周年記念誌編集作業」に携わっていただいているの方々への心からの御礼を申し上げます。

スポーツ少年合唱にはまる

紙谷（杉田）敬治（昭35 IN）

私は元々スポーツ少年でした。特に中学時代は陸上競技部に所属して年中走り回っていました。その中でもジャンプ種目が得意で、幅跳び、三段飛びや高飛びを専門にしていました。その2年生のある日、英語の先生が新しく赴任され、その先生から音楽（クラシック音楽）を聞く機会を与えられて、先ずクラシック音楽にはまったのが始まりです。元々音楽は嫌いではなく、音楽の成績も悪くはなかったのですが、実際にクラシック音楽に触れたのはその頃が最初でした。ついでながら、その中学時代の先生とは現在もお付き合いがあり、その仲間と共に年に一回一泊して集まっています。

高校に入ってやはり陸上競技部で活動をしていたのですが、1年生の夏に流行性肝炎にかかりまして、運動が出来なくなりました。その時にクラスに合唱部のメンバーがいて、「お前、歌が好きなら歌いに来んか？」と誘われた

のが、合唱にふれた最初です。

高校時代は合唱コンクールに出るとかいった活動はなく、せいぜい文化祭で歌うという程度でしたが、だんだんと抜けられなくなり、大学の入学式の日にはグリークラブに入部をお願いに行きました。当時大阪外大は1年と2年が高槻市にある分校で、3年と4年が上八でした。昭和31年（1956年）とすでに60年以上も前の事で、記憶もさだかでないのですが、週に一回か、それと何かイベント（学園祭とか）のあるときに上八へ行って合同で練習をしたように思います。高槻分校は、私が2年の時になくなり、全部上八に統合になりました。

大阪外大の上八校舎は空襲で完全に破壊されて、その瓦礫で再建をしたお粗末なものでしたが、やっと新しい校舎が建て増しされて我々が統合出来たのです。グリークラブも戦後の混乱から立ち直っていよいよ本格的な活動に入ろうとする意欲に満ちていました。当時の4年生の人たちはその先頭に立っていました（大崎さん、

岡田さん、野田さん、清水さん等々)。

戦後第1回の定期演奏会をするという意気込みがすごかった。大正15年(1926年)に創部された戦前のグリークラブはうまくいった。この話はよく聞かされました。それがこの意気込みの底辺にあったのではないかと思います。

昭和32年の春休みに四国の善通寺で合宿練習をしました。そしてその7月に大阪ガスビルホールで第1回定期演奏会が開催されました。当時ちょうどダークダックスがデビューして人気が出始めた頃でして、男声合唱がもてはやされて来た頃で、会場は大入りで溢れました。兎に角チケットを売るなんて初めての事でどれだけ来てくれるかわからず盲滅法に売りまくったのです。後でしかられました。その後ご承知のとおり、グリークラブは順調に活動をつづけて1998年の第41回の定期演奏会を最後に現役クラブは消滅します。

私は第2回(ABCホール)と第3回(産経ホール)に出演しています。第2回(1958年)ではマネジャー、第3回(1959年)では部長をしていました。クラブの運営は順調で、メンバーも大体50名くらいはおり、特に何に苦労したと言うような事はなかった。なにか、何時の間にかすーと過ぎてしまった感じです。マネジャーや部長時代の苦労話とかよく言われますが、そんな事あったかな。

2年生の時にサブマネジャーになりまして、夏の合宿地を信州の方でやろうという事でその設定を命じられまして、色々長野県の各都市の教育委員会等に手紙を書いて合宿地を紹介して貰いました。その中から岡谷市の諏訪湖のほとりで古い養蚕業をやっていた建物が今集会場として使われていると言う事でそこでやる事にして、下見に行ったり、色々交渉した事を思い出します。

その中で特筆すべきは1959年(昭和34年)の合唱コンクールで関学、同志社、京大について4位になった事です。この事で今も鮮明に記

憶している事は、当時、メンバーは昼食時には部室に集まって、パート練習をやっていました。それが何時の間にか習慣的になって、それこそ雨の日も風の日も部室に集まってパート練習をやっていました。私はこの4位の成績は当然指揮者の松木さんの技量も優秀であったのですが、この習慣的にやっていた昼食時のパート練習が大きな要素であったと思っています。徹底したパート練習によって各パートの音程・リズムのみならず、各パートの音色が揃った。これが最大の要素であったと確信しています。それで私はアマチュア合唱団がうまくなるには、まず徹底したパート練習をする事、それ以外に方法はないと今も信じています。実際、中々その時間が取れませんが、現在のOB合唱団でも出来るだけパート練習の時間をとるようにしています。

4年間の大学生活の80%くらいはグリークラブで過ごした時間であろうと思っています。クラスには授業の時だけ行って後はほとんどクラスに居なかったのではないかと。クラスメートとは現役時代あまりお付き合いはなかったように思います。現在そのクラス(昭和35年卒インドネシア語学科大8回)は毎年10月末にクラス会をやってまして、すでに25年以上続いています。これには毎回参加してまして、今になってクラスメートとお付き合いをしています。

1998年に現役グリークラブの消滅後、2001年5月に河原敬さん(昭和57年卒大E30)の呼びかけで大阪でも東京に続いてOB合唱団がスタートしまして、私も岡田さん等々と共に参加しました。2006年に創部80周年記念演奏会の開催ではマネジャーとしてその企画・実行に携わりました。その後は一団員としてT2で楽しく歌っています。

退職後の生活の中で合唱の占める割合は非常に大きく、若い頃から合唱にはまり続けて来た事の喜びを感じています。95周年—100周年と歌いたいものですが。果たして???

Glee Club 参加と微かに残る思い出

菅原基晴（昭36 C）

Glee Club入部は第一回定演の終了後で、夏期合宿練習の時でした。英語科の山田（故人）氏と諏訪湖周縁の合宿所へ新入者として参加しました。中国語科で同期の筒井氏（故人）と吉本氏（B1）も一緒だったので、安心して参加しました。

参加のきっかけは、入学してすぐの頃、担任の伊地智先生（故人）から、朝、上級生が授業前に中国語の歌を下級生に教えている。発音に慣れるのと歌を通して中国語の勉強になるので出るように、と勧められました。

その当時、グリー部員である野田先輩（故人）、若林先輩が歌の指導者でした。後日知った事では、神田先輩、赤坂先輩等も指導に参加されていたようです。その内、朝の練習は無くなりましたが、グリーの第一回定演を聴きに行くように勧められて行ったところ、若林先輩から入部を勧められたのです。

当初、私はT1に割り振られました。自分の音域がわからなかったからですが、その後高音は無理とわかりT2の所属となりました。第一日目から困ったのは、全く楽譜は読めないし、ド、レ、ミ、ファの音階もわかっていない状態でのスタートでした。楽譜に片仮名を書き入れよう

としたら、止めるように注意されました。

新曲のうちにはやさしい曲もあって、少しずつパート練習で慣れてゆきました。青蛙、待ちぼうけ、子守唄（何の子守唄だったか不明）、などは、なんとか覚えました。月光とピエロは、筒井氏がT2だったので、彼が歌うのをそれまで耳にしていたし、全体練習の時に聴いたこともあり、少し一緒に歌っていたところ、沢村氏（故人）から再三注意され、口パクだけにしていました。それでも、注意されるので口パクも止めましたが、他の誰かが間違っているのだと分り、少し気分を直しました。

今も深く脳裡に刻み込まれているのは、三年生の夏期合宿練習の際、指揮者がパート別に分けず、色々なパートが混じった状態で、黒人霊歌（たぶんDeep River）を歌いました、旅館の天井が低いこともあって、素晴らしい音を聴きました。第三回定演終了後であったので、それまでの練習の成果が出たと思います。個々の声は聞こえず、悪い音色は無く、各人が思い思い歌っていて、全く違和感無く感じました。そして、一年生も含め、T2の音色に自信を感じました。コンクールで四位となった時にも改めてT2の音色に自信を持ちました。他のパートの場合は知りません。これは私だけの印象です。

大阪外国語大学入学とグリークラブ入部の頃

松尾充哲（昭36 IN）

私が大阪外大インドネシア語学科の入試にやっと合格し、大学の門をくぐったのは昭和32年の3月、一年の浪人生活をした後であった。

なぜ大阪かといえば、高校の先生がインドネシア語なら東京外大より大阪外大が良いと教えてくれたからであった。

入学式の終わった後、大学の門に向かって歩いていると、各クラブの勧誘が行われていた。そ

ここにひときわ変わった服装で勧誘している人達が居た。一人はマンボズボン（編集註）を履き、マドロスパイプをくわえ、もう一人はマンボズボンにベレー帽をかぶり、へー！大学にはこんなクラブもあるもんだと思ってぼんやり見ていると、それがグリークラブであった。

後で知ったことだが、マンボズボンにマドロスパイプは指揮者で英語の大崎先輩、ベレー帽はフランス語の末次先輩（後に京産大の教授）、岡田吉治郎先輩（後にシャープに入り若くして役員）、颯爽とクラリネットをもって通学しておられたマネージャーの清水先輩など、勧誘に当たっておられたのは当時の4年生であった。

私は小学時代から音楽は好きで（当時はボーイソプラノ、田舎の成人式などで歌う、オールドブラックジョー、金髪のジェニー等）、中学、高校とも男声合唱部に入っていたのだが、その高校の合唱部の先生が変に作曲好きで、高3の時、「オペレッタ猿蟹合戦」というものを作曲、そのオペレッタで非常に高音のボーイソプラノの役をやらされ、そこで声がひっくり返り、一時声は全く出なくなった。

上記のグリー入部が勉強嫌いな私をグリーの活動ばかりすることになったスタートである。しかし、入部した当時は低音バスもバリトンも出ない、木炭バスであった。

その同じグリーに、インドネシア語学科で高校時代から五十嵐喜芳の弟子から、声楽を習っていた土本皖君が居た。彼は歌劇のアリアなども歌う本格的な素晴らしいテノールでした。語学の方も素晴らしく、その日の授業に出てきた単語はその日に覚えるという主義で、授業中に新しい単語が出ると、手垢で汚れた単語帳に記入し、その日に一度は声に出してみるところを続けた人であった。

学業との関係でもう一つ彼との関係で忘れられないことがある。3年生のある日、私は教員室の松浦先生に呼ばれた。恐々行くと、「君はどう

してこんなにインドネシア語の成績が悪いのかね、君はいつも土本君と一緒にいるのだから、彼に見習って成績を上げないと落としますよ」と。このお叱りのお蔭で、私は少しは成績を上げるべく勉強したことを覚えている。更にその後、私が1972年9月にインドネシアに赴任し、しばらくして、既に駐在していた土本君と私の車でどこかまで一緒に行った時のこと。彼が下りた後、私のインドネシア人の運転手は、あの方は日本に何年間留学しておられたのですかときいた。

更に、彼との思い出で忘れられないのは、駐在の後半、彼はトーマンの石油担当をしており、しばしば中東に出かけ、3、4日で帰ってくるということを繰り返していた。これが相当疲れる仕事であったと思われた。60歳の終りころだったか一緒に食事をした時、「俺は太く長く生きるのだ」と言っていた。その言葉通り、62歳ぐらいで亡くなってしまった。彼は他に、スダ語、ジャワ語、中国語にも通じており、インドネシア語については日本人の中ではトップであった。その為、日本からくる要人が大統領に会う時は常に彼が通訳をしていたと思う。

我々の時代の外大にはピアノがなく、その資金を集めるため、ダンスパーティーを開いて、パーティー券を売り、資金を集めた事を思い出す。そのため私達はダンスの教習場に通った。土本、松木、私、その3人だったと思う。このダンスも土本君はセンスが良く、私がジャカルタに赴任した時には、ジャイブなどをきれいに踊っていた。

私が3年の頃、四国へ演奏旅行に行った。香川、松山では先輩にお世話になり、宇和島では宇和島合唱団にお世話になった。当時の指揮者はドイツ語の昌子（ショウジ）さん、風貌はショパンみたい。松山には先輩が数人おられたが、松山放送の宮本アナウンス部長に、事前打ち合わせの為に、昌子さんと一緒に伺うという手紙を出したところ、最近のグリーのマネー

ジャーは女の子を連れてくるのかと言う話になっていた。その後、松山では松山放送で15分だったか放送させてもらった。

第一回定期演奏会が私の一年生の時、瓦斯ビルホールで行われた。関西合唱コンクールも毎年行われた。私たちの4年生の時、かなりの猛練習で4位になることができた。指揮は松木君、曲は「カエルの歌」だったと覚えている。

当時、「大阪コーラルソサエティ」という名前の宗教音楽の合唱団があり、関西合唱連盟の長であった長井斉先生が主宰しておられた。そこには外語のグリーのメンバーも何人か参加していた。大崎先輩、末次先輩、杉田先輩（紙谷先輩）、松木君、など。この会の長井先生は全く独学で音楽を勉強された方で、外大グリーも何回か指導して頂いた。

私たち36年卒の仲間では、すでに亡くなられた方が5人もおられる。この機会に、その仲間の追悼の意味も含め、彼らの活躍をここで

紹介して終わりとしたい。本日平成29年11月19日の夜、Eテレではブラームスのレクイエムが歌われています。

亡くなられた方は、沢村氏（英語、テノール、グリーを引っ張っていた）、山田氏（英語、バス、アウトバーンで交通事故、ダンスがプロ級でコンクールに出ていた）、土本氏（インドネシア語、テノールプロ級、インドネシア語も駐在中の日本人ではトップ）、米田氏（ドイツ語、セカンド、宇和島出身）、筒井氏（中国語、セカンド、つい1か月ほど前亡くされました）。

現役時代は、沢村、土本、松木、山田で、クワルテットで歌っていた。現在まだ健在なメンバーは、南野氏、松木氏、菅原氏、吉本氏、尾崎氏、松尾。

編集註「マンボズボン」：1950年代半ばに流行した、脚にぴったりとして裾がきわめて細いズボン。マンボのバンドマンが着用したところからの名。

我が儘を許してくれた当時のメンバーに感謝！

松木正顕（昭36 S）

昭和34年（小生三年次）の定演を終えて、昌子先輩の次の指揮者に指名された。指揮者という大役を任されたものの、皆んなに歌ってもらう曲を選び、各パート毎の音取り、音合わせ、そして「合唱」に仕上げていくわけだが、小生流に進めていった。小生好みの曲を選び、小生流に音作りを進めたように思う。

従来やってきた我がグリー伝統のレパートリーから外れたものも、次から次へと取り上げた。今までにないリズムや和音の連続、メンバーには本当に迷惑だったろうし、大変だったと思う。中でも最たるものは、その年の合唱コ

ンクールの自由曲として選んだ清水大先輩の「蛙の歌」。この歌詞がなんと外語でも教えてくれない「カエル語」。そして曲の初めの音もまぎらわしい（失礼！）ものだった。来る日も来る日も、同じ小節を繰り返しての音づくりに挑み、そして、やっとの思いでコンクールの舞台に立った。

本番では、皆んなが見事にその「音」を響かせた。その時の小生、見事な響きを感じて頑張ってたよかったですと感激していた。ちなみに、その時の順位は確か「四位」だったと思う。

その後も、翌年の定演に向けて新しい曲を取り上げたが、皆んな本当に、素直(?)に懸命に取り組んでくれた。

今、当時のことを思うと、一寸だけ「耳」が良いことに甘んじて、小生の感性だけで指揮者をやらせてもらったように思う。真剣に、一生懸命に、音作りにつき合ってくれたメンバー、特に一つ上の先輩各位には、感謝しかないのである。

(追記)

在学中に「サニーラクス」(陽気なひばり)というカルテットを組んで、ラジオ番組に出た

り、文化祭のステージに立ったりしていたが、悲しいことに小生以外の三人のメンバーは既に他界、中でもバスの山田兄、リードテナー澤村兄は若くしてこの世を去り、トップテナーの土本兄もすでに去った。この誌面をお借りして、改めてご冥福を祈らせて戴く。斯く言う小生も、余り遠くはない日に別の世界で再び「サニーラクス」の楽しいカルテットをやれるのではないかと、ふとそう思う今日この頃なのである。

グリークラブ同期生を想う

南野均 (昭36 F)

昭和32年(1957年)7月6日、大阪ガスビルホールにて、第一回定期演奏会が大崎直忠氏(E6)の指揮の下に開催された。入学早々の私は、16名の同期生の一人として、この荣誉ある演奏会に出場することが出来た。その後、同期部員に入退があり、卒業時は実質的には12名であった。12名のうち5名は既に世を去り、現在、私以外に、松尾充哲、松木正顕、菅原基晴、吉本晴彦、尾崎賢助、宇野滋夫の諸君が健在である。ここに、未だ生ある身を感謝しつつ、先立った盟友達のプロフィールを紹介し、追悼の意を表したいと思います。

山田耕司(B2、E9)：長身でハンサム、頭脳明晰な男であった。見かけは優男であったが、ある時口論になって、強硬に反論してきたので意外に思ったこともあった。ニチメンに就職してドイツに赴任後まもなく、有名な高速道路、アウトバーンを疾走中、物体に激突、死亡した。

沢村輝雄(T1、E9)：優秀、誠実で長身のテノールであった。張りのある声がよく通るので、

指揮者の大崎さんに抑えるように指示されていたことを憶えている。沢村と同じ会社に入ったグリークラブOBのH君が憧れていた人事課の女の子が後年彼の奥さんになってがっかりした、という話をH君から聞いたことがある。仕事も出来る男だったが、40才手前で白血病にて死去。

米田憲正(T2、D9)：端正で静かな紳士であった。成績は優秀でドイツ語科ではトップクラスであった。愛媛県宇和島の人である。ただ、同じセカンドテノールで唱っていたのであるが、彼の声を直に聞いたことがない。勿論、彼は声を出している筈だから、私の耳がおかしかったのかも知れない。このような物静かな紳士が夫婦の愛情のもつれから自殺したと聞いた時は全く信じられなかった。事件から40年以上も経った今尚、信じることができない

土本皖(T1、IN9)：我々は彼をツチカンと呼んでいた。天才的なテノールであった。語学も堪能でジャカルタ(トーマン)に駐在していた頃、政府の要人が来訪したときは、ほとんどの場合彼が通訳を委嘱された。面白い逸話がある。あるとき、ツチカンの同僚がジャカルタの現地

の人に“あの人は日本に何年位留学していましたか”と聞かれた。この同僚も人を喰った男で、“4年だ”と平然と答えた。現地の人も納得したという。ことほど左様にツチカンの集中力、同和力、は凄かった。テノールのソリストとして彼を措いて外に誰もいなかった。ツチカンは不思議な男で、日頃から自分は60才位で死ぬと予告していたが、ほぼその通り62才で病死した。

筒井健次郎 (T2、C9): T2のパートリーダーであり、ド素人の私に合唱を教えてくれた先生であった。実に優しい男で怒った顔は一度も見ることがなかった。大学時代、唯一の親友で住吉区万代町の家宅へよく遊びにいった。社会人となっても、付き合いは続いた。数年前、私が心筋梗塞で倒れ手術をした時も、同病の手術を受けた先輩としていろいろアドバイスをしてくれた。昨年7月に入って、記念誌の事もあり電話を入れたところ夫人が出て、主人は腸の具合

が悪くて入院中ですが、と言われ、では又、と再会を約して切った。その3日後の夜突然電話が入り、“筒井健次郎が今朝亡くなりました”茫然とした筒井夫人の声が聞こえた。平成29年7月6日筒井健次郎死去。

昭和36年(1961年)卒業のグリークラブ同期仲間12名の内、既に5名を失った。筒井以外はほとんど早逝しており社会的にも、グリークラブに対しても十分に貢献できなかった恨みが残ったであろう。私も斯くなる人材を早期に召し上げる天の采配を恨むのである。

さりながら、我がグリークラブの歴史においては、早逝した人も又現世の人も、外語ハーモニーを愛するが故に、90年もの長きに渡って、グリークラブに対する無償の支援を続けてきたことは、言葉には言い尽くせない実に貴い実績であると思っております。

José Ignacio Tejón さんのこと

東谷頼人 (昭37 S)

私と同世代のグリー仲間には、きっとおなじみだろう。スペイン民謡を男声合唱用に編曲した作品をいくつかステージで歌ったことがある。

Asturias, Patria Querida (アストゥリアス、わが故郷)、En la huerta de Murcia (ムルシアの田舎にて)、そして Boga, boga (いざ漕げ) などの懐かしい曲である。

これら作品群は昭和33年に、音楽之友社から上梓された『スペイン合唱曲集』に収められていて、私の古い記憶をたどれば、当時の指揮者だった松木正顕さんが、いち早く見つけられて、我々に紹介してくださったはずと、理解し

ている。

そしてその編曲者が、スペイン人のホセ・イグナシオ・テホンさんである。

彼はイエズス会所属のカトリック司祭であると同時に、優れた音楽学者として、広島市にあるエリザベト音楽大学で教鞭をとる傍ら、当時地元広島を中心に、オーケストラや合唱団などの指揮を通じて、活発な音楽活動を繰り広げておられた方である。あれは、私がNHKの「テレビスペイン語講座」を担当し始めたごく初期のころ、たしか1981年あたりのことだったと思う。毎回の番組の中に、短時間のインタビュー・コーナーなるものを立ち上げ、いろいろな人をスタジオに招き、お話を聴く時間を

作った。ある日担当のプロデューサーと相談し、スペイン音楽について語っていただくため、広島在住のテホンさんの快諾を得たうえで、連続して2本のビデオ撮りのため、東京・渋谷のスタジオまで来ていただくことになったのである。

こうして番組のなかでは、スペイン各地方の特徴的な音楽として、Jota (アラゴン地方)、Sardana (カタルーニャ地方)、Seguidilla (カスティージャ地方)、Muñeira (ガリシア地方)、Bolero (バレアレス諸島)、Flamenco (アンダルシア地方) など、それぞれの特徴を詳しく解説され、さらには日本でよく知られたハバネラの曲については、ビゼーのオペラ「カルメン」で歌われる「ハバネラ」が実はビゼーの作曲ではなく、同時代のスペイン人作曲家Iradierの曲で、ビゼーがスペイン民謡だと誤解して、そのまま無断で利用してしまったエピソードなど、興味深いお話をいくつか聞かせていただいた。しかしスタジオ内の話もさることながら、私にとって一番楽しく、また興味を惹かれたのは、収録前の控室や、収録後の喫茶室でのざっくばらんな長時間の雑談のなかで、ごく私的で親密な会話を楽しめたことであつた。私が学生時代に例のスペイン民謡をグリーンで歌ったことを、とても喜んでくださり、「よかった、日本での私の仕事は無駄ではなかったようです」などと、本当にうれしそうな顔を見せられたのには、少しホロリとさせられたのを思い出す。あの当時すでに30年近く日本に住んでおられたのだが、「いや、いや、私にとって日本ほど住みよくて、気



NHKテレビスペイン語講座、テホン師とアシスタントのマリ・ソル嬢と

持ちよく生活できる場所は他にはありません。日本には感謝あるのみですよ」と何か意味ありげなコメントを残されたことも、はっきり覚えている。きっとスペイン市民戦争をはさんで、混沌とした政治情勢と、ぎくしゃくした人間関係の中での生活を余儀なくされ、当時20歳前後だった若い時代のさまざまな苦労を思い出しての、実感だったに違いない。現に16歳だった内乱勃発時には、ご自分の意志に反して、父親の影響で無理やり共和国側に組み入れられ、一兵卒として協力せざるをえなかった、とも話しておられた。そんな自分の運命を回顧し、その後カトリックの牙城ともいべきイエズス会に、あくまでもご自分の意思を通し、入会を果たすまでの人生の軌跡を、しみじみ思い出されての実感のこもった感情の吐露だったのだろうと、今になって想像するのである。

その後テホン師とは、残念ながら再びお会いする機会には恵まれずに終わってしまった。そして1986年には広島を辞され、スペインへ戻られ、彼の地でお亡くなりになったと聞く。しかし、たった一度の邂逅ながら、私の心に強いインパクトを残した人物として、これからも機会あるごとに懐かしく思い出すはずである。

思い出すまま ～竹川茂一君を偲んで～

宇留野隆 (昭37 S)

竹川君、君とは大学4年間グリーン・クラブの

セカンド・テナーで一緒だったね。セカンドのパートは、大体が縁の下の力持ちが役割で、目立たぬのが多いが君は違っていた。議論好きで

話が上手く、歌の練習であれコンパであれ、常に皆の中心にいた。説得力ある話っぷりが如何なく発揮されたのが我々3年生が、昭和35年(1960)年の安保闘争で世は騒然としていた時だったと思う。今と違って学生運動が盛んで学校は授業をボイコットしてストライキ、毎日学生集会がありそれが終わると御堂筋に集結。あの大通りのど真ん中をデモ行進して、大阪府警本部に押し掛けた。スト中は正門、裏門ともに活動家がピケを張って学内に入れてくれない。歌などのん気に歌っている場合じゃないという声も聞こえる中、7月の定期演奏会を控え、5月、6月どう練習するか苦慮した。我々の一番大事な年中行事である定演を何としてでも成功させたい。これを最後に卒業する4年生のことを思うと尚更である。それには十分な練習が欠かせない。

この苦境を救ったのが君だった。君は全学の学生集会に出掛けて我々グリーン・クラブはスト破りをやりたい訳ではない、ただ長年続いている定期演奏会を控え、成功させようと懸命に練習しているのだと説明し大方の理解を得た。君のことだからデモにはグリーン・クラブを代表して一人で参加し、部員60人分の働きをすとの気構えで説得に当たったに違いない。練習は我々の思い通りに続行出来、定演も無事成功裡に終えることが出来た。

G62会(註:昭和37年(1962)年卒業のグリーン仲間の会)を秋田・男鹿半島で開催したのが平成16年(2004)、飛行機嫌いの君は一人だけ寝台列車で大阪駅を発ち翌早朝秋田に着く経路を選んだ。全員の集合時間には時間があるので我が家で一休みする手筈にしていたところ、所定の「新屋駅」で降りてこない。慌てて家に電話すると、竹川さんからたった今電話があっ

て乗り越したので隣の駅で待っている、との伝言だったと言う。

隣の駅まで車を飛ばし無事ピックアップして我が家に来て貰った。話を聞けば途中通過した「亀田駅」で松本清張の推理小説「砂の器」を思い出し、感慨に耽っているうちに乗り越してしまったのだと言う。「砂の器」には東北訛りの男、秋田県亀田それに出雲地方が出て来る。出雲と東北地方では言葉に似通ったところがあるらしい。君のご両親は島根県のご出身とその時間聞いた。出雲は君も何回か行った思い出の土地だったのではないだろうか。その時、君とは一寸した別の縁があると感じた。男鹿半島で一泊したのち、君は滞在を延ばしもう一つの景勝地、十和田湖で遊んだ。再び夜行列車に乗り大阪へ帰る前、秋田駅から「秋田ではお世話になりました」と電話してくれた。君はこういう律儀な男でもあった。

我らの愛唱歌で歌えば誰もが君を思い出すのが黒人霊歌「Swing Low, Sweet Chariot」である。珍しく我々のパート、セカンドが主旋律を歌う。何時の頃からかこの歌は君の代名詞になった。Chariotと言えは竹川を、竹川と言えはChariotを指す。Chariotの発音が日本人離れた本格派の発音で、それが皆を強く印象付けたからに違いない。この思い出深い黒人霊歌の中に次の一節がある。

If you Get there Before I do,
Comin For To Carry Me Home,
Tell All My Friend I'm Comin Too . . .

今は残念であるが住む世界が別々になってしまった。我々も何れはそちらに行く。又一緒になって大いに歌おう。

大倉明治（昭37 E）

昭和37年卒業の同期は総勢14名だったが、現在は10名になっている。卒業後1年間は病気見舞、転勤の壮行会、結婚祝などいろんな機会が集まっていた。しかし年が経つにつれ全国各地や外国に散らばり、全員が顔を合わせる機会がなくなった。昭和59年にメンバーの一人、織立君（B2）がパリで亡くなり、その7回忌の際にお墓参りをしようと8人が集まったのが平成元年。墓参りからの帰りに池袋の中華料理店の小部屋で食事をした。終わりに織立君を偲んで歌おうと「遥かな友へ」など何曲かを歌った。他のお客の迷惑にならないよう小さな声で歌ったのだが、歌い終わると部屋の周りに沢山の人が集まっていて拍手が湧いたのに驚いた。その後、時々東京にいるメンバーで会っていたが、「皆で集まって合宿をして歌おう」という話になった。

平成11年に岐阜・犬山で最初の1泊2日の合宿をした。会の名前は「G62会」とした。「G」はグリーのG、「62」は卒業年度1962から取った。幹事は持ち回りで担当し、場所は幹事に一任、ということで毎年継続して、今年で18回を数える。場所は今までに北は秋田・男鹿半島から南は瀬戸内海の直島まで広範囲である。我々がグリーに入部して最初の合宿を経験した愛知・鳳来寺山にも平成15年には訪れた。

平成21年に亡くなった竹川君（T2）の提案で、平成16年からは夫婦同伴での参加にもなった。その後娘夫婦や親族も加わったりしている。夫人達も皆歌うことが好きで、いつしか混声合唱でも歌うようになった。宿に到着して一息ついたら練習を始め、小演奏会を行う。男声合唱の曲では聴衆は夫人達だが、時には旅館やホテルのスタッフも加わる事がある。そして夫人達

が加わって混声合唱。その後にはやっと宴会。ここでそれぞれの近況が語られる。宴会が終わってからも話は尽きず、場所を移して2次会。これに夫人達も付き合い、夫人達同士でも話が盛りあがっている。

歌う曲は幹事が決めるが、最近は曲数を絞り、練習時間も少なくなってきている。しかし、時には難曲にも挑戦した。組曲「富士山」＜V作品第貳拾壺＞を歌ったこともある。平成14年に城ヶ島へ行った時は、北原白秋記念館で組曲「柳河」を歌った。館長さんが大変感激して、メンバー全員に海産物のお土産をくれたこともあった。

平成26年、昔歌った曲の中から大西君（B1）が「愛唱歌集」を編纂。合宿の時はいつも持参している。曲目は「Gaigo Will Shine」、「希望の島」、「はるかな友へ」、「Ständchen」、「柳河」、「月光とピエロ」より「秋のピエロ」、「Ave Maria」、「ふるさと」（室生犀星詩・磯部俣曲）、「Swing Low, Sweet Chariot」。

訪れた場所では貴重な見納めをしたところもある。平成22年に松島、平成24年には昼神温泉郷・南木曾に行ったが、いずれも翌年に大きな自然災害に遭っている。訪問地には世界遺産もある。平成25年には姫路城を訪れたが、今年10月に平泉に行く予定である。途中で花巻・賢治記念館に寄り、昔合唱コンクール課題曲で歌った宮沢賢治詩・清水脩曲の「高原」も歌うことになっている。

G62会の参加者数は過去最多22名だったが、最近は16～17人と減ってきているのは淋しいが、昨年亡くなった佐藤君（B1）の奥さんが今年参加の予定である。G62会は合宿の様様を写真入りエッセイにして毎回記録として残しており、いい思い出になっている。

られて少し楽な気分になったものである。後に知ることになるのだが、長井先生が率いるこの団（通称コーラル）と外語グリーとは深いつながりがあり、昭和初期から交流があった。創立がほぼ同時期であり偉大な先輩、清水脩先生も外語現役時代このコーラルで歌っておられ、昭和4年（1929年）の演奏会のプログラムに第一バスのメンバーとして数多くの外語グリーメンとともに載っておられる。

今ひとつ、我々の学歌“世界をこめし”は今の大阪音大、大阪音楽学校の創立者であり初代校長である永井幸次先生の作曲によるものだが、この方の娘さんが長井先生の奥様である。昭和の初期、外語、コーラル、大阪音楽学校の深い

つながりが感じられる。因みに大阪音楽学校は創立時代、上八の外語に近い塩町、味原本町と極く近くに学舎があり地理的にも近かったそうである。

何人の新一年生に声がかけられたのかは不確かだが、私を含めて6名がこのコーラルの練習に一度は顔を出していてコーラルの70年史に6名の名前が記されている。13名の中の6名、約半数である。このうち卒業まで活動を続けたのが私を含めて3名いずれも大阪出身のメンバーだった。卒業後は勤務先が大阪から離れて二人は退団、私一人が残り、それ以降海外勤務の時期を除いて外大グリーOB会とコーラルを続けることになるのである。

私の合唱遍歴

直場徳宥（昭37 S）

私が合唱を始めたのは高校になってからだ。男子校だったので男声合唱である。但し毎週練習が有るわけではなく、何か行事があると何週間か前から練習が始まり本番に臨むというのんびりしたものでコンクールに出たこともなく人数も十数名だった。従って本格的な合唱の経験は外大グリーからで、高校のグリーと違って毎週何回か練習が有るのに最初は面食らったが次第に慣れて4年間楽しく過ごせた。

外大グリーには高校の1年先輩でトップテナーの土本さんが居た。土本さんは甘い声の持ち主で、中でも第4回定演でコロンビアの曲「Rio Que Pasas Llorando」のソロが今でも私の耳に残っている。又三回生の時に松木さんの指揮のもとコンクールで入賞したのも良い思い出である。

卒業後は大阪で会社の出来たての混声合唱団

で歌っていたが東京転勤になり暫く合唱から離れていた。ある時OBが集まって練習しているから参加しろと誘われたので暫くは参加したが仕事が忙しくなり足が遠のいた。当時は若林さんや亡くなられた野田さんも参加されていた事は記憶にあるが、どんな曲を練習したのか全く覚えてない。

その後大阪に戻ってもアフターファイブの付き合いも忙しく再び合唱との縁は無くなっていたが1976年の50周年記念演奏会で清水脩先生の指揮で「月光とピエロ」OB合同演奏に参加しないかとの誘いがあり参加したのは得難い経験だった。

その後又合唱と離れて10年程経った頃体調を崩して診察を受けたら肺炎と診断され、アルコールは厳禁との事でアフターファイブの過ごし方を悩んでいたら友人から大阪フィルハーモニー合唱団が団員募集していると連絡が有り、プロのオーケストラ所属の合唱団とはどんな所

か興味が有ったのでオーディションを受けたら
幸い合格した。

私の最初のオーケストラとのステージは、今
では毎年募集当日に枠が埋まってしまうほどの
人気の「1万人の第九」だった。当時は山本直
純指揮で大フィル合唱団はオケと同じアリー
ナで歌っていた。この年は第九だけで5回のス
テージが有りそのうち3回は既に大活躍されて
いた林先生がテナーのソリストだった。林先
生とはその後、ベルリオーズ「ファウストの
劫罰」、ベートーヴェン「ミサ・ソレムニス」
「フィデリオ」でも共演し素晴らしい声を聴け
たのは懐かしい思い出である。

指揮者では大フィル創設者の朝比奈隆先生を
始め内外の一流指揮者の指揮で歌えたのが得難
い経験だった。朝比奈先生の第九は非常にゆっ
たりしたテンポで振られていたので第4楽章の
合唱で息継ぎに苦労したのも懐かしい思い出だ。
最晩年は少し早く振られたがそれでも全体で76
分位だった。私の持っているカラヤン指揮の
CDでは67分だからかなり長い演奏だ。最近の
指揮者では60分位で演奏する事を考えるとそれ
だけ世の中が忙しくなくなったと言う事かもしれ
ない。

印象に残る演奏では、ジャン・フルネ指揮
フォーレ「レクイエム」、ドビュッシー「聖セ
バスティアンの殉教」、モーツァルト「レクイ
エム」、尾高忠明指揮ヤナーチェク「グラゴー
ル・ミサ」、若杉弘指揮ブラームス「ドイツ・
レクイエム」、J・Sバハ「マタイ受難曲」等。
又大変苦労したのに殆ど記憶に残ってないもの
では作曲者自身の指揮で演奏したペンデレツキ
「七つのエルサレムの門」がある。この曲はリ
ズムが大変だったと言う事しか記憶にない。

大フィル合唱団には約20年間在籍した。大
フィルの演奏会で歌う事は失敗すれば大フィル
の評価にも影響するので常に重圧を感じていた
が練習は非常に中身の濃いものだった。朝比奈
先生が合唱団の練習の時に何回か「君達が音楽
を作るのであって指揮者に作って貰うのでは無
いよ」と言う意味の事を言われたのが強く印象
に残っている。指揮者の言う通りすればいいん
だと思っていた私には目から鱗の感じだった。

退団後は再びアカペラで歌ってみたくなりグ
リーOB合唱団に入団した。混声合唱の良さも
分かったので大フィル合唱団で指導していた先
生の合唱団にも所属している。元気に歌える間
は続けようと思っている。

“下手の横好き”の記

中村邦雄（昭37 S）

幼いころから歌が好きで、唱歌や流行歌等を
我流で歌っていたが、高校二年の時にクラス対
抗のコーラス大会があり、わがクラスは後に全
日本合唱連盟理事長になった同級の浅井君が指
揮をして優勝した。これが合唱というものに興
味を持ちはじめたきっかけだった。

外大に入学してグリークラブに入ったのはも

ちろんコーラスをやってみようと思ったからだ
が、“グリーは女の子にもてる”という風評が
耳に入ってきたのも、誘因の一つだったと思
う。実際に入ってみたらそんな風評は事実では
なかったが、下手の横好きながら男声でハモる
ということが楽しくて、すっかり男声合唱には
まってしまった次第である。

在学中で一番印象深かったのは、当時同志
社、関学、京大が常時上位を占めていた関西合

唱コンクールで、参加二十数校中4位に入ったことである。圧倒的な人数の他校に対して少人数（たしか三十数名位？）で健闘して誇らしく思ったものである。

ただ部員としてはよく練習をサボったりした不良部員だったと反省している。

就職して職場の混声サークルに入ったが連日仕事が多忙で、練習との両立が不可能となり数か月で諦め、以来三十数年間合唱とは全く縁がなかった。その後出身地の京都に戻ってから曾ての男声のハモリを求め、縁あって京都男声合唱団（略称「京男」）に入り現在に至っている。その間10年近く幹事長をつとめたが、古希を機に代わってもらった。京男は創立53年になるが、その間外大グリー出身者は私だけだと思う。今後興味ある方はぜひ入団して頂きたいと思っている（団員は京都在住のみならず、大阪、奈良、滋賀等も多く、芦屋、宝塚からのメンバーもいる）。団のホームページを見てもらえばわかるが、練習場も西本願寺の近くで交通の便も良く、無料使用できる駐車場もある。

私は京男入団以来20年程になるが、その間の合唱活動の中で、京男が主催乃至ホスト役で共演した外国の合唱団は次の通り：

2005年 オランダ Netherlands Youth Choir
2007年 スウェーデン

Den Bacchanaliska Koren Since 1829
2010年 アメリカ The Yale Whiffenpoofs
2011年 同
2012年 同
2014年 イスラエル Jerusalem Youth Chorus

どの合唱団も夫々特色があり、演奏も素晴らしく、様々な面で刺激を受け大変参考になったが、特にエルサレムユースとのコンサートは一番強く印象に残っている。

上記、京都で共演したエール大学のメンバーの一人が卒業後エルサレムへ行き、コーラスによってイスラエルとパレスチナとの平和的な融和を計っていて、その活動を国際的に知らしめたいと、はじめての海外公演として日本へ来て京都と東京で演奏したものである。メンバーはイスラエル・パレスチナ夫々男女13人ずつ、合計26人の高校生。自分たちの楽曲以外に、予め送っておいた「花は咲く」楽譜（ローマ字の日本語歌詞）で、完全に暗譜で2、3人ずつが一節ずつ順番に日本語で歌いつないでくれた。最後にアンコール代わりに彼等達と共演の日本側高校生と我々が、京都コンサートホールを埋めた観客全員と一緒に、この「花は咲く」を大合唱した。会場の皆がスタンディング・オベーションしてくれて、大感動ものであった。

合唱への関わり 病気との付き合い

小笠原肇（昭38 S）

私が合唱をやるきっかけは外大入学式後のクラブ紹介コーナーで、グリークラブの次期指揮者となった松木さんの勧誘を受けた時です。私が今まで合唱経験が無いからと断ると練習に参

加すれば全然問題ありませんと強引に引っ張り込まれました。それまで楽譜は音楽の教科書以外見たこともない私でしたが、バリトンのパート練習後の麻雀にも釣られ出席率は100%でした。驚くべき事に3ヵ月後の定演では全て暗譜で出演出来ました。

以降ほぼ4年間、男声合唱練習+麻雀+スペイン語受講の生活を送りました。

週末の山野宅での過ごし方は他のメンバーが詳しく述べておられますので割愛しますが、記録では小笠原がトップ、以下〇〇君、XX君の成績だったと思います。卒業間際に村主さんに誘われ加藤直四郎先生が率いる混声合唱団グリーンエコーを見学しました。男声合唱にない魅力を感じました。簡単な入団テストを受け入団を認められました。

卒業後、合弁会社の住友スリーエム社に入社しました。東京で研修後大阪に配属となり3M製品の国内販売に従事しました。3M製品は家庭用から工業用まで幅広い製品がありますが私は先ず工業用テープ販売でスタートして7年、次いでコンピューターテープ販売で5年従事しました。住友スリーエムは当時珍しい土日完全休み、残業はなく定時退社が原則と云う会社でした。

若い頃でしたから直ぐに時間を持て余し、新たに始めたゴルフにのめり込みました。平日は麻雀、週末はゴルフ、毎週火曜日は混声合唱団グリーンエコーの練習に精を出しました。新たに開発された防塵マスクの販売プロジェクトに参加（東京1人、大阪1人）3年後まずまずの成績が上げられ未開拓の名古屋地区開拓の為転勤を命じられました。転勤は初めてでした。大学時代から続いた合唱も19年間でひとまず途切れることとなりました。名古屋では東海3県と北陸3県に防塵マスクの流通網の整備をし、拡充することが使命でした。既に全国的な流通網が2本ありそこに地場で開拓した販売店を加えていくことで流通網を太くするのに約3年かかり

ました。

名古屋に来て23年。58歳の秋に人間ドックを受けた結果、がんセンターを紹介され精密検査の結果胃がん発症が判明。もともと健康に恵まれ寝込んだことのない私は自覚症状がないこの検査結果を信じることができない程でした。手術は胃を2/3取ることで成功。抗がん剤治療の必要性もなしとのこと。この手術の1年後、会社より条件の良い早期退職制度が提示され約80名が応募。私も65歳定年を前倒しして59歳で退職しました。

前回手術の5年後、63歳の春に行きつけの医者が肺がん発症を見つけてくれて即手術。右上葉の肺を切除し、手術成功。今回も腫瘍を完全に切り切れているので抗がん剤の必要なしとのこと。2回ラッキーが続きました。

4年後、67歳の時に市内を運転走行中に脳梗塞を発症、右半身不随と言語障害により運転不能状態に陥る。この時は後部座席にいた家内がこの状態をみて脳梗塞と察してすぐさま運転を代わり近くの日赤病院に直行。おおいに騒ぎ立て救急搬送並みの扱いで医者に診て貰うことが出来ました。手術の為ベッドで待っている間に自分の力で梗塞が解け右半身が動き会話もできるようになりました。簡単なりハビリを受け1週間後には退院しました。この時も早期治療が効を奏したと言えます。

この3回の入院を知った友人たちはなんと悪運の強い小笠原だと言いますが…。

半年毎に血液検査の項目にがん検査の項目を加え、万全を期しています。同期の皆さん、毎年1回は人間ドックを受けましょう。

九谷龍正（昭38 D）

私が生まれ育ったところは、北海道旭川市近郊の旧屯田村で、真宗大谷派東本願寺系の末寺であった。生まれながらにして寺の三代目住職継承を運命づけられていたので、旭川東高校を卒業後しぶしぶ京都の宗派系大谷大学に入った。しかしながら国立大学への夢を捨て難く、郷里へは内緒で進学予備校に半年通い、翌1959年3月、大阪外国語大学ドイツ語科に合格した。

報告を受けた両親は当然驚いたがしぶしぶながら追認ということになった。在学中はせめてもの親孝行と、夏季と冬季の休みの時は裏日本まわりの急行「日本海」で青森へ、津軽海峡を連絡船で渡り、更に函館から札幌経由旭川行、40時間余の長旅をおして帰郷し、神妙に父の仏事の手伝いなどした。

何故「グリーンクラブ」を選んだのか。特にこれといった理由はなく、なんとなく恰好よさそうで、入部してしまった。グリーンは個性的で多彩なすばらしいメンバーに恵まれていた。特に38年組、同期のメンバーは最高のすばらしい仲間達であり、その結束の固さは自他共に認めるところであろう。4年間のクラブ活動を通していろいろな体験をさせてもらった。年間最大の行事、定期演奏会は忘れてはならない。厳しい練習の成果を大聴衆の前に披露し、その評価を受けるという試練への挑戦と、大仕事を成し遂げたというこの上もない充実感に浸ることができたことは何物にも代え難い体験であった。

4年生になり、就職担当の教授の推薦を得て千代田光学（1963年にミノルタカメラに社名変更）に願書を提出して入社試験を受けた。卒業を前提として採用内定の通知を受けた。入社して1年を終わった頃、欧州に現法を設立する

という特別プロジェクトが密かに進行していた。そして1965年、欧州担当の一人で入社2年にも充たない私に白羽の矢が立って欧州派遣内命の通告を受けた。ともかく両親とも相談したいと言ったら、社長の鶴の一声で、生まれてはじめて飛行機で帰郷した。海外雄飛は子供の頃からの夢であり、この絶好のチャンスは絶対に逃したくない、と両親に告げたらこちらもあっさり「行って来たら」ということになった。

1965年当時、ハンブルグの在留邦人数は100名そこそこでなかったかと記憶している。商社や繊維メーカーの駐在員が主流で、ほとんどがチョンガー族であった。1968年、人生の重大な転機が訪れた。ドイツ娘との結婚に踏み切ったことであり、同時に日本への帰国命令が出たことである。

その年の4月にドイツで結婚し、6月に二人して帰国した。当時稀なる国際結婚は、狭い社内に興味津々巻き起した様だ。しかし概して好意的であった。帰国してしばらくたった頃、父から仏前結婚式の提案がなされ、私共も喜んで快諾した。旭川空港には父が出迎えてくれ、ワイフに庭で摘んだ鈴蘭の花束を手渡した。この小事がワイフの心をしっかり掴んだ様だ。うれしかったそうだ。父母をはじめとして、親族一同がワイフを温かく受け入れてくれたと、この上もない喜びであった。田舎のこととてワンサカ人が集まり私共二人の結婚を祝ってくれた。ワイフは一躍“時の人”となった。

日本での生活が一年半を過ぎた1970年、大阪万博の年、欧州への再赴任の社命がでた。これを受けることは、寺に戻ることを完全に放棄することであり、父は後継者を失うことであった。父母にとって我儘な不肖の息子であった。紆余曲折はあったが、私はミノルタに残ること

となり、同年8月ドイツに向った。

1970年～2002年の32年間は人生の盛期でいろいろあった。ドイツからオランダに移り、更にドーバー海峡を越えて英国に移動、再度ドイツに戻り、現役引退まで同地で過ごす。その間、子を成し、家を建て、孫の顔を見るなど、世に生を受けて成すべき最少の義務を果たした。

ゴルフを始めたのは案外遅くて32歳の時。現

役時代はお付き合い程度で全然進歩しないまま過ぎたが、70歳を過ぎてからメキメキ上達した。77歳になる今日も公式hdcp18を維持している。ゴルフを通して得た多くの友人の中には医科大学の教授や医者連中が多く、その縁でいざ鎌倉の際に大変融通をきかせてもらっている。コネが効くのはドイツも同じである。

新・大阪外大讃歌

新出武雄（昭38 S）



左に掲げたのは、ご存じ旧制大阪外国語学校の襟章で、現在大阪大学外国語学部にも受け継がれていると聞く。

さて、ここに謳われている EX ORIENTE LUX ET PAX なる言葉を使って、「新・外大讃歌」が出来ないものかと考えた。というより、かねてから打ち上げの折など、皆が暗譜でハモレる曲といえば、GAIGO WILL SHINE は当然として、あとは希望の島、ピエロの一部、くらいしかないのを大変物足りなく思っていた。そしてふと思いついたのが、しばしば我々の愛唱歌の一つにもあげられる「いざ起て戦人よ」のメロディーをそのまま利用して、替え歌を作ることであった。

試みに、まずメロディーに大よそ当てはまる歌詞を英語で考え、その内容には外大校歌の趣旨を織り込んだ。EX ORIENTE と若干の日本語句を組み合わせたところで、英詩の添削を大倉明治さん（昭37 E）にお願いした。大倉さんは、英詩というものは必ず韻をふむものである、として、英語の部分全部作り変えてくだ

さった。こうして出来上がったのが、以下に掲げる「新・大阪外大讃歌、EX ORIENTE LUX ET PAX」である。また、メロディーに歌詞の付け具合に関しては、小貫先生にサッとではあるが目を通して頂いた。

EX ORIENTE LUX ET PAX

Lux et Pax ex Oriente,
Light and Peace from the East,
光と平和は東の地より。

When the sky begins to open,
Shines the star bright in the Heaven
Let's lift the Flag of Peace,
Let's chant the song of Love.

Alma Mater, we praise thy name,
We praise thy soul and fame,
We adore our Alma Mater, Osaka Gaidai!

なお、EX ORIENTE LUX については、筆者の近所で鎌倉山に居を構えておられるイタリア文学研究家の飯田熙男氏から、次のごとき解説を頂戴しているので、参考までに掲げる。

EX ORIENTE LUX :

ラテン語の「光は東方より」は、古代ローマのことわざとして、ローマ文化がローマより東のギリシア文化を受け継いでいることを表しています。

しかし、後になって、世界の文明がエジプト、メソポタミアなどいわゆるオリエントにまず起こったことを表す言葉とされるようになりました。

旧約聖書にもこの言葉があって、光つまりキリストが東方から現れることを予言しているとされますが、これは大阪外語の建学の理念にふさわしくありません。

建学の理念としては、古代ローマのことわざをさらに大きく広げて、「文化は東の日本より」という意味を込めたのではないのでしょうか。

飯田熙男

(イタリア文学研究家)

男声四部合唱
♩=126

EX ORIENTE LUX ET PAX
大阪外大讃歌
作詞 大阪外大グリークラブ合唱団
Music by James McGranaghan

Lux et Pax Ex Ori-ente. Light and Peace
from the East. ひかりとへいおは
ひかりとへいおは
ひかりとへいおは Lux et Pax Ex
ひかりとへいおは Lux et Pax Ex

Copyright 2013 by OBs' Glee Club of Osaka University of Foreign Studies, Osaka, Japan.
Co-worked by Meiji Okura and Takeo Shinde, Tokyo, February 2013

1

註：全楽譜はDVDに掲載

グリーに育まれた合唱を生きがいに

村主寧民（昭38 D）

高校1年生の時、合唱部の演奏を聴き感動して入部したのが合唱との付き合いの始まりでした。大学に入学してグリークラブがあることを知り、早速入部しました。今思い起こすと外大での4年間は語学の勉強に追われたこととグリーでの練習や学資稼ぎのバイトに明け暮れたような気がします。幸いグリーでの4年間を通じて素晴らしい同期の仲間や先輩、後輩に出会えたことはその後の人生の大きな宝物になったと思っています。

グリー時代の第3回から第6回までの産経会館での定期演奏や数多くの演奏会への出演、春

休みの演奏旅行など、幸い落ちこぼれもせずに我ながらよく頑張ったなと思い起こすとともに、この4年間の貴重な経験がその後の社会人としての人生の生きがいの源の一つになっていると実感します。

大学卒業後に1年だけ務めた会社を辞め、ドイツ語の先輩に紹介されて松下電工に転職しました。新入社員として専ら技術導入先のドイツやアメリカの会社との渉外業務や、時に役員のかばん持ちで海外出張にも出かけました。今では笑い話ですが、ある事業部長のお供で欧米へ出張することになり、伊丹空港で社員や協力工場の人々から万歳三唱で送り出されたのには驚きました。当時はまだ海外出張が珍しい時代

だったと思います。

本社で10年間勤務し、希望して事業部へ異動しました。海外営業企画の仕事でドイツを中心に欧米への出張を繰り返しましたが、1984年からカナダのトロントへ4年間、引き続きアメリカのニュージャージーで4年間勤務し帰国。3年間門真で勤務後、香港へ赴任し定年の半年前までの5年間を過ごしました。通算13年間の海外生活を送れたことは家族にとっても良い体験だったと思います。

定年退職後は縁あって大阪簡易裁判所の民事調停委員として10年間、また並行して会社の先輩の退任の後を受けて京都産業大学経営学部の非常勤講師として週1回のペースで8年間通いました。上記の2つの仕事を通じて退職後71歳までささやかながら社会貢献が出来たことを嬉しく思っています。

大学卒業後の合唱活動ですが、当時在阪勤務されていた同期の小笠原氏と大阪市内の混声合唱団グリーンエコーに入団しました。大阪でも伝統のある合唱団でしたが仕事の都合で私は数年だけ在籍して退団。その後は仕事の都合で30年余り合唱からは遠ざかっていました。そして1995年に香港に赴任してしばらくして日本人倶楽部に混声合唱団があることを知り2000年の帰

国まで約4年間混声合唱や男声合唱を楽しみました。特に毎年1回地元の合唱団やオーケストラとジョイントでチャリティコンサートを開催したことは懐かしい思い出です。第1部はオケ付きの合同演奏、第2部は日本から招いたアーティストによる演奏で香港在住の日本人に大いに喜ばれました。在団中に日本から小椋佳、伊勢正三、山本潤子、南こうせつの各氏に来ていただいたほか帰国後も由紀さおり・安田祥子、森山良子の各氏も香港に足を運んでもらっています。

定年後、小笠原氏の勧めで平成13年にグリーンエコーに再入団しました。途中数年の休団はありましたが平成27年の第59回定演まで続けました。

大阪のグリー OB合唱団には平成13年の夏ごろメンバーに加わりました。当時は天王寺予備校のホールを借りて10数名で練習をしていましたが、あれから10数年、途中で数々の紆余曲折がありましたが、それを乗り越えて今日東西合同で演奏会を開催出来るまでに発展できたことは実に素晴らしいことと思います。

私もあと何年歌えるかわかりませんが、ボケ防止と運動を兼ねて当面の目標として創部95周年記念演奏会を目指し、合唱を生きがいとして声の出る限り続けていきたいと願っています。

大阪外国語大学グリークラブのこと

藪口和夫（昭38 S）

1. グリークラブに入りました。

私は昭和34年（1959）にイスパニア語学科に入学しました。すぐに仲間を求めてグリーに入部し、終生の付き合いになる同期の人達に巡り会い、そのうちの一人とは妹が嫁いで兄弟にも

なりました。

在学中を通じて、バイトで忙しかったのですが、練習にも割合に熱心に参加し、演奏会、演奏旅行などの行事には、ほぼ欠かさず参加し、4年間のグリー生活を十分に楽しむことが出来ました。卒業後は、勤務先が仲間とは離れた広島になったので、簡単に顔合わせをする機会には恵まれませんでした。同期の仲間の永久幹

事の西沢氏の熱意で、時折の夫婦交えての会合などを通じて接触を保つことが出来、卒業後、半世紀を優に超える54年の今日現在も繋がりを保っていることは大変に有難いことと思っております。

バイトもやり、勉強も割とおろそかにはしなかったのに何故あんなに遊べたのかと思うほどグリー仲間と麻雀をしました。卒業演奏旅行の解散後、白浜の温泉旅館に泊まりこんでの麻雀は今思っても、贅沢で優雅な遊びでした。学校の裏の公園でソフトボールを良くしました。それが、体力作りに大いに役立ったようです。

ただ、OB会など練習、演奏に参加するまでの熱意もないままに疎遠になって、カラオケもやらないので、普段は発声の機会もないままに声も枯れてしまったことに気が付いて愕然とします。

2. 社会人に

昭和38年(1963年)、広島のマツダへ。忙しく、充実した学生時代の4年間があっという間に過ぎ、当時、日本一だった初任給にも惹かれてマツダに入りました。(後日、初任給が高いだけで、後がフラットですぐに普通になることを悟りました。)

マツダは、輸出がまだ緒についたばかりで、組織が大きいことも狙いでした。狙い通り、人員も少なく、意外にも英語が出来る人も少なく、ましてスペイン語が出来るのは誰もいませんでした。

輸出業務への配置後3年ばかりはスペイン語を駆使して、単身、中米、カリブ海の島々、南米の国々にカタログ持って売り込み、代理店探しの出張に明け暮れ、それらの国々に代理店を指定しました。注文は数台から始まりました。

海外出張はまだ珍しく、大勢の職場の人々が駅に見送りに来てくれました。羽田では親戚連中の見送りがありました。

1970年代が始まると高度成長の初期が始動し、マツダも自動車産業の本丸、世界の最大市場である北米進出が課題になりました。私はその頃までにはスペイン語圏を卒業し、英語力を生かして北米進出事業に参画しました。市場開拓、Ford社との業務提携、資本提携、デトロイト工場建設、販売統括会社の経営等に、その後の25年を費やすこととなります。うち15年間に米国駐在としてNew York, Detroit, Los Angelesでそれぞれ5年間、合計15年間を過ごしました。

マツダで32年間勤務のあと、子会社の工作機製造会社に配属となりました。新しい挑戦です。工作機械の中で、当時、半導体のチップを製造する機械の効率が悪かったため、スイスの会社から技術導入契約を行い、業界の生産性を一新するに至りました。

機械の製造販売により新しい仕事の世界が広がり、退職後の仕事への選択肢が増えました。

若干の曲折はありましたが、結局、工作機の製造販売を行う地元の小企業をコンサル的に手伝えることに落ち着き、週3日程度の勝手出社で、現在、10年超継続勤務しております。

3. これからのこと

2017年6月に79歳になりました。3年前に47年連れ添った家内に先立たれたのは痛恨の極みでしたが、自身は幸い、元気で、あと2-3年は現役を継続しようと励んでおります。

太平洋戦争時を経験し、戦後の復興の中に育ち、高度成長の推進力となり、高揚の時代を生きてきたと思いますが、なかでも、外大グリーの4年は大変に重要な歴史です。

竹中一良（昭38 IN）

小生が何故グリーンクラブに入ったのか、入部の理由は何だったのか、わかりません。しかし、歌が好きだったので、あまり上手ではないと自分でも認めていたが、みんなと歌う事が自分にとって良い事だと思っていたから入部したのだと思います。入部した時期は大学2回生の初めだったと思います。入部してからは専攻語（インドネシア語）、英語以外の言語の歌を憶えるのですから暗譜をするのに苦労しました。

グリーンでの3年間は、自宅生活の為、みんなとは違い寮生活の経験はありません。しかし、グリーンクラブの演奏旅行で日本全国各地を旅行し、合宿で寝泊まりし、各地での慰問もできた事で、貴重な経験をしました。時々、今もその当時の写真を見て、懐かしく思い出していますが、だんだんと名前と顔が一致しなくなり、思い出すのに時間がかかります。

卒業の際にはインドネシア語で長文の卒論をタイプして完成しました。就職先は4年生の6月に江商（後に兼松江商、現在は兼松株）に内定しました。その後、卒業前年から、8月以外は江商の繊維貿易部に就職を前提にアルバイトとして、L/Cを読み、返電し、タイプ打ちを習いました。正式の社員にはまだなっていなかったのですが仕事が大変忙しく、徹夜して会社の机の上で寝泊まりした事もありました。そのせいかどうか、4月の入社前に受けた健康診断で肺浸潤と診断されて半年間の入院治療をする事になりました。手術はせずにストレプトマイシンだけの処置で、栄養のある美味しいものだけ

を食べる療養生活（入院生活）でした。

翌年4月、同期生とは1年遅れで入社が認められました。しばらくは非営業部門の運輸業務を行い、3年後に木材部に配属されました。その後、2年程して海外、主に東南アジア（インドネシア、タイ、ビルマ、今のミャンマー、印度）各地の周遊出張員となりました。原木買付の検品は専門の間屋の担当者にまかせて、小生は商社員として通訳、L/Cの開設依頼、打電、等忙しく楽しく、しかし、厳しい時間を過ごしたのが思い出されます。帰任後は、日本国内各地の家具間屋を、取引先間屋の担当者と廻りました。又、地方の取引先が倒産する可能性があるとのニュースを受け、夜行で直行し、債権確保の為にトラックの手配をした事も思い出します。

海外駐在の経験はなく、国内だけの生活で、結婚したのは大阪生まれの小生、28歳と、彼女は和歌山出の24歳で、見合い恋愛したものです。新婚当初は、八尾の文化住宅（アパートまがい）3部屋の手狭な住居でした。その後、3人の子供をもうけ、大阪南部の富田林の一戸建に移りました。7年後に東京転勤となり、東京の練馬区の社宅に10年間、その後、埼玉のマンション（4LDK）に19年、その間、子供が各々独立し、停年後「さいたま副都心」の夫婦二人住まいの手狭なマンションに移り、現在に至ります。

両親の介護で大阪と埼玉の往来をしていた事や、両親の死後の整理、相続の後始末等による心労からか6年前に脳梗塞になって入院しました。今も左脚が不自由で遠出が思うように出来ませんが、出来るだけ歩くようにしています。

西沢毅彦（昭38 TV）

入学式の日にはグリークラブの入部申込み用紙に名前を書きました。どうしてそんな気になったのかはまったく思い出せませんが多分勉強以外に何かをしようと考えていたのでしょう。音楽は好きでした。中学生の時、テレビが無い時代、新聞のラジオ欄で自分の知っているクラシック音楽の放送予定を知ると自転車で三条河原町まで楽譜を買いに行き、その楽譜を見ながらラジオを聴いていました。

グリークラブの4年間はほとんど麻雀の思い出しかありませんが、卒業して千葉県野田市の醤油屋さん（キッコーマン）で仕事をする事になり、正月の始業式では国歌斉唱と社歌斉唱の指揮をまかされ、音叉でチーンと格好をつけて、自分で一小節を歌ってからセノー！と社員一同を歌わせました。やらなくてもいいのにmfとffの強弱もつけて悦にいました。独身女子社員を集めてコーラス部を作り、センセ！センセ！と呼ばれていたのもその頃です。会社には早稲田や慶応を出た社員が大勢いましたがグリークラブの経験者が居なかったのはもっけの幸いでした。

海外勤務となってからはコーラスとは無縁になりましたが、シドニーではSSO (Sydney Symphony Orchestra) とオペラ・オーストラリアの会員になってオペラハウスには何度も通いました。オペラ劇場の最前列は字幕が見つらいと言う理由で料金が格安でしたから毎年最前列中央の席を予約していました。指揮者に手が

届く距離でオーケストラボックスが見下ろせる私にとっては“特等席”でした。

古希を迎えて日本に戻り、女房の故郷群馬県に住んで現在に至ります。東京でOBが活動をしているのを知り参加するようになって久しぶりにグリークラブとの関係を再開する事ができました。練習会場は赤坂見附、しばらくして東大前、八丁堀と移りましたがいずれも練習開始は夕刻からでしたから私にとっては昼前に東京に着いて美術館めぐりをするチャンスでした。上野駅、東京駅の周辺は勿論、世田谷美術館や静嘉堂文庫美術館、山種美術館、等へは何度も行きました。

2017年、群馬県高崎市のイベントの一環としてオペラ「道化師」が上演される事になり、村人として出演する誘いを受けました。4月から練習に通って8月の公演まで練習を重ねました。市民参加の村人60人以外はソリスト、指揮者、演出家、いずれもプロが揃いましたので真剣なステージでした。勿論オペラですから演技が伴います。暗記したイタリア語の歌詞を歌いながら身振り手振り、笑ったり驚いたり、周りのオバサン達と声を出さずにしゃべったり、と結構大仕事でした。公演は満員札止めの大成功を収め、私にとっては“冥土への手土産”がタイミング良く準備できた気分です。

それもこれも、グリークラブで4年間の経験があったればこそです。退職後の人生にはグリークラブでの交友関係や歌唱経験が大いに役立っています。“グリーさまさま”です。

福田忠紀（昭38 S）

年を経るごとに記憶がどんどん薄れていく状況ですから思い違いがあったとしたらご容赦を。私は皆さんからやや遅れて5月末頃に入部しました。学食の傍の部室の周りでグリーのメンバーが何人か寄ってはハモっているのに魅力を感じて入部しました。猛特訓のうえ7月の定演では、貫録十分な昌子さん指揮のもと＜黒人霊歌＞と＜枯木と太陽の歌＞のステージに立たせていただきました。初舞台です。そして素晴らしい曲とハーモニーにすっかり男声合唱の虜になっていきました。

続いて秋の関西合唱コンクールで松木さん指揮の下で4位入賞を果たし、以後関西の雄の誇りを胸に全員が日々の練習に励んだ4年間だったと思います。昌子、松木、豊田、三神、小杉さんと、代々とても素晴らしい指揮者に恵まれて、多くの良い合唱曲を歌えたのは本当に幸運なことでした。そして、薄茶色化したわら半紙に青や黒のインクでガリ版印刷された楽譜を見るたびに、楽しい思い出の数々は、写譜、印刷してくれた方々のご尽力に負うところ大であったんだなあーと今更ながら感謝しています。

2年生の3月、玉野での演奏会ではロシア民謡＜ひばり＞で初めてソロをやらせていただきました。特別な緊張感を覚えながらステージを楽しませてもらったことを覚えています。以後いろんな曲でソロパートを歌わせていただく機会に恵まれましたがいずれも良い思い出となりました。

マージャンといえば、ある時メンバー足りずということで、香里園の山野君のところに来るよう電報で呼び出されたことがありました。すごい時代ですね！また、ある時は山野君の部屋

で二晩ぶっ通しでマージャンし、最後は白い壁がピンク色に見えてきたことがありました。しかも、その足でグリーの練習に出席して2時間立ちっぱなしで歌ったのです。指揮者の三神君には、真剣味が足りなくて申し訳なかったなあと今でも思っています。

卒業して横河電機に入社後は同社の海外事業一筋に歩んできました。入社間もない頃は、在京組の西沢君、山野君、米田君たちと時々集っては、西沢君を師と仰いでビリヤードに手を染めたり、マージャンに興じたりしたのですが、やがてそれぞれの仕事が本格化していくにつれて会う機会も少なくなっていました。

同期の部長だった藺口和夫氏の妹と結婚して1男1女に恵まれました。1987年から1993年までの6年半はアトランタに駐在して充実した日々を過ごしました。帰任後57歳の時に甲状腺がんの宣告を受けました。手術に先立って失語の可能性ありと言われていましたが、幸いに術後、何の違和感もなく喋れたことをどれほど有難く思ったことか、、、。ただし音程がふらつくこともあってこれを機に歌うことを止めました。10年後、1回目の手術で取りきれなかった病巣を取り除くことも出来て医術の進歩に感謝です。

一方、昨秋の創部90周年記念演奏会などに見られるように、多くの先輩、同僚、後輩達が熱心に、継続して練習や演奏に励んでおられる姿は崇高にさえ思えて、ただただ敬服するのみです。卒業後50年以上経っているわけですからステージ上の面影と名前を一致して思い出すことは至難のことでしたが、皆様のますますのご健勝とご発展を心から願い、応援しています。

77歳を過ぎた今、「戦いすんで日が暮れて」ではありませんが、「鉦」を収め日々平穩に過ごしています。体調も難聴以外にさしたる問題

もなく、午前は70の手習いで習字の自習、午後は庭木の手入れに精出しています。百花繚乱とまでは申せませんが自分が植えた草花は必ず結

果を見せてくれています。毎日車を出して腕が錆びつかないようにしておくことも重要な日課のひとつとしています。

合唱と私

三神徹（昭38 S）

私が合唱に興味を持ったのは中学3年の時、演奏旅行に来た東北大男声合唱団の「月光とピエロ」を聞いた時。特に「ピエレット」にしばられて、高校に行ったら合唱をやろうと決め、入学してすぐ合唱団に入った。当時宮城県は公立高校も男女別学だったので、始めた合唱は当然男声、念願のピエロも早速歌うことが出来た、といっても最初の「月夜」だけ、その後「ピエレット」も歌う機会があったが、全曲を歌ったのは外語に入ってからだった。高校では2年、3年の時にNコンで全国大会に入賞し、これで受験勉強も忘れて合唱にのめり込んだ。

外語を受験した動機は試験科目に理科がなかったためというごく単純な理由から。ところが入学案内をとりよせたら、清水脩さんが先輩であることを知り、これはなんとしても入ろうと思った。入学式のその日にグリーの部室（おんぼろバラック）に行き入部を申し込んだ。

同期のなかでは一番合唱経験が多いということから、パートリーダーをまかされ、2年の秋から副指揮者になり、3年の秋から指揮者になった。最初の仕事は合宿とそれに続く全日本コンクールで、そこで松木さんには及ばなかったが6位に入賞し、これで何とか自信がついて最後まで指揮を全うすることができた。

学期が改まって新入生を迎えての最初のステージは大阪四大学合同演奏会であったが、ここで黒人霊歌を指揮した時、ステージが終わっ

たばかりのところに、長井先生がわざわざバックステージまでおいでになって、「清水さんの時代のグリーの音が再生されていたので感激した」というお言葉をいただき、もちろん私はその音がどんなものであったか知るよしもなかったが、先生の気に入る演奏が出来たことがうれしかった。

卒業後はヤマハに入社したが、楽器の会社でありながら最初はあまり音楽と縁のない仕事をさせられた。音楽と縁が出来たのは9年間のメキシコ駐在から帰国してヤマハ音楽振興会に出向してからで、ここではヤマハの子供たちのコンサートのプロモートや研修を通じて色々な音楽家と知り合いになった。いろいろな指揮者や演奏家との付き合いがあったが、そこでも素人なりに指揮をした経験があったことが何がしかの役にたったのではないかと思っている。

定年の10年ちょっと前、そろそろ第二の人生を考え始め、何かしようと思うと合唱しか頭に浮かばなかったので、当時住んでいた調布の公民館の混声合唱団に入り、そこの先生の勧めで日野市にあった男声合唱団にも入って度々演奏会でも歌った。そこでは大指揮者の小林研一郎さんの指揮（若い時に指導しておられた早稲田グリーOBのコネ）で多摩地区の男声合唱団が集まって「月光とピエロ」全曲を歌う機会にも恵まれた。その後またOB合唱団とも関わりができて、定年で仙台に引っ込むまで指揮者を務めさせていただいた。仙台に引っ込んでからは練習にもなかなか出られないので、記念演奏会

等の大きな行事があった時だけ前日から参加して出さしてもらっている。

仙台では男声合唱団「パリンカ」に入団して毎年定期演奏会やコンクールに参加している。この合唱団は結成した年のコンクールの課題曲が「パリンカ」だったのでそれをそのまま団名にしたという、いささかふざけた団ではあるが、私が入団する前には一度全国大会で優勝したこともある東北ではトップレベルの合唱団である。

このところ全国大会とはご無沙汰でなかなか実現しない。まあスポーツと違って合唱は走り跳んだりしなくともよいので、多分ボケるまでは続けられるのではないかと思っており、死ぬまでに一度は全国大会に出てみたいものである。

編集註：

三神徹さんは、平成30年4月15日、満78歳にて生涯を閉じられました。ご冥福をお祈り申し上げます。

大阪外大グリークラブについての思い出

現役時代T2からT1へ移動、その後OB合唱団では本人希望によりB1へ特落ち

山野善生（昭38 R）

1. もう60年近く前の話で、記憶も怪しいものですが、外大に入学したとき、最初入居していた布施のアパートから、阪急沿線の十三近くのアパートに転居、その後どういう理由か忘れたが、京阪沿線の香里園の独身者専門の賄い付きアパートに転がりこんだ。これが本人以外にも遊びの集合場所として適していたのか、グリー同期の遊び仲間の好評を博し、集まりが開かれることとなり、ついには指揮者の三神君まで後日転居してきた。

とは言え彼は真面目で遊びなどやらず合唱一筋だったので、入居後は結果的にマージャンにふけるわれらが悪友たちを、練習に遅れぬよう催促する役割を引き受けることになった。ここは同じような独身学生が入居していたので、騒ぎ立てぬようにすれば夜中でも会合はできたが、流石に麻雀でジャラジャラという音をさせていた時は、ひょっとしたら睡眠障害の迷惑をかけていたのではないかと今更ながらではあるが反省している。ただみんな常識ある紳士仲間だったので、どんちゃん騒ぎはせず、徹夜マージャンもさほど多くはなかったように思う。

仲間内では、京阪電鉄で京都から通っていた西沢君、京阪沿線守口に住んでいた小笠原君、さらに遠くからは福田君、藪口君、その他の同期生も参加したが、中でも米田君に至っては常連メンバーとして参加する以外に、お気の毒ながら緊急時メンバー不足の際の補充として、天王寺近辺(?)の住居に呼び出しをかけた記憶がある。本人の体調が悪い時にも、メンツがそろわないと遠慮せず声をかけていた。我々の誘いが強引だったからか、又は本人が断らない性格もあってか、随分お世話になった。

2. 卒業後貿易商社のトーメンに入社、本社の大阪に2年位いたがその後東京に転勤し、ロシア向けの機械商売にたずさわった。1970年と思うが最初のモスクワ駐在では、結婚はしていたがヴィザ事情で家族を帯同できず、単身で4年10か月勤務した。その後帰国・国内勤務・モスクワ駐在を合計4度繰り返した。

2度目以降の駐在からは、家族を帯同できるようになったが、家族連れ帯同は2度目の3年半で、3・4度目は子供の学校の関係もあって、大半の期間は単身勤務の繰り返しだった。その結果モスクワ滞在は合計で通算13年前後にな

る。他に出張期間などを加算すると、59歳でモスクワより帰国し60歳でトーマスを定年退職するまでに、合計勤務期間中の2分の1弱はロシアにいた勘定になる。

その後関係会社で3年足らず勤務し退職、しばらくして鎌倉市の現住所に部屋を見つけて転居し、現在に至っている。残念なのは、モスクワ勤務期間中ほとんど公団などの公的機関を相手の折衝ばかりで、民間人との接触・交流は皆無に近かったということ。

3. 転居後鎌倉市の大船混声合唱団に入団、

ここでは志望してテナーからバリトンに移動して歌っている。今は混声合唱と相模湾・東京湾などでの海釣り、更にチワワという小さな犬との朝夕の散歩を楽しみ、現在に至っている。

以上が私のこれまでの生活来歴だが、最近特に気にかかることは、年齢相応に物忘れが多くなり、かつ“すぐに”忘れるので、或いはぼつぼつ認知症にかかりつつあるのではないかという点、年を取ると忘れることが多くなって、その分気楽になる筈が、今のところ逆に気鬱になりそうで、多少気がかりな点です。

「スペイン市民戦争」とゲルニカ

小早川義則（昭39 S）

「大阪外国語大学グリークラブ90周年記念誌」発刊企画のご案内状有難うございました。南野均委員長をはじめとする「記念誌編集委員会編集委員リスト」を眺めつつ、感慨にふけています。西川哲朗氏までの編集委員の皆さんとはほぼ同年であり、卒業後50有余年を経た今なお、その面影が鮮明に残っています。そして大学生にして皆さん全員すでに紳士然としていたという記憶があります。当時の思い出として最も心に残っているのはやはり定期演奏会ですが、確か大阪刑務所での慰問演奏会で多くの受刑者が看守の命令下に起立着席していた光景が脳裡に焼き付いています。しかし刑務所長から受刑者の刑務作業等につき別途詳細な説明を受けても別世界のことであり関心を抱くことはありませんでした。

授業料が年間6千円ほどの国立大学で自宅から通えるという理由だけで、多少荒れていたのでしょう、他大学は一切受験せず、大阪外大イ

スパニア語科にいわば命運を賭けたのでした。幸い合格したものの大学の授業に興味を覚えることなく、親しくなった柔道部の仲間と上六周辺の飲み屋等でのコンパに明け暮れていました。当時多くの学生が参加した1960年安保騒動の真っ只中であつたにもかかわらず、問題意識が完全に欠落していたためノンポリ学生に終始していました。

そしていつの間にか4年生になり、少しは真剣に考え始めたのでしょうか、後期全出席という条件で教養科目のアベ先生の憲法の履修が特別に認められたこと、そしてスペイン語で義務付けられていた卒業論文を「スペイン市民戦争（La Guerra Civil de España）」に決定したことが分水嶺でした。卒業後に他大学の法学部に学士入学をした際に国際政治ゼミを選択したのはいわば必然でした。当時「朝鮮戦争」（中公新書）の執筆に没頭しておられた神谷不二先生に接して初めて、大学教授とはこういう人かと思つた記憶は今なお鮮やかです。

さらに紆余曲折を経て何とか大学院を終え、

また各種偶然が重なり、大学の法学部で専任教員として刑事法関連の主要科目である刑事訴訟法を担当することになりました。そして研究者として初登場したのが、法律雑誌「ジュリスト」特集号での日本の法曹にとって周知の1978年「大阪天王寺覚せい剤事件」の執筆でした。同事件の現場は、丁度外大裏にあるラブホテル密集地帯であることに何かしら因縁めくものを感じました。そしてこれを皮切りに、日米憲法に直接かかわる重要問題に取り組み始めることになります。

このように私は、大阪外大卒業後スペイン語とは全く無縁の仕事が続けてきました。ただ、2年間のNYロースクール留学のほか、何度も欧米各地に出かけたのは、外大時代に身に沁みていた世界は広いということの影響があります。その意味で外大の4年間は決して無駄ではなかったようです。そして定年退職直後の2013年9月にスペイン北西部等に1ヶ月ほど滞在した際にスペイン領バスク地方にあるゲルニカを訪

問しました、その最大の原因は、卒業論文「スペイン市民戦争」にあります。ゲルニカは、反フランコ人民戦線支援のピカソの作品として世界中で注目されたものの、今では歴史にその名を留めるにすぎませんが、芸術は偉大なりを実感しました。

あの懐かしい上本町6丁目付近は全く様変わりし、大阪外国語大学自体は、大阪大学外国語学部へ吸収合併されましたが、皆さんと同様、私にとっても忘れ難いグリークラブでの思い出とともに、今後も不朽の存在であり続けることでしょう。ささやかな私の著作の「著者略歴」の中で、必ず「大阪外国語大学イスパニア語科卒業」と明示しているのはそのためです。余談ですが、私は辛うじて生き残ったという思いが強いだけに、受刑者の出所後の身の振り方にふと思いを馳せることが少なくありません。

タイミング良く「90周年記念誌」発刊を企画された皆さんに感謝しつつ、拙文についてはご海容のほどお願いする次第です。

思いでのグリーと私

永田憲一（昭39 S）

グリークラブ創立90周年、おめでとうございます。

私は昭和39年（1964）卒で、長いクラブの歴史のなかで僅か2年足らずの在籍でしたが、その間本当に貴重な経験をさせて頂き良い思い出になっております。

音楽は私にとって不得手な学科ではありませんでしたが、声を出してハーモニーを楽しむといった経験は全くありませんでした。思い出せば小学校時代に楽器でラジオ番組に一度出たぐらいで、それ以降音楽とは無縁でしたが、大学

に入り、先輩、同輩と知己を作りたいとの思いから、グリークラブの門をたたきました。

正直、グリーとは何かをよく知らないままの入部でしたが、クラブの皆さんには暖かく迎え入れて頂いたことを覚えています。ところが、入部し早速活動が始まりましたが、入部前の安易な考えはフッ飛びました。クラブでは日々歌の練習。私が所属した部所（パート）は、歌のメロディー部分が少ない歌の練習でした。指導者の厳しい練習指導でした。この日々だと何時まで続けられるのかの思いも時には浮かびましたが、結果としてかかる日々の積み重ねが演奏会でのあのスバラシイ発表（ハーモニー／合

唱)になり、聴く人々に感動を与え、歌う者は感動を得るという事の連続でした。

ステージではヒナ段上でスポットライトを浴び、自分だけが浮かび上がっている感じ、最初は足が震え、皆さんと上手く声を合わせて歌えるのかの不安もあったが、とにかく指揮者を、と必死にタクトを見ていた様な気がします。暗譜した歌を歌い終わり、幕が降りた時は、無事に終わったんだとホッとする気持ちと嬉しさが溢れて来たのを覚えています。

外大グリークラブは、私のような未経験、未熟な者にも当初から舞台に立たせて頂き、苦しい中にも楽しい思い出づくりをさせて頂き、今でも感謝しております。

小生在籍中：

指揮者：松木、豊田、三神の諸氏

出演／参加

定期演奏会

コンクール（秋の）

メサイヤ（12月）合同演奏

外部合唱団との交流会

私の学生時代のクラブ経験は短い期間ではありましたが、その影響するところは大きで、音楽／歌と共に生活を楽しむスタイルが出来、社会人になっても、消えるどころか増している感じさえします。

◎歌を覚えるには、まず楽譜読みから。

◎歌・音楽はジャンルを問わず好きだが、元気をもらう為、毎日（唱歌、ワルツ（美しき青きドナウ）、ロシア民謡、ラテン）聴いております。

◎グリークラブのコンサートが近くであれば行く様にしている（当グリークラブ以外の団体でも）。

◎民間個人の歌の集まりに月1回、行くことにしている。

これら全て、グリークラブ在籍経験の影響で、歌、音楽で元気をもらっている今日この頃です。

以上、取りとめのない事を書きましたが、これからもグリーOB会のコンサート、グリーOB会メンバーの参加グループのコンサートへは寄せて頂きたいと思っております。

グリーと学生時代のドタバタと

古川タク（肇郁）（昭39 S）

高校2年の春、ブラスバンドに入ろうとして部室のドアを開けたら間違えた。そこは合唱部だった。いいかげんなボクはまあいいか、というわけで混声合唱のテナーに。なんと三重県大会で優勝した。そんなこともあって外語に入ってグリーの土本先輩の「嘆きの河」のソロパートを聴いて、入りたいなと思った。

入学したらすぐに60年安保の真っ盛り、授業はないし、折角田舎から志を抱いて出てきたと

いうのに、なんだこりゃ。歌とギターと漫画を描くこと、あとは麻雀しかなかった大学生活の後半には、クラシックギターと漫画とアニメーション。この内どれかをやろうと決心して、東京と大阪を頻りに往復してクラシックギターを小原安正氏に師事し、周囲が就活で忙しくなってきたので、小さな金物系商社を受けるように先生が指導して下さったのに、当時のボクはそんな所に入れられてたまるかとばかりに、新聞で見つけたCMアニメーション制作会社を受ける。

意外やあっさりを受け入れてくれたには理由があった。その年の春にスタートした国産初TVアニメ「鉄腕アトム」のヒットに刺激されたその会社が秋に「鉄人28号」と「8マン」をスタートさせる準備中でまさに猫の手も借りたい状況だったのだ。ボクは当然来年春の新卒採用だと思っていたら、明日から来い！の研修期間が待ち構えていた。

鉄人の本篇4作くらいが完成した頃、学科主任から突然のお叱り電話、今戻らないと卒業は不可との強いお達しに、またいいかげんなボクはひとまず大学に戻る。ただし会社が辞めさせてくれない。本来TVCMの会社だから大阪支社が中之島にあった。ボクは大阪電通に通ってアニメじゃなくて電通経由の実写CMの絵コンテ描きと大学生の二刀流となった。同級生からは「お前、最近金回りがえーな」なんて冷やかされた。

そんなある日梅田のアートシアターで偶然見た「パサジェルカ」？と併映された4分の超短編アニメーションがボクの心をわしずかみにし、その後の人生を一気に変えることになる。久里洋二先生の「人間動物園」だ。

以後、まだ黎明期だった日本のイラストレーションやアートアニメーションの世界に身を置くことになる。合唱とはまったく縁もなくなったし、同期のグリーメンバーたちとも遠くなった。かつてはアシスタントが今はひとりで40年以上通っている南青山の仕事場にまだ通勤しながら、某製薬会社のCMアニメーションや絵本を描いたり、そして相変わらず自主制作の短編アニメーションを作り続けている。後輩もずいぶん育った。今日本は勿論、世界中でアニメーションは百花繚乱、隔世の感がある。



筆者はアニメーション作家、イラストレーター、絵本作家。『牛頭』（第7回アヌシー映画祭入賞）や画集『ザ・タクンユーモア』（第25回文芸春秋漫画賞）など、数々のアートアニメーションや画集・絵本を著す。NHKのテレビ「みんなのうた」のアニメーションなどで幅広く活躍。日本アニメーション協会会長。2004年紫綬褒章、2012年旭日小綬章受章。



様々な思いで

藤太（昭40 F）

大阪外大グリークラブ発足以来90年の長きに亘りたゆみなく引き継いで来られた先輩諸氏に先ず感謝します。

私は昭和36年（1961）から昭和40年（1965）までの僅か4年間でしたが、貴重な青春時代をグリーの皆さん方とフルに謳歌出来た一人です。入部のきっかけは上八校舎/烈士の碑の前の体育館で行われた入学式の日、グリーメンバーが壇上で披露した校歌と黒人霊歌のハーモニーに魅了されたからです。その後、烈士の碑の横にあったあばら家の学生課の前で、パート練習をしていた菌口先輩（当時3年）と渡辺先輩（当時2年）達に勧誘されて入った記憶があります。4年の先輩方は皆こわかった！部長が高野さん、指揮者が豊田さん、マネジャーが東谷さんだったように記憶しています（合ってるかな？）

夏の合宿は小豆島で毎日朝から裸で一日中練習しました。夜に紫苑というバーへ行ったのを思い出します。11～12月のクリスマスシーズンに豊中の梅花学園にメサイアや第九の賛助出演に行った事もありました。

同期のメンバーで思い出すのは、宇野、山本、赤城、井上、小山（泰）、小山（輝）、山之内、岩崎、西川、興梠、藤。もっといたかも知れません。たしか出入りが多かったような記憶があります。

上八校舎での練習場所は3階C1教室、2階B2教室（?）、中庭、烈士の碑の前、裏の公園、

地下の食堂等あちこち探し回りました。

次年時の部長は菌口、指揮者は三神、マネジャーは新出さん等の先輩諸氏で、その次は部長小笠原、指揮者小杉、マネジャー渡辺さん。そのあとを次いで指揮者黒田、マネジャー西川、部長藤が担当しました。その後に部長を森、指揮者を藤村、マネジャーを山原がやってくれましたが山原君は今では亡き人となってしまいました。後輩で山岳部にも入っていた仏語学科の村上泉君が山で転落死して長野/塩尻まで葬式に行った事もありました。それで黒田指揮者等とみんなで「山に祈る」をやろうとなり、定演で写真を掲げ演奏したのを思い出しました。定演以外では、大阪八尾や布施少年院へさらに四国金毘羅山や和歌山の少年院まで慰問演奏に行きました。また大阪女子大への賛助出演にもいきました。

英語学科のAustin Faricy先生の指導を受け英語の校歌を作って貰いやっと外語大らしい校歌を定演で歌った記憶もあります。「Gaigo will shine」と「Varsity」です。もう一つ、西村君が1年生の時テレビの象印10人抜きのだ自慢に出場し、カンツオーネで10人抜いて優勝した時に千里山の放送局まで付いて行ったたこともありました。

最後に、毎年グリーの定演は6/7月に産経ホールでやっていましたが、新入生の練習時間が少ないのと中間試験時期との関係から12月初めに変更したのも覚えています。関西大学合唱コンクールで大阪府大に勝って表彰されたこともありました。

西川哲朗 (昭40 IN)

音楽は父の影響を受けてクラシック音楽を聴くのが大好きでしたが、まさか、GLEE CLUBに入り4年間フルにお世話になるとは思ってもいませんでした。実は軟式の草野球をやっていた関係で高校時代から大学に入れば野球をやろうと決めていましたが、外語には硬式野球しかなく、試しに4月に入部したのですが、月、水、金の午後に花園で練習があり、授業に出られないのが分かり（本当はどうって事はなかったのですが）、また、硬式野球をやった事がなかったので固いボールが怖くなり、5月の末に辞めました。その内に学食前の中庭で素晴らしい合唱が流れてきて聞き惚れていましたら、かなり強引に勧誘されその場で入部させられベースを拝命しました。7月にサンケイホールで定期演奏会があったので全曲暗譜を命ぜられました。パート練習で鍛えられ、猛練習の結果、舞台に不安ながらも立つ事が出来き、まさに私にとって奇跡でした。舞台では足が震えていました。東谷先輩（昭37S）が歌われた黒人霊歌の「Sometimes I Feel Like a Motherless Child」の素晴らしいソロ演奏が未だに耳に心地よく残っております。一年上のメンバーは兄貴分でしたが3年生、4年生の先輩は雲上人のように感じておりましたが、人格的に優れそれぞれ恐れ多く尊敬してクラブライフを楽しみました。完全に縦社会で統制が取れておりC1教室での合同練習で先輩の顔を見るのが楽しみになって来ました。だんだんのめり込み振り返ってみればサブマネージャーを1年、マネージャーを2年やりました。どっぷりGLEE CLUBにのめり込みました。

今回の主題である在団中の合宿と演奏旅行をデータが無いので思いつくままに書きます。

1. 昭和37年（1962年）

サブマネージャーとなり演奏旅行の開催地で下打ち合わせをしました。

3月2日

帝人三原工場で帝人の合唱団に参加願い演奏会。確か工場内の宿泊所で食事も有難く頂戴いたしました。

3月3日

広島在住の外語OBのついでで広島のエリザベト短大で演奏会。

3月4日

広島若草園、広島少年院で慰問演奏。

3月5日

高松演奏会。外大OB会の香川県支部の力添えをいただき高松県農協会館ホールにて演奏。

2. 昭和38年（1963年）

マネージャーとなる。各地に事前打ち合わせに行く。

3月4日

名古屋演奏会。この時は日本陶器に入社されたばかりの佐藤文隆さん（昭37S）に会場の手配から当日のステージマネージャーまでやっていたいただきました。事前打ち合わせで佐藤さんの厚情で名古屋にお伺いした時は面識のない確か2年先輩のスペイン語の女性（祖父江さん？）の立派な家に泊めてもらい朝ごはんもいただき恐縮しました。2階の客間に立派な布団とこたつを用意していただき緊張でよく眠れなかったのを覚えています。

3月5日

大阪女子大と新宮市千穂小学校で演奏会。初め



新宮市千穂小学校にて

て紀勢本線で天王寺から新宮に行き、事前打ち合わせで地元出身の藺口和夫さん（昭38S）に大変お世話になりました。また、夜は藺口さんの友人で薬局をやっていた方に先輩と一緒に立派な料理屋で地元料理をごちそうになり感激しました。

3月6日

湯川三川小学校で発表会。前日夜の夕食時にグリークラブ顧問の富田先生（タイ語）が初めて顔を出されました。先生は魚釣りがご趣味で湯川で釣りをされ突然立ち寄ってくださいました。

3月7日

和歌山盲学校慰問演奏会。同日大阪女子大合唱団と和歌山演奏会。地元の労音に頼み込んで事前に入場券を売っていただきました。

3月8日

女子大と一緒に愛徳整肢園で慰問演奏会。

9月

小豆島で合宿。土庄港にある漁師さんの経営する宿屋での合宿でした。黒田健生さん（昭40F同期、指揮者）と一緒にVISTA POINTはどこかと夕食前の休憩時間に、宿の黒く日焼けしたお嬢さんに質問すると、お嬢さんが約1キロ離れた美しい海岸に軽トラで案内してくださったのをいまだに鮮明に記憶しております。

11月

下寺町で一泊の合宿をやったのですが当日練習中に、米テキサス州ダラスでケネディ大統領

がパレード中に狙撃されたとの報が入り、全員ショックを受けてしばらく（15分程度）練習を中断しました。46歳の若さでした。暗殺された大統領は4人目でした。

3. 昭和39年（1964年）

3月

四国演奏旅行（大阪女子大と合同）。一緒にやるかどうかを全員に図りました。一部から異論が出たと記憶しておりますが結論として行くことになりました。部長の藤太さん（昭40F）と二人で事前調査を兼ね現地に打ち合せに行きました。私の親戚（杉岡茂氏）が香川県善通寺小学校の校長をしており、そのついでこの小学校の講堂をお借りして演奏会をしました。校長先生の口利きで善通寺の一番いい旅館に安く泊まり、また、琴平の金毘羅さんにも参拝しました。参加者全員で撮った写真が残っております。

また、私の卒業した多度津市の豊原小学校に私の恩師（西村君子先生。私は結構悪くて廊下に立たされたりしていました）が勤務されていたので小学生にもワンステージを持ってもらい演奏会をしました。

また、西村先生のお知り合いの岩里先生が丸亀市本島に校長として勤務しておられたので、ご紹介頂き、丸亀から連絡船に乗り本島小学校で

演奏会をしました。夕食後大阪女子大の方が体調不良で困っていたので島の山手にある診療所まで数人で、誰かが背中におぶって暗い夜道を30分間歩いてお連れしました。

その後宇和島で黒田さんのコネで地元合唱団と合同演奏をしました。

8月

長野県の白馬村で合宿。これには英語科のファリシー先生も参加されました。この夏に長野県の松本深志高校出身の村上泉さん（昭41F）がアルプスで遭難され、藤部長、黒田指揮者と相談して「山に祈る」を第8回定期演奏会（12・4サンケイホール）の演奏曲目に取り上げました。ご遺族が遺影を持って演奏会に来られました。ナレーターにはご主人がNHK大阪でディレクターをしておられたNHK大阪放送劇団の松下美智子さんをお願いしました。ピアノはフランス語学科の学生、奈良和美さんでした。松下さんのナレーションは感動的で会場に涙をさそいました。

白馬での合宿時に皆でロープウェイで白馬八方尾根に上がりました。帰りは自由行動で、徒歩で下ることになり10分ぐらい下山をしましたところでファリシー先生がかなり真剣な顔で岩場を歩くのが苦痛となり“THIS IS CRAZY”とか盛んにおっしゃったのでお付き合いして引き返しロープウェイで麓まで下りたのをなぜかよく覚えております。



金毘羅さん(琴平)散策での集合写真

振り返りますと、この時代合唱が大変盛んでマネージャーとしては各大学の定期演奏会には演奏終了時に舞台上で指揮者に花束を贈呈するのが慣例になっておりよく持って行きました。定演や演奏旅行で上げた収益で事前打ち合わせや合宿費用の補助金を浮かせ財政を何とか乗り切っていました。例えば第8回定演はサンケイホールでやったのですが立ち見が出るほどでしたが収益は北税務署への申告後8万円程度残っていました。

15年ほど前に枚方市の香里園に在った父の家を整理した時にGLEE時代のデータをすべて処分したのですが、定演のテープだけは取っておいたので、大阪の鈴木惟司さん（昭43S）に送りましたところ、彼がCDに再現し希望者に配布されました。録音を聴かれた林先生から評価をいただいたと聞いております。

思い出は尽きないですが振り返ってみれば本当にGLEE CLUBのお陰で友人にも恵まれ感謝しております。体力の続く限りしばらく合唱を楽しもうと思っております。

あなたを忘れない

森滋（昭41 A）

村上泉君。

グリークラブの部長に就任した1964年の5月。

グリー部員であり山岳部員でもあった、フランス語科3回生村上泉君が信州・北アルプスで遭難したとの悲報が届いた。がっちりした体格でいかにも山男らしく、透き通った低音はまさにミスターベースマンだった。身近な同級生の死

に大変なショックを受けた。

急きょ、その年の12月の第8回定演で合唱組曲「山に祈る」を歌うことを決めた。ご存知の通り、この曲はわが外大の偉大な大先輩・清水脩氏がダークダックスの依頼を受けて、雪山遭難した学生と母親の手記をもとに構成、作詞作曲した名曲である。

夏の合宿は北アルプスのふもと、白馬村の民宿と決め、全員で塩尻市の村上君の実家を訪れて挨拶のあと猛練習に入ったことを覚えている。朗読はNHK大阪放送劇団の松下美智子さん、ピアノはフランス語科学生の奈良和美さんをお願いした。階段教室での練習で母親役の松下さんがみせたプロ女優としてのすさまじい演技に圧倒された記憶がある。

「山に祈る」は村上君のおかあさんを招いての、このサンケイホールでの定演が初演だったが、満員のお客様から感動の拍手をいただいた。友を悼む鎮魂歌として全員の心を込めた熱唱が通じたのではないかと自負している。「山に祈る」は翌年春の高松、広島、三原への演奏旅行でも松下さんや奈良さんが同行してくださり、各地で大好評の演奏会となった。

合唱経験もなく音楽的素養のない小生がグリークラブ在籍時代に歌った中でずしんと心に残ったのが「山に祈る」である。約50人の部員の協力あつての賜物だが、今も「山に祈る」を歌うと、村上君の姿が浮かび上がってきて涙が止まらない。

グリークラブと私

伊東昭廣（昭42E）

外大生のころ、私は一時期、上八学舎すぐ東の上宮で下宿生活を送っていました。グリーの仲間も何人か近くに住んでいてよく行き来していました。当時の下宿には一般的に風呂の設備はなく、よくグリー仲間を誘い合って近くの銭湯に出かけました。近所にお住まいだったファリシー先生も時々ご一緒のこともありました。銭湯は開店直後の時間帯に行くと、入浴客はまずおらず、我々グリーの貸切り状態です。当然、自然発生的に小さな声で歌い始めます。番台から怒られないように、あくまでピアノシモではありますが浴場は適当に広く、音響もいいので、すばらしく美しいハーモニーを生み出してくれます。こんな時、ああやっぱりグリーにいてよかったなーと思う、今からすれば青春の一頁でした。

外大を卒業したあと、関西在住時は何度か現

役のみなさんとステージに立たせて頂き、さらにOB合唱団の活動が始まってしばらくして、その一員として、練習に参加しました。都合で名古屋に移り住んでからは、今までのように頻繁には大阪の練習に参加することは不可能となりました。それでは、と名古屋圏在住のグリーOBを見つけ、ともに名古屋で練習をすることになりました。最初は安藤雅之さん（S44/E/T2）と二人だけで練習を始めました。二人だけなので、練習場所は手っ取り早くカラオケボックスだったり、金山の市民会館の広場だったりでした。屋外なので人の目を気にしながら、また夏は蚊に悩まされながら、パチン、パチンと腕をたたきながらの練習でした。大阪の菅原基晴さん（S36/C/T2）から、「名古屋だったら小笠原肇さん（S38/S/B1）がいるよ」と紹介され、同時に、佐藤文隆さん（S37/S/B2）にもご参加いただき、この時点で幸運にも4人で全パートが

揃うことになり、がぜんやる気が出てきました。

名古屋のイベントとしては、平成24年に愛知教育大男声合唱団「やまなみグリークラブ」とのジョイントコンサートを名古屋市中村文化小劇場で開催しました。最終ステージはわがグリーOB合唱団大阪及び東京との合同による林誠先生指揮「月光とピエロ」でした。ほかには、

咲耶会名古屋支部総会でも名古屋メンバーで数曲を演奏したこともありました。

残念なことに、名古屋のメンバーを支えていただいた安藤雅之さんと佐藤文隆さんはその後お亡くなりになりましたが、少しずつ新しいメンバーが加わり次の演奏会に向け練習を開始しています。

卒業後50周年の節目—OB合唱団での感動を振り返る

岸田勝昭（昭42 IN）

2017年11月11日阪大待兼山キャンパス（豊中市）にて行われた咲耶会総会にOB合唱団大阪の一員として賛助出演し、世界の愛唱歌5曲を演奏した。演奏開始のVarsity, Gaigo Will Shine Tonightに続いて学歌を歌い始めるや否や、何故か限りなく涙腺が緩んできて、落涙してしまった。

その後の懇親会の場でも私にとっては全く予期しないハプニングが待っていた。司会の樽井一仁さん（昭50 R23 B2）の「今から呼び上げる卒業50周年の方は前に出て下さい」と言って呼ばれた5名の中になんと私の名前も入っていたからである。「グリークラブ卒業」後丁度50年も経っていたとは、全く気付かなかった。おまけに5名を代表して挨拶までさせられたが、思いがけずお祝いの紅白饅頭を頂いたので帰宅後美味しくいただいた。

本稿では、私のOB合唱団大阪での活動の中で心に残る3つの感動について筆を取らせて頂くことにする。

海外と大阪の4、5年毎の転勤の繰り返しの後、10年間の東京勤務を終え、大阪勤務に戻った61歳の年に当時大阪に勤務しておられた西川哲朗さんに誘われて十三の教会で行われて

いたOB合唱団大阪の練習を数十年振りに見学したのを契機に2004年夏、OB合唱団大阪に37年振りに復帰した。

1. 2006/4/30 感動のステージ—「創部80周年記念演奏会」（箕面市メイプルホール）で黒人霊歌のナレーションを担当

当時私は、黒人霊歌（Spirituals, African-American Spirituals）の歴史と背景に興味を持ち研究を始めていた。80周年での演奏曲の背景を調べて資料を作っていた関係もあり、指名されて本番の演奏時に舞台上で1曲毎に語り（ナレーション）を私が行う役を担った。

ナレーションの文言も私が曲の背景を調べて作成したが、文献を色々調べて作成したので、大変勉強になった。

一番苦労したのは、ナレーションの抑揚であった。黒人霊歌のステージで、大阪訛りのナレーションでは気分が出せないだろうと心配だったが、東京勤務時代に名古屋や北海道へ出張した時に現地の人に聞かれて元々大阪出身ですと答えたら「話していててっきり東京出身の方だと思っておりました。大阪訛りが出ませんね」と、よく感心されたことがあったので、度胸を決めることにした。そしてTVのド

キュメント番組でナレーションが入る番組やドラマ番組の台詞を録音した。何回も聴きながら shadowing を行って抑揚の練習をしてメイプルホールでの本番に臨んだ。

この演奏会での黒人霊歌5曲全て私が以前から大好きな曲ばかりであったのと、歌の背景をよく調べてからナレーションを入れて歌ったので、最高に心を込めて歌うことが出来た。外大OBのプロのアナウンサーにステージ進行の司会をやって頂いた演奏会だったが、その司会者が黒人霊歌の演奏が終わった幕間に観客に向かって思わず「しびれましたねー」と言って感動していた。私自身も正にしびれながら5曲を歌うことが出来たので、私のグリー史上最高の感動を味わうことが出来た黒人霊歌ステージであった。

山口県から駆け付けて来て歌われた伊東道彦さん(昭55 M B2)の「Go Down Moses」のベース・ソロは歌唱力・英語の発音共に抜群で、友人の来客達からプロの歌手みたいで素晴らしかったと言ってほめられたのを思い出す。指揮者の榊原昭裕さんの選曲眼と演出力には感心した。ナレーションの導入に加えて「Go Down Moses」を歌いながら全員が観客席からステージに上がって行くという演出も効果抜群であった。榊原さん、感動をありがとう！

この演奏会に備えて黒人霊歌の歴史の研究を行ったことがその後の私の趣味と研究範囲を大きく広げてくれる機会となった。2年後の63歳の時に会社をハッピー・リタイア出来たので、翌春大学院に入学してビジネス英語分析学なるものを専攻することにした。欲が出て両方の研究科の教授に頼み込んで英米文学専攻のある隣りの文学研究科の講義とゼミにも特別に参加させてもらい習得単位に含めてもらえることになった。これが米国の代表的な黒人文学作品の研究、黒人霊歌が米国で採譜された頃と同時代の19世紀英国ヴィクトリア朝時代のディケン

ズやブロンテ3姉妹の代表的な名作を原書で読んで研究することに繋がっていった。

私が今までに読んで感銘を受けた主な作品をあげてみる。(日本語版の単行本も出版されているので興味のある方はお読み頂きたい)

◎『ある黒人娘の人生の出来事 (Incidents in the Life of a Slave Girl)』(1861年) by ハリエット・ジェイコブ (Harriet Jacobs (1813-1897年) ……作者自身の南部での過酷な奴隷生活、白人奴隷主による性的ハラスメントの受難、北部への決死の逃避行という、ものすごい人生体験を基にリアルに描かれた自伝的小説。氷の張った厳寒の大河を足に血をにじませながら、赤ちゃんを抱いて、白人奴隷主の追っ手を振りはらって対岸にたどり着く必死の脱出の場面の描写がリアルでもものすごい。

◎『フレデリック・ダグラスの人生の物語』(『フレデリック・ダグラス自叙伝：アメリカの奴隷』とも訳される) (Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave, Written by Himself)』(1845年) by フレデリック・ダグラス (Frederick Douglass, 1818-1895年) ……ダグラスが逃亡奴隷としての自らの体験を自伝として綴った名著。反奴隷制論説家。奴隷制廃止運動の指導者として歴史に名を残した。19世紀に成立したひとつの文学ジャンルである「奴隷体験記」(The Slave Narratives) は、逃亡奴隷自身による奴隷制度の非道や残酷さ、アメリカの自由主義理念との矛盾を鋭く批判し、アメリカ白人の良心に訴えたノン・フィクション文学である。

◎『アンクル・トム の小屋 (Uncle Tom's Cabin)』(1852年) by ハリエット・エリザベス・ビーチャー・ストウ (Harriet Elizabeth Beecher Stowe) (1811-1896年) ……作者

は両親・姉妹とも奴隷制廃止論者という一家の娘として育った白人作家で、ストウ夫人と呼ばれた。リンカーン大統領と大統領府で初面会した時、リンカーンが挨拶の言葉として言ったとされる「あなたがこの大きな戦争（南北戦争）を引き起こした小さなレディですね」という言葉は有名。

- ◎『アメリカ紀行 (American Notes for General Circulation)』(1842年) by チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) 1812-1870年) …… 19世紀英国ヴィクトリア朝時代を代表するイギリスの小説家。奴隷制度に強く反対。主に下層階級を主人公とし、弱者の視点で社会を諷刺した作品を発表した。小説『オリヴァー・トゥイスト (Oliver Twist)』(1837-1839年)、二都物語等の名作多数。奴隷制反対論者のディケンズのアメリカ旅行の目的の1つが、アメリカの奴隷制の悲惨な現場を訪問することであったと言われている。彼の『アメリカ紀行』の第17章「奴隷制度」は、当時アメリカでもベスト・セラーとなり、アメリカ公開朗読を兼ねたアメリカ旅行の途中、悪路のヴァージニア州リッチモンドまで夫妻で足をのぼして奴隷が働く農園を訪れ、奴隷小屋の過酷な現実を観察した強烈な体験と、アメリカの奴隷解放運動家の参考資料を基にして執筆したと言われている。ディケンズが実際に体験する「奴隷制度」観察の旅は、船—馬車—汽車を乗り継いで、南部への湿地帯が続く悪路の旅であった。リッチモンドが最終地点となった。奴隷制度に強く反対する立場を表明する意味でも、この第17章で奴隷への虐待の例を数多くあげ、悲惨な現状を読者に訴えている社会改革家作家である。

- ◎『八月の光 (Light in August)』(1932年) by ウィリアム・フォークナー (William

Faulkner, 本名: Falkner) (1897-1962年) ……1949年度ノーベル文学賞受賞作家のフォークナーは、ヘミングウェイと並び称される20世紀アメリカ文学の巨匠。南部アメリカの因習的な世界を様々な実験的手法で描いたと言われる。その他の代表作に『Go Down, Moses』、『響きと怒り』など。白人ヨーロッパ人と同じ外観の自分が白人か黒人かわからず、他人の挙動によって混血であるかどうか、人種的アイデンティティ（あるいはその欠如）に苦悩する（「苦悩」自体が人種差別的）主人公を擁する複雑な長編小説。作者は黒人差別制度に批判的。この作品の標準的な written English に混じって、会話の中で、黒人英語がリアルに使用されている。特に、いわゆる黒人英語における二重否定表現は、黒人霊歌の英語を理解する上で私達にとって大変参考になる。否定語+否定語 ≠ 肯定表現、即ち肯定表現にはならず、意味上否定表現のままという黒人英語特有の表現が何箇所も出て来る。

- ◎『行け、モーセ (Go Down, Moses)』(1942年) by ウィリアム・フォークナー ……黒人霊歌の「Go Down, Moses」と同じ名称の短編小説。対黒人問題、荒野という自然の2つのテーマを持つ7つの短編から成る。黒人に対する不正と荒野の消滅という南部社会の縮図が一族の変遷を通して描かれる20世紀短編小説の名作。

- ◎その他、19世紀米国の傑作『緋文字 (The Scarlet Letter)』(1850年) by ナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne) (1804-1864年)、『白鯨 (Moby-Dick or The Whale)』(1851年) by ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) (1819-1891年) と、19世紀英国の名作群、『オリヴァー・トゥイスト (Oliver

Twist)』(1837-1839年) by チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) (1812-1870年)、『嵐が丘 (Wuthering Heights)』(1847年) by エミリ・ブロンテ (Emily Bronte) (1818-1848年)、『ジェーン・エア (Jane Eyre)』(1847) by Charlotte Bronte (1816-1855年) などの英米の名作の比較研究への興味を起させてくれる契機となったのが、80周年記念演奏会で歌った黒人霊歌の背景研究であった。

II 「丹波の森国際音楽祭—シューベルティアードたんば2」*街角コンサート*への参加

2006/10/21「第12回丹波の森国際音楽祭—シューベルティアードたんば2006—」*氷上町街角コンサート* (テーマ:水と杜のファミリーコンサート) 於:丹波市氷上町石生 丹波市立東小学校体育館 (初参加)

主催:丹波の森国際音楽祭シューベルティアードたんば実行委員会 (兵庫県立丹波の森公苑文化振興部気付、シューベルティアードジャパン、丹波県民局、丹波市、篠山市、JR西日本、丹波市音楽協会ほか)

協賛:オーストリア航空ほか

後援:シューベルティアード (オーストリア)、オーストリア大使館、フィンランド大使館、国際交流基金、大手新聞各社、大手TV放送局各社、兵庫県教育委員会など

目的:人と自然と文化が調和した森の都丹波を創造する「丹波の森構想」の推進

コンサート内容:

(1) 国内外から著名アーティストを招聘し、地域交流・国際交流の輪を広げるコンサートを開催する

(2) 丹波地域の住民・学生が企画・運営する街

角コンサートの実施

……をメインとして毎年10月に兵庫県丹波市・篠山市にて開催されている。

丹波市は私の出身地であるので、街角コンサートに何とか参加出演させてもらえる方法はないかと考え、私の小・中・高校時代の同級生で丹波市氷上町 (私の出身の町) の自治会役員を務めている宮崎奏助氏に依頼して、丹波市柏原町にある兵庫県立丹波の森公苑文化振興部に打診してもらった。その結果、2006年10月開催予定の氷上町街角コンサートの出演団体が一部未定であることが分かり、私は直ぐ柏原町に飛んだ。県の担当者に依頼した結果、氷上町街角コンサート実行委員会責任者である春日小学校 (春日町) の音楽の先生 (氷上町在住) を紹介して下さった。春日町は春日の局の出身地として名が知られている町である。直ぐ春日町に飛んでその先生と面談し、氷上町出身の私の悲願をかなえて欲しいと懇請した。同年の街角コンサートは氷上町東小学校での開催が決まっていたため、出演団体は小学生と父兄の親子コーラスの出演が不可欠とのことだったため、大学のOB合唱団とのジョイント・コンサートとしては不釣り合いだという理由で、先生は困った顔をしておられたが、誰でも知っているポピュラーな歌の男声合唱をお聞かせしますからと粘った結果、「それでは前向けに検討してみましょう」ということで、出演が事実上決まった。

《出演》

①大阪外大グリークラブOB合唱団大阪

◎ふるさとの四季

指揮:林誠 ピアノ伴奏:那須理恵子 (桐朋学園大卒、林先生付きのピアニスト)

◎日本民謡:「そうらん節」「最上川舟唄」

指揮:榊原昭裕

②ひかみ水と杜親子合唱団

③チェリストによるチェロ（+ピアノ）演奏

演奏会当日は、東京からも隣の市の篠山鳳鳴高校出身である木下和夫さん（昭41 S T2）も駆けつけて来られ一緒に出演して下さり、丹波で一緒にステージに立てたことは大変嬉しかった。

2007/10/21 「第13回丹波の森国際音楽祭—シューベルティアードたんば2007—」
柏原町街角コンサート（テーマ：森の音楽散歩Ⅲ）於：兵庫県立柏原高校 柏陵会館（2回目の参加）

《出演》

①ピアニスト ②ヴァイオリニスト
③大阪外大グリークラブOB合唱団
指揮：林誠 ピアノ伴奏：那須理恵子
演奏曲：モーツァルト作曲「6つのノクターン Piu non si trovano KV 549ほか」

演奏終了後の那須先生の話に寄れば、私達が歌い始めた途端に観客席から「まあ綺麗な声だわ！」という感嘆の声が聞こえてきたので、私達の演奏は大成功だと思った由。

コンサート終了後：丹波市保養所「やすら樹」にて山口慶四郎先生を含む15名で2次会……暖かい囲炉裏を囲んで丹波名産の「ぼたん鍋」料理を楽しんだ。

翌日早朝 保養所の近くで、コスモス祭り真っ最中の満開のコスモス畑の前にて写真撮影。

第3回グリーンゴルフコンペ 於：ひかみC.C.（岸田のメンバーコース）2組8名参加。

私にとっては、出身高校校庭内の柏陵会館（同窓会館）での街角コンサート出演で、幼なじみの小・中・高校の同級生が多数来聴してくれたことは無上の喜びであった。

III. 淡路島五色町 菜の花コンサートの実現

故山口慶四郎先生の人脈とご尽力、洲本市五色町の合唱団 五色サルビア・エコーの皆さんのお骨折り・ご協力により2回の大変意義のあるジョイント・コンサートが実現した。

2005/03/27（第1回）菜の花コンサート
故司馬遼太郎先生を偲んで 阪神・淡路大震災10周年記念事業（於：淡路島洲本市五色庁舎五色文化ホール）

五色サルビアエコー・五色中学ブラスバンド部とのジョイントコンサート

主催：五色町震災復興記念感謝祭実行委員会
後援：五色町、高田屋嘉平衛翁顕彰会、五色町文化協会

『菜の花の沖』の作者 故司馬遼太郎氏の母校大阪外国語大学

『菜の花の沖』のモデル主人公 高田屋嘉平衛翁の生誕の地 五色町

指揮：林誠先生、榊原昭裕

出演：大阪外国語大学グリークラブOB合唱団
五色サルビア・エコー、五色中学校ブラスバンド部

演奏後の懇親会席上で、同じテーブルの五色サルビア・エコー 山口富美子さん（当時の五色町長の奥様であると後で知ってびっくり）と親しく歓談させて頂き、写真を撮り合ったのが縁で、両合唱団の友情が深まり、次の2010年3月の第2回菜の花コンサート開催実現につながった。

◎山口慶四郎先生の講演「司馬遼太郎と高田屋嘉兵衛」

◎男声合唱組曲「月光とピエロ」(指揮：林誠)

◎第4ステージ 合同演奏

1. 「ふるさとの四季」(源田俊一郎編曲)(混声)より

指揮：榊原昭裕 ピアノ：南村知佐恵 「ふるさと」「春の小川」「おぼろ月夜」

2. 「五色浜の子守り歌」補編曲)

指揮：朝田幸代 ピアノ：岡本恵理

元音楽教諭であった高鍋和雄先生が採譜し、再現された地元の歌で、五色サルビア・エコーによって歌い継がれている。詠み人知らずのこの唄は、広島県や愛媛県、遠くは秋田県などでも歌われている由。歌う回数が多くなるほど味わいが出て来る民謡である。

2010/03/28 (第2回)『菜の花コンサート』 * 洲本市げんきのもと助成事業「高田屋嘉平衛翁・司馬遼太郎先生を偲んで」 * (五色サルビアエコーとのジョイント・コンサート) (於：淡路島洲本市五色庁舎 五色文化ホール)

主催：五色サルビアエコー(代表：高鍋和雄先生)

後援：兵庫県淡路県民局、洲本市、洲本市教育委員会、高田屋嘉平衛翁顕彰会、(財)五色ふるさと振興公社、五色町商工会

2005年の第1回コンサートの後も、五色サルビア・エコーの山口富美子さんと私が季節の挨拶等の連絡を保っていたため、山口慶四郎先生と相談して、2009年に山口慶四郎先生、当時の鈴木マネージャー、私の3人にて4年振りに五色町を訪問し、サルビア・エコー幹部の高鍋和雄先生ご夫妻、山口富美子さん等、幹部の方々とミーティング結果、2回目の開催が内定した。

開催を実現するために高鍋先生ご夫妻、山口富美子さんには本当にご尽力頂き、多大の協力を頂いた。地元の各種団体の後援・支援を得る交渉も全部高鍋先生がして下さって、開催実現した。私はこのコンサートの臨時マネージャーを務めさせて頂いた。

名古屋の伊東昭廣さん、佐藤謙司さん、佐藤文隆さん、小笠原肇さん、安藤雅之さんも参加された。

《演奏曲》

黒人霊歌5曲(指揮：池田守)

多田武彦組曲『雨』より5曲(指揮：林誠)

合同演奏：「ゴンドラの唄」「波浮の港」「故郷(ふるさと)」(指揮：朝田幸代)

チラシ、プログラムの手配、集客、コンサート前日は高鍋先生ご夫妻以下、五色サルビア・エコーの皆さんが総出で、会場ロビーでの故司馬遼太郎先生関連の資料展示・会場の設営等の準備を全面的に引き受けて下さり、助けられた。また、特に山口富美子さんには多大のお世話になった。

コンサート前日に西川哲朗さん達と一緒に宿泊した民宿での夕食には、趣味の釣りを終えられた林誠先生、那須理恵子先生も駆けつけて参加され、楽しい夕食会であった。

コンサート翌日には有志で近くのゴルフ場でプレーを楽しむことが出来、思い出に残る本当に楽しい五色町滞在であった。

このような地方の合唱団との交流は、何年か毎に定期的で開催する価値のある有意義な交流であると思う。

五色サルビア・エコーの皆様、本当にありがとうございました！

近藤純雄（昭42 S）

1995年5月に行った50歳記念カルテットコンサートは予想をはるかに上回り盛況に終わりました。そして、古くからの友人、知人、グリークラブの先輩/後輩、家族の方たちとの交わり、再会の場になった事が、私にとっては大きな喜びでした。このコンサートを提案、企画、実行に持って行ってくれた故浅野君をはじめカルテット仲間には感謝あるのみです。私には忘れられない大切な思い出になりました。ありがとうございました。カルテットメンバーは1967年イスパニア語科卒の同期で、トップテナー西村信勝、セカンドテナー浅野征道、バリトン山本勝昭、ベース近藤純雄でした。

浅野君から「もう、皆さんこれからしばらくは海外勤務はないよね、第二の人生を50歳からと考えると、50歳記念に我々4人でカルテットコンサートをやらない？」と発案があったのは、このコンサートの2年ほど前だったと思います。当時はまだ仕事をしている真っ只中で、浅野君からこの発案があった時、私は正直なところ、突飛な話で、現実的なものとは受け止められず、「難しいと思う、実力もないし、自信もない、又、練習する時間もないのでは…」、とかなり否定的なコメントをしていたように記憶しています。西村君はかなり乗り気で、「出来るのではないか、是非、やってみよう、やれる」、山本君は「まあ何とかなる、いいと思う」と私を除く3人は非常に意欲的で、結局私は3人に引っ張られ、これに乗っかかる形で参加したようなものでした。さて、実行すると決めたものの具体的にどうするのかについては浅野君にアイデアを出して貰おうと彼に頼ること大ではなかったでしょうか。

最初に決めたのは下記のような事柄でした。

- ①時期的には50歳記念ということで、全員が満50歳が前提、従って、1995年2月～5月に行う。コンサート会場は公共のホールとする。
- ②練習は取り敢えず月一回からはじめる。
- ③場所は持ち回りで各自の自宅。
- ④選曲はアカペラで3曲、黒人霊歌1-2曲、イスパニア語科出身なのでラテンの曲を取り入れる。聴衆が親しみやすいポピュラーな曲を選ぶ。ピアノ伴奏をつける。各自ソロを準備。
- ⑤グリークラブOBにワンステージお願いする。
- ⑥キャッチコピーを考えプログラムに載せる。このコピーを「旅路真っ最中50歳、渋く・品良く・元気よく」。

さて、決めたは良いのですが、一番肝心の練習が思うように進まずで、最初の頃は譜読みの段階で挫折しそうな事も多々ありました。歌い込んでいない事で、リズムが合わず、ハーモニーもさっぱりで面白くなく、つつい練習を早めに切り上げ懇親会になることもしばしばでした。まだまだ時間はあると考えてしまった事ではない加減な練習になってしまったのでしょうか。

取り敢えずはアカペラで歌える小曲を選曲、徐々に曲数を増やして行きました。自宅での練習からはじめた事で、子供たちも含め家族との交わりが出来、コンサートに向けて家族の応援を受け盛り上がり行った事はありました。一方では、もう後戻りができない、いい加減な事はできないとの覚悟も出来ていったようです。

このように、書いているうちに段々と思いついてくるものですね～。

日時は5月の連休明けを目指すことになりました。これは連休明けであれば、コンサートに付き合ってくれる友人、知人は他に予定を入れ

ずに来てくれるのではないかと予想したからです。会場の予約については、会場は大きすぎず、小さすぎない会場、300～400名程度入れる会場、そして交通の便が良いところ…、あれやこれやと考えました。そして、費用を最小にする為、公共のホールを探す事になりました。

当時はバブル時に自治体がこぞってコンサートホールを造った事で候補の会場は比較的多くあり、380名ほどの席を備えた神奈川県民ホール小ホールを予約できました。パイプオルガンまで設置された会場は豪華で、本当にラッキーだったと思います。ただ、自治体の住民でない資格がなく、申し込みを行った後、くじで決まるというシステムでしたので、私を除く神奈川県居住の3名が交代で県民ホールに足を運んでくれ、最終的に狙っていた5月の連休明けの13日（土曜日）を押さえる事が出来ました。皆さんには何度も県民ホールに足を運んで頂いた事、今更ながらありがたかったですね。私は何もしないわけには行かずと、一度のみ皆さんにつきあっただけですから…。

選曲に関してはグリークラブ時代に口ずさんでいたアカペラのハーモニーし易い小曲を選びました。その他の曲は伴奏を付け、黒人霊歌、ラテンの曲、そして一般の方たちに馴染みのある、良く知られている曲を多く選ぶ事にしました。そして各人がソロを1曲歌う事になりました。余談ながら、ソロで歌うのは緊張するし、私は大変でした。あがってしまって歌詞を忘れる可能性もあるので、気つけ薬のようなお酒を含んでステージに臨みました。

伴奏は西村君が通っていたピアノバーでの演奏者の方、そして演奏会を盛り上げてくれるポイントの司会者をグリー後輩の井上尚弘さん（1970年中国語科卒）をお願いする事にしました。井上さんをお願いしたのは私たちが4年生の時の定演、黒人霊歌のステージでの彼の感動的な朗読があり、さすが外語のニグロと絶賛された事が記憶に残っていたからでした。

さて、形は整ったのですが、練習を続けていてもなかなか進歩がなく、カルテットで発表出来るレベルにあらずの状態が続き、大丈夫だろうかと随分心配していました。こんな中で、本当に練習に熱が入りだしたのは演奏会の3～4ヶ月前になってからではなかったでしょうか。

正直、焦りだしていました。プロでもないし、少くらの失敗は愛嬌ですが、そんなレベルではなかったからです。このままでは演奏会のキャッチコピーの「渋く・品良く・元気よく」が「格好悪く」なるねえと冗談を言いながらも、この頃からはさすがに真剣になっていったように思います。

グリークラブOBたち賛助出演をお願いしたところ、20数名が駆けつけてくれて演奏会を盛り上げて頂きました。大阪、名古屋からも応援にかけつけて頂き、一緒にクラブソング、「柳河」、「秋のピエロ」、「Ride the Chariot」、「U Boj」などを歌った事がまるで昨日のように思いだされます。後輩の張り切りボーイだった故安藤雅之君（昭44E）が熱唱していたのが印象に残っています。

私はこのコンサートの翌年からコスタリカで勤務、今現在もコスタリカで生活しています。あの時、今は亡き浅野君、そして西村君、山本君が引っ張ってくれなければ、カルテット演奏会を行う機会などまるで考えられなかったでしょう。こんな素晴らしい機会を与えてくれた仲間にもう一度 Muchisimas gracias !



ボーカルカルテットコンサート(1995年5月)神奈川県民ホール

私を救ってくれた一言（藤雄木さんのアドバイス）

西村信勝（昭42 S）

大学1年の時に、無謀にもあるテレビ番組に挑戦した。「歌のタイトルマッチ」という素人による歌の勝ち抜き番組で、毎週日曜日午後7時30分から8時までNETテレビ（現テレビ朝日）系列で放映されており、結構多くの人に見られていた。その番組に出ようと思った理由は極めて単純で、グリークラブの制服を作る資金が欲しく、番組で1人抜けば、その資金が獲得できると思ったからである。

とはいっても、やはり応募するとなればなかなか決断ができずぐずぐずしていたら、同期の山本勝昭さん（昭42S）に背中を押され、彼に付き添われて心齋橋で行われたオーディションに参加した。そこには200人ぐらいの応募者がいて、ますます怖気づいていたら順番が来て、覚悟を決めて「カタリ・カタリ」をピアノ伴奏で歌った。「カタリ・カタリ」は1911年にサルバトーレ・カルディッロが作曲したナポリ歌曲で、歌謡曲やジャズが中心だった「歌のタイトルマッチ」にはある意味不似合いな曲だったかも知れない。ただ、逆にそれが珍しかったのか、オーディションを通過し、番組に出ることとなった。

この番組は録画ではなく生で放映されていたが、テレビに初めて出演した日は、大阪の毎日放送のスタジオからの放送だった。たまたまグリーの合宿日であったこともあり、合宿を抜けて2年先輩の藤太さん（昭40F）がスタジオまで付き添ってくださった。また、グリーのメンバーも合宿所でテレビを通じて応援してくれた。その時の相手は確か上智大学の学生でジャズを歌ってすでに8人を勝ち抜いており、まず勝ち目はないと覚悟した。開き直って、「カタリ・カタリ」をピアノ伴奏だけで歌った（バンド伴

奏はあったが、この曲はピアノ伴奏だけをお願いした）ところ、2人の歌をもう一度聞き直すというプロセスを経て、何とか勝ち抜いた。当時の審査員は、服部良一や淡谷のり子など歌謡界の大御所で、辛辣なコメントで知られていたが、「カタリ・カタリ」だけは褒めていただいた。その後、イタリア歌曲やカンツォーネを中心に、東京のNETテレビのスタジオ（2回）を経て、京都の弥栄会館での公開放送まで勝ち続けた。弥栄会館には、当時のグリー仲間が大挙して応援に駆けつけてくれた。そこでも、最後の2人を勝ち抜き、10人抜きを達成した。賞金10万円に加え、世界一周旅行（KLM）とスポンサーの象印マホービン製品一式の副賞をいただいた（象印マホービン製品は、応援に駆けつけてくれたグリーの仲間たちによってあっという間に消えてしまったが）。しかし、最初から最後までグリーの仲間が応援をしてくれたおかげで10人抜きができたと今でも当時の仲間に感謝している。

副賞の世界一周旅行は、10人勝ち抜きを達成した人が複数になるまで実現することがなく、何年かに1回という頻度で行われていた。副賞のことなど忘れていたころ、放送局から世界一周旅行がおこなわれるとの連絡があった。なんと実施の時期が第9回定期演奏会（1965年11月30日）と重なっていた。第9回定期演奏会の指揮者は藤村治郎さん（昭41F）で、私は副指揮者として、第3ステージを振ることになっていた。ソロも1曲あり、私にとってはとても大事な定演であった。とはいっても、当時タダで世界一周旅行ができるということは夢のようなものであり、簡単に諦め切れるものではなく、「定演か旅行か」で心が揺れ動く日々を過ごしていた。しかし、最終的に、「外大なので今海

外旅行に行けなくても、いずれ行ける。定演は今しかない。やはり、定演を優先しよう」と定演を優先することにした。それを聞いた1年先輩の藤雄木滋さん（昭41S）がやってきて以下のように諭してくださった。

「ここは世界一周旅行に行け。確かに、お前が世界一周旅行に行って、定演に出ないことはグリーのみんなに迷惑をかけることになる。でも、ここでみんなに借りを作っておけ。そうすると、お前が来年指揮者になった時に、グリーのメンバーが何かの理由で欠席しても、それを許せるようになる。逆に、ここで旅行を諦めると、欠席するメンバーを許せなくなり、指揮者としてグリーを纏めきれなくなるよ」。

この言葉がきっかけとなり、結局、定演を欠席して海外旅行に行くことになったが、藤雄木さんのこの言葉はその後ずっと心に残った。4年の指揮の時期だけでなく、ビジネスの世界に入った後も、藤雄木さんのアドバイスは大きな支えとなった。

その後、ニューヨーク時代には、国際金融の分野で一緒に仕事をしたり、家族でカナダに旅行に行ったりと親しくしていただいた。ただ、帰国後、直接コンタクトすることもなく年月が経たある時に、残念なことに藤雄木さんの訃報に接することになった。しかし、私にとって、藤雄木さんのアドバイスは今でも心に残る大切に貴重なものとなっている。

エポックメイキングな変革をもたらした二人の指揮者

鈴木惟司（昭43S）

—定演が7月公演から12月公演に変更—

私が入部したのは1964年4月。入学式でほぼ最前列にいた私は目の前で歌われた「月光とピエロ」に感激し興奮冷めやらぬまま会場を出たところを浅野征道さん（当時S2年）に勧誘されその場で入部しました。当時の指揮者はF4年の黒田健生さん、私が最も敬愛する指揮者です。最初に練習に取り掛かったのは「組曲富士山」、それまでのグリーの傾向からは当然その年の定演の最終ステージを飾る曲だったと思われま

す。ところが5月の連休明けに訃報が飛び込んできました。山岳部員でもあった村上泉さん（F3年）が北アルプスの＜不帰の嶮＞で遭難、亡くなられたのです。その年の夏合宿は信州で行われ合宿の合間に村上さん（松本深志高校出身）

の自宅を全員で弔問に訪れました。1964年12月、第8回定演で歌ったのは5ステージ、「ドイツ民謡」「スペイン民謡」「組曲富士山」「黒人霊歌」最終ステージは「組曲山に祈る」（会場には遺影を胸に抱きしめた村上さんのお母様の姿が）。

私の入部前年（1963年）まで定演は毎年7月開催だったそうです。この年から12月開催になったのは何かの巡り合わせかもしれません。1964年5月発行のグリークラブ誌第10号に載った黒田指揮者の手記に「今年の定演は12月4日と決定しています、定演の期日を変更した理由は一年生の実力を上げてからステージを持ちたいと言うことでした…」とあります。この年以降12月定演が定着しました。

後日談：外大グリーOB合唱団として2008年11月に「山に祈るを唄う」演奏会開催が決定した2006年末に林誠先生にこの第8回定演で演奏した「山に祈る」のCDを聴いて頂きました。

演奏当時の録音を大きなオープンリールにとつたものを40数年経ってCDに焼き直したもので録音状態も悪くはたしてどんなコメントを頂けるものかと心配していたところ、「この時の指揮者の方は非常に耳のよい方だったようですね、最後まで音程に狂いがありませんでした」とおほめの言葉を頂きました。尊敬している先輩を褒められて我がことのように嬉しかった記憶があります。

—外大グリー一定演の最終ステージに変化が—

1966年3月の演奏旅行は岐阜、静岡、東京。東京では東京文化会館小ホールにて清水脩客演指揮で第一回東西外国語大学交換演奏会を持ち、大阪外大は、アメリカ民謡、組曲「枯木と太陽の歌」、黒人霊歌を歌い、最終ステージは清水脩指揮の「月光とピエロ」、東西外大の合同演奏でした。演奏後の打ち上げで清水先生は「大阪外大の黒人霊歌は伝統もあり良かった、特にFortissimoが良かった」とおほめの言葉か冗談か微妙なコメントを下さいました。この清水先生の言葉を糧にしたのかどうかは定かではありませんが、次期指揮者であった西村信勝さん（正指揮者時S4年）は1966年12月の第10回定演の最終ステージをこれまでの定番であった邦人組曲から黒人霊歌に変えられました。曲

数をこれまでの4-5曲から9曲に増やし、曲間に朗読と間奏を入れ、間奏の最後の音で次の曲の音取りをするという工夫を凝らし、黒人霊歌9曲を一つの組曲の様に纏められました。これが実現出来た大きな要因の一つはピアニストに塩見憲一さん（E2年）を得られたことだったと思います。最後の曲は「Soon Ah Will Be Done」で締めました。翌年第11回定演（私達が4年の時）も同じ形式をとりました。この最終ステージ黒人霊歌、最終曲「Soon Ah Will Be Done」と言うパターンは第17回定演まで続きます。新たな伝統の誕生でした。

編集註

本稿で記述されている黒田健生さんは、平成30年4月2日、満76歳にて生涯を閉じられました。ご冥福を祈り申し上げます。

奥様からの会葬礼状の冒頭には、以下の文章が記されています。ここに謹んで転載させていただきます（一部抜粋）。

昔から音楽が好きだった夫は、大学で過ごした4年間コーラスに情熱を注いでまいりました。指揮者をさせていただくこともあり、きっと夫にとって、その4年は、輝かしいものだったと思います。

特別なことは何もありませんが

板村哲也（昭44S）

「…………。西村さんができるだけ多くのメンバーでピエロを歌い上げたいと熱心に勧誘しています。思いに応じてあげてください」。

「男声合唱とブラスバンドによる Autumn Joint Concert」（2014年11月2日文京学院大学 仁愛ホール）を前に、2014年7月25日に、同期の大井耐三氏（昭44S）から私に入ったメールである。それ以前にも大先輩お2人からOB合唱団へのお誘いを頂いたことは有ったが、業

務の関係で通算20年以上東京を離れていたことなどから外大グリーンとは縁遠かった。2014年の誘いで、それでは、その演奏会のみ参加しようと思い、初めてOB合唱団（東京）を訪れたのが2014年7月28日。以降どういう訳かそのまま団に居ついて約4年になる。

私の合唱以前の音楽との関わりは、未就学時に手回し蓄音機で英語の子供の歌を聴いていた（聴かされていた）、家にハーモニカが有った、小学3、4年の2年間ピアノを習っていた（習わされていた）、程度。中学に入って最初は柔道部に入部、中学3年から合唱も始め、以降合唱は高校、外大と続けた。大学になって男声合唱というものを意識したが、今気づいてみれば中高6年間は私学の男子校で、何のことはない、中学から男声合唱をしていたことになる。当時は学校の合唱部、男の子ばかりというだけで、男声という意識はあまりなかった。阪神間には私学の女子校も多く、こちらは当然女声コーラス。お互いに異声（異性？）に興味があったとか、近隣の女子高と合唱交歓会を行ったりしていた。

外大入学に際しては迷うことなくグリーンに入部。入学式の日、校舎の玄関近くに部員勧誘のブースを出してキャンペーンをしていた西村信勝先輩他の皆さんを訪れたのが縁で、回り回って今回この原稿を書くことになった。

外大卒業後は、合唱を聴きに行くことはあっても、自分が団員として歌うことはほとんどなかった。OB合唱団に入団するまでに45年のブランクが有った。この間に合唱を行ったのは1度（1年）だけ。東京都武蔵野市の合唱団に属し、小林道夫の指揮・チェンバロで1989年12月にバッハのクリスマスオラトリオを歌った。また混声合唱の経験は人生で3回しかない。最初の混声合唱は大学4年の11月に大阪外大女声コーラス部の初の学外発表会にグリーンクラブが賛助出演し最終ステージ（混声）で歌った日

本のうた5曲。次が大学4年の12月に大阪労音のフロイデ合唱団に入り外山雄三指揮で歌ったベートーベンの第九。最後が上述のオラトリオである。合唱メンとして貧弱なキャリアである。その代わりに、中南米駐在通算17年の間ラテン音楽を楽しみ、最後の駐在地グアテマラではマリンバの研究（演奏ではない）もできた。

学生時代のことは、勉強のことはほとんど覚えていなくても、部活や遊びのことは覚えているのは、私のみではないのではなからうか。練習、楽典・音楽理論の勉強、定期演奏会、演奏旅行、合宿など。勉強だけでは得られない人間関係とその縁。快い緊張感とコミュニケーションが生み出すハーモニー。作ったハーモニーが身を包む心地良さ。その楽しかった日々の経験が直接間接に、また知らず知らずに、人生のいろいろな局面で影響を与えているようだ。その一例だが、58歳で何気なく始めたボールルームダンスおよびその他のダンス。ある日ふと気が付いてみると音楽も好き、運動も好きな自分にとって、両方を満たしてくれるものだった。ダンスも美やハーモニー、コミュニケーションを伴う奥深く難しいものだが、難しいことはともかく、音楽に合わせリズム良く体を動かす快感がいい。自分の体が結構いい玩具（おもちゃ）になる。

グリーの4年間は短い期間ではあったが充実した日々であった。写真やプログラムを見るたびに当時のことがよみがえってくるが、悔やむことが一つある。70歳近くになってOB合唱団で歌うことになるとは全く考えていなかった。OB合唱団入団の1～2年前に、中、高、大の合唱団で使用した楽譜すべて（冊子として販売されたものは除く）と、またそれより以前に40～50年間保管してきた青春時代（中、高、大）の日記を廃棄した。家の収納スペースの問題と、過去のことを回想するより先のことを考える方が大切と考えた。もう合唱団で歌うことはない、万一再開することが有っても、楽譜は

売っているだろう、誰かが持っているだろうと、自分に言いかけ、言いかけ、言いかせて「えいっ！」と処分した。青春時代の思い出のつまった資料を捨てた。残したのはプログラム、製本市販された楽譜それに写真・ネガ。日記を残していれば当時のグリーの活動も正確に把握できるし、今回の記念誌作成にも役立ったのだ

が、後の祭り。グリーを再開した今となっては惜しいことをしたと悔やんでいる。

最後にひとつ。家内（旧姓加藤、昭46S）が前述の外大女声コーラス部発表会の司会者として同じステージにいた。当時はまだ結婚とはほど遠い時期であったが、今はグリーのよき理解者としてそばにいる。

合唱との出会い

大井耐三（昭44S）

私と合唱との出会いは、広島の高校の先輩で、寮で同じ釜の飯を食べた西村信勝氏（現OB合唱団東京代表）から大学入学時にグリーへの加入を勧誘されたことに始まります。それまで合唱の経験は全くありませんでしたが、高校の寮で小林旭の「さすらい」などを大声で歌っていたのを同氏に聞かれていたのかもしれませんが。爾来4年間、生来の凶々しさで諸先輩や後輩の諸氏に多大なるご迷惑をかけながら大いにグリーでのクラブ活動をエンジョイさせて頂きました。

年を重ねるとともに記憶が曖昧かつ断片的になります。一回生の時東京文化会館小ホールで東京外大と合同で清水脩先生の指揮のもと「月光とピエロ」を演奏したこと、二回生の時西村氏の指揮で「地下水」を歌い大阪府合唱コンクールから関西合唱コンクールへ進んだこと、三回生でマネージャーとして担当した演奏旅行の新居浜で、確か関学と日程が重なり来場者が少ないことに青ざめたこと、最終学年では部長を務めましたが、同期の安藤雅之君（誠に残念ながら3年前逝去されました。心からご冥福をお祈りします）の熱い指揮のもと、最終ステージで黒人霊歌を歌い上げ、最後に「Soon Ah Will Be Done」で定期演奏会を締めくくっ

たこと、などを思い出します。

その後社会人になってからはもっぱらカラオケやピアノバーで歌うぐらいで、合唱とは全く無縁で過ごしましたが、数年前仕事から完全に離れセカンドライフで何をしようかと考えているときに、学生時代に大阪四大学で一緒に歌ったことのある阪大出身の先輩からタイムリーに地域の男声合唱団（町田男声合唱団マルベリー）へのお誘いをうけ入団しました。長いブランクの後だけに不安でしたが、音源CDの助けを借りて木下牧子や信長貴富など、最近の作品に苦勞しながらも爾来活動を続けています。団員の高齢化もありメンバーは漸減傾向ですが、ほぼ毎年単独で演奏会を開催し、今年9月には東京三多摩地区の男声合唱団（6団体）との演奏会で、世界的マエストロの小林研一郎氏の指揮で「水のいのち」（高野喜久雄作詞、高田三郎作曲）を合同演奏する予定があり楽しみにしています。小林氏の指揮で歌うのは2013年に同氏の出身地である福島県いわき市で、今回と同じ三多摩地区の男声合唱団と地元の合唱団や高校生とで「月光とピエロ」を大合唱して以来二度目になります。

一方グリーのOB合唱団には3年前のベージュ色のコンサートの前くらいから参加させて

頂いています。マルベリーと練習日が重なることなどから参加回数が少なくご迷惑をかけていますが、昨年東京での90周年演奏会で望外にも「Go Down Moses」のソロを正に半世紀ぶりに歌わせて頂き、家内からは“声が出ていなかったよ”との厳しい指摘を受けましたが、得難い思い出を作ることが出来ました。またこの時の東西の演奏会で聴きにきて頂いた方も含め、本当に久しぶりに現役時代共に歌った仲間と会うことが出来たことも嬉しい出来事でした。このOB合唱団を創部以来支えてきて頂いた歴代の役員の方々のご努力に心から感謝致します。

こうして振り返りますとグリーでの4年間の活動が学生時代で唯一自慢できる思い出ですし、その経験と人との繋がりが、60歳代後半からの



卒業前同期の仲間と

人生を豊かで活力のあるものにしてもらっていると改めて感じております。

最近持病もあり医者のお世話になることが多くなりましたが、これからも出来る限り2つの合唱団の活動を続けてステージでの緊張感と達成感を味わえればと願っております。

私にとってのグリークラブの思い出

塩見憲一（昭44 E）

大学時代を思い返すと、授業よりグリークラブのクラブ活動に気持ちを集中させた時間の方が長かったように思えます。グリーでは合唱を楽しんだことはもちろんのこと、大勢の聴衆を前にしてピアノを弾く機会も作っていただき、本当に良い思い出が胸に深く刻まれています。

合唱に興味を持ったのは、小学校6年から中学2年までイギリス系男子ミッションスクールで少年聖歌隊に所属し、地元のコンクールにも出て合唱の楽しさを味わったことによるところが大きく、又、姉が大学の混声合唱団に入り大学生活を楽しんでいたことから、外大に入学してすぐにグリークラブに入りました。ピアノについては、小学校3年生の頃から弾けるようになりたくて、楽譜の「ド」と鍵盤の「ド」の位置を教えてもらって自己流で弾きだしたのが始

まりで、ようやく高校1年と2年の2年間だけピアノ教師に付くことができ、当時は時間があればピアノに向かっていました。

グリークラブに入って2年目になり、指揮者の西村さんからピアノ伴奏をするよう依頼があり、更に、その年の定期演奏会では黒人霊歌のステージの趣向を少し変えて朗読のバックにピアノを入れ、それにより音取りをしなくてすむように間奏曲を作ってみてくれないかとの話があり、今考えると無謀にも受けてしまいました。

曲を作るのは私にとっては全くの未知の世界で、どうすれば良いか色々と迷いました。最初は、歌い終わった曲のキーから次に歌う曲のキーへと間奏曲の中で転調することを考えて試行錯誤しましたが、これはなかなかうまく行かず、結局は、次に歌う曲の曲想をすぐに出すことにして、次の曲のメロディー部分を短くアレンジするとともに、黒人霊歌の雰囲気により一

層印象付けるためにできるだけシンコーションを強調し、且つ、朗読が実際どの程度の長さになるか演奏会当日のリハーサルまでわからなかったのが、アレンジしたメロディーを何回も繰り返せるようにして、朗読の長さに臨機応変に対応できるようにしました。テープを聞き直すと、テンポを朗読の雰囲気に合わせて弾いていたようで、これをもう少し次に歌う曲のテンポに近づけたほうがスムーズに歌い始めることができたのではないかと今頃になって反省していますが、初めての作ながらどうにかご要望に合わせることができたような気がします。

ピアノについて特に思い出に残るエピソードとハプニングをそれぞれ一つ記します。

エピソードとしては、1年の春休みの演奏旅行で私がピアノで音取りをすることになりました。T2の私の立ち位置から、毎回T1の前を通りすぎてピアノまで音取りに行き、その間まったくの静寂のホールに通常より長く私の靴音だけがコツコツと響くという状況は実に緊張するものでしたが、浜松市民会館での演奏会ではそれだけに止まりませんでした。同会館では音取りだけなのにヤマハのコンサート用グランドピアノを用意してくれていて（会館は間違っていたのかもしれませんが）、さすがピアノ生産の中心地と感心していたところ、なんとそのピアノにはあこがれのあの有名なピアニストのウィルヘルム・ケンプが署名しておりびっくり、ますます緊張して恐る恐る音取りをしたのが思い出されます。

ハプニングとしては、イタリア歌曲を伴奏した時だと思いますが、演奏会の直前のリハーサルも終え、本番を迎えて伴奏を始めたところ、ある鍵盤を叩くとパシャパシャと奇妙な音がして焦ってしまいました。曲と曲の間に朗読が入るので、その間にどうにかできないか考えましたが、伴奏者が途中で立ち上がってごそごそするのもみっともなく、一方、指揮者の安藤君も

気が付いていたようですが、気にせずにあの情熱的な棒さばきで平然と指揮を続けているのを見てこちらもそれにつられ、パシャパシャと音がするたびにひやひやしながらもできるだけ素知らぬ振りで弾き続け、ようやく拍手のなかで舞台が暗転してそのステージが終わりホッとしました。調べてみるとなんと浅田飴の缶の中に入っている紙でできた丸い中蓋がピアノ線の上にかぶさるように落ちていました。誰か喉が痛くて、歌う直前まで浅田飴を舐めていたのでしょうか。演奏会は好評の内に無事に終わったので特に犯人捜しもせず、結局、浅田飴の中蓋紙を落とした人物は不明のままです。

もう一つ合唱に関連するエピソードとして、就職後、アルゼンチンに業務研修生として派遣され、スペイン語を身に付けるために日系人が少ないロサリオ市にある大学に聴講生として10ヶ月だけ行くことになり、現地に溶け込もうと、上司には報告せずに地場の小さなコーラスグループに入りました（残念ながら老後を楽しむかなりの高齢者ばかりで少し場違いでしたが）。そのコーラスグループが教会のミサで歌うことになり、その折、指揮者からロサリオでは黒人霊歌を聴くことはめったにないので是非一曲歌ってほしいと懇請されて受けざるを得なくなりました。しかし、T2の場合は最初から最後までメロディーを歌う曲は少なく、何を歌おうか悩んでいましたが、「Let Us Break Bread Together」のメロディーと歌詞をどうにか思い出すことができ、これを歌ったところ、当日のミサの雰囲気とぴったりですごく喜ばれました。ところがどこから伝わったのか、数日後のブエノスアイレスの日系新聞に「日本人がロサリオの教会で黒人霊歌を歌う」という記事が出てしまい、それを読んだ上司から、何をしていたのだとこっぴどくしぼられたことが今になっては懐かしい思い出となって残っています。

グリークラブでは何も考えずに伴奏や間奏曲

作りを引き受けていましたが、今振り返ってみると、よく私のような素人をこれに起用してくださったと恐縮するとともに、グリークラブに

入ったことにより大学時代を謳歌できて本当に有難く思っています。

グリークラブとの縁

浜崎慎吾（昭44 R）

大阪外国語大学に入学したのもグリークラブに入部したのもふとした偶然だった。そこで出会った人々との交流も偶然の延長線上にあり、現在まで続いている。

入部したのは年が明けた1年生の1月。心中恐れていた留年の可能性がなくなり、同期の友人と結成を目指したソヴェト研究会が頓挫して、すっきりともやもやの相反する気分を歌うことで入れ替えてみたかった。ところが初めて接する合唱はむずかしくて、すぐに落伍しそうになった。パートリーダーで2年上の山崎寿雄さん、翌年の津田雄三さん、パートはB2だが、同期の野間清治さんたちのお陰で、グリークラブを続けられた。2年生の信州白馬村での合宿の最終日に小学校で演奏会をやり、ユニゾンで歌った「赤とんぼ」で倍音が聴こえてきて、聴衆の小学生以上に自分自身が感激した。

1969年春、社会人一年目。当時からグリーOB名簿はあったので、配属された大阪本社内の先輩には一応挨拶をした。岩中秀雄さん、土本皖さんなど。幸か不幸か、沢村輝雄さんが隣の部にダラス駐在から帰国したばかりの頃で、女声コーラス化していた大阪本社の合唱団の混声復帰を目論んでいた。毎夕声を掛けて下さり計画を持ち掛けられた。当時のグリーの4年生、3年生の有志にエキストラとして練習に来てもらい芦屋ユースホテルで一泊合宿を行い、結果としてその年、フェスティバル・ホールで開

催された産業音楽祭の大阪大会で銀賞になった。この時歌ったメンバーには外大グリーOB・現役以外には、大阪市立大学グリークラブOBで現役時に団内指揮者だった中田武仁さんがいた。後述の東京転勤後の初めての大型案件をポーランド・ワルシャワに赴任していた同氏と共に追った。息子さんの厚仁さんが後年、ボランティア活動をしていたカンボジアでゲリラに殺害されて大きなニュースになったのも今は昔。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/中田厚仁>

<https://www.amazon.co.jp/息子への手紙-中田-武仁/dp/4022568631>

なお会社にはその1年後2年後、グリーメンバーのロシア語とインドネシア語2人ずつが入社する。近年亡くなった1人以外の3人が現在OB合唱団の主要メンバーなのも、この時の縁があるのかもしれない。

入社以来、アジア・アフリカ市場を担当していたのだが、2年目のある日、突然グリーOBが目の前に現れた。ニューヨーク駐在のあと、ナイロビの所長だった野田大祐さんが、一時帰国の際に所属部署にいらっしゃった。気が付いたらエチオピア向けのある商売は野田さんのお陰で続いていたのだった。その時は仕事の話だけでグリーの話は出なかったのだが、ロシア語をすっかり忘れてしまっていた30歳の時、急に東京本社転勤になりソ連・東欧貿易をやることになった。カルチャーショック防止の意味で最

初の6か月のみ配属されたのが、海外業務部門。背中合わせの席が何と野田大祐さん。「以前一度お目に掛かっています。外大卒です」と挨拶したが反応が鈍いので「グリーンです」と付け加えたら「何でそれを先に言わんか！」と返され、その夜、赤坂見附にあった松田トシさん経営の幼稚園を借りての外大グリーンOBの歌う会に強制連行された。その年、1976年に社会人（伊藤忠）となったばかりの田宮（塩谷）さんとはこの時が初対面。野田さんが日本にいるときに不定期に集めていたこのOB会は、東京のOB合唱団の萌芽の一つと感じている。

塩谷さん、上田哲也さん（日商岩井）、それに同じ会社の南雄次さんと所属会社の違いを超えてグリーンOBとして1981年と1982年にモスクワ日本人会の忘年会で歌った。詳しくは別の人が執筆するはずだが、グリーの先輩である某大手商社の支店長O氏が「モスクワ中の日本人の前で下手な歌を披露して外大の恥」と言ったという話が伝わってきたが、駐米大使、外務次官、駐ソ大使のあとは最高裁判事を務められた高島大使が大変喜んでくださり、歌っている4人を撮った写真を額に入れて後日届けてくださった。写真は加藤さんのアーカイブに載っている。

グリーのエピソードから外れるが、1990年にモスクワのシェレメチェボ空港で4度目のレニングラード大学への交換教授でソ連にいた法橋和彦教授と21年ぶりに偶然会ったのを機会に先

生にモスクワに出てきていただき、大阪外大の同窓会を行った。当時、グリーンOBの青山道也さん（伊藤忠）、咲耶会東京支部の幹事を一緒に10年以上していた知人だった井上雅且さん（丸紅）が有力商社2社のそれぞれ所長、支店長だったので案内状の呼びかけ人になっていただき、実務はロシア語同期の他社の駐在員と2人でおこない、モスクワ在住の48人のOBと連絡がつき名簿を作って案内状を出し、30人以上が一堂に会することができた。

社会人生活の終わりの7年余を転職先の徳島で過ごしていてグリーンOBとはやや縁遠くなっていた時に同年代の酔っぱらい4人からある夜、突然電話があった。グリーンOB同世代の1泊合宿をやろうという企画。会場は、僕が既に退職した会社の浜名湖の保養寮が最適という。紆余曲折はあったものの幾人かのOBの熱意が実って、25人前後が2004年と2005年に浜名湖に集結した。（2006年も鈴木惟司さんの尽力で会場を変更してやはり浜松で実施）

社会人を卒業したら昔サボった埋め合わせをするために学生になりロシア語と英語を学び直すことと決心していて、2007年4月から実行した。グリーンとは自然に縁が切れるかと思っていたのだが、これもまた偶然なのだが入学した大学の通りを隔てたお向かいの大学に西村信勝さんが教授として同じ4月に赴任。気がついたらOB合唱団に入ってしまう、現役時代と同じように落伍しそうになりながらも現在に至っている。

合唱と私

日根野谷博（昭45 IT）

1970年イタリア語学科卒業のセカンドテナー日根野谷博です。

私が大阪外大グリーンにお世話になったのは1年生の秋からで、同期の仲間から少し遅れたのは、若大将に憧れて入学早々ヨット部に入ったからです。そこで一週間の夏合宿の際藪蚊に刺

され全身が膨れあがったので、これは体がもたぬと文化系のクラブに転じようと、いろいろ吟味した結果でした。

そういうわけで入部が遅れ、音楽とは無縁の粗野な環境で育った私は、やはりイタリア語科でグリーンに参加していた悪友と遊びまわり、歌の練習はさぼりがちで、もっとまじめに活動していたらと悔やんでおります。

そのせいでもないでしょうが音程は悪く、指揮者から「1/4音低い」と指摘されてもそれがわからず、適当にあげたら「それでいい」と言われたり、また野尻湖の合宿の打ち上げ懇親会でクアルテットを組んでのコンクールで「ジェリコの戦い」を歌ったところ、もともとリズム感が悪い私が独りシンコーペーションを演じてしまい大受けを取ったりしたことなど、恥ずかしい思い出がたくさんあります。

恥ずかしい思い出と言えば、やはり野尻湖の合宿で練習後の休憩時間に、昔取った杵柄と「ヨットに乗せてやる」と数人を乗せて沖に出たまでは良かったのですが、帰る頃には風が凧、必然的にヨットもびたりと動かず、心配して探しに来た貸しボート屋のおっさんにモーターボートで引っ張ってもらって帰ってきたこと。さらに翌日に名誉挽回と勇んで出たら、また全く同じ状況に陥り、元ヨット部員の面目丸つぶれの事態に至ってしまいました。「この辺は夕風でこの時間は風がなくなるんだよ」とそのおっさんに言われてしまいました。そんなことは初日に言ってくれよ」と恨んだことなど、今思うと面白くも恥ずかしい思い出が多々あります。

しかし、4年生の最後の定演の最終ステージ

で黒人霊歌を歌いながら涙があふれて止められなかったことが、歌う喜びとこれらの辛い恥ずかしい思い出を一挙に融和させてくれたようで、これぞ外語グリーの醍醐味と得心できました。

私はデパートの貿易部門で輸入家具・家庭用品の買い付け担当として、多くの国を訪れる機会があり、パリ勤務時代や出張中にヨーロッパの有名なオペラハウスや劇場で上質のオーケストラや合唱団・歌手の生の音を聴く機会に恵まれました。これもグリーンで歌っていたからこそ楽しめたのだと感謝しております。

東京に帰任して徐々に視力が落ち出し、随分辛い時期もありましたが、幸いにも音楽を聴くには大きな支障でなく、今は障害のおかげで一流のオーケストラや合唱団のコンサートのチケットを安く入手できます。その結果月に2～3回も聴きに行くことができるのはとても有難いことです。

また定年後に入団した視覚障害者が多くいる合唱団で歌うのが何よりも楽しく、心身ともに活力を与えてくれているようです。今は来秋の創立45周年記念コンサートに向けて練習に余念がありませんが、2013年秋にさいたま芸術劇場での40周年記念コンサートで歌えたことが貴重な思い出となっております。

他にも、国体の視覚障害者卓球で銀メダルをとれたこと、ヴォランタリーで英会話を教えたり、複数の川柳の会に投句したり、さいたま市の障害者政策委員を務めたり、社交ダンスを習ったりと色々なことを楽しんでいます。合唱することが最大の喜びであるのは、大阪外大グリーンでその端緒につかせていただいた賜物であると、深く感謝しております。

明場幹夫（昭46 R）

私が外大グリーに入部したのは1967年春のことです。入部初日に新入部員として挨拶したとき、自己紹介として「鳥取県倉吉市出身」と言ったら、どっと笑われました。不思議に思って後で訊いたら、方言のなまりがとてもおかしかった、と言われびっくり。自分では標準語で話したつもりでしたが、イントネーションが変だったようで、その後しばらく同期の連中に「とっとりけんのお…」と誇張してからかわれたことを思い出します。

印象的だったのは初めての定演で、終演後感動のあまり涙が出てきて、達成感やら陶酔感やら訳の分からない感情に全身が包まれたことです。その時音楽は聴くことよりも、演奏することのほうが、感動は遥かに大きいものだと実感しました。

また大学4年のとき、全国的に吹き荒れた全共闘運動のあおりで、我が母校も学園封鎖となり、すべての授業が中止となったことがありました。ひどく荒廃した大学の雰囲気の中で、グリーの練習場所に行くと、不思議とやすらかな日常の佇まいだったように記憶しています。

何年のときだったか定かではありませんが、大阪府立大学のオーケストラが「第九」を演奏するにあたり合唱への参加を府内の大学に呼び掛けたことがあって、グリーの仲間と一緒に参加したことがありました。私はグリーではセカンドテナーでしたが、周知の通り「第九」ではテナーとベースしかないため、ちょっと迷いましたが、ベースを歌うことにしました。理由は「第九」のテナーの高音が出せなかったことと、ベースの低音ならなんとか出せそうだったからです。

その後「第九」は3回歌いました。1回目はグリー同期の奥村君が就職した日立建機が属する日立グループのオーケストラで「第九」をやるが一緒にやらないかと彼に誘われた時、もう2回はリタイア後のことですが、こちらは後述します。

奥村君とは大学卒業後、共に東京勤務だったことで、彼ともう一人私の幼馴染で京都の大学卒業後やはり東京勤務となったO君との3人で良く会いました。この集まりは奥村君の海外勤務のため中断しましたが、リタイア後に復活しました。

ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、奥村君の奥様は学生時代に合唱を通じて知り合い、吉永小百合似の美人で、周りからおおいに羨ましがられ、卒業後ほどなく結婚。二人の男の子に恵まれ、オランダとイタリアの海外勤務での苦労はあったものの、おおむね順風満帆と思われる企業人生活を送り、子供たちも独立して、いよいよこれから二人の長い「老後」を楽しむことが出来ると期待されたまさにその時、奥様が58歳の若さで亡くなられました。大腸がんと聞いています。そして奥村君自身もその7年後65歳を目前にして奥様の後を追うことになったのです。

その年2013年4月30日、奥村君から「胆のうがん」であり、翌週から東大病院に入院すると聞いて言葉を失いました。それから僅か4か月後の9月2日に亡くなったのですが、毎月O君と共に見舞いに行き、会うたびに痩せていく姿に胸を痛めました。告別式の日グリーの皆さんと「遥かな友に」を歌い、この歌がこんなに哀しい歌だったのかと涙をこらえるのが精一杯で、その後ひどい喪失感に襲われました。

「第九」の続きですが、リタイアした年の秋

に、横浜交響楽団というアマチュアオーケストラが年末に「第九」の演奏会を行うので合唱メンバーを一般公募することを知り参加しました。勿論ベースで。そこに来ていた人から混声合唱団に誘われ、あまり検討もせずに入団したのが現在所属している横浜木曜会です。因みに「第九」はその年と翌年の2回「横響」で歌いました。

横浜木曜会は創立80周年の記念演奏会を2019年に開催する予定で、横浜屈指の老舗混声合唱団です。最盛期には100人超の団員でアマチュアの全国コンクールで優勝したこともあったそうですが、高齢化により団員が減少、

現在は60名程度になっています。宗教曲と日本の組曲など半々ですが、特に宗教曲は欧米の音楽の中でも重要な地位を占めており、その深遠かつ広大な音の世界の一端に触れることができることを幸運に思っています。

グリーは4年間でしたが、グリーで身に着いたことが現在の合唱団で大いに役に立っていると感謝しています。

諸事情によってグリーOB合唱団には所属しておりませんが、毎年夏、信州での同期会を楽しんでいます。残り6人でできるだけ長く続けてゆきたいと願っています。

アジア日本人男声合唱祭（アジ祭）について

鵜飼茂（昭46 IN）

1971年に大学卒業後私が合唱を再開したのは2007年のことであった。当時はインドネシアのジャカルタに駐在をしており、還暦を前に何か趣味を持ちたいと考えていたところ、当時購読していたジャカルタ新聞に記載されていた「一緒に歌いませんか」とのコーラス団員募集の記事が目に入り、早速男声合唱団メールクアイア及び混声合唱団サザンクロスに入団した。大学卒業後40年近く合唱から遠ざかっていたこともあり、最初は練習についていくのにも苦勞をしたが、当時の指揮者、メンバーに支えられ無事合唱を再開することができた。

メールクアイアはジャカルタでの活動の他に、アジア各国の日本人男声合唱団と一緒に「アジア日本人男声合唱祭」（通称アジ祭）を開催しており、私がメールクアイアに入団したその翌年にジャカルタでアジ祭を開催することが決まっており、入団早々アジ祭の舞台に立つことができた。

このアジ祭には現在下記合唱団が参加している。

- 1) ジャカルタ・メール・クアイア
- 2) 上海グリークラブ
- 3) 香港日本人合唱団
- 4) マニラグリークラブ
- 5) バンコクグリークラブ& マーマーヨ
- 6) KLグリークラブ（マレーシア）
- 7) シンガーズ・リミテッド（シンガポール）

アジ祭はこれまで既に12回開催され、今年は2月に上海にて開催されたが、私も第4回アジ祭以降、ジャカルタ・メールクアイアの一員として継続して参加している。

アジ祭では参加する各団がそれぞれ1年間練習を重ねてきた曲を1ステージづつ歌うが、各団の単独ステージの他に合同演奏も行っており、総勢100人程で歌う合同演奏は普段小人数で歌い慣れている者にとっては感動するステージである。この合同ステージで毎年指揮をしていたのが亀井清一郎氏で、同氏は関西学院大学

に在学中に同大学グリークラブ指揮者として活躍し、同校を全日本合唱コンクールで優勝へと導いた実績を持つ指揮者である。現在は神戸男声合唱団の指揮者を務めている。アジ祭では演奏会前日の前夜祭、当日の演奏に続き打ち上げを行っており、各団がそれぞれ余興の出し物を

披露することが恒例となっており、これもアジ祭の楽しみの一つである。

アジ祭に参加する各団のメンバーは大半が駐在員である為、団員の入れ替わりが激しく、どの団でも団員を確保するのが共通の悩みではあるが、今後共アジ祭が末永く続くことを祈っている。

蓼科同期会

小竹正幸（昭46 R）

この会が始まったのは平成22年から。それまではお互い年賀状のやり取りはしていましたが、皆が一堂に会してということはありませんでした。たまたま知人に蓼科に別荘を持つ方がいらっしゃり、そこをお借りして毎年夏に同期会を持っています。

写真は第1回目の時の車山で撮ったもの。後列左から南雄次君（B2）、鶴飼茂君（B1）、明場幹夫君（T2）、奥村茂君（B2）、松岡一仁君（B1）、前列左から、私小竹（T1）、その隣が加藤直樹君（T2）の7人。卒業年度でいくと揃わないので（笑）、昭和42年入部組の7人としています。団塊の世代の割には少なく入部当時からこの7人でした。残念ながら奥村君は平成25年9月2日闘病生活もむなしく永眠されました。彼が一番この仲間では元気そうだったのですが、突然襲って来た病には勝てませんでした。

で、今は6人で会を続行しています。毎年夏

の終わりに蓼科にて落ち合い、好きな愛唱歌や演奏会の曲を中心に、ただひたすらハモることを唯一の楽しみとして、ほとんど外に足を向けることもない暗〜い集団です。今年は8月31日から9月2日までの日程で8回目の同期会を持ちました。何年か前から別荘ではなく、南君の関係する会社が持つ同じ蓼科三井の森の保養施設を利用しています。東京組が2人、大阪組が4人、茅野駅で合流し、1台の車で移動します。以前は途中の自由農園で食材を買い求め、到着後2時間の練習、それがひと段落すると夕食。元料理人の松岡君が腕を振るい、「鱧鍋」や「豚しゃぶ」などをいただきながらグリーの近況報告。食後からは再度練習開始。何回目だったか、つい調子にのり、真夜中を過ぎたことに気が付かず歌っていたところ、出窓に女性（アラフォーはとくに）の顔が映った時には全員ギョッ！「静かにしていただけませんか？」の一言。それ以来歌う時は窓を閉め切ってやっています。翌日も午前中2時間、午後2時間、さらに帰る日も1時間とやったものです。ほかの団員の方々が聞いたら、なんでそこまで…と思われるかも知れませんが、これが当たり前のように数年は続きました。

さすがにこれだけでは面白くないとの意見も出始め、どこか発表の場所はない？ということになり、交友関係の広い加藤君に探していただ



同期会(車山山頂で) (2010年9月12日)

きました。歌う仲間から茅野にある介護施設をご紹介していただき、約20名のお年寄りの前で10曲ほど歌う機会に恵まれました。住む所が東京、大阪と別れているため、前日に音を合わせるのが精いっぱい。現在のところは各パートに一人はおりますので何とか4部で歌うことができます。聴いていただける方は我々の遥か先輩の方々ですので、新曲とはなりましたが小学唱歌、長野県歌の「信濃の国」などを取り入れ、我々の愛唱歌も織り交ぜ10曲ほどご披露いたしました。皆さん熱心に聴いていただいたようなので、そこそこうまくいったのではと思っています。

夕食後は酒を酌み交わしながらのわか幹事

会。東京の考え方、大阪の方針など意見を言い合い、あわや！危ない雰囲気もあったりして、日頃の距離感を少しでも埋めようと話しは真剣そのもの。話題は尽きず、「最近何か心ときめいたことある？」のテーマには久々に笑い転げました。内容は残念ながらご披露はできません。皆さんまだまだ現役です。

こんな会ですが、あと何年続けられるのか分かりませんが、とにかく行けるところまで行こうと固い約束をしております。今年は我々にとっては「古希」にあたります。これから微妙な年代に入っていきますが、歌を忘れず、前向きに人生を楽しんで行こうと誓い合っています。

音楽と共に50年

松岡一仁（昭46 E）

昭和39年（1964）に大阪府立高校へ入学。6期目の新設校で、当時としては珍しいイギリス人建築家の設計によるモダンな校舎で、流線形の屋根の体育館があり、音楽室にはスタインウェイのグランドピアノとマッキントッシュ製のオーディオ設備などがありました。入学1年生の学級担任が東京芸大音楽科出身の音楽の先生でもあり、音楽部へ入部。3年間の合唱活動。1学年上には、NHK初代の歌のお兄さんで、“ビューティフル・サンデー”を歌った田中星児氏がいました。

昭和42年（1967）に大阪外大へ入学してすぐにグリークラブへ入部。指揮者になった時には、オペラ合唱曲やドイツミサ曲などを取り上げました。

平成12年（2000）になって音楽活動を再開してからは、関西二期会・関西歌劇団・神戸オペラ・堺シティーオペラ・川西オペラなどの

合唱団のメンバーとして国内・海外で約10年間活動し、2008年には、60歳を迎えた節目に、箕面メイプルホールにて還暦記念ソロコンサートを開催して、ドイツリートやオペラのアリア等を披露させて頂きました。

平成22年（2010）には、ベートーベン「第九」の第4楽章のバリトン独唱をして、FMラジオで放送されました。平成26年（2014）から、大阪外大OB合唱団から指揮者の要請があつて現在に至っています。

平成25年（2013）には、大川進一郎氏（元関西フィルハーモニー管弦楽団のオーナー、関西歌劇団理事）から阪大オペラ（阪大工学会主催）への合唱出演の依頼があり、これまで3回の公演に参加してきました。

お陰様で、音楽を通じて多くの音楽仲間と出会えたことは、私の人生に於ける大きな喜びであります。感謝。

南雄次（昭46 R）

大阪外大グリーン卒で良かったとつくづく思う。私が入学した昭和42年当時、グリーンに入部するとは全く頭の片隅にもなかった。音楽や歌は好きではあったが、私はどちらかといえば体育会系の人間であったからである。新入生歓迎の部活紹介で、グリーンクラブを知った。しかし、入学後しばらくして入部したのはラグビー部であった。

その私が、何故かその年1967年12月のサンケイホールでの定演に出演していたのである。途中で、グリーンクラブに入部したのだが、記憶は微かではない（なぜ、ラグビー部を続けなかったかは省略）。何の曲を歌ったのかもよく覚えていない始末。恐らく、口パクに近かったと想像する。今から思えば、不思議だがパートはB1であった。周りを見渡せば、大学以前より合唱経験のある方が多かったように思うし、音源のなかった当時、楽譜を見ていきなり歌う（階名読みからではあったが）というのは、私には異次元のことであった。

B1からパートがB2に変わったのは、一年目の定演が終わってすぐだったと記憶する。その後は、無事に4年生の定演まで漕ぎ着けることができた。しかしながら、グリーンへの愛着は今ほど強いものではなかった。現在続いている同期入学のグリーンメンとの交友関係を除いては。

私が男声合唱の魅力に気付いたのは、むしろ卒業してからである。学生時代には得られなかった達成感のようなものへの憧れかもしれない。卒業後、商社に入社したが、合唱のチャンスはなかった。歌う機会と言えば、風呂の中くらいであった。

入社10年が経過し、初めて海外駐在としてモスクワに赴任した。1981年のことであった。そ

の年末に日本人会主催の忘年会が開催された。当時、モスクワには駐在員や長期出張者が各商社を中心におられ、その中に見覚えのある大阪外大グリーンOBもいた。そこで、余興の一つとして外大グリーンOBによるカルテットをしようということになり、当日わずかな事前練習のみで、本番に備えた。結果は、拍手喝采で、大阪外大グリーンの名を知ってもらうよい機会となり、続く1982年にもご指名がかけられ、当然また歌った。その時のメンバーはT1 上田哲也氏、T2 塩谷崇守氏、B1 浜崎慎吾氏、B2 南雄次であった。

モスクワ駐在を機会に、過去に勉強したロシア語と、グリーンクラブの経験を生かし、日本人が好きなロシアの歌（所謂ロシア民謡）をロシア語で歌えるよう、自分に特訓を課した。その結果、長期にわたるロシア駐在期間中（延べ4度、通算約14年間）、原語でロシアの歌を歌えたことで、公私ともに充実した駐在生活を支える一助となった。

最初のモスクワ駐在の後、1991年には、アメリカ駐在の辞令が発令された。事務所の日本人駐在員は、私以外は全員家族帯同で、週末に共にゴルフができる日はよかったが、ゴルフのない日や、夕方の時間のつぶし方に困った私は、取引先の伝手で現地の男声合唱団に加入した。練習曲目に抵抗はなかったが、振りをつけて歌う歌い方には、聊か抵抗があった。アメリカでの演奏会を経験することなく、アメリカから（日本経由）モスクワ直行の人事異動の発令があり、ロシアと関わりの深いサラリーマン生活をする事となった。

やがて、長い海外駐在生活も終わり、日本をベースの生活が始まった頃より、外大グリーンOB在京の活動が気になりだした。しかし、業務の都合もあり、練習に参加できる状況になっ

たのは、完全退職の目途がつきそうになった2015年からである。練習後の飲み会も楽しみとなっている。

一方で、外大グリー同期入学の面々7人（今では6人になってしまった）とは、毎年夏の終わりの蓼科合宿にて旧交を温めている。これも

大きな楽しみとなっている。

創部100周年を目標に男声合唱を楽しみたいが、未だ私個人の課題が解決できていない。大声で歌うだけではなく、p、ppのハーモニーの素晴らしさを具現できるようにと、希望を抱きながら――。

合唱三昧の10年

加藤直樹（昭48S）

2008年暮れグリー同期の小竹正幸君から手紙をもらった。同じ同期の松岡一仁君と一緒にOB合唱団で活動しているので参加したらどうかとの誘いであったと思う。卒業後40年以上経っていたが懐かしさを感じ2009年1月の練習に顔を出した。それがグリーというか男声合唱にどっぷり浸かる事になったきっかけである。それ以前にも菅原基晴先輩（昭36C）から何度も勧誘のお便りをいただいていたが、無視してお返事も出さなかった事をここでお詫びしておきたい。初めての練習日の最後にGaigoを歌った時に1976年の創部50周年記念演奏会以来一度も歌った事がなかったメロディを瞬時に思い出した。それからである、故上野明信さん（昭41TV）には声が出ていないと叱責され、紙谷敬治さん（昭35IN）からはポルタメントやビブラートはダメだと指摘されながら林誠先生の素晴らしいが一部理解しづらい指導にも魅了されて10年近くグリーOB活動を続けている。

ところが、グリーだけでは済まなくなった。毎年箕面市合唱祭を聴きに来てくれた母親が地元の合唱団でも歌う事を勧めてくれた。ネットで西宮市合唱連盟所属の合唱団を調べ「セレスティーナ男声合唱団」に見学に行き即入団した。後で分かったことであるが、セレスティ

ーナは1927年（昭和2年）の第1回合唱競演会@宝塚大劇場で外語グリーと競演した合唱団である（セレスティーナが1位、外語グリーが3位）。60歳以下の入団者が長続きしない平均年齢70歳後半のシニア合唱団ではあるが全国シルバー合唱コンクールで何回も金賞を獲っている。昨年11月には外語グリーに先立ち創立95周年記念演奏会を挙行了した。

グリーOB合唱団（大阪）での初舞台は2009年6月の箕面市合唱祭。池田守君（昭54S）指揮で「Bengawan Solo」と「Deep River」を歌った。この「Deep River」は少人数ではあるが出色の出来であったのではないかと考えている。2010年は第2回菜の花コンサートと東西合同演奏会、2011年は第2回姫路文学館コンサートと創部85周年記念演奏会@神戸松方ホール。それ以後の主な演奏会にも参加させていただいて、昭和31年卒から平成12年卒まで多くのOBの方にお会いすることが出来た。

昔取った杵柄というか会社員時代にシステム関係を少し担当したことがある関係で、グリーの音源、楽譜、ホームページを担当させていただいた事でも多世代のグリーンメンと繋がりが出来たと思う。

別稿で書いた清水脩データベースの資料調べの間に清水脩先輩は浄土真宗大谷派の寺院に生まれ多くの仏教讃歌も作曲していることが分

かった。その仏教讃歌を体現したく思い2012年大阪御堂合唱団（混声）に入団した。こちらは他の所属合唱団の活動との兼ね合いがあり休団・復団を繰り返している。

合唱活動はそれだけではないのである。東海メールワイアーのワンステージメンバーで「月光とピエロ」を歌い、また東海メールの関係で日本男声合唱協会（JAMCA）の個人会員になり、2年毎の全国大会（2013年岡谷、2015年伊丹、2017年八戸）に参加、それからまた派生して全四国男声合唱フェスティバル、長野県合唱フェスティバルにも何回か出演した。JAMCAの次の演奏会は2019年熊本でこれにも参加申し込みを済ませた。

まだまだ終わらない。全日本男声合唱連盟が全国各地で全国規模の男声合唱フェスティバルを始めたので2016年高知、2017年小樽とこれも個人参加した。2018年は静岡県伊豆の国市で開催され合同曲は「富士山」を歌う。

次はグリーOBとの交流であるが、まず1967年（昭和42年）入学同期の合宿を2010年から始めた。これについては小竹正幸君が寄稿して

いる。何年卒でなく何年入学と言わねばならないのは2年ダブった私の責任である。

他には全四国男声合唱フェスティバルでは竹井禎さん（昭45E）と、全日本男声合唱フェスティバルでは中村邦雄さん（昭S37S）と、日本男声合唱フェスティバルでは宇留野隆さん（昭37S）と一緒にステージで歌うという経験をさせていただいている。

最後は男声合唱とは関係ない日常活動について。これも定年後であるが地域に何か貢献出来ないかと思い社会福祉協議会の福祉協力員になり高齢者昼食会のお手伝いをさせていたらいたら民生委員（児童員も兼務）に推薦され今2期目に入っている。またエンゲル係数ならぬ合唱係数（家計に占める合唱活動費用）が高いのでその費用を稼ぐため午前中だけではあるがマンションの管理人を3年近く続けている。午後は空いているので、2015年より音楽ボランティア（いわゆる慰問）を始め、高齢者施設や障害児童施設への訪問が年間100回を数えるようになり今やこれが本業と言っても良いくらいである。

GLEE解散の原因？

八木哲夫（昭48E）

入学した1969年、4回生が14、5人、以下各学年とも6、7人という逆ピラミッドというより雨傘のような部員構成で、私たち1回生は数多い4回生から、ずいぶんかわいがってもらったものです。もちろん他学年の先輩からもですが。

当時、「合唱衰退の時代」という認識、諦めが定着していました。種類の増えた趣味娯楽、個性重視の風潮、学生運動の影響が合唱離れの原因といわれ、グリーのあしたの予想は決して

明るいものではありませんでした。

他大学の合唱団も、混声はともかく男声はいずれも同じで大阪四大学合同演奏会や彦根の滋賀大学との合同演奏会でも同じような話を聞いたものです。実際滋賀大は私の在学中に活動を休止したように思います。

そして1998年、外大グリー解散です。「とうとうか、しかし予想より長く持ったな」というくらいの感想でしたが、2015年にOB団に参加し意外な事実を知って驚き、感激し、そして恥じ入りました。衰退しかないという諦めムード

に浸っていた私達をしり目に後輩たちは部員数を40人以上にまで回復させたというのです。危機感を持って部員獲得の策を講じ、あらゆる努力を行ったのでしょうか。部員の人数を増やすだけでなく、彼らは音楽面、技術面の課題にも取り組み、林先生を指導者に迎え入れてくれました。敬服します。

さて別表を御覧ください。西沢様、有難うございます。私が4回生の1972年定演出演者は27名、これが1977年には40名と1968年レベルにまで回復しています。表中のシェアIは、定演主演者数を男子学生数で割ったものです。この学生数は同年卒業生数とのことなので、その数を4倍したもので割ったシェアIIの方が実態に近いのですが、数字の比較には分かりやすいのでこちらで。

シェアIでブルーの色かけの10%を切る年が73年から3年続いた後、79年には18%を超えました。そして84年までは10%台を保っています。また90年、92年には15%も記録しています。70年代半ばから女子のシェアが徐々に高くなっていますが全体の学生数も増加しているため男子の数は70年代、80年代、250名弱で推移しきほど変化していません。しかし1988年に女子シェアが60%を超えるに至り男子数は200を割り込むようになりました。

部員達が懸命に部を支えようと努力したことは、91年の部員数29人からうかがえますが、合唱離れ(部員獲得努力によって克服できる)ではなく、限度を超えたこの女子大化、男子の減少が外大グリーンにピリオドを打ったように思えます。

つまらない結論、恐縮です。

～もう会えない人達～

山本修司さん

1年先輩(1972年卒)。在学中も卒業後もお

グリーン部員・大学卒業生数対比表

部員数	学生数(単年度)			女子 シェア(%)	部員数/男子数 シェア(%)		
	男子	女子	計		I	II	
	A	B	C	D	C/D	A/B A/(B×4)	
1952		236	9	245			
1953		194	7	201			
1954		214	7	221		0.0	
1955		242	5	247		0.0	
1956		257	14	271		0.0	
1957	48	231	9	240		0.0	
1958	57	247	11	258		0.0	
1959	48	253	15	268	5.6	20.8	5.2
1960	56	273	16	289	5.5	23.1	5.8
1961	58	320	17	337	5.0	19.0	4.7
1962	60	292	26	318	8.2	20.5	5.1
1963	53	290	17	307	5.5	18.1	4.5
1964	48	276	36	312	11.5	20.5	5.1
1965	51	268	49	317	15.5	18.3	4.6
1966	56	261	66	327	20.2	17.4	4.3
1967	50	253	53	306	17.3	19.0	4.8
1968	43	253	73	326	22.4	21.5	5.4
1969	39	298	70	368	19.0	19.8	4.9
1970	28	269	114	383	29.8	17.0	4.2
1971	27	282	84	366	23.0	13.1	3.3
1972	27	285	74	359	20.6	10.4	2.6
1973	29	293	92	385	23.9	9.6	2.4
1974	31	261	125	386	32.4	9.5	2.4
1975	35	222	111	333	33.3	9.9	2.5
1976	37	237	148	385	38.4	11.9	3.0
1977	40	220	150	370	40.5	15.8	3.9
1978	44	240	135	375	36.0	15.6	3.9
1979	39	272	181	453	40.0	18.2	4.5
1980	34	247	215	462	46.5	18.3	4.6
1981	34	249	185	434	42.6	14.3	3.6
1982	31	239	204	443	46.0	13.8	3.4
1983	24	246	245	491	49.9	13.7	3.4
1984	21	255	249	504	49.4	13.0	3.2
1985	24	239	236	475	49.7	9.8	2.4
1986	25	226	295	521	56.6	8.2	2.1
1987	26	223	301	524	57.4	10.0	2.5
1988	30	198	300	498	60.2	11.1	2.8
1989	27	204	375	579	64.8	11.7	2.9
1990	25	146	439	585	75.0	15.2	3.8
1991	29	196	444	640	69.4	13.2	3.3
1992	17	189	409	598	68.4	17.1	4.3
1993	10	177	463	640	72.3	14.8	3.7
1994	5	212	455	667	68.2	9.0	2.2
1995	9	202	447	649	68.9	5.6	1.4
1996	8	192	454	646	70.3	2.4	0.6
1997	2	300	673	973	69.2	4.5	1.1
1998	0	203	594	797	74.5	4.2	1.0

注釈:

- 1) 部員数は加藤アーカイブのプログラム記載の定演出演者数を充当
- 2) 大学卒業生数は『外語70周年史』増補版などを参考にした

世話になり、よく遊んでいただきました。

1971年、四大学演奏会打ち上げのあと、急遽四国まで出かけようということになり、山本さん愛車のベレット、別称「ボロット」で2泊3日の旅に連れていただいたのですが、ようやく

帰りついた大阪市中で助手席に乗っていた私は山本さんのハンドル捌きのおかしいことに気がきました。対向車とのすれ違い程度のわずかな方向転換にもハンドルを180度、いや360度と書いていくくらい必死で回しているのです。どうしたのかと聞くとハンドルの効きが悪い、このままディーラーへ持ち込む、と珍しく深刻な表情でそれからディーラーまで恐怖のグルグル回しハンドルとの5分、10分を過ごしました。ようやくたどりついたディーラーで、「片輪のピンが抜け、ステアリングが効かなくなっている。片方だけでよく持ったものだ。命拾い」と言われたと、晴れやかに。

在学中に始められた塾にはグリーのメンバーも講師として勤めたものです。私は教職に向いていないと、ここではっきり思い知りました。卒業後も塾が命、結婚式で配られた「塾」と題する冊子には塾への思いが綴られ、あらためてその熱意に（オタクぶりに）感心したものです。

簡単に「泣かす」ことができる人でした。少し琴線に触れる、心情を射当てる言葉にはすぐにホロリ。

2013年に「ファミリーコンサート」。長年の夢、希望がかなったのは良かったのですがそんなことをするから、早くに逝ってしまうんだ、と薄情な後輩は思っています。2015年永眠。合唱、合掌。

藤原克司さん

入学は1年先輩、卒業は一緒。4回生の時は、頼りない部長の私を側面から支えてくれ頼りになる「盟友」と勝手に思っていましたが、卒業後、関係が深まりました。

仕事上でも今、思い返せば、単に支援して貰ったというより実は、窮地を救って貰っていたのかもしれないと感じることも。

特に楽しかったのは私が在仏中にたびたび出張で来られ、家内ともども食事、歓談したこと。米国ボルチモアでの生活…なんとゴルフはシングル（並み）、クラブハウスの人気者、アメリカ横断家族旅行などなど…上六時代の痛む胃を押さえて歩く猫背、まぶしい日光が苦手な夜行性、そして何より垣間見えた自己破壊願望からは想像できない健康的な暮らしぶりに驚いたものです。

外資の日本法人社長に就任してから体調を崩し、部下たちに申し訳ないと言いながら2002、3年にはとうとう会えなくなりました。

橋本和直君

71年、私が3回生の時に入学。入部勧誘をする際、北海道岩内出身、北大も受かったが外大を選んだと聞いて、「岩内は去年行ってきたから知ってる。しかし知ってるのは僕くらいのもんだろう」。「北大を蹴るとはアホな奴（とは言いませんでしたが、似たようなことは）」などと話していたら入部した、かわいらしい奴でした。素晴らしいB2。

私の卒業後しばらくして、当時の人気番組「フィーリングカップル5対5」（やすきよが司会する、初対面の男女5人ずつがバカなやり取りのあと、気に入った交際相手を選ぶという）に部員5人で出演していました。滅多にないパーフェクトな5カップル成立という結果でしたが、やらせだったとか。その後、相手とのお付き合いも、全くなかったそうで。

長らくキューバとの仕事。10年くらい前、東京のOB合唱団で歌っていると聞いて、当時東京暮らしだった私は飲みに行こう、誘おうと思ううち、2010年（2月）永眠。悔やまれてなりません。

思い出話だらだと、失礼しました。

足立明洋（昭49 S）

OB合唱団で活躍されている懐かしい先輩後輩諸氏の名前がMLに記載されているのを拝見すると、もう半世紀近くも経過するのに、グリーの思い出が次々に頭に浮かんでくる。

各語学科毎に行われた入学式にぞろぞろと登場して、校歌を歌ってくれたのがグリーとの最初の出会いだった。卒業するまでの4年間はピアノがある薄汚い教室で練習に明け暮れた日々であった。

4年間の定演で一番出来が良かったと思っているのは14回定演のドイツミサ曲。松岡氏の絶妙な指揮と、藤原、葉山、岡本、西森氏のカルテットは非常に印象深く覚えている。この第14回定演では1年生として9名の同級生がグリーに所属していたが、2年には4名に激減、3年-4年では3名になってしまった。何が原因だったのか記憶にはないが、残された堀田君、久山君と私の3人はグリーの将来について、それほど危機感も持たず、自分の与えられた役職に専念出来た。それは優秀で心優しい先輩、後輩の皆さんの支援があったからこそ出来たに間違いはない。

17回の定演では、少人数の4年生の為に後輩が特別にステージを用意してくれた。私が指揮をして堀田君が「雨」の終曲のソロ、久山君が指揮して「筑波山麓男声合唱団」。他学年に迷惑をかけた我々だったが、いつまでも思い出に残る貴重な機会を与えてもらったことに感謝している。

その定演では舞台効果を上げる為に、池田民樹君指揮の「五つの日本民謡」で法被を着て歌い、スピリチュアルでは黒のTシャツを着て暗

いステージでライトを手に持って歌った。法被は今井君のお兄さんが所属していた関学グリーに貸してもらいに行った。今から思えばよくもそんな厚かましいお願いをしたと思うが、定演を盛り上げようとの熱意ゆえの行動だったのだろう。

また4年の時に林誠先生をボイトレとして迎えることになったのも思い出深い。上田君が「林先生のお弟子さんをお願いしたのに、なんと林先生本人が来て下さることになった」と興奮して報告してくれたのを覚えている。

グリーでもう一つ強烈に思い出すのが2年生の時の夏の信州合宿である。合宿最後のカルテット大会でドライボーンズで、池田、神田、足立、橋本チームが優勝し、気分よく打ち上げ会に臨んだが、あまり強くないのに勧められるままに酒を呑んだ結果、急性アル中になりダウンした。一晩中苦しんで翌日大阪に帰る前に、医者に連れて行かれたが、患者の長蛇の列。これでは電車に間に合わないと思った時に、当時の4年生の山本氏と3年の田中氏が、全患者に向かって「彼は体調が非常に悪いがこれから大阪に帰らないといけない。時間がないので、彼の為に順番を譲って下さい」と畳に頭をこすりつけて真剣に頼んで下さった。自分の為に本気で頭を下げてくれた先輩の姿は新鮮な驚きであった。そしていつまでも忘れることの出来ないほどの感動を覚えた。自分も組織の中では、かくあるべしと肝に銘じたものである。合唱でのハーモニーだけではなく、人格のおつかり合いの中で生まれる素晴らしいハーモニーを経験したグリー生活だった。お世話になった方々に改めて感謝したい。



私と合唱とオペラと

五十嵐強 (昭54 IPh)

私が合唱との繋がりを持ったのは、中学校3年生の時に会津の田舎から仙台に転校した年、その中学校がNHK合唱コンクールの県予選に出場するため、音楽の教師が全生徒の中から声の良い？男女を集め、急拵えの混声合唱を作ったのがきっかけでした。勿論、予選は通りませんでしたでしたが、その時に先生から「君の声は、高音域が良いので合唱を続けなさい」と言われたのを覚えています。

高校時代（三神先輩の後輩です）は2年生の時合唱部に入ったのですが、同部はダブル・カルテットが出来るくらいの少人数のものでした。活動の目的は男子校であった為、もっぱら川向にあるM女子高合唱部との合コンだったと思います。その時に中心になって活躍していたのが、元NHKのチーフ・アナのI君でした（当時は、張りのある美声のバリトンで、マスクも甘く結構もてていました）。

私が本格的に合唱を始めたのは、大学1年の初夏辺りからです。仙台から親元を離れ、大阪で下宿生活を始め、ややホームシックになり、これを乗り越えようとグリークラブの門をたたきました。本格的にと言ったのは、グリーのボイストレーナー林誠先生（当時は未だ大阪音大の講師であられたと思いますが、関西歌劇団（関オペ）のオペラでは常にテノールの主役を演じていました）に巡り会うことがで

き、更には林先生の声かけで大学2年生（2回生）の時から関オペの定演に合唱で出演（⇒基本的に合唱は大阪音大の学生が受け持つのですが、同大の学生の多くが女性のため、大学のグリー、大阪メンズコーラス（OMC）等が男声で賛助出演していました）、練習を通じて、ソリストの先生方の発声・歌い方を真近かで見聴きし（故朝比奈隆先生の指揮にもものすごいオーラも感じた）、それらを自分の物にしようと、かなりの時間を歌に注ぎ込みました。因みに、私が出演したオペラは、2回生-椿姫、3回生-魔笛、4回生-イル・トゥロバトーレ（この時に初めてOMCと一緒に出演し、それが縁でOMCにも入団）、5回生（歌い過ぎて留年）-ドン・ジョバンニ、社会人1年目-トスカ（この時は関オペ25周年、二期会関西支部20周年を記念し、指揮に小澤征爾氏を迎え4日連続での競演）、同2年目-アイダの計6回。それ以降は、仕事が物凄く忙しくなり（7時～11時、セブン・イレブンの状態が長く続く）、オペラはおろか、OMCの練習にも全く行けなくなりました。

オペラに出て良かったことは、①オペラを全く知らなかった自分がオペラに出演したことにより、オペラとはどのようなものかが分かり、出演以来病みつきのようになったこと、②ギャラが入ったこと⇒練習・ゲネプロ・本番で4～5万円入ったと思います。尤も、練習後の毎回の飲み代でその何倍もはき出しましたが、③音大の

学生と競い合って歌えたこと、等々です。

東京に来てからは、半強制的に職場の合唱部（混声）に属していましたが、自分はやはり男声合唱をやりたいと常に思っていました。

そのような時に、樽井先輩が東京でグリーンOBの合唱を立上げ、最初は林先生、その後小貫先生、坂井先生ご指導の下、今日まで約20年歌い続けています。

最後に、グリーの良き思い出としては、3回続けての東京でのOB訪問で素晴らしい先輩

方に巡り会うことが出来たことです。2回生の時は上田哲也先輩と、3回生の時は伴治美先輩（この時に初めて清水脩先生と会う。詳しくは伴先輩の清水脩先生の事を参照下さい）と、4回生の時は岸本さんと寄付金をお願いに来たにも拘らず、皆様に歓待され、激励を頂きました。本稿をお借りし改めて御礼申し上げます。有難うございました。

併せて、今回グリーン90周年記念史の刊行に携われた諸先輩方へ篤く御礼申し上げます。

外語グリーン上八最後の四年間 ～ 1975年から1978年～

岸本保（昭54 C）

1975年から1978年、上八キャンパス最後の時期とも重なるグリーンでの現役時代を思いつままま振り返ってみた。

< 1975年 >

先輩諸兄が新勸に励まれた努力の賜物か、'75年は13名の新生が入部し、それまでの部員減少傾向にいったんピリオドが打たれた。ヴォイストレーナーの林誠先生が来られた練習日、C1階段教室のピアノの前で新入部員がひとりずつ、林先生が弾くピアノ音階に合わせて声出して、パート分けされた。

12月、初めての定演。風邪気味なのを無理して出演したら、こじらせてしまい、40度の発熱。翌日の専攻の試験をすっばかし、数日間布団からも起きられず、やっと起き出して担任の大河内康憲助教授（当時）に電話したら、「君は中国語とクラブ、どっちが大事なんだ！」と、めっちゃめっちゃ叱られた。単位と引き換えに春休みにどっさり宿題を出された。

< 1976年 >

1976年の秋、滋賀大、神戸商大、姫路工大とのジョイントコンサートではマネージャーが佐伯博史氏、小生はサブに付いて、チラシ・チケット・プログラムの印刷を担当した。合同演奏ではドイツオペラの合唱曲を林誠先生の指揮で、当時はまだ斬新だったシンセサイザーの伴奏で歌った。

1976年の定演は、創部50周年で第20回という節目がダブルの記念演奏会だった。その大事な演奏会のマネージャーは、当時まだ二年生の池田徳規氏、谷口雅俊氏、貞重晴敏氏の3名が重任を仰せつかった。3人は重責と激務にたいへん苦勞したようだ。グリーン史に残る記念演奏会の陰の立役者である。

< 1977年 >

教職課程を取ると、4年生春の教育実習が、ちょうど大阪四大学の演奏会と時期がかぶってしまう。この年の部長さんは、練習も本番にも出ないということで、教育実習に行ってしまった。副部長だった小生は困り果てたが、合唱団としては歌い手が一人減っただけと割り切っ

た。そこで、肅々と練習を進めて皆を集中させ、引き締めた指揮者の池田守氏の手腕は素晴らしかった。この年の大阪四大学での黒人霊歌は、自分にとってグリーの4年間で、最も記憶に残る感動的な演奏となった。ステージから楽屋に引き上げると、皆で声をそろえて万歳！万歳！万歳！と叫んでしまったことが懐かしい。

芸能系に強いOBの方（お名前は憶えていない）のご好意で、グリーとして愛唱歌などを演奏しては、ギャラを部の活動費に充当する機会を何度かいただいた。一番の大舞台は、外資系企業のクリスマス、メインが雪村いづみで、外語グリーは遥か手前の前座で演奏した。また、旧制高校の寮歌祭に出演して歌った寮歌（高知高校・鹿児島第七高校）は、FM大阪で放送された。

<1978年>

夭逝した恒川正義氏のことに触れない訳には行かない。1月のとある火曜日の四限目、専攻の授業を終えた彼と小生はいっしょに駅に向かった。途中、呑み屋街に入る路地の手前、飲みを誘うつもりで彼を見ると、ボンヤリあさっての方向を見ている。なんとなく声掛け辛くなり、そのまま駅まで歩いて別れた。それが生前の彼を見た最後だった。

その木曜日夕方、吉川靖弘氏から電話、「恒川、起きてけえへんから見に行ったら、冷たくなってたんやて」、すぐ恒川家に電話した。お母様から「最近何か変わったところなかったですか」と聞かれたが、思い当たることは何もない。その翌週試験がある専攻科目のノートを彼に貸

したばかりだった。あの時、飲みを誘っていたら、どうだったろうか。今も心残りである。

“伝説の厳しい指揮者”として噂だけ聞いていた堀田光行氏が朝鮮語科からフランス語科へと華麗なる転身を遂げられ、グリーの練習にも復帰されていた。そこで、同期に適材がいなかった我々の代では、堀田さんが正指揮者となった。

'77年頃から復興した女声コーラス部（女コーラ）。グリー単独でやっていた外語の入学式での学歌演奏に目を付け、'78年春の入学式では自分たちも歌わせろと強く要望してきた。そこで、やむなく学生課に相談に行き、了解が取れたので、同年の入学式では女コーラとグリー合同での混声合唱による学歌演奏となった。

毎年の新入生勧誘では、学内ポスター貼り、校門でのビラ配り、各語科新歓行事に出席しての勧誘、セールスポイントとしての合ハイ・合コンの頻繁な開催など、手を尽くした。この春の大阪四大学では40数名がステージに立ち、「人数が一番少ないが、声が一番大きい」と言われてきた外語が人数でも他大学に引けをとらなくなった。

この年の定期演奏会は、毎年使ってきた森ノ宮の青少年会館が改修で休館するということで使えなくなり、会場探しに苦労した。乏しい予算と限られた開催時期の制限から、東大阪市民会館での開催となった。第1ステージでは、1月に夭逝した恒川氏を悼む思いを込めて組曲「観音」を演奏した。

そして、1979年秋、大阪外語は箕面に移転。小生は箕面キャンパスを知らずに卒業した最後の卒業生のひとりとなった。

杉本啓一郎（昭55 京大法）

私は1980年京都大学卒ですが、2015年の1月から大阪外大グリー OB 合唱団（東京）の活動に参加させていただいています。接点は、1979年卒の五十嵐さん（T1）と1984年卒の山口さんです。五十嵐さんは新卒で入社した会社の1年先輩で、山口さんは現在勤めている会社の同僚です。

私は大学時代は2回生でコーラスを止めてしまい、会社に入ってから会社のコーラス部に2、3年参加したものの、その後はずっとコーラスからは遠ざかっていました。しかし、いずれまたいつか歌いたいなという気持ちは持っており、ご縁があって2012年から混声合唱を始めました。

この合唱団で2014年にモーツァルトのレクイエムを練習していた時に、たまたま飲み会でご一緒した五十嵐さんにテナーを手伝ってくださるようお願いしたところ、引き受けてくださったのが、私が大阪外大グリーに参加するきっかけでした。五十嵐さんは演奏会を最後に退団してしまわれましたが、打ち上げの時に、今度柳河風俗詩をやるよ。一緒に歌わない？と誘っていただいたのです。

私が大学の時に参加していた京大合唱団は、京都大学男声合唱団として男声合唱を行い、一般の女声合唱団と共に京大合唱団として混声合唱を歌うというユニークなスタイルです。先輩には鳥越俊太郎さんや多田武彦さんがいらっしゃいます。学生の時に「柳河」は男声の愛唱歌でしたが、「柳河風俗詩」を組曲として歌ったことはなく、一度歌ってみたいなあという気持

ちはずっとありました。また、混声合唱を歌うようになって、男声合唱ももう一度歌ってみたいという思いも強くなってきていました。同じ会社の山口さんからも是非というお誘いをいただき、これを機に参加してみることにしました。

大阪外大グリー OBの活動に参加してみると、男声合唱はハモって楽しいという学生のころの記憶が一気に蘇ってきました。世代は若干離れていても、自分が知っている曲は大体みなさんもお存知で、飲み会でスキあらばハモろうとするのも、学生時代と同じです。他の参加者の皆さんとは前後10年ほどの差がありますが、皆に好かれて歌いつがれる歌は共通なのかも知れません。

2015年の「柳河風俗詩」と同様に、2016年の「月光とピエロ」も「秋のピエロ」以外は歌ったことがなく、一度は歌ってみたい曲でした。90周年の演奏会で100人の舞台に立てたのは素敵な経験でした。2017年のシーシャンティは自分が歌ったことのある曲ばかりでしたので、懐かしい思いに浸ることができました。

大阪外大グリー OB 合唱団の魅力は、私のような外部の者も気持ち良く受け入れてくださるフレンドリーさと、経験者揃いだということから来る安定感でしょうか。男声合唱で素敵なハーモニーを作るという共通の目的があるからでしょうか、スッと溶け込ませていただいたような気がします。経験者揃いというのはOB合唱団の持つ共通の強みです。これに甘んずることなく、練習でレベルを上げて、一目置かれるレベルを目指して行きたいですね。

これからもよろしくお願いします！

片瀨明広（昭56 大分大）

私の母校は大阪外国語大学ではありません。私は大阪外国語大学グリーンクラブOB合唱団の中で出身校が外大ではない最初の団員ですが、2016年の大阪、東京における創部90周年記念演奏会の全ステージに立つことが出来ました。

2017年7月に定年退職と家庭の事情で東京からふるさと九州に戻りましたが、途中転勤で活動に参加できなかった期間を除き通算6年間、外大グリーの皆さんと練習やステージ、打上げを共にして歌うことで、最後の頃は大阪外国語大学が自身の母校ではなかったかと錯覚するようにまでなっていました。

私が入団したのは、勤務先であった出光興産の先輩樽井一仁さん（1975年卒ロシア語）からグリーン在京OB合唱団に誘われたのが切掛けでした。私が高校（佐賀北高合唱部）、大学（大分大学混声合唱団コールレティヒ*）と合唱を経験していたことを知った樽井先輩が、練習の人数不足を補おうと苦肉の策で部外者である私を練習に引き込んだのでした。

※コールレティヒの「レティヒ」はドイツ語で「大根」という意味で「大混（大分大学混声合唱団）」から命名。

私が入団した2003年当時の在京OB合唱団は月に2～3回、厨房機器に囲まれた調理室で午後6時から9時まで練習をしていました。毎週の練習参加者が10名にも満たず4パート揃う日が稀で3部合唱や2部合唱になる日がよくありました。練習がある日は6時になると仕事をしている私の所へ右手に楽譜が入ったバッグ、左手に丸まった薄いシート状の電子ピアノを抱えた樽井先輩が来て、「片瀨君、さあ行くぞ！」と言って強引に練習に連れて行かれました。私が記憶している当時の参加メンバーは、ベースが大倉

明治さん、荻野芳毅さん、樽井一仁さん、安良雄一さん、バリトンには野田大祐さん、岸本保さん、松村尚人さん、セカンドテナーが若林充さん、山中道宏さんでした。トップテナーは五十嵐強さん、北村照夫さん、それに私の3名で、皆まだ現役で仕事を持っていたので、トップ3名全員が揃うことはめったにありませんでした。

大学卒業以来20年間合唱から離れていた私にとってはグリーの練習はとても苦痛でしたが、今振り返ると小貫先生から個人レッスンのようなご指導を受けることが出来て感謝の気持ちでいっぱいです。練習ではなかなか声が出ず音も取れない私が挫けそうになると、帰り際に大御所の野田さんや若林さんから「また来週も来てね、待ってるよ」と温かい励ましの声を掛けていただき、何とか継続することが出来ました。

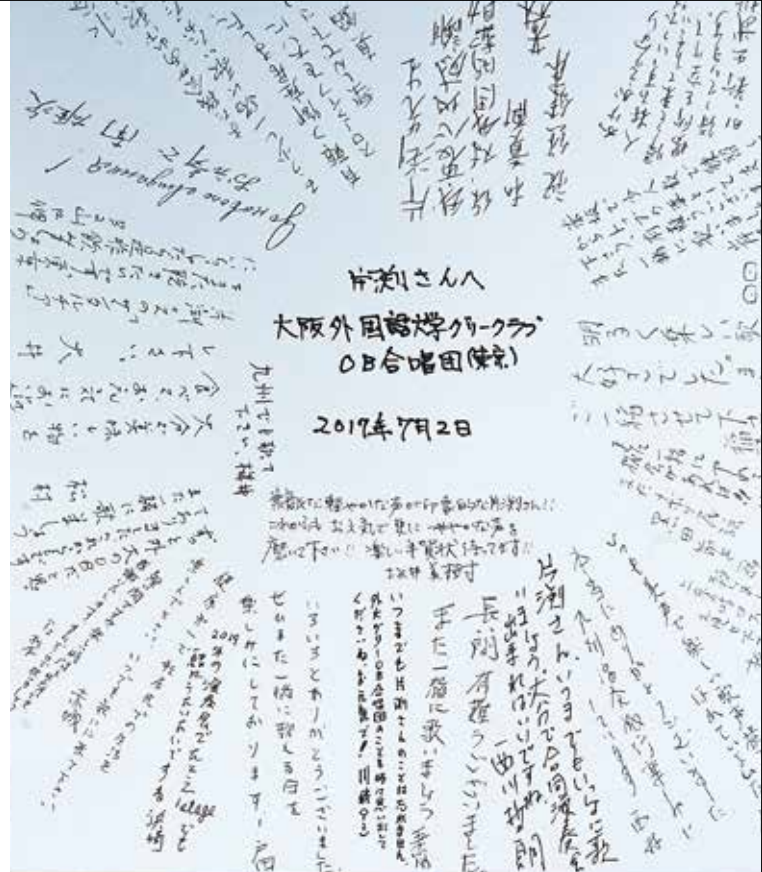
当時は東京外国語大学混声合唱団コール・ソレイユや男声合唱団ハートストリングスとジョイント演奏会を開催したり、シルバーコーラスや男声合唱フェスティバルに参加していました。演奏した曲は世界の名曲や黒人霊歌、シー・シャンティ等で、特に「三つの小笠原新調」がとても難しかったことが記憶に残っており、また「五つの日本民謡」では「最上川舟唄」のソロを歌わせていただいたこともとてもよい思い出です。また野田先輩の哀愁に満ちた「草原情歌」の歌声も私の心に刻まれています。

それでも何と言っても一番の醍醐味は演奏会が終わった後の打ち上げで、その楽しさは忘れることが出来ません。お酒が入って皆で歌う男声合唱はステージとは違った別の分野の音楽で、心の叫び、魂の歌とも言うべきものだったように思います。また、打上げで私が歌わせてもらう黒田節風「サンタルチア♪」もいつの間にか十八番として定着し、皆さんからリクエストい

ただけるようにまでなりました。

その後2007年から2014年まで転勤で東京を離れ、その間休部しましたが2015年1月にまた東京に戻ってグリーの皆さんと再会することが出来ました。7年ぶりに参加した練習会場は八丁堀にある西川哲朗さんの会社のオフィスで、そこで驚いたのは、参加者が倍以上に増えていたことありますがそれ以上に、美しい指導者坂井美樹先生が沢山の男性陣に囲まれながらも全く臆することなく明るく堂々と、そして厳しく指導されている光景であり、皆が一丸となって90周年記念演奏会という大きな目標に向けて練習に取り組んでいる姿でした。時の流れを痛感すると共に、ここから私の90周年記念演奏会に向けた新しい取り組みが始まりました。出遅れを取り戻し他のメンバーに迷惑を掛けないように出来る限り練習に参加して予習復習も欠かさないように心掛けました。その頃、仕事では新しいプロジェクトが立ち上がり超多忙な時期であったものの、練習に参加してグリーの輪の中に入って歌うことによって気持ちの切替えが出来て公私ともにとっても充実した日々でした。日を追う毎に演奏会へ向けた練習にも熱が入ってきて夏の大阪合宿を経て、いよいよ本番の日を迎えました。大阪演奏会も東京演奏会も共に素晴らしい演奏会となり、聴きに来た友人・知人からも絶賛の嵐で、この演奏会にそしてこの合唱団に参加してよかったと思いました。

外大出身ではない私が大阪外国語大学グリークラブOB合唱団に参加して90周年のステージに立つことの是非が団内で議論になっていることを耳にはしていました。純血主義を貫こうという考え方も、新しい血を入れて組織を変えていこうという考え方も双方あって当然だと思います。そんな中で私自身、90周年演奏会で歌うのは合同ステージだけにしようか、東京演奏会だけ参加しようか、いっそのこと演奏会への参加を辞めた方がよいのではないだろうかと思



送別会でいただいた色紙

いました。正直なところ母校ではない「Gaigo/Varsity/大学学歌」を歌うことに抵抗がないと言えば嘘になります。いろいろ考えた末、大阪でも東京でも全ステージに立ち全曲歌おうと決心したのは「男声合唱が好きだから」というただそれだけの理由からでした。

音楽は、特に男声合唱は、私たちを取り巻く様々な「しがらみ」を超越して、一人ひとりの気持ちをひとつにしてくれるものだと思えます。繰り返しになりますが、全ステージを歌い切って本当によかったと心から思いました。

昨年、定年を迎え地元の九州福岡に戻ることになったため、外大グリーの皆さんとは昨年7月の東京都合唱祭でのシー・シャンティが最後のステージとなりました。歌い終えて、卒業式での「仰げば尊し」のように胸に熱く込み上げてくるものがありました。その日の打ち上げで皆さんから頂いた「寄せ書き」と「エンジのネクタイ」は私の一生の宝物です。最近、実の母校である大分大学にOB合唱団が結成され、昨年末から本格的な練習が始まりました。

私の送別会の席で、みなさんに必ず九州に演

奏旅行に行くぞと言って頂きました。いつの日か大阪外国語大学グリークラブOB合唱団と大分大学混声合唱団コールレティッヒのジョイント演奏会が実現することを夢みて練習に励みたいと思っています。

その日、私は外大グリーのステージにも大分大混声のステージにも立ち、そして「Gaigo/Varsity/大学学歌」と「大分大学歌」の二つの母校の歌を歌います。

ヤンキーススタジアムでアメリカ国歌を歌う

永谷勉（昭56 IPh）

昭和56年にグリークラブを卒業してから合唱とはあまり縁がなかったのですが、歳の近いOB仲間と毎年冬場にボタン鍋をつついて、昭和58年英語科卒T2梅垣君の経営する丹波柏原の老舗旅館「三友楼」で旧交を温めていました。

2005年のこと、OB合唱団の先輩方が大阪から合宿を兼ねて三友楼に来られていて、その年の宴会は合同となり、紙谷先輩（昭和34年インドネシア卒）が、宴会の途中、「折り入って頼みがある」と膝を正して私の前に来られました。その年の3月に淡路島五色で開かれる「菜の花コンサート」に招待されているので、助人として参加してほしいとのこと。聞けば林先生の指揮で、山口慶四郎先生の講演もあり、大先輩からそこまで丁重に頼まれたら断るわけにはいかず、そのコンサートだけで良ければと、恐る恐る練習に参加してみたところ、緊張していたのは最初だけ。あとは学生時代と同様どっぷりとはまってしまい、コンサートの後も引続き活動を続けることにあいなりました。

2009年5月にニューヨーク転勤が決まり、大西先輩（昭和37年スペイン語卒B2）から「ニューヨーク駐在時代に所属していたニューヨーク男声合唱団（当初New York Men's Glee Club、後にNew York Men's Choir 略してNYMC）の知り合いに連絡しておくから、落

着いたところに練習の案内が行くと思うので顔を出すように」と送り出していただきました。NYMCは1991年に駐在員を中心に結成された日本人男声合唱団で、学生時代に男声合唱を経験した方が多数いて、活発に活動しているとのことで大いに期待していました。ちなみに、その団には大西先輩だけでなく、楠本先輩（昭和53年ペルシャ語卒B1）も90年代に参加していました。

赴任後何ヶ月か経ち、そろそろいかがですかとNYMCの方から連絡をいただき、顔を出して見ると何か様子が違う。グルッと見回すと男声は4分の1くらいであとは女声の混声合唱団。昔とは状況が変わり、男声メンバーは帰国のため激減、一方で女声の参加を認めるうちに、混声の様変わりしたとのこと。不承不承(?)入団しましたが、和洋取混ぜた混声の曲が歌えて、それはそれなりに面白い経験でした。NYMCはその後、New York Mixed Chorusと名前を変え、文字通り混声合唱団となり、4年間お付き合いしました。

そうこうするうちに、同時並行で翌2010年1月にニューヨーク在住の隠れグリーメン（元NYMCのメンバーや全くの素人等）で、女声のいない本当の男声合唱団を再結成しようということになり、MGCNY（Men's Glee Club of NY）として再出発しました。20名ほどのメンバーでそのうちグリー経験者は3～4名、混声

経験者を入れても5～6名ほどであとは初心者。週1回2時間の練習ではなかなか厳しいものがありました。毎年末に客席200～300ほどのマンハッタンの教会を借りて、清水脩先生の日本民謡、多田武彦、黒人霊歌、ミュージカルなどを歌いました。その後、カーネギーホールでの東日本大震災チャリティー・コンサートに賛助出演、秋吉敏子の前座、原田信二のバックコーラスなどニューヨークならではのお座敷に声がかかるようにもなりました。

ハイライトは、2014年にヤンキースタジアムで試合開始前にアメリカ国歌を歌う幸運に恵まれたことです。タキシードを着て整列し、一塁側のダグアウトにギターやイチローがいるのを横目で見ながら、大観衆の前でアメリカ国

歌を歌いました。演奏はいまいちでしたが、最後のサビの部分になる頃には観衆が勝手に盛り上がり、拍手喝采指笛の嵐。退場する際にも、お世辞に決まっているとは言え、たくさんの人が“Good job！”の声をかけてくれて、アメリカ人の遊びに対する乗りの良さを感じた次第です。



大阪外国語大学グリークラブ「人生を変えた一言」

河原敬（昭57 E）

昭和51年春、やっと大学に合格して、桜の下、いい気分であ歩いていた。ちょうど新歓の時期で、妙なブレザーを着た長髪の一団に取り囲まれた。「うーん！このエラはいい声が出るはず」。26期Pの楠本隆志氏（B1）にだまされて入部。自治会活動や大学祭ばかりやっていたが、知らない間に学生指揮者になっていた。何も知らない。何もできない。最低の指揮者だった。

中学で習った程度の音楽の基礎知識しかない。振りはじめは相撲の立会いのようになって息が合わない。アインザッツでブレスをすれば歌いやすいというのが判ったのは卒業してから。とくに「五つの日本民謡」の機織唄には参った。後輩の30期E上原聡氏（B2）が、「河原さん、なにもしないで！」と言ってきた。

一番短い音符で数えればいだけなのにカウ

ントの仕方も全く知らない。プライドが高いから教えてもらうのが下手。しかし合唱の魅力は抗いがたい。友人の女子大生に「発声のピアノ」だけ教えてと泣きついた。指揮教本を集めて読み漁った。0から1になれば数学的には無限大の進歩だと言う。だまされている気もしないではないが僕について言えばそのような感じであった。

卒業後、塾をやりながら堺ユースオーケストラを再建しバイオリンを弾いた。白鷺少年少女合唱団を創設した。ドナウやウイーンの森や皇帝円舞曲やチョコタンやゾウ列車などをオーケストラ伴奏で演奏した。

縁があって、フランス・トゥレーヌ甲南中高に英語教師として勤めることになった。城巡りで有名なロワールのトゥールと言う町に一年住んだ。コーラス部があり指導することになった。唯一の男声部員が当時パリに赴任しておられた

21期E部長、八木哲夫氏（B2）の息子さんであったのには驚いた。

フランスから帰って混声合唱団メルヴェイユ（merveille 奇跡・驚き）を創った。合唱を全く知らなかった僕が、好きというだけでフランスの老人ホームを慰問したり、日本で合唱団を指揮しているのは奇跡だと感じたからである。3期FT2早原瑛先輩に頼み込んで天王寺予備校の音楽室を格安で借りて大阪外大グリークラブOB会大阪を立ち上げた。6期E岡田吉治郎氏（B2）や7期E河盛龍三氏（B1）、8期IN紙谷敬治氏（T2）、C赤坂一郎氏（B2）、24期R上田哲也氏（T1）、27期S池田守氏（T1）と激しい議論もしながら演奏会を成功させた。

メルヴェイユは2000年ハワイの国際合唱祭に招待される。カルミナ・ブラーナやベルディのレクイエム、モーツァルトのレクイエム、メサイヤ、エリヤなどオケ伴の大曲をハワイでプロと演奏する。8回くらい10人前後引率して、ハワイに出かけた。コンドミニウムなどに泊まって、日曜から日曜まで、ハワイ大学を中心に練習して仕上げで発表する。数年後ハワイ国際合唱祭の理事に推薦された。

佐渡裕氏の第九オーディションに合格して富士山河口湖第九や芸文記念第九メンバーに選ばれた。2005年12月には佐渡さんと12公演を

一緒した。第九のバリトンソロもオケ伴で経験した。

2016年ドイツ・オーストリアでフォーレのレクイエムの演奏に招待された。クリスマスマーケットで華やかなザルツブルクの教会で現地の合唱団と交流した。モーツァルト・カラヤンの生家も訪問できた。

長女はハワイ大学音楽部弦楽課程を首席卒業、現在オアフ在住。次女はバイオリンからビオラに転向、大阪音楽大学を出て芸大や音大の指導員・演奏員をしている。朝日放送ラジオの三代澤康司アナウンサーと第九を歌った。いずみホールでは長女がバイオリン、次女がビオラ、婿がチェロのオーケストラの伴奏で僕がバス、家内がアルトを歌った。自宅に防音室まで創って、団長をしている合唱団の特別レッスン。最低の指揮者だった僕が。

これらは全て楠本氏が僕をグリーに入れたあと40年間に起こったことである。先日、タイ在住の楠本氏のバンコク男声合唱団がアジア・日本人男声合唱祭という不思議な演奏会を大真面目に開催しているのを見に行った。エラ事件のことを確認した。彼の答えは「全く覚えていない」というものだった。僕としてはワット・ポー寺院の黄金の涅槃佛のようにとぼけた顔で横になるしかないというところである。

上八最後の世代

梅垣誠（昭58 E）

私達が入学したのは1979年。この年の9月に外大は箕面へ移転しました。半年だけではありますが上八を知っている最後の世代です。また私達の学年が、一期校二期校制度が改まり共通一次試験が始まった年の学生でもあります。環

境と人が変わったからでしょうか、外大では学生の気質が変わった、とよく言われたものでした。しかしながら、どうやら我らがグリーは、環境や人に影響されることがなかったようです。

皆様、今さらこんなことを言われなくてもおわかりのように、これは男ばかりの集団であったことがその理由なのでしょう。私事ですが十

数年前、柄にもなく小学校のPTA会長になってしまい、それを期に教育関係の様々な本を読むようになりました。その過程で出会った本に『なぜ男女別学は子どもを伸ばすのか』というのがあります。詳細はこの本に譲るとしまして、男の子から男性に成長する時期に異性を気にせず、また異性と比較されない男だけの環境はとていいものであるようです（女子校も同じ意味でいいようですね）。私にとってグリーとは形こそ違え、男子校に入学したようなものだったのでしょう。そこには新鮮な未知の世界が広がっており、勉学の志に燃えて丹波の地から大阪にやってきたはずの私だったのではありますが、それはたちまち消え失せていたのです。

さらに言えば合唱という、競争ではなく調和を目指すグループであったことも外大グリーの気風の形成に寄与していることでしょう。仮に

もしこれが男ばかりの将棋クラブであれば、そこに集う面々はお互いに打ち負かさなければならぬライバルということになりますからね。

グリー時代の人間関係は、そこで共に過ごした面々にとって、いつまで経ってもかけがえないものであり続けています。日本人は人生のほんの一時期を除いてもっぱら同性とばかり付き合いたがる傾向が強いように思いますが、学生時代に男同士で強い絆を結べたことはこの上ない僥倖だったと思います。

上八から箕面へ移転して2年余りが経過した1981年の第25回定演パンフに、林先生が「新入生を感じるのは始めの数ヶ月…。あとは、いままでどおりのグリーに、すべてが溶けこんでしまう。不思議なクラブである」と寄稿しておられます。さもありません、と言うところですね、男の世界に染まったということですから。

グリークラブのお引越し

保川一治（昭59 M）

我々の年代（ほぼ1970年代後半入学）は、上八学舎と箕面学舎の両方を経験した数少ない年代である。今回は、部室移転に伴う思い出を少しご披露したい。

上八時代は、バラック？かプレハブ？の日当たりの余り良くないかなり狭い部室で、しかもその狭い中に椅子や机、本棚が有り、本棚には勿論、楽譜、音楽理論の本（も有ったような気がする）、（青春向け？）小説、週刊誌、マンガ等が溢れかえていた。

ただ当時、他のクラブでは、階段下を囲って部室にしていたクラブも有ったので、一室与えられていたのは、諸先輩方の往時の活躍の御蔭で恵まれていた方かも知れない。

新学舎へ移転とともに、何と部室も、新築のサークル棟に（一応女声コーラス部と同居ではあったが）かなり広い一室があてがわれた。新築のサークル棟は、学内でも高台に位置していたので、日当たりも頗る良好であった。上八学舎に有った机、椅子、本棚、本類を持ち込んでかなり広いスペースが確保できた。

ところが、移転して間もなく、私が部室で一人練習の準備をしていると、当時調達の名人と言われる先輩がやってきて、「この部屋、少し殺風景だな、もう少し調度類が必要だな」と宣い、「少し手伝え」と私をとある場所に連れ出した。連れていかれた場所は、移転の為各所から出された不要品の置き場であった。そこから、未だ見えそうな本棚や、椅子、カバン類に至るまで、新部室に持ち込んだ。最後には、どこで見つけ

て来たのか、「どうも要らなさそうな畳が置いて有る」と、要品か不要品か不明の畳も（確か四畳分）新部室に持ち込んだ。これにて、立派？な新部室が出来上がった。

流石に、捨ててあった？畳が敷いてある部室には、その後女声コーラス部の若き乙女たちは近寄りがたかったようで、彼女達はこの部屋を楽譜置き場としてのみ使い、通常は、我がグ

リークラブのほぼ専有の場所となってしまった。

我々グリーンはその畳の上で寝ころび、飲み喰いし、練習もし、おおいに寛いでいた。

ただ、当時の女コラの一員であった我が妻は未だに、時々忘れた頃に、この当時の部室を我々グリーンに占拠された事の恨み言を宣う事が有る。

こころのBGMさがし

栗生（勝本）昇（昭60 K）

大学入学時にたまたま気まぐれに近い軽い理由で入ったグリークラブが、卒業後も数少ない私の交友関係を繋ぐ場となっていることは本当に有難い事です。

グリー入部以前は歌うことのみならず音楽全般に近づくことが無かった私は、自分が音痴であるという自覚すらなく、「とにかく大きい声出してたらええねん」という優しい先輩方の勧誘をそのまま言葉通りに受け取り、今から言えば全く無謀にも入部を決めておりました。その時点ではピアノで示される音と同じ音程の音を出すのも怪しかった私には、全く特殊技能集団としか思えぬ難行の世界が待ち受けておりました。

しかし、その様な私にもグリーは懐深くバリトンの一員という素敵な居場所を与えてくれ、ハーモニーの迷宮へと誘ってくれました。その後自分の声が体から響いて空に伸びて行く様な感覚が判ったり、曲の進行につれ和音の色合いが変わって行く事に感動したり、その様な自分に気づいて驚いたりした折々のことは、卒部後33年が経過した今でも鮮明に思い出せます。在学中に歌い憶えた曲の数々を今でも集う度に

歌えるという奇跡の様な財産を私に与えてくれた外大グリーンには本当に感謝、そして感謝です。

卒部後33年間、会社員生活を重ねてまいりましたが、今年からその生活に終止符を打って、京都府城陽市で就農致しました。数年前から週末に土に触れる様になり、農業をしたいという思いが募り、体力の衰えきらぬ内に一定の技量を身に着けようと早めに転身致しました。有機農法に軸足を置き、できるだけあるがままの自然の循環に身を置き、何か根源的なものに気づきながら暮らして行ければと思っております。それはグリーンで歌った様々な曲の中に描かれていた物事に通底する何かだろうと思ひますし、グリーンでの活動が私に感性に従い行動する自由さを与えてくれたような気がします。

畑で鍬を使っていると度々思いだされるのが2回生の時に林先生のリサイタルで聴かせて頂いた曲です。フレーズの断片しか思い出せないのですが、農村での充足した暮らしが理想郷のように描かれた歌でした。夕方仕事を終えた農夫たちが「鍬を納屋に立て掛け大きなジョッキを傾ける」という歌詞で、その時の林先生の歌声、ゆっくりとジョッキを傾ける振り付けなどが思い出されます。それが農作業中に繰り返し頭の中を回り続けることがあります。私の心に

農的生活への憧れが明確なイメージで描かれた最初の経験として記憶に焼き付いたのかもしれませんが。一度機会があれば林先生にその曲の楽譜やCDが手に入らないかお尋ねしようと思えます。今の自分としてあの歌をじっくり味わって聴いてみたいと思っております。

実際、夕方に農作業を終えて田畑から空に広がる空間を眺めていると、諸々の感情がリセットされて風の吹くままに空白の心で極上の時が

過ぎてゆくことがあります。そこを私の心の原点として農業に、そして後半生に向かってゆこうと思っております。

その心象にぴったりと重なる歌を見つけ、自ら歌えるようにしたい、というのが私にはなかなか難しい課題ですが、いつともしれない将来、孫たちの前でええかっこ出来る様に、こっそりと備えよう、と思っております。

もし外大グリーンでなかったら

藤井哲（昭60 IP）

入学式でステージに上に現れた40名ほどの男性集団。当時の指揮者、堀田氏（昭和56年卒）が両腕を直角に曲げ、それを水平に構えると全員の動きが一瞬止まり、次の瞬間、僅かに動いた彼の肘に合わせて男たちが苦しそうに、でも真剣に歌いだしたのが黒人霊歌との出会いでした。このとき正直、歌にではなく彼らの苦しそうな表情に惹かれて訪れたのが、校舎とフェンスの僅かな隙間に建てられたプレハブのボックスでした。中に入ると学生らしさのない、鬱屈した先輩数名。でも何故か居心地の良さを感じて入部を決意。楽譜も読めない私が2ヶ月後には大阪四大学のステージに立って、黒人霊歌を歌い、そのまま行けば合唱にのめり込んでゆくはずが、歌ではなくグリーンメンの人柄が好きで部員であり続けたような気がします。また当時のグリーンメンは合唱がやりたいというよりは黒人霊歌が歌いたいという気持ちで繋がっているクラブでした。ですから霊歌がなければみんながばらばらになりかねない危うさもはらんだクラブでもありました。

他大学の合唱を聞くと、個人の声は目立たず

調和の取れた美しさがありましたが、我がグリーンは自己主張の塊の合唱でした。最大公約数を目指すのが一般的な合唱だとすれば、最大公倍数を求めているのが外大グリーンだったのではないかと今は思います。林先生のご指導でも、私の記憶では「合わせる」指導ではなく、一人ひとりの声を最大限に引き出してそれをパートごとに揃えるという定石破りのご指導だった気がします。それこそが、僅か30名程度の合唱団を100名の合唱団かと思わせる林マジックだったのでしょうか。荒削りで、個々の声が目立ち、リズム感もなく、でも一人ひとりの個性が光っていた外大グリーの黒人霊歌。私はそんな自己を押さえてまで妥協をしないグリーンメンが大好きでした。

グリーンを卒業して企業に就職を決めていましたが、教職の道へと変更して採用試験を受験した私立中高一貫校でお世話になった長井氏（昭和54年卒）、その後、今の学校に私を誘ってくれた内野氏（昭和57年卒）とは30年以上も机を並べて毎日OB会（実は内野氏は、私を引き入れて自分は母校の明星高校に戻る予定だったらしい。つまり私は身代わり？）。外大グリーの定演プログラム（南太平洋・北村氏指揮 昭和58年卒）でソロを務め、その後も大阪四大

学や外大グリー定期演の司会を依頼した泉民恵は現在私の妻となり、全て外大グリーが繋いでくれた今の私の道。もしあの時上八校舎のボックスで入部を決めていなければ私の人生は全く違うものになっていたことでしょう。

あれから40年近くが経った今では、同期の梅垣氏（昭和58年卒）が営む三友楼でもう20年以上も故山口慶四郎先生を囲んで毎年開かれてきたOB会。丹波の地に年に一度だけ、東京、

富山、愛知全国各地から猪退治に集うグリーン。夜中まで、飲んで、食べて、歌っての一夜限りのタイムスリップ。

私とグリーを繋ぐもの。それは歌ではなく彼らの許容範囲の広さ。当分はまだOB合唱団への参加はままなりません、いつか必ず皆さんの懐に飛び込もうと思っはいます。その時にはまた、昔私が感じた居心地の良さで私を受け入れては頂けませんか。

粟生間谷グリークラブの思い出

西山恭介（昭61 S）

入学間もない4月か5月のある日、昼休みに学食に向かっていると、図書館とB棟に挟まれた小さな中庭から男声合唱の歌声が。多分「最上川舟唄」とか「Soon Ah Will Be Done」とか、グリーおなじみのレパトリーだったようです。ふらふらと近寄って、手近な先輩に「入部したいんですけど…」などと口走っている自分がそこに。「それじゃ火曜日の6時からBOXで練習やってるから」。今となっておぼろげながら、こんな感じで入部に至ったように思います。

当時、粟生間谷の学舎は新築で、中庭と、そこから続く白い階段の敷石に、春の陽が、ちょっとまぶしく反射していた1981年でした。もとよりグリーに入ろうと決意していた訳でもなく、出会い頭の衝動的な入部でした。近づいたり離れたりしながら、その後30年以上もお付き合い頂く事になるとは、19歳の自分は想像もしていなかったものです。

グリーの思い出は、当時の風景のスナップショットとセットになって甦ります。あの頃、中庭の中央に、ひょろりと細長く、葉っぱも少ない木が植栽されていて、頼りなさ気に立っ

ていました。その木の前を行き来し、その前で歌ったり、駄弁ったり（こんな言葉まだ意味が通じるでしょうか？）したものです。あの木は今も相変わらず立っていて、立派な大木ではないけれど、幹は少し太くなり、葉も茂らせているようです。その木の根元からグリー生活をスタートした自分には、頼りなかった若者が、世間の波にもまれながらも、なんとかそれなりに歳を重ねてきた自分と重なり、同級の仲間のように思えます。

グリーの練習は週3回。火曜、土曜の放課後、加えて木曜日の3限目、Assembly Hourという課外活動の時間です。これ以外にパート練習も毎日昼休みにありました。練習に通ったクラブBOXや217教室の窓から見える景色は美しく、新緑の山あい一本、くっきりと立つ山桜の薄桃色や、梅雨時の霧雨にけむる峰々谷々の水墨画のような風景など、夢の一シーンのように記憶に残っています。

当時私が通った大阪外大は、千里中央から阪急バスで30分。国道を超え、新興住宅地を抜け、田んぼを横に見て、村の鎮守様の角を曲がり、バスの運転手さんでも時々坂道発進に失敗してエンストするような、急な坂を上りきった

山の奥深く、栗生間谷にありました。図書館4階にあるLL教室からは、村のお寺の屋根や、刈り取った稲を干している田んぼなど、のどかな景色が遠望できたものです。

練習メニューは、体操、発声、音階、カデンツ、アンサンブルと、ごくオーソドックスでしたが、林先生のご指導で導入された腹筋背筋運動（通称“シュッシュ体操”）が大変ハードでした。夏・春の合宿、他校とのジョイントコンサート、合コン合ハイ等、1月の定期演奏会を目指して、硬軟織り交ぜながらクラブ活動をエンジョイしていました。

練習時間以外でも、暇があれば日がな一日学食に居座り、グリーや女コラの仲間を見つけては、カルテットしてみたり、たわいもない話を延々と続けたものです。そこに行けば誰かに会える場所、学食。並んだテーブルや生協の様子が今も目に浮かびます。あの学食での時間－仲間との会話、ハモリ、心の揺らぎ…あの時間も

確かに大切なクラブ活動の一部でした。

想えば私にとっては合唱よりも、先輩・同期・後輩諸氏と二十代初めの時間や空間を共有した事こそが、グリーが一番大切な意味だったのかもしれない。グリーに費やした時間の細かな粒子は、心の底に静かに沈殿して私を形成していったようです。その中にはグリーの想い出と一緒に、当時の音や風景や感情などもタイムカプセルのように保存されていて、時折何かの拍子にふっと心の表層に浮かび上がります。卒業して何年も経ってから、昔練習した曲のフレーズが突然当時のサウンドのまま頭に響いて、そんなときに、そのフレーズの本当の意味が初めて腑に落ちることがあります。

半人前の若者を、音楽を通じて育ててくれたグリークラブとその仲間感謝。そして今もお、懐かしい仲間や歌と再会させてくれ、新しい出会いや喜びを与えてくれるグリークラブに、感謝の気持ちで一杯です。

外大グリーとの出会い

松村尚人（昭62ⅡS）

大学の食堂に行けばいつもグリーの誰かがいた。下宿に帰ればそこにもグリーの誰かがいた。いつもみんなと一緒にいたように思う。住んでいた小路学生寮には、栗生（勝本）先輩、宮田先輩、同期の矢島氏、高橋氏、大川氏らがいた。近くの笹川邸には山口先輩、前田先輩、梅垣先輩。これも近くの島田ハイツには同期の坂居氏、前中氏。などと、いつも近くに多くのグリー部員がいて、用事がなくても毎日必ずだれかと一緒にいたと思う。

入学当初の4月初旬、あるとき栗生（勝本）先輩と宮田先輩が私の部屋にやって来てグリー

クラブのことを教えてくれた。グリークラブという言葉が知らなかったが、入学手続きの時に図書館の前で歌っていた集団のことだと教わった。そういえば入学手続きの時には板倉先輩が声をかけてくださり食堂で330円のサービスランチをごちそうになったことを思い出した。大音先輩も一緒にいたと思う。栗生（勝本）先輩と宮田先輩から練習の見学に来いと言われ練習を見学に行った。その時はなぜか「おお牧場は緑」を練習していた。梅垣先輩から「お前はセカンドを歌え」と言われ楽譜の音符を目追おうとしたが、到底私には無理だった。歌の途中で、「～よく茂ったものだ、ホイッ!!」という掛け声はすごい迫力があつた。練習後に食堂ま

で歩いていく途中でもこの歌を歌いながら「ホイッ！！」と声高らかにはりあげており、これがグリークラブというものかと知った。それまで、音楽は嫌いではないけれど人の前で歌うということが恥かしくてできるだけ音楽を避けてきていたのだが、なぜかそのまま練習に参加しはじめていた。1年目はできるだけ小さな声で目立たぬように歌っていた。何のためグリークラブに参加しているのかということになるのだが、それでもなんだか楽しかった。

私は箕面の校舎しか通っていないが上本町の旧校舎へも何度か行った。当時はまだ旧校舎が取り壊されずに残っていた。新歓コンパや追いコンは、梅田の「大関屋」と難波の「味園」でよく行われたが、宴会のあとに上本町の旧校舎に行った。先輩方から、「この部屋で練習をしていた」とか「ここが食堂だった」と教えてもらったが、暗くてよくわからなかった。割れて飛び散ったガラスに気を付けながら屋上まで上がって校歌も歌った。

OBの先輩方が練習に来られたとき、同じ曲が歌えるということにも感激した。とにかく、毎日グリーの誰かと会って楽しく過ごした。

悲しいこともあった。4年のときに1年生だった櫻井伸有さんが交通事故で亡くなった。後続車の見知らぬ人の不注意であった。その時のことや彼のお父上の言葉なども思い出すが、悲しすぎることであった。卒業して何年も経ち、もう我々が彼のことを思い出すほかには繋がりがなくなかなと思っていて。が、2014年5月「林誠祭」の前日、そうではないことを知った。大

阪梅田の「大関屋」で懐かしいグリーメンバーが集った。そのメンバーのなかで、山本邦博さん（平4）が「私は櫻井さんの妹と結婚したんです」と教えてくれた。私は、妹さんが兄と同じく、大阪外大に入ったことは聞いていたが、女コラに入って、しかもグリーのメンバーと結婚したと知り、私は少し驚いて何と答えていかわらなかった。なんというか、いまも亡くなった彼とはグリーで繋がっているような気がして感慨深く思った次第である。

在学中に亡くなられた方では、ご本人に会ったことはないが恒川正義さんのことも聞いた。私が大学3年の時の定演の後、OBの村川先輩からお叱りを受けたことを思い出す。団旗にシワがよっていたのである。恒川さんが亡くなったときにご家族が寄贈してくださった団旗であった。その大切な団旗にシワが多く、粗末に扱うな、ということであった。最近岸本先輩に聞いたところによると、大阪四大学の中で一番大きく立派な団旗を作ってくくださったということであった。

今、私は東京の練習に参加している。上本町時代の方も箕面時代の方も含め幅広い年代の方がいらっしゃる。小貫先生と坂井先生というすばらしい指導者に恵まれ、世代を越えて同じ音楽と空間を楽しんでいる。練習に参加し始めて初めて出会った方とも一緒に歌って本当に楽しく過ごしている。そして、さすがに大学時代のように毎日ということはないが、ほぼ毎週のようにグリーのだれかと会っている。ずっとこのように楽しんでいた。



外大グリー、わが人生の友

安良雄一（平1R）

1985年春、箕面キャンパスでの大学入学手続き中、先輩に声をかけられた。「君、グリークラブって知ってる?」「はい知ってます」「お、通やな」（知っているだけで通か?）確かに高校生でグリークラブを知る人は少ないが、この会話が新入生をグリーに呼び込むための先輩方による必死のアプローチであったことはその後自分が勧誘で苦労した際に理解できた。当時私がグリーを知っていたのは、中学時代に関西学院大学生だった家庭教師について行った学園祭で関学グリーの歌を聴いたことがあったからである。その日外大グリーの先輩方が図書館前で歌ったGAIGOや黒人霊歌は全国トップレベルの関学に負けず劣らず格好良かった。その後先輩方から、今日はボイストレーナー林誠先生のレッスンがあるから見に来ないか、と誘われサークルBOXへ。林誠先生のレッスンは、今と変わらず緊張感があり、見るものを強烈に惹きつけるものであった。20名足らずの学生の声からみるみる音楽が形作られていくのを目の当たりにした。先生が帰り際、初対面の私に「安良君、期待しているよ!」と声をかけてくださった時、グリーメンの一員になる気持ちはほぼ固まった。入学手続きのその日に、である。

現役の4年間は本業の語学よりも(?)グリーに没頭した。4回生次には僭越ながら指揮者を仰せつかった。合計11回の演奏会の他、各

種イベントから宴会まで、歌に明け暮れた4年間であった。何度も歌った清水脩先輩の作品や黒人霊歌の定番曲などは体に染みついており今でも暗譜で歌える曲が多い。其々の曲に思い出があるが、やはり最後の定演で自分が指揮したロシア民謡、月下の一群、黒人霊歌が心に残っている。出来ることならもう一度当時のメンバーで演奏したい。外大女コラや、東京外大はじめ他大学との交流も楽しかった。当時の合唱仲間と今殆ど疎遠になってしまったのが心残りだが、SNSの発達によりいずれ再会できる人もいと信じている。

私は2014年から中国上海で2度目の駐在生活を送っている。当地でも縁あって総勢50名の混声合唱団に所属している（グリー経験者として重用されいつのまにか団長になってしまった）が、昨年2月、男声合唱に触れる機会があった。アジア男声合唱祭in上海というイベントに主催地団体として賛助出演した。アジア7ヶ国の男



アジア男声合唱祭でたまたま遭遇した諸先輩と

声合唱团百数十名が集う演奏交歓会だが、外大グリーのOBが何人も居られ、其々の団の要となっていた。外大グリーの歴史と歌への情熱を物語るエピソードである。

これまで外大グリーの他、職場や地域の合唱団、更には自分が組成したコーラスグループなど多くの場所で歌ってきた。今も合唱は最大の楽しみであり、人生の最終章まで続けたいと思っている。OB会を中心に、生涯一緒に歌える仲間が沢山いる。これは外大グリーが与えてくれた最高の宝物である。まだ人生半ばだが、今自分の‘グリー人生回顧ステージ’を企画するとしたらと考えてみた。これからも多くの名曲

に出会おうと思うが、今ならこんなラインナップになるだろうか。是非仲間と一緒に歌いたいものである。有難う、外大グリー。

◎組曲「月光とピエロ」より「月夜」

◎組曲「雨」より「雨」

◎曲集「月下の一群」より「海よ」（催眠歌）

◎ロシア民謡「ヴォルガの舟歌」

◎「Ständchen」（小夜曲）

◎黒人霊歌「Dig My Grave」

◎[アンコール・混声で]組曲「落葉松」より「落葉松」

芸能界への挑戦と挫折の軌跡 ～1991年冬・朝日放送出演、5人で奏でた愛と涙のハーモニー～

佐藤英二（平2A）

1990年代初頭、『合コン!合宿（ごうしゅく）!解放区!』という深夜番組がABCテレビで放送されていた。5人一組の男性グループ3組が女性4人グループを前に30秒ずつのパフォーマンスを競う。女性陣に選ばれた一組が1泊の「合宿」権を獲得、宿泊先での「合コン」を経て、男性各自が意中の女性に告白するという、かの「ねるとん」の関西版のような番組であった。ここにグリーが、それもとりわけモテない、キャラばかりが際立って濃い現役4人が応募したのである。

社会人2年目の1991（平成3）年の初冬の夜、上新庄のTS丸富マンションに一本の電話が鳴り響いていた。「…発信音の後にご用件をどうぞ」「あ、びーさん（＝私の呼称）ですか？本番は5人なんですけど、とりあえず4人でオーディション通りました。で、もう一人キャラの濃いメンバーが必要なんで、みんなで相談して

びーさんにお問い合わせ出来ないかなと思ひまして、電話させてもらってまピー！！」

当時のグリーの部長、水川登志雄（B2・II E28）からだった。正直はじめは気乗りがしなかったが、最終オーディションのために朝日放送を訪れたときに「ついに芸能人か、悪くないか」などと嘯っていた自分だった。

クリスマス前の12月某日、後輩4人を従えての芸能界デビュー。「最高の日にしてやるぜ！」などと考える間もなく収録がスタート。顔では逆立ちしても女性のハートを射止められぬと腹を括っていた5人は、外大グリーの誇りにかけて男声合唱で勝負した。

♪幸せは君の胸にいー、シアワセは僕の胸にいー、上を向いて歩こう、独りぼっち「じゃない」夜うー

5人でハモった「プロポーズ30秒」は、女性チームの推薦を奇跡的に勝ち取った。もちろん完璧なパフォーマンスだった（はず）^{（注1）}。対戦相手だった京都大学・近畿大学のチームに勝

つことができたのは、グリーの仲間をはじめ女
コラ、テンペスト、そしてジョイントコンサ
ート共演でお世話になった大阪市大フリーデの同
志、さらにはA語の後輩たち、ABCスタジオに
駆けつけた総勢50名の溢れる応援のおかげだっ
たことは言うまでもない。さあ、弾丸ロケのス
タートだ！

収録後直ちにABCを出、フェリーで淡路島
へ。合宿先は西淡の温泉旅館「鳴門荘」。ツア
コンとして同行した芸人、青野敏行の絶妙な話
術で宴会パフォーマンス大会がスタートした。

ここで参加メンバーを紹介しよう。男性陣
「大阪外国語大学グリークラブ」チーム：①梶
間貴志（大K43平07卒・B1）②森野良典（大
K44平08卒・T1）③榊原昭裕（大K41平05
卒・B1）④佐藤英二 ⑤片山敦志（IIF25平06
卒・T2）の5人。女性陣「アウトドア大好き4
人組」チーム：①キサラギさん ②キヨさん ③
アキコさん ④マユミさんの4人。全員、兵庫
県の某女子大2年生。

まずは片山が腹話術（それも人形として！）
を披露。続いて榊原がチェッカーズの涙のリク
エストをハーモニカで微妙なテンポで演奏しな
がらマユミさんにじわりじわりと詰め寄る。畳み
掛けるように梶間が持ち込みのショルダーキー
ボードを駆使し『お正月』を熱演。唯一女性陣
から空手経験のあるキヨさんのベニア板割り
（？）に続き、自分（佐藤）の番である。キヨさ
んとの共演となり、池乃めだかに負けずとも劣ら
ない熱演を繰り広げて大いに盛り上がり、フィ
ニッシュは蟹バサミで彼女を挟み撃ち！締め括
りは森野の顔面フナ盛りギャグ。さらになぜか、
マユミさんへの個別アプローチタイムをゲット
（注2）！メンバー一同『君といつまでも』のバツ
クコーラスで二人を盛り上げたのであった。

その後の告白タイムでは各自趣向を凝らして
挑戦したのだが、結果はご想像のとおり全員撃
沈である。悲しみに打ちひしがれて引き上げた

後は、薄れゆく意識のなかでツアコン青野にカ
ミバサミを見舞ったのである。

芸能界入りを断念してから四半世紀余を経た
今でも、我々は決して忘れない。

1. 司会の清水圭、桂小枝、番組構成兼カッ
プル予想解説の百田尚樹が力説していた如く、
選ばれたあの時、日本全国のモテない男たち
に多くの勇気と希望を与えた。オレたちにも
出来ることがある。
 2. 好む、好まざるとも、人生は選択の連続であ
る。自分が選択するだけでなく、他人に自分
が選択されることをも意味する。想定外のほ
うが多い。蓄積された知識と経験を総動員し
て瞬時に状況判断を行い、より良い策を選択
すべし。
 3. 良策に至るためには日々の地道な研鑽と努力
が必須である。グリーメンとして音楽を通じ
て培った不屈の魂がそれを可能にする（かも）。
 4. 常に謎に満ち溢れているオンナゴコロ。いか
に困難であっても理解することをあきらめて
はいけない。
 5. いつどこで、だれに見られているか分からな
い。自らの行動を律するべし。
- 例：「あ、佐藤君、テレビ出てたよね！意外な
一面が見れて良かったよ！！」「…orz」

後日談として：副賞の北京料理「徐園」の食
事券での反省会で、5人が何を話したかハッキ
リとは覚えていない。ただ、はじめの30秒パ
フォーマンスに力を集中したあまり、京大と近
大に勝利して女の子と合宿に行くことになろう
とは誰一人として想定しなかったこと、そのた
め「女性を楽しませ、魅力的なテレビ企画とし
て成功させる」という本質を見失っていたなど
と議論していたかもしれない。カップル成立ゼ
ロという哀しさを吹き飛ばすために、副賞の金
一封で十三の町に繰り出したことが今となって

は懐かしい。

注1：エンタメ企画とはいえ、おちゃらけではなく美しいハーモニーで彼女たちを魅了すべきであるという（いま思えば涙ぐましい）固く強い信念をもっていった。年明けに控えた65周年OB合同（第35回定演）の練習を終えた後も大阪音大の中庭に居残り『上を向いて歩こう』の

替え歌練習を重ねたうえで最終予選に臨んだ。

注2：女性陣サポートとして同行していた番組レギュラーである川口寿（カワグチトシ）曰く「森野くんのマユミさんを見る目が、ほかの人と違っていたから、セッティングしてあげたの」少ないチャンスをものにする積極的な姿勢を見せるべき場面なのに、完全に彼の目が虚ろであったのが印象的である。

思い出と思い

稲積和典（平4 C）

♪合唱始めたきっかけ

～女子先輩からのいざない～

◎楽しい高校生活を期待しつつ入学するも（久留米市の明善高校）、なぜか男子だけのクラス（男クラ）に。

◎休み時間に、先輩から、音楽部へのいざない。（可愛い女子先輩に?!）請われたら、やるしかない!⇒合唱に足を踏み入れる（高校1年）

〈背景〉

◎音楽の授業で、いきなり一人ずつ歌わされる。他の男子より少しだけまじめに歌ってみた。

◎ある昼休みに、突然、女子先輩が教室にやってくる。一緒に歌いませんか～♪と。「何っ??？」

◎高校に音楽部あり。女子先輩は音楽の先生（音楽部顧問）の回し者であった。コンクールを目指す中で、男子強化を図りたかったらしい。エキストラでいいから、と。パートはベース。

◎歌ってみると、想像以上に、面白く、気持ち良かった。合唱に、はまっていく。コン

クールのあと、正式に入部。

♪大学時代の入部

～今度は男声。先輩、同期、後輩に恵まれる～

◎男声合唱の響きに魅了され、「女子大」の中でグリーに入部。

◎実は、大学では混声に入るか迷っていたが、部活紹介の両者の演奏を聴き、グリー入部を決断。（高校時代に合唱のラジオ番組で聴いた、ある大学グリーの男声合唱の響きに感動していたことも影響。男声合唱もやってみたいという思いがあった）

◎入部初日、安良先輩（当時4年。指揮者）にどのくらいの音域が出るかテストされる。中高音も綺麗に出たらしく、セカンドに。パートのバランスも考慮?!

◎同期は、トップの戸田、岩崎、セカンドの山田、内藤、バリトンの榊原、亀井、ベースの山本、水川。面倒見の良い先輩方や後輩たちにも恵まれる。後輩の人数が年々やや減っていくことが気がかり。

◎入部するも、いままでに出会ったことがないような人が多く、当初は距離感がつかめず（笑）。

◎グリーでは表面的には冷めつつも、秘めた思

いも?! そんなグリーンメンだったような。また、表より裏舞台。部長の話もあったが、ステマネに。

♪大学グリーン時代の思い出(1)

- ◎お揃いのジャンパー、トレーナー(ちょっとダサかった。防寒機能なし)。
- ◎合宿での「布団蒸し」、「飛行機」(東京外大との愛知県での合宿で海へダイブ)。同期の脱走事件。
- ◎相撲(なぜか、安良さん、セカンドパートナーの森田さんらに時々相撲を仕掛けられた)。
- ◎合コンは消極的(今ならもっと積極的に参加?。ちょっと素敵な?! 思い出も)。
- ◎チケフレ(1年前、自宅で、当時の差し入れカードや年賀状・暑中見舞いを発掘。意外とマメに交信していたことを再認識)。
- ◎差し入れの花束
- ◎毎週火曜の練習後の餃子の王将、コンサート前のフォルクス(栄養をつける)

* コンサート前の3つの禁じ手

- ◎林先生の演奏会前の御指導(なぜ、こうも変わるものかと…ゴッドハンド)。

♪大学グリーン時代の思い出(2)

- ◎関学定演アンコールの「七つの子」に感動。ppは我が団より小さく、緊張感あり。どうして?? どうやって?? と思う。
- ◎東西四連に感激。これぞ男声合唱。大迫力! 特に、慶応ワグネルの響き・音色が好きだった。よく定演の演奏(テープ)を聞いていた。一時期、慶応に入ることも密かに夢見る。
- ◎同志社グリーンが変わっていく姿に注目。我が団も変わる! と思う。同志社グリーンファンになり、テープライブラリーに同志社グリーン演奏が加わる。小貫先生、当時学生。

♪最近、主にやっていること

- ◎OB合唱団、ジム(筋力・体力アップ)、山歩き。
- ◎OB合唱団のいいところ: 世代を超えて先輩方、またご縁のある方々と一緒に歌えること。

思い: 合唱はハーモニー。やるからには、もっとハーモニーにこだわりたい。歌っていると、小節、フレーズはドンドン過ぎ去るが、その一瞬一瞬の最高の瞬間を少しでも多く目指したい、味わいたい。このOB合唱団なら、それが実現できるかなと。(もっと、個人練習にも励みます)

グリーン 30年

戸田貴之(平4 TV)

「90年史の寄稿頼むわ」

2017年11月12日(日)、東京築地の浜離宮朝日ホールで開催された東京男声合唱フェスティバルに3団体出演した後で参加した外大グリーの打ち上げの席上で、大先輩より今回の寄稿の依頼を受けた。「勧誘はまず酔わしてから」

はグリーン90年の伝統の一つであろうと、素面になってから気付いたが、その時は「任せてください!」と8杯目くらいのワインを飲みながら返答しているわけである。

「寿司食べに行こうよ」

1988年3月下旬、大阪外大箕面キャンパスB塔前。入学手続きを終え広島県福山市の実家へ

帰ろうとしていた時、赤いトレーナーに様々な色のジャンパーを着てずっと歌い続けている奇妙な男達の集団から、上記の誘い文句で拉致されたのがグリーン生活のスタートであった。「入部の意思を表明した覚えはないが、何故か一緒に歌っている」という状況に気がついたら陥っていた。

「野菜炒めを2人組で一方が空中に放り投げてもう一方がキャッチする」という、まともな人間では考えつかないような屋台のパフォーマンスをテレビで見たのがきっかけで、「よし、この国の魅力を研究することに生涯をささげよう」と決意し入学したタイ語科であったが、「専攻はサボってもグリーンはサボってはいけない」という掟のもと、当初の決意とはちと道を間違えた学生生活が始まった。気がつくやう赤いトレーナーと紺のジャンパーが普段の服装になっていた。

「好きな先輩〇〇さん！嫌いな先輩〇〇さん！」

梅田の行きつけの大衆酒場、新入生の洗礼がこの宣誓である。呼ばれた先輩は仲良く一気に飲み。泥酔したあげく、ナビオ阪急の階段でゲリラコンサート、その勢いで道頓堀まで御堂筋を歌い歩くというのが恒例の新歓、追い出しコンパの定番であった。

「3・2・1・ゴー！」

今思えば常軌を逸した奇行こそが、当時の男声合唱団の代名詞であった。定期的に行われる合宿で必ず全員が「ふとん蒸し」という儀式のエジキになる。上記の合図によりはがいにさせられ、大部屋のふとんの中に放り込まれ、全員に上から載られるのである。何が面白くてやっていたかよく分らないが、合宿の体力づくりには有効かもなと当時は納得していた。当然21世紀の皆様にはおすすしめしない。晴れた日にはふとんを干そう。

「華麗なグリーン・ライフ」

下宿も奥4部屋グリーン、バイト紹介もグリーン、生協食堂に行くとグリーンが必ずコーヒージャンケンをしている、など24時間365日グリーン状態の大学4年間だった。偉大なる大先輩清水脩先生の名曲、「月光とピエロ」を卒業前定演のOB合同で歌えたのは印象的だった。定演の必ずラストステージで歌う外大グリーの黒人霊歌は私の最も好きなジャンルの一つ。なぜか4回の定演で4回とも演奏した男声合唱の定番タダダケ、他シー・シャンティー、ロシア民謡など様々なジャンルの演奏を行った。ただ私は英語をはじめ外国語がすごく苦手なので、外国語の歌を原語で暗譜するには大変苦労した。ジョイントコンサートもしばしば行ったので、混声合唱も意外と歌う機会があった。一年次に東京外大コールソレイユと外大女声コーラスと合同ステージで演奏した木下牧子先生の「光る？」は衝撃的な作品で苦労した思い出がある。

「そして今」

卒業後は宝くじの呼び込みをやりたかったのと子供のころロボコンが好きだったので、ハートマークの銀行に就職した。OB合同には参加したが、長いこと合唱団には所属していなかった。グリーン消滅、外大の名称消滅など残念な知らせをきいてからはショックで秋葉原のレトロゲーセンで奇声を発しながらプレイする週末が続いた。2010年にグリーの先輩から誘われて入団した「タダダケを歌う会」、その2年後これもグリーン先輩の勧誘によるセミカルテット「ハートストリングス」、転勤でタダダケこと多田武彦先生が勤務されていた銀行の方の看板部署に移ったとき勧誘されて入った会社の合唱団、その団の方からの誘いで入ったJVC合唱団と現在気がついたら5団体に所属して週3回歌っているような生活である。エヴァンゲリオン旧劇場版の宣伝で使われたという理由で今年2回も

参加したヴェルディのレクイエムも、オケ付きというジャンルに感銘を受けるきっかけとなった。

年が明けると2018年、ちょうど赤いトレーナーを見つけてから30年目になる。1月には1年生の定演で演奏したタダタケの名曲「雪明り

の路」を演奏する。30年の刻を経て再び歌えることに感謝しながら、チケットバラマキによる集客に専念したい。「30年の突端の、なんたるはげしい楽しさでせう」（草野心平、猛烈な天より）。

箕面に「外語参上」一般市民向けコンサートの取り組みを振り返る

榊原昭裕（平5K）

対外交流を活発に行っていた外大グリー。私もグリーで活動した5年間（1988～1992年）で、学内外に多くの友人を得た。グリーの演奏会には、親しく交流していた学内外の合唱団や大阪府合唱連盟に加盟する大学合唱団などの団員が多数来場していた。客席の大半が学生合唱団員で占められていることは他の大学合唱団の演奏会でも概ね同様だった。ただ学生同士ばかりで演奏会に行き合う大学合唱団の傾向には連盟関係者などから疑問の声もあった。

そんな中、1989年夏のジョイントコンサートで共演して我が団と繋がりのできた九州大学男声合唱団コールアカデミーの定演を聴きに福岡へ足を運んだ同期の水川登志雄(B2・II E28)は、その客席に多くの一般市民がいたことに感銘を受け、グリーでも一般市民向けの演奏会をしたいとの思いを部員に語るようになる。彼が部長になった1991年、同期指揮者の山田道教(T1・大IP43)と共に林誠先生のお宅へ年始の挨拶に伺った時、先生にそのことを相談した。林先生は親身に話を聞いてくださり、箕面市の後援でコンサートをしたいと語る水川に、「後援ではなく、箕面市の主催でやりなさい」との助言をくださったという。

例年夏期に行ってきたジョイントコンサート

の相手団が、この年は決まっていなかった。団で議論した結果、91年はジョイントを断念し、代わりに単独で一般市民向けのコンサートを行う方向で箕面市と交渉を進めることになった。

箕面市民に外語グリーの存在を知らしめ、男声合唱を楽しんでもらいたい、との我々の申し入れは市の担当者に好意的に受け止められ、箕面市・箕面市教育委員会・箕面市音楽協会の主催による入場無料の市民向けコンサートを、メイプルホール大ホールで9月に開催することが決まった。

コンサートの前哨戦として、グリーは6月の箕面市合唱祭に初出場。「斎太郎節」を演奏し、大きな拍手をもって歓迎された。箕面市合唱祭出場は翌年以降も継続した。市の公共機関と小中学校にチラシ1万枚以上と入場整理券が配布され、コンサートは広く告知された。団員は生協食堂などに集まって話し合いを重ね、構成や選曲を検討した。

秋晴れの9月15日。500席のメイプル大ホールに大人から子どもまで400人以上の箕面市民が来場。「平成3年度第4回箕面市民芸術劇場：男声合唱演奏会『外語参上』」と題したグリー初の市民向けコンサートが開演した。

Gaigo / Varsityに始まるプログラムは1st：秋のステージ（日本の唱歌・民謡）、2nd：旅のステージ（世界の名曲を原語で）、3rd：外語グ

リー愛唱歌集の3部構成。秋のステージでは清水脩編曲の『八木節』で和太鼓を叩くなど秋祭らしい雰囲気演出。旅のステージでは終曲で当時ニッポンナム「シャウエッセン」のCMで使われていたドイツ民謡「Trink, Trink, Brüderlein, Trink」を原語で演奏。酒場の雰囲気振り付けを施し曲の最後に全員で「乾杯！」と叫んだ。

関西の大学合唱団の演奏会の多くは影アナで曲目を紹介しているが、この演奏会では外大文連協のつながりで外大生の上野さんという女性に司会を依頼し、舞台上で曲目や団の紹介をもらった。かつての外大グリーの定演のスタイルに倣ったものである。ラストの愛唱歌ステージの前に上野さんから水川部長へのインタビューのコーナーを設けた。これが客席の爆笑を誘い、会場は一層和やかな雰囲気になった。団員一同もリラックスし、黒人霊歌4曲を含む愛唱歌8曲を元気に歌い切った。割れるような拍手がホールを包み込み、初めての市民向けコンサートは大成功のうちに終演した。こうしてグリーは箕面市民の新たなファン層を獲得したのであった。その後の演奏会には学生仲間だけでなく、一般市民も多数来場するようになった。

「…それにしても、関西に星の数ほどもある合唱団の中で、外大Gは僕にとって数少ない好きな合唱団の一つだった。それだけに、人数が減ってしまうというのは残念です。是非、何とか盛り返して欲しい、と思う」。これは私の在学中最後のステージであった第36回定演（1992年12月）に来てくれた阪大男声のチケフレ（チケットフレンドの略。詳細説明は省きます）のT君からももらったメッセージの一部である。外大グリーの歌声は学内の合唱仲間や学友に慕われ、学外の合唱ファンからも慕われた。平成時代には箕面市民にも慕われるようになった。多くのファンに支えられていることをステージで実感した。しかし部員の減少を止めることは出来なかった。

幸いにして今、東西のOB合唱団が伝統を受け継いでいる。大阪OB合唱団は2005年より箕面市合唱祭に出場するようになり、現在年間活動の一つとして定着している。合唱仲間や市民に広く親しまれる活動が続いて行くことを願っている。現役時代およびOB合唱団の活動を通じ、皆様にお世話になりました。ありがとうございました。いずれ再び皆様と共にステージに上がりたいと願っています。

90年誌発行に寄せて

下社学（平6M）

グリーという言葉は大学入学まで知りませんでした。87年4月、入学手続きのため箕面キャンパスをうろうろしていると、エンジのネクタイに紺のブレザーの方が近づいてきて、「こんにちは！グリークラブです。君、何語に受かったん？」と聞くので、「モンゴル語です」と答えると、「お、ちょっと待ってて！」と別のブレ

ザーの方がやってきます。どうやらモンゴル語の先輩らしく、どこ出身かとか、どうしてモンゴル語にしたのかとか、下宿は決まったかとか、バイク買うなら店を紹介するなど、生協前自販機のコーヒーをおごってくれて何かと世話を焼いてくれます。私はてっきり「グリーン」クラブという、何か校内の緑化運動とかボランティアをやっている人たちの集まりだと思いました。そろそろお暇しようかと思っていると、「じゃ

あ君のために一曲歌ってあげよう」と言うので、「ああ、歌も歌うんだ」と思いました。

男声合唱を通じて親しんだ正統派の西洋音楽は、青春時代の数々の甘酸っぱくもほろ苦い思い出とともにあります。ふと耳にする旋律が四半世紀以上前のワンシーンを鮮やかによみがえらせます。初めてのジョイントコンサートで歌った「学生王子」やステージには立てませんでしたでしたが覚えてしまった「ポールバンヤン」のメロディーは、思い起こすだけで涙腺が緩んできます。車を運転するときは黒人霊歌やウ・ボイなどの愛唱歌を大声で歌ったり、飲み会の帰り道、月がきれいな夜は思わず多田武彦の組曲「雪明りの路」の一曲を口ずさんで悦に入ったりもします。

なぜかOB合同には縁が薄く、残念な思いをしてきました。モンゴルへの留学（91～93年）、入社後のロシア語研修（96～97年）、ウズベキスタンへの駐在（00年～06年、14年～）と、ことごとく節目の年を逃してきました。それで

もボイストレーナーとして大変お世話になった林誠先生のご退官記念イベント「林誠祭」（14年5月）には、念願のピエロをたくさんの大先輩方と一緒に演奏でき感無量でした。

私がグリー現役の頃が、おそらく諸大学の男声合唱活動のピークだったのではないのでしょうか？シンフォニーホールだったのでしょうか、先輩に連れられて東西四連（早稲田、慶応、関学、同志社）のステージから溢れんばかりの大人数による演奏を、遠く2階席か3階席から眺めていた記憶があります。その後、わが外大グリーは言うに及ばず各大学とも人数を減らしていきましたが、実は男声合唱経験者という方は日本の社会には相当数存在しているのだと思います。年に一度くらい、例えば新橋SL前で「フライエ・クンスト」や「いざ起て戦人よ」あたりの簡単な曲を、年齢や出身校、会社の垣根を越えて肩を組んで放歌し、通行人を驚かせてみたりしても面白いのではと思っています。

大阪外大グリークラブの思い出

福田洋之（平6 A）

◎入学手続きに来てみると、学生課の掲示板に、多くのアパートや下宿が紹介されていた。初めての大阪、初めての一人暮らしである。なぜかこの時だけ母親が同行していて、土地勘もなく考えあぐねていたところに、グリークラブと名乗る先輩方が声をかけてきた。「新入生歓迎の一環として、お勧めのアパートや下宿を紹介している。もし良ければ、車でいくつか候補を案内することができる」。

◎現在なら、怪しい勧誘かと警戒するかもし

れない。しかし、20年以上前のおおらかな時代であった。また、その先輩方は人が良さそうに見えた。結局、その好意に甘えて、数件回ったなかの1件に決めることができ、母親ともども、有り難いと思った。何か文科系サークルをやっているといっていたので、入学後、一度は顔を出さなければいけないと話し合った。

◎後日、入学式終了後、会場から帰ろうとするとき先輩方にふたたび声をかけられた。「これから時間はあるか。近くに行きつけの飲み屋があり、新歓コンパのようなことをする。君と

同じ新入生も多く来るので、友人を作る機会にもなる。先輩から語科の話も聞ける。なお、費用は心配いらない」。

◎下宿紹介の義理もあるし、新入生で特に予定もなく、断る理由がなかった。今から考えれば、誰も知り合いのいない大阪で、これからの生活がどうなるのか不安だったのだと思う。近くの居酒屋のお座敷を借り切った歓迎会は、それまで受験勉強を送っていた新入生には、大人の世界で眩しかった。女性はいなかったが、たしかに友人はできた。噂どおり自分が厳しい語科に所属したこともわかった。そして、歓迎会の最後に、先輩方が立ち上がり歌い始めた。黒人霊歌を何曲か。生まれて初めて男声合唱を聞いた。グリークラブは男声合唱のサークルだった。すごい迫力。少しかっこいいと思った。しかし、音楽にさほど関心もなく、合唱は女性がするものという先

入観もあったので、いろいろ世話になったのに、自分には縁がなく役にたてない、申し訳ないと酔った頭で考えていた。

◎これが私の大阪外大グリークラブ、男声合唱との出会いである。この出会いから、私は、お酒の飲み方から勉強の仕方、人との付き合い方まで、多くのことを考え学んだような気がする。専攻語とは全く関わりないところに就職し、その勤務先の異動で、福祉・学事・財務などさまざまな業務をこなすなかで、「役にたてない、申し訳ない」と思いながらも、ほぼ毎日通っていたグリークラブこそが、ひょっとすると私の大学だったのではないかと感じるものがしばしばあった。90周年記念演奏会以来、OB合唱団にも参加させていただいているが、その思いは変わらないどころか、強まるばかりである。

外語グリーの終末期の状況を振り返る —個人的な思い出とともに—

松尾年展（平12 地域V）

1995年、管弦楽団ですでにファゴットを鳴らしはじめていた私は、様々な偶然が重なり、気がついたら外語グリーにいた。その年入部した1年生は私だけであったが、なぜか尾上剛さんという「2年生」も同じ日に入部するということだった。

入部してまず驚いたのは、団員の少なさと学年バランスの悪さだった。団員は新入部員の2名を含めても7人。それはもう合唱団というよりも「重唱団」のようだった。それでも去年に比べたら増えたのだという。

留学など、さまざまな理由で全国トップクラ

スの留年率を誇る、大阪外大ならではの話ではあるが、他の団員といえば7回生(!)が2人、4回生が1人、3回生が2人。普通の大学なら、翌年、3回生は4年生となり、卒業論文や就職活動に懸命で、練習にもなかなか来られなくなるんだろうなと思うと、心許ない感じがした。

現役グリーは最後の最後まで、人数が少ないにもかかわらず、女声コーラス部をはじめとした複数の学内合唱団との交流をきちんと保ち、関西合唱連盟大学部会にも属し、また、東京外大混声合唱団コールソレイユなどとの交流も続けていた。そのため、入学してすぐに大阪府合唱祭、大阪国際交流センターでの東西外国語大学交歓演奏会（この第7回演奏会で消滅）など

演奏すべき場面がずっと待っていた。

団内の行事もきちんと行われていた。新歓コンパには若手OBはじめ、多くの方が顔を出してくれて賑やかなものだったし、夏合宿も兵庫県の高尾高原で行った。いろいろな先輩方のお話を伺った上で、いま、自分のグリーでの生活を振り返ってみると、やってもらってないことと言えば「追い出しコンパ」とレプリカの団旗をもらってないことくらいだなと思う。

95年当時の正指揮者は南野（旧姓：松波）大介さんであるが、南野さんの寄稿がないという前提で書かせていただくと、95年以降、最後まで、現役グリーの合唱技術は極めて脆弱なものであったと言わざるを得ない。先に7名の部員と書いたが、これは常にどこかのパートが1人であることを意味している。誰かの音取りが少し甘かったり、ちょっと歌詞を忘れてたり、途中で他の人（パート）につられてしまうと、音楽が止まってしまう可能性を常に秘めていた。そうであるにもかかわらず、普段の練習からしていつも誰かが何かの用事があり、全員で練習できることの方が少なかったように思う。実際、定期演奏会以外の「正式な演奏」ですら何人か欠けてしまう状況だったのである。だから、譜読みが比較的できる団員はその時々状況に応じて、自分の声域とは関係なく空いている別のパートを歌わなければならなかった。合唱の醍醐味の一つであろう、他のメンバーと声質を揃えるなどといった練習をすることは、ほぼできなかったといってよいだろう。

現役グリーは最後までNegro Spiritualsを外語グリーの1つの伝統として歌い通した。また、95年以降の選曲の特徴として、比較的音取りやリズムが平易な曲、一般的に「有名」とされる曲、もしくは先輩方と歌ううちに自然に覚えていくような愛唱歌を多く取り上げようとしたことが挙げられる。第39回定演では少人数でも演奏が成立することを期待して、メインの曲に清

水脩（先輩）の「三つの俗歌」を選曲した（決してこの曲が易しい曲という訳ではないことを書き添えておく）。

95年の定演が終わったその日の打ち上げで、「来年は創部70周年定演だけどうしよう？」という話になった。翌年残ることのできる団員はどれも5人であった。来年、仮に1人や2人入部したとして、OB合同を含んだ演奏会を成功させられる組織としての体力も資金も現役グリーに残されているようには思えなかった。とはいえ、とりあえずは一番年下の私を中心に周囲が支える形で動いてみようということになった。

故山口慶四郎先生の後に関問になっていただいていたドイツ語の高田博行先生（グリーOB）に貸していただいた（後に、寄付金という名目でいただいた）3万円を資金にOB探し、名簿作りから始めた。結果、80名を超えるOBが参加する大演奏会になったわけであるが、それは林誠先生はもちろんのこと、多くの外語グリーメンの「想い」が成功に導いてくれたものだった。

ちなみに、現役のステージには合唱経験のない、ベトナム語科の学生数名にも練習して歌ってもらっている。

96年からは曲の途中からでも音程を取り直せるように、また、お客様にストレスを与えてしまうような演奏を避けることを目的に、出来る限りピアノ付きの曲を選ぶようにした。OB合同にあたり、当時、親身に相談に乗っていただいていた河原敬さんから紹介された、中津孝司さんに全てのピアノ付合唱曲でのピアノ演奏をお願いすることとなった。ちなみに、その年、箕面市民会館大ホールで行われた箕面市合唱祭はトリで平吉毅州の「我が里程標（マイルストーン）」を最小の4人で歌った。その直後の市民全体合唱の指揮とピアノも私と南野さんで担当した。

今だから正直に書くと、70周年定演でOB合同演奏された清水脩の「月光とピエロ」は、大

阪音楽大学で行われた前日リハーサルの音（林先生指導）が私が外語グリーにいて一番いい音だったと思う。あの音は生涯、忘れることができない。あの日、私は遅れてくる先輩方を案内するために練習室のドアを開けたままで、廊下でずっと立って待っていたのだった。1曲目「月夜」の出だしを聞いた瞬間、その音のすばらしさに涙が止まらなくなった。外大グリーにもし「外語サウンド」なるものがあるとすれば、私はあの時の音はその1つにあたると思う。本番の演奏は数割の方が前日リハーサルなしで直接ステージに乗り（出演者名簿に記載のないOBの方も歌っている）、反響板などの音響設備もかなり特殊な会場だったため「一発勝負」的な演奏になった。しかし、それは私達現役が「できる限り会場に来たOBはステージに立ってほしい」と頼み回ったせいであった。そして、そうなることをご理解いただいた上で林先生に指揮を振っていただいていた。

96年になってから私たちは、積極的な団員勧誘活動をしなかった。指揮者である私が遠くない将来に留学を予定しており、先輩が1人もいないかもしれないのに新入生を入れるだけ入れるのは「厳しい」という判断をしたからである。それよりも、万一グリーが復活した時にバックアップをしてくれるかもしれない東京・大阪のOB合唱団の2拠点体制を構築してもらうようOB諸兄に促していくことの方に「未来」があ

るのではないかと考えたのである。

97年の第41回定演ではとうとう現役が2名になった（この定演のすぐ後に私はサイゴンへ留学する）。97年は練習も含め、すべての活動を現役だけで自立してできる状態ではなくなった。ただ、団には40万円ほど70周年定演の寄付金がプールされていた。私たちは林先生のご協力をなおも仰いで、すべての曲をOBと合同で演奏することで第41回定演を強行した。廣瀬量平の「海鳥の歌」などの演奏をした。

私は、最近まで70年以上諸先輩が連綿と継いできた「現役学生でグリーを運営する」という道を次世代に渡せなかったことを申し訳なく思い続けてきた。しかし、母校が大阪大学に統合された後も、こうして「大阪外国語大学」という名前を掲げながら、OB間のつながりを「音楽」で残していただいているのを見ると、私は最後の指揮者、団員として、最低限するべきことはできていたのかなと思い始めている。

追記：70周年定演当日、私は忙しく会場中を駆け回っていたが、林先生に現役がするお礼だけでは申し訳ないといって、通路で諸先輩方が「現役とは別にお礼しよう」と相談している姿があったのを私は覚えている。これはほんの一例だが、グリーに携わる人々はみんなこんな調子でグリーを愛している。私はいまでも全ての「外語グリーメン」に憧れて生きている。

外部の方々からの寄稿

グリー OB以外の皆様からも本記念誌のために多数のご寄稿をいただきました。
大部分はテーマにしたがってそれぞれの該当箇所へ掲載させていただきましたが、
ここにはそれ以外の4編を掲載します



大阪外国語大学グリークラブへのメッセージ

西田達雄（昭35 IN）

「世界をこめし戦雲ようやくはれて…」大阪外国語大学歌をバックに、我ら大学第8回卒業生は1960年（昭和35年）3月上・八校舎（所在：大阪市天王寺区上本町八丁目）を後にして、各々の道に進んだ。小生は当時として見ず知らずの「貿易商社業界」（住友商事）に身を任せた。

今も鮮明に記憶に残るは、1956年（昭和31年）4月に入学し、学んだのは、高槻市に在った草叢に立つ古朶けた旧日本軍兵舎そのままに我らの“学びの窓”での一年間でした。その間小生は京都・丹波の山奥から当時の国鉄山陰線で園部駅から京都駅経由高槻の兵舎迄往復4時間費やしての通学でした。

極めて多忙な商社マン生活が、インドネシアでの数回の駐在計14年間を含め、トータル42年余続いたが、その間テレビ・ラジオで、その時代を象徴する「流行歌」や日本でもよく知られたインドネシアの「ブンガワン・ソロ」などを聞く程度であった。

大阪外国語大学グリークラブの長い輝かしい歴史にも拘わらず、小生が同クラブの演奏会に初めて出掛けたのは、そんなに古いことではなく、10数年前であったと思う。会社生活は2002年（平成14年）6月に終了し、公私に多少時間的余裕も生まれ、大学同窓の知り合いに

多くのグリークラブメンバーがその名を連られておられ、いずれ劣らぬ美声を披露されるなど、小生にとり到底及ばぬ憧れの面々でした。メンバーの歳を忘れさせる男声コーラスの迫力に圧倒させられ、目には見えないが感性に訴える「音」の魅力を強く感じておりました。

2007年（平成19年）10月には、我が母校は大阪大学に統合され、「大阪外国語大学」その名は長い歴史から消えてしまいました。しかし同窓会組織「咲耶会」は国内外で活発な活動を継続・展開しており、小生はその一個人会員として、全く勝手に解して、このグリークラブ活動も本拠地を無くした同窓会活動の一端と捉えて、関東でのグリークラブ演奏会公演には同窓生・大阪大学OBやその周辺の方々に大いに楽しんでいただこうと、併せて、同窓生には大阪外国語大学時代を思い起こしてもらおうと、大阪大学OBには歴史ある「グリークラブ」の存在・活動を知ってもらおうと考え、皆様に公演会場へ足を運んでいただけるようにと積極的に呼掛けをして参りました。

最後に、グリークラブメンバーにおかれては、同窓生も多く在住し、同窓会活動も活発な「関東AREA」において、この歴史ある輝かしい演奏会の発表を是非今後も重ねて欲しいと心から願って、この拙稿を発信させていただきます。

少徳敬雄（昭38 E）

大阪大学・大阪外国語大学同窓会
“咲耶会”会長

私と大阪外大グリークラブとは、いろいろとご縁があります。

昭和34年（1959）入学した当時は、上本町八丁目のキャンパスでした。

グリークラブがまとまって演奏する場所がなく、学生食堂がその目的のために使用されたことがありました。ある時、どういう折だったか覚えておりませんが、4人の男性グループが仮のステージで歌い始めました。その中で一つだけ大変記憶に残る曲がありました。正確な曲名は不詳ですが、確か”Oh the bulldog on the bank and the bullfrog in the pool”で始まる曲だったと記憶しております。この曲はやさしく、二人でハモリながら歌うのに適していたせいも、家内と二人で時々ハモリ、下手でもハーモニーになっていると自信をもちました。

或る時、私が顧問をしておりましたパナソニック合唱団の余興で臆面もなく歌い、並み居る90名近いメンバーから拍手喝采をうけ、気をよくしたものでした。

後で知ったことですが、この4人のコーラスメンバーの中に大阪外大グリークラブ元代表の村主寧民氏（D11）がおられ、奇遇にも同じ企

業グループに勤務されていることがわかり、それがご縁で大阪外大グリークラブとの交流がはじまりました。村主さんが第一のご縁です。

これを機会に咲耶会との交流も始まり、創部85周年コンサート（神戸）、88年米寿コンサート、創部90周年コンサートにお招きいただき演奏を楽しませていただきました。

もう一つのご縁は、大阪外国語大学創立90周年のお祝いの時でした。

平成24年（2012）は大阪外国語大学が創立90周年に当たる年でした。

2007年10月大阪大学と大阪外国語大学が統合されました。統合後大阪大学が創立80周年の記念行事を盛大に挙行了したこともあり、大阪外国語大学創立90周年のお祝いの行事を実施するには困難がありました。そんな折、思い付いたのは、80有余年の輝かしい伝統をもち、日本の“男声合唱の父”と尊敬されておられた清水脩先輩のDNAをしっかりと引き継いでおられる大阪外国語大学グリークラブOB会にお願いし、90周年記念行事として大阪外国語大学“学歌”をCD化していただき“学歌”を末永くOB、OGの心に残すことでした。グリークラブにお願いしたところ、快諾していただき“学歌”のCD化が実現しました。このご縁は今でも感謝の念をもって思い起こしております。

庵原専三（昭38 S）

学生時代から「歌」と言えば、「演歌」しか頭に浮かんで来なかった小生が、「記念誌」に拙文を寄せることを、先ずもってお許し頂きたいと存じます。

昭和38年イスパニア語卒業生（52名）の中、当時5名がメンバーで活躍しており、揃いの楽譜フォルダーを手を持って教室に入って来る姿は、眩しく映ったものでした。

その後、時移りお互い連絡を取りつつも、会社生活を卒業し年齢を重ねて、自由生活を楽しんでいた数年前に、同期の畏友・新出武雄兄（記念誌編集委員）から神戸でのグリークラブ記念演奏会へのお誘いメールを受取りました。

実は、同兄（当時・旧東京銀行勤務）には南米出張時にはペルー・リマで、またアルゼンチン・ブエノスアイレスでも、真に心温まるアテンドを受けたにも拘らず、商事会社勤務の小生駐在地のブラジル・サンパウロ（前後2回・通算10年在勤）他でのお返しが出来ぬまま、定年退職に至りました。

斯様な次第で、同兄には南米での気持ちの上での借りもあり、同じ生駒に在住する同期の友人と誘い合わせて、初めて演奏会に行きました。

会場は大入り満員で、幕が上がるや、初めて聞く生の男声コーラスの迫力！ハーモニーの素

晴らしさに衝撃を受けました。

いやー、スッカリ魅入られました。また、小生と略同年齢前後のグリーメンバーの皆さんの声のハリ・ツヤそして元気一杯で歌う立姿に感動しました。そして聴いているこちら側にも大いに元気を貰いました。

同期メンバーの三神兄は仙台より、小笠原兄は名古屋からの参加で、嬉しいことでした。

それ以後、大阪での2回の記念公演にも行き、都度感激を新たにしましたが、特に昨年11月開催の創部90周年記念演奏会は、懐かしの上本町八丁目校舎跡に出来た大阪国際交流センターで開催され、大盛会でありました。演目の中では、黒人霊歌は心に沁み、「歴代指揮者メドレー・世界の愛唱歌」は耳に馴染みやすく、「柳河風俗詩」はローカル色が出て楽しく、最後のお馴染み「月光とピエロ」全5曲は圧巻でした。

会場の内外では、演奏の前後に其処此処で、卒業生や家族・知り合いの輪が広がり、和気藹々、宛ら同窓会総会の体でもありました。

メンバーの方々も、年齢を重ねられては行きますが、今後共益々お元気で、創部95周年更には100周年を超えて、活動を継続されんことを心より念じ上げる次第です。それが我々にも活力を与えるメッセージにもなることでしょう。「大阪外大グリークラブ」に栄光あれ！

藤井眞澄（昭53 IN）

私が高校に入学した昭和44年に、大阪外大卒の新任の安藤雅之先生（昭44 E）が英語教師として赴任され、1、2学年時に大阪弁や独特の言い回しで楽しく英語の授業をしていただき、先生が大好きになり、その影響で私も外大と英語教師を目指すようになりました。

外大のグリークラブの指揮者をやってみえたことから、私の高校にグリークラブを呼んでいただき、演奏会を開催していただきました。

数年後外大インドネシア語科に入学できたときには、欠かさずグリーの演奏会を聞きに行きました。そして、偶然にも私の高校に演奏に来ていただいたロシア語科の先輩に巡り合うことができました。

その当時私の高校に来るには名古屋から名鉄

電車を利用するわけですが、昭和40年代の電車は、駅に到着すると乗客自らがドアのロックを開け閉めする構造でした。ですので、ドアが開くまで待っていると電車は発車してしまうのでした。先輩はそんな電車が走っていることにびっくりしたと当時のことを聞かされました。

私の人生に強い影響を与えていただいた安藤先生が2、3年前の『咲耶』の物故者欄にお名前を見つけた時には本当にびっくり致しました。高校を卒業して数年してからは音信が途絶えていましたが、今はただ冥福を祈るばかりです。

現在では現役のグリークラブはなくなってしまったようで、非常に残念ですが、機会があればぜひもう一度外大グリークラブの演奏 ♪ Gaigo will shine tonight～♪（？）を聞いてみたいと思っています。

第4章

偉大な先輩
清水脩



清水 脩

～外語グリークラブ第5代指揮者～

略歴

1911年(明治44)11月4日大阪市天王寺区の浄土真宗大谷派「佛足寺」に生まれ7歳で得度、1986年(昭和61)10月29日逝去(享年74歳)。八尾中学を経て大阪外国語学校仏語部に入学。外語卒業後は阪大附属病院で3年間事務員を勤めた後、“一念発起して”東京音楽学校(現・東京芸大)選科作曲部に入学、橋本國彦、細川碧らに作曲理論を学ぶ。400曲以上にのぼる作品は、合唱曲に始まり歌曲、オペラ、仏教曲、邦楽、舞踊曲、管弦楽曲など極めて多彩で、我が国屈指の作曲家のひとりに位置付けられている。また多くの男声合唱曲の作曲と合唱活動への貢献により、「日本の合唱の父」として称賛されている。

音楽とのかかわり

父親(清水月嘯)が四天王寺舞楽の楽人を勤めていた関係で、幼少時には稚児舞を踊ったこともあったという。小学6年生の時、担任の先生が中之島の中央公会堂で開かれた日露交歓演奏会に連れていってくれて、ハルピン交響楽団の、当時まだ珍しかったナマ演奏を聞いたのが、音楽にのめりこむきっかけとなった。

大阪外語在学中はグリークラブで活躍、3年生の時に指揮者を務めた。先輩から指揮者を任すと言われた時は、自分では絶対になると心に決めていた事なので、さほど嬉しくもなかったが、実際になった時は興奮したようだ。所属はバリトンであったが本来はバスで、後年D2まで楽に出して見せたという。

東京音楽学校には東本願寺の内地留学生として派遣されたのだが、この時はまだ音楽評論家を目指していたとのこと。しかし、在学中の1939年(昭和14)、第8回音楽コンクール作曲部門で管弦楽曲「花に寄せたる舞踏組曲」が第一位を獲得している。

戦後の活躍

音楽関係の出版業には戦前から関わっていた。設立間もない音楽之友社に1943年（昭和18）入社、雑誌『音楽の友』編集の中核を果たした。戦後はカワイ楽譜社を設立し社長を務めた。

戦後すぐに全日本合唱連盟の創設（1946年）に参画し、後に理事長に就任。また東京都合唱連盟理事長、日本合唱協会代表、文化庁オペラ歌手養成事業委員会座長、第二国立劇場設立準備委員会音楽部会長、聖徳学園短大教授など、多方面で活躍をしている。

1948年、戦後初めて創設された社会人集団の男声合唱団である東京男声合唱団の初代指揮者に就任。男声合唱組曲「月光とピエロ」は作曲者自身の指揮で東京男声合唱団によって初演された。

生涯を通じて多数の翻訳・訳詩があるが、訳詩では龍田和夫のペンネームを使った。

受賞歴

第一回芸術選奨（1951年）、芸術祭管弦楽曲部門第一回尾高賞（1953年）、毎日音楽祭賞、舞踊ペンクラブ賞、紫綬褒章（1975年）、勲四等旭日小綬章（1982年）等。

（前田美子（名古屋音楽大学）「仏教音楽と作曲家 清水脩」、Wikipedia、各種団体演奏会プログラム、等より作成）

外大グリーと清水先輩

清水先輩は戦前、後輩グリーの指導にたびたび訪れ、演奏会でタクトを振ることもあったようだが、戦後は東京に移住していた関係もあって、そのようなチャンスにはあまり恵まれなかった。

ただ、1966年の東西外語交歓演奏会、及び1976年12月の創部50年記念第20回定期演奏会では「月光とピエロ」を客演指揮している。また、「大阪の子守唄」を同定演のアンコール用としてグリーのために男声合唱に編曲、自身が演奏を指揮した。



第20回定期演奏会（客演指揮者：清水脩）

清水先輩は外語グリーの定期演奏会に多くのメッセージをお送りいただいているが、本誌には、第20回定期演奏会プログラムに掲載されたものを転載する。また、清水先輩の訾咳に接した方々の思い出を次ページ以降に掲げる。

清水先輩からグリーへのメッセージ

外語グリーと私

当時を思い返してみると、フランス語部へはいるのが目的か、グリークラブへはいるのが目的か明らかでない。今日までの四十数年の歩みからすると、どうやらグリークラブは私の外語生活のすべてであったようだ。もっとも、フランス語を学んだことで、西洋音楽の果てしない森に足を踏み入れて、さほど迷わずにすんだともいえる。いずれにしても、私の生涯の方向を決定したのはグリークラブの三年間であった。

その間、多くの先輩、友人、そして尊敬するいく人かの音楽家から、合唱の原理ともいべきものを学んだ。中でも、和田、民秋の両先輩からは手とり足とり男声合唱の魅力を私にさとらせて下さった。そして私を作曲家にした根底的な原動力は、長井斉先生の存在であった。直接間接に、長井先生からうけたほどの感化を誰からもうけなかった。

私という音楽家の小さな合唱の歴史の培養素として常に外語グリーの三年間があったとすれば、グリー50周年演奏会の今夜は、外語グリーにとって記念すべき日であるのは勿論ながら、私にとっても忘れえぬ夜となるであろうと思う。

今夜、外語グリーの歴史をつづる多くの人たちが一堂にあつまり、外語グリーを愛して下さるかたがたとともに、男声合唱を満喫することができる。その喜びは何ものにもたえようがない。

心ゆくばかり、歌い抜き、次の50年への歩みを踏み出し、百年目へ向かってうたい続けようではないか。私にはその日をむかえる可能性はないであろうが、外語グリーメンの一人として、その時に書かれるであろう百年史に名だけでも留めておかれるのを切にのぞんでいる。

2016年11月開催の外大グリー創部90周年記念演奏会にあたり、多田武彦氏からグリーに温かいメッセージをいただいている。その中で、多田氏のご自分が師と仰ぐ清水脩氏とのエピソードについて多く語られている。多田氏からのメッセージについては、第1章歴史 OB合唱団の時代（56ページ）をお読みいただきたい。

外大グリーの中での清水脩君

佐々木忠次郎（昭7 S）

清水君と私が外語グリークラブに入部したのは昭和5、6年のグリー華やかなりし創始時代の頃であった。その当時合唱の指揮をしていたのは民秋重太郎（昭4 1P）で外語グリーの創始者の一人であった。民秋氏以後指揮者が何人か変わったが、その中でも異色の道を進んだ日本合唱連盟の大御所であった清水脩君も指揮者の一人であった。

外語グリーの演奏法はハーモニーが安定して

美しいことを特色としていたが、清水君はどちらかといえばフランスの作曲家ドビュシイの印象主義と十二半音主義を日本の雅楽の系統を引く日本音階に同化させたような音楽を創造した点で、外語グリーの指揮者の中でも異色的な存在であった。民秋氏の選曲した“Manner Chor”集やドボルザークの“Going Home”などと比べて、清水君の「月光とピエロ」「秋のピエロ」「ピエロの嘆き」などは創造的であり、又日本的であるといつてよい。（1987.1.11創部60周年記念、清水脩追悼、第30回定期演奏会プログラムより）

追悼 清水脩先輩

増森邁（昭31 D）

「かなしからずやーの、この5拍、私は私の好きな丈のばします。ここの長さは、5/4拍分ではなくちゃいけない訳ではない。近頃の若い人はよく、7/4とか8分の幾らとか難しいことを書くが、あれは余り好きじゃないので、この様に書いてあります。まあ私の書いた曲だから、どうのぼそうと何処からも苦情を云われる筋合いはないが…（笑）」。

次のフレーズ“みはピエロ”の歌いだしを、我々はアインザッツに依ったのか、自然に歌いだしたのか、意識の上に止まるものはなかった。先輩の呼吸が我々の呼吸だった。

僅かな棒の振幅に、驚くほどffがひき出され

ていた。背骨が痛かった。

Legato、ピエロのlegato、男のlegato、私は涙にならぬ涙を滂沱と流し続けていた。

「今日は自分の曲と演奏に感動しました。こんなことは私の経験でも滅多にあることではない。後輩諸君との強い絆を、ひしひしと感じています」。

「オーッ！ グリーから記念品を貰うなんて全く初めてのことだぞ——有難う、有難う！」

先輩！ 清水先輩！ 30年にも是非とお願いしましたら、「オーッ！ やらう！」と承知して下さったではありませんか——合掌。（1987.1.11創部60周年記念、清水脩追悼、第30回定期演奏会プログラムより）

大崎直忠（昭33 E）

「ピエロ」の演奏に先立ち、杉並の清水脩先生のお宅にお邪魔してご意見を伺おうとしまし

たが、作曲家は曲を作るだけ、曲を生かすも殺すも演奏家次第、と言われて妙に納得して帰ってきた思い出があります。

清水脩先輩との出会い そして「月光とピエロへ」

石田康雄（昭42 IP）

1966年（昭和41年）春、恒例の演奏旅行は岐阜・静岡・東京の三か所で開催しました。

一番の問題はいかにしてチケットを売るかでした。そこで、単独での演奏会は無理なので、賛助出演あるいはジョイント・コンサートにすることでした。東京演奏会も例外ではありません。

私事で恐縮ですが、東京外大の大学院へ志望していたので上京し、その時東京外大男声合唱団のマネージャー前田さん（？）と親しくなり、色々話しをしていると、東京外大男声合唱団もちょうど「月光とピエロ」を練習しているとの事でした。そこでジョイント・コンサートを申し入れると話がトントン拍子に進展しました。

問題は指揮を誰にするかでした。そこで彼と、

大先輩であり合唱界の大御所である清水脩氏に、ことわられてもいいからたのみに行こうということになり、コンタクトをとると会ってくださるとの事でした。

にわか勉強をして「修禅寺物語」の話で切り出すと先生は大いに話に乗ってくださり、「山に祈る」や「月光とピエロ」の話で大いに盛り上がりました。そして本題の「月光とピエロ」の客演指揮をお願いすると、後輩のためならと喜んで引き受けてくださいました。

当日、東京文化会館の小ホールで、私たちの時に初めて作ったグレーのブレザーにえんじのネクタイをしめた我々大阪外国語大学グリーンメンは、晴れがましく感激のひと時でした。

懇親会で先生は、合唱団ひしめく東京でよく頑張ったね、とほめてくださいました。

清水脩先生の思い出

樽井一仁（昭50 R）

昭和48年の夏休みにヴォイストレーナーを雇う費用を捻出するために、東京のOB廻りを初めて実施しました。手ぶらで訪問する訳にも

いかず、代々副部長に手渡された大学ノートに手書きで書かれた「OB名簿」をガリ版で刷り持参することにしました。この「OB名簿」を改定するのに1カ月の時間と電話代約1万円を要しました。

高校同期の友人の下宿に寝泊まりし、1週間で二十数名のOBを訪問しました。清水先生の西荻窪の自宅に電話し、「大阪外大グリークラブ副部長の樽井です。東京のOB訪問に来ました」と告げたところ「おー、大阪からよく来た。明日の夜、杉並公会堂で僕の曲の練習を聴きに行くことになっているので、君も来いよ」と言われました。

翌日の夜、杉並公会堂へ行くと入口で一橋大学グリークラブの渉外マネージャーから「樽井、何しに来たんだ」と声を掛けられたので、練習していたのは一橋大学と他大学のグリークラブと思います。練習曲は「月光とピエロ」ではなかった（私の兄が神戸大学グリークラブの渉外マネージャーをしていた関係で、5月に一橋の

マネージャーが自宅に泊まり一緒に酒を飲んだことがあった）。

清水先生は客席の真ん中で腕を組んで練習を聞いておられました。私が挨拶すると、矢継ぎ早に質問が飛んできました。まずは、外大グリークラブです。部員数、練習日・練習時間・練習場所、演奏曲目等々。次いで、関学・同志社グリー等、関西の男声合唱団の状況でした。関学グリーがパフォーマンス付きでビートルズ・ナンバーを歌ったと言ったところ、「おー、そうか」と目を丸くしておられたのが印象的でした。練習に対して、注意や指示は一切出されませんでした。

約1時間の一方的な質問の後で、寄付金を1万円頂き杉並公会堂の前で別れました。

清水脩先生のこと

伴治美（昭52 E）

数年前、六本木の鳥居坂にある某女子大の生涯学習講座に通った。キャンパスの向かいにある国際文化会館のレストランで緑溢れる庭を見下ろした途端、40年ほど前の記憶が鮮明に蘇った。この場所で、外語グリー創部50周年記念演奏会の客演指揮をお願いした清水脩先生にお目にかかったのだ。

先生に「月光とピエロ」の客演指揮をお願いすることは、上田哲也さん（昭和51年 ロシア語 T1）他の諸先輩のご尽力で既にご内諾を頂いていた。詳細の打ち合わせと、他の在京OB訪問（寄付のお願い）を兼ねて、北海道出身の私なら帰省の途中で旅費が浮くと指名されたのだ。

外語グリー入部前はほとんど合唱経験を持たず、上六の「気晴らし」「赤ふんどし」辺りで先輩方に酒色ならぬ酒食のもてなしを受け

て、フラフラと入部した私は、「月光とピエロ」はもちろん、清水先生のお名前すら知らない不良部員だった。先輩に先生のお顔を存じ上げない旨伝えたところ、「大丈夫だ、すぐわかるよ。野太いお声で、迫力ある、吸い込まれるようなお顔だ」と言われて、送り出された。

約束の当日は先生が出版社と打ち合わせがあるとのことで、鳥居坂の国際文化会館を指定された。レストランに入るなり、なるほど先輩の言うとおり、吸い込まれそうな迫力を感じさせるお顔立ちだから、どの方かすぐわかった。関連の打ち合わせを終えてから、当時の部の予算に余裕がなく、客演指揮の謝礼も名ばかりの額でお願いしたいと、おずおず切り出したところ、「そんなことは気にするな」と野太い声で快諾いただき、おまけに先生のご発案で、そのまま全額を御寄付として頂いた。ほっと安心して、やっと国際文化会館の素晴らしい緑が目に入った（この庭は明治の

作庭家、小川治兵衛が岩崎小弥太の依頼で手掛けた名園だと言うことを最近知った)。

席を立とうとすると、先生が「アンコールにやって欲しい曲を後で郵送する。今回用に編曲した」と言われ、特に思い入れが深い作品だ、と言う主旨のことを付け加えられた。

後日送られてきた「大阪の子守唄」を記念演奏会のアンコールで歌った。「ねんや ころいち、天満の市で…」。天満、木津、難波と大阪の地名をプロムナードのように巡り、ユラユラとたゆたう様な子守唄だった。東京でのご活躍が長い先生だったが、どこか心の中に故郷大阪の風景が、たゆたうように広がっていたのではと当時の私は勝手に想像してみたりした。

本番の「ピエロ」のゲネプロでは、作曲者本人ならではのご指導を頂いた。「ここのバスはチェロの弓をゆったりと引くように、たっぷりと歌ってくれ」などと、短い時間ながら適確なご指導で、外語グリーメンバーにとっては心に残るステージとなった。

私も文字通り馬齢を重ねて、鳥居坂でお会い

した頃の先生と同じような歳になった。昨年の90周年記念演奏会(東京)は、7年前の大病の影響で参画できず、客席から「ピエロ」を聞いた。戦後すぐにこの曲が誕生したとは思えない、時代を超えた名曲だと感じた。また、音楽界の大御所だった先生とは比較しようもないが、「身過ぎ世過ぎの是非もなく」生きてきたのは、誰しも同じ様な気がする。晩年の心象風景として先生に故郷大阪があったように、我々にも外語グリーの思い出がある。母校も現役のクラブも無くなってしまったが、外語グリーの思い出は何時までも心に染みついている。

数年前、上六界限を訪ねてみた。闇市の名残のような路地の入り組んだ飲み屋街はとうの昔に建て変わり、雑居ビルになっていた。その地下に、100円水割り(それも蛇口から直接注ぐ文字通りの?水割り)で有名だったニッカバー弥栄のご子孫がやっておられる喫茶店弥栄があった。往事を思い出しながらコーヒーを飲んだ。南海飯店の餃子は相変わらず大きかった。私の上六の心象風景は、いまでも酒食がらみである。

清水先生と恩徳讃

圓山望(昭57 IP)

浄土真宗本願寺派高岡教区氷見組法順寺住職として自慢できることは何もないが、外大グリーOBとして自慢できることはただひとつ、自分ほど清水先生作曲の歌を唱ったものはいないということである。法座の“しめ”は、真宗寺院では世話役の「それでは皆さん御一緒に恩徳讃を」という声に続いて皆が、

如来大悲の恩徳は
身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も

骨を砕きても謝すべし

と、親鸞聖人の和讃に清水先生が曲をつけた仏教讃歌を唱い、合掌礼拝をもって終わるということになっているからである。大学2年の夏に得度して以来40年、すくなく見つもっても年100回は♪,,,如来大悲の,,,♪と歌っている。そうすれば四千回以上歌っているということになる。坊主の間なら「そんなことあたり前や、まだすくないわ」と言われることだが、グリーOBの諸氏にはちょっと“ドヤ顔”で言ってもいいか

なと思っている。清水先生が昭和25年に作曲される前に、澤康雄さんという本願寺派のハワイ開教使（師ではないのです）をされた方も恩徳讃を作曲されている。業界では澤さん作曲のものを旧譜、清水先生作曲のものを新譜とよびならわしている。澤さんが東京音楽学校でまさに机を並べて共に学んだのが、信時潔（「海ゆかば」の作曲者）であった。日本語を解せない人たちが聞くと旧譜の恩徳讃と「海ゆかば」に共通する短調のメロディを強く感ずるのである。

昭和20年8月15日「世界をこめし戦雲ようやく晴れ」た後日本を統治したのはGHQであった。そのGHQの中に、日本を育てて反共の防波堤としようとする一派と、日本憎しの中で占領政策を続けようとした一派があったことは松本清張の著作などでよく紹介されているところである。さてその日本憎し一派が本願寺の報恩講（浄土真宗で最も大切な宗教行事）にのりこんで来て、満堂の参詣の旧譜の恩徳讃を耳にした。本願寺の執行部とGHQ高官の間に以下のような問答が展開されたことは想像にかたくない。

G：本願寺は平和的な教団だと言うがとんでもない

本：どうしてそのようなことを言うのか

G：一番大切な行事に「海ゆかば」を歌っているのがその証拠ではないか

本：あれは「海ゆかば」ではない。恩徳讃という宗祖親鸞聖人の作られた如来様の恩に感謝する歌なのだ

G：オレらには、同じに聞こえるヤンキー、つべこべ言う門主も戦犯でひっくるわ

本：……………

『昭和25年新譜恩徳讃』 真宗教団（特に西本願寺）の委嘱によって長調の恩徳讃が生まれたわけである。学生時代一度だけ清水先生にお会いして真宗寺院のへっぽこあとつぎで恩徳讃を歌っていますと申し上げたら、清水先生は「そうか…あの頃は進駐軍がなあ」と一瞬遠くを見つめられた。四十年近く前のことだがその時は緊張していたのでなぜ進駐軍が関係あるのかなどと気にもとめなかったが、自分なりに歴史を検証してみると、戦後史の断面を見せられた。

これから何百回何千回恩徳讃を唱うかわからないが、業界では少数派のさらにマイノリティーの大阪外大卒の住職として、親鸞という人のメッセージに清水先生の願いが込められた「平和の旗」をたてるつもりでしっかりとうたっていきたい。

本項目作成に当たり、清水脩氏の甥であられる清水眞一氏、元東京男声合唱団常任指揮者の坂水昶之氏、お二人からご寄稿いただいている。厚くお礼を申し上げ、以下に掲載させていただく。（編集委員会）

叔父 清水脩の思いで

佛足寺住職 清水眞一

私は大阪天王寺の真宗大谷派・佛足寺住職、清水眞一と申します。所在地の北河堀町は聖徳天皇が四天王寺を建立された時、建築用の金物

を鑄造するために鑪（たたら）を踏んだ地でありました。そのために当寺の正式名は鑪山佛足寺と申します。

1911年（明治44年）11月4日その佛足寺に男の子が誕生しました。父親（私の祖父）は、す

でに女の子が二人、男の子が一人いましたので、ここで収めておこうと脩と名付けました。幼少時代は漠然と将来は僧侶になるものと思っていたようですが、大変悪戯っ子だったようで、友達と境内の柿の木に登って柿を食べていたそうです。

小学校卒業間近の時、担任の先生が脩氏の音楽素質に気付かれたのでしょうか、中央公会堂で開かれた、日露交歓大演奏会に連れていって下さったそうです。脩氏は「強烈な印象を受け、私の進む方向を決定づけたと信じている」と言っておられます。

その後八尾中学を経て、大阪外語仏語部に入学されました。すぐに剣道部とグリークラブへ入部。体が丈夫ではなかったので、剣道部はすぐに辞め、グリークラブに専念、楽譜係のあと指揮者となりました。当時の外語グリークラブは、関西学院、同志社に次いで有名な合唱団だったそうです。練習は毎日昼休みと、週三回放課後で、メンバーは二十数名。後に大阪コーラルソサエティに加入。合唱団として華々しい

活躍だったようです。この経験が、合唱・オペラ作曲家清水脩の原点であると思います。

卒業後、役人生活を経て、東本願寺の内地留学で東京音楽学校選科作曲部に入学されました。橋本国彦先生のもと作曲を学び、本格的な作曲生活に入られました。代表作「月光とピエロ」について脩氏の夫人・公子さんは「主人はピエロの化身ではと思います。ピエロの流した涙は主人の涙ではなかったのか。私はピエロの涙を噛み締めて聞くようになりました」と書き残しておられます。私もこの曲を聞くたびに、胸が熱くなります。

もう一つ記憶に残っているのは、オペラ「修禅寺物語」の事です。昭和29年11月大阪朝日会館で初演されました。私は母と並んで聞きましたが、こんなすばらしいオペラを私の叔父が作曲したことにすごく感激しました。

脩氏がもし存命なら、グリークラブ90周年と聞けば大いに喜んだと思います。今後のグリークラブ合唱団のご活躍を念じます。

大阪外語大学グリークラブ創立90周年まことにおめでとうございます

元 東京男声合唱団 常任指揮 坂水昶之

わたくしも子供の時から合唱をやってまいりまして、高校時代に初めて男声合唱というものの洗礼を受け、それ以来男声合唱から離れたことはありませんが、それでも60年そここのことですから遠く及びませぬ。清水脩氏が東京男声合唱団の第一代目の指揮者に就任されたのが1948年ですから東京男声合唱団は今年で創立70年目を迎えたにすぎません。大阪外語大学さんの「グリークラブ」の創立がいかに早い時期か判ります。

清水さんはそのグリークラブの5代目の指揮

者であられたと伺いました。誠に日本の男声合唱の草分けのおひとりなのですね。

戦後まもなくお茶の水のニコライ堂の聖歌隊の男性の歌い手たちが集まって男声合唱を歌い始めました。この団体がコール・ベリョーザと呼ばれていた男声合唱団で秋山日出夫先生がその指導に当たられておりました。ロシア正教聖歌やロシア歌曲が主でした。合唱コンクールの課題曲本選会で男声合唱候補曲を全曲演奏した中に「秋のピエロ」があり、この時初めてベリョーザは作曲者の清水さんと出会ったのです。

それは運命の出会いでした！ そして間もなく、団名を「東京男声合唱団」と改称し、清水

さんが第一代目の常任指揮者に就任されました。それからこの団が日本の合唱の歴史に残した足跡はいくら紙面があっても書ききれません。

先輩たちの話によりますと「秋ピエ」以外の曲は清水さんが一曲ずつ、出来上がるたびに東京男声の練習場に持ち込まれ、それをみんなでワイワイ歌いながら組曲としての大成を見たものということです。「ここは歌いにくいからこうしたら？」というような大胆な意見を言う団員にもおだやかに作曲意図を説明されたと聞きました。歌手と作曲者はこのころ全く同年代の青年同士だったのです。そして組曲としての「ピエロ」がご自身の指揮、東京男声の演奏で初演されたのです。これが不朽の名曲「ピエロ」の誕生です。

もう一つ先輩方から聞き及んだ話をご披露しましょう。合唱コンクールに出演して重厚な男

声合唱を聞いた合唱マンたちから大量の入団申し込みがあり、合唱団員は一時120名に達する勢いとなりました。ところが毎週の練習日には半分しか人が集まらず、しかも毎回出席者が入れ替わるので練習の効果が大きいに損なわれ、ある日指揮をしていた清水先生が指揮台を降り、「僕はやめる」と言い残して帰宅してしまったそうです。幹部数名がお宅にお伺いしてお詫びをし、継続をお願いしてもらちが明かず、出席状態の悪いもの約60名を除名することでようやく先生のお許しが出て練習を再開したというのです。

合唱音楽に対するひたむきな志を抱き、合唱という音楽体系においてオーケストラと同じ責任感を歌手手に認識させる、という荒業だったのでしょうか？いつもの静かで温厚な先生の凛とした一面を見た出来事として歴史に残っています。

清水脩データベースを制作するにあたって

加藤直樹（昭48 S）

今年（2018年）は清水脩先輩の33回忌に当たる。この90年誌が発行されている頃は難波別院本堂（大阪府中央区 別名“南御堂”）で外大グリーンと大阪御堂合唱団が合同で行う音楽法要の準備で忙しくしている事だろう。

小生、インターネットで清水脩データベース <http://coro-varon.mond.jp/shimizu.htm> を公開している。そのきっかけとなったのは故山口慶四郎先生の助言であったと思う。グリーン創部85周年記念演奏会を2011年に神戸松方ホールで開催する計画が進行する途中、山口先生がちょうどその年が清水脩生誕100年であることに思い至られた。小生、清水先輩とは創部50周年のOB合同ステージで「月光とピエロ」全5曲、「最上川舟唄」、「大阪の子守唄」を指揮していただいた事しか接

点はないが、清水先輩の多田武彦の作品を扱っているタダタケデータベースの向こうを張ったデータベースを作ろうと思い至った。爾来約8年間色々な資料の収集を続けている。インターネット上の情報は勿論のこと、全国各地の図書館・音楽資料室巡り、インターネットオークションでの落札など事情の許す限り収集の手を広げている。

その関係で多くの方々とお知り合いになることが出来た。最初が2012年山口先生、河原敬君（昭57E）と一緒に訪れた生家佛足寺（清水家墓地と「清水脩墓所」の石碑がある）のご住職清水眞一さんと奥様。眞一さんは脩先輩の兄洪（とどむ）氏の息子で清水脩作品の著作権者、奥様は後述する大阪御堂合唱団の元団員。ご夫婦はその後東海メールクワイアー清水脩特集演奏会、東京グリーン演奏会@ヤマハホール、大阪男声合唱団演奏会へのグリーン賛助出演@大阪ドーンセン



「合唱の家おばば」(山梨県富士川口町)所蔵
清水脩自筆の「月光とピエロ」の色紙



清水脩氏の母方の甥である稲垣俊一氏所蔵
清水脩自筆の「礼讃無量寿」の色紙

ター、創部90周年大阪公演@大阪国際交流センターなど多くの演奏会にご来場いただいている。

その次が東海メールクワイアーの都築会長ほか多くの団員である。2012年佛足寺を訪問したことをきっかけにその年の6月に東海メールの第55回定演(清水脩特集)に清水ご夫妻が招待され、私は「月光とピエロ」のワンステージメンバーとして出演する事が出来た。東海メールと関係が出来て何回かワンステージメンバーとして愛知県芸術劇場大ホールで歌わせていただいている。東海メールの友誼団体であるやまびこ男声合唱団とも知り合いになり長野県男声合唱フェスティバルにも2015年(岡谷市カノラホール)に出演させていただいた。東海メールの誘いがあったからだと思うが日本男声合唱協会(JAMCA)の個人会員にもなり、2年毎の全国大会にも参加している。昨年(2017年)は青森県八戸で、来年は熊本が予定されている。JAMCAの絡みでこれも2年毎に行われる全四国男声合唱フェスティバルにも参加している。四国ではグリーの先輩竹井禎さん(昭45E)が丸亀で歌われているので何十年ぶりかにお会いしている。

もう一つのラインが大阪御堂合唱団である。この合唱団は1962年(昭和37年)創立の浄土真宗大谷派の混声合唱団である。大谷大学男声合唱団のOB有志が難波別院(南御堂)の後援を得て作った合唱団であり今年1月大阪ドーンセンターで第55回定演を行った。清水脩兄弟は長男

が洪(とどむ)氏、次男が脩(おさむ)、三男が恵(はじめ?)氏で大阪御堂合唱団の前身である大阪混声合唱団(現在の同名合唱団ではない)を運営していたが、大阪御堂合唱団設立の前に解散したようである。この話は大阪混声合唱団の創設メンバーであった方からお聞きした。

大阪御堂合唱団の設立メンバーで現理事の稲垣俊一さんは清水先輩の母方の甥で東大阪市小坂徳因寺の住職でもあり、88周年記念演奏会にご来場いただいた。洪氏と恵氏は長らく御堂合唱団に関わっていたようだが、脩先輩は住所が東京であったこともあり関与していたのは初期の一時期だけだったようだ。脩先輩は真宗大谷派からの支援で東京音楽学校(現東京芸大)に進学した関係からか多くの仏教讃歌を作曲している。その中でも親鸞聖人の正信偈からの「恩徳讃」は大谷派・本願寺派を問わず浄土真宗のお寺で歌われている名曲である。稲垣氏のお宅には清水先輩のもう一つの仏教讃歌「礼讃 無量寿」の手書き色紙が残っている。小生2015年からこの合唱団に所属し毎年ではないが仏教讃歌などを歌わせてもらっている。創立時のメンバーが数名残っておられるのでお話をお聞きしたいと思っている。

次が東京男声合唱団の指揮者坂水昶之さん。ご存じのように脩先輩の「秋のピエロ」は第1回全日本合唱コンクール(1948年)の課題曲として採用された。組曲の他の4曲は脩先輩が当時指揮をしていた東京男声合唱団で生まれた

のである。何年か前の東京男声合唱団の演奏会を東京成城に聴きに行き、昨年90周年東京公演の時には坂水さんにお会いして団制作のLPレコードをお借りした。東京男声とも関係のある滋賀男声の元指揮者故渡辺顕信さんとも2回ほどお話する機会があった。またこの第1回コンクール（通称：朝コン）のプログラムは先輩若林允さん（昭34C）を通じて藤沢男声合唱団の団員からお借りすることも出来た。

書き尽くせないのでお名前（敬称略）と簡単な説明だけを以下列挙させていただく。

- ◎門脇光也：大阪御堂合唱団第1期のお一人。今も合唱・歌曲の活動をされている。
- ◎井上泰子：大阪外大英語科卒、箕面高校校長、咲耶会副会長、清水脩作曲箕面高校校歌楽譜の入手にご協力いただいた。
- ◎工藤雄一：日本ラジオ歌謡研究会会長（秋田市）脩先輩はラジオ歌謡（NHK第2放送1946年～1962年）を何曲か作曲している。
- ◎前田美子：名古屋市、前田利家の御子孫。同朋大学 研究書誌「仏教音楽と清水脩」

- ◎岡崎隆：愛知県知多市合奏団指揮者、「花に寄せたる舞踏組曲」の楽譜浄書をされている。
- ◎溝上富夫：大阪外大インド語学科名誉教授、清水脩作曲「男声合唱曲集」のコピーをいただいた。
- ◎混声合唱団ウィステリア・コール（大分県）：清水脩作曲「大分民謡集」の楽譜を提供いただいた。
- ◎高橋亮仁：せせらぎ合唱団（北海道上川郡清水町）代表・指揮者。昭和天皇臨席の東京文化会館で「山に祈る」を演奏した合唱団である。「山に祈る」演奏会のプログラムなどをいただいた。
- ◎野村奈保美：小生の姪。福岡学芸大学付属小学校の校歌（清水脩作曲）楽譜を入手してもらった。
- ◎明治大学音楽資料館：東京都、楽譜コピー、清水脩作品の遺品を清水眞一さんが寄贈。
- ◎東京文化会館音楽資料室：ここではグリーン同期の故奥村茂さんにも楽譜コピーしていただいた。
- ◎同朋大学図書館：名古屋市、楽譜コピー
- ◎大阪音楽大学図書館：楽譜コピー
- ◎大阪市立中央図書館：楽譜コピー
- ◎全日本合唱連盟資料室：楽譜コピー
- ◎関西合唱連盟：大阪市、朝日新聞社内、コンクール・プログラムコピー

現役定期演奏会での清水脩作品の演奏回数

曲名	回数
月光とピエロ	8
日本民謡	4
三つの俗歌	3
山に祈る	3
アイヌのウポポ	2
薔薇の散策	1
普香天子	1
大手拓次の三つの詩	1
阿波祈祷文	1
魚拓（農家素猫）	1
黙示	1
富士山の詩	1
三つの小笠原新調	1
船	1
毛銭の三つの詩	1
萩原朔太郎四つの詩	1
合計	31

日本民謡内訳

曲名	回数
そうらん節	4
佐渡おけさ	4
最上川舟歌	4
五木の子守唄	3
機織唄	2
大阪の子守唄	1
黒田節	1

愛唱曲集のステージで演奏

曲名	回数
秋のピエロ	2
最上川舟唄	2

東京外国語大学合同演奏会単独ステージでの清水脩作品の演奏回数

曲名	回数
そうらん節 -----	1
五木の子守唄 -----	1
佐渡おけさ -----	1
黒田節 -----	1
最上川舟唄 -----	1

* 東京外国語大学合同は、東京外国語大学グリーン時代と混声時代を含む。

OB活動演奏会での清水脩作品の演奏回数

曲名	回数
月光とピエロ -----	17
日本民謡 -----	4
三つの俗歌 -----	4
アイヌのウポポ -----	3
山に祈る -----	2
三つの小笠原新調 -----	1
合計 -----	31

日本民謡内訳

曲名	回数
五木の子守唄 -----	4
佐渡おけさ -----	4
最上川舟唄 -----	4
そうらん節 -----	3
機織唄 -----	2
黒田節 -----	1

愛唱曲集として演奏

曲名	回数
◎月光とピエロから	
月夜 -----	1
秋のピエロ -----	5
ピエロの嘆き -----	1
月光とピエロとピエロットの唐草模様 -	1
◎日本民謡から	
そうらん節 -----	2
最上川舟唄 -----	4
黒田節 -----	2

* 演奏会形式の演奏回数。合唱祭等は除く。

第5章

お世話になった方々



長井齊 先生

生年月日 明治26年（1893）6月4日
出生地 兵庫県赤穂市
学歴 大正6年（1917）大阪音楽学校選科修了
経歴 日本合唱界の草分け的存在、日本マンドリン連盟顧問も務めた
大正2年（1913）日本メゾジスト教団大阪東支部教会で受洗
大正15年（1926）大阪コーラルソサエティを創立
昭和2年（1927）大阪音楽学校（現大阪音楽大学）に奉職
昭和5年（1930）関西合唱連盟初代理事長に就任
受賞 勲五等双光旭日章（昭和49年）
没年月日 昭和60年（1985）12月1日（享年91歳）
（大阪コーラルソサエティ70年史他より引用・作成）

外語グリー創設メンバーの一人である和田誠三郎先生（昭2 F）によると、長井先生と外語グリーとの関係は外語グリーの発足とともに始まっている。和田先生は第一回定期演奏会（昭和32年7月）のプログラムへの寄稿“外語グリーに寄す”の中で、「外語グリークラブが、長井齊先生を指導者に迎えて発足したのは、大正十五年四月であった」と記されている。しかし、どのような切っ掛けがあつて、長井先生を指導者に迎えることが出来たのかはもはや知るべきがない。ただ、大阪外国語学校校歌の作曲者は大阪音楽学校の創設者である永井幸次氏であり、長井齊先生はその女婿であることから、当時の専門学校首脳間のつながりでもあつて、長井先生が創設間もない外語グリーの指導者として招聘されたのかもしれない。

一方、長井先生は外語グリーとご自身の関係を終生にわたって特別視されたが、同じく第一回定演のプログラムには次のごとき一文を寄せられている。

「外語グリー」の想いで 長井 斉

「旧外語グリー」と私との関係は、実に浅からぬものがある。と云うのは、現在私が主宰している大阪コーラル・ソサエティは大正十五年の創立であるが、当時の男声首脳部はほとんど外語グリーの幹部諸君によって占められていたからである。云わば私の永い合唱生活は、外語グリーと共に始められたといっても間違いではない。

戦後の外語グリーは久しく沈黙を続けていた。折にふれ折衝して見たのだが、当時は一向手答えがなかったので実は半ばあきらめても居た。所が近年になってやっと待望の、この度は大阪外大グリーとして合唱界に名のりをあげる事になったのは、何としても嬉しいことである。

旧外語グリー時代とは、大分世の中も変わったが、新しい力をもって、再来した若きグリーに祝福を送ると同時に私としては、諸君の両肩に担いきれない程の大きな期待をかけているのも故なき次第ではない。

昔のグリーは、アンサンブルはよかったが、個々の力は弱かった——ベースだけは不思議とシッカリしていたが——それにひきかえ現在は有力な部員が可成りそろって居るのだから、よくなるのも諸君の努力次第である。

此の度の演奏会は諸君にとっては、云わば関西合唱界へのデビューなのだから、充分慎重にやって貰いたい。関西は学生合唱の厳しい修練場であるから単なる自己満足は許されない。勉強はこれからである。

(関西合唱連盟理事長)

創立が外語グリーとほぼ同時期である大阪コーラルソサエティには、創立当初から外語グリーのメンバーが大勢参加した。大阪コーラルソサエティ 70年史には、「創立からの10年間は破竹の勢いで大曲を本邦初演した。当時外国から取り寄せられた千曲以上のピース物を次々と歌い、現在のコーリユーブンゲンⅢに含まれている曲は殆ど歌っていたとのことである。ラテン語はもとより、英語、ドイツ語の曲までも容易に消化した。これは、創立当初から大阪外語(学校)のメンバーが多かったことが大いに力になった」とある。

戦前の外語グリーは長井先生を毎週一回、練習の指導に招いていた時期もあった。戦後に至ると、外語グリーではコンクールや、定期演奏会等、重要な演奏会を控えた時期に指導においでいただく程度となっていた。

しかし、昭和34年(1959)の第14回関西合唱コンクール大学の部で第4位に入賞、急きょ祝賀会開催となった席上で、当日の審査委員長であった長井先生は、



「自分と外語グリーとは特別な関係にあるので、今日はあまり高得点を与えるのは控えた。しかし、他の審査員たちが良い点を出してくれて、このような好成績が得られてよかった」という趣旨のスピーチを行っている。

長井齊先生

紙谷敬治（昭35 IN）

私が長井先生の主宰されます「大阪コーラルソサエティ」に入団したのは昭和32年（1957）大学2年生の時です。先生は関西合唱連盟の理事長をされてました。ちょうど私の兄の高校のガールフレンドが神戸女学院の声楽科を卒業されて、コーラルにおられ、その人の紹介で入団したのです。その後グリーのメンバーも入団するようになり、長井先生にはグリーの指導にも来て頂きました。

私は就職が神戸の方の会社でして、神戸で下宿をした関係で、コーラルには昭和35年（1960）から昭和55年（1980）6月の長井齊米寿記念演奏会で復帰するまで、20年間ほど抜けています。よって先生の元で歌っていたのは3年間足らずです。私が復帰した時先生はすでに引退されており、先生との交流はそれほど多くはないのですが、先生で思い出すのが、よく関西弁なまりの歌唱に注意を受けた事です。先生は関西人は「9、10」の発音が「くうー、じゅうー」と伸びてリズム感が悪い、これは「く、じゅう」と発音するようにしなさいとよく言われました。

私の学生時代のコーラルは年配の人が多かったように思います。それで楽譜のコピーを作るのに今のようにコピー機がなく、謄写版でするわけですが、そのがり版切りを私ら学生がやらされました。夜にがりがりとするわけですが、時に小節線を引き間違っ、4/4拍子の曲で一小節が5拍と3拍になっている所があっ、先輩から怒られました。そんな時に先生は「間違っ、小節線を引いた事くらい見たら分かるでしょう、人の間違いを責めるのは止めましよう」とバッシと言っ、皆んな黙っ、しまった事を思い出します。日頃大きな声で叱ったり、注意したりする方ではなかつたので、皆んなびっくりしました。

「大阪コーラルソサエティ」は2016年3月12日の「卒寿さよならコンサート」をもっ解散しました。



◇当時の合唱界のリーダーが揃った貴重な写真
昭和30年後半 課題曲選考審査会の風景 左から清水脩、(不明)、
木下保、高田三郎、長井齊、秋山日出夫、畑中良輔の各先生方

全日本合唱連盟機関誌『ハーモニー』より

長井先生の思い出

三神徹（昭38 S）

私が初めて先生にお会いしたのは、コーラルソサエティの練習に初めて行ったときである。1年生の時、紙谷さんに、色々勉強になるから入ってはどうかと勧められ、それまでやったことのなかった混声合唱団に初めて入団した。

その頃コーラルソサエティは島之内教会というところで毎週一回練習しており、外語グリーからは紙谷さんの他に松木さん、大西さん、それに先輩の末次さんなどがメンバーであった。確か最初に行ったときはマドリガルを歌っていたように記憶している。混声合唱のため男声にはないレパートリーがいろいろとあり、また長井先生の経験豊かなご指導はとても勉強になった。

先生にはコーラルでご指導いただいただけでなく、グリーの定演や、コンクールの前には毎年必ずご指導いただいた。私が一番印象に残っているのは、4年生の時の大阪四大学演奏会でニグロ・スピリチャルズを演奏した時、演奏後わざわざバックステージにおいでになり、「清水さんの時代のグリーの音が再現されていたので感激した」というお言葉をいただいたことである。もちろん私にとって、清水さん時代の音がどんなものか知る由もなかったが、先生の気に入る演奏が出来てうれしかった。先生のご指導のもとで出していた音が、知らず知らずのうちに清水さんの音に近づいていたのかと思う。

コンクールでは3年に4位になった時、4年に10位になった時も関学、同志社に次いで3位につけていただいたが、先生は、順番につけていくと必ずこうなると涼しい顔でおっしゃった。

先生とのお付き合いは外語を卒業してヤマハに入社してからも続き、仙台に勤務していた時、全日本合唱コンクールが仙台であり、審査員として先生が来仙された時、結婚間もなかった自宅にお呼びして夕食をご一緒したのも楽しい思い出である。

浜松勤務時にたまたま駅に立ち寄られた先生から電話があり、ぜひ会いたいとのことだったが、生憎会議中のためお会いできず、その後メキシコ勤務となりお会いする機会もないうちに先生は天寿を全うされた。ご存命中に一度お会いしたかったという悔いが残る。



和田誠三郎 先生

- 生年月日 明治38年（1905）4月12日
出生地 大阪市西区京町堀
学歴 大正12年 大阪市立東区商業学校（現東商業高校）本科卒業
大正13年 大阪外国語学校仏語部入学、昭和2年同卒業
経歴 昭和10年迄 家業（印刷業）に従事
昭和13年 大阪外国語学校講師
昭和19年 大阪外事専門学校教授
昭和24年 大阪外国語大学教授（フランス語学科主任教授）
昭和25年 大阪大学文学部助教授、昭和29年同教授
昭和37年 文学博士
昭和44年 大阪大学を定年退官、名誉教授、南山大学文学部教授
叙勲 昭和36年 フランス政府パルム・アカデミック勲章（オフィシュ）を受賞
没年月日 昭和59年（1984）2月20日（享年78歳）
（大阪大学仏文学研究室1971年発行『ガリア』和田誠三郎先生退官記念号他より作成）

もし和田先生がご存命なら、「俺のことをわざわざ“お世話になった方”とは何事か」と、おしかりを受けるかもしれない。確かに、和田先生は誰知らぬ者としてない、大正15年外語グリー創設時のオリジナルメンバーのおひとりであり、我々の先輩である。他人扱いをしたのでは失礼というものであろう。

しかしながら、和田先生は外語卒業後も再三グリーに復帰され、指揮者・指導者としてその発展にご尽力なされた。片や、御専門であったパスカルの研究を通じ学者として多大な業績をお残しになるとともに、教育者としても多くの後輩学究を育成された方である。

幸い、先生の御子息である和田猛郎氏がお元気であり、また先生の教え子であら

れる中村啓佑、永瀬春男、両先生とも連絡がついたので和田先生のお人柄をしのぶに十分な、エピソード満載の御寄稿を得ることが出来た。

編集注

混声グリー時代の和田先生については、歴史編「終戦から第一回定期演奏会まで」における、赤木富美子氏「混声グリーの思いで」を参照願いたい。

大阪外国語大学グリークラブ九十周年記念誌発行おめでとう御座います

和田猛郎（和田誠三郎先生ご子息）

大阪外語グリークラブの存在は存じて居りましたが、親父が創立者と言う事はついぞ知らない事でした。何より、私が生まれる六年も前の事ですし、物心ついてからも本人も一言も話したこともありませんでした。唯、クラシック音楽、コーラス好き位に思って居ました。戦中、ベーターベンのデスマスクと楽譜が在った事は覚えておりますが、戸棚の中に隠してありました。昭和十九年だったと思いますが、好きだった蓄音機、レコードが我が家から消えた事を思い出します。戦争中の五年間の心情については話し合ったこともありません。玄関の目立つ本棚に万葉集や永井荷風全集が仰々しく並んで居ました。

推察しますに、外語グリークラブ設立の頃は 恐らく大阪コーラルソサエティ（筆者註）で、父の妹（私の叔母）と その彼（戦死）と一緒に熱心に歌って居た頃かと思われます。父は惚れ込んだら一生懸命になるところがありますので、賛美歌やミサ曲等キリスト教の歌が多い選曲に、迷惑を被ったのはその頃の学生さん達だったかも知れません。

戦後二、三年混沌とした中で、一番熱心に情熱を注いだのはコーラスだったと思います。口をとがらせて、地元で作った千里山混声合唱団（中学生の私も無理やり団員として唱わされましたし、今も現存して居ります）と大阪外国語大学グリークラブで指揮棒を振っていたことは鮮明に覚えて居ります。大阪外大から大阪大学に移動してからは一度もコーラスの指揮はした事は無いかと思ひます。でも最終講義は「Dona Nobis Pacem」と言う事を知りました。

コーラスを指揮している間は一生懸命で、外に現れる事はありませんが、音楽会に行ったり、レコード鑑賞して居る時に 気に入った音が来ると直観的に身震いをしたり、涙ぐんだりする癖があります。『音狂い』なんて思って居ましたが、不思議なことながら、私にも、孫の私の長男にも出るようです。

面白いことに、父と妹（私の叔母）、私、従弟（叔母の子—関学グリークラブ）

も出会いは異なるのにフォーレのレクイエムが大好きなのです。体質的に似ているのかもしれませんが。この従弟は可哀そうに昨年大阪コーラルソサエティの解散後始末をする運命に成りました。父の残した二、三のスコアーと私の使ったフォーレのレクイエムのスコアーを手渡しました。

コーラスで親父と一緒に関わった時間は思いの外少なかつたのですが、クラシック好きは私の息子の時代まで残してくれました。戦後のピアノが普及しない頃、父が使った音叉が私の手元にまだ残っています。

残念ながら、脳溢血で倒れてから十三年、半身不随で過ごしましたが、音楽を楽しもうとはしませんでした。脳の損傷は耳は聞こえても、音を楽しむ余裕を奪ってしまうものです。

今残って居るのは大阪外国語大学グリークラブと千里山混声合唱団かと思います。どうか皆様、お体を大切に、大阪外国語大学グリークラブ（大阪大学外国語学部グリークラブとなっているかもしれません）の永存を願ってやみません。

筆者註：親父の古い書類などから、大阪コーラルソサエティは大正十五年発足、二年後、外大のコーラスが始まったことが判りました。両者の交流はコーラル終焉の九十周年まで続いていたとの事です。

和田誠三郎先生の思い出 — 50年を経てなお... —

中村啓佑（追手門学院大学名誉教授）（元大阪大学仏文研究室助手）

和田先生がグリークラブで活動しておられたことは、何度か耳にしたことがある。ただ、授業中のごく短い余談であったから、何時、どのような活動をしておられたかは存じ上げない。

音楽で覚えているのは、ケネディ大統領が亡くなった次の日のこと。先生は、ポータブルのレコードプレーヤーを教室にもって来られ、レクイエムを聞かせてくださった。記憶が鮮明なのは、その時の先生の柔らかな物言いや表情が、日ごろ受ける印象と大きく違っていたからであろう。

1960年代を貫いて、学部、大学院、そして助手の時代と、私は先生のご指導を受け、あらゆる面でお世話になった。今にして思えば、私は先生の固い、頑固一徹な側面しか見ていなかったような気がする。先生は好悪のはっきりとした、かなり気性の激しい方であった。だから、気に入らなかつたらずっとそのままだし、いったん気に入ったら、徹底的に面倒を見るという、そういうご気性だったと思う。

幸い私は後者の学生であった。よく怒られはしたが、それは私の将来を思ってくださいのことである。先生のご指導と数々の配慮のお陰で、60年代も終わるころ、フランスに留学することができた。「必ずドクトラ（フランスの博士号）を取ってき

なさい」と言って送り出されたが、期待にそえなかった。いやむしろ、違った生き方を選んだと言うべきであろう。

とは言っても別の世界に飛び出したわけではない。大学こそ違え、生活の場はキャンパスであり、教えるのはフランス語であった。混乱の種をまいたり、その結果を不器用に刈り取ったりしながら、研究よりむしろ教育に力を入れて、あっという間に40年が過ぎた。選んだ生き方が正しかったのだと自分に言い聞かせるために、できるだけ修行時代のことを、特に和田先生のことを忘れようと努めた。しかし、どれだけ忘れようとしても、必ず先生は夢に出てこられるのである。場面はいろいろに変わり、表情もさまざまであるが、最後に問われるのはいつも、「勉強していますか」であった。

年をとるにつれて、特に退職してぼんやり考えることが多くなるにつれて、先生の度量の大きさとやさしさが少しずつ見えてくる。若い私はずいぶん生意気で、失礼なことを申し上げたと思う。もし私が先生だったらブン殴っていたか、見限っていたようなことを。しかし、先生は、そうはなさらなかった。

今でも、頼まれもしないのに人前で話したり、ものを書いたりしているのだが、ことあるごとに先生のことばを思い出す。例えば、「君の書くものは、頭の中でこしらえあげたものばかりで実証性がない」。パソコンをたたきながら、私はため息をつき、「そのとおりだ」と思う。

50年もたっているのに、どうしてこんなに先生のことを気になるのか。最近になって思い当たったのだが、私が先生に初めてお目にかかったのと、突然父がいなくなった時期とは、ほぼ重なっている。きっと和田先生は、当時の私にとって師であり父であったのではないか。それだけに、恐れ、反発しつつも、どこかで甘えていたのであろう。

何を言ってみても、もう先生の耳には届かない。だからこそ、私はどうしてもこの原稿を書きたかった。

和田誠三郎先生とパスカル

永瀬春男（岡山大学名誉教授）

大阪大学文学部フランス文学講座の初代教授である和田誠三郎先生は、1969年度（昭和44年度）をもって定年退職されました。私はその同じ年度に仏文専攻に進学し、先生にとって阪大最後の学生の一人となりました。辛うじて一年間だけ先生の授業を受け、年度末には最終講義を聴講することができたわけです。このため、先生についての私の思い出となるとごく限られたものにならざるをえません。先生が大阪外大グリークラブの創設者であったことも、今回初めてお聞きしました。私は

卒業論文の対象に先生の専門であるパスカルを選んだこともあり、先生の思い出となるとどうしてもパスカルという思想家にまつわるものになってしまいます。

先生の最終年度の授業は、パスカルとフローベールというご専門の二人の作家を扱うもので、演習ではフローベールの『三つの物語』から最初的一篇（「純なこころ」などと訳されることが多い）を、講義では『パンセ』をとりあげ、さらに大学院でもパスカルの『プロヴァンシアル』を講じられました。私は幸いこの三つの授業のすべてに出席しております。大学入学とほぼ時を同じくして、岩波書店から三木清の全集が刊行され始めたのですが（1966年）、その第1巻に収録された『パスカルに於ける人間の研究』に深い感銘を受けた私は、漠然とパスカルを卒論の対象にしたいと考えており、あつかましくも大学院の授業にまで出席させてもらったのでした。

三木清全集と同じ年には、中央公論社版「世界の名著」の一冊として『パスカル』の巻も刊行されました。冒頭の解説で編者の前田陽一先生が書いておられるように、当時の阪大仏文科は、東京大学とならび、日本におけるパスカル研究の西の中心をなしていました。和田先生、助教授の原亨吉先生、和田先生の教え子で当時は教養部におられた赤木昭三先生（編集註）のお三方が、日本またはフランスの博士号を取得済みで、そろって名高いパスカルの専門家であったからです。加えて田辺保、森川甫、渡辺香根夫ら多数のパスカル研究者が関西地区の大学にお勤めであり、のちにパスカル研究の「大阪学派」と呼ばれることになるこのグループの精神的支柱こそ、和田先生の存在にほかなりませんでした。

先生のパスカルへの傾倒ぶりには実に深いものがありました。イギリス文学を代表するのがシェイクスピアであり、ドイツはゲーテが、イタリアはダンテが代表するとしたら、フランス文学を代表するのは誰であろうか。これはよく投げかけられる問いであり、19世紀の大作家たち、つまりバルザック、スタンダール、フローベール、ゾラらを筆頭に、回答者によってどの名前があげられても不思議でなく、それはフランス文学の多様性と卓越性の証拠と考えられてきました。しかし和田先生の答はゆるぎないもので、もちろん「それはパスカルです」でありました。この選択には異論もあるでしょうが、いかにも和田先生らしいお考えだと言えるでしょう。

最後に、『パンセ』の数ある名言のなかから、先生が晩年とくに心惹かれるとおっしゃっていた一文を紹介しておきましょう。

「すべて進歩によって完成するものは、また進歩によって滅びる」

最終講義でもとりあげられたと記憶するこの句は、私自身にも強い印象を与え続けてきたもので、2011年3月11日、東北地方を襲った大震災の折りに、福島原発の惨事を知って真っ先に頭をよぎった言葉でもあります。パスカルの予見、また和田先生の予見の悲劇的な鋭さを思わずにいられません。2011年度は私自身の岡山大学退職の年でありましたが、4月のフランス文学の授業の冒頭で学生諸君にこの言葉を紹介し、また私の最終講義に相当する学内での講演（演題は「パスカルと現代、あ

るいは<進歩>と<幸福>についてJ)でも、やはりこの断章に言及せずにはおれませんでした。そんなところに、和田先生とのひそかなつながりが働いていたような気もいたします。

編集註：昭和24年F卒のグリー部員。夫人は混声グリー部員で昭和28年F卒の赤木富美子大阪外国語大学名誉教授。



斉藤佐和 先生

嗚呼、ニコライの鐘が鳴る

斉藤佐和先生についての情報は極めて乏しい。どのような経歴の方であったのか、どのような経緯で外語グリーとの繋がりが生じたのか、第3回定期演奏会（1959年7月4日）のプログラムに次のような解説があるのが唯一の手がかりである。

◇ロシア民謡編曲者紹介

斉藤佐和先生

当年七十二歳。神田駿河台の正教会（ニコライ堂）神学校卒業後、同付属聖歌学校にて専門的に音楽をおさめられた。その間、当時来日していた著名な外人教師ケーベルにピアノを、ユンケルにヴァイオリンを学ばれた。一昨年我々大阪外大グリークラブが国立大阪病院にて慰問演奏会を開いた際に先生が丁度入院しておられ、我々の演奏をお聞きくださり我々のためにロシア民謡のオリジナルな編曲をお引き受け下さった次第です。

これがすべてである。しかし、外語グリーのロシア民謡・ロシア歌曲演奏の歴史を振り返るとき、斉藤先生を抜きにして語ることはできない。のみならず、斉藤先生は大阪外語校歌、大阪外大学歌を、それぞれ男声四部合唱に編曲された方でもある。ただ、校歌・学歌を編曲して戴くに至った経緯も、これまた不明なのである。

斉藤佐和編曲ロシア民謡・歌曲の演奏記録

(ただし第20回定演まで、一部編曲者不詳も含む)

1959年 第3回定期演奏会 新宮演奏会

おお、かごはいっぱい
子守唄
郵便トロイカはひた走る
何故の口づけ
母なるヴォルガ下り

1960年

倉敷演奏会 広島演奏会 宇和島演奏会

母なるヴォルガ下り
何故の口づけ
十二人の盗賊
ともしび

1960年 第36回関西学生合唱祭

ヴォルガの舟歌
カリンカ

1960年 第4回定期演奏会

十二人の盗賊
ともしび
ヴォルガの舟歌
カリンカ

1961年 岡山演奏会

十二人の盗賊
野に白樺たてり

1961年 第5回定期演奏会

母なるヴォルガ下り
ゴパーク
バイカル湖のほとり
野に白樺たてり

1962年 第6回定期演奏会

今日はモスクワ
何故の口づけ
ドニエプルの嵐
収穫の歌

1963年 第7回定期演奏会

母なるヴォルガ下り
トロイカ
道
ステンカラージン

1965年 第9回定期演奏会

母なるヴォルガ下り
エルベ河
ともしび
何故の口づけ
収穫の歌

1967年 第11回定期演奏会

収穫の歌
エルベ河
道
鐘は単調に鳴る
ヴォルガの舟歌

1976年 第20回定期演奏会

母なるヴォルガ下り
カリンカ
鐘は単調に鳴る
ヴォルガの舟歌
アムール河の波

齊藤佐和編曲 大阪外語・外大校歌（男声四部）

大阪外国語学校校歌（1959年6月4日付）

大阪外語校歌

（男声四部）

詞： 幸三 作曲
齊藤 佐和 編曲

せ かい を こ め し せ ん じ ゅ う し ゅ う ち く
二 三 四 五

組 ね て ひ が し の そ ら に ち ゃ り
組 ね て そ ら に

の 明 星 ひ と つ ひ ぞ つ こ れ ぞ ち ゃ り 止
五

が がい こ く こ が ち ゅ う だ て
あ げ の 五

よ だ て よ へ い わ の は ち は 一 二 三 け
だ て よ だ て よ

べ こ け べ あ い の こ と は かが
三 け べ 三 け べ

ち か せ ぶ ん が の た ち り
五

1959.6.4. printed.

齊藤佐和編曲 大阪外語・外大校歌（男声四部）

大阪外国語大学校歌（1964年4月21日付）

大阪外国語大学校歌

せ い と こ め し せん う ん よ う ま く
 は れ て ひ が し の そ ら に あ げ
 の 明 星 ひ と つ こ れ が 大 き
 か *mf* が い こ く こ が、 こ
f た て よ た て よ *mp* い わ つ ば
mp cresc. た さ け べ さ け べ あ い の こ じ
mp cresc. た さ け べ さ け べ あ い の こ じ
 は *ff* が が や が せ *mf* せん か の
f ひ か り
ff

大阪外大校歌
 松永信成 作詞
 永井幸次 作曲
 齊藤佐和 編曲
 1964-4-21
 "Claude ate, j'ai haï"

齊藤先生によるロシア民謡・歌曲の編曲は極めて個性的である。ダイナミック、メロディックであり、自由奔放な趣をもってその特徴とする。特に、音域の広さは超絶技巧的で、下はベース泣かせの地獄の低C音から、上はテナー殺しのファルセットでも苦しい超高C音まで、3オクターヴをたっぷり使い、往年のドン・コサック合唱団も斯くやと思われるような華麗な編曲となっている。先生からはロシア人的な歌い方をすると、繰り返し念を押されたとある（第3回定演プログラム）。僅かな“記憶”によると、齊藤先生は小柄で、普段の話声も甲高かった方、との事。あるいは音域の広大さと関係があるのかもしれない。また、現在残されている齊藤先生の手書きと思われる楽譜によると、先生はロシア語も大変ご堪能であったようだ。

かくのごとく、齊藤先生に関する情報は遺憾ながら非常に少ない。しかし、20曲以上に及ぶ有名ロシア民謡・歌曲に施された齊藤先生の編曲は外大グリー専用であり、グリーにとって貴重なお宝である。いつの機会か、齊藤佐和編曲ロシア民謡・歌曲集をまとめたステージの実現することが期待されるところである。



Austin Faricy 先生

プロフィール

1911年ミネソタ州セントポール生まれ。カリフォルニア、ハワイへと移ったあと、1960年6月大阪外大の英語科講師として来日、Semantics and Communicationを専門に教鞭をとられた。先生は米国の大学卒業後、オックスフォード大学に留学、その時期にハープシコードを習得された。リュート、クラヴィコードなどの古楽器も好んで演奏され、米国では毎年ハープシコードのリサイタルを開催、ハワイ時代には音楽評論家としても活躍された。

外語グリーの第5回定期演奏会でハーブシコードを、第6回定期演奏会ではギターの弾き語りでアメリカのフォークソングを演奏いただき、大好評を博した。

先生はグリーの合宿や演奏旅行にもご一緒され、ともに野球に興じたり、山登りを楽しんだりされた。グリーにとっては良き友人であり、理解者であり、また演奏会に於ける良き共演者であった。

現在も準クラブソングとして歌いつがれている Varsity 及び Old Osaka, Our Gaidai Dear は先生からグリーに提供されたものである。

また、外大女声コーラス部（女コラ）のために、クラブソングを作詞、作曲されている。

—The Osaka Gaidai Girls' Chorus Club Song—

The song the Sirens sang is ours to sing again,
But not for destruction, not for grief and pain,
We sing a hopeful world of love and joy made free,
The Osaka Gaidai Girls' Chorus are we.

なお、第30回定期演奏会（1987年1月11日）のプログラムに、当時の大阪外大
学長林栄一先生が以下の様に記されている。外大を辞された後のファリシー先生の
消息を知る数少ない情報として記録にとどめておく。

今はアメリカのカーディフに引退され
ているファリシー先生にもこのこと
（編集註：グリーが創立60年を迎えた
こと）をお伝えするつもりであるが、
感慨無量の感を抱かれると思う。先生
も本学グリーの育ての親の一人であっ
たのだから。



Message from Mr. Farley

I would like to take this occasion to congratulate
the Glee Club on its splendid achievements, and to
express my pleasure at being invited a second time
to take part in the annual concert.

Austin Farley

定演プログラムから作成

ファリシー先生の思い出

大倉明治 (昭37 E)

ファリシー先生から英語の授業を受けたのは1961年からだったと思う。私が4年生の時であった。授業の内容は英語の詩や名文句、警句で、私にとっては大いに興味深い内容だった。それらを、抑揚をつけて読み上げ、時には役者のように喋った。沢山ある中で幾つかは今でも覚えている。

イギリスの聖職者 Henry Aldrich のフレーズは今でも覚えている。

If all be true that I do think,
there are five reasons we should drink:
Good wine—a friend—or being dry
Or lest we should be by and by—
Or any other reason why.

シェイクスピアの「テンペスト」の中の、
Our rebels now are ended. These our actors
(As I foretold you) were all spirits, and
Are melted into air, into thin air,
And like a baseless fabric of this vision.

というフレーズも覚えている一つである。

クリスマス前の授業では、ギターを片手にウェスタン歌手のような服装で教壇に立った。そしてギターを弾きながら歌を歌ってくれ、生徒に歌を教えてくれた。最近、クリスマスの時期になるとよく聞く「Partridge in a Pear Tree」という歌は先生に教えてもらった曲だ。又、出だし8小節しか憶えていないが「Lady Hamilton」という哀愁に満ちた曲もあった。

卒業しても先生にお世話になったことがある。会社に入って翌年、会社の行事で英語のスキット（寸劇）をやることになった時、先生には何度か会社に来てもらって、英語の発音と演技指導をしてもらったことがあった。謝礼は受け取られなかったが、



第5回定演(昭和36年)打ち上げにて

私が香港に出張する時に「香水を買ってきてほしい」と頼まれ、10種類ほどの香水の名前が書かれたメモを渡された。「誰か女性にプレゼントするのかな？」と思った。帰国して、それらを先生が住んでいる官舎に、スキットのメンバーと届けに行ったら、パーティーを開いてくれた。部屋にはピアノの他にギターやバンジョーなどいろいろな楽器があったのを覚えている。驚いたのは、香水の瓶が沢山あったことである。先生は香水のコレクターでもあった。

教わったのはわずか1年だったが、外大の先生の中で印象に残っている一人である。

ファリシー先生のアドバイス

天野邦彦（昭45 E）

ファリシー先生の授業では、いろいろな歌を教わったが、特に夏休み明けからクリスマスにかけては授業時間の大半を使うこともあった。どの歌も、曲の最も高揚する部分から始め、その後で全曲を唄った。リラックスできる楽しい時間だった。また3年生になってからは、授業の冒頭に私の手振りで、全員で“Old Osaka, Our Gaidai Dear”を唄うのが習わしとなった。

ファリシー先生とは時々銭湯で顔を合わせた。先生の官舎も、私が2年生になる直前に引っ越した下宿も外大の近くだったからだ。因みに、外大生ばかり8人の私の下宿のほか、まわりの下宿にもグリーの先輩が居られた縁で、私はその夏グリーに入部したのだった。

さて3年生の冬第12回の定演（1968年）の第1ステージで、私はSea Shantiesを指揮したのだが、その後間もなくのある日、先生から夕刻官舎に来るよう声をかけられた。聊か緊張して一人訪ねた先生のお住まいは広く清潔で、その重厚な雰囲気には圧倒されたが、それは鎮座しているハープシコードと、その傍の壁の棚に収納された何百枚ものLPや大量の楽譜の所為でもあった。正に音楽家の館だった。

お茶を戴きながらグリーの活動の様子などを話した後、先生が切り出されたのは定演の、Sea Shantiesのステージのことだった。「“What Shall We Do with The Drunken Sailor?”の歌詞が聴き取れなかった。テンポが速すぎる。もっともっとゆっくりと」と、オールを漕ぐ所作に合わせ、先生はWay hay, and up she risesの一節を朗々と唄われた。ロバートショウの楽譜に示されたテンポはヴィルトゥオーゾ用のテンポであり（実は、練習の時にも結構苦労した）、無理をして守る必要はない。歌を唄うときに大切なのは、どんな曲でもまずは歌詞を正確に届けることだと、その時先生は説かれたのだった。

そんな会話がふと途切れた時だった。無言のまま立ち上がり、先生は棚から1枚のレコードを抜き出しターンテーブルにセットし、盤の中ほどにそっと針を置かれ

た。ピアノの3連符の緩やかな打音がピアノッシモで数小節続き、そのあと流れてきた弱音の男声合唱に心が震えた。ドイツ語の響きの何という深さ、何とデリケートな和声の移ろい！私が初めてシューベルトの詩篇23番を聴いた瞬間だった。

先生に勧められてこのレコードを下宿に持ち帰り、収められているシューベルトの男声合唱曲の楽譜を苦労して手に入れた。グリーンで唄ったことのないジャンルで、とても新鮮だった。翌年の春御堂会館で開催した東京外大とのジョイントコンサートの合同ステージに、シューベルトとメンデルスゾーンのアカペラ4曲を載せることができたのは幸いだった。

その年の暮れ、第13回定演（1969年）の第2ステージには、2年続きで取り組んだSea Shantiesを、曲目をガラリと変えて載せたのだが、先生のアドバイスに強くこだわったのは第3ステージ（同夜の唯一の日本語ステージ）の「中原中也詩集」だった。中也の詩に溢れる抒情を観客に効果的に届ける手段をいろいろ考えた末、～歌詞の発音・発声を磨くことが基本であることは勿論だが～、それぞれの曲の演奏の前に、詩そのものを聴いて貰うことにしたのだった。しっとりとしていてしかも歯切れの良い女声による朗読とその後続く男声合唱という組み合わせ。この変則のステージの評判は悪くなかったようだ。

クラブ活動を軸に気楽に回っていた私の大学生活だったが、その後半には学生運動の嵐が吹き荒れ、学校も封鎖されるなど授業もままならない殺伐とした日々が続いた。例年の四大学交歓演奏会も4年生の年には中止された。そして何時しかファリシー先生をお見かけすることもなくなったまま、紛争が続く中バタバタと卒業した。就職で大阪を離れ、結局東京に住み着いてもう50年近くが経つ。そして、モノラル録音のシューベルト男声合唱曲集のレコードは、結局先生のレコード棚に戻る機会を失ったまま、今もひっそりと私の部屋に飾られている。



山口慶四郎 先生

生年月日 大正13年（1924）6月
出生地 兵庫県神戸市
学歴 昭和17年（1942）3月京都府立一中卒
同年4月 大阪外国語学校露語部入学
経歴 昭和19年9月 同卒（短縮卒業）、司馬遼太郎氏と同期
昭和19年10月 満鉄入社、同時に海軍予備学生として旅順で入隊
サハリン国境付近で海軍少尉として終戦を迎える
昭和20年（1945）8月 復員、9月 大阪府嘱託
昭和22年（1947）4月～昭和44年（1969）3月和歌山経専～和歌山大学に
勤務（経済学部教授）
昭和44年4月 大阪外国語大学ロシア語学科教授
平成2年（1990） 同定年退職（名誉教授）
専門はロシア・ソヴェト経済論
『わが国における外国語研究・教育の史的考察』『ソヴェト経済の分析』
『現代社会主義の農業問題』など、著書・共著多数
没年月日 平成28年（2016）1月20日（享年91歳）

山口先生とグリーとの最初の接点は、意外なところにあった。第30回定期演奏会（1987年1月11日）プログラムに寄せられたグリー顧問としてのメッセージの中で、山口先生は以下のように回顧されている。

「私は学生時代グリーのメンバーでなかったが、戦時中、中之島にあった朝日会館を会場にした関西の大学、高専の合同演奏会に関わった記憶がある。きっと外語グリーがこの演奏会の当番校であったので、応援を求められたのであろう。私は舞台裏で雑用を勤めた」

先生は1969年、二十年余勤めた和歌山大学から母校に戻ってこられたが、既にその前1962年から非常勤講師として外大でソ連経済論、経済書講読を担当されていた。当時の外大の学生たちからは“不徳にも”（ご自身のコメント）「コンパ好きの先生」とのレッテルをはられたそうだ。外大ロシア語学科教授に赴任早々、山口先生は学生部長に任命された。当時まだ学園紛争の余燼が残る中のことで、先生は「人使いの荒い学校や」とこぼしておられたそうだが、まさに適任だったであろう。外大勤務の末期には付属図書館長も務められ、屋上にパラボラアンテナを立てて、CNNやソ連、中国の通信衛星放送も直接視聴できる設備を設置された。この間、ソ連科学院経済研究所へ文部省より派遣され研究活動に従事、また、レニングラード大学（現サンクトペテルブルグ大学）に交換教授として勤務された。

エピソードを一つ：（先生が外大を定年退職された）1990年春、ロシア語学科の卒業生34名中、26名（76.5%）が女子学生であった。ソ連経済専攻の山口ゼミにも多くの女子学生が受講、彼女たちがゼミの進行をリードした。こんなことでゼミのコンパが梅田のディスコを会場にすることもあり、私（先生）も体型を少しは気にしながら、ホールで彼らと踊り狂ったものである。そこには、和歌山時代のゼミ生が考えられない「変容した山口」の姿があったのである。（『北窓』第10号（2002年11月）より）

現役時代のグリーが山口先生に顧問になっていただいたのは1975年春のこと。それ以来、2016年1月ご逝去の日まで、現役グリー時代、OBグリー時代を通じての永きに渡り、先生は我々にとって先輩であり、恩師であり、グリーの強力な支援者であり、また世代を超えた友人かつ愉快的飲み友達でもあった。

先生は広い人脈とその柔軟な発想、企画力を発揮され、“愛してやまない”グリーのために、次々と素晴らしい計画を立案された。山口先生のお蔭で、近年グリーはその活動を一段とダイナミックに展開することが出来たのである。

故山口慶四郎先生を偲び

橋本勝（大阪外国語大学名誉教授）

大阪外大グリークラブについては小生の学生時代から活発な活動でその名はよく知られていた。母校同窓会の咲耶会などに出席の折、そのグリーの合唱を聞くことはあったが、その演奏会を直接聞きに行くことはほとんどなかったように思う。聞くところによるとグリークラブの誕生したのは、大正15年（1926年）4月と伺って

いる。大阪外大の前身、大阪外国語学校の創立が大正10年12月9日であったことを思えば、いかにグリーの歴史が古いか良くわかる。幸いなことに私は昨年（2016年）11月13日に上本町8丁目の母校大阪外大の跡地、大阪国際交流センターで開催された大阪外国語大学グリークラブ創部90周年記念演奏会（主催：大阪外国語大学グリークラブOB合唱団、後援：咲耶会）に招待されて出席の機会を得た。この大阪公演では黒人霊歌、歴代指揮者メドレー世界の愛唱歌、男声合唱組曲「柳河風俗詩」全4曲、男声合唱組曲「月光とピエロ」全5曲が披露された。熱の入った合唱の各曲それぞれに聞き入り感動を覚えた。小生、モンゴル語科の出身であるが、当日の合唱団のメンバーには教え子4名も含まれていて公演終了後の懇親会で期せずして教え子との数十年ぶりの再会を喜び、懐かしく言葉を交わした。

実は3年ほど前、私の居住する川西市大和の自治会館で山口慶四郎先生の戦時中のサハリン（樺太）時代のお話を伺う講演会が催されたことがあった。内容は先の大戦で敗戦が色濃くなった時期の日本軍の状況の一端を示す興味深いものであった。その会に、山口先生のグリー後輩の加藤直樹さんも出席されていた。加藤さんと知りあったのはその折であった。講演会が終わった後、大和のとある酒亭で山口先生を囲んで3人で暫しビールを飲み交わしながら歓談したのが今、懐かしく思い出される。私がこの大阪公演に参加する切っ掛けになったのは加藤直樹さんとの出会いによるものである。感謝申し上げる次第である。

この公演はグリークラブ顧問であった故山口慶四郎先生を追悼する演奏会を兼ねるものでもあった。当日、山口先生のご息女、山本千恵子さんも出席されていたが、きっと昨年1月に亡くなられたお父様のお元気な頃のことなどを偲びながら感慨深く聞かれていたことであろう。グリー合唱団の熱唱に引き込まれて感銘深い演奏会であった。山口先生はモンゴル語科出身の司馬遼太郎と大阪外事専門学校の同期生で、そのころより交流があり学生時代の司馬遼太郎との思い出やその後の交流について折々によく伺ったものである。年1回開催される司馬遼太郎記念学術講演会にはいつもご一緒し、帰りには車中で談笑しながら家路についたものである。先生は趣味も多彩であったが、酒を愛され酒席での先生の弁は一段と熱を帯び座は大変盛り上がった。声量ある歌声は同窓会などの席でも伺ったことがある。グリークラブOB合唱団の名誉顧問をされ長年にわたりグリークラブの活動の支援をされてきたことで山口先生のご尽力は大きかったことであろう。改めて先生のご冥福をお祈りするとともに今後も大阪外国語大学グリークラブ合唱団がますます発展していくことを切に願うものである。

山口慶四郎先生の思いで

溝上富夫（大阪外国語大学名誉教授—ヒンディー語）

故山口慶四郎先生は、私よりも20歳近く年長であられたが、大阪外大への就職は私が1ヶ月だけ早かった（1969年4月1日）。私が新任の助手であったのに対して、山口先生は和歌山大学から転任して来られたためだ。まもなく大学紛争が始まり、まだ若手の教授であられた山口先生は大学改革に先導的な役割を果たされた。学内の各委員会や研究会等で同席していた新米の私は、先生の大学教育に対する高いご意見を拝聴しているだけだった。まもなく学生部長に就任され、大学紛争の解決に奔走され、また箕面キャンパスへの移転実現にも貢献された。

その後も図書館長としてご在任中に、ご趣味でもあられた世界の地図を収集した地図展示コーナーを設けられる等、常に教育研究面で斬新な企画をたて、実行された。ここまでは、同じ大学の教員としての普通の交流だったが、私と先生との個人的な交流は、むしろ先生のご退職（1990年）後に深まった。

まず、インド公演の前哨戦として、90年代から2000年初めにかけて毎年のように神戸で公演していたヒンディー語劇の鑑賞にお越しいただいたことがある。そして、私も歌好きなので、「第九」をドイツ語で歌いたいという若い頃からの夢を叶えるため、団員を公募していた大阪のフロイド合唱団に入団、数ヶ月間練習しただけで、その年（2010年）の12月16日に、いきなりなんとザ・シンフォニーホールの舞台に立ち、広上淳一氏指揮の京響の演奏で歌うという興奮すべき経験をした。広上先生の合唱指導のやりかたは親切丁寧でわかりやすかった。これを、語学教師に例えるならば、難しい言語を分かりやすく丁寧に教えてくれる先生ということになる。私もそう務めたつもりだ。山口先生は冬の寒い夜にも関わらず、鑑賞にお越し頂いた。客席に先生のお姿を見て懸命に歌った。翌年（2011年）の合唱曲は、モーツァルトの「レクイエム」で、ラテン語で歌った。ラテン語は一応勉強していたので、意味は理解できた。インドのサンスクリット語と似た語彙が結構ある。この時は飯森範親氏指揮の大阪フィルハーモニー交響楽団との共演だった。この合唱団は暗譜と暗誦がルールなので、歌詞の暗誦にそれなりに苦勞した。この年東日本大震災で多くの方々が犠牲となったので、そういう人々へ哀悼の気持ちを込めて一生懸命歌った。公演日は暑い真夏（8月）だったが、この時も山口先生は鑑賞して下さり、こんなことに挑戦する大学教師はいないだろうと、お褒めのことばを頂いた。もっとも私は合唱団では身分を隠していた。他の団員と同じ指導を受けたかったからである。しかし、この頃から私は通訳の仕事やNHK文化センターでの講師の仕事等で忙しくなり、練習が負担となっていったこと、それよりも大きい理由は、古くからこの合唱団のメンバーとして活躍している多くの他の団員のレベルが高くて、とてがついていけないと判断して退団した。長続きしないのが私の欠点である。しかし、ザ・シンフォニー

ホールという晴れの舞台に2回も立ったという経験は忘れられない。

その後私は神戸文化会館で開かれたロシアバレエ団の「くるみ割り人形」公演に招待されて二人で鑑賞した。さすがに本場のバレエ団だけに、そのレベルの高さに圧倒された。その他、山口先生とご一緒した会というのは、阪大と外大の名誉教授会、阪大のホームカミングデー、司馬学術講演会、司馬遼太郎記念館見学、陳舜臣アジア文藝館の開所式、そしてもちろん、外大のグリークラブOBの演奏会等数えきれない。帰路がそれぞれ宝塚市と川西市なので、ずっと阪急川西能勢口駅までご一緒させていただいたものだ。我々二人のほかに、モンゴル語の橋本勝名誉教授や同窓会副会長の井上泰子さんもご一緒されることが多かった。脚を悪くされてからはステッキが離せない身になっておられたが、駅のエレベーターの位置がホームのどこにあるか、どの車両がその位置に泊まるかをすべて事前に調べて覚えておられ、駅だけでなくあらゆる建物のエレベーターの位置をすべて記憶されており、真っ先に、寸分違わないほどの正確さでその場所に移動されていた。かつて「コンピューター付ブルドーザー」というニックネームでよばれた故田中角栄元首相に倣って、私は山口先生に「コンピューター付ステッキ（素敵）老人」というニックネームを進呈していた。先生の記憶力は抜群で、戦時中海軍で通信業務に携わっていたためか、今のようなデジタル社会になるずっと前から、情報の収集・整理能力に長けておられた。

先生が愛し育てられたグリークラブOBには、私の教え子であるヒンディー語の卒業生も3人いる。そのうち特に、五十嵐強君（1979年卒）には、旧三井銀行ボンベイ（現在ムンバイ）支店勤務中に歓待されたし、その後は、グリークラブOBの演奏会には必ず招待券を送ってくれている。山口先生の訃報の連絡も彼からもらったが、もちろん、それまでに私は先生の訃報に接していた。

所用で、お通夜にしかでられなかったが、本葬ではグリークラブOBの皆さんが“遥かな友に”で別れを告げられたとか聞いた。ロシア語科という枠を超えて、全学的に敬愛された先生は90歳をすぎる長寿を全うされ、お幸せな人だったといえる。悲惨な戦争を生き抜いて来られた人というのは、考えられないほどのエネルギーと忍耐力をお持ちである。私も先生のように、輝いた余生を90歳まで長生きしたいものである。

あらためて、山口先生のご冥福をお祈りいたします。

故山口慶四郎先生との思い出から

井上泰子（英語学科15回）（咲耶会副会長）

グリークラブとの思い出と言えば、故山口慶四郎先生を抜きに語ることはできません。「創部85周年記念演奏会」、「ベージュ色のコンサート」等、お元気な頃ご一緒した演奏会が思い出されます。ユーモアたっぷりの山口先生と団員の皆さんとの

心温まる交流風景は、今も目に焼き付いています。咲耶会活動を通じ、山口先生やOB合唱団の皆様と親しく交流させていただいたことは、何よりの誇りであり、心の糧となっています。

2017年の咲耶会総会では、22名の団員の皆さんによるミニコンサートを開催していただきました。毎年欠かさず総会に出席してくださっていた山口先生がご存命であれば、どれ程お喜びになられたことでしょうか。お別れの日、団員の皆さんがアカペラで先生に捧げられたロシア民謡の哀切に満ちたメロディーと重なり、お元気なときの茶目っ気たっぷりの笑顔がそこにはないことに、喪失感と、先生の存在の大きさを改めて実感した一瞬でした。

外大グリークラブの大先輩で、著名な作曲家でいらっしゃった、清水脩氏について知ったのも、実は、山口先生を通じてのことでした。何かの折に、突然、「井上さん、貴女が校長をしていた箕面高校の校歌の作曲者が誰か知っていますか」と聞かれ、不覚にも、答えられず、その時の衝撃が今も鮮明に残っています。2011年の創部85周年記念演奏会は、清水脩氏の生誕100年記念演奏会でもあり、氏の代表作である「月光とピエロ」が熱唱されました。外大グリーゆかりのこの大作曲家が箕面高校の校歌の作曲者であることを知り、驚くとともに、どのような経緯があったのか、ぜひ知りたいと思っていました。

この秋、グリークラブOB合唱団の加藤直樹様から、清水脩氏の資料をデータベースで残すお仕事をライフワークにされていて、氏が様々な学校の校歌を作曲されていたこと、箕面高校についても、楽譜と校歌制定にまつわるエピソードを入手したいとお話がありました。これぞ千載一遇の好機と、さっそく旧知の高校創立当時の音楽の先生に連絡を取りました。ご高齢になっても、昭和41年の第1期生の卒業式に間に合わせるべく、待望の校歌ができた頃のことを鮮明に覚えていらっしゃいました。清水脩氏のご実家の佛足寺と親交のあった十三の長安寺に、新北野中学校勤務時代に下宿していた関係から、大好きであった清水脩氏を当時の校長に推薦したとのことでした。記念誌等の学校の資料には、作詞者の小野十三郎氏が来校して、校舎の屋上から、歌詞にある「北摂の山」を見渡していたとの記述はあるものの、作曲者については、詳しいことは分からず、生きた証人を得ることで、一気に物語がつながりました。

楽譜については、後日、久しぶりに古巣の箕面高校を訪ね、音楽科の現教諭からコピーをいただくことができました。昭和41年当時から代々受け継がれてきた手書きの元原稿を見せられ、数十年を経てぼろぼろになりながらも、校歌自体は、生徒によって歌い継がれ、卒業生の心の中に生きつづけていくのだと、歌の力の偉大さを再認識した次第です。

先日、英語学科15回の卒業後50年のクラス会がありました。男女合わせて出席者17名。20代の若者が突然、70代のシニアになって再会するのですから、その落差に少々不安はありましたが、20分も経てば、すっかり学生時代の気分です。宴の最後は、名古屋から駆けつけてくれたグリーOBのIさんのリードで、学歌、Varsity、

Gaigo Will Shine Tonight 等、Faricy先生の会話の授業でよく歌い、グリー OB 合唱団でもおなじみの曲を合唱しました。

今、余生に彩りを添えてくれるものの一つとして、外大グリークラブOB合唱団の存在があります。故山口慶四郎先生がつかないでくださったご縁ですが、折に触れ、会報『咲耶』に残してくださった先生のご寄稿を読み返し、在りし日を偲んでいます。

グリークラブが大好きだった山口先生

森滋 (昭41 A)

グリークラブの歴史を語るとき、私は山口慶四郎先生の功績をぜひ後世に伝えてほしいと願っている。

これほどグリークラブを愛した先生は他におられないと思う。学生時代は存じあげなかったが、1975年春からグリークラブの顧問に就任され、退官するまで顧問を続けられ、最後にこう挨拶されている。「グリークラブが大好きでした。新入歓迎、演奏会打ち上げ、追い出しコンパ、すべて出席しましたが、希少価値に類する男っぽい世界で、敬老精神に富むメンバーに囲まれて私なりに青春の灯をともし続けることができたのは諸君のおかげでした」と。

グリークラブが休部となって2003年にOB合唱団が結成されると自ら名誉顧問に就任され、私たちに数多くの演奏の場をプロデュースしてくださいました。司馬遼太郎氏と同期だったというご縁や幅広い人脈を生かされ「佐原真さん追悼演奏会」(2004年)「菜の花コンサート」(2005年と2010年)や「姫路文学館コンサート」(2007年と2011年)「さよならわれらが大阪外国語大学」(2007年)を次々と企画されました。周年記念演奏会とは別のこうした発表の場は私たちの大きな励みとなり、合唱団活動を続けていく力強い支えとなったのです。

2016年11月、創部90周年記念演奏会は私たちの思い出深い外大跡地に建つ大阪国際交流センターで開催できた。この会場を借りることができたのも先生の尽力あって実現したのだが、先生はその年の1月、91歳で亡くなられた。楽しみにしておられた記念演奏会にお招きできなかったのは痛恨の極みだった。

あの笑顔が忘れられない。「君らの若さを吸い取るため、いつもの店で待つ」。練習後、私たちの酒席にふらりと表れ、団員との談笑を楽しまれました。「(家族から)放し飼いを許された不良長寿」と自ら名乗り、気さくでユーモアに富んだお人柄はグリークラブの人気者でした。お別れは全国から駆け付けた団員約40人で先生の大好きな「Gaigo Will Shine」「月光とピエロ」など4曲を歌いお見送りしました。「伝統の灯を消さじと立ち上がったOB合唱団」が先生の我々に対する誉め言葉でした。ご期待に応える努力を続けたい。

山口慶四郎先生の思い出

樽井一仁（昭50 R）

山口慶四郎先生と学生時代は、そんなに近いという関係ではありませんでした。私が入学する以前の1969年、和歌山大学からロシア語科教授として迎えられ、翌年には学生部長に就任されました。「大阪外大は、来たばかりの先生に学生部長を押し付ける酷い大学だ」とよく愚痴っておられました。山口先生の授業はロシア語で読む「ソ連経済入門」を取った位です。山口先生がグリークラブの顧問に就任されたのは、私が卒業してからです。

1982年にクウェートから帰国した時、ゼミ担当であった岡本教授に、新しい箕面校舎を見に来ないかと誘われました（この箕面校舎も2021年には移転します）。3月20日、千里中央駅からのバスで山口先生と一緒に、また帰りのバスでも一緒になりグリークラブの話題で話が弾みました。

山口先生の川西の自宅は、私の祖父の家の近くでした。山口先生の自宅を探しに行くと先生の家は直ぐに見つかりました。ロシアの衛星放送を見るために、大きなパラボラアンテナが立っていたからです。1995年から1997年の1月2日には、年始の挨拶に伺い山口先生秘蔵のワインを二人で楽しみました。2002年に祖父が99歳で亡くなってからは、山口邸には足が遠のきました。

私が咲耶会東京支部長を務めていた2010年4月12日には、東京支部の月例会で「私の大阪外国語大学論」を講演してもらいました。

2014年の12月に山口先生から電話がありました。「来春で青山墓地への墓参りが最後になる。娘から危ないので東京へ行くのは最後にしてほしいと言われている。ついては樽井君に頼みがある。月例会で話をさせてほしい。またロシア語の皆さんとも話したい」という依頼でした。そこで2015年5月11日昼に月例会、その後青山墓地へ墓参り、夜はロシア語を中心とした会食というスケジュールを組みました。月例会では「海軍情報士官が戦争体験を回想する～なぜ、戦争を早期に終結できなかったのか？～」を熱く語って頂きました。立派なA3の資料を準備されましたので、コンビニでコピーした覚えがあります。月例会参加者は51名で、2000年以降では最多でした（平均25名前後）。内訳はロシア語16名、グリークラブ6名（内4名はロシア語・グリー）でした。夜の懇親会は神保町の中華料理「揚子江」で行い34名集まりました。上海から会議のため一時帰国していた安良君も参加しグリークラブは総勢8名、最後は歌合戦になりました。山口先生は十八番の「ボルガの舟歌」を朗々と歌われました。

翌5月12日、鉄道オタクの山口先生は、乗るのを楽しみにしていた北陸新幹線に乗り、金沢経由で大阪に戻られました。

山口先生の思い出（いのしし退治）

梅垣誠（昭58 E）

毎年冬に、田舎の代名詞と言われる丹波の地にグリーの面々が集まって、ポタン鍋を囲みながら放歌高吟コンパをし始めたのは20世紀の末まで遡ります。

「山口先生が生きておられる間に一度集まっておこう、あの酒飲みの大タバコ吸いではいつ亡くなるかわからんからな」「それもそうやな」と言って先生を囲んで集まったのが始まりでした。連絡網もなく、なんとなくの口コミでしか連絡の行かなかった集まりでした。

その後、毎年「先生が生きておられる間に…」と言いながら集まっていましたが、不良長寿を標榜される先生は至ってお元気で、欠席されたのは風邪を引いて奥様に「行ってはならん」と止められた一回きり、ご参加の度に朗々たる声で「ボルガ」を熱唱され、この集まりを「猪退治」と命名され、そうこうしているうちに恒例の年中行事になってしまい、段々と集まる年代も拡大していきました。

今から思い起こせば2015年の1月に集まった時、先生が紫煙をくゆらしながら私に「ここに来れるのは今回が最後かもしれん」とおっしゃいました。「何言うってんです、来年になったらちゃんと来てはりますて」と言いましたものの、それが現実になってしまいました。その年の年末に、ぼたん鍋を手土産にホスピスに御見舞に行きましたところ、香りを嗅いで「おう、これこれ」とばかりにうなずかれ「コップ持って来い！冷蔵庫にビールがある、出せ！こっちの棚にあてが入っとる、出せ！」と矢継ぎ早に指図をされ、病室で思いもかけぬ酒盛りが始まったのも、今生の別れにふさわしいものでした。

2016年以来、先生の遺影を掲げての献歌、献酒、献煙、献猪鍋の会となりました。もともと「先生が生きておられる間に…」と言って始まった会ですので、これで良いのでしょうか。年に一回、山口先生をあの世からお招きし、旧知のグリーの仲間と共に歌と酒とぼたん鍋で、浮世を忘れ、安らぎの別世界を満喫できるのはオツなものですね。日頃OB合唱団に参加できずに、いささか肩身の狭い思いをしていますが、ここでは大手を振って参加して、グリーを満喫できます。ここから次のOB合唱団を担うメンバーが現れるのでしょうかね。

山口慶四郎先生の思い出

小林卓郎（昭60 R）

昭和56年ロシア語科に入学しました。その当時ロシア語科の主任教授だったのが山口先生です。1～2年生ではソ連の政治経済に関する授業、3年からはゼミの担当教授として卒業までお世話になりました。山口先生の講義はとてもわかりやすく、大きな手振りと歌うような抑揚の話し方が印象に残っています。

しかし、山口先生との思い出は外大グリークラブの顧問として応援していただいたことが大きいです。演奏会の打ち上げには必ず参加されていました。グリークラブの飲み会の後半は、参加者全員で愛唱歌を合唱するのですが、山口先生はそれに応えて「ヴォルガの舟歌」を力を振り絞って歌ってくれました。

グリークラブの発展にもご尽力いただき、ソ連への演奏旅行も企画していらっしゃったのですが、私が入学した時にはアフガニスタンへの侵攻が始まっており、実現が難しい環境になっていたのが残念です。

卒業後、OB会の活動も活発になっていると聞いておりましたが、私はなかなか参加できていませんでした。2007年から故郷の愛知県に転勤になったのをきっかけに昭和58年卒梅垣さんの三友楼で毎年開催されるOB会に参加するようになりました。山口先生はここにも毎年参加され、そこでOB合唱団に参加したらどうか（しなさい）とお話をいただきました。2012年の愛知教育大学男声合唱団OB会とのジョイントコンサートに合わせて名古屋のOBの皆さんの練習に参加させてもらうようになりました。

名古屋のコンサートの直前に山口先生が、愛知県知多半島の沖にある篠島に行きたいとおっしゃっていると聞きました。たまたまその前年に家族で篠島に行ったことがあったので、私の妻（ロシア語科出身で山口先生を知っていました）と3人で行くことになりました。

山口先生は定年後、学生時代の友人グループで篠島に来たことがありとても楽しかった思い出があったそうです。懐かしそうに散策されていました。

また、先生が交換教授でソ連にいらっしゃったときに、外大のOBや現地の方々と交流された話もきかせていただき、とても貴重なひとときでした。

いつまでもお元気でいらっしゃると思っていたのですが、本当に残念で悲しいことに、平成28年1月にご病気のためお亡くなりになりました。外大グリーのOBにとっては、いつまでもなくてはならない大切な先生です。

山口慶四郎先生に励まされて

松村尚人（昭62ⅡS）

いつから続いていたのかわからないのですが、定期演奏会の時に四回生の人は「グリーンファン」という人物からプレゼントをもらっていました。私も四回生の定期演奏会の時「グリーンファン」さんからプレゼントを貰いました。ネクタイピンでした。演奏会場の受付に四回生の人数分を預けてくださったので直接手渡されたのではありません。一体だれなんだろうと皆不思議に思っているいろんな噂があり、山口慶四郎先生だろうとか、一年上のある先輩のご両親ではないかとか、いろいろ憶測ができましたが、結局だれも「グリーンファン」さんの真相を知らなかったと思います。もしかしたら、今この寄稿をお読みになっているどなたか大先輩の関係の方かもしれませんし、また、真相を知っている方もいるかもしれません。しかし、少なくとも私は真相も、その後いつまで続いていたのかもわかりません。また、毎年の恒例だったので「グリーンファン」さんからプレゼントをもらったOBの方も多くおられると思います。

私はその貰ったプレゼントを早速使い始めました。そのネクタイピンをつけた日は、なんだかいいことがあるような気がして社会人になってもよく使っていました。



年月が経ち2015年の秋、山口先生の奥様から電話をいただきました。先生が入院していると聞きました。肺炎のため入院した後、検査をしたら肺炎が治ったのに癌が見つかったということでした。目標は、まず一月のお孫さんの結婚式にでることだそうでした。

2016年の元旦に川西の病院にお見舞いに行きました。正月なので樽酒とワイン、そしてグリーンに関係する写真なども持参しました。結局お飲みにはならなかったのですが「この病室は酒の持ち込みOKということを知ってたんか」とずいぶん喜んでいただきました。

この時はいろいろ話すことができました。入院する直前まで和歌山に行っていたことなど、精力的に「放し飼い活動」をされていました。そういえば奥様も先生は外に出て行って人と話すのが好きだとおっしゃっていました。

翌々週から私がスペインに出張に行くということを話したら、バルセロナのカタルーニャ音楽堂のことを教えてくださいました。「バルセロナといえばガウディもさることながら、もう一人優秀な建築家がいる、その建築家が建てたカタルーニャ音楽堂というすばらしいコンサートホールがある」とのこと。先生は娘さんから聞いて知ったそうで、そこで音楽を聴いたことがあるとのことでした。また、グリーの

人たちが写っている写真を見て先生はガッツポーズをしてニコッとされました。

20日後、スペイン出張中に先生の訃報を聞きました。マドリッドからジローナという町に移動するときバルセロナのカタルーニャ音楽堂に立ち寄りました。その日はちょうど日本では山口先生の葬儀の日でした。その音楽堂は世界遺産ですばらしいホールでした。このときは中を見学するだけでしたが、その二か月後、再び足を運んでマーラーの交響曲を聴くことができました。舞台と客席が近く、一体感を味わえるようなホールで音楽を聴くことができました。これで先生と同じ体験ができました。

そういえば、お見舞いに行ったときに「グリーンファン」のことを聞くのを忘れていました。今となってはもう聞くことができません。あのガッツポーズとニコッとされた笑顔が忘れられません。そして、四回生のときの色紙の寄せ書きに、山口先生からは、「松村君、グリーの根性でこれからもがんばってください！」と書いてあります。

山口先生のことを思い出した時、このように励まされて過ごしています。



平成19年4月8日「姫路文学館コンサート」時の合同写真（山口先生と林先生を囲んで）

今年もようやく 極便りがきかぬようになりました。

クリレーターの皆様には夫々の廣田ゆりのことについても
お話を頂戴して、有難うございます。夫は

いつもクリレーターの練習日と、仁のしやほしく

なりました。私とは二十一年あまりの結婚生活

が、素晴らしい。家庭生活も大切に一年中毎日

お酒をたのしんで食事もおいしい。よく食べたいです。

元気で子供達と家庭生活を大切に思っています。

くみまーのこと。感謝もしています。

クリレーターの皆様、有難うございました。

どうぞよろしくお伝えいたします。

三月十日
東 山口真砂

本誌編集にあたり、山口先生の奥様から南野代表宛に書簡を頂戴しました。
ここに掲載させていただきます。(編集委員会)

第6章

OB合唱団の指導者



林誠 先生

略歴

大阪音楽大学卒業、同大学院修了。

1971年日伊声楽コンクールソシエナ大賞、同年音楽コンクール第3位、1976年大阪文化祭賞、大阪府民劇場賞、音楽クリティック・クラブ賞、1979年再び大阪文化祭賞を受賞。1981年には創立100周年のために来日した小沢征爾指揮ボストン交響楽団の第九公演にソリストとして出演。1982年東京、大阪でのリサイタルに対し芸術選奨文部大臣賞を受賞、1983年大阪府民劇場賞を受賞。

1987年「道化師」のカニオと「カヴァレリア・ルスティカーナ」のトゥリッドゥの二役を一晩で演じ絶賛される。この間、小澤征爾プロダクションオペラ「トスカ」「ホフマン物語」「スペードの女王」「サロメ」などを主演。

大阪音楽大学大学院名誉教授

日本演奏家連盟会員 関西歌劇団常務理事

クオレマラソンコンサート実行委員、箕面市合唱祭実行委員長

全日本学生音楽コンクール、神戸国際音楽コンクール、泉の森新人オーディション、琵琶湖ホールアンサンブルオーディション等審査員

大阪外国語大学グリークラブOB合唱団指揮者

林誠先生と大阪外語グリークラブとの出会いは昭和48年（1973）の夏に遡る。当時の幹事が林先生をよくご存知の方の紹介で林先生にお会いし、林先生にヴォイストレーナーとして大阪音大の学生の紹介をお願いしたところ、「私が引き受けましょう」と、林先生ご自身がヴォイストレーナーを引き受けていただいたのである。

その年の12月におこなわれた第17回定期演奏会のプログラムには「外大グリーが長年待ち望んだヴォイストレーナーです」と林先生を紹介している。

ヴォイストレーナーであった林先生が外語グリーを初めて指揮をされたのが、昭

和51年（1976）9月に催された「近畿四大学交歓演奏会」（神戸商科大学グリークラブ、姫路工業大学グリークラブ、滋賀大学経済学部グリークラブとのジョイントコンサート）であった。この演奏会の合同ステージ「オペラ曲集」で、林先生が指揮をされたのである。

そして、翌年の第21回定期演奏会（昭和52年（1977）12月）でも客演指揮者としてステージに登場することになる。清水脩作詞作曲の「山に祈る」が定期演奏会における最初の指揮であった。この時のプログラムには、林先生へのインタビュー記事が掲載されているが、そのなかで、外語グリーについて聞かれ、「声自身は、僕の思っていたイメージの声を、時々ですが出してくれるようになりました。そんな声が出るといいんですが」と、ユーモアたっぷりに答えておられる。

平成10年（1998）、グリーの部員はわずか2名となり、閉部を余儀なくされることになるが、その前年の平成9年（1997）1月におこなわれた「創部70周年記念第40回定期演奏会」では、現役部員8名にグリーOBが参加して、林先生の指揮のもと、組曲「月光とピエロ」を演奏している。

翌年に外語グリーは閉部となるが、現役最後となる第41回定期演奏会でも、林先生の指揮で最終ステージ（男声合唱組曲「海鳥の詩」）を締めている。昭和48年（1973）夏から平成10年（1998）1月までの24年間余りにわたり、グリークラブを指導していただいたことになる。しかし、林誠先生との縁はグリークラブが閉部となっても、平成14年（2002）東京OB会と東京外国語大学混声コール・ソレイユとのジョイントコンサートの客演指揮を皮切りに続くことになる。

平成15年（2003）10月、外語グリーOB合唱団（大阪）は、林先生を正式に指導者として迎え、林先生の指揮・指導の下でグリークラブOB演奏会の開催や様々な演奏会への出演など精力的に活動を始めた。

平成19年（2007）年9月の「さようならわれらが大阪外国語大学」集会、淡路島での2回の「菜の花コンサート」、「姫路文学館コンサート」（同じく2回）、創部80周年、85周年、88周年、90周年記念コンサート、「『山に祈る』を唱う」、大阪男声合唱団定演での「月光とピエロ」賛助、名古屋でのジョイントコンサートなど指揮をしていただいた演奏会は数多くある。

平成26年（2014）には退官記念の「林誠祭」が大阪音楽大学カレッジオペラハウスで2日間に渡って行われた。外大グリーは全国から70余名のOBが集まって「月光とピエロ」を歌い上げた。

林先生は大阪音楽大学退官後も勢力的に活動を続けておられ、関西歌劇団、伊丹市民オペラなどで主演されている。合唱では箕面市民合唱団の指揮者である関係から毎年行われる箕面市合唱祭では、グリークラブOB合唱団（大阪・名古屋）と共に歩んでおられる。また大阪音大音楽科の教え子が中心になっている「クオレの会」でもチャリティコンサートなど継続しておられ、OB合唱団も平成26年（2014）鉄人28号の町神戸市長田でのコンサート、平成28年（2016）兵庫芸文小ホールでのコンサートでもご一緒させていただいた。また、昭和50年代卒OBが毎年行ってい

る兵庫県丹波市柏原町でのOB会（俗称ボタン鍋宴会）にも出席されており「外大グリーと共にある青春」を続けておられる。

今年（平成30年）の12月には清水脩33回忌法要ならびに記念演奏会が予定されており、浄土真宗大谷派難波別院南御堂本堂で「月光とピエロ」を指揮することを楽しみにされている。翌年（平成31年）は外大グリーOB全国合同演奏会が大阪で予定されており、林先生の指揮で清水脩作曲の組曲「大手拓次の三つの詩」とロシア民謡5曲を演奏する。

先生からのメッセージ

林誠（大阪音楽大学大学院名誉教授）

上八学舎、練習に参上する小生は、仰天する光景に出くわす。キャンパスを貫通する広い府道を造りの良い重厚なアップライトピアノを台車も無く、「ガラガラッ」と力強く運ぶ数名の学生。行く手には広くはない階段、確かC1教室。スケールが大きく、おおらかで団結力のある外大男性の色と魂を観る思いがした事を思い出す。

確実にコンクール突破可能なほどの声量豊かで美声の団員が多く、狭い専門の世界に居た当時の自分は認識を改めた事でもあった。

当時は今日のようにグローバルな発声理論も無く、フッスラーの分厚い発声理論書に基づくものと、実声を重視するベルカント方式が混在。僕自身も、独、伊での勉強より帰国したばかりで経験浅く、求められる責務を果たせていたか、今思うに心許ない。だが、不自然に加工された声での和音造りは避け、各団員が、より自然に唄うことにより鳴り始める音の重なりこそが大切であろう、との目標は、今も変わらない。

当時の僕より数年年嵩で威風堂々の団員も数名在籍、学生自治会の重要ポストを熱く務める様も懐かしい。年初には、部長はじめ各役員が我が家を来訪、用意した肉をつぎつぎと平らげ鍋底が度々見え、家内が慌てる等愉快的思い出。

主務大学のオペラ講座の学生は、日常競争に曝されることで消耗する者も少なくはない。その対応に心砕くことも。そんな教師活動の中純粹に全霊で音楽する外大グリーとの「時」は、僕にとってかけがえない「刻」となっていった。現在ライフワークとしている音楽ボランティアグループ「クオレの会」運営をはじめ機会ある度に、音楽の社会化を提案する僕の思いは歴代の外大グリーメン諸代から教えられ授かったものである。

個性豊かな代々の学生指揮者は毎年自然発生的に選ばれ、定期演奏会では全部員

の協力のもと、その力量を伸ばし、伝統を造りあげてきた。

キャンパスが箕面に移転した頃より、女子学生の増加もあり大学の雰囲気は変化することとなったが、千里中央からランニング登校する強者が居る等、外大カラーは脈々と受け継がれていた。

外大グリーをこよなく愛した山口慶四郎顧問のもと、演奏の中心に清水作品を据え、外大独自のカラーを保った活動が確実に続くことになる。記念の定演では清水氏に現役とOBの合同演奏を提案し、その下稽古を通じて改めて作品の深さを実感した。この作業により清水氏の後に続く作曲家達についても展望する貴重な機会を得ることが出来た。

毎年の春、夏合宿は殊に思い出多い。鉢伏高原へは自転車で参加。信州車山には日程を違え一日早く到着。夜な夜な『飛行機!』で放り投げられる、等々。今は遠いが、若々しい、イヤ、若気のいたり満載であった。

小生の退任コンサートでは、遠く海外、全国からオペラハウスのステージに溢れんばかりの面々に馳せ参じて頂き、「外大ピエロ」を唄い上げて頂けた。「先輩清水を歌う」との想いが関西楽壇の話題となる良質の演奏を生む事となった。嬉しく誇らしい外大グリーのパワーである。多忙の中参加いただいた諸氏に改めてお礼を申し上げる。

この団との本番で常を感じることもある。指揮をしつつ背に感じる何とも和やか、温かに流れ来る空気感だ。これこそ永く活動を続けてきた結果による貴重な宝であろう。

現役学生の活動が休止となった折、唯一人頑張る松尾君であったが、OB合唱団の存在にどれ程の「力」を得た事か。

先日、創部九十年、百年を見据えた相談を受けた。内容濃い選曲だった。自分が提案すべく時を待っていた作品が含まれており大変嬉しい思いがした。一人一人が気持ちを声に乗せ、自然に歌い上げ、歌い切る。外大グリーの音が、進化し深化する事を期待します。

音源となる団員諸兄の健康こそ必須。皆様の平安、充実、ご活躍を祈りつつ拙文を閉じることと致します。

林先生との出会い

樽井一仁（昭50 R）

林誠先生と外大グリーとの出会いについてお話しします。昭和48年、私が副部長に就任して最初の仕事がヴォイストレーナー制度の導入でした。当時、関西の主要大学グリークラブでヴォイストレーナーがいなかったのは外大グリーだけでした。ヴォイストレーナーを雇う金がないという事でしたので、グリーOBから寄付金を募

ることにして、初めて東京のOB廻りを夏休みに実施しました。東京では、故清水脩先生からの1万円を含11万円、大阪のOBから14万円、合計25万円を軍資金として用意できました。次期副部長に内定していた上田氏が、自宅近所で大阪音大創設者一族の永井さんが居て、よく知っているということで、早速お願いに行ってもらいました。外大グリーの金銭事情を話し、音大生をヴォイストレーナーとして採用したいので紹介してほしいとの依頼に対して、林先生を紹介して下さいました。上田氏が林先生に会って、学生を推薦してほしいとお願いしたところ、林先生は「私が引き受けましょう」と瓢箪から駒のような話になりました。昭和48年の夏休み後最初の練習から、林先生の指導が始まりました。高い音が出るというだけでテナーを歌っていた同級生が、その人の一番美しく歌える声域はベースという話で、ベースに転向したという逸話もありました。林先生の指導を受けてから外大グリーは大きく変貌していったと感じています。林先生御自身も、「大阪外大グリーは自分の青春の一部である！」とおっしゃられています。

外大グリーと合唱

山口伸（昭59D）

私が入学した昭和54年の夏に外大は上八から箕面へ移転することが決まっており、北千里のさらに北にある箕面市小野原の（農家の牛小屋を改造した6部屋からなり、部屋の仕切りは薄いベニヤ板1枚という）素敵な下宿（同期の梅垣君と前田君も安い部屋代を求めてここへ移ってきた）からバスと電車を乗り継いで上八まで通学を始めた。大学に入れば多少なりともアカデミックな勉強ができるかと期待していたが、ドイツ語のABCを覚えることから始まる単調な授業に興味を持たず、都会風のクラスメートにも馴染めず、合唱の経験はほとんどなかったが、地声の低さには少々自信があったため、居場所を求めてほぼ確信的に入部したのがグリーだった。

当時グリーには40名弱の部員がいたが、他の大学に比べれば規模は小さく、どんな人が教えているのか心配だったが、そこで指導してくださっていたのは林誠先生で、聞けばなんとこの年の7月、小澤征爾指揮のオペラ「トスカ」でトスカの恋人役カヴァラドッシを歌われるという素晴らしい方だった。

林先生の練習は毎回先生のコンサートを聴いているようで、自分も何とかいい声が出せるよう頑張ったが、当時のベースは6回生の片川徳明さん、5回生の伊藤道彦さん、3回生の前田芳秀さんと村川健一さん、2回生の秋田泰弘さんと上原聡さんと山内清之さん、同期の秋本仁君と前田哲男君と私の10名という強力な布陣で、練習で林先生から「ベースいいねえ」と言われることが多く、自分が褒められていると勘違いして気分よく歌っていた。なお、片川さんのお話では、私が入部する前の

ベースはさらに強力で、林先生からベルリンドイツオペラの合唱団に匹敵すると言われたこともあったそうだ。

その後、林先生がファウストを歌われた大阪国際フェスティバルのベルリオーズ「ファウストの劫罰」の合唱に参加したり、ホセを歌われた関西歌劇団の「カルメン」では初めて衣装を着けて、関西歌劇団の綺麗なお姉さま方と舞台上で歌ったり（関西合唱界の重鎮日下部吉彦氏から合唱は酷評されたが）、毎年12月30日に行われる朝比奈隆指揮大フィルの第九に大フィル合唱団の一員として出演したり（テナーソロは林先生、バリトンソロは木村俊光氏だった）と、林先生のお蔭でグリーン以外でも貴重な経験を得ることができた

グリーンに所属している間、グリーン以外の色々な指揮者の指揮で歌うことも多かったが、林先生のご指導を受けた後では、合唱団の前で手を動かしているだけだったり、自己顕示欲を満たすためだけに指揮をしていることが透けて見えたり、発声の指導ができない指導者が多いと感じることも多かった。

卒業後は関学グリーの若手OBが結成したコールセコインデに誘われて数年歌ったりしたが、勤務の都合で日本を離れることになり合唱とも縁遠い生活となった。1992年から1996年までのデュッセルドルフ駐在時には、グリーの先輩柳楽さんに誘っていただき、日本人駐在員が中心メンバーのデュッセルドルフ日本人男声合唱団に所属、モーゼル川河畔の村から招かれ、ドイツ民謡を歌いながらワインを飲んだことなど、楽しい思い出が数多くある。

1996年の帰国後は、日本に戻ったデュッセルドルフ日本人男声合唱団のメンバーと歌ったりもしていたが徐々に疎遠になり、テニスなど専ら体を動かす方が中心となっていたが、2014年11月、東京で活動されているグリーンOB合唱団と阪大男声のジョイントコンサートで林先生が「月光とピエロ」を指揮されるということを知り、久しぶりにステージに上がった。その際、OB合唱団（東京）をご指導くださっている小貫先生は林先生のお弟子さんで、坂井先生は小貫先生の奥様でいらっしゃることを知り、私の合唱の原点である林先生とのお縁を感じ、OB合唱団（東京）のお世話になろうと決めた。57歳になったがOB合唱団ではまだ若手、今後も小貫・坂井両先生、先輩方のご指導を仰ぎつつ、少しでもうまく歌えるように精進したい。



小貫岩夫 先生

略歴

北海道小樽市出身。同志社大学神学部を卒業後、大阪音楽大学首席卒業。文化庁オペラ研修所第11期修了。1998年度文化庁派遣芸術家在外研修員としてミラノに留学。第70回日本音楽コンクール声楽部門入選。第36回日伊声楽コンクール2位、第13回飯塚新人音楽コンクール大賞（文部大臣奨励賞他）、第5回コンセール・マロニエ21最優秀賞受賞。

第66回読売新人演奏会、第6回ABC新人コンサート、第1回大阪音楽大学新人演奏会出演。

同志社時代はグリークラブに所属し、福永陽一郎、畑中良輔両氏の指導を受ける。音大在学中の1995年に抜擢され、「魔笛」のタミーノでテオ・アダムと共演しデビュー（堺シティオペラ）。この成功により翌年、同役でケムニッツ市立歌劇場（ドイツ）に招聘出演し、地元紙より好評を得る。2000年R.シュトラウス「サロメ」（若杉弘指揮）で新国立劇場デビュー。

以降、数々のオペラやオペレッタに出演。ワーグナー「ニュルンベルクのマイスタージンガー」（二期会創立50周年記念公演）の難役ダーヴィット役、二期会「コジ・ファン・トゥッテ」（宮本亜門演出・文化庁芸術祭大賞受賞）フェランド役、ヴェルディ「リゴレット」のマントヴァ公爵、「ファルスタッフ」のフェントン、「椿姫」（二期会公演）（02）などなど。新国立劇場新制作の「トゥーランドット」ではポン役を好演。演出家はじめ、スタッフからの絶大な信頼を得、その模様はNHKで全国放送された。その他ベートーヴェン「第九」、ヘンデル「メサイヤ」、「レクイエム」（ヴェルディ、モーツァルト、ドヴォルザーク）、「小荘厳ミサ」（ロッシーニ）、「荘厳ミサ」（ベートーヴェン）、「カンタータ」「ミサ曲」（バッハ）などの宗教曲も歌っている。

またNHK-FM「名曲リサイタル」を始め、ラジオ・テレビ等にも度々出演している。指揮者では朝比奈隆、飯守泰次郎、大野和士、秋山和慶、外山雄三、大友直人、現

田茂夫、下野竜也ら、オーケストラでは東京フィルハーモニー交響楽団、東京都交響楽団、東京交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、大阪シンフォニカー交響楽団、京都市交響楽団、札幌交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、九州交響楽団などと共演。

2001年5月、イシハラホール（大阪）にてソロ・リサイタルを開催し好評を得る。近年は大阪で5年連続、2010年からは毎年東京と大阪で開くなど、リサイタルに積極的に取り組んでいる。

林誠、疋田生次郎、松本美和子、田口興輔、V・テッラノーヴァ、R・ネーグリの各氏に師事。

二期会、日伊音楽協会、堺シティオペラ各会員。

大阪外国語大学グリークラブOB合唱団指揮者。

小貫先生は、同志社大学に入学後、グリークラブに所属し、卒業後大阪音楽大学に進学、現在のオペラ歌手への道を進むことになる。

二期会のウェブサイト「niki kai 21」の中のインタビュー記事で、音楽に進むようになった経緯について以下のように述べておられる。

もともと北海道から京都に出てきて、同志社大学でグリークラブに勧誘されて、それからですね。同志社は神学部に入ったんです。父が牧師をしていたので、そういう影響もあったのかな。特に牧師になろうと思って同志社に行ったわけではないんですが、北海道の周りの人たちは期待していたと思うんですけど。道を踏み外したというか（笑）。

ちょうどグリーの一年目の定期演奏会で『メリー・ウィドー』を男声合唱に編曲したのを演奏することになり、その秋に二期会オペラの文化庁移動芸術祭『メリー・ウィドー』公演が京都に来たんです。

「じゃあ、グリー皆で観にいこう！」って行ったんですけど、その時に二期会合唱団に入りたての姉や長谷川顯さんも出演していたんです（小貫さんの姉の長谷川光栄さんは、バスの長谷川顯さんと結婚）。本格的で華やかなオペレッタの魅力に触れて、姉も出演しているし、グリーの仲間たちには鼻高々だったんですよ。それで舞台の世界への憧れが芽生え、興味が湧いたというのが正直なところです。

小さい頃、ヴァイオリンを少々習ったという素地はあったのですが、サッカーや野球、剣道などのスポーツもやっていたので、京都でグリークラブに勧誘されたのも、体格がよかったからじゃないですかね（笑）。けれどそれ以降、すっかり歌に魅了されて、結局、故郷の北海道に戻らずにさらに大阪音大に進むという選択をしました。音大を卒業する際に、姉から文化庁オペラ研修所のパン

フレットを貰い、「じゃあ、受けてみようかな」と、受けてみたら幸運にも受かったのが東京に出てきたのです。大阪音大でオペラ演出家の中村敬一さんから東京でも歌ってみたら？と言われていましたし、東京で自分の力を試そうという気持ちもありました。

前述の小貫先生の略歴にあるように、多くのオペラやオペレッタに出演するだけでなく、毎年のリサイタル開催、テレビなどへの出演と大活躍をされている。

小貫先生とグリークラブOB合唱団（東京）との出会いは平成14年（2002）の夏に遡る。それ以来、小貫先生はますます多忙になっていくにもかかわらず、16年間、OB合唱団の指揮・指導をしてくださっている。

小貫先生は、毎回の練習時に30分以上かけてたっぷり発声練習をしたうえで、曲の練習に入られる。我々団員は、その意味で、毎回先生の美声を目の前で聴くことが出来るという幸運にあずかっている。

2016年12月3日の「創部90周年記念演奏会（東京）」の最終ステージでは、120名による組曲「月光とピエロ」を指揮されたほか、第4ステージの「オペレッタの散歩道」では、坂井先生とともにオペレッタ4曲を披露された（54ページ参照）。また、アンコールでは、「最上川舟唄」で指揮とソロの2役をこなし、聴衆から大喝采を受けた。

このように素晴らしい指揮者・指導者である小貫先生との付き合いは、これからもずっと続いていくという幸せを感じながら、これからの練習に励んでいきたい。

先生からのメッセージ

小貫岩夫

大阪外国語大学グリークラブ創部90周年。誠におめでとうございます。私が大阪外国語大学グリークラブ（以下外語グリーとさせていただきます）と関わるようになったのは、大阪音楽大学の師匠、林誠先生からお電話をいただいたところから始まりました。音大卒業後、イタリア留学を経て東京で活動を始めて間もない頃のことです。「東京で外語グリーOBの指導をしてくれないか」というものでした。音大に行く前、同志社大学でグリーに入っていた私は、男声合唱には馴染みはありましたが指導した経験はありませんでした。多少の不安を抱えながらも師匠の頼みを断るわけにも行かず（笑）、「はい、やります！」と答えました。当時、仕切っていたらっしゃった樽井さんと、都内のレストランでお会いし、東京での外語グリーとの

お付き合いが始まることとなりました。当時は「赤坂区民センター」の「美術室」や「調理室」などで練習が行われていました。もちろんピアノなど無く、「調理室」では調理用のシンクの脇に楽譜とミニキーボードを置いての指導でした。練習参加者も日によってマチマチで、時には4パート揃わず、私がない部分を代わりに歌ったことも…。よく覚えているのはやはり練習後の一杯（笑）です。青山一丁目のイタリアンなどで楽しく会食。野田さんに「先生という字は先に生まれるという意味があるのに僕よりだいぶ後に生まれた先生やね」などと言われたことも良い思い出です。あの頃一緒に歌っていた荻野さんや橋本さん、そして野田さんも天国へ行かれ、時の流れの速さを感じます。あの大変な時代をずっと支えてくださった当時の練習メンバーの皆さんには感謝しています。その後、紆余曲折を経て、今は体制も変わり、指導者に坂井美樹も加えていただき、外語グリーが大いに盛り上がりを見せているのは大変喜ばしいことです。今後も益々発展されますように。微力ながら力を尽くしていきたいと思っています。

小貫先生との出会い

樽井一仁（昭50 R）

2002年4月7日に東京麹町のカスケードホールで、「大阪外国語大学グリー OB 合唱団」（東京）の演奏会を初めて開きました。指揮者として大阪から林誠先生をお呼びしました。演奏会終了後の打ち上げパーティの席上で、野田大祐氏が林先生に「先生の教え子、東京におりまへんのか？」と尋ねたところ、「優秀な教え子がいますよ」との返事でした。

林先生の紹介で、小貫先生と初めて会ったのは、2002年7月2日でした。私の勤務先に近い青山一丁目のレストラン「青島」で食事をしながら、当方の条件（月2回の練習、練習日は小貫先生の空いている日、練習曲は清水脩先輩の曲と愛唱歌）を提示したところ快諾して頂きました。

初めての練習は、翌週の7月9日（火）赤坂区民センターの研修室で行いました。この記念すべき練習に参加したのは、小林、越水、山中、岸本、野田、大塚、荻野、樽井の8名でした。練習後、小貫先生を交えての反省会（飲み会）を青山のイタリアン・レストラン「ラ・ヴェルデ」で開催、ピザを肴にワインを飲みまくりました。

小貫先生とOB会(東京)

岸本保 (昭54 C)

OB会(東京)⁽¹⁾は、2000年代2008年まで毎年春に定期的に演奏会を開催していたが、小貫先生は2003年春の演奏会(Joint Concert 2003)で、すでにOB会の指揮をされている。2018年現在では、すでに15年にわたって我々をご指導いただいているのだ。

元々、同志社大学のグリークラブに入部されたのは、新勸で声をかけられ、飲み連れていかれたのがきっかけとおっしゃっていた。小中高とサッカー少年だった⁽²⁾そうである。天下の小貫先生もそのスタートは我々とあまり変わらない。

だから、特に音楽に長けていたわけでもない普通の学生がたまたま縁あってグリーに入団し、すべったころんだと悪戦苦闘しながら男声合唱を続けている、そんな野郎どもの生態や音楽レベルを、一緒に過ごして、一緒に歌って、肌で感じて理解されている。

そこが最初から英才教育だけを受けてきた世間一般のエリート声楽家とは違うところで、アマチュア、特に学生(学生上がり)の男声合唱団にとっては得難い指導者といえる。関西学院グリー、慶應ワグネル・ソサイエティー、立教グリー男声といった錚々たる大学男声合唱団が小貫先生に指導を受けているというのも大いにうなずけるところだ。



小貫先生は、練習で高度な技術を惜しげもなく開示してくださる。もちろん、我々のレベルではなかなか理解し、消化するのは困難な部分もあるが、それでも亀の歩みながらレベルアップできている気がする。本当なら、ご指導の様子をビデオにとって団の財産として残しておくべきだろう。

今でこそ、練習には常に二けたの人数が集まるOB合唱団(東京)ではあるが、2000年代は人数が少なく、一回の練習に出てくるのは数名のみ、パートが四つ揃わないこともしばしば、なんとか今日まで合唱団としての命脈を保てたのは、小貫先生の辛抱強いご指導のおかげといっても、過言ではない。

初期は、団としてどんな歌をうたうか方向性が定まらない時期もあり、小貫先生が楽譜を持ち込まれたこともあった。中国語で歌った草原情歌や映画「慕情」の主題歌(こちらは英語)はもう一度歌ってみたい楽曲である。

当時は、東京都港区の赤坂区民センターで平日の夜間に月2、3回練習していた。いつも会議室が借りられるわけではなく、ほとんどは調理室や美術室など、およそ

合唱とは似つかわしくない部屋で練習したものである。練習後の飲み会にも小貫先生はよく付き合ってください。当時の常連だった野田大祐氏、樽井一仁氏、五十嵐強氏や小生が小貫先生を囲んでいつも4～5人で飲んでいた。

人数が少ないのは合唱団としては致命的だが、小貫先生の団員一人一人への愛情あるご指導があった。入念な発声練習、ひとりずつ声を出させてのアドバイス、今から思えばずいぶんと贅沢な練習だった。

小貫先生のご指導で、めきめきと声が出るようになった人がいる。越水洋一氏は、2003年春の演奏会ではセカンドテナーで歌っておられたが、2006年の演奏会ではトップテナーで歌っておられた⁽³⁾。高いよい声が出るようになって、練習で本当に気持ちよさそうに歌っておられた姿を覚えている。

団員ひとりひとりとの交流も密なものがあり、たいへん練習熱心なメンバーであった荻野芳毅氏が「練習する曲がないときは讚美歌の混声のベースパートをひとりで歌ったりしている」と述べていたことに、小貫先生がたいそう感心しておられたこともあった。

同じ北海道出身の橋本和直氏が亡くなられたとき、小貫先生はメーリングリストに次のようなメッセージを寄せられている。

「ふるさとが同じ北海道の後志（しりべし）ということもあり、初めてお会いした時から「先生～」と親しみを込めて接してくださいました。ユーモアがあり、外大グリーへの熱い愛情を持った方だったと思います⁽⁴⁾」

小貫先生は、我々の指導を始められた頃もすでに活躍されていたが、現在はますますのご活躍ぶりで、多忙を極められている。小貫先生がテナーソロを歌われた「2014かわさき市民第九コンサート」⁽⁵⁾には、たまたま川崎市民として山本勝昭氏と小生が参加していたが、その打上げパーティの席で、山本氏から小貫先生にひとこと「外語グリーをお見捨てなく」、我々のいつわらざる思いを代表して吐露されたものだろう。引き続き、小貫先生の素晴らしいご指導を受けて歌い続けていきたいものである。

脚注：

(1) 外語グリー OBが集う合唱団の名称について、2000年代東京・大阪のそれぞれの地における活動が軌道に乗ったタイミングで、東京の樽井代表と大阪の岡田代表（いずれも当時）が協議の上、名称は大阪外国語大学グリークラブOB会として後ろに（東京）、（大阪）と付けることで合意したと聞く。岡田代表は、当時ご自身が手掛けた団のウェブサイトにも「大阪外大グリークラブOB会の練習サイト」という名称を付けておられる。2010年代に入っての規約改定まで、東京はその合意事項を遵守し続けていた。ここでは、主として2014年までの東京でのエピソードについて述べているので、OB会（東京）の名称を用いる。

(2) 二期会Webサイト「オペラを楽しむ 『魔弾の射手』キャストインタビュー 嘉目真木子・小貫岩夫」http://www.nikikai.net/enjoy/vol312_02.html 参照

(3) 「Joint Concert 2003」（2003/04/06）プログラム及び「大阪外国語大学グリークラブOB会（東京）2006年演奏会」（2006/04/01）プログラムのパート別団員名簿による

(4)OB会(東京)のメーリングリストメッセージ [oufs_glee_tokyo 1528] Re: 訃報・橋本和直氏
Fri. 26 Feb. 2010 14:34:42 +0900 より筆者が抜粋

(5)2014かわさき市民第九コンサート

日 時：平成26年12月21日(日) 午後2時開演
会 場：ミュージア川崎シンフォニーホール
管 弦 楽：川崎市民交響楽団
合 唱：2014かわさき市民第九合唱団
指 揮：角岳史
ソリスト：針生美智子(ソプラノ) / 牧野真由美(アルト) /
小貫岩夫(テノール) / 伊藤純(バリトン)

小貫先生とグリークラブ

松村尚人(昭62ⅡS)

私の職場に同志社大学グリーのOBがいます。大学入学は小貫先生と入れ替わりくらいで、入学した年に小貫先生はOB一年目だったということです。その同僚が新生の新歓コンパの時、鴨川で歌っていたら、橋の上からRide the Chariotのテナーソロが聞こえてきたということです。先輩から「あれが小貫さんや」と教えてもらったそうです。伝説の上手いトップテナーとして伝えられ、演奏会の録音を聴くと小貫先生の声がよく聞こえてくるとのことです。

いまや日本を代表するテノール歌手となられ、また、いろんな大学のグリークラブをボイストレーナーとして指導されていると聞きます。おそらく、ご自身もグリークラブを経験されたので大学のグリークラブの性質というものをよく理解され、また、馴染みを感じていらっしゃるのではないかと思います。私たちの平均年齢は現役大学生の3倍くらいですが、小貫先生からはどのように私たちのグリークラブが映っているのでしょうか。それはわかりませんが、私たちの創部80周年記念コンサートでは「月光とピエロ」を一緒に歌ってくださり、また、東京の練習では、いつも練習の最後にGaigo & Varsityを一緒に歌ってくださいます。私はそのことを嬉しく思っています。

毎年1月か2月に、小貫先生と坂井先生は東京新橋のレストランでディナー付コンサートを開いてくださいます。私たちがステージを身近に感じることができる楽しいコンサートです。このような企画をしていただけることにも感謝しております。

私は両先生のおかげで楽しく学ばせていただいています。そしていつまでもご指導をいただきたいと思っております。



坂井美樹 先生

略歴

大阪音楽大学音楽学部声楽専攻首席卒業。大阪音楽大学大学院オペラ研究室修了。
和歌山音楽コンクール2位（1位無し）、摂津音楽祭で大阪21世紀協会賞、銀賞を
2年連続受賞。

1997年、「ワルキューレ」のオルトリンデ役で関西二期会にデビュー。同年、黛敏
郎「金閣寺」の「女」役が好評を得、その模様はNHKで全国放送された。

1999年、イタリアのミラノに留学。留学中、ルーマニアでルーマニア国立トゥル
グムレシヨ管弦楽団と共演、またミラノでもコンサートに出演した。

数々のオペラに出演。モーツァルト作曲オペラ「フィガロの結婚」のケルビーノ、
スザンナ役の他、プッチーニ作曲オペラ「蝶々夫人」のケイト役、「修道女アン
ジェリカ」のジェノヴィエツファ役、フンパーティング作曲オペラ「ヘンゼルとグ
レーテル」のヘンゼル役、ワーグナー作曲「ワルキューレ」のオルトリンデ役など
で出演。特に故岩城宏之指揮、黛敏郎作曲のオペラ「金閣寺」（女役）は東京・大
阪で公演され、全国にテレビ放映された。また桂小米朝（現5代目米團治）ととも
にオペらくご「背広屋の利発な結婚」にも出演。オペラの楽しみ方を講演するなど、
オペラの普及に努めている。その他数多くのコンサートに出演。近年では小学校、
幼稚園、保育園などでのコンサート活動も精力的に行っている。

細川維、高須礼子、田原祥一郎、ブルーノ・ダル・モンテ、ピアンカ・マリア・カ
ゾーニ、田中千都子の各氏に師事。二期会準会員。

大阪外国語大学グリークラブOB合唱団（東京）指揮者

坂井先生が大阪外語グリーOB合唱団（東京）をご指導いただくようになったのが
2013年4月のことなので、はや5年が経過することになる。この間、男声合唱フェ
スティバルや東京都合唱祭で指揮をしていただき、また、2016年12月3日の創部90
周年記念演奏会では、OB合唱団（大阪）との合同による黒人霊歌の指揮もしてい

ただいた。それだけではない。この演奏会では、小貫先生と「オペレッタの散歩道」と題するステージを持っていただき、美しいソプラノと小貫先生とのデュエットを披露していただいた（54ページ参照）。

坂井先生は、ソプラノ歌手だけではなく、NPO法人「音楽で日本の笑顔を」を通じて、合唱の指導活動をおこなっておられる。NPO法人「音楽で日本の笑顔を」では、「みんなで笑顔で歌って元気になろう」をモットーに、「一緒に歌うことを通して、人と人との温もり、ふれあいを創って」いく活動をおこなっている。その中心的な活動が、全国にスマイル合唱団を創設し、その合唱団の指導をおこなうことである。2017年10月時点で、スマイル合唱団は1都6県に330団体強あり、6,000人強の人達が歌っている。そして、2021年に武道館でスマイル大合唱祭をおこなうことを目標としている（スマイル合唱団のウェブサイトから引用）。

坂井先生は、この活動に賛同した音楽家たちとともに、スマイル合唱団の指導をおこなっておられる。

先生からのメッセージ

坂井美樹

大阪外国語大学グリークラブ創立90周年、誠におめでとうございます。

そして、90周年記念誌に寄稿する機会を頂き、恐縮しつつも感謝申し上げます。私と外大の皆さんのお付き合いは5年ほど前と、まだ浅いものですが、初めて外大の皆さんの演奏を聴いたのは13年前の外大の演奏会です。まだ乳母車に乗る息子とカスケードホールに聴きに行きました。私は男声合唱に造詣の深いわけでもなかったのですが、子育ての真っ最中で演奏会に飢えておりましたので、只々楽しく、皆さんの演奏を聴いたのを覚えています。その息子が小学6年生の時、小貫が仕事のために練習に顔を出せない時に、補助指導者が欲しいという要望が外大の皆さんからありました。

私は中学、高校時代は女声合唱、大学を出てからはプロの声楽家達の混声合唱団で学び、指導するなど、合唱漬けの人生ですが、男声合唱は流石に無縁でした。ですから、指導をお引き受けした時はどうなることかと不安でしたが、ワクワクする気持ちもありました。そして、初めて練習に伺った時に私の不安は消え去りました。皆さんが私のような若輩者のする話を真摯に聞いてくださり、一生懸命歌う姿に感動し、男声合唱の響きや重厚感に興奮しました。

そして、外大の皆さんの素晴らしさを実感したのは、90周年演奏会です。コン

サートの構成、集客、細部への心配り、そして行動力、どれも素晴らしかったです。当日のプログラムの中で、なによりも会場のお客様を喜ばせたのは120人がステージに乗った「月光とピエロ」でした。ご自分達の演奏会の門戸を開いて、120人も壮年男性が、出身大学を超えて熱く歌う姿には、心打たれました。皆さんの寛大さ、明るさこそ大阪外大グリーの素晴らしさだと、日々感じております。

どうぞこれからも、楽しい音楽人生を歩み、素敵な男声合唱を響かせて下さい。

皆様の益々のご発展をお祈り申し上げます。

坂井先生のこと

西川哲朗（昭40 IN）

小貫岩夫先生が主役を演じられる歌劇“アンドレア・シェニエ”の演奏会を聴きに行くべく都営新宿線の住吉駅を出ると、なんと奥様の坂井先生に出会った。先生の隣には可愛い女の子が一緒でした。

演奏会場のティアラこうとう（江東公会堂）に着くまでに十数分の時間があり、一緒に歩きながら、お連れの可愛い女の子は誰ですか、と聞くと娘の和（かず）です、と紹介されました。OB合唱団が坂井先生の指導を受け始めた最初の年にイタリアンレストランでの忘年会でお会いした時はまだ小学生であったが、背丈も先生と変わらず立派なきりっとしたお母さん似の中学生に成長されていました。先生に聞こえないように彼女にお母さんをどう思っているのかと単刀直入にお聞きすると、微笑んで大変厳しいです、と返事が返ってきました。厳しさが寄稿文のヒントになりました。

先生の指導は厳しいのではなく、ご自分が納得されるまで徹底して教えてくれるのです。ユーモアもあり、同じパートからいろんな和音が聞こえますよとか。誰が練習不足なのか、外れた音を出しているのかも聞き分けておられる顔を向けられると心臓がドキンとします。パートごとの仕上がりが悪いと何回も練習を課せられます。練習中には仕上がりがどうなるかと心配するような状況にしばしば直面するのですが、でも厳しい指導で演奏会までにはきちんと仕上げてくださいます。

午後からの約3時間の練習でも先生は休憩時間を取らず、その熱血指導に団員は大変感謝しており、練習中は笑いが絶えません。練習



後は次回の練習を大変楽しみにしているのが各人の顔を見ても十分わかります。本当に先生に出会えて団員一同幸せいっぱいです。これからもよろしくご指導願います。音源で個人練習をして出来るだけ先生のご負担が増えないようにします。

坂井先生、時々練習後の飲み会に出ていただき、ほんのりしたお顔でくださった歌を歌ってください。

坂井先生のご指導に感謝

西村信勝（昭42 S）

平成25年（2013）3月7日に外大グリーOB合唱団（東京）の総会が行われ、西川哲朗（昭40IN）を代表とする4名の新たな幹事団が発足することとなった。この総会では、同時に練習回数を引き続き月2回とすることと練習場所を固定（八丁堀の集会所と文京区の教会）することが決まった。また、指揮者については、引き続き小貫先生をお願いしていくが、多忙の小貫先生のスケジュールが合わなかった場合に備え、もう一人指導の方を小貫先生に推薦していただくことも決まった。そこで、小貫先生に、先生のお弟子さんかお知り合いの方を紹介していただくようお願いすることとなり、担当の幹事が小貫先生をお願いしたところ、即答はなく、「少し考えてみます」との回答だった。ただ、その際に、「必ずしも男性でなくてもいいですか」との質問もあった。おそらく、すでに小貫先生のなかには坂井先生のことがあったのであろう。1週間後、小貫先生から坂井美樹先生のお名前が出され、当方の意向を尋ねられた。

その際、坂井先生の略歴（大阪音楽大学卒など）とともに、小貫先生との関係（奥様）も教えていただいた。小貫先生のお弟子さんの若い音楽家を紹介してもらえるものだと思っていたので、小貫先生のご提案に反対のはずがなく、我々のほうからぜひお願いします、ということになった。

そして、最初の指導が平成25年（2013）の4月22日（月）の文京区の教会ホールでの練習であった。この時の練習参加人数は13名と普段より少なめであった。練習曲目は、多田武彦作曲の「富士山」のうち、作品第壹、作品第肆、そして作品第拾陸の3曲であった。団員一同緊張して初練習に臨んだが、きわめてきびきびとした指導のなかに、時に、関西弁でのユーモアもあり、早い段階から打ち解けた雰囲気での初練習となった。当日の練習報告には、以下のような記述が残されている。

厳しいご指導でしたが、とても明快でした。心の中で「あそこはまずかった」と思った箇所はすべてお見通し（お聞き通し）で、即ご指摘があり、かつごまかしは一切通用しませんでした。でも辛くはなかったです。

坂井先生とは練習の時だけでなく、小貫先生とのジョイントコンサートでの素晴らしいソプラノや小貫先生とのデュエットを聴いたり、小貫先生のリサイタルでの名司会ぶりを拝見したり、とお会いする機会も多くあった。また、グリーの忘年会にお子様連れでおいでいただくこともあった（現在ではお子様も成長されたので、ご夫妻でのご参加となっているが）。そんな、単なる指導者と合唱団員という関係以上のお付き合いをさせていただいている。

坂井先生の指揮による初ステージは、平成26年（2014）11月2日、文京区の文京学院大学内の仁愛ホールでおこなわれた大阪男声合唱団（大阪大学男声合唱団のOB合唱団）と文京学院大学吹奏楽部との「Autumn Joint Concert」だった。坂井先生は、第1ステージで、「Deep River」や「Didn't My Lord Deliver Daniel?」など、黒人霊歌5曲の指揮をされた。約800人収容の仁愛ホールがほぼ満席になる中での初指揮であったが、聴衆からのアンケートで、「黒人霊歌は初めて聴きましたが、とても良い響きで感動しました」のコメントをいただいている。

その後、平成27年（2015）11月8日の「東京男声合唱フェスティバル」と平成28年（2016）7月18日の「東京都合唱祭」においても、黒人霊歌を演奏している。いずれの演奏も、他団体から概ね良好な評価を得たが、とくに指揮者である坂井先生への賛辞が目立った。

そして、平成28年（2016）12月3日にかつしかシンフォニーヒルズ・モーツァルトホールで、「大阪外国語大学グリークラブ創部90周年記念演奏会」を催し、坂井先生は、第2ステージで黒人霊歌（「Soon Ah Will Be Done」や「The Battle of Jericho」など）を5曲指揮された。黒人霊歌は、過酷な生活を強いられていた黒人奴隷たちが聖書の言葉に救いを求めたものが多いが、とくに「Soon Ah Will Be Done」の歌詞は以下のように、黒人奴隷が現世の苦しさから逃れて神のもとへ行くと歌う、悲痛な叫びのなかにも希望を歌う曲であり、外大に限らず多くの合唱団が最後に演奏する曲である。

Soon Ah will be don' a-wid de troubles ob de worl',
de troubles ob de worl',
de troubles ob de worl'.
soon ah will be don' a-wid de troubles ob de worl',
goin' home to live wid God.

もうすぐこの世の苦しみは終わるだろう。
この世の苦しみよ、この世の苦しみよ。
もうすぐこの世の苦しみは終わるだろう。
故郷に帰り、神様と暮らすんだ。

団員一同は、当然のこのように「Soon Ah Will Be Done」が最終の曲となると

思っていたところ、坂井先生はこの曲を最初に演奏すると決められた。多少の違和感を持ちながら、「Soon Ah Will Be Done」を最初に歌ったところ、最も歌いなれている曲であることもあり、この曲を最初に歌うことでステージに勢いが生まれ、その後の曲も自信をもって歌うことができたのである。その結果、多くの聴衆の方々から高い評価を受けることができた。アンケートの一部を紹介したい。

- ◎とても素晴らしいコンサートでした。90周年おめでとうございます。1ステ、IIステは小貫先生と坂井先生の指揮が素晴らしく、情感豊か、かつメリハリのある魅力的な合唱でした。pとfffの声の大小、強弱の魅力を堪能しました。(60代女性)
- ◎黒人霊歌はグリークラブらしくて感銘を受けた。坂井さんの指揮は素晴らしかった。月光とピエロは迫力十分だった。(60代男性)
- ◎90年という歴史の重みと皆様の母校への愛情を感じる演奏会でした。特に黒人霊歌は長年歌い継がれていることで、風景が目に浮かぶ素晴らしい演奏でした。また次回の演奏会も楽しみにしています。(20代男性)

小貫先生と坂井先生という素晴らしい組み合わせで、毎月3回練習ができるという幸せを感じながら、これからも95周年記念演奏会、100周年記念演奏会に向けて練習に励んでいきたい。

創部100周年記念演奏会に向けて



最盛期には60名を数えた大阪外国語大学グリークラブは、男子学生数の漸減とともに部員数も減少し、平成6年（1994）には5名と10名を下回ってしまう。以降も、9名、8名と10名に達することなく、ついに平成9年（1997）には部員数が2名となってしまった。しかし、グリークラブOBたちの協力を得て、平成10年（1998）1月11日に第41回定期演奏会が開催され、この演奏会を以って、現役による大阪外国語大学グリークラブの活動は終了することとなる。

しかし、平成7年（1995）2月に東京でOB合唱団が立ち上がり、また、平成12年（2000）5月には、大阪でOB合唱団が立ち上がる。大阪外国語大学グリークラブの灯を絶やさせないとの強い思いがそこにはあった。OB合唱団は、本誌に掲載した年表（OB合唱団の時代）にもあるように、様々な演奏活動をおこなってきた。そして、平成18年4月30日には、箕面市メイプルホールで、85名のOBが参集して、「大阪外国語大学グリークラブ創部80周年記念演奏会」が催された。

平成19年（2007）10月1日に、大阪外国語大学と大阪大学が統合され、残念ながら、我々の母校「大阪外国語大学」は存在しなくなる。しかし、その後も、OB合唱団は活発に活動を継続し、平成28年（2016）11月13日には大阪で、また同年12月3日には東京で、「大阪外国語大学グリークラブ創部90周年記念演奏会」を開催している。グリークラブには依然として「大阪外国語大学」が息づいているのである。

2014年9月2日現在の大阪外国語大学グリークラブOB名簿には395名のOBの氏名が記され

ている。そのうち、現役世代である昭和50年以降卒業のOBは150名にのぼる。現在、大阪、東京、名古屋地区のOB合唱団で常時練習に参加している団員数は50名強であるが、練習参加者のなかには昭和50年より前に卒業したOBも少なくない。つまり、100名を上回るOBがおそらく仕事の関係など何らかの事情でOB合唱団に参加できない状況にあると考えられる。実際、90周年記念演奏会（大阪）には75名のOBがステージで「月光とピエロ」を歌っている。グリークラブが閉部となっても、「大阪外国語大学」が消滅しても、「大阪外国語大学グリークラブ」の活動を継続していただけたOBが存在しているのである。

OB合唱団は、2019年に大阪で、2020年に東京で、そして創部95周年にあたる2021年には、大阪と東京で95周年記念演奏会を開催する計画となっている。仕事が忙しいOBあるいは場所の関係で練習に参加できないOBの皆さんも、合同演奏会にぜひ参加していただきたい。OBが共有する「大阪外国語大学グリークラブOB合唱団」のウェブサイトには、練習曲の楽譜と音源が掲載されているので、ぜひ活用していただきたい。

95周年記念演奏会以降の演奏計画はまだ決まっていないが、おそらく合同での演奏会は続いていくものと期待される。そして、2026年は大阪外国語大学グリークラブ創部100周年という記念すべき年となる。この記念すべき100周年記念演奏会には、ぜひとも100名を上回るメンバーで、我々が清水脩大先輩の組曲「月光とピエロ」を高らかに歌いたいものである。

松村尚人（昭62ⅡS）

「いや～、今日の演奏会は感激した。OB全員とお客さんも感激していたよ」。皆口を揃えて言っている。

2027年〇月〇日、今日の創部100周年の演奏会は大いに盛り上がった。全国と海外駐在のOBが集まり、100周年にふさわしく100名のOBがステージで「月光とピエロ」を歌った。もちろん、みんなが大好きな黒人霊歌も歌った。

95周年の演奏会に出演したOBは皆さん元気で、全員今日のステージに立っている。

例えば、90周年記念演奏会のあと、100周年演奏会の今日までいろんなOBたちが続々と練習に加わってきた。

◎海外駐在から帰国した人

◎定期的に練習をしていることを最近知った人

◎仕事が忙しいので毎回ではないがたまに練習に来てくれる人

◎練習後の食事会に顔をだしてくれる人

◎大阪外大の卒業でなくても私たちのことをよく理解して参加してくれる人

…など。

いろんな形でOB合唱団の活動に参加してくれる人が増えてきた。

私は東京の八丁堀のいつもの練習場所に通った。100周年演奏会に向けて独特の気運が高まって練習参加者がだんだん増えてきて、小貫先生・坂井先生も熱心に指導をしてくださった。林先生も時折様子を見に来て下さった。

練習といえば、いつものように山口先輩の体操から始まる。柔軟体操と呼吸の練習のあと、発声練習。そして曲の練習。学生時代に歌ったことがある曲もあるが、学生するときには知らなかったことや感じられなかったことを新たに感

じることもある。そして練習後、いつもの歓談サロン日本食「いち」へ移動。おいしい料理が沢山食べられるということでみんな大好きだ。ほかのお客さんからの歌ってほしいとのリクエストに応じて数曲歌う（リクエストがなくても歌いたいのだが）。

このように練習と懇親を重ねてきた。職場の人からは「ストレスの解消ができていいですね」と言われるが、そうではない。ストレスを解消するために参加しているわけではない。この集まりが好きでみんなで音楽を楽しみたいと参加している。

昔と違って、自宅でも練習できるように音源を用意していただいている。便利になったと思う。大阪では加藤さんが、そして東京では杉本さんや岸本さんが時間をさいて作ってくださっているのだ。ほんとうに重宝しているし、ありがたい。

それにしても90才になってもこうやって歌っている先輩方は若々しく元気だ。この集まりの中で音を聞くたびに学生時代のようにハツラツとした若い同じ音が鳴ることに感激している。練習の最後のGaigo & Varsityがその最もよい例だ。みなさんいつまでも青春を謳歌しているし、たぶん100周年を過ぎたこれからも参加してくれるだろう。

…ところで今は2018年です。今年も演奏会や合唱祭の予定があり、楽しく練習やイベントに参加させていただいています。現役の学生部員がいなくなって何年も経ちますが、このように世代を越え、枠を超えて歌い集うことができることはすごいことだと思いますし、感謝しております。少しでも多くのOBの方やその関係者に気軽に参加していただき、長く皆さんと楽しくこの活動をつづけていきたいと思っています。

外大グリー 100周年に向けて

安良雄一（平1 R）

卒業後10年足らずの間に外大グリーが消滅してしまったことは、その後大学が吸収されたショックより大きかった。現役が無くなるとOBが集まる機会も少なくなり、OB合唱団の運営は難しくなると思った。しかしその後、諸先輩方の多大なるご尽力により東京・大阪OB会の足並みが揃い、今まさに100周年に向けて外大グリーの歴史を継承できていることは本当に素晴らしく、この場を借りて心から感謝申し上げますと共にその運営には自らも関わっていきたいと思っている。

外大グリー平成会という非公式グループがあ

る。平成以降の卒団生全員がメンバーであるが、働き盛りということもありOB合唱団に参加しているのはごく数名、平成会としては年に1～2回大阪や東京で数名集まり酒を飲んでいるだけである。100周年記念イベントに向けてこれらの“若手”（既に全員45歳を超えているが現役が居ない以上永遠に若手である）メンバーを再結集し、史上最大のイベントを盛り上げたいと考えている。

外大グリー平成会メンバー諸君、
我らがグリーの歴史的な大イベントを我々の手で作り上げよう。そしてあの時のハーモニーをもう一度共に奏でようではないか！

100周年ダヨ!! 全員集合!!

戸田貴之（平4 TV）

全国、いや全世界、いやもしかして全宇宙のグリーメンの方々、お元気でせうか？

私、もはや箕面の地を離れ、江戸に来て26年が経とうとしております。

さまざまな紆余曲折、艱難辛苦を乗り越えて、また皆様の暖かいご支援により今の私があるわけですが、その原点はやはりグリークラブで過ごした4年間にあると思います。

卒業後は宝くじを売る銀行に入社し、また

ラーメンがなぜか有名な地に住みながら過ごしてきました。現役グリー、大学名消滅、銀行統合などいろいろあった中、OB合同演奏会、創部80周年記念演奏会などに参加しながら、所属合唱団体も5団体になりながら生き延びてきました。

というわけで、創部90周年演奏会も上方と江戸の両方に出演し、もう少しですが100周年がくるわけですね。まあ皆さま、いろいろあるとは思いますが、ぜひこの機会に再びステージでピエロと一緒に歌いませう！

年表1 創部から終戦まで

年	月日	できごと
大正15年 (昭和元年) (1926)	4	創部
	4	4月に部員を募集したところ20名の部員を得ることができた。片山謙二、民秋重太郎が主として指導。簡単なハーモニーから練習を開始、毎日1時間ほど練習する。
	6 19	第一回公開音楽会 (同時期に創立されたマンドリンクラブとの合同演奏会) (本校講堂) (聴衆は約1000名) 指揮：片山謙二 「校歌」(マンドリンクラブ伴奏)「カレッツチーヤ」「ブルドッグ」「春の歌」アプト作曲、 「ヴェイカント・ステア」ジョンス作曲、「ラブスヒプノティズム」ダヴェンボート作曲、 「或る悲劇」アダムス作曲、「オールドカレッツチャム」アダムス作曲、「グッドナイト レディズ」 指揮：なし 「ほととぎす」(ソロ：民秋重太郎、ピアノ伴奏：工藤広忠) (バリトン独唱(民秋重太郎)「南の風」草川信作曲、「若し私がレディなら」 (マンドリン オーケストラ)「故郷を慕ひて」「水郷の夜」「魅惑の小鳥」コック作曲、 「悲歌」ジャコバッツ作曲、「ローマの想出」フランチャ作曲、「牧場にて」ジュリアン作曲 (ヴァイオリン三重奏)「美しきオハイオ」
		二学期に入って部員を増加し、関西の合唱指揮の第一人者長井齊氏を指導者に迎える。
		朝日新聞(大阪版)は「二つの音楽会」との見出しで、東京音楽学校の音楽会と大阪外語の音楽会が相前後して開かれることを報じた。
	11 12	第二回公開音楽会 (本校講堂) (聴衆は約1,500名) 指揮：長井齊 「蠣」スコット作曲、「ホアニタ」クラント編曲、「ラーボウ ウオッチ」マーシー編曲、 「彼女は美し」ジョンズ作曲、「荒城の月」田中銀之助編曲、「ベネディクタス」ロンドン教会編曲 (四重唱：森田誠、和田誠三郎、民秋重太郎、小西龍三)「子守歌」モーツァルト作曲、「子守歌」 ブラーム作曲 (マンドリンオーケストラ)「序曲アイデアルオーバーチュアー」ダニエル作曲、 「抒情幻想的譚曲 地獄谷の夜」ジュリアン作曲、歌劇「ボッカチオ」より「幻想曲」ビリー編曲、 組曲「スペインの印象」ブーシュロン作曲 (マンドリン四重奏)獨創的狂騒曲「愛慕調」プランツォリー作曲 (ハーモニカ合奏) 序曲「レイモンド」トーマス作曲、「カルメン幻想曲」ビゼー作曲、 「セレナードダムール」プロン作曲、「セレナー」ドリゴ作曲、「リゴレット幻想曲」ヴェルディ作曲 (ハーモニカ四重奏)「アンダンテカンタビレ」チャイコフスキー作曲、「キスマット」マルキー作曲 (ヴァイオリン二重奏)「トルコ行進曲」ベートーヴェン作曲
		<創立メンバー> 独=ドイツ語部：村勢重孝 今村寿信 尾関信治 西田信夫 宮原国城 仏=フランス語部：片山謙二 和田誠三郎 仙石兵衛 英=英語部：小西龍三 田中久雄 三羽一郎 馬=マレー語(後のインドネシア語)部：蓮井栄吉 森田誠 露=ロシア語部：小川明 印=インド語(後のインド・パキスタン語)部：民秋重太郎 蒙=蒙古語(後のモンゴル語)部：浅野良三 工藤広忠

年	月日	できごと
昭和2年 (1927)		大阪高商グリークラブと合同演奏会を開催 (YMCA) (詳細不明 出典：大阪市立大学グリークラブ90年誌「南漣」)
	11 3	明治節制定記念関西専門学生音楽大会に出演 (朝日会館) 「秋の夜」ピーシュルツ作曲、「ラーボードウオッチ」ウィリアムス作曲、「荒城の月」田中銀之助編曲
	11 26	宝塚音楽協会主催第1回合唱競演会に出演 (25名参加) (宝塚大劇場) 出演団体：神戸セレスティーナ合唱団、大阪ゲミッシュテンコール、大阪外語グリークラブ、 神戸若葉会混声合唱団、関西学院グリークラブ、大阪高商グリークラブ、神戸高商グリークラブ、 大阪高工グリークラブ 指揮：民秋重太郎 「ラーボードウオッチ」「新世界交響曲」よりラルゴ「故郷へ」ドヴォルザーク作曲 総合3位入選 (学生団体では1位)
昭和3年 (1928)		(活動記録残存せず)
昭和4年 (1929)	6 23	マンドリン部と合同演奏会を開催 (卒業生有志8名の賛助出演) (本校講堂) 指揮：安養寺敏郎 「今宵外語は輝かん」「カレッジソング」「祖国への誓い」「ドイツ民謡」 「鶯によせて」フィルシジェール作曲、「兵士のうた」マックグラナハム作曲、「美わしの夜」エマーソン作曲 (バリトン独唱：中沢春雄、伴奏：小川譲)
		応援団の依頼により同団団歌を作曲する
	11 3	第2回明治節奉祝合唱大会に出演 (朝日会館) 指揮：民秋重太郎 「我祖国を愛す」(ノルウェイ民謡)「今宵外語は輝かん」
	11 9	開校記念合同演奏会を開催 (本校講堂) 指揮：安養寺敏郎 「希望の島」「我祖国を愛す」(ノルウェイ民謡)
		<在籍部員> T1) 田島政信 砂田七郎 浜村吉造 淵田六郎 佐々木忠次郎 古田 梅田忠次 T2) 小川譲 守山義雄 水谷敏 上野智 小川雄次郎 吉住晴雄 山口利正 生馬巖 上杉輝 B1) 日比野忠雄 溝口太郎 広門博 千葉 曾田博 大浜金二郎 清水脩 田中 曾我健蔵 B2) 安養寺敏郎 中西久雄 中沢春雄 中村憲三 阿部栞 林福太 山極潮 光安虔二
昭和5年 (1930)	1 16	西洋音楽渡来50周年記念祝賀合唱競演会に出演 (中之島中央公会堂) 指揮：小川譲(ヴェンテル・マニユール・コールの名前で出演) (3等賞を獲得)
	6 7	浪速高等学校記念祭音楽会へ特別出演 (ダブルカルテット) 「今宵外語は輝かん」「主よ御もとに近かん」「子守唄」ブラームス作曲、 「Massa's in the Cold, Cold Ground」
	6 14	マンドリン、グリー両部との共催で春季音楽会を開催 (本校講堂) 指揮：小川譲 「今宵外語は輝かん」「Gaudeamus」「Memorial Hymn」「兵士の歌」 「大塔の宮」「さらば故里」「Good Night Ladies」 (ダブルカルテット 在学生9名) (バリトン独唱：中沢春雄 伴奏：小川譲)

年	月日	できごと
	6 21	関西甲種商業学校ハーモニカ演奏会に賛助出演（実業会館） （ダブルカルテット）「故郷を離るるの歌」「Gaudeamus」「Massa's in the Cold, Cold Ground」
	6 28	同志社高商部と外語英語部の英語弁論大会に出演 （ダブルカルテット）曲名記録なし
	7 1	「Long May She Live a Gaigo」を歌って第1学期の練習を終了する。
	11 3	第3回明治節記念合唱大音楽会に出演（朝日会館） 指揮：小川譲「森の教会」「さらば故里」
	11 8	秋季開校記念合同音楽会に出演（本校講堂） 指揮：清水脩「今宵外語は輝かん」「The Dutch Company」「森の教会」「夏」「さらば故里」
	11 *	関西学生合唱連盟が創設される。
		<在籍部員> T1) 浜村吉造 佐々木忠次郎 置田幸一 上杉輝 河上英四郎 加納正 前田文雄 砂田七郎 T2) 小川譲 曾我健蔵 生馬巖 吉住晴雄 脇田雅次 加根貞夫 林福太 有元政之 幽谷正 久岡俊雄 木下寿雄 B1) 広門博 上野智 牧長四郎 末常芳郎 清水脩、麻生達男 曾田博 藤田市郎 倉重夫 佐治栄蔵 加藤 B2) 中沢春雄 中村憲三 阿部栞 山極潮 大浜金二郎 光安虔二 永島勝介 樋口仁
昭和6年 (1931)	1 16	第1回関西学生合唱連盟音楽会に出演 （詳細記録なし）
	6 6	大阪帝大楽潮会春季演奏会に賛助出演（大阪帝大） （ダブルカルテット）「今宵外語は輝かん」「荒城の月」「Make a Joyful Noise」
	6 9	英語部主催講演会に出演（大朝講堂） （ダブルカルテット）「今宵外語は輝かん」「荒城の月」「Make a Joyful Noise」
	6 14	春季演奏会を開催（本校講堂） 指揮：清水脩「今宵外語は輝かん」「Zum Eingang」「Fraternity Hymn」「荒城の月」 「大塔の宮」「Make a Joyful Noise」「子守唄」「小夜曲」 OB賛助出演「グレゴリアンチャント」「僧侶の合唱」
	6 20	マンドリン部主催春季演奏会に賛助出演 指揮：清水脩「今宵外語は輝かん」「Make a Joyful Noise」 （ダブルカルテット）「荒城の月」「小夜曲」
	7 11	大阪薬学専門学校音楽会に賛助出演 指揮：清水脩「今宵外語は輝かん」「小夜曲」「Make a Joyful Noise」
		阪大グリークラブと阪急箕面方面へピクニックを楽しむ。

年	月日	できごと
	10 17	関西汎太平洋学生連盟発会式に出演（土佐堀青年会館） 指揮：清水脩 「Gaigo Will Shine Tonight」 「Fraternity Hymn」 「Zum Eingang」 (Aus der Deutschen Messe)
	11 2	本校映画鑑賞会主催名画観賞会に賛助出演 指揮：清水脩 「今宵外語は輝かん」 「Make a Joyful Noise」
	11 3	大阪関西甲種商業学校音楽会に賛助出演 指揮：清水脩 「Zum Eingang」 「Make a Joyful Noise」
	11 3	第4回明治節記念大音楽会に出演（朝日会館） 指揮：清水脩 「Zum Eingang」 「Make a Joyful Noise」
	11 8	開校記念秋季音楽会に出演（本校講堂） 指揮：清水脩 「今宵外語は輝かん」 「家路をさして(新世界より)」 (ダブルカルテット) 「ヴォルガの舟歌」
	11 11	第2回関西学生合唱連盟音楽会に出演（京都市岡崎公会堂） 指揮：清水脩 「今宵外語は輝かん」 「Zum Eingang」 「Fraternity Hymn」 「荒城の月」 「大塔の宮」 「Make a Joyful Noise」 「子守唄」 「小夜曲」 指揮：長井齊 合同演奏 「聖なる主よ」
	11 14	堺親楽会「音楽の夕」に賛助出演 「今宵外語は輝かん」 「Fraternity Hymn」 「荒城の月」 「小夜曲」 「家路さして（新世界より）」 「Make a Joyful Noise」 「Holy Art Thou」
	11 30	大阪帝大楽潮会主催「講演とピアノ演奏の夕」に出席 阪大グリーンクラブと「ラ・マルセイユ」を合唱
	12 12	満蒙出兵兵士慰問金募集大音楽会に出演（中之島公会堂） <在籍部員> T1) 佐々木忠次郎 置田幸一 上杉輝 河上英四郎 山島秀二 前田文雄 小田徳次 中村速生 都築 床井正 T2) 生馬巖 吉住晴雄 脇田雅次 加根貞夫 河島英麿 林福太 檜垣武志 南平正治 久岡俊雄 高田久寿 釣 緒方 石 松延 B1) 嘉納正 末常芳郎 曾田博 有元政之 倉重夫 木元康夫 山下三郎 石川哲人 樋口重武 城戸弘宣 B2) 大浜金二郎 永島勝介 清水脩 光安虔二 樋口仁 佐治栄蔵 谷川忠重 松田茂 大津隆治 東郷末夫 佐々木一
昭和7年 (1932)	5 19	新応援歌(奥田作歌 清水脩作曲)を生徒大会にて発表する。
	6 18	ハーモニカ部春季音楽会に賛助出演 (ダブルカルテット) 「おぼろ夜」 広田龍太郎作曲、「荒城の月」
	6 25	グリーンクラブ主催春季合唱音楽会を開催（本校講堂） 指揮：有元政之 「今宵外語は輝かん」 「不実な男」 (セルビア民謡) 清水脩編曲、

年	月日	できごと
		「シージェル・バーニャ」(ロシア民謡)清水脩編曲、「Slumber Dearest」エマーソン編曲、「Sweet Hour of Prayers」[「オールド・ブラック・ジョウ」]フォスター作曲、「オールド・フォークス・アト・フォーム」フォスター作曲 (その他の出演：ストリング・アンサンブル、ピアノ・ソロ、複四重唱、ヴァイオリン・ソロ)
	11 3	第5回明治節記念大音楽会に出演 (朝日会館) 指揮：有元政之 「シージェル・バーニャ」「静けき祈り」
	11 5	秋季合唱音楽会に出演 (本校講堂) 指揮：有元政之 「今宵外語は輝かん」「最後の舞踏」「シージェル・バーニャ」「静けき祈り」
	11 20	関西学生合唱連盟合唱大音楽会に出演 (神戸旧関学講堂) 指揮：有元政之 「シージェル・バーニャ」「彼女の像」清水脩編曲
		<在籍部員> T1) 小田徳次 中村速生 緒方 土手盛雄 會森茂夫 T2) 前田文雄 高田久寿 前田一夫 清水 宋秀致 久岡俊雄 B1) 樋口重武 大津隆治 木元康夫 高岡哲夫 福井希行 井澤毅 南形洋 B2) 東郷末夫 佐々木一 谷川忠重 瀬野武比古 川島吉惟
昭和8年 (1933)	6 10	グリークラブ、マンドリン部と合同で春季演奏会を開催 (本校講堂) 指揮：東郷隆好 清水脩(卒) 「今宵外語は輝かん」「ガウデアムス」「雁の叫」(ロシア民謡)「フライエクンスト」 (その他の出演：マンドリン四重奏 ヴァイオリン独奏 ピアノ独奏)
	6 18	第2回関西合唱コンテストに参加 (30名参加) 指揮：清水脩(卒) 課題曲 「決心の勇士を送る歌」シュルツ作曲、 随意曲 「フライエクンスト」ステュンツ作曲 第4位入選
	9 25	第4回関西合唱大音楽会に出演 (朝日会館) 指揮：福井希行 「リッチェズオブグレイス」ローレンツ作曲、「ナポリ牧歌調」ガルドルディ作曲
		第6回明治節記念音楽会は中止となる。
	11 10	マンドリン部と合同で演奏会を開催 指揮：福井希行 「今宵外語は輝かん」「さらばふるさと」「ブンデスリート」 指揮：民秋重太郎(卒) 「咲く花うばら」メンデルスゾーン作曲、「ベアティモルツィ」シュヘル作曲 (卒業生ダブルカルテット) 「送別の歌」 「マッサス・イン・デ・コールド・コールド・グラウンド」フォスター作曲 (在校生ダブルカルテット) 「ブリューベル・オブ・スコットランド」「マルシュインスフェスト」
	11 11	本校語学大会に出演 (大毎ホール)
	12 1	卒業生、在校生合同演奏会を開催 (YMCAホール) 指揮：民秋重太郎 福井希行 「今宵外語は輝かん」「オイスター」「咲く花うばら」 「ベアティ・モルツィ」「ラボードウオッチ」「故郷へ」 (在校生ダブルカルテット) 「スコットランドの釣鐘草」「フローティング・ミド・リライズ」 (独唱 仰木四郎) 「二人の精兵」「帰れソレントへ」

年	月日	できごと
		<p>(混声合唱 大阪コーラルソサエティ) 「讃美歌」「タントウム・エルゴ」「シークット・チェルヴス」(卒業生) 「我悲しみをもて野辺を去らん」(卒業生ダブルカルテット) 「送別の歌」「マッサス・イン・デ・コールド・コールド・グラウンド」フォスター作曲</p> <p><在籍部員> 指揮者) 福井希行(B1) T1) 川島吉忠 會森茂夫 那須武雄 仰木 T2) 前田一夫 南形洋 矢倉正之 松本進 宋秀致 B1) 高上 井澤毅 小山鉄幹 笹倉 B2) 瀬野武比古 林正三 室田圭造 加藤一郎</p>
昭和9年 (1934)	4 17	<p>全新入生を対象として校歌の練習をする(本校講堂)。</p>
	5 5	<p>ハーモニカ部演奏会に賛助出演 (本校講堂) (ダブルカルテット 矢倉 前田 福井 南形 瀬野) 「今宵外語は輝かん」「ほととぎす」</p>
	6 9	<p>YMCA主催四校(外語・商大・高医・歯医)合同合唱大音楽会を開催 (25名参加) 指揮: 福井希行 「希望のささやき」「細谷一郎編曲」「あげよ歓喜の声」リュース作曲、 「静かなるアフトンの流れ」フロ リンコー作曲、「左舷当直兵」メシイ編曲</p>
	6 16	<p>グリークラブ、マンドリン部春季合同音楽会を開催 (本校講堂) 指揮: 福井希行 「今宵外語は輝かん」「希望のささやき」「あげよ歓喜の声」 「静かなるアフトンの流れ」「左舷当直兵」 (在校生ダブルカルテット) 「決死の勇士を送る」 (卒業生ダブルカルテット) 小田徳次 矢倉正之(在校生) 清水脩 東郷末夫 「リンデンの樹陰」 (テノール独唱: 久野平吉 伴奏: 川島芳忠) (ピアノ独弾)</p>
	11 3	<p>第7回明治節祝賀大合唱音楽会に出演 (朝日会館) 指揮: 福井希行 「立てよもろびと」ストウンツ作曲、「アヴェ・マリア」クレッシュマール作曲</p>
	11 14	<p>秋季合同演奏会を開催 (ガスビル) (グリークラブ、マンドリン部、ヴァイオリン部、ハーモニカ部合同) 指揮: 矢倉正之 「今宵外語は輝かん」「春の小花」 指揮: 福井希行 「立てよもろびと」「アヴェ・マリア」 (賛助出演: 大阪コーラルソサエティ、ピアノソロ 田中静枝、ソプラノソロ 藤井千枝子)</p> <p><在籍部員> 指揮者) 福井希行(B1) 矢倉正之(T2) T1) 川島吉惟 朝日奈国次郎 床井正 土手盛雄 會森茂夫 寿崎正太郎 乾正作 T2) 前田一夫 宗秀致 木内幸七 松本進 桂力 案志竹之助 川畑敏郎 永山盛康 山田義孝 B1) 瀬野武比古 南形洋 井澤毅 笹倉政成 中村浩 浪江重一郎 山崎開作 B2) 前野正 原田登 加藤一郎 安積鋭二 林正三 坂口昌弘 出口潤之助</p>
昭和10年 (1935)	6 15	<p>春季合同音楽会を開催 (本校講堂) 指揮: 矢倉正之 「外語今宵は輝かん」「春の小花」ハットン作曲、「誠の愛」ジルヘル作曲、</p>

年	月日	できごと
		「別離」キルヘル作曲 (卒業生ダブルカルテット)
	9 15	JOBK「学生の夕」に出演 指揮：矢倉正之 「誠の愛」「春の小花」「錨あげて」マックファーレン作曲(本邦初演)
	11 3	第8回明治節奉祝大音楽会に出演 (朝日会館) 指揮：矢倉正之 「真実の愛」ジルヘル作曲、「小さき歌」エッセンバッハ作曲、 「親爺の庭で」(フランス民謡)清水脩編曲
	11 8	関西学生合唱連盟の大合唱曲練習が本校にて開始され、連盟各校部員が集合する。
	11 24	関西学生合唱連盟の大合唱曲JOBK桃谷演奏所より放送 (部員数名参加) 指揮：長井斉 「祖国参加」メンデルスゾーン作曲、「舟乗の歌」ワグナー作曲
	11 25	関西学生合唱連盟合唱会に出演 (朝日会館) 指揮：矢倉正之 「可愛い頬」ハットン作曲(本邦初演)「親爺の庭で」
		<在籍部員> 指揮者) 矢倉正之(T2) 寿崎正太郎(T1) T1) 東山(木内)幸七 吉田威士 天野輝之 富崎弘正 吉田孝市 藤井幸一 米村正嘉 T2) 乾正作 桂力 永山盛康 山本幹人 本田邦明 B1) 中村浩 玉木和彦 山崎為人 上田章 B2) 安積鋭二 加藤一郎 坂口昌弘 新田義円 出口潤之助 大江満
昭和11年 (1936)	6 13	春季大音楽会を開催 (本校講堂) (聴衆約800) 指揮：寿崎正太郎 「外語今宵は輝かん」「行進」レヴワルテン曲、「春の歓喜」(15世紀イタ リア民謡)清水脩編曲、「告別」シューマン作曲(本邦初演) 「セレナーデ」オットー作曲 (ダブルカルテット) 「羊飼いの乙女」ハットン作曲
	6 20	ハーモニカ部の演奏会に賛助出演 指揮：寿崎正太郎 「荒城の月」滝廉太郎作曲 グリークラブ編曲 「告別」
	9 27	JOBK桃谷演奏所より放送 指揮：寿崎正太郎 「告別」「行進」「セレナーデ」 (ダブルカルテット) 「羊飼いの乙女」ハットン作曲
	11 3	第9回明治節奉祝大音楽大会に出演 (朝日会館) 指揮：寿崎正太郎 「夜の唄」ネーグリ作曲(本邦初演)、「つわものの死」ヴォルフラム作曲 (混声大合唱) 指揮：クレイン ワグナー作曲「タンホイザー」より「祝歌」
	11 13	秋季大音楽会を開催 (ガスビル) (聴衆約700) (午後10時閉会) 指揮：富崎弘正 「外語今宵は輝かん」「夕べ」レデカール作曲、「ヴォルガの舟唄」(ロシア民謡) 指揮：寿崎正太郎 「夜の唄」「つわものの死」
	11 16	第7回関西学生合唱連盟音楽会に出演 (朝日会館) 指揮：富崎弘正 「告別」「つわものの死」「ヴォルガの舟唄」 指揮：長井斉 二重唱及び男声合唱 歌劇「イル・トラヴァトーレ」の中の「ミゼーレ」より

年	月日	できごと
		指揮：長井齊 合同大合唱 「音楽の女神を讃える歌」関西学生合唱連盟編曲、 「自由の誓い」メンデルスゾーン作曲
	11 23	JOBK 第1回合唱コンクールに参加 (JOBK桃谷演奏所) (参加高専15団体) 指揮：寿崎正太郎 課題曲：「祝歌」JOBK文芸課編曲、「つわものの死」 <在籍部員> 指揮者) 寿崎正太郎(T1) 富崎弘正(T1) T1) 吉田孝市 米村正嘉 小川克己 富田竹二郎 河合 岡崎和久 T2) 守屋正巳 藤井幸一 吉田威士 鷺見豊三郎 宮本三良 寺田 垂井良夫 西川美水 B1) 中村浩 玉木和彦 長谷隆 庄司栄吉 桑原勝人 久松稔 間和彦 正木薫 前田寿 B2) 坂口昌弘 上田彰夫 酒井恵之助 佐藤正巳 安明孝正
昭和12年 (1937)	4 19	新入生一同に本校校歌を指導する。
	6 12	春季合同音楽会を開催 (本校講堂) (聴衆約800) 指揮：富崎弘正 「今宵外語は輝かん」「誠の誓」グリークラブ訳詞 エフゲルンシェイム作曲、 「春の小花」グリークラブ訳詞 ハットン作曲、「野ばら」エイチ・ハットン作曲、「ラインの酒の歌」 (ドイツ民謡)「燕の唄」ウェルネル作曲 ソプラノソロ：大阪音楽学校 松永博子、ピアノソロ：ペトロ・ビリャベルデ
	9 15	校友会応援歌発表会に出演 (本校講堂) 校友会応援歌：本校ロシア語部2年 吉岡俊次作詞、東京音楽学校助教授 橋本国彦作曲
	10 17	外語ドイツ語部同窓会主催「日独親善の集い」に出演 (軍人会館) 指揮：富崎弘正 「菩提樹」シューベルト作曲、「ドイツ彌散」より「聖なる哉」シューベルト作曲、 「野ばら」ウェルナー作曲
		創立記念祭は中止となる。
	10 24	JOBKに出演 (午後9時) 指揮：富崎弘正 「誠の誓」「野ばら」「剣を想う歌」グリークラブ訳詞 ウェーバー作曲
	11 3	第10回明治節奉祝「愛国大合唱の夕」に出演 (朝日会館) 指揮：富崎弘正 「騎兵三歌」「野ばら」「聖なる哉」「ドイツ彌散」より「剣を想う歌」
	11 16	全関西学生合唱連盟主催 第8回音楽会に出演 (朝日会館) 指揮：富崎弘正 「ラインの酒の唄」ドイツ民謡 「唄御稜威」ベートーベン作曲 合同大合唱 指揮：長井齊 「兵士の合唱」グノー作曲 (11月28日 JOBKより放送)
		関西合唱コンクールは中止となる。
	12 11	交響幻想曲「西土」第三楽章男声合唱に有志が参加 (朝日会館) 指揮：大沢寿人 関西連合男声合唱団(グリーからは富崎弘正以下約10名が参加)
	12 15	全関西合唱連盟 混声合唱団の一員として参加 (JOBKより放送：午後9時20分) 指揮：永井幸次 「南京に揚る凱歌」山田耕筰作曲 「征けよますらお」内田元作曲

年	月日	できごと
		<p><在籍部員> 指揮者) 富崎弘正 T1) 米村正嘉 富田竹二郎 間和彦 瀬来忠次 岩尾 T2) 吉田威士 守屋正巳 藤井幸一 宮本三良 鷺見豊三郎 柴田 堀谷一夫 B1) 長谷隆 庄司栄吉 桑原勝人 松本正三 金沢真次 大津篤造 遠藤彰 堀田史郎 B2) 上田彰夫 酒井恵之助 吉野(安明)孝正 寺岡義春 鬼丸豊隆</p>
昭和13年 (1938)	5 15	<p>愛国大合唱祭に出演 (中之島公会堂) (参加団体数 42) (外語、大歯専、大商大3校合同演奏) 「ロビンフッド」より「猟歌」コーヴァン作曲 (大合唱 指揮：山田耕筰 「全関西合唱連盟歌」山田耕筰作曲、指揮：宮原禎次 「出征兵士」メンデルスゾーン作曲、指揮：長井齊 「若人の歓び」シューベルト作曲、指揮：山田耕筰 「瑞穂の国」ハイドン作曲) (JOBKを通じて全国中継放送)</p>
	6 24	<p>愛国大交響演奏会に賛助出演 (朝日会館) 幻想曲「西土」の男声合唱</p>
	10 11	<p>青年徒歩旅行の夕べに協賛出演 (朝日会館) 指揮：上田彰夫 「日本青年の歌」橋本国彦作曲、「祖国の影」(ドイツ民謡)「故郷を離るゝ歌」(ドイツ民謡)「祖国讃歌」ハイドン作曲</p>
	11 3	<p>第11回明治節奉祝「愛国大合唱の夕」に出演 (朝日会館) 指揮：上田彰夫 「荒城の月」滝廉太郎曲、「ベアティモルツィ」メンデルスゾーン作曲 学生団体では第2位の成績 (「咲耶」18号から引用) 【番外 外語と大高医との合同演奏】 指揮：上田彰夫 「殉国の勇士を弔う歌」</p>
	11 17	<p>全関西学生合唱連盟主催 第9回音楽会 (朝日会館) 指揮：上田彰夫 「荒城の月」滝廉太郎作曲、「美しき死」メンデルスゾーン作曲 (大合唱 指揮：長井齊) 「天を継ぐ者」リンク曲、歌劇「リエンチ」より「ローマの戦歌」ワグナー作曲</p>
	11 19	<p>校内音楽会を開催 (本校講堂) 指揮：遠藤彰 「今宵外語は輝かん」グリークラブ作曲、「祖国の影」「故郷を離れる歌」「祖国讃歌」 指揮：上田彰夫 「海ゆかば」信時潔曲、「荒城の月」「ベアティモルツィ」</p>
		<p><在籍部員> 指揮者) 上田彰夫 T1) 富田竹二郎 間和彦 清水文夫 鷺見豊三郎 須佐一郎 廣瀬隆康 喜田茂夫 野上 青野七衛 瀬来忠次 前原重孝 T2) 遠藤彰 河合 宮田実 島田昌男 八田省吾 後藤哲也 堀谷一夫 金丸太郎 上村正明 B1) 平川幸生 堀田史郎 金澤真次 北村 松本正三 大津篤造 岡崎正男 稲葉義紀 石原廉二郎 坂井司 三木賢二 並岡浩三郎 壺坂景美 B2) 安明孝正 寺岡義春 高木敏夫 三村義明 床井裕 高橋慶男 鬼丸豊隆 佐谷 富田七郎 柳生直行 横山</p>
昭和14年 (1939)	2 4	<p>ブラジル館にて卒業部員送別会を催す。</p>
	4 9	<p>銃後市民音楽会に出演 (天王寺公園音楽堂) (ドイツ・イタリア民謡の合唱によって感謝状を贈られた)</p>

年	月日	できごと
	5 28	海軍記念日祝賀合唱大会に出演 （中之島中央公会堂） （大阪学生合唱団として合唱）（JOBKにより午後8時から中継放送された） 指揮：長井斉 「男海ゆく」堀内敬三作曲、「海ゆかば」信時潔作曲、「兵士の合唱」グノー作曲 指揮：水野康孝 「戦時市民の歌」大阪市選定、「太平洋行進」大阪市選定
	6 25	音楽部合同春季演奏会を開催 （本校講堂） 指揮：遠藤彰 「ドイツミサ」より「序曲」および「神聖」シューベルト作曲、「栄光」グノー作曲、
	6 25	「海ゆかば」「主人は眠る」フォスター作曲、「ソナタ熱情」より「夜の讃歌」ベートーベン作曲、 歌劇「ファウスト」より「兵士の合唱」グノー作曲
	10 28	本校食堂2階で1週間の合宿練習をおこなう。
	11 3	第12回明治節奉祝「愛国大合唱の夕」に出演 （朝日会館） 指揮：遠藤彰 歌劇「ファウスト/劫罰」より「アーメン・フーガ」ベルリオーズ作曲、「勝ちませる君」 パレストリーナ作曲、「栄光」グノー作曲
	11 14	関西学生合唱連盟発表会に参加 （朝日会館） （参加18校）（ベスト3に選ばれる 「咲耶」19号から引用） 指揮：遠藤彰 「勝ちませる君」「アーメン・フーガ」
	12 9	全国高専英語弁論大会に賛助出演 （本校講堂） （部員有志で出演 曲目不明）
		<在籍部員> 指揮者） 遠藤彰(T2)、島田昌男(T2) T1) 喜田茂夫 野上 宮田実 弓岡盛久 小藤美登 青野七衛 元井能 西岡(武部)健 富田竹二郎 T2) 瀬来忠次 堀谷一夫 八田省吾 上村正明 前原重孝 柳生直行 黒田敏男 広田長三郎 B1) 松本正三 大津篤造 金沢真次 後藤哲也 谷村三郎 天満昌美 飯尾通直 植田信雄 大山田好則 高田久彦 真鍋 B2) 三村義明 床井裕 高橋慶男 寺岡義春 鬼丸豊隆 富田七郎 玉井国三郎 佐谷 稲垣四郎 横山 山本照雄 中村家久 木村嘉一 新月寛
昭和15年 (1940)	6 16	春季演奏会を開催 （本校講堂）（聴衆800） 「Deutsche Messe」「Zum-gloria」「Trink-kannon」「あゝ我等祖国を愛す」（ノルウェイ民謡）、 「海行かば」「荒城の月」「兵士の歌」「ハンストグレーテ」
	6 30	音楽部合同で徳尾部隊勇士60名を招待慰問する。
	9 27	大阪学生合唱連盟選抜メンバーによりJOBKより放送 （午後7時40分） 「国民進軍歌」「興亜行進曲」「軍艦行進曲」「くろがねの力」
	10 27	明治節奉祝合唱大会予選に参加 （第2位入選） 指揮：島田昌男 「愛国行進曲」「ベニー」「グノー」
	11 3	第13回明治節奉祝「愛国大合唱の夕」に出演 （朝日会館） 指揮：島田昌男 「ベニー」「ハンストグレーテ」

年	月日	できごと
	11 10	<p>紀元二千六百年奉祝国民音楽大会(JOBK、大阪市共同主催)に出演 (中之島公園) 「くろがねの力」「愛国行進曲」「紀元二千六百年奉祝歌」「紀元二千六百年頌歌」「海行かば」 「全関西合唱連盟歌」</p>
	11 16	<p>外語主催万国語大会に賛助出演 (中之島中央公会堂) 指揮：和田誠三郎先生、島田昌男</p>
	11 19	<p>紀元二千六百年奉祝学生合唱大会に出演 指揮：島田昌男 「聖霊」グノー作曲、「サンタマリア」グノー作曲</p>
	11 31	<p>外語英語部主催英語弁論大会に賛助出演 (本校講堂)</p> <p><在籍部員> 指揮者) 島田昌男(T2) 植田信雄(B2)</p> <p>T1) 野上 弓岡盛久 前原重孝 元井能 西岡(武部)健 寺杣勇 中西荘祐 関田範雄 竹原敏雄</p> <p>T2) 柳生直行 黒田敏男 北山顕正 八田省吾 沢田麗荘 平野克己 鶴田康 張</p> <p>B1) 上村正明 後藤哲也 谷村三郎 大山田好則 天満昌美 田昌太郎 河野雄二</p> <p>B2) 玉井国三郎 富田七郎 稲垣四郎 中村家久 木村嘉一 伊藤弘次 山本照雄 龍野道生</p>
昭和16年 (1941) ↓ 昭和20年 (1945)		活動記録なし

年表2 戦後再建から現役活動の終了まで

※出演者の○印はパートリーダー
 ※出演者の記載はプログラムに準拠

年	月日	できごと
昭和20年 (1945)	9	大阪高等学校・五条小学校を借りて授業再開。
昭和21年 (1946)	2 1	学舎を高槻市もと工兵第四連隊跡に移転、授業を行う。
昭和22年 (1947)	11 12	外語創立26周年記念文化祭に出演 (出演：男声24名 女声：28名) (大手前会館) 指揮：和田誠三郎先生 シューベルト作曲「落葉」 グノー作曲「サンタマリア」 ジョーンズ作曲「希望の島」 マグラハム作曲「兵士の歌」 メンデルスゾーン作曲「葡萄収穫の歌」
	11 13	記念文化祭2日目出演 (大手前会館) 指揮：和田誠三郎先生 ヴィットリア作曲「タントウム・エルゴ」 バッハ作曲「とこしへに生きる」 チンガレリ作曲「主よ、我らより遠ざかるなかれ」 ヘンデル作曲「ハレルヤコーラス」
昭和23年 (1948)	4	第3期生として入学した女子学生8名の中から7名を和田先生がグリーンに勧誘して混声グリーンを誕生させた。
昭和24年 (1949)	5 31	大阪外国語大学設置。
昭和25年 (1950)		和田先生が阪大に移られた事もあって混声グリーンクラブは消滅した。
昭和26年 (1951)	4 1	大阪外事専門学校廃止。大阪外国語大学学則制定。
昭和28年 (1953)	4	グリーン再建の話が上八学舎の3、4年生から持ち上がり、高槻学舎の1、2年生に呼びかけた。
	5	指揮・指導を和田誠三郎先生(阪大教授)にお願いして週1回の練習を上八と高槻の中間、曾根崎小学校で行った。初めて練習した曲は「希望の島」であった。
昭和29年 (1954)		外語語劇祭に出演 (指揮：増森邁)
昭和30年 (1955)	11 20	外語語劇祭に出演 (指揮：増森邁)
昭和31年 (1956)	10 28	第11回関西合唱コンクール (大阪朝日会館) 指揮：大崎直忠 課題曲：「風」 自由曲：「Hard Trials」
昭和32年 (1957)	3 9	高松演奏会 (指揮：大崎直忠) (香川県公会堂)
	4	高槻学舎が廃止されて上八に統一された。
	5 12	関西合唱祭に参加 (指揮：大崎直忠) (神戸国際会館)
	6 18	関西学生合唱祭に参加 (指揮：大崎直忠) (大阪女学院)
	7 6	第1回定期演奏会 (部長：住田照夫教授 出演：49名) (大阪ガスビルホール) 指揮：大崎直忠 黒人霊歌：「Go Down, Moses」 「The Battle of Jericho」 「Swing Low, Sweet Chariot」 「Wade in de Water」 指揮：大崎直忠 組曲「月光とピエロ」 指揮：大崎直忠 ロシア民謡：「夕べの鐘」 「12人の盗賊」 「プラトフ将軍の唄」 「コザックの古歌」

年	月日	できごと
		<p><出演者></p> <p>T1) 小林信裕 若林允 中島秀雄 永淵秀夫 竹内智 山中道宏 吉岡幸三 土本皖 T2) 千布正人 藤野薫 古川勇 小谷松明弘 磯崎豊一 杉本匡章 岸野滋 西川暲治 田中晋 沢村輝雄 筒井健次郎 山中重忠 高士純一 東正弘 B1) 野田大祐 末次義 森幸彦 永井宏 中崎巧 柁山次雄 昌子明夫 杉田(紙谷)敬治 松木正顕 宇野滋夫 米田憲正 南野均 B2) 岡田吉治郎 清水正雄 中江啓 荻野芳毅 赤坂一郎 青山道也 桧垣修 岩中秀雄 神田正見 望月敬三 宮田幸一 吉本伸彦 橋本勝策 松尾充哲 尾崎賢助 <賛助出演：コーロ・オルフェオ ギルキー先生 岡本恵一氏></p>
	11 9	<p>第12回関西合唱コンクール (尼崎市民会館) 指揮：小谷松明弘 課題曲：「旅路」 自由曲：「Surrexit Pastor Bonus」</p>
	11 15	<p>外大文化祭に出演 (指揮：小谷松明弘) (大手前の国民會館)</p>
昭和33年 (1958)	2 27	<p>宇和島演奏会 (指揮：小谷松明弘) (宇和島幼稚園) <宇和島合唱団賛助出演></p>
	5 25	<p>関西合唱祭に参加 (大阪府立体育館) 指揮：小谷松明弘 「Swing Low, Sweet Chariot」 「I Couldn't Hear Nobody Pray」 (ソロ：若林允)</p>
	6 15	<p>関西学生合唱祭に参加 (大阪女学院) 指揮：小谷松明弘 「かごかき」 「祭りの娘」</p>
	6 21	<p>大阪府立大学グリークラブ演奏会に賛助出演 (ガスビルホール) 指揮：小谷松明弘 「Home on the Range」 「Old Black Joe」 「Swing Low, Sweet Chariot」 「I Couldn't Hear Nobody Pray」</p>
	7 5	<p>第2回定期演奏会 (部長：住田照夫教授 出演：57名) (ABCホール) 指揮：小谷松明弘 聖歌：「Adoramus te Christe」 「Ave Maria」 「Surrexit Pastor Bonus」 「Hodie Christus Natus Est」 指揮：小谷松明弘 ポピュラー合唱曲：「Ständchen」 「Old Black Joe」 「Home on The Range」 「タヤけ」 「ヴォルガの舟唄」 指揮：小谷松明弘 黒人霊歌：「Swing Low, Sweet Chariot」 「Keep in the Middle of the Road」 「I Couldn't Hear Nobody Pray」 「Old Ark's A Movering」 指揮：小谷松明弘 日本合唱曲：「毛銭の三つの詩」 「かごかき」 「まつりの娘」 「ふるさと」 <出演者></p> <p>T1) 小林信裕 若林允 土本皖 ○沢村輝雄 田村綱造 豊田栄一 中堀浩和 加来洋二郎 T2) 磯崎豊一 杉本匡章 西川暲治 筒井健次郎 竹内智 ○西尾武 南野均 菅原基晴 米田憲正 竹川茂一 宇留野隆 広石泰三 久門康一郎 武中純一 安田克己 B1) 柁山次雄 昌子明夫 杉田(紙谷)敬治 ○松木正顕 宇野滋夫 大塚亨 吉本伸彦 直場徳宥 岡野圭壺 高野郁男 馬場承平 堀川光男 井上文男 菅野昌熾 浦谷義道 B2) 中江啓 荻野芳毅 青山道也 桧垣修 岩中秀雄 神田正見 ○望月敬三 松尾充哲 尾崎賢助 高士純一 山田耕司 治田耕吉 岩谷康正 喜多村昭男 名畑恒 紫久次 東谷顕人 大倉明治 大西昌三 佐藤文隆 <賛助出演：エヴァ・コール 外大弦楽四重奏団></p>

年	月日	できごと
昭和34年 (1959)	11 10	第13回関西合唱コンクール (朝日会館) 指揮：昌子明夫 課題曲：「月夜」 自由曲：「How Long Have I Got to Linger」
	11 22	天理大学祭に賛助出演
	11 26	第1回神戸・大阪外大交歓合唱演奏会 (神戸農業会館)
	11 30	外語祭に出演 (大手前会館)
	3 7	高松演奏会 (香川県公会堂)
	3 8	宇和島合同演奏会 (宇和島合唱団) (宇和島市鶴島小学校)
	5 24	第34回春季大合唱祭に参加
	7 4	第3回定期演奏会 (部長：住田照夫教授 出演：53名) (産経会館) 指揮：昌子明夫 聖歌：「Out of the Depths I Cry to Thee」 「Come, Thou, Oh, Come!」 「Now Praise We Great and Famous Men」 「Sicut Locutus Est」 指揮：昌子明夫 黒人霊歌：「Honor! Honor!」 「See That Babe in the Lowly Manger」 「Nobody Knows de Trouble I See」 「Same Train」 (ソロ：沢村輝雄) 指揮：昌子明夫 日本合唱曲：「三つの俗歌」 「船」 「うたおう」 指揮：昌子明夫 ロシア民謡：「母なるヴォルガ下り」 「何故のくちづけ」 「子守唄」 「郵便トロイカはひた走る」 「おお、かごはいっぱい」 指揮：昌子明夫 組曲「枯れ木と太陽の歌」 (ピアノ伴奏：加納永一) <出演者> T1) 西川暲治 沢村輝雄 土本皖 中堀浩和 田村綱造 豊田栄一 安田克己 福田忠紀 水尾温 横井弘昌 T2) 西尾武 菅原元晴 筒井健次郎 米田憲生 南野均 竹川茂一 宇留野隆 九谷龍正 小笠原肇 山野善生 水田京二 B1) 大塚亨 杉田(紙谷)敬治 昌子明夫 松木正顕 宇野滋夫 吉本伸彦 中村邦雄 直場徳宥 高野郁男 岡野圭壺 長谷川徹 木村孝 三神徹 西沢毅彦 新出武雄 B2) 青山道也 桧垣修 岩中秀雄 望月敬三 尾崎賢助 山田耕司 松尾充哲 東谷顕人 大橋保司 大倉明治 大西昌三 佐藤文隆 船橋利之 森田純治 藺口和男 村主寧民 米田好之 <賛助出演：箕面少年合唱団 志水英彦 W.ギルキー先生>
	7 22	新宮演奏会 (新宮市千穂小学校) (賛助出演：新宮高等学校合唱部)
	11 1	外語祭に出演 (大手前の国民會館)
	11 3	第14回関西合唱コンクール (4位入賞) (大阪朝日会館) 指揮：松木正顕 課題曲：清水脩作曲「高原」 自由曲：清水脩作曲「蛙の歌」より「祈りの歌」
	12 5	第2回大阪・神戸外大交歓合唱音楽会 (相愛学園講堂)
	12 18	梅花学園クリスマスメサイヤに参加 (指揮：長井齊) (梅花学園円形講堂)

年	月日	できごと
昭和35年 (1960)	3 6	倉敷演奏会 (倉敷紡績(株)倉敷工場)
	3 7	広島演奏会 (エリザベト短期大学講堂)
	3 9	宇和島演奏会 (宇和島市公会堂)
	5 15	大阪コーラルソサエティ演奏会に賛助出演 (大阪女学院講堂)
	6 12	第36回関西学生合唱祭に参加 (大阪中之島公会堂)
	7 2	第4回定期演奏会 (部長：南野均 出演56名) (産経会館) 指揮：松木正顕 黒人霊歌：「Soon Ah Will Be Done」「Dig My Grave」 「Little David Play on Ya Harp」「Go Down, Moses」 指揮：松木正顕 組曲「雪と花火」 指揮：松木正顕 ロシア民謡：「十二人の盗賊」「ともしび」「ヴォルガの舟唄」「カリンカ」 (ソロ：三神徹) 指揮：松木正顕 ポピュラーソングス：「I Love Paris」「Over the Rainbow」「Who?」 「Tea for Two」「Lullaby of Broadway」「Era Una Flor」(ピアノ伴奏：加納永一) 指揮：松木正顕 河を歌う：「Bengawan Solo」「Rio Que Pasas Llorando」「An Der Schönen Blauen Donau」「Ol' Man River」(ソロ：土本皖 ピアノ伴奏：加納永一) 指揮：松木正顕 南弘明作曲組曲「蛙の歌」(ソロ：豊田栄一 東谷頼人) <出演者> T1) 沢村輝雄 ○土本皖 田村綱造 豊田栄一 安田克己 福田忠紀 山野善生 横井弘昌 小早川義則 小杉功 中田博章 小笠原幸治 T2) 南野均 菅原基晴 ○筒井健次郎 米田憲正 竹川茂一 宇留野隆 亀岡朝弘 九谷龍正 西沢毅彦 水田京二 古川肇郁 永田憲一 奥田勇 小野昭二 吉永行夫 B1) 宇野滋夫 吉本伸彦 直場徳宥 岡野圭壺 折本敏 高野郁男 八木忠司 長谷川敞 ○三神徹 水尾温 小笠原肇 新出武雄 竹中一良 森田育宏 酒巻修平 渡辺重視 B2) ○松尾充哲 山田耕司 東谷頼人 大倉明治 大西昌三 織立一夫 佐藤文隆 船橋利之 木村孝 村主寧民 藪口和男 米田好之 西岡肇
	11 3	第15回関西合唱コンクール (大阪朝日会館) 指揮：豊田栄一 課題曲：「雨の来る前」 自由曲：南弘明作曲「蛙の歌」より「蛇祭り行進」
昭和36年 (1961)	3 8	倉レ岡山工場演奏会 (倉レ岡山工場)
	3 9	岡山演奏会 (岡山市公会堂)
	3 10	玉野演奏会 (玉野市三友会館)
	6	関東学院大学グリークラブ西日本演奏会に賛助出演
	7 8	第5回定期演奏会 (部長：高野郁男 出演：58名) (産経会館) 指揮：豊田栄一 宗教曲：「Ecce Quomodo Moritur」「Confitemini Domino」 「Christus Factus Est」「O Domine Jesu Christo」 指揮：豊田栄一 ロシア民謡：「母なるヴォルを下り」「ゴパーク」「バイカル湖のほとり」 「野に白樺立てり」 指揮：豊田栄一 男声合唱の為の四つの抒情詩：「泥鼠」「グランド電柱」「蝿のうへ」「みちこ」

年	月日	できごと
		<p>指揮：豊田栄一 黒人霊歌：「Keep in the Middle of the Road」「Oh, Lord, Ah Got Mo Trouble」「Little Innocent Lamb」「Sometimes I Feel Like a Motherless Child」「Didn't My Lord Deliver Daniel?」（ソロ：東谷穎人 三神徹）</p> <p>指揮：豊田栄一 組曲「月光とピエロ」</p> <p><出演者></p> <p>T1) 田村綱造 ○安田克己 福田忠紀 山野善生 小早川義則 小杉功 亀岡朝弘 古川肇郁 池上高司 山本文雄 赤城一字 小山泰克</p> <p>T2) 竹川茂一 ○宇留野隆 九谷龍正 小笠原肇 西沢毅彦 小野昭二 高野郁男 小笠原幸治 吉岡保人 井上昌 川田裕皓 黒田健生 小山輝久 三宅松久</p> <p>B1) 直場徳宥 ○三神徹 新出武雄 水尾温 竹中一良 森田育宏 酒巻修平 佐藤文隆 永田憲一 吉永行夫 近藤勝利 重光豊彦 岩崎誠 藤太 宇野晃吉 橋本清 増野哲雄</p> <p>B2) ○東谷穎人 大倉明治 大西昌三 藺口和男 村主寧民 米田好之 織立一夫 西岡靖昭 清水輝彦 渡辺重視 中村吉夫 溝上富夫 興侶義宣 河出博 西川哲朗</p> <p><賛助出演：A.ファリシー先生></p>
	11 3	<p>第16回関西合唱コンクール（6位入賞）（大阪朝日会館）</p> <p>指揮：三神徹 課題曲：「海」 自由曲：「しろい火の姿」</p>
	12	<p>梅花学園主催クリスマスメサイヤに参加（指揮：長井斉）</p>
	12	<p>神戸外大文化祭に賛助出演</p>
昭和37年 (1962)	3 2	<p>三原演奏会</p>
	3 3	<p>広島演奏会（エリザベト短大講堂）</p>
	3 5	<p>高松演奏会（香川県農協会館ホール）</p>
	6 19	<p>第1回大阪四大学交歓演奏会(外大・阪大・府大・市大)（毎日ホール）</p>
	6 30	<p>国立大阪病院看護学院合唱団との交歓演奏会（高等看護学院講堂）</p>
	7 7	<p>第6回定期演奏会（部長：藺口和夫 出演：60名）（産経会館）</p> <p>指揮：三神徹 マドリガル：「My Bonny Lass」「Now Is the Month of Maying」 「April Is in My Mistress' Face」「Dainty, Fine, Sweet Nymph」</p> <p>指揮：三神徹 ロシア民謡：「今日はモスクワ」「何ゆえの口づけ」「ドニエプルの嵐」「収穫の歌」</p> <p>指揮：三神徹 黒人霊歌：「Steal Away」「Swing Low, Sweet Chariot」「There Is a Balm in Gilead」「Ain'-a That Good News」（ソロ：西沢毅彦 小杉功）</p> <p>指揮：三神徹 バスク合唱曲：「夜明け」「夕暮れ」「愛こそ...」「魔女の踊り」 （ソロ：福田忠紀 西沢毅彦）</p> <p>指揮：三神徹 清水脩作品集：「普香天子」「とじた眼に」「みずいろの風よ」「しろい火の姿」</p> <p><出演者></p> <p>T1) 福田忠紀 ○山野善生 小早川義則 小杉功 古川肇郁 池上高司 赤城一字 小笠原肇 宇野晃吉 木戸弘之</p> <p>T2) 九谷龍正 ○西沢毅彦 小野昭二 小笠原幸治 井上昌 山本文雄 上野明信 野田幸孝 田淵昌男 楠貞義 木下和夫 三原勉 池本征一郎 鈴木勲 藤村治郎</p> <p>B1) ○新出武雄 竹中一良 森田育宏 酒巻修平 重光豊彦 岩崎誠 吉岡保人</p>

年	月日	できごと
		西岡靖昭 小山輝久 黒田健生 中西久也 西岡定美 山口敏明 井上哲朗 井上朗 井上研二 山本恒人 島田顕太郎 B2) 藺口和男 ○村主寧民 米田好之 渡辺重視 興梠義宣 河出博 西川哲朗 三宅松久 藤太 大倉秀介 後藤勇治 本城清 藤雄木滋 山原豊 村上泉 森滋 笠井守 <賛助出演：A. ファリシー先生>
	11 4	第17回関西合唱コンクール (大阪フェスティバル・ホール) 指揮：三神徹 課題曲：「河童昇天」 自由曲：「風」
	11 29	国立大阪病院看護学院合唱団との交歓演奏会 (高等看護学院講堂)
	12 1	梅花学園クリスマスメサイヤに参加 (指揮：長井斉) (梅花学園円形講堂)
昭和38年 (1963)	3 4	名古屋演奏会 (中小企業センター)
	3 5	新宮合同演奏会(大阪女子大) (千穂小学校)
	3 6	慰問演奏会 (湯川三川小学校)
	3 7	慰問演奏会 (和歌山盲学校)
	3 7	和歌山合同演奏会(大阪女子大) (和歌山市民会館)
	3 8	慰問演奏会 (愛徳整肢園)
	6	関西合唱祭に参加
	6	ジョイントコンサート(コーラル混声・近大男声・市大女声・阪女大女声・外大)
	7 6	第7回定期演奏会 (部長：小笠原幸治 出演：54名) (サンケイホール) 指揮：小杉功 フォスター歌曲集：「Way Down in Cairo」 「Gentle Annie」 「Gentle Lena Clare」 「Ring de Banjo」 (ソロ：藤村治郎) 指揮：小杉功 ロシア民謡集：「母なるヴォルガを下りて」 「トロイカ」 「道」 「ステン・カラージン」 (ソロ：黒田健生) 指揮：小杉功 黒人霊歌：「Dig My Grave」 「See That Babe in the Lowly Manger」 「Let de Heb'n Light Shine on Me」 「Ezekiel Saw de Wheel」 (ソロ：黒田健生) 指揮：小杉功 組曲「アイヌのウポポ」 <出演者> T1) ○古川肇郁 小杉功 小早川義則 宇野晃吉 山本文雄 赤城一字 藤村治郎 木戸弘之 菊井福洋 伊東昭広 真田泰昌 T2) 小笠原幸治 ○酒巻修平 小野昭二 池上高司 井上昌 野田幸孝 上野明信 木下和夫 池本征一郎 鈴木勲 立川洲爾 前川副武 西村信勝 石井潔 浅野征道 B1) 森田育宏 吉岡保人 岩崎誠 ○西岡定美 中西久也 土屋捷三郎 山崎寿雄 木村秀影 西岡靖昭 黒田健生 小山泰克 藤雄木滋 満谷康治 蔵城正也 岡勢則之 B2) ○渡辺重視 藤太 興梠義宣 山原豊 村上泉 笠井守 近藤純雄 河出博 三宅松久 西川哲朗 後藤勇治 森滋 本城清 <賛助出演：和歌山大学マンドリンクラブ>

年	月日	できごと
昭和39年 (1964)	10 27	第18回関西合唱コンクール (大阪フェスティバル・ホール) 指揮：黒田健生 課題曲：「変なやつ」 自由曲：「みどりの狂人」
	11	外大祭に出演
	11 22	第2回大阪四大学交歓演奏会(外大・阪大・府大・市大) (サンケイホール)
	12 18	梅花学園クリスマスメサイヤに参加 (指揮：長井齊) (サンケイホール)
	3 8	三合唱団演奏会(大阪女子大女声・宇和島混声・外大) (宇和島市公会堂)
	6 14	第1回大阪府合唱祭に参加 (大阪女子学院講堂)
	6 26	第3回ジョイントコンサート(桃山学院大男声・大阪女子大女声・大阪樟蔭女子大女声・近畿大男声・大阪コーラル混声・外大) (御堂会館ホール)
	10	外大祭に出演
	11 1	第19回関西合唱コンクール (大阪フェスティバル・ホール) 指揮：黒田健生 課題曲：「冬の夜道」 自由曲：「富士山」より「作品第拾陸」
	12 4	第8回定期演奏会(部長：森滋 出演：48名) (サンケイホール) 指揮：黒田健生 ドイツ民謡：「Ständchen」「Kuckuck」「Wassersnot」 「Die rote Nase」「Lorelei」 指揮：藤村治郎 スペイン民謡：「Aldapeko」「Asturias, Patria Querida」 「Montanyes Regalades」「Boga, Boga」「Ator, Ator, Mutil」「En la Huerta de Murcia」 (ソロ：浅野征道) 指揮：黒田健生 OB合同演奏 組曲「富士山」 指揮：黒田健生 黒人霊歌：「Honor! Honor!」「If I Got My Ticket, Can I Ride?」「Listen to the Lambs」「Sister Mary Wore Three Lengths of Chain」「Little David Play on Ya Harp」 (ソロ：西村信勝 藤村治郎 木下和夫 後藤勇治) 指揮：黒田健生 組曲「山に祈る」(朗読：松下美智子 ピアノ伴奏：奈良和美) <出演者> T1) ○山本文雄 赤城一字 宇野晃吉 木戸弘之 藤村治郎 伊東昭広 西村信勝 前川副武 石田康雄 佐久間健 T2) 井上昌 ○木下和夫 上野明信 浅野征道 石井潔 真田泰昌 山本勝昭 鈴木惟司 角田広 望月一男 山田良一 B1) ○岩崎誠 黒田健生 藤雄木滋 満谷康治 土谷捷三郎 木村秀彰 蔵城正也 岡勢則之 岡山忠義 山崎寿雄 松田靖行 大釜心一 湯河和義 小林八郎 B2) 藤太 西川哲朗 ○後藤勇治 本城清 森滋 西岡定美 山原豊 岸田勝昭 近藤純雄 藤岡哲雄 光畑記夫 柳善生 近江謙 <OB有志が合同演奏に参加>
昭和40年 (1965)	3 6	高松演奏会 (香川県農協会館ホール)
	3 8	広島演奏会 (広島市見真講堂)
	3 9	広島大学マンドリンクラブと合同演奏会 (三原市浮城会館)

年	月日	できごと
	6 13	第2回大阪府合唱祭に参加 (相愛学園講堂)
	6 24	第4回ジョイントコンサート(大阪歯科大混声・大阪女子大女声・桃山学院大男声・大阪樟蔭女子大女声・近畿大男声・大阪コーラル混声・外大) (御堂会館ホール)
	10 17	第1回大阪府合唱コンクール予選(第2位) (大阪府厚生会館) 指揮：藤村治郎 課題曲：「雲」 自由曲：「枯木と太陽の歌」より「冬の夜の木枯の合唱」
	10 31	第20回関西合唱コンクール決勝 (フェスティバルホール) 指揮：藤村治郎 課題曲：「雲」 自由曲：「枯木と太陽の歌」より「冬の夜の木枯の合唱」
	11 3	第17回外大祭に出演 (大手前の国民會館)
	11 4	大阪女子大第17回大学祭に出演 (大阪女子大学講堂)
	11 30	第9回定期演奏会 (部長：本城清 出演：51名) (サンケイホール) 指揮：藤村治郎 ロシア民謡：「母なるヴォルガを下りて」「エルベ河」「ともしび」 「何故のくちづけ」「収穫の歌」 指揮：藤村治郎 ポピュラー曲集：「My Bonnie」「Grandfather's Clock」「Bonnie Eloise」 「Good Night, Ladies」(ソロ：岡勢則之 山本勝昭 浅野征道 近藤純雄) 指揮：藤村治郎 OB合同演奏 組曲「月光とピエロ」 指揮：藤村治郎 黒人霊歌：「My Lord, What a Mornin'」「Lord, I Cannot Stay Away」 「Mary Had a Baby」「Jerusalem Morning」「Soon Ah Will Be Done」 (ソロ：近藤純雄 伊東昭広 木下和夫 山崎寿雄) 指揮：藤村治郎 組曲「枯木と太陽の歌」(ピアノ伴奏：奈良和美) <出演者> T1) ○西村信勝 伊東昭広 石田康雄 副島豊次郎 佐久間健 板村哲也 神田正夫 坂本史彦 竹原研一 T2) ○木下和夫 上野明信 浅野征道 石井潔 真田泰昌 山本勝昭 鈴木惟司 角田広 山田良一 塩見憲一 山下輝夫 藪庄次郎 高橋正憲 安藤雅之 村尾悟 福田宏俊 真田達也 B1) ○藤雄木滋 満谷康治 土谷捷三郎 山崎寿雄 岡勢則之 蔵城正也 木村秀彰 岡山忠義 真田泰昌 大釜心一 湯河和義 小林八郎 津田雄三 三沢広彦 梶江靖史 B2) ○後藤勇治 本城清 山原豊 森滋 近藤純雄 岸田勝昭 光畑記夫 藤岡哲雄 松田靖行 稲岡俊一 大井耐三 <OB有志が合同演奏に参加>
	12 3	神戸外大混声合唱団第6回定演に賛助出演 (神戸国際会館)
	12	梅花学園クリスマスメサイヤに参加 (指揮：長井齊)
昭和41年 (1966)	3 5	岐阜演奏会 (岐阜商工会議所ホール)
	3 7	静岡演奏会 (静岡県民会館ホール)
	3 8	第1回東西外国語大学交歓演奏会 (東京文化会館)
	6 12	第3回大阪府合唱祭に参加 (相愛学園講堂)

年	月日	できごと
	10 16	第2回大阪府合唱コンクール (第2位) (四天王寺会館) 指揮：西村信勝 課題曲：「林に来て」 自由曲：「地下水」
	10 30	第21回関西合唱コンクール (高槻市市民会館) 指揮：西村信勝 課題曲：「林に来て」 自由曲：「地下水」
	11 1	第18回外大祭に出演 (国民会館)
	12 17	第10回定期演奏会 (部長：岸田勝昭 出演：56名) (サンケイホール) 指揮：光畑紀夫 ヨーロッパ民謡：「Freie Kunst」「Annie Laurie」「Montanyes Regalades」 「Volga Boat-men Song」「U Boj」(ソロ：西村信勝) 指揮：西村信勝 現代男声合唱曲集：「地下水」「蛇祭り行進」「スカンク・カンク・ブー」 指揮：西村信勝 OB合同演奏 組曲「人間の歌」：「縫ひつける」「涙の塩」「浜の足跡」 「また一つ」「木がらし」「年の別れ」(ソロ：石田康雄) 指揮：西村信勝 黒人霊歌集：「Ride the Chariot」「Do Don't Touch-a My Garment」 「Keep in the Middle of the Road」「Humble」「This Ol' Hammer」「Steal Away」 「Sometimes I Feel Like a Motherless Child」「Didn't My Lord Deliver Daniel?」 「Soon Ah Will Be Done」(ピアノ間奏：塩見憲一) (ソロ：岡勢則之 坂本史彦 浅野征道 近藤純雄 伊東昭広 津田雄三) <出演者> T1) ○伊東昭広 石田康雄 西村信勝 神田正夫 板村哲也 竹原研一 村田要志夫 坂本史彦 遠藤弘三 柳沢長四郎 野田邦男 T2) ○浅野征道 石井潔 山本勝昭 角田広 鈴木惟司 山田良一 安藤雅之 小倉正夫 真田達也 塩見憲一 藪庄次郎 山下輝夫 日根野谷博 柳楽行雄 徳永光庸 山口正晴 B1) ○山崎寿雄 岸田勝昭 木村秀彰 蔵城正也 岡勢則之 津田雄三 福田宏俊 浜崎慎吾 梶江靖史 三沢広彦 向和彦 村上剛 池田哲郎 河嶋靖夫 坂本正稔 佐藤謙司 山蔭孝夫 B2) ○近藤純雄 松田靖行 光畑紀夫 柳善一 野間清治 万谷(家城)義男 大井耐三 井上尚弘 真鍋一史 奥野薫 竹井禎 塚本憲嗣 <OB有志が合同演奏に参加>
昭和42年 (1967)	3 10	岡山大学グリークラブ(混声)との交歓演奏会 (岡山市葦川会館)
	3 13	新居浜演奏会 (新居浜文化センター)
	6 11	第4回大阪府合唱祭に参加 (相愛学園講堂)
	6 17	第3回大阪四大学交歓演奏会(外大・阪大・府大・市大) (大阪大学中之島講堂)
	10 1	第3回大阪府合唱コンクール (四天王寺会館) 指揮：光畑紀夫 課題曲：「大漁祝い」 自由曲：組曲「5つの学生の歌」より「門出」
	11	大学祭に出演
	12 5	第11回定期演奏会 (部長：梶江靖史 出演：50名) (サンケイホール) 指揮：安藤雅之 ロシア民謡：「収穫の歌」「エルベ河」「道」「鐘は単調になる」 「ボルガの舟唄」(ソロ：板村哲也 津田雄三)

年	月日	できごと
		<p>指揮：光畑紀夫 現代男声合唱曲集：「河童昇天」「ふるさと」「葉月のお月(わが歲月より)」</p> <p>指揮：光畑紀夫 OB合同演奏 日本民謡：「そうらん節」「塩田小唄」「佐渡おけさ」</p> <p>「五木の子守唄」「最上川舟唄」(ソロ：村上剛 梶江靖史 西村信勝)</p> <p>指揮：光畑紀夫 組曲「五つの学生の歌」：「かちどき」「雨の日曜日」「間奏曲」「高原にて」「門出」</p> <p>指揮：光畑紀夫 黒人霊歌：「Wade in the Water」「Sister Mary Wore Three Lengths of Chain」「Listen to the Lamb」「Ready When He Comes」「Go Down, Moses」「Swing Low, Sweet Chariot」「Soon Ah Will Be Done」(ソロ：梶江靖史 板村哲也 大井耐三 安藤雅之)</p> <p><出演者></p> <p>T1) ○板村哲也 村上剛 藪庄次郎 真田達也 徳永光庸 柳楽行雄 遠藤弘三 柳沢長四郎 天野邦彦 井上継護</p> <p>T2) ○鈴木惟司 角田広 山田良一 安藤雅之 塩見憲一 山下輝夫 小倉正夫 村田要志夫 日根野谷博 佐藤謙司 小野田裕司 山口正晴 明場幹夫 飾磨祥二 小竹正幸 加藤直樹</p> <p>B1) ○津田雄三 浜崎慎吾 万谷(家城)義男 梶江靖史 向和彦 河嶋靖夫 林秀樹 坂本正稔 松岡一仁 山崎訓 鶉飼茂 南雄次</p> <p>B2) ○松田靖行 光畑紀夫 大井耐三 野間清治 三沢広彦 井上尚弘 竹井禎 真鍋一史 西村裕 奥野薫 奥村茂 紀野芳広</p> <p><OB有志が合同演奏に参加></p>
昭和43年 (1968)	3 6	金沢演奏会 (金沢観光会館)
	3 8	名古屋市立女子短期大学との交歓演奏会 (愛知県中小企業センター)
	6 2	第5回大阪府合唱祭に参加 (東大阪市民会館)
	6 18	第4回大阪四大学交歓演奏会(外大・阪大・府大・市大) (府立厚生会館)
	7	岡山大学グリークラブ演奏会に賛助出演
	11	大阪外大ギタークラブ演奏会に賛助出演
	11	大学祭に出演
	11 28	大阪外大女声コーラス部演奏会に賛助出演 (13名参加) (大阪府立厚生会館小ホール)
	12 3	<p>第12回定期演奏会 (部長：大井耐三 出演：43名) (サンケイホール)</p> <p>指揮：天野邦彦 SEA SHANTIES：「Blow the Man Down」「Bound for Rio Grande」 「A-Roving」「Shenandoah」「What Shall We Do with the Drunken Sailor?」 (ソロ：真鍋一史 梶江靖史 安藤雅之 ギター伴奏：川真田直樹)</p> <p>指揮：安藤雅之 古典イタリア歌曲集：「Ombra Mai Fu」「Gia' il Sole dal Gange」 「O Del Mio Dolce Ardor」「Piacer d'amor」(ピアノ伴奏：塩見憲一)</p> <p>指揮：安藤雅之 組曲「ぼくたちの挨拶」：「こんにちは」「あいします」 「だまっている時のブルース」「おっす」「おやすみ」</p> <p>指揮：安藤雅之 黒人霊歌：「My Soul's Been Anchored in de Lord」「Were You There?」 「I Got Shoes」「Lord I Cannot Stay Away」「This Ol' Hammer」「The Battle of Jericho」 「Deep River」「Dere's No Hidin' Place Down Dere」「De Animal's A-Coming」 「Let Us Break Bread Together」「Soon Ah Will Be Done」 (ソロ：梶江靖史 野間清治 真鍋一史 松岡一仁 板村哲也 大井耐三)</p>

年	月日	できごと
		<p><出演者></p> <p>T1) ○板村哲也 藪庄次郎 遠藤弘三 柳楽行雄 徳永光庸 天野邦彦 松岡一仁 小竹正幸 藤原克司</p> <p>T2) ○塩見憲一 村上剛 安藤雅之 山口正晴 佐藤謙司 日根野谷博 村田要志夫 柳沢長四郎 明場幹夫 加藤直樹 木村長俊 山本修司 勝田茂</p> <p>B1) ○梶江靖史 浜崎慎吾 井上尚弘 小野田裕司 林秀樹 坂本正稔 奥野薫 河嶋靖夫 鶴飼茂 南雄次 竹尾彰 後藤久義</p> <p>B2) ○野間清治 万谷(家城)義男 三沢広彦 大井耐三 真鍋一史 竹井禎 西村裕 奥村茂 内海卓也</p>
昭和44年 (1969)	3 5	第1回東西外国語大学交換演奏会 (御堂会館)
	3 6	岐阜演奏会 (岐阜市商工会議所)
	3 7	一宮演奏旅行 (一宮勤労会館)
	6 22	第6回大阪府合唱祭に参加 (豊中市民会館)
	7 10	滋賀大学クレークラブと交歓演奏会 (滋賀会館)
	12 12	<p>第13回定期演奏会 (部長：柳沢長四郎 出演：39名) (大阪府立青少年会館)</p> <p>指揮：松岡一仁 オペラ合唱曲集：魔弾の射手より「狩人の合唱」 イルトロバトーレより「アンヴィルコーラス」 魔笛より「僧侶の合唱」 さまよえるオランダ人より「水夫の合唱」 タンホイザーより「巡礼の合唱」 (ピアノ伴奏：長谷川望)</p> <p>指揮：天野邦彦 OB合同演奏 SEA SHANTIES：「Haul Away Joe」 「Spanish Ladies」 「Whup! Jamboree」 「Shenandoah」 「Good-bye, Fare Ye Well」 (ソロ：岡本精二 松岡一仁 佐藤謙司 ギター伴奏：諏訪忠泰)</p> <p>指揮：天野邦彦 組曲「中原中也詩集」：「北の海」「汚れっちまった悲しみに」「朝鮮女」 「六月の雨」「月の光」「また来ん春」 (ソロ：松岡一仁 佐藤謙司 朗読：加藤道子(女声コーラス部))</p> <p>指揮：天野邦彦 黒人霊歌：「Same Train」 「If I Got My Ticket, Can I Ride?」 「Ride the Chariot」 「Oh, Po' Little Jesus」 「Little David Play on Ya Harp」 「Jerusalem Morning」 「Didn't My Lord Deliver Daniel?」 「Soon Ah Will Be Done」 (ソロ：真鍋一史 松岡一仁 佐藤謙司 西村裕 朗読：井上尚弘 加藤道子)</p> <p><出演者></p> <p>T1) 天野邦彦 ○遠藤弘三 柳楽行雄 佐藤謙司 徳永光庸 小竹正幸 葉山英行 田中充 山下均 神田長</p> <p>T2) 日根野谷博 村田要志夫 ○山口正晴 柳沢長四郎 明場幹夫 加藤直樹 山本修司 藤田真一 亀岡光則</p> <p>B1) ○井上尚弘 奥野薫 小野田裕司 坂本正稔 河嶋靖夫 松岡一仁 鶴飼茂 後藤久義 竹尾彰 岡本精二 葉山峰治 坂田憲治</p> <p>B2) ○真鍋一史 西村裕 竹井禎 南雄次 奥村茂 内海卓也 西森誠 八木哲夫</p> <p><OB有志が合同演奏に参加></p>
昭和45年 (1970)	6 9	第5回大阪四大学交歓演奏会(外大・阪大・府大・市大) (大阪府立青少年会館)
	10	第1回音楽サークル交換演奏会

年	月日	できごと
	12 5	<p>第14回定期演奏会（部長：奥村茂 出演：28名）（サンケイホール） 指揮：松岡一仁 DEUTSCHE MESSE：「Zum Eingang」 「Zum Gloria」 「Zum Credo」 「Zum Offertorium」 「Zum Sanctus」 「Zu der Vandlung」 「Zum Agnus Dei」 「Schlussgesang」 指揮：葉山英行 組曲「薔薇の散策」（ピアノ伴奏：山本浩子） 指揮：松岡一仁 FROM THE NEW WORLD：「第2楽章ラルゴより」 指揮：松岡一仁 組曲「雨」 指揮：松岡一仁 黒人霊歌：「See That Babe in the Lowly Manger」 「Nobody Knows de Trouble I See」 「Keep in the Middle of the Road」 「Sometimes I Feel Like a Motherless Child」 「I Got a Key」 「Steal Away」 「Didn't My Lord Deliver Daniel?」 「Soon Ah Will Be Done」 <出演者> T1) ○小竹正幸 藤原克司 田中充 山下均 神田長 堀田光行 長野稔 T2) ○明場幹夫 葉山英行 山本修司 葉山峰治 久山耕 上羽一明 川崎博康 B1) ○河嶋靖夫 鶴飼茂 竹尾彰 岡本精二 後藤久義 亀田陽一 足立明洋 B2) ○奥村茂 南雄次 内海卓也 西森誠 八木哲夫 藤本浩一 丸雄彰</p>
昭和46年 (1971)	6 5	第6回大阪四大学交歓演奏会（外大・阪大・府大・市大） （大阪厚生年金会館）
	11 22	第2回統一外大祭に出演 （中小企業会館）
	12 17	<p>第15回定期演奏会（部長：内海卓也 出演：27名）（大阪府立青少年会館） 指揮：山下均 組曲「朔太郎の四つの詩」 指揮：葉山英行 組曲「人間の歌」 指揮：葉山英行 黒人霊歌：「My Souls Been Anchored in the Lord」 「Ride the Chariot」 「Dig My Grave」 「Jerusalem Morning」 「I Got Shoes」 「Dry Bones」 「Were You There?」 「Wade in de Water」 「Deep River」 「The Battle of Jericho」 「This Ol' Hammer」 「Didn't My Lord Deliver Daniel?」 「Soon Ah Will Be Done」 <出演者> T1) ○藤原克司 山下均 田中充 堀田光行 池田民樹 天野卓也 藤田勉 T2) 加藤直樹 ○山本修司 神田長 久山耕 川崎博康 古川(汐崎)澄夫 松本博 B1) ○岡本精二 竹尾彰 後藤久義 葉山峰治 坂田憲治 足立明洋 堅田和彦 B2) ○内海卓也 葉山英行 西森誠 八木哲夫 前田一仁 橋本和直</p>
昭和47年 (1972)	6 13	第7回大阪四大学交歓演奏会（外大・阪大・府大・市大） （大阪府立青少年会館）
	12 7	<p>第16回定期演奏会（部長：八木哲夫 出演：27名）（大阪府立青少年会館） 指揮：山下均 組曲「わが歳月」 指揮：山下均 メンデルスゾーン男声合唱曲集：「獵人の別れ」 「水の上」 「楽しきさすらひ人」 「夜の歌」 「トルコの乾杯歌」 指揮：堀田光行 山田耕筈作品集：「あわて床屋」 「青蛙」 「この道」 「帰ろ帰ろ」 「からたちの花」 「中国地方の子守唄」 指揮：山下均 黒人霊歌：「Same Train」 「O Lord Have Mercy on Me」 「Ain'-a That Good News」 「Crucifixion」 「There Is a Balm in Gilead」 「Steal Away」 「Soon Ah Will Be Done」 <出演者> T1) 藤原克司 ○田中充 山下均 池田民樹 天野卓也 上田哲也 T2) 加藤直樹 ○神田長 久山耕 堀田光行 松本博 重富勝己 吉岡正彦 今井保男 勝原尚実 B1) ○坂田憲治 葉山峰治 足立明洋 堅田和彦 藤田勉 古川(汐崎)澄夫 平木洸二 田宮(塩谷)崇守</p>

年	月日	できごと
		B2) ○西森誠 八木哲夫 前田一仁 橋本和直
昭和48年 (1973)	6 4	第8回大阪四大学交歓演奏会 (外大・阪大・府大・市大) (大阪府立青少年会館)
	12 7	第17回定期演奏会 (部長: 足立明洋 出演: 29名) (大阪府立青少年会館) 指揮: 堀田光行 組曲「父のいる庭」 指揮: 池田民樹 五つの日本民謡: 「そうらん節」「機織唄」「佐渡おけさ」「五つ木の子守唄」「最上川舟唄」 指揮: 堀田光行 Foster's Album 指揮: 堀田光行 黒人霊歌: 「The Battle of Jericho」「Set Down Servant」「Keep in de Middle of the Road」「Oh, Lord, Ah Got Mo Trubble」「Go Down, Moses」「Rock a My Soul」「Ride the Chariot」「Soon Ah Will Be Done」 <出演者> T1) 山下均 堀田光行 ○天野卓也 池田民樹 上田哲也 片山誠也 高田博行 T2) ○久山耕 川崎博康 松本博 大和田伸 重富勝己 今井保男 勝原尚実 長井竜月 伴治美 B1) ○足立明洋 藤田勉 古川(汐崎)澄夫 田宮(塩谷)崇守 田中敬一 清水計宏 B2) ○樽井一仁 橋本和直 堅田和彦 村上幸造 佐伯益男 松尾航一 大角幸彦
昭和49年 (1974)	6 7	第9回大阪四大学交歓演奏会 (外大・阪大・府大・市大) (大阪厚生年金会館)
	12 20	第18回定期演奏会 (部長: 樽井一仁 出演: 31名) (大阪府立青少年会館) 指揮: 池田民樹 合唱による風土記「阿波」: 「鯛締」「麦打ち」「餅搗」「水取り」「踏鞴」 指揮: 今井保男 中勘助の詩から: 「絵日傘」「椿」「四十雀」「ほほじろの声」「かもめ」「ふり売り」「追羽根」(ソロ: 上田哲也) 指揮: 池田民樹 黒人霊歌: 「Wade in de Water」「This Ol' Hammer!」「Deep River」「Nobody Knows de Trouble I See」「Didn't My Lord Deliver Daniel?」 指揮: 池田民樹 MAN OF LA MANCHA: 「Man of La Mancha」「Dulcinea」「Little Bird, Little Bird」「Barber's Song-Golden Helmet of Mambrino」「The Impossible Dream」 <出演者> T1) 上田哲也 田宮(塩谷)崇守 藤井一彦 池田民樹 堀田光行 ○天野卓也 高田博行 T2) 大和田伸 今井保男 池田守 五十嵐強 長井龍月 重富勝己 勝原尚実 ○松本博 松尾航一 伴治美 B1) 古川(汐崎)澄夫 佐伯益男 村上幸造 田中敬一 ○堅田和彦 片山誠也 楠本隆志 桑田明弘 清水計宏 B2) ○樽井一仁 辻陽一 白木正司 橋本和直 藤田勉
昭和50年 (1975)	6 27	第10回大阪四大学交歓演奏会 (外大・阪大・府大・市大) (大阪厚生年金会館)
	12 19	第19回定期演奏会 (部長: 上田哲也 出演: 35名) (大阪府立青少年会館) 指揮: 今井保男 雪明りの道: 「春を待つ」「梅ちゃん」「月夜を歩く」「白い障子」「雪夜」 指揮: 松尾航一 黒人霊歌: 「The Battle of Jericho」「Sometimes I Feel Like a Motherless Child」「Little Innocent Lamb」「My Soul's Been Anchored in The Lord」「Soon Ah Will Be Done」 指揮: 松尾航一 薔薇のあしおと: 「手をのばす薔薇」「ばらの誘惑」「ひびきのなかに住む薔薇よ」「ばらのあしおと」 指揮: 今井保男 THE BEATLES ALBUM: 「Michelle」「Eleanor Rigby」「Girl」「Here, There and Everywhere」「Yesterday」(ギター伴奏: 藤本泰久) <出演者>

年	月日	できごと
		<p>T1) ○上田哲也 田宮(塩谷)崇守 高田博行 長井竜月 五十嵐強 倉西幹雄</p> <p>T2) ○勝原尚実 今井保男 片山誠也 伴治美 池田守 安藤満徳 喜田晃司 恒川正義 吉川靖弘</p> <p>B1) ○重富勝己 田中敬一 楠本隆志 桑田明広 佐伯博史 吉田隆 浜田慎也 橋本達也 池田徳規 岸本保 新谷昭一 十二正文 西川清澄</p> <p>B2) 橋本和直 ○佐伯益男 松尾航一 清水計宏 片川徳明 谷口雅俊 伊藤道彦</p>
昭和51年 (1976)	6 18	第11回大阪四大学交歓演奏会(外大・阪大・府大・市大) (大阪厚生年金会館)
	9 18	近畿4大学交歓演奏会(神戸商大・姫路工大・滋賀大経済・外大) (大阪府立青少年会館)
	12 18	<p>第20回定期演奏会・創部50周年記念(部長:伴治美 出演:37名)(大阪府立青少年会館)</p> <p>指揮:池田守 組曲「中原中也の詩から」:「北の海」「汚れっちまった悲しみに」「朝鮮女」 「雲雀」「六月の雨」「月の光」</p> <p>指揮:松尾航一 ロシア民謡:「母なるボルガを下りて」「カリンカ」「鐘は単調になる」 「ボルガの舟唄」「アムール河の波」</p> <p>指揮:松尾航一 黒人霊歌:「Ride the Chariot」「Crucifixion」「Swing Low, Sweet Chariot」 「Let Us Break Bread Together」「Ain'-a That Good News」「Kum Ba Yah」「Were You There?」「Didn't My Lord Deliver Daniel?」</p> <p>客演指揮:清水脩 OB合同演奏 組曲「月光とピエロ」</p> <p>アンコール:清水脩特別編曲・本邦初演「大阪の子守唄(男声版)」</p> <p><出演者></p> <p>T1) 高田博行 堀田光行 池田守 橋本伸一 ○五十嵐強 倉西幹雄 片山雅也</p> <p>T2) 伴治美 ○吉川靖弘 松尾航一 喜田晃司 貞重晴敏 徳永浩之 松井俊一 恒川正義 田中昭宏 安藤満徳</p> <p>B1) 河原敬 今田久帆 桑田明広 吉田隆 池田徳規 片岡正明 伯井泰彦 田中敬一 楠本隆志 平井亨 岸本保 新谷昭一 ○佐伯博史</p> <p>B2) 新井靖史 ○片川徳明 橋本達也 佐藤弘嗣 橋本和直 谷口雅俊 伊藤道彦</p> <p><OB有志が合同演奏に参加></p>
昭和52年 (1977)	6 17	第12回大阪四大学交歓演奏会(外大・阪大・府大・市大) (大阪厚生年金会館)
	12 13	<p>第21回定期演奏会(部長:桑田明広 出演:40名)(大阪府立青少年会館)</p> <p>指揮:池田守 黒人霊歌:「Deep River」「This Ol' Hammer」「I Hear a Voice A-Prayin'」 「Sometimes I Feel Like a Motherless Child」「Little David Play on Your Harp」 「Go Down, Moses」</p> <p>客演指揮:林誠 組曲「山に祈る」(ピアノ伴奏:植田定和 朗読:藤沢則子)</p> <p>指揮:堀田光行 SEA SHANTIES:「Whup! Jamboree」「Blow the Man Down」 「Haul Away Joe」「Low Lands」「Shenandoah」「Spanish Ladies」</p> <p>指揮:池田守 組曲「雨」</p> <p><出演者></p> <p>T1) 五十嵐強 ○池田守 橋本伸一 堀田光行 片岡正明 上田茂夫 永谷勉 北村照夫</p> <p>T2) 長井龍月 恒川正義 吉川靖弘 ○徳永浩之 重貞晴敏 松井俊一 伯井泰彦 清水孝司 圓山望 菊隆也</p> <p>B1) 佐伯博史 吉田隆 桑田明弘 楠本隆志 池田徳規 ○岸本保 十二正文 新谷昭一 今田久帆 河原敬 平井亨 平野隆夫 正木啓</p> <p>B2) 橋本和直 片川徳明 伊藤道彦 橋本達也 新井靖史 佐藤弘嗣 中南文生 工藤博 村川健一 前田芳秀 ○谷口雅俊</p>

年	月日	できごと
昭和53年 (1978)	6 14	第13回大阪四大学交歓演奏会(外大・阪大・府大・市大)(大阪府立青少年会館)
	6	寮歌祭参加 (SABホール)
	7	大学合唱フェスティバル参加 (池田市民会館)
	10 20	三大学交歓演奏会(大阪外大・東京外大・広島大学)(中之島中央公会堂)
	11 27	第9回統一外大祭に出演 (中小企業会館)
	12 9	第22回定期演奏会 (部長:岸本保 出演:44名)(東大阪市民会館) 指揮:堀田光行 組曲「観音」 指揮:河原敬 五つの日本民謡:「そうらん節」「機織唄」「佐渡おけさ」「五つ木の子守唄」 「最上川舟唄」 指揮:堀田光行 OB合同愛唱歌:「トルコの乾杯歌」「Ständchen」「秋のピエロ」「希望の鳥」 指揮:堀田光行 古典イタリア歌曲:「Amarilli, Mia Bella」「Gia' il Sole dal Gange」 「O Del Mio Dolce Ardor」「Chi Vuol la Zingarella」「Piacer d'amor」(ピアノ伴奏:新谷昭一) 指揮:堀田光行 黒人霊歌:「The Battle of Jericho」「Set Down Servant!」 「Ev'ry Time I Feel the Spirit」「If I Got My Ticket, Can I Ride?」「Oh Po' Little Jesus」 「Mary Had a Baby」「Po' Mourner's Got a Home at Last」「Soon Ah Will Be Done」 <出演者> T1) 堀田光行 五十嵐強 池田守 ○永谷勉 北村照夫 片岡正明 内野秀樹 石原守 上田茂夫 T2) 徳永浩之 貞重晴敏 吉川靖弘 安藤満徳 長井龍月 松井俊一 伯井泰彦 圓山望 ○菊隆也 永山隆 入江一隆 鈴木忠道 北野忍 B1) 吉田隆 岸本保 新谷昭一 池田徳規 十二正文 今田久帆 河原敬 正木啓 佐戸裕彰 中道淳一 塩谷茂樹 ○平井亨 B2) 山口清之 秋田泰弘 上原聡 前田芳秀 ○村川健一 佐藤弘嗣 谷口雅俊 橋本達也 片川徳明 橋本和直 <OB有志が合同演奏に参加>
	昭和54年 (1979)	6 14
11 2		第2回東西外国語大学GLEE CLUB交歓演奏会(阪外大・東外大)(東京都児童会館)
11 19		第10回統一外大祭に出演 (箕面キャンパス)
12 6		第23回定期演奏会 (部長:今田久帆 出演:39名)(大阪府立青少年会館) 指揮:河原敬 組曲「柳河風俗詩」(ソロ:永谷勉) 指揮:北村照夫 VIVA! WESTERN:「Rawhide」「High Noon」「Yellow Rose of Texas」 「Tara's Theme」「Deguello」「When Johnny Comes Marching Home」 指揮:林誠 シューベルト歌曲集より:「ゴンドラを漕ぐ人」「小夜曲」「森の夜の歌」(ソロ:河原敬) 指揮:河原敬 黒人霊歌:「Wade in de Water」「Little Innocent Lamb」「Steal Away」 「Let Us Break Bread Together」「Nobody Knows de Trouble I See」「Go Down, Moses」 (ソロ:菊隆也 村川健一) <出演者>

年	月日	できごと
		<p>T1) 倉西幹雄 ○永谷勉 北村照夫 圓山望 上田茂夫 内野秀樹 石原守 保川一治</p> <p>T2) 堀田光行 徳永浩之 伯井泰彦 松井俊一 ○菊隆也 永山隆 入江一隆 北野忍 米田伸夫</p> <p>B1) 池田徳規 平井亨 今田久帆 河原敬 正木啓 松田博安 ○佐戸裕彰 塩谷茂樹 藤井哲 梅垣誠 吉金正裕</p> <p>B2) 片川徳明 伊藤道彦 前田芳秀 ○村川健一 秋田泰弘 上原聡 山内清之 秋本仁 前田哲男 山口伸 橋本達也</p>
昭和55年 (1980)	6 18	第15回大阪四大学交歓演奏会 (外大・阪大・府大・市大) (森ノ宮ピロティホール)
	9 18	ジョイントコンサート(奈良女子大) (森ノ宮ピロティホール)
	10 15	東大寺大仏殿落慶法要に出演 (東大寺大仏殿前) 指揮：團伊玖磨 「盧舎那仏賛歌」(團伊玖磨作曲)
	12 12	第24回定期演奏会 (部長：村川健一 出演：34名) (大阪府立青少年会館) 指揮：北村照夫 世界の歌声：「Annie Laurie」 「Bengawan Solo」 「Kalinka」 「Mara Bebus」 「Home on the Range」 「Siboney」 指揮：石原守 清水脩作品集より：「阿波祈禱文」 「魚拓」 「黙示」 指揮：北村照夫 映画「南太平洋」より：「Bali Ha'i」 「Younger than Springtime」 「Honey Ban」 「There Is Nothin' Like a Dame」 「Dites-moi」 「Some Enchanted Evening」 (ソロ：泉たみえ) 指揮：北村照夫 黒人霊歌：「Didn't My Lord Deliver Daniel?」 「Crucifixion」 「Little David Play on Yo' Harp」 「I Wan' to Be Ready」 「Were You There?」 「Ain'-a That Good News」 「Soon Ah Will Be Done」 <出演者> T1) 永谷勉 北村照夫 圓山望 上田茂夫 石原守 ○内野秀樹 保川一治 中津孝司 大音厚智 T2) 菊隆也 ○永山隆 北野忍 入江一隆 米田伸夫 梅垣誠 牧本成俊 田中宗裕 B1) 正木啓 佐戸裕彰 ○松田博安 塩谷茂樹 藤井芳郎 板倉正幸 公文秀行 B2) 前田芳秀 村川健一 上原聡 秋田泰弘 山内清之 秋本仁 前田哲男 ○山口伸 谷口善典
昭和56年 (1981)	3 8	第5回箕面市市民音楽祭ベートーベン第9シンフォニーの夕べ (箕面市民会館)
	4 10	劇的物語「ファウストの劫罰」合唱に出演 (フェスティバルホール)
	6 24	第16回大阪四大学交歓演奏会 (外大・阪大・府大・市大) (森ノ宮ピロティホール)
	10 21	ジョイントコンサート (大阪女学院短大・帝塚山学院大・外大) (大阪郵貯会館ホール)
	11 8	箕面市民音楽祭に参加 (箕面市民会館)
	12 11	第25回定期演奏会 (部長：永山隆 出演：34名) (大阪府立青少年会館) 指揮：石原守 SEA SHANTIES：「Spanish Ladies」 「Shenandoah」 「Whup! Jamboree」 「Blow the Man Down」 「Lowlands」 「Sailing Sailing」 指揮：秋本仁 組曲「月光とピエロ」 指揮：石原守 黒人霊歌：「Deep River」 「Same Train」 「Swing Low, Sweet Chariot」

年	月日	できごと
		<p>「Let Us Break Bread Together」 「There Is a Balm in Gilead」 「I Hear a Voice A-Prayin'」 「Do-Don't Touch-a My Garment」 「All My Trials」 「Standin' in de Need O'Prayer」 「Dig My Grave」 (朗読：泉たみえ) <出演者> T1) 北村照夫 圓山望 上田茂夫 石原守 ○内野秀樹 保川一治 大音厚智 中津孝司 宮田悟夫 T2) ○永山隆 入江一隆 北野忍 米田伸夫 梅垣誠 牧本成俊 八杉勝英 小林卓郎 B1) 正木啓 佐戸裕彰 ○松田博安 板倉正幸 藤井哲 西山恭介 勝本(栗生)昇 利守和典 塩谷茂樹 B2) 秋田泰弘 上原聡 山内清之 秋本仁 前田哲男 ○山口伸 谷口善典 小西吾郎</p>
昭和57年 (1982)	6 8	第17回大阪四大学交歓演奏会 (外大・阪大・府大・市大) (森ノ宮ピロティホール)
	7 10	第5回大学フェスティバルに参加 (池田市民文化会館)
	9 11	第1回東西外国語大学合唱団交歓演奏会 (大阪外大グリーン・大阪外大女声コーラス部・東京外大混声コール・ソレイユ) (森ノ宮ピロティホール)
	11 14	箕面市民音楽祭に参加 (箕面市民会館)
	12 6	<p>第26回定期演奏会 (部長：梅垣誠 出演：31名) (森ノ宮青少年会館) 指揮：秋本仁 組曲「雨」 指揮：中津孝司 組曲「水のいのち」 指揮：秋本仁 組曲「子供の一年」 指揮：秋本仁 OB合同演奏 愛唱歌より：「U Boj」 「トルコの乾杯歌」 「Didn't My Lord Deliver Daniel?」 「Spanish Ladies」 指揮：秋本仁 黒人霊歌：「Old Ark's A-Moverin'」 「Wade in de Water」 「The Battle of Jericho」 「Nobody Knows de Trouble I See」 「Soon Ah Will Be Done」 「O My Golden Slippers」 <出演者> T1) 永山隆 秋本仁 中津孝司 ○大音厚智 八杉勝英 宮田悟夫 島村泰生 T2) 入江一隆 梅垣誠 保川一治 ○牧本成俊 小林卓郎 宮本充祐 坂居孝二 B1) 塩谷茂樹 米田伸夫 ○板倉正幸 藤井哲 勝本(栗生)昇 西山恭介 小久保慎治 松村尚人 矢島正志 B2) 前田哲男 ○山口伸 谷口善典 利守和典 前中靖司 丸岡仁 大川元博 高橋信浩</p>
昭和58年 (1983)	6 21	第18回大阪四大学交歓演奏会 (外大・阪大・府大・市大) (森ノ宮ピロティホール)
	7 10	大学フェスティバルに出演 (池田アゼリアホール)
	9 10	第2回ジョイントコンサート(奈良女子大) (森ノ宮ピロティホール)
	11 13	箕面市民音楽祭に参加 (箕面市民会館)
	12 22	<p>第27回定期演奏会 (部長：牧本成俊 出演：24名) (大阪府立青少年会館) 指揮：中津孝司 「メンデルスゾーン男声合唱曲集」 指揮：小林卓郎 組曲「わがふるき日のうた」 指揮：中津孝司 OB合同演奏 「男声合唱とピアノのためのゆうやけの歌」 指揮：中津孝司 黒人霊歌：「Deep River」 「Crucifixion」 「If I Got My Ticket, Can I Ride?」</p>

年	月日	できごと
		<p>「Were You There?」「This Ol' Hammer!」「Jacob's Ladder」「Ain'-a That Good News」 <出演者> T1) 保川一治 ○大音厚智 中津孝司 八杉勝英 宮田悟夫 島村泰生 丸岡仁 T2) ○牧本成俊 小林卓郎 坂居孝二 高橋誠 島野岳志 B1) 板倉正幸 勝本(栗生)昇 ○西山恭介 松村尚人 矢島正志 山本暁 B2) 谷口善典 ○利守和典 藤井哲 前中靖司 大川元博 高橋信浩 <OB有志が合同演奏に参加></p>
昭和59年 (1984)	6 23	ジョイントコンサート(関大工学部男声・園田学園大女声・甲南大女声・外大) (森ノ宮ピロティホール)
	7 8	大学フェスティバルに参加 (池田アゼリアホール)
	9 7	第2回東西外国語大学合唱団交歓演奏会(大阪外大グリー・大阪外大女声コーラス部・東京外大混声コール・ソレイユ) (東京荒川区民会館)
	11 11	箕面市民音楽祭に参加 (箕面市民会館)
	12 14	<p>第28回定期演奏会 (部長:勝本昇 出演:21名) (森ノ宮ピロティホール) 指揮:小林卓郎 組曲「柳河風俗詩」 指揮:坂居孝二 組曲「富士山の詩」 指揮:小林卓郎 世界の愛唱歌:「フィンランディア」「アニーローリー」 「母なるヴォルガを下りて」「Waltzing Matilda」「最上川舟唄」 指揮:小林卓郎 前4曲はOB合同演奏 黒人霊歌:「Little Innocent Lamb」「I Hear a Voice A-Prayin'」「Oh, Po' Little Jesus」「Soon Ah Will Be Done」(以上4曲はOB合同演奏) 「Same Train」「Po' Mourners Got a Home at Last」「Steal Away」「Ev'ry Time I Feel the Spirit」 <出演者> T1) 八杉勝英 ○宮田悟夫 島村泰生 丸岡仁 渡辺泰博 T2) 小林卓郎 ○坂居孝二 浅田康路 五島晃 B1) 板倉正幸 ○勝本(栗生)昇 西山恭介 松村尚人 矢島正志 山本暁 B2) 藤井哲 ○利守和典 大川元博 高橋信浩 前中靖司 秋山正樹 <OB有志が合同演奏に参加></p>
昭和60年 (1985)	6 11	第19回大阪四大学交歓演奏会(外大・阪大・府大・市大) (森ノ宮ピロティホール)
	9 5	ジョイントコンサート(桃山学院大学男声・大阪女学院短大女声・プール学院短大女声・外大) (森ノ宮ピロティホール)
	12 23	<p>第29回定期演奏会 (部長:前中靖司 出演:24名) (吹田メシアター) 指揮:坂居孝二 マドリガーレ:「Ch'ami la Vita Mia」「A Che Tormi il Ben Mio」 「E Dice a l'Una」「O Com'e Gran Martire」「Ch'io Non T'ami」 指揮:浅田康路 世界のうた:「バイカル湖のほとり」「Aldapeko」「Londonderry Air」 「塩田小唄」「Goro Goro Ne」 指揮:坂居孝二 三つの小笠原新調、三つの俗歌:「びいでびいで」「郷愁」「待てば海路の」 「追分」「どぎまぎ」「無宿者のうた」 指揮:坂居孝二 黒人霊歌:「The Battle of Jericho」「Let Us Break Bread Together」 「Swing Low, Sweet Chariot」「Wade in de Water」「Bones Come A-Knittin'」「Didn't My Lord Deliver Daniel?」「Dig My Grave」「Keep in the Middle of the Road」「Go Down, Moses」</p>

年	月日	できごと
		<p><出演者></p> <p>T1) 宮田悟夫 ○丸岡仁 島村泰生 渡辺泰博 河野雅行 喜多栄男 T2) 坂居孝二 ○浅田康路 中津哲司 五島晃 森田朋宏 山下直幸 B1) 西山恭介 ○矢島正志 松村尚人 山本暁 江頭兼俊 田中貴義 B2) 利守和典 ○前中靖司 高橋信浩 秋山正樹 櫻井伸有 安良雄一</p>
昭和61年 (1986)	6 8	第23回大阪府合唱祭に参加 (豊中市民会館)
	7 4	ジョイントコンサート(奈良女子大・関西外国語大学混声) (森ノ宮青少年会館)
	7 6	大学フェスティバルに参加 (豊中市民会館)
	9 7	第3回東西外国語大学交歓演奏会(大阪外大グリー・大阪外大女声コーラス部・東京外大混声コール・ソレイユ) (森ノ宮ピロティホール)
昭和62年 (1987)	1 11	<p>第30回定期演奏会 (部長：山本暁 出演：25名) (大阪府立労働センター)</p> <p>指揮：浅田康路 組曲「山に祈る」(ピアノ伴奏：中津孝司 朗読：畑瑞穂子)</p> <p>指揮：秋山正樹 SEA SHANTIES：「Whup! Jamboree」 「Shenandoah」 「The Drummer and the Cook」 「Santy Anna」 「Blow the Man Down」 「Spanish Ladies」</p> <p>客演指揮：林誠 OB合同演奏 組曲「月光とピエロ」</p> <p>指揮：浅田康路 黒人霊歌：「Little David, Play on Yo' Harp」 「Same Train」 「Dry Bones」 「O Mary, Don't You Weep」 「Set Down Servant!」 「Kum Ba Yah」 「Rock-a My Soul」</p> <p><出演者></p> <p>T1) 坂居孝二 ○渡辺泰博 喜多栄男 河野雅行 佐藤英二 T2) 浅田康路 中津哲司 ○五島晃 森田朋宏 奥村慎一郎 川添雅史 B1) 松村尚人 矢島正志 ○山本暁 江頭兼俊 長尾俊一 浜川徹 松浦和仁 B2) 利守和典 高橋信浩 ○秋山正樹 田中貴義 安良雄一 櫻井伸有 野崎信昭</p> <p><OB有志が合同演奏に参加></p>
	4 12	第1回箕面市合唱団体交歓会 (箕面市東生涯学習センター)
	6 7	第24回大阪府合唱祭に参加 (池田市民文化会館)
	6 17	ジョイントコンサート(大阪府立大学・大阪工業大学・大阪歯科大学・外大) (森ノ宮ピロティホール)
	12 14	<p>第31回定期演奏会 (部長：渡辺泰博 出演：26名) (吹田メイシアター)</p> <p>指揮：秋山正樹 MISSA PANGE LINGUA：「Kyrie」 「Gloria」 「Sanctus」 「Agnus Dei I」 「Agnus Dei II」</p> <p>指揮：安良雄一 組曲「紗羅」 (ピアノ伴奏：榛村信孝)</p> <p>指揮：秋山正樹 組曲「アイヌのウポポ」</p> <p>指揮：秋山正樹 黒人霊歌：「Didn't My Lord Deliver Daniel?」 「Soon One Mawnin」 「I Hear a Voice A-Prayin'」 「Sometimes I Feel Like a Motherless Child」 「Hail Mary!」 「Standin' in de Need O' Prayer」 「O Lord, Have Mercy on Me」 「Ev'ry Time I Feel the Spirit」</p> <p><出演者></p> <p>T1) ○渡辺泰博 喜多栄男 河野雅行 佐藤英二 下社学 T2) 五島晃 ○森田朋宏 奥村慎一郎 川添雅史 青柳祐信 B1) 矢島正志 ○山本暁 江頭兼俊 長尾俊一 松浦和仁 熊谷和芳</p>

年	月日	できごと
		B2) 利守和典 秋山正樹 田中貴義 ○安良雄一 櫻井伸有 野崎信昭 浜川徹 北村巧 伊藤晴彦 阿江茂
昭和63年 (1988)	6 19	第25回大阪府合唱祭に参加 (吹田市文化会館メシアター)
	6 21	ジョイントコンサート(プール学院短大女声・桃山学院大グリー・大阪女学院短大女声・大阪外大) (森ノ宮ピロティホール)
	9 3	第4回東西外国語大学交歓演奏会(大阪外大グリー・大阪外大女声コーラス部・東京外大混声コール・ソレイユ) (杉並区公会堂)
	12 1	第32回定期演奏会 (部長:河野雅行 出演:30名) (森ノ宮ピロティホール) 指揮:安良雄一 ロシア民謡:「ともしび」「ステンカ・ラージン」「ヴォルガの舟唄」「カリンカ」 指揮:佐藤英二 組曲「雪明りの路」 指揮:安良雄一 フランスの詩による男声合唱組曲集 「月下の一群」 指揮:安良雄一 黒人霊歌:「Little Innocent Lamb」「Deep River」 「Po' Mourner's Got a Home at Last」「Oh, Lord, Ah Got Mo Trubble」「Crucifixion」 「Soon Ah Will Be Done」「Dig My Grave」 <出演者> T1) ○喜多栄男 河野雅行 佐藤英二 下社学 岩崎隆優 戸田貴之 T2) ○森田朋宏 奥村慎一郎 川添雅史 松浦和仁 稲積和典 内藤陽介 山田道教 B1) 山本暁 ○江頭兼俊 長尾俊一 青柳祐信 熊谷和芳 亀井実 榊原昭裕 B2) ○田中貴義 安良雄一 櫻井伸有 野崎信昭 浜川徹 伊藤晴彦 北村巧 阿江茂 山本邦博
平成元年 (1989)	6 11	第26回大阪府合唱祭に参加 (八尾市文化会館)
	7 11	ジョイントコンサート(外大・九大男声コールアカデミー・京大男声) (京都会館第2ホール)
	11 5	ジョイントコンサート(外大混声テンペスト)
	12 18	第33回定期演奏会 (部長:浜川徹 出演:27名) (大阪国際交流センター) 指揮:佐藤英二 THE KING'S SINGERS MADRIGALSより:「Alla Cazza」「Il Bianco e Dolce Cigno」 「Matona, Mia Cara」「Au Joli Jeu」 指揮:下社学 LIEDERSCHATZより:「Heidenröslein」「Drunten Im Unterland」 「Der Jäger Abschied」「Abschied Vom Wald」「Türkisches Schenkenlied」 指揮:佐藤英二 組曲「緑深い故郷の村で」 指揮:佐藤英二 黒人霊歌:「If I Got My Ticket, Can I Ride?」「Mary Had a Baby」 「Do-Don't Touch-a My Garment」「Steal Away」「I Couldn't Hear Nobody Pray」 「Let Us Break Bread Together」「Soon Ah Will Be Done」 <出演者> T1) 佐藤英二 ○下社学 戸田貴之 河尻雅人 森野良典 T2) ○奥村慎一郎 川添雅史 稲積和典 山田道教 山口壮 塩見直樹 B1) ○長尾俊一 青柳祐信 熊谷和芳 亀井実 榊原昭裕 田中透 関弘司 片山敦志 B2) ○野崎信昭 浜川徹 阿江茂 伊藤晴彦 北村巧 水川登志雄 山本邦博 稲山裕也
平成2年 (1990)	6 10	第27回大阪府合唱祭に参加 (池田市民文化会館)

年	月日	できごと
	6 21	ジョイントコンサート(外大・大阪市大混声フリーデ・奈良女子大) (大阪国際交流センター)
	9 1	第5回東西外国語大学交歓演奏会(大阪外大グリー・大阪外大女声コーラス部・東京外大混声コール・ソレイユ) (森ノ宮ピロティホール)
	12 4	<p>第34回定期演奏会 (部長:北村巧 出演:25名) (吹田市文化会館メシアター)</p> <p>指揮:下社学 組曲「雨」</p> <p>指揮:山田道教 組曲「やさしい魚」</p> <p>指揮:下社学 SEA SHANTIES:「Blow the Man Down」「Shenandoah」「What Shall We Do with the Drunken Sailor?」「Spanish Ladies」「Lowlands」「Sailing, Sailing」</p> <p>指揮:下社学 黒人霊歌:「De Animals A-Comin'」「Oh, Po' Little Jesus」「Didn't My Lord Deliver Daniel?」「Listen to the Lambs」「Ain'-a That Good News」「Sometimes I Feel Like a Motherless Child」「Soon One Mawnin'」「Ev'ry Time I Feel the Spirit」</p> <p><出演者></p> <p>T1) 下社学 ○戸田貴之 山田道教 河尻雅人 森野良典 林一範</p> <p>T2) ○稲積和典 塩見直樹 片山敦志 後沢朗伸</p> <p>B1) ○青柳祐信 熊谷和芳 亀井実 榊原昭裕 田中透 関弘司 福田裕之</p> <p>B2) 阿江茂 ○伊藤晴彦 北村巧 水川登志雄 山本邦博 山口壮 村井正和 山本恵太</p>
平成3年 (1991)	6 16	第28回大阪府合唱祭に参加 (豊中市民会館)
	6 30	箕面市合唱団交歓会に参加 (箕面市立メイプルホール)
	9 15	平成3年第4回箕面市民芸術劇場「外語参上!」 (箕面市立メイプルホール)
平成4年 (1992)	1 12	<p>第35回定期演奏会 (部長:水川登志雄 出演:29名) (吹田市文化会館メシアター)</p> <p>指揮:山田道教 組曲「柳河風俗詩」</p> <p>指揮:森野良典 ロバート・ショウ合唱曲集:「Ring de Banjo」「Marianina」「Wait For the Wagon」「Grandfather's Clock」「Good Night Ladies」「Du, Du Liegst Mir Im Herzen」</p> <p>指揮:林誠 OB合同演奏 組曲「月光とピエロ」</p> <p>指揮:山田道教 黒人霊歌:「I Hear a Voice A-Prayin'」「The Battle of Jericho」「Hail Mary!」「Crucifixion」「Deep River」「Wade in de Water」「Mary Had a Baby」</p> <p><出演者></p> <p>T1) 下社学 ○戸田貴之 河尻雅人 森野良典 林一範 山田圭介</p> <p>T2) 川添雅史 ○稲積和典 山田道教 塩見直樹 片山敦志 齊藤進 白川洋</p> <p>B1) 江頭兼俊 青柳祐信 亀井実 ○榊原昭裕 田中透 関弘司 福田裕之 梶間貴志 楨広樹</p> <p>B2) 浜川徹 阿江茂 伊藤晴彦 水川登志雄 ○山本邦博 山口壮 宮川雄一郎</p> <p><OB有志が合同演奏に参加></p>
	6 21	第29回大阪府合唱祭に参加 (豊中市民会館)
	6 28	第5回箕面市合唱団交歓会に参加 (箕面市立メイプルホール)
	7 12	平成4年第2回箕面市芸術劇場ジョイントコンサート(桃山学院大・京大男声・外大) (箕面市民会館)

年	月日	できごと
	8 30	第6回東西外国語大学交歓演奏会（大阪外大グリーン・大阪外大女声コーラス部・東京外大混声コール・ソレイユ） （東京北トピアさくらホール）
	12 10	第36回定期演奏会 （部長：関弘司 出演：17名）（箕面市立メイプルホール） 指揮：森野良典 日本民謡集より：「ソーラン節」「大阪の子守唄」「佐渡おけさ」「黒田節」「最上川舟唄」 指揮：森野良典 組曲「ヴェニウス生誕」 指揮：森野良典 黒人霊歌：「Keep in the Middle of the Road」 「Nobody Knows de Trouble I See」「Little David, Play on Yo' Harp」 「Let Us Break Bread Together」「Po' Mourner's Got a Home at Last」「Steal Away」 「Go Down, Moses」「Dig My Grave」 <出演者> T1) ○河尻雅人 森野良典 林一範 村岡志郎 岩崎隆優 T2) 山田道教 片山敦志 内藤陽介 B1) ○田中透 福田裕之 梶間貴志 大木周 B2) ○山口壮 関弘司 青柳祐信 榊原昭裕 水川登志雄
平成5年 (1993)	6 20	第30回大阪府合唱祭ジョイフェスタに参加 （松下電器体育館）
	12 11	第37回定期演奏会 （部長：福田浩之 出演：9名）（箕面文化センター） 指揮：梶間貴志 日本のうた：「この道」「砂山」「あわて床屋」「からたちの花」「あかとんぼ」 指揮：梶間貴志 組曲「若しもかの星に」 指揮：梶間貴志 黒人霊歌：「Go Tell It on The Mountain」「Little Innocent Lamb」 「Were You There?」「Kum Ba Yah」「Swing Low, Sweet Chariot」 「I Couldn't Hear Nobody Pray」「Wade in de Water」「Ride the Chariot」 <出演者> T1) 下社学 林一範 T2) 大木周 松波(南野)大介 B1) 田中透 福田裕之 梶間貴志 B2) 山口壮 三森良太
平成6年 (1994)	11 26	第38回定期演奏会（混声合唱団TEMPESTとの合同演奏会） （箕面市立メイプルホール） （部長：大木周 出演：5名） 指揮：梶間貴志 黒人霊歌：「O My Golden Slippers」「The Battle of Jericho」「I Got Shoes」 「Deep River」「Ol' Ark's A Moverin'」「Roll, Jordan, Roll!」「Dig My Grave」 <出演者> T1) 松波(南野)大介 T2) 大木周 B1) 梶間貴志 B2) 三森良太 河北隆一
平成7年 (1995)	6 15	第32回大阪府合唱祭に参加 （豊中市民会館）
	7 16	第8回箕面市合唱祭に参加 （箕面市立メイプルホール）
	7 29	第7回東西外国語大学交歓演奏会 （大阪国際交流センター）
	12 9	第39回定期演奏会 （部長：大木周 出演：9名）（箕面文化センター）

年	月日	できごと
		<p>指揮：松波(南野)大介 組曲「小譚詩」 「Train, トレイン, とれいん」 (ピアノ伴奏：中山昌子)</p> <p>指揮：松波(南野)大介 組曲「三つの俗歌」</p> <p>指揮：松波(南野)大介 黒人霊歌：「Bones Come A-Knittin'」 「Little Innocent Lamb」 「Po' Mourner's Got a Home at Last」 「Let Us Break Bread Together」 「Ready When He Comes」 「Wade in de Water」 「Little David, Play on Yo' Harp」 「Soon One Mawnin'」</p> <p><出演者></p> <p>T1) 森野良典 松波(南野)大介 紺野一彦 松尾年展 T2) 大木周 尾上剛 B1) 梶間貴志 B2) 山口壮 三森良太</p>
平成8年 (1996)	4 20	関西合唱連盟 創立50周年記念演奏会 大阪部会合同演奏に参加 (京都コンサートホール)
	6 8	第33回大阪府合唱際に参加 (豊中市立市民会館)
	6 23	第9回箕面市合唱祭に参加 (箕面市立メイプルホール)
	7 4	ジョイントコンサート(大阪外大グリーン・奈良教育大学・奈良大学) (森ノ宮ピロティホール)
平成9年 (1997)	1 12	<p>第40回定期演奏会(創部70周年) (フェスティバルホールリサイタルホール)</p> <p>指揮：松波(南野)大介 5つのスロヴァキア民謡 指揮：松尾年展 曲集「僕たちの伝えたいこと」 客演指揮：林誠 OB合同演奏 組曲「月光とピエロ」</p> <p>指揮：松波(南野)大介 黒人霊歌：「Ol' Ark's A Moverin'」 「Steal Away」 「If I Got My Ticket, Can I Ride?」 「Swing Low, Sweet Chariot」 「Standin' in the Need of Prayer」 「My Lord, What a Mornin'」 「Ride the Chariot」</p> <p><出演者></p> <p>T1) 松波(南野)大介 尾上剛 T2) 大木周 中本修一 B1) 松尾年展 古東篤 B2) 三森良太 齋藤浩一</p> <p><OB有志が合同演奏に参加></p>
	5 25	第10回箕面市合唱祭に参加 (箕面市立メイプルホール)
平成10年 (1998)	1 11	<p>第41回定期演奏会(最終ステージ) (クレオ大阪西)</p> <p>(部長：尾上剛 出演：2名)</p> <p>指揮：松尾年展 グリーオムニバス：「めばえ」 「未来」 「For the Beauty of the Earth」 「The Lord Bless You and Keep You」</p> <p>指揮：松尾年展 黒人霊歌：「Little David, Play on Yo' Harp」 「I Got Shoes」 「The Battle of Jericho」 「Little Innocent Lamb」</p> <p>指揮：河原敬 OB合同演奏 「秋のピエロ」 「希望の島」 「最上川舟唄」 「Ride The Chariot」 指揮：林誠 組曲「海鳥の詩」 (ピアノ伴奏：中津孝司)</p> <p><OB有志が合同演奏に参加></p>
平成19年 (2007)	10 1	大阪大学と統合。

年表3 OB合唱団の活動

年	月日	できごと
平成7年 (1995)	2	樽井一仁の呼びかけで関東在住のグリー OBが集まった新年会の席上、浅野、山本、近藤、西村(S67卒)が主催する『50歳のクワルテット』コンサートにOB合唱団としての賛助出演を依頼。これをきっかけに翌3月、16名が集まり、野田大祐の事務所で樽井一仁を代表幹事としてOB合唱団(東京)を立ち上げる。
	5	OB合唱団(東京)として初ステージ。
	5 13	東京 「50歳のクワルテット・コンサート」に賛助出演 (23名参加)(神奈川県民ホール) 指揮：松尾航一 「秋のピエロ」「柳河」「Ride the Chariot」「U Boj」 <出演者> T1) 小林信裕 西村信勝 板村哲也 伊東昭廣 上田哲也 天野邦彦 田中充 T2) 木下和夫 浅野征道 安藤雅之 鈴木惟司 稲積和典 B1) 野田大祐 大崎直忠 長尾俊一 亀井実 山本勝昭 井上尚弘 B2) 近藤純雄 樽井一仁 橋本達也 橋本和直
	11 16	東京 咲耶会東京支部総会に出演 (8名参加)(ホテル聚楽) 「小夜曲」「希望の島」「遥かな友に」
平成8年 (1996)	1	翌年の創部70周年記念演奏会・第40回定期演奏会にOB参加の合同ステージを依頼された河原敬と池田守がOB合唱団(大阪)の設立を模索。
	9	9月から年末まで林誠先生がOB合唱団(東京)を指導。
平成10年 (1998)	7 14	東京 咲耶会東京支部総会に出演 (9名参加)(ホテル聚楽) 「小夜曲」「希望の島」「遥かな友に」
平成11年 (1999)	5 29	東京 ミニコンサート (14名参加)(カスケードホール) 「月光とピエロ」「希望の島」「Deep River」「Ride the Chariot」「小夜曲」「遥かな友に」
平成12年 (2000)	7 18	東京 咲耶会東京支部ビアパーティーに出演 (14名参加)(ホテル聚楽) 「希望の島」「秋のピエロ」「遥かな友に」
平成13年 (2001)	5 20	河原敬の呼びかけで11名が集まりOB合唱団(大阪)を立ち上げ、河原敬が指揮者に就任。練習会場は早原瑛氏(F55卒)にお願いして天王寺予備校の音楽ホールをお借りし、組曲「月光とピエロ」「Didn't My Lord Deliver Daniel?」「Ride the Chariot」を練習した。
	7 18	東京 咲耶会東京支部ビアパーティーに出演 (12名参加)(ホテル聚楽)
	10 14	東京 第1回東京男声合唱フェスティバルに参加 (11名参加)(東京文化会館小ホール) 指揮：大崎直忠 「Deep River」「秋のピエロ」
	10 21	東京 シルバーコーラス交歓会に参加 (8名参加)(サンパール荒川大ホール) 指揮：大崎直忠 「秋のピエロ」「Dig My Grave」
	11 14	大阪 バックスフェスタ(関西男声合唱祭)に初参加 (16名参加)(いたみホール) 指揮者：河原敬 「There Is a Balm in Gilead」「Didn't My Lord Deliver Daniel?」

年	月日	できごと
平成14年 (2002)	4 7	東京 OB会(東京) 2002年演奏会 (14名参加) (カスケードホール) 客演指揮：林誠 「Heilig」 「Wiegenlied」 「Die Nacht」 シューベルト作曲 組曲「月光とピエロ」より「月夜」「秋のピエロ」「ピエロの嘆き」 愛唱歌「秋のピエロ」「Ständchen」「Deep River」「希望の島」 <出演者> T1) 小林信裕 加来洋二郎 西村信勝 五十嵐強 T2) 越水洋一 山中道宏 B1) 三神徹 勝原尚美 B2) 野田大祐 大塚亨 荻野芳毅 大倉明治 樽井一仁 <東京外国語大学混声合唱団コールソレイユが賛助出演>
	上記の打上げ会席上、野田大祐が林誠先生にOB合唱団(東京)の指導者を紹介していただくよう依頼し、7月から小貫岩夫先生に指導・指揮をしていただく。	
	6 19	東京 咲耶会東京支部ビアパーティーに出演 (10名参加) (ホテル聚楽)
	11 4	大阪 バックスフェスタ(関西男声合唱祭)に参加 (14名参加) (いたみホール) 指揮：河原敬 「I Got Shoes」「Let Us Break Bread Together」「O My Golden Slippers」
	11 10	大阪 合唱とオーケストラによる「もみじの里音楽祭」に参加 (14名参加) (箕面市グリーンホール) 指揮：須賀敬一 合同演奏「月光とピエロ」
	11 12	東京 咲耶会東京支部総会に出演 (指揮：小貫岩夫、8名参加)
11 30	東京 ハートストリングス演奏会に賛助出演 (10名参加) (ティアラこうとう) 指揮：小貫岩夫 「三つの俗歌」	
平成15年 (2003)	1 26	大阪 第1回OB合唱団ミニコンサート (23名参加) (上田学園 ライラックホール) 指揮：河原敬 黒人霊歌「I Got Shoes」「Let Us Break Bread Together」「O My Golden Slippers」 「There Is a Balm in Gilead」「Didn't My Lord Deliver Daniel?」 組曲「雨」 <出演者> T1) 五十嵐強 池田守 上田哲也 北村照夫 柳楽行雄 T2) 大木周 坂居孝二 菅原基晴 山口壮 B1) 紙谷敬治 河原敬 河盛龍三 岸本保 佐伯博史 柳原照裕 野田大祐 松村尚人 B2) 赤坂一郎 岡田吉治郎 神田正見 村主寧民 樽井一仁 三森良太 <混声合唱団メルヴェイユとの合同演奏会>
	4 6	東京 ジョイントコンサート (13名参加) (カスケードホール) 指揮：小貫岩夫 組曲「三つの俗歌」 組曲「雨」 男声合同演奏：「希望の島」「Ständchen」 全員合同演奏：「そのひとがうたうとき」 <ハートストリングス、東外大混声コールソレイユとの合同>

年	月日	できごと
	6 11	東京 咲耶会東京支部ビアパーティーに出演 (指揮: 小貫岩夫、10名参加) (ホテル聚楽)
	7 21	大阪 混声合唱団メルヴェイユ創立10周年記念演奏会に賛助出演 (17名参加) (和泉市弥生の風ホール) 指揮: 河原敬 合同演奏「月光とピエロ」(メルヴェイユ男声との合同演奏)
	10	OB合唱団(大阪)の代表に岡田吉治郎、マネージャーに紙谷敬治、団内指揮者に榊原昭裕が就任した。同時に、音楽監督として林誠先生(大阪音楽大学大学院教授)、また、名誉顧問として山口慶四郎先生(大阪外国語大学名誉教授)をお迎えすることとなった。
	11 3	大阪 バッカスフェスタ(関西男声合唱祭)に参加 (17名参加) (いたみホール) 指揮: 榊原昭裕「Swing Low, Sweet Chariot」「Soon Ah Will Be Done」
	11 11	東京 咲耶会東京支部総会に出演 (指揮: 小貫岩夫、11名参加) (ホテル聚楽)
平成16年 (2004)	2 1	大阪 第2回OB合唱団ミニコンサート (32名参加) (上田学園 ライラックホール) 指揮: 榊原昭裕 黒人霊歌「Keep in the Middle of the Road」「Deep River」「Swing Low, Sweet Chariot」 「Wade in de Water」「Soon Ah Will Be Done」 客演指揮: 林誠 組曲「月光とピエロ」 <出演者> T1) 柳楽行雄 上田哲也 北村照夫 内野秀樹 牧本成俊 坂居孝二 T2) 増森邁 菅原基晴 野田幸孝 山本修司 佐伯博史 安藤満徳 梅垣誠 B1) 河盛龍三 柁山次雄 紙谷敬治 直場徳宥 三神徹 田中敬一 吉田隆 岸本保 藤井哲 榊原昭裕 B2) 岡田吉治郎 赤坂一郎 神田正見 大西昌三 村主寧民 西川哲朗 樽井一仁 秋山正樹 三森良太 <大阪外大女声コーラス部OG「アンサンブル葉音」が賛助出演>
	4 4	東京 ジョイントコンサート2004 (17名参加) (カスケードホール) 指揮: 小貫岩夫 世界の名曲から「草原情歌」「菩提樹」「夕べの鐘」「Dig My Grave」 「Soon Ah Will Be Done」「Ständchen」 組曲「三つの小笠原新調」 合同演奏: 「夢みたものは」より「鷗」 <東京外語大混声合唱団コールソレイユとの合同演奏会> OB合唱団(大阪)の会計担当者が菅原基晴から鈴木惟司に交代。
	6 16	東京 咲耶会東京支部ビアパーティーに出演 (指揮: 小貫岩夫、8名参加) (ホテル聚楽)
	7 11	大阪 佐原真さん追悼演奏会 (21名参加) (大阪府立弥生文化博物館) 指揮: 榊原昭裕 黒人霊歌 指揮: 増森邁 ドイツ歌曲 指揮: 林誠 組曲「雨」より
	10 16	東京 第19回シルバーコーラス交歓会に参加 (9名参加) (サンパール荒川) 指揮: 北村照夫 「草原情歌」他 * 講評者特別賞を受賞

年	月日	できごと
平成17年 (2005)	11 6	大阪 オータムコンサートに参加 (18名参加) (メルパルクホール) 指揮：榊原昭裕 組曲「雨」 合同演奏：「美しき青き淀川」
	11 15	東京 咲耶会東京支部総会に出演 (指揮：小貫岩夫、11名参加) (ホテル聚楽)
	11 20	東京 合唱日和2004 —合唱3団体合同演奏会— (13名参加) (ティアラこうとうホール) 指揮：小貫岩夫 「草原情歌」、組曲「五つの日本民謡」 <合唱団KUCL、ハートストリングスとの合同演奏>
	3 27	大阪 菜の花コンサート(故 司馬遼太郎先生を偲んで) —阪神・淡路大震災10周年記念事業— (29名参加) (五色文化ホール) 指揮：榊原昭裕 「Whup! Jamboree」 「Shenandoah」 「ボルガの舟唄」 「カリンカ」 講演：山口慶四郎先生 「司馬遼太郎と高田屋嘉兵衛」 指揮：林誠 組曲「月光とピエロ」 指揮：榊原昭裕 合同演奏「ふるさとの四季」 <五色サルビア・エコー、五色中学校ブラスバンド部との合同演奏>
	4 3	東京 OB会(東京) 2005年演奏会 (20名参加) (カスケードホール) 指揮：小貫岩夫 黒人霊歌「Go Down Mose」 「Sometimes I Feel Like a Motherless Child」 「The Battle of Jericho」 「Didn't My Lord Deliver Daniel?」 「Steal Away」 五つの日本民謡「そうらん節」「機織唄」「佐渡おけさ」「五木の子守唄」「最上川舟唄」 <ハートストリングスとの合同演奏会>
	6 5	大阪 第18回箕面市合唱祭に特別参加 (19名参加) (箕面市メイプルホール) 指揮：榊原昭裕 「Steal Away」 「Didn't My Lord Deliver Daniel?」
	11 12	大阪 オータムコンサートに出演 (20名参加) (メルパルクホール) 指揮：榊原昭裕 「五つの日本民謡」より「そうらん節」「最上川舟唄」
平成18年 (2006)	11 23	東京 第5回東京男声合唱フェスティバルに参加 (10名参加) (浜離宮朝日ホール) 指揮：小貫岩夫 モーツァルト「6つのノクターン」より2曲
	4 1	東京 OB会(東京) 2006年演奏会 (28名参加) (カスケードホール) 指揮：小貫岩夫 モーツァルト「6つのノクターン」より 黒人霊歌「Go Down Moses」 「Sometimes I Feel Like a Motherless Child」 「Were You There?」 「Steal Away」 「Didn't My Lord Deliver Daniel?」 合同演奏：組曲「月光とピエロ」 <ハートストリングス、東京外大コール・ソレイユが賛助出演>
	4 30	大阪 創部80周年記念演奏会 (85名参加) (箕面市メイプルホール) 指揮：小貫岩夫 「五つの日本民謡」より「そうらん節」「佐渡おけさ」「五木の子守唄」「最上川舟唄」 指揮：林誠 モーツァルト「6つのノクターン」 指揮：榊原昭裕 黒人霊歌「Go Down Moses」 「Sometimes I Feel Like a Motherless Child」 「Were You There?」

年	月日	できごと
		<p>大阪 「Steal Away」 「Didn't My Lord Deliver Daniel?」 指揮：林誠 組曲「月光とピエロ」 <出演者> T1) 越水洋一 西川暲治 加来洋二郎 山中道宏 山野善生 伊東昭廣 西村信勝 柳楽行雄 小竹正幸 田中充 上田哲也 五十嵐強 永谷勉 堀田光行 内野秀樹 北村照夫 圓山望 保川一治 戸田貴之 松本陽大 T2) 早原瑛 増森邁 若林允 西尾武 菅原基晴 西沢毅彦 上野明信 木下和夫 野田幸孝 浅野征道 石井潔 山本勝昭 鈴木惟司 安藤雅之 柳沢長四郎 梅垣誠 牧本成俊 森田朋宏 大木周 B1) 野田大祐 河盛龍三 柁山次雄 紙谷敬治 宇野滋夫 松木正顕 中村邦雄 小笠原肇 新出武雄 三神徹 吉永行夫 岸田勝昭 蔵城正也 佐伯博史 岸本保 河原敬 藤井哲 板倉正幸 松村尚人 榊原昭裕 B2) 岡田吉治郎 安井祥祐 荻野芳毅 赤坂一郎 岩中秀雄 神田正見 大西昌三 村主寧民 西川哲朗 藤太 森滋 近藤純雄 大井耐三 樽井一仁 伊藤道彦 村川健一 山内清之 山口伸 安良雄一 秋山正樹 山口壮 濱川徹 三森良太</p>
	6 11	<p>大阪 第19回箕面市合唱祭に特別参加 (19名参加) (箕面市メイプルホール) 指揮：榊原昭裕 「五つの日本民謡」より「そうらん節」「最上川舟唄」</p>
	10 15	<p>東京 第21回シルバーコーラス交歓会に参加 (8名参加) (サンパール荒川) 指揮：北村照夫 「Nächtliches Ständchen」「Der Entfernten」「黒田節」</p>
	10 21	<p>大阪 丹波の森国際音楽祭 —シューベルティアーズたんば2006— に参加 (28名参加) (丹波市立東小学校) 指揮：林誠 「男声合唱のための唱歌メドレーふるさとの四季」(ピアノ伴奏：那須理恵子) 指揮：榊原昭裕 「5つの日本民謡」より「そうらん節」「最上川舟唄」</p>
平成19年 (2007)	4 7	<p>東京 OB会(東京) 2007年演奏会 (15名参加) (カスケードホール) 指揮：小貫岩夫 愛唱歌「Freie Kunst」「草原情歌」「愛の賛歌」「黒田節」 「月光とピエロとピエレットの唐草模様」 シューベルト男声合唱曲「Heilig」 「Nächtliches Ständchen」「Weihegesang」「Der Entfernten」「Der Lindenbaum」 合同演奏：組曲「アイヌのウポポ」 <ハートストリングス、東京外大コール・ソレイユ賛助出演></p>
	4 8	<p>大阪 姫路文学館コンサート (27名参加) (姫路文学館) 指揮：榊原昭裕 黒人霊歌「Lord I Want to Be a Christian」「O My Golden Slippers」 「Soon One Mawnin」 指揮：榊原昭裕 ロシア民謡「母なるヴォルガを下りて」「カリнка」 特別講演：山口慶四郎先生 「司馬遼太郎と大阪外国語大学」 指揮：林誠 組曲「ふるさとの四季」 <姫路市立広瀬中学校コーラス部賛助出演></p>
	6 24	<p>大阪 第20回箕面市合唱祭に参加 (24名参加) (箕面市メイプルホール) 指揮：榊原昭裕 「母なるヴォルガを下りて」「カリнка」</p>
	9 8	<p>大阪 さようなら われらが大阪外国語大学に出演 (57名参加) (大阪外国語大学箕面キャンパス)</p>

年	月日	できごと
		<p>大阪 指揮：林誠 組曲「月光とピエロ」 <出演者> T1) 山本文雄 伊東昭廣 石田康雄 柳楽行雄 小竹正幸 上田哲也 永谷勉 北村照夫 下社学 森野良典 T2) 増森邁 末次義 西尾武 菅原基晴 上野明信 野田幸孝 鈴木惟司 山下輝夫 森田朋宏 川添雅史 松尾年展 B1) 野田大祐 河盛龍三 柁山次雄 紙谷敬治 直場徳宥 新出武雄 三神徹 小笠原肇 吉永行夫 岸田勝昭 蔵城正也 浜崎慎吾 岸本保 今田久帆 河原敬 秋山正樹 榊原昭裕 梶間貴志 B2) 岡田吉治郎 清水正雄 赤坂一郎 神田正見 岩中秀雄 松木正顕 大西昌三 佐藤文隆 村主寧民 後藤勇治 樽井一仁 村川健一 田中貴義 安良雄一 野崎信昭 北村巧 山本邦博 三森良太</p>
	10 7	<p>東京 第22回シルバーコーラス交歓会に参加 (8名参加) (サンパール荒川) 指揮：小貫岩夫 組曲「月光とピエロ」より「月夜」「ピエロ」 ※講師特別賞を受賞</p>
	11 21	<p>大阪 丹波の森国際音楽祭－シューベルティアーズたんば2007に参加 (24名参加) (兵庫県立柏原高校) 指揮：林誠 「6つのノクターン」モーツァルト作曲</p>
平成20年 (2008)	4 5	<p>東京 OB会(東京) 2008年演奏会 (22名参加) (カスケードホール) 指揮：小貫岩夫 黒人霊歌「Swing Low, Sweet Chariot」「Set Down Servant」「Steal Away」 「Lord I Want to Be a Christian」「It's Me O Lord」「Deep River」 組曲「月光とピエロ」 <ハートストリングス、東京外大コール・ソレイユ賛助参加></p>
	4 16	<p>総会でOB合唱団(東京)の代表に新出武雄、副代表に西川哲朗を選出。</p>
	4	<p>OB合唱団(大阪)の代表に村主寧民、副代表に岸田勝昭、マネージャーに鈴木惟司、小竹正幸、団内指揮者に池田守を選出。</p>
	6 22	<p>大阪 第21回箕面市合唱祭に参加 (26名参加) (箕面市メイプルホール) 指揮：榊原昭裕 「Shenandoah」「Die Loreley」</p>
	9 15	<p>大阪 60th Anniversary Recital (松岡一仁還暦リサイタル)に賛助出演 (箕面市メイプルホール) 指揮：榊原昭裕 「Swing Low, Sweet Chariot」「Die Loreley」、オペラ・バックコーラス 「Toreador Song」</p>
	11 9	<p>大阪 「山に祈る」を唱う演奏会 (54名参加) (兵庫県立芸術文化センター) 指揮：林誠 「Ave Verum Corpus」 組曲「山に祈る」(ナレーション：竹崎利信、ピアノ伴奏：那須理恵子) シューベルト合唱曲より「Der Lindenbaum」「Seligkeit」「Im Abendrot」 「Freude der Kinderjahre」「Ständchen」「Gott Meine Zuversicht」 世界の川めぐり「Shenandoah」「Bengawan Solo」「Lore-Ley」「母なるヴォルガを下りて」 「最上川舟唄」「川の流れるように」</p>

年	月日	できごと
		名古屋で伊東昭廣と安藤雅之の二人が練習を開始、その後4人が加わって名古屋地区のOB合唱団が誕生。
平成21年 (2009)	6 28	大阪 第22回箕面市合唱祭に参加 (23名参加) (箕面市メイプルホール) 指揮：池田守 「Bengawan Solo」「Deep River」(ギター伴奏：野田幸孝、榊原昭裕)
	7 20	東京 第64回東京都合唱祭に参加 (15名参加) (ゆうぼうと) 指揮：小貫岩夫 組曲「雨」より「雨の来る前」「雨の日に見る」
	11 23	東京 第9回東京男声合唱フェスティバルに参加 (参加者8名) (浜離宮朝日ホール) 指揮：小貫岩夫 「There Is a Balm in Gilead」「Ain'-a That Good News」
平成22年 (2010)	3 28	大阪 菜の花コンサート —高田屋嘉兵衛翁・司馬遼太郎先生を偲んで— (27名参加、内名古屋から5名) (洲本市五色文化ホール) 指揮：池田守 黒人霊歌「Little Innocent Lamb」「Ain'-a That Good News」 「Swing Low, Sweet Chariot」「There Is a Balm in Gilead」「The Battle of Jericho」 指揮：林誠 組曲「雨」 指揮：朝田幸代 合同演奏：「ゴンドラの歌」「波浮の港」 <五色サルビア・エコーとの合同演奏会>
	4 11	東京 東西合同演奏会 IN TOKYO (42名参加) (田町建築会館) 指揮：小貫岩夫 組曲「雨」 指揮：北村照夫 黒人霊歌「The Battle of Jerico」「Swing Low, Sweet Chariot」 「Little Innocent Lamb」「There Is a Balm in Gilead」「Ain'-a That Good News!」 指揮：小貫岩夫 組曲「山に祈る」(ナレーション：山之内重美(大阪外大ロシア語科昭和46年卒)、ピアノ伴奏：矢加部幸恵) <出演者> T1) 西村信勝 伊東昭廣 柳楽行雄 佐藤謙司 小竹正幸 田中充 五十嵐強 池田守 北村照夫 戸田貴之 T2) 若林允 西川暲治 紙谷敬治 上野明信 鈴木惟司 安藤雅之 山下輝夫 山本修司 加藤直樹 池田民樹 B1) 河盛龍三 大塚亨 直場徳宥 新出武雄 三神徹 小笠原肇 西川哲朗 山崎寿雄 岸田勝昭 浜崎慎吾 岸本保 B2) 赤坂一郎 大倉明治 大西昌三 佐藤文隆 村主寧民 後藤勇治 森滋 樽井一仁 橋本和直 秋山正樹 安良雄一 榊原昭裕 <東京外国語大学コール・ソレイユ賛助出演>
	5 9	大阪 第23回箕面市合唱祭に参加 (22名参加、内名古屋から2名) (箕面市メイプルホール) 指揮：池田守 黒人霊歌「The Battle of Jericho」「Swing Low, Sweet Chariot」 「Little Innocent Lamb」
	11 20	大阪 星翔高校同窓会に特別出演 (摂津市コミュニティプラザ) 指揮：池田守 「浪工校歌」「そうらん節」「Wade in de Water」「O My Golden Slippers」 「Amazing Grace」「Abschied」「Seisho Will Shine Tonight」
	11 28	大阪 八十島混声合唱団ミニコンサートに賛助出演 (博愛の国地域交流センター) 指揮：池田守 「そうらん節」「Wade in de Water」「Amazing Grace」「Abschied」 「みんなで歌おう(故郷など5曲)」

年	月日	できごと
平成23年 (2011)	4 3	<p>大阪 姫路文学館コンサート — 司馬遼太郎没後15年追悼演奏会 — (22名参加) (姫路市姫路文学館) 指揮：林誠 黒人霊歌「The Battle of Jericho」 「Wade in de Water」 「Nobody Knows de Trouble I See」 「O My Golden Slippers」 「Sometimes I Feel Like a Motherless Child」 「Soon Ah Will Be Done」 組曲「三つの俗歌」より 「追分」 「どぎまぎ」 「無宿者の歌」 清水脩 「日本民謡曲集」 から「そうらん節」 「黒田節」 「最上川舟唄」 合同演奏：「Ave Maria」 「Ave Verum Corpus」 <セレスチナ合唱団賛助出演></p>
	6 12	<p>大阪 第24回箕面市合唱祭に参加 (22名参加) (箕面市メイプルホール) 指揮：池田守 「El Condor Pasa」 「Ombra mai fu」 (ギター伴奏：野田幸孝、ピアノ伴奏：新谷昭一) 合同演奏：「Ave Verum Corpus」 「Amazing Grace」</p>
	11 13	<p>大阪 創部85周年・清水脩生誕100周年記念演奏会 (65名参加) (神戸新聞松方ホール) 指揮：池田守 黒人霊歌「Wade in de Water」 「The Battle of Jericho」 「Sometimes I Feel Like a Motherless Child」 「Nobody Knows de Trouble I See」 「O My Golden Slippers」 「Soon Ah Will Be Done」 指揮：池田守 世界の愛唱歌「Amazing Grace」 「El Condor Pasa」 「Finlandia Hymni」 「Abschied」 「Ombra Mai Fu」 (リコーダー伴奏：弥永寿子、ギター伴奏：野田幸孝、ピアノ伴奏：新谷昭一) 指揮：林誠 日本民謡曲集「そうらん節」 「五つ木の子守唄」 「黒田節」 「佐渡おけさ」 「最上川舟唄」 指揮：林誠 組曲「三つの俗歌」より「追分」 「どぎまぎ」 「無宿者の歌」 指揮：林誠 組曲「月光とピエロ」 <出演者> T1) 立花茂樹 伊東昭廣 柳楽行雄 佐藤謙司 小竹正幸 田中允 上田哲也 池田守 五十嵐強 永谷勉 北村照夫 内野秀樹 戸田貴之 T2) 若林允 西川暲治 紙谷敬治 宇留野隆 西沢毅彦 上野明信 木下和夫 野田幸孝 鈴木惟司 山下輝夫 安藤雅之 柳沢長四郎 山本修司 加藤直樹 永山隆 松尾年展 B1) 野田大祐 河盛龍三 柁山次雄 直場徳宥 大西昌三 小笠原肇 新出武雄 三神徹 山野善生 西川哲朗 岸田勝昭 浜崎慎吾 松岡一仁 佐伯博史 河原敬 佐戸裕彰 藤井哲 B2) 岡田吉治郎 赤坂一郎 岩中秀雄 神田正見 佐藤文隆 大倉明治 村主寧民 森滋 後藤勇治 奥村茂 内海卓也 樽井一仁 上崎雅也 新谷昭一 伊藤道彦 前田哲男 秋山正樹 安良雄一 榊原昭裕</p>
	12 11	<p>大阪 大阪外大英語科故金山先生お別れ会にて追悼演奏 (国際交流センター 桜の間) 指揮：池田守 「Ave Verum Corpus」 「The Battle of Jericho」 「O My Golden Slippers」 「Amazing Grace」 「Finlandia Hymni」 「希望の島」 「遥かな友に」 「Ombra Mai Fu」</p>
平成24年 (2012)	4	<p>OB合唱団(大阪)の代表に森滋、マネージャーに柳沢長四郎、小竹正幸、団内指揮者に池田守を選出。</p>

年	月日	できごと
	5 20	<p>東京 清水脩生誕100周年記念演奏会 ― 100人で歌う男声合唱組曲「月光とピエロ」― (22名参加、内大阪から6名、名古屋から2名) (銀座ヤマハホール) 指揮：小貫岩夫 組曲「アイヌのウポポ」 指揮：小貫岩夫 合同演奏：組曲「月光とピエロ」 <湘南男声合唱団、男声合唱団フロイデ、ハートストリングス賛助出演></p>
	6 9	<p>大阪 ロシア語科同窓会総会に出演 (22名参加) (大阪大学中之島センター) 指揮：池田守 「O My Golden Slippers」「The Battle of Jericho」「Finlandia Hymni」 「Abschied」「Drinking Song」「Serenade」(ピアノ伴奏：新谷昭一)</p>
	6 10	<p>大阪 第25回箕面市合唱祭に参加 (22名参加) (箕面市メイプルホール) 指揮：池田守 「学生王子」より「Drinking Song」「Serenade」(ピアノ伴奏：新谷昭一)</p>
	7 29	<p>大阪 第12回大阪男声合唱団定期演奏会に賛助出演 (23名参加) (大手前ドンセンター) 指揮：林誠 合同演奏：組曲「月光とピエロ」</p>
	9 23	<p>名古屋 JOINT CONCERT ― 男声合唱の響き・名古屋演奏会― (38名参加、内訳：名古屋6名、大阪19名、東京5名、その他8名) (中村文化小劇場) 指揮：林誠 合同演奏：組曲「柳河風俗詩」 指揮：池田守 黒人霊歌「Steal Away」「Set Down Servant」 指揮：池田守 「学生王子」より「Golden Days」「Drinking Song」「Serenade」 指揮：林誠 合同演奏：組曲「月光とピエロ」 <やまなみグリークラブ(愛知教育大学男声合唱団OB)との合同演奏></p>
	11 7	<p>大阪 合唱団「かぎろひ」第2回リサイタルに賛助出演 (20名参加、内名古屋より3名) (奈良市西大寺秋篠音楽堂) 指揮：池田守 黒人霊歌「O My Golden Slippers」「Set Down Servant」「Deep River」 「学生王子」より「Golden Days」「Drinking Song」「Serenade」(ピアノ伴奏：新谷昭一) 合同演奏：「落葉松」</p>
平成25年 (2013)	3	OB合唱団(東京)が幹事団5名体制となり、西川哲朗を対外窓口代表に選任。
	4	坂井美樹先生が小貫岩夫先生とともにOB合唱団(東京)の指導・指揮者に就任。
	6 2	<p>大阪 第26回箕面市合唱祭に参加 (20名参加) (箕面市メイプルホール) 指揮：池田守 「学生王子」より「Deep in My Heart, Dear」「Student March Song」 (ピアノ伴奏：新谷昭一)</p>
	6 15	<p>大阪 ロシア語科同窓会総会に出演 (18名参加、内名古屋より1名) (大阪大学中之島センター) 指揮：池田守 「学生王子」より「Golden Days」「Student March Song」 「いざ起て戦人よ」「Deep River」(ピアノ伴奏：新谷昭一)</p>
	9 22	<p>大阪 なでしこFamily Concertに参加 (18名参加) (吹田市文化会館) 指揮：池田守 「希望の島」「いざ起て戦人よ」「Deep River」「Drinking Song」「Serenade」</p>

年	月日	できごと
平成26年 (2014)	9 29	大阪 第21回箕面市民合唱団定期演奏会に賛助出演 (18名参加) (箕面市メイプルホール) 指揮: 林誠 組曲「月光とピエロ」より「秋のピエロ」
	11 9	東京 第13回東京男声合唱フェスティバルに参加 (13名参加) (浜離宮朝日ホール) 指揮: 甲和伸樹 組曲「富士山」より「作品第肆」「作品第貳拾壹」 <大阪男声合唱団東京支部との合同ステージ>
	5 18	大阪 林誠先生退官記念「林誠祭」に参加 (76名参加、内訳: 大阪25名、名古屋5名、東京14名、その他32名) (大阪音大カレッジオペラハウス) 指揮: 林誠 組曲「月光とピエロ」
	6 1	大阪 第27回箕面市合唱祭に参加 (23名参加) (箕面市メイプルホール) 指揮: 池田守 「Golden Days」「Didn't My Lord Deliver Daniel?」(ピアノ伴奏: 新谷昭一)
	6 22	大阪 ベージュ色のコンサート・創部88周年記念 (56名参加) (クレオ大阪中央) 指揮: 林誠 組曲「アイヌのウポポ」 指揮: 池田守 「学生王子」より「Golden Days」「Drinking Song」 「Deep in My Heart, Dear」「Serenade」「Student March Song」(ピアノ伴奏: 新谷昭一) 指揮: 池田守 黒人霊歌「Steal Away」「Set Down Servant」「O My Golden Slippers」 「Little David Play on Yo' Harp」「Didn't My Lord Deliver Daniel?」「Deep River」 指揮: 林誠 合同演奏: 組曲「富士山」 <出演者> T1) 石田康雄 伊東昭廣 西村信勝 柳楽行雄 佐藤謙司 小竹正幸 田中充 池田守 五十嵐強 内野秀樹 北村照夫 永山隆 保川一治 坂居孝二 戸田貴之 T2) 若林允 紙谷敬治 西沢毅彦 赤城一宇 山本勝昭 鈴木惟司 柳沢長四郎 山本修司 竹尾彰 加藤直樹 小林卓郎 稲積和典 B1) 野田大祐 河盛龍三 直場徳宥 大西昌三 中村邦雄 小笠原肇 新出武雄 山野善生 西川哲朗 岸田勝昭 浜崎慎吾 鶴飼茂 松岡一仁 河島靖夫 楠本隆志 岸本保 B2) 赤坂一郎 佐藤文隆 村主寧民 後藤勇治 森滋 梶江靖史 大井耐三 真鍋一史 南雄次 樽井一仁 上崎雅也 新谷昭一 榊原昭裕 <大阪男声合唱団が合同演奏に参加>
	8 24	大阪 阪大オペラ「リゴレット」に合唱参加 (16名参加) (阪大コンベンションセンター)
	11 2	東京 AUTUMN JOINT CONCERT (46名参加、内訳: 東京27名、大阪11名、名古屋3名、他5名) (文京学院大学仁愛ホール) 指揮: 坂井美樹 黒人霊歌「Deep River」「Didn't My Lord Deliver Daniel?」 「Steal Away」「O My Golden Slippers」「Set Down Servant」 指揮: 甲和伸樹 合同演奏: 組曲「富士山」 指揮: 林誠 合同演奏: 組曲「月光とピエロ」 <大阪男声合唱団、文京学院大学吹奏楽部との合同演奏会>
	11 9	大阪 林誠「合唱の魅力」に参加 一音楽のまち長田 第37回おもしろ音楽博物館一 (19名参加) (長田ピフレホール) 指揮: 林誠 「最上川舟唄」「Muß i denn」

年	月 日	できごと
平成27年 (2015)		大阪 組曲「雨」より「雨」組曲「月光とピエロ」「鉄人28号の歌」 ＜大阪男声合唱団との合同演奏＞
	12 20	総会でOB合唱団(東京)の代表に西川哲朗、副代表に西村信勝を選任。
	5 31	大阪 第28回箕面市合唱祭に参加 (17名参加)(箕面市メイプルホール) 指揮：松岡一仁 「Ombra Mai Fu」「巡礼の合唱」(ピアノ伴奏：新谷昭一)
	7	OB合唱団(大阪)の団内指揮者が池田守から松岡一仁に交代。
	7 19	東京 第15回大阪男声合唱団定期演奏会に賛助出演 (18名参加)(第一生命ホール) 指揮：本城正博 合同演奏：組曲「柳河風俗詩」
	8 30	大阪 阪大オペラ「フィガロの結婚」に合唱参加 (18名参加)(阪大コンベンションセンター)
	10 16	大阪 グリーンホールホワイエコンサート「集Vol.2」に出演 (18名参加)(箕面市グリーンホール ホワイエ) 指揮：林誠 組曲「柳河風俗詩」
平成28年 (2016)	11 8	東京 第15回東京男声合唱フェスティバルに参加 (20名参加)(浜離宮朝日ホール) 指揮：坂井美樹 黒人霊歌「Soon Ah Will Be Done」「Ride the Chariot」
	1 5	大阪 第42回クオレリレーコンサートに出演 (20名参加、大阪男声合唱団有志3名参加)(兵庫芸術文化センター) 指揮：林誠 組曲「柳河風俗詩」より「柳河」「かきつばた」「梅雨の晴れ間」
	4	OB合唱団(大阪)の代表に森滋、マネージャーに柳沢長四郎、鶴飼茂、団内指揮者に松岡一仁を選出。
	5 29	大阪 第29回箕面市合唱祭に参加 (21名参加)(箕面市メイプルホール) 指揮：松岡一仁 「Amazing Grace」「The Song of the Soldiers」
	7 18	東京 第71回東京都合唱祭に参加 (25名参加)(新宿文化センター) 指揮：坂井美樹 黒人霊歌「Didn't My Lord Deliver Daniel?」「The Battle of Jericho」
	11 13	大阪 創部90周年記念演奏会 (75名参加)(大阪国際交流センター) 指揮：松岡一仁 黒人霊歌「Didn't My Lord Deliver Daniel?」「Go Down Moses」 「The Battle of Jericho」「Ride the Chariot」「Soon Ah Will Be Done」 世界の愛唱歌「ともしび(指揮：山田道教)」「Finlandia Hymni(指揮：坂居孝二)」「Ständchen(指揮：小林卓郎)」「Freie Kunst(指揮：中津孝司)」「Shenandoah(指揮：石原守)」「Annie Laurie(指揮：北村照夫)」「Bengawan Solo(指揮：池田民樹)」「U Boj(指揮：西村信勝)」 指揮：林誠 組曲「柳河風俗詩」 指揮：林誠 組曲「月光とピエロ」 ＜出演者＞ T1) 西村信勝 伊東昭廣 石田康雄 板村哲也 柳楽行雄 佐藤謙司 小竹正幸 山下均 上田哲也 片山誠也 五十嵐強 永谷勉 石原守 内野秀樹 北村照夫 保川一治 中津孝司 坂居孝二 戸田貴之 片瀨明広

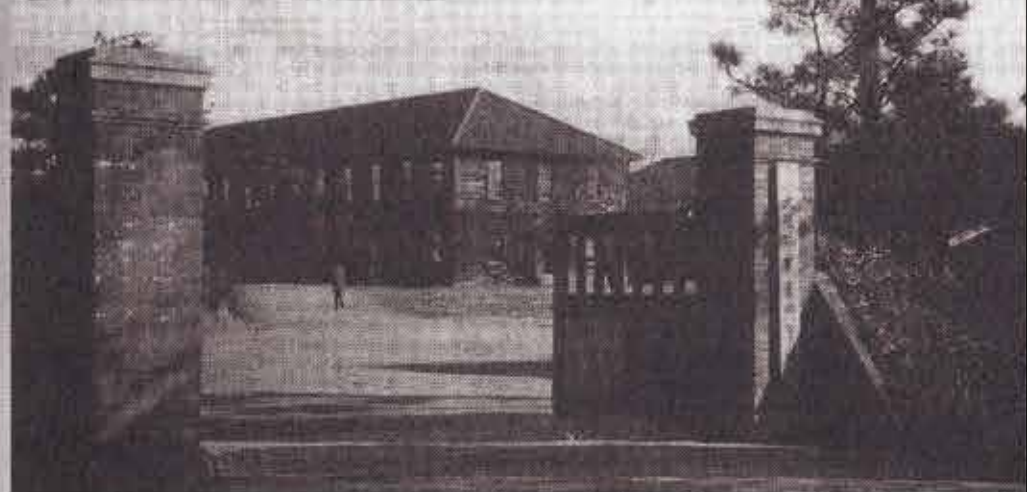
年	月日	できごと
		<p>大阪</p> <p>T2) 若林允 紙谷敬治 宇留野隆 西沢毅彦 鈴木惟司 山下輝夫 柳沢長四郎 松岡一仁 加藤直樹 川崎博康 池田民樹 永山隆 梅垣誠 小林卓郎 片山敦志 山田道教</p> <p>B1) 河盛龍三 柁山次雄 直場徳宥 大西昌三 山野善生 新出武雄 小笠原肇 西川哲朗 岸田勝昭 浜崎慎吾 鶉飼茂 河島靖夫 佐伯博史 岸本保 板倉正幸 栗生昇 西山恭介 松村尚人 飯塚一雄</p> <p>B2) 赤坂一郎 神田正見 村主寧民 三神徹 森滋 後藤勇治 梶江靖史 大井耐三 真鍋一史 南雄次 八木哲夫 樽井一仁 上崎雅也 新谷昭一 伊藤道彦 山口伸 田中貴義 安良雄一 山本邦博 松尾年展</p>
	12 3	<p>東京</p> <p>創部90周年記念演奏会 (69名参加) (葛飾シンフォニーヒルズ モーツァルトホール) 指揮：小貫岩夫 組曲「柳河風俗詩」 指揮：坂井美樹 黒人霊歌「Soon Ah Will Be Done」「Didn't My Lord Deliver Daniel?」 「Go Down Moses」「The Battle of Jericho」「Ride the Chariot」 世界の愛唱歌「ともしび(指揮：山田道教)」「Finlandia Hymni(指揮：坂居孝二)」 「Ständchen(指揮：小林卓郎)」「Freie Kunst(指揮：中津孝司)」 「Shenandoah(指揮：石原守)」「Annie Laurie(指揮：北村照夫)」 「Bengawan Solo(指揮：池田民樹)」「U Boj(指揮：西村信勝)」 指揮：小貫岩夫 合同演奏：組曲「月光とピエロ」 <出演者> T1) 石田康雄 伊東昭廣 西村信勝 板村哲也 柳楽行雄 五十嵐強 永谷勉 石原守 片淵明広 北村照夫 中津孝司 保川一治 坂居孝二 戸田貴之 岩崎隆優 T2) 若林允 紙谷敬治 西沢毅彦 赤城一字 木下和夫 山本勝昭 鈴木惟司 柳沢長四郎 加藤直樹 佐藤行和 川崎博康 池田民樹 勝原尚美 杉本敬一郎 小林卓郎 森田朋宏 稲積和典 山田道教 B1) 河盛龍三 小笠原肇 新出武雄 山野善生 西川哲朗 岸田勝昭 木村秀彰 山崎寿雄 飯塚一雄 浜崎慎吾 鶉飼茂 河島靖夫 楠本隆志 岸本保 吉田隆 板倉正幸 西山恭介 松村尚人 田中透 福田洋之 B2) 村主寧民 三神徹 後藤勇治 森滋 大井耐三 梶江靖史 真鍋一史 南雄次 八木哲夫 樽井一仁 上崎雅也 前田芳秀 山内清之 山口伸 秋山正樹 松尾年展 <大阪男声合唱団および他合唱団有志が合同演奏に参加、110名で「月光とピエロ」を演奏></p>
	12 7	<p>総会でOB合唱団(東京)の代表に西村信勝、副代表に板村哲也、南雄次を選出。</p>
平成29年 (2017)	4	<p>OB合唱団(大阪)の代表に梶江靖史、マネージャーに柳沢長四郎、鶉飼茂、団内指揮者に松岡一仁、山下均を選出。</p>
	5 28	<p>大阪</p> <p>第30回箕面市合唱祭に参加 (20名参加) (箕面市メイプルホール) 指揮：松岡一仁 「葉月のお月」「Down by the Riverside」</p>
	7 2	<p>東京</p> <p>第72回東京都合唱祭に参加 (23名参加) (新宿文化センター) 指揮：坂井美樹 「Whup! Jamboree」「Shenandoah」</p>
	7 16	<p>東京</p> <p>大阪男声合唱団第17回定演に賛助出演 (23名参加) (第一生命ホール) 指揮：坂田裕二 合同演奏：SEA SHANTIES：「Swansea Town」 「Good-Bye, Fare Ye Well」「Whup! Jamboree」「Shenandoah」</p>

年	月日	できごと
	8 27	大阪 阪大オペラ「魔笛」にコーラスで出演 (16名参加) (阪大コンベンションセンター)
	11 11	大阪 咲耶会総会に出演 (参加者21名、内名古屋より2名) (大阪大学会館) 指揮:松岡一仁 「Gaigo Will Shine Tonight」「Varsity」「学歌」「ともしび」「Ständchen」 「Shenandoah」「Bengawan Solo」「U Boj」「遥かな友に」 <出演者> T1) 伊東昭廣 小竹正幸 山下均 上田哲也 T2) 鈴木惟司 柳沢長四郎 加藤直樹 永山隆 山田道教 B1) 大西昌三 岸田勝昭 鶴飼茂 河島靖夫 西山恭介 B2) 村主寧民 森滋 後藤勇治 梶江靖史 八木哲夫 新谷昭一
	11 12	東京 第17回東京男声合唱フェスティバルに参加 (22名参加) (浜離宮朝日ホール) 指揮:坂井美樹 「Were You There?」「Ev'ry Time I Feel the Spirit」 <出演者> T1) 西村信勝 板村哲也 五十嵐強 永谷勉 保川一治 戸田貴之 T2) 赤城一宇 竹尾彰 川崎博康 杉本啓一郎 稲積和典 B1) 新出武雄 西川哲朗 浜崎慎吾 岸本保 松村尚人 福田洋之 B2) 真鍋一史 上崎雅也 米野勝 山口伸 南雄次
平成30年 (2018)	5 27	大阪 第31回箕面市合唱祭に参加 (19名参加) (箕面市立メイプルホール) 指揮:山下均 「Wade in de Water」「I Hear a Voice A-Prayin'」
	7 15	東京 第73回東京都合唱祭に参加 (20名参加) (新宿文化センター) 指揮:坂井美樹 「カリンカ」「ともしび」(ソロ:五十嵐強)

思い出のシーン

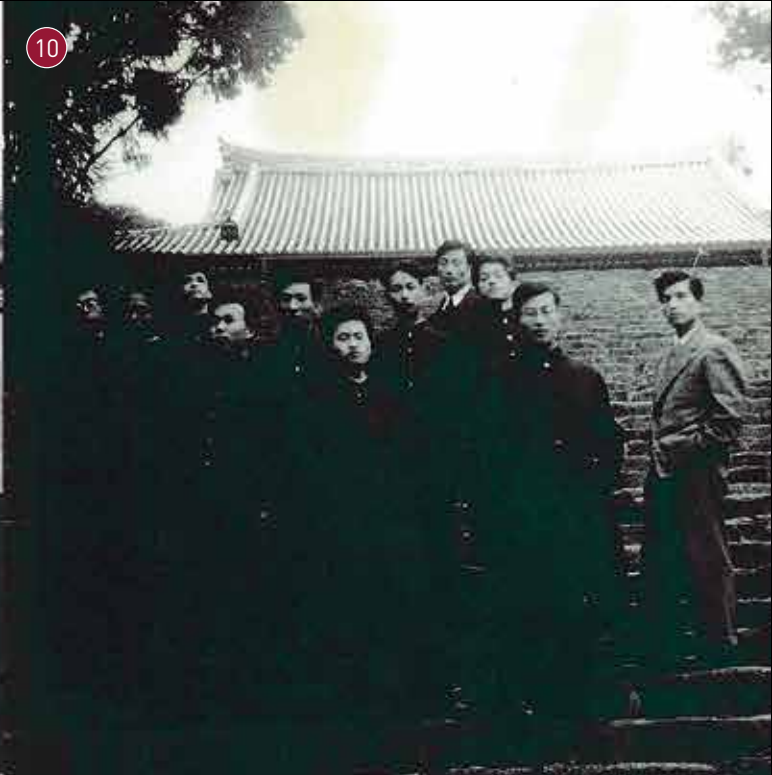


大阪外国語大学





9



10



11



12



13



15



14



16



17



18



19

合唱コンクール4位の
手書きポスター



20



21



22



23



24



25



26

大阪外大グリークラブ

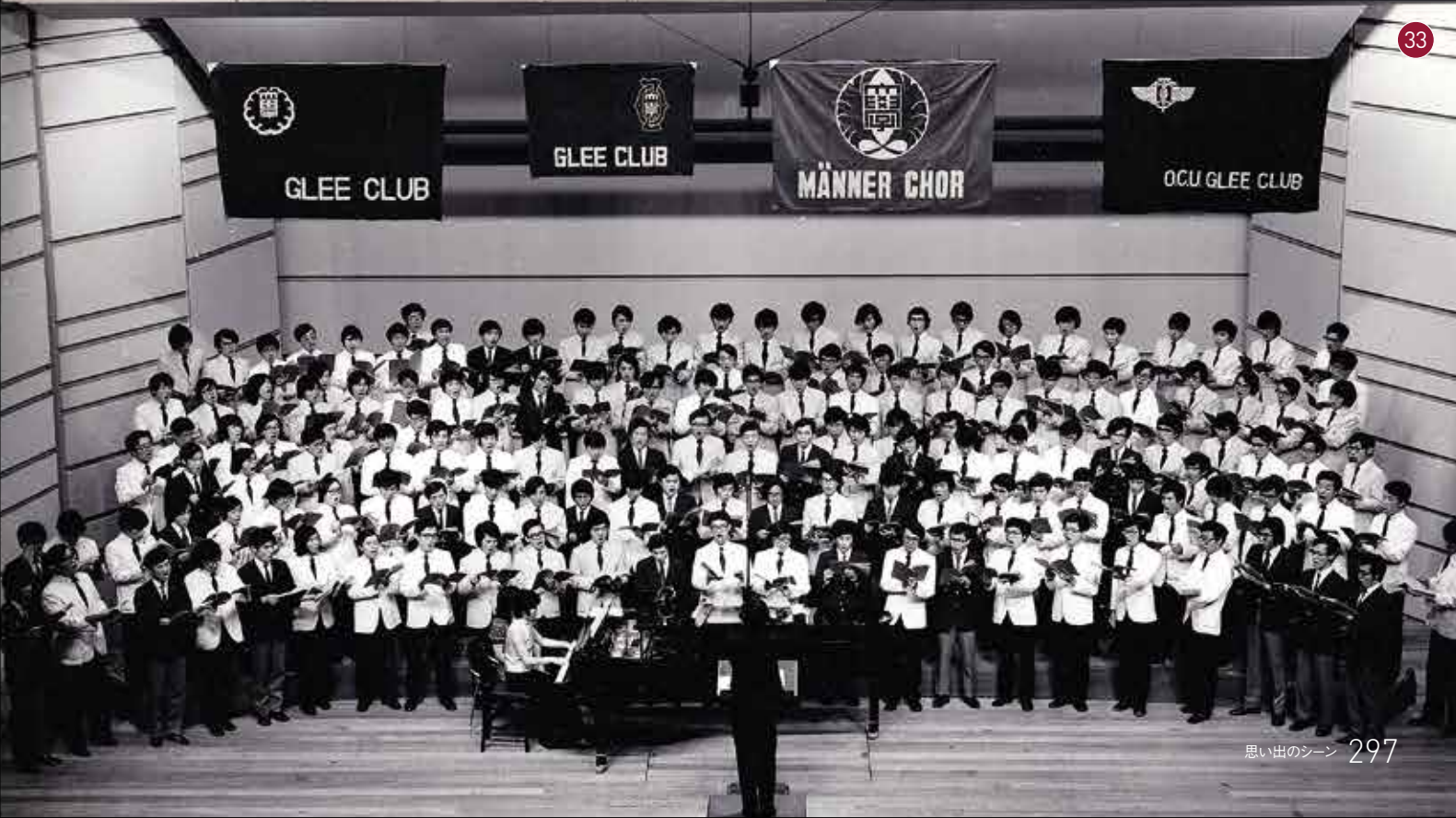
大阪女子大学合唱団

和歌山市民合唱団

和歌山合同演奏会

3月7日 午後6時半
市民会館

Don't
 ・ウイリアムズ 七代目
 ・ロシア民謡 聖母
 ・大正歌謡 原田実
 ・日本人作曲 聖母
 ・和歌山市民合唱団 和歌山





34



36



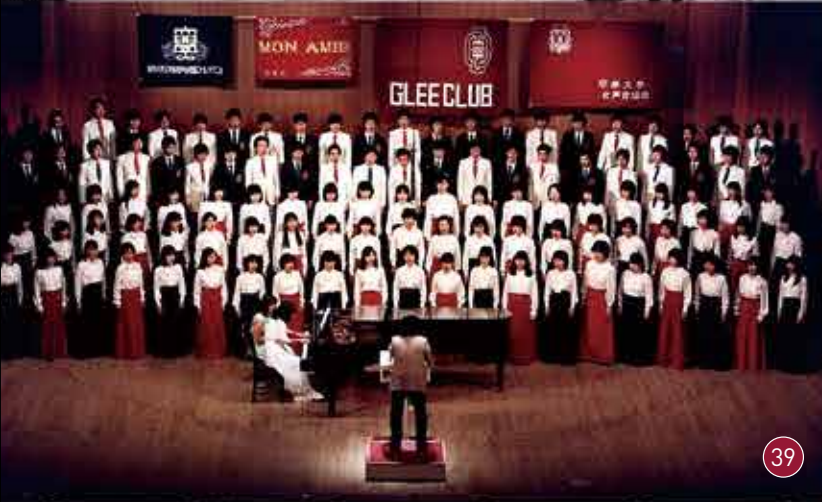
35



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56



57



58



59



60



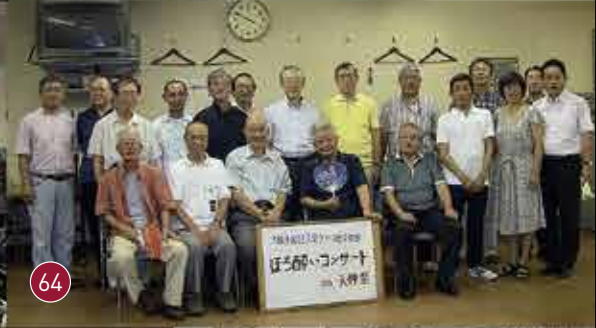
61



62



63



64



65



66



67



68



69



70



71



72



73



74



76



75



77



78



79



80



81



82



83

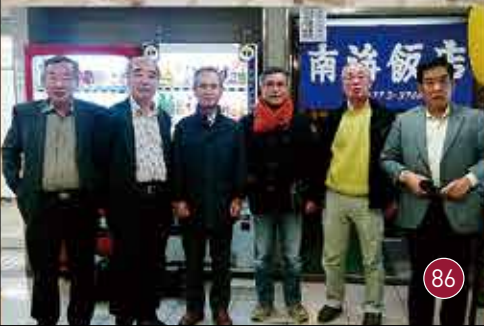


84



87

85

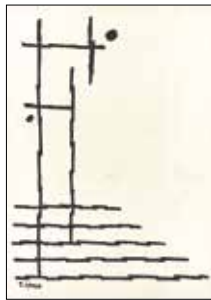


86



- 1 上八学舎正門の表札
- 2 昭和初期の上八学舎
- 3 上八学舎烈士の碑(構内北東角)
- 4 昭和初期の上八学舎
- 5 昭和21年に移転した高槻校舎
- 6 上八学舎内生協
- 7 昭和50代前半上八学舎正門
- 8 上八学舎教室
- 9 上八学舎屋上よりの眺め
- 10 1955年 合宿にて
- 11 NJB唄うフランス語講座出演
- 12 1956年10月28日 第11回関西合唱コンクール
- 13 1955年11月20日 文化祭
- 14 1956年11月11日 文化祭
- 15 1956年9月 比叡山での合宿
- 16 1957年3月9日 演奏旅行の高松演奏会
- 17 1959年7月4日 第3回定演
- 18 1959年11月1月 外語祭
- 19 1959年11月4日 部室前にて
- 20 1960年11月3日 第15回関西合唱コンクール
- 21 1960年冬 中庭でラインダンス
- 22 1961年9月10日 神戸外大とのソフトボール
- 23 1961年2月18日 追出しコンパで
- 24 1961年11月6日 外大祭前夜祭でのカルテット
- 25 1962年3月2日 演奏旅行の広島県帝人三原工場
- 26 1964年3月8日 演奏旅行の宇和島演奏会
- 27 1963年3月7日 演奏旅行の和歌山合同演奏会
- 28 1966年12月17日 第10回定演
- 29 1967年12月5日 第11回定演
- 30 1968年12月3日 第12回定演
- 31 1973年12月7日 第17回定演
- 32 1972年 夏合宿の白馬岳にて
- 33 1974年6月7日 第9回大阪四大学
- 34 箕面キャンパス
- 35 1976年6月18日 第11回大阪四大学
- 36 1979年12月6日 第23回定演
- 37 1982年7月10日 第5回大学フェスティバル
- 38 1982年当時のグリーのトレーナー
- 39 1984年6月23日 First Kiss Concert
- 40 1983年6月21日 第18回大阪四大学
- 41 1986年6月8日 第23回大阪府合唱祭
- 42 1987年1月11日 第30回定演OB合同演奏
- 43 1987年12月14日 第31回定演
- 44 1988年6月21日 ジョイントコンサート
- 45 箕面キャンパス
- 46 1990年12月4日 第34回定演
- 47 箕面キャンパス
- 48 1990年9月1日 第5回東西外語交歓演奏会
- 49 1991年9月15日 外語参上
- 50 1995年12月9日 第39回定演
- 51 1995年7月29日 第7回東西外語交歓演奏会
- 52 1995年11月3日 間谷祭にて
- 53 1995年12月9日 第39回定演
- 54 2007年9月8日 さようならわれらが大阪外国語大学集会
- 55 1997年5月25日 第10回箕面市合唱祭
- 56 1997年1月12日 第40回定演集合写真
- 57 2001年9月2日 OB合唱団大阪練習時に
- 58 2004年10月17日 第19回シルバーコーラス交歓会
- 59 2003年1月26日 グリー大阪第1回ミニコンサート
- 60 2005年3月27日 第1回菜の花コンサート
- 61 2006年4月1日 OB合唱団(東京)演奏会
- 62 2008年2月23日 六甲合宿
- 63 2010年11月28日 博愛社ミニコンサート
- 64 2010年7月25日 大阪でのほろよいコンサート
- 65 2010年3月28日 第2回菜の花コンサート
- 66 2012年3月4日 学歌収録(大阪音大)
- 67 2012年9月23日 名古屋ジョイントコンサート
- 68 2012年11月17日 かざろひりサイトル
- 69 2013年11月9日 第13回東京都男声合唱フェスティバル
- 70 2014年5月18日 林誠祭
- 71 2013年12月7日 昭和42～46年卒同年代会
- 72 2013年12月15日 大阪の忘年会
- 73 2013年6月24日 東京練習時に
- 74 2013年12月9日 大阪ゴルフコンペ
- 75 2013年12月14日 昭和38年卒同期会
- 76 2014年6月22日 創部88周年記念演奏会
- 77 2014年11月9日 神戸新長田コンサート
- 78 2014年2月1日 ボタン鍋同年代会
- 79 2014年2月22日 東京での合同練習
- 80 2015年7月19日 大阪男声定演(賛助出演)
- 81 2016年1月5日 第42回クオレリレーコンサート
- 82 2016年7月18日 第71回東京都合唱祭
- 83 2016年10月22日 90周年記念演奏会の合同練習
- 84 2016年12月3日 90周年記念演奏会集合写真(東京)
- 85 2016年11月13日 90周年記念演奏会(大阪)の打ち上げ
- 86 2016年11月14日 懐かしの南海飯店の前で
- 87 2016年12月17日 東京忘年会

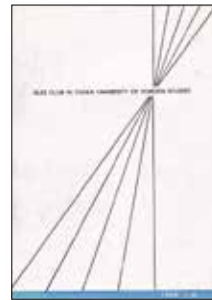
定期演奏会・OB合唱団演奏会プログラム表紙



第1回(19570706)



第2回(19580705)



第3回(19590704)



第4回(19600702)



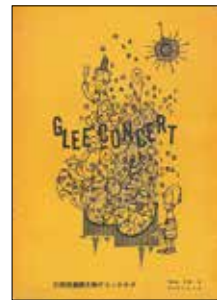
第5回(19610708)



第6回(19620707)



第7回(19630706)



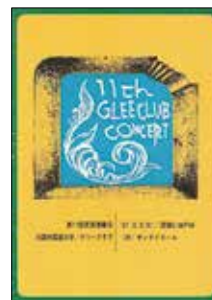
第8回(19641204)



第9回(19651130)



第10回(19661217)



第11回(19671205)



第12回(19681203)



第13回(19691212)



第14回(19701205)



第15回(19711217)



第16回(19721207)



第17回(19731207)



第18回(19741220)



第19回(19751219)



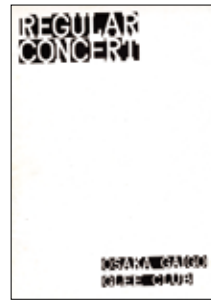
第20回(19761218)



第21回(19771213)



第22回(19781206)



第23回(19791206)



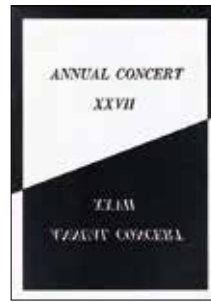
第24回(19801212)



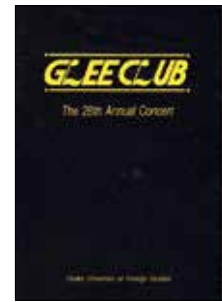
第25回(19811211)



第26回(19821206)



第27回(19831222)



第28回(19841214)



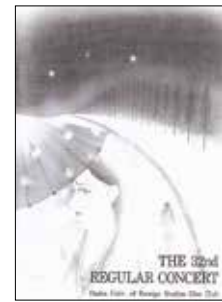
第29回(19851223)



第30回(19870111)



第31回(19871214)



第32回(19881201)



第33回(19891218)



第34回(19901204)



第35回(19920112)



第36回(19921210)



第37回(19931211)



第38回(19941126)



第39回(19951209)



第40回(19970112)



第41回(19980111)



OBミニコンサート
(20030126)



菜の花コンサート
(20050327)



創部80周年記念
(20060430)



ひめじ文学館コンサート
(20070408)



さようならわれらが外大
(20070908)



『山に祈る』を唄う
(20081109)



菜の花コンサート
(20100328)



東西合同 in Tokyo
(20100411)



創部85周年記念
(20111113)



Joint Concert (名古屋)
(20120923)



林誠祭
(20140518)



ページュ色のコンサート
(20140622)



Autumn J.C.
(20141102)



創部90周年記念
(20161113)



創部90周年記念
(20161203)

フランスの詩人は歌った：

Sous le pont Mirabeau coule la Seine

Vienne la nuit, sonne l'heure

Les jours s'en vont, je demeure.

ミラボー橋の下を セーヌ河が流れる

夜が来て 時を告げる鐘が鳴り

月日は過ぎるが 私は残る

浪華は八百八橋の町、多くの橋の下を淀の水がためみなく流れ、長い年月が通り過ぎた。一世紀におよぼんとする外語グリーの歴史と共に。

グリークラブOBにとって、グリーの歴史は青春の証しである。その思い出の多くは今やセピア色に変わり、一部は忘れ去られようとさえしている。しかし、この記念誌により、忘却に歯止めがかかったことを共に悦びたい。

小誌の刊行には、グリーOBだけでなく、グリーの外からも多くの方々の温かいご支援があったことを忘れるものではない。ここに厚くお礼を申し上げます。

この一年半にわたり、多大な尽力を惜しまなかった編集委員13名の氏名を列举し、締めくくりとさせていただきます。



ミラボー橋

[編集委員] (卒業年次順、五十音順)

松尾充哲 昭和36年 インドネシア語学科

松木正顕 昭和36年 スペイン語学科

南野 均 昭和36年 フランス語学科

東谷顕人 昭和37年 スペイン語学科

新出武雄 昭和38年 スペイン語学科

西澤毅彦 昭和38年 タイ語学科

西川哲朗 昭和40年 インドネシア語学科

西村信勝 昭和42年 スペイン語学科

板村哲也 昭和44年 スペイン語学科

浜崎慎吾 昭和44年 ロシア語学科

南 雄次 昭和46年 ロシア語学科

加藤直樹 昭和48年 スペイン語学科

松村尚人 昭和62年 スペイン語学科

[デザイナー] 高草建

大阪外国語大学グリークラブ

創部90周年記念誌編集委員会

平成30年(2018)9月 (新出 記)

◇おことわり◇

本誌に記されている各種データ、日付、数字、地名等の固有名詞、などについては、正確を期すべく編集委員会で可能な限り手を尽くし、調査しました。しかしながら、調査漏れ、誤謬などと共に、寄せられた原稿の記述と一致しないケースも散在します。後者については明らかに誤りと認められる場合を除いては、敢えて訂正・統一を図っておりません。なお、今後本誌の内容及びデータ等に関してご意見やお問い合わせをいただく場合には、最寄りの編集委員までご連絡いただくようお願い申し上げます。

編集委員会

咲耶会からのご案内

大阪外国語大学創立100周年・学舎移転 事業にご協力をお願いいたします

咲耶会事務局

大阪外国語大学グリークラブの創部90周年、誠におめでとうございます。90年史の刊行に寄せて、咲耶会から心よりお祝い申し上げます。

さて、2021年、母校はそのルーツである大阪外国語学校の創設から100周年を迎えます。外大グリークラブが発足したのが大正15年（1926年）、まさに大学の歴史と共に歩んできました。大阪大学との統合後も、その輝く伝統を伝え、幅広い活動で存在感を示しているのが、大阪外国語大学グリークラブOB合唱団です。グリーの歴史は外大の歴史でもあります。卒業生にとっては、この100周年は先人から受け継いだ有形・無形の遺産を次世代に伝え、母校の歴史を後世に残す、最後にして最大の機会であると言えます。同じ年に、大阪大学が創立90周年を迎えることから、大阪大学創立90周年と大阪外国語大学創立100周年の二つの事業が並行して進められています。2018年4月には箕面市船場地区の新キャンパス建設工事が始まり、3年後にはいよいよ新学舎に移転します。現在予定されている主な事業計画は、下記のとおりです。そのための募金活動がすでに始まっています。母校の大いなる未来への発展のため、皆様の温かいご支援を賜りたく、何とぞよろしくお祝い申し上げます。

【記念事業・記念誌関係】

- 箕面新キャンパス竣工内覧会、記念式典、シンポジウム等の開催
(2021年3月～4月を予定)
- 大阪外国語大学創立100周年記念式典・講演会・祝賀会等の開催(2021年11月を予定)
- 『大阪外国語大学100年史の刊行』(2021年を予定)
※資料、写真等のご提供をお願いいたします。咲耶会事務局にお問い合わせください。
- その他、語劇祭をはじめとする学生イベント等

【募金活動】

- 募金活動の期間は、2017年10月～2022年3月の予定
募金の目標額は大阪大学全体で、総額35億円
(「大阪大学90周年関係」が33億円、「大阪外国語大学創立100周年関係」が2億円)
この募金により、「大阪外国語大学記念ホール」(箕面新キャンパス教育・研究棟1階に設置予定)の整備、記念事業の実施、記念誌の発行等が行われる予定です。

<咲耶会事務局> 月曜日と木曜日の午前10時～午後4時に開局しています。

〒562-8558 箕面市粟生間谷東8-1-1 大阪大学外国語学部内 E棟1F

TEL & FAX : 072 (728) 2327

E-mail : sakuya@sfs.osaka-u.ac.jp

略語説明

合唱団の所属声部（パート）

T1 = 第1テノール（トップ）
T2 = 第2テノール（セカンド）
B1 = 第1バス（バリトン）
B2 = 第2バス（ベース）

卒業年度

（昭〇〇ⅡS）（平〇〇□□大）
昭 = 昭和〇〇年卒業
平 = 平成〇〇年卒業

卒業大学

学校名記述なし
= 大阪外国語大学一部
学校名記述なしⅡ
= 大阪外国語大学二部
京大 = 京都大学
大分大 = 大分大学

学科

C = 中国語学科
K = 朝鮮語学科
M = モンゴル語学科
IN = インドネシア・フィリピン語学科
IP = インド・パキスタン語学科
IPh = インド・パキスタン語学科
 ヒンディー語専攻
TV = タイ・ベトナム語学科
A = アラビア語学科
P = ベルシャ語学科
E = 英語学科
D = ドイツ語学科
F = フランス語学科
IT = イタリア語学科
S = スペイン語学科
R = ロシア語学科
地域 = 地域文化学科

